

平成 16 年度文部科学省
現代的教育ニーズ取組支援プログラム
「在日外国人児童生徒への学習支援活動」

平成 18 年度

多文化コミュニティ教育支援室

多言語多文化社会の求める人材育成をめざして

活動報告書

平成 19 年 3 月
東京外国語大学



- a. 府中市立小柳小学校国際理解教育活動
- b. 国際理解教育における教員とのディスカッション
- c. 府中国際交流サロン学習支援活動
- d. 多文化多言語劇
- e. 2006年度夏季多言語多文化共生学講座、講義の様子
- f. 同、学習支援ボランティアのための外国語(アラビア語)



- a. 第5回大泉日系ブラジル青少年フェスティバル(東外ネット～Amigos～)
- b. 日韓交流会 (うりぬり)
- c. プレ・学生多文化フォーラム ワークショップ「国際理解教育実践現場から」
- d. 学生多文化フォーラム 第一部“国際理解教育を考える”
- e. 学生多文化フォーラム 参加者

多文化コミュニティ教育支援室では、1日4コマ×1週間の集中プログラムとして
2006 年度夏季 多言語多文化共生学講座

—外国人児童・生徒の学習支援ボランティア入門—
を開講します

この講座は、みなさんが学んでいるそれぞれの言語や文化に関する知識を生かして、外国人児童・生徒の学習支援ボランティア活動を行なうことを教育の一環としてとらえ、多文化化する現代に求められる人材を育成しようとするものです。

外国人児童・生徒の学習支援ボランティア活動に携わる、あるいは、将来携わりたいと考える学生のみなさんを対象に、質の高いボランティア活動を提供するのに必要な知識や技能を修得するための教育研修を行ないます。専攻語は問いません。日本国内の国際化、多言語多文化化に関心を持ち、ボランティア活動を通して積極的にこれにかかわり、考えてみたいと思う方は、ぜひ受講してください。

プログラムは各専門家による授業と、実践的なワークショップ型の授業などで構成されます。全プログラムを受講した学生には、学長より受講修了証が授与されます。

開催日時：2006年9月25日（月）～29日（金）の5日間 10:00～15:00
受講希望者の募集期間：2006年5月8日（月）～26日（金）

所定の応募用紙を当支援室(206)に提出してください。

対象は本学学生です。受講料は無料です。詳しくは、「多文化コミュニティ教育支援室」のHPをごらんください。

募集人数：20～30名（希望者が多い場合は1年生を優先します）

■プログラム

（実際の時間割は講師の都合等により変更になる場合があります。受講登録者には、7月下旬に時間割と担当講師による具体的なシラバスを配布します。）

	1 (10:00-11:00)	2 (11:10-12:10)	3 (13:10-14:10)	4 (14:20-15:50)
9/25 (月)	オリエンテーション (河路)	日本の小学校の 教科教育 (矢崎)	日本の小学校の 教科教育 (矢崎)	ボランティアのための 外国語 (受講者の専攻語等に 応じて、開講言語を決定 します)
9/26 (火)	多言語多文化 ボランティア論 (田村)	多文化コミュニティを 理解するために (田村)	多文化コミュニティを 理解するために (田村)	
9/27 (水)	第二言語習得 (海野)	バイリンガリズム (伊東)	子どものための 日本語指導 (柏崎)	
9/28 (木)	国際化の進行と 日本社会 (野本)	国際化の進行と 日本社会 (野本)	子どものための 日本語指導 (藤森)	
9/29 (金)	対人コミュニケーション (宮城)	対人コミュニケーション (宮城)	子どものための 日本語指導 (小林)	

東京外国語大学多文化コミュニティ教育支援室

電話：042-330-5428 電子メール：t-shien@tufs.ac.jp URL：<http://www.tufs.ac.jp/common/mlmc/t-shien/ja>



「東外大モデル」の軌跡と将来展望

学生多文化フォーラム
学ぶ・実践する・担う

多文化コミュニティ教育支援室ではこの3年間の活動を通して、東京外国語大学の学生であることを最大限に活かした学習支援活動と国際理解教育活動のあり方を模索し、「東外大モデル」を編み出してきました。

—その効果と今後の可能性は？

—果たしてそれで多文化社会を担う子どもたちを育てることができるのか？

今回のフォーラムを通してこれまでの活動を振り返り、「東外大モデル」の効力を検証します。

日時 2006年

12月2日(土) 10:00～(9:30開場)

会場 さくらホール 東京外国語大学(留学生日本語教育センター1階)

入場
無料

●西武多摩川線「多摩」駅下車
徒歩5分 (JR新宿駅から約35分)
●京王電鉄「飛田給」駅北口より
多摩駅行き京王バスにて
「東京外国語大学前」下車 徒歩0分

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies
多文化コミュニティ教育支援室
Multicultural Community Learning Support Center

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
TEL 042-330-5428 FAX 042-330-5428
内線5428 E-mail t-shien@tufs.ac.jp
URL http://www.tufs.ac.jp/common/mlmc/t_shien/ja/



プレ・学生多文化フォーラム

■ 第1回 10月10日(火) 18:10~20:00 講義棟 313教室
学生ディスカッション「国際理解教育で何を伝えるか」

■ 第2回 10月17日(火) 18:10~20:00 さくらホール(留学生センター1階)
講演会 佐藤郡衛先生(東京学芸大学教授、異文化間教育)
「国際理解教育とその現状」

■ 第3回 10月24日(火) 18:10~20:00 講義棟 313教室
学生ディスカッション
「国際理解教育の問題点どうしたら解決できるの?」

■ 第4回 11月6日(月) 18:10~20:00 本部管理棟 中会議室
講演会 山西優二先生(早稲田大学教授、比較・国際教育学)
「国際理解教育のあり方を考える」

■ 第5回 11月7日(火) 18:10~20:00 講義棟 313教室
学生ディスカッション「外大生の国際理解教育のカチ」

■ 第6回 11月14日(火) 18:10~20:00 本部管理棟 中会議室
ワークショップ 川崎市 小・中学校教諭
「国際理解教育実践現場から」

プレ・学生多文化フォーラム パネリストプロフィール

佐藤郡衛(さとうぐんえい)先生 プロフィール

1952年福島県生まれ。大学院卒業後、東京学芸大学講師、助教授等を経て、1996年東京学芸大学海外子女教育センター教授。2002年~国際教育センター教授(2005年3月~2005年8月 カリフォルニア州立大学客員研究員)、2005年~現在 学長補佐。

異文化間教育学を専門にし、現在は本学学生ボランティアが国際理解教育を実践している神奈川県川崎市総合教育センター専門員や文部科学省JSLカリキュラムの開発に係る協力者会議座長などを兼任。主な著書には『国際理解教育』(赤石書店、2001年)、『改訂新版 国際化と教育』(放送大学教育振興会、2003年)、『国際理解教育の授業づくり』(共編、教育出版、1998年)などがある。

山西優二(やまにしゆうじ)先生 プロフィール

1952年生まれ。学生時代は旅にいそしむ。神戸大学経済学部卒業後、商社に勤務。退職後、アメリカへ留学し、またアジア各国を放浪する。帰国後、早稲田大学へ修士入学。一方、NGOの立場から開発教育や人権教育に携る。

1993年4月から1997年3月まで特定非営利活動法人開発教育協会事務局長。現在、早稲田大学文学部教授(比較・国際教育学)、開発教育協会理事、神奈川県逗子小学校施設開放管理運営委員会委員長、逗子市社会福祉協議会理事。

懇親会のお知らせ



学生多文化フォーラム終了後、懇親会を行います。

17:30~19:30 大会館にて

お申し込みについては別紙をご参照ください。

さくらホール (留学生日本語教育センター1階)



東京外国語大学

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

TEL・FAX : 042-330-5428 E-mail : t-shien@tufs.ac.jp

URL http://www.tufs.ac.jp/common/mlmc/t_shien/ja/

文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム「在日外国人児童生徒への学習支援活動」



学生多文化フォーラム 学ぶ・実践する・担う——「東外大モデル」の軌跡と将来展望

多文化コミュニティ教育支援室ではこの3年間の活動を通して、東京外国語大学の学生であることを最大限に活かした学習支援活動と国際理解教育活動のあり方を模索し、「東外大モデル」を編み出してきました。—その効果と今後の可能性は?—
—果たしてそれで多文化社会を担う子どもたちを育てることができるのか?—
今回のフォーラムを通してこれまでの活動を振り返り、「東外大モデル」の効力を検証します。

主催

東京外国語大学
多文化コミュニティ教育支援室

日 2006年

12月2日(土) 10:00~(9:30開場)

会場

さくらホール (留学生日本語教育センター1階)

入場
無料



プログラム

9:30 開場
10:00 開会のあいさつ

10:15～ 第一部 “国際理解教育” を考える

1. モデル授業
2. 「東大モデル」の狙い
3. 「東大モデル」の軌跡と提言
4. コメンテーターからの助言
5. 討論

(昼食休憩)

13:30～ 第二部 多様化する学習支援

研究報告

1. 子供たちの声・現場の先生の体験
2. 日本の学校文化・外国の学校文化
3. 多様な教科カリキュラム

14:30～ 講演

「明日の多文化社会を担う子どもたちのために」
(キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ)

15:40～ 第三部 望ましい多文化社会を求めて

会場討論

16:45 閉会のあいさつ
(17:00 終了)

講演者プロフィール

キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ

ブラジル・サンパウロ市在住。ブラジル文化協会理事、国外就労者相談・援護センター(CIATE)理事。サンパウロ・カトリック大学で社会福祉士号を取得。日本にデカセギに来るブラジル人の子どもの教育や心理の問題について研究を進めると同時に、夫妻でサンパウロ市内で日系人の子どものカウンセリングも行っている。

国際理解教育

第一部《国際理解教育》では、この2年間、「国際理解教育って何?」と試行錯誤を重ねながら、現場の先生方や留学生と力を合わせて、国際理解教育の実践に取り組んできました。「外大生だから伝えたい」という熱い想いを持って、これまでの成果を模擬授業に込めて発表します。学校の先生方と私たち、日本人学生と留学生が一丸となって作り上げた本学の特色ある国際理解教育のカチをご覧下さい。

実績校

- 川崎市立東柿生小学校
- 川崎市立土橋小学校
- 川崎市立宮前平中学校
- 川崎市立菅小学校
- 川崎市立菅中学校
- 川崎市立京町小学校児童保育「わくわく」
- 府中市立第七中学校
- 府中市立小柳中学校
- 新宿区立大久保小学校
- 品川区立社松小学校「すまいるスクール」
- 三島市立東小学校



学習支援

私たちは、これまで近隣の小学校や府中国際交流サロンなどでの学習支援活動に力を注いできました。日本語を母語としない(JSL)児童生徒は学校教育の中では様々な問題を抱えています。そこで、私たちは言語の違いだけでなく、他にもいろいろな要因があるのではないかと考え、日本の公立小学校とともに、子どもたちの本国と同じ教育体系をとっている外国人学校への訪問調査を行ないました。第二部《学習支援》では、現場の教員やJSL児童生徒の生の声に耳を傾け、そこから見てきた学校文化や教育内容の多様性について報告したいと思います。

実績校

- 川崎市立殿町小学校
- 川崎市立京町小学校
- 新宿区立大久保小学校
- 武蔵野市立小金井第一小学校
- 府中国際交流サロン



はじめに

今から約 4 年前に学生の善意から始まった活動が、今、巨大な実を結んで代替わりを迎えようとしている。苗を植えたのは 2003 年 4 月、二十数名のポルトガル語専攻の学生たち。彼らは、国内でさまざまな課題に直面している外国人たちの姿を見て、大学で学んでいることを活かして何かできないか、そういう若者らしい純粋な思いを抱き、日本に住んでいるブラジル人の子どもたちへの学習支援のボランティア活動を開始した。

その活動を通じて学生が遂げた成長は著しかった。学業の向上ばかりではない、彼らはみるみるうちに人間力を身につけていった。それを見て私たち教員は、ぜひともそれを全学的なものにしたいと思った。そうして文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラムに応募し、採択されたのが「在日外国人児童生徒への学習支援活動」である。これを機に私たちは学内に多文化コミュニティ教育支援室を開設し、こうした学生ボランティア活動の支援と推進を積極的に開始した。プロジェクトの期間は 3 ヶ年、今年度がその最終年だった。

与えられた 3 年間に、私たちはその教育的効果をさらに実感し、今度はこれを正規の教育カリキュラムの中に取り入れていくことにした。さらにはその裏づけとなる研究、そして、近年大学に求められている社会貢献にも活動の対象範囲を拡張する必要性を感じた。そこで 2006 年 4 月には、多言語・多文化教育研究センターを開設した。この経緯については昨年度の報告書の「はじめに」で詳しく述べたので、平成 17(2005)年度の報告書をご参照いただきたい。したがって今年度は本学に、多言語・多文化教育研究センターと多文化コミュニティ教育支援室が併存する形になったが、現代 GP の終了をもって本支援室は 2007 年 4 月から同センターの一組織として組み込まれる。といっても、これはいわゆる“吸収”ではない。大学で行われる教育・研究、そして社会貢献は、何よりも学生の活動があつてこそそのもの、特に本支援室の活動のように学生の主体性が極力活かされている場合はなおさらのことだ。本支援室の活動は今後もこのまま継続していくばかりでなく、同センターの心臓部となって、本学の多言語・多文化教育研究プロジェクトを推進していくことになる。

本書は、現代 GP としての最後の活動報告書である。

2007 年 3 月 31 日

多文化コミュニティ教育支援室
運営委員長 武田 千香

目 次

グラビア

多文化コミュニティ教育支援室活動風景	i
「2006年度夏季多言語多文化共生学講座」パンフレット	iii
「学生多文化フォーラム」ポスター	iv
「学生多文化フォーラム」パンフレット	v

はじめに（運営委員長 武田 千香）

第 I 部 平成 18 年度の活動概要

1. 平成 18 年度（2006 年度）の活動概要	1
2. 学生ボランティア活動支援	3
2-1. 学習支援ボランティア活動支援	3
2-2. 国際理解教育ボランティア活動支援	4
3. 教育・研修	9
3-1. 教育研修プログラム「2006 年度夏季多言語多文化共生学講座」	9
3-2. スタディ・ツアー「多文化のまち—大久保・百人町を歩く—」	11
3-3. イラストレータ講習会・パワーポイント講習会	11
4. 調査・研究	13
5. 多文化共生推進活動	15
6. 学生多文化フォーラム	17
7. 活動年表	19

第 II 部 平成 18 年度の活動推進事業

1. 学生ボランティア支援活動	33
-----------------	----

1-1. 学習支援活動	33
(1) 新宿区立大久保小学校	33
(2) 府中市学習支援ボランティア	33
(3) 府中国際交流サロン	37
1-2. 国際理解教育	44
(1) 川崎市立東柿生小学校	44
(2) 川崎市立宮前平中学校	86
(3) 川崎市立土橋小学校	98
(4) 府中市立府中第七中学校	125
(5) 新宿区立大久保小学校	143
(6) 府中市立小柳小学校	144
(7) 狛江市立狛江第一小学校	155
(8) 三島市立東小学校	160
(9) 第5回大泉日系ブラジル青少年フェスティバル	167
(10) 品川区立杜松小学校「すまいるスクール」	171
1-3. ボランティア支援体制の拡充	175
2. 教育・研修	181
2-1. 教育研修プログラム「2006年度夏季多言語多文化共生学講座」	181
(1) 授業概要	181
(2) 時間割	186
(3) 学びの記録	187
(4) アンケート集計結果	204
2-2. スタディ・ツアー「多文化のまち—大久保・百人町を歩く—」	212
2-3. イラストレーター講習会・パワーポイント講習会	218
3. 調査・研究	227
4. 多文化共生推進活動	235
4-1. 外語祭展示「巨大すごろく」	235
4-2. フェスタジュニーナ	238
4-3. 日本通訳学会	239
4-4. 多文化多言語劇	246
4-5. 羽村日本語学習帳翻訳	256
5. 学生多文化フォーラム	261
5-1. プレ・学生多文化フォーラム	261

(1) 学生ディスカッション報告	261
(2) 佐藤郡衛氏講演会「国際理解教育とその現状」	270
(3) 山西優二氏講演会「国際理解教育のあり方を考える」	292
(4) ワークショップ「国際理解教育実践現場から」	314
(5) キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ氏講演会 「“デカセーギ”はこうしてやってくる～日系就労者支援事業最前線からの報告」	328
5-2. プレ・講演会 キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ氏講演会 「ブラジルに帰った子どもたちのその後」	343
5-3. 学生多文化フォーラム 学ぶ・実践する・担うー「東外大モデル」の軌跡と将来展望	361
(1) 第一部 “国際理解教育”を考える	361
(2) 第二部 多様化する学習支援	386
(3) 第二部特別講演 「明日の多文化社会を担う子どもたちのために」	408
(4) 第三部 望ましい多文化社会を求めて～会場討論～	421
5-4. 調査報告	432

第Ⅲ部 活動を振り返って（総括）

1. 学生ボランティア活動支援	463
1-1. 学習支援ボランティア活動支援	463
1-2. 国際理解教育ボランティア活動支援	464
2. 教育・研修	469
2-1. 教育研修プログラム「2006年度夏季多言語多文化共生学講座」	469
2-2. スタディ・ツアー「多文化のまちー大久保・百人町を歩くー」	470
2-3. イラストレータ講習会・パワーポイント講習会	471
3. 調査・研究	473
3-1. 「学生支援活動」ープロジェクト班9名から得たアンケート結果ー	473
3-2. 本調査の振り返り	474
3-3. 「学習支援活動」に関わる調査・研究の特徴	474
3-4. 「国際理解教育」ー外大方式の検証ー	475
4. 多文化共生推進活動	477
5. これからの展望と課題	479

付録資料

1. 多文化コミュニティ教育支援室組織図	481
2. 多文化コミュニティ教育支援室構成メンバー一覧	481
3. 学生参加者一覧	482
3-1. 学生団体	482
(1) 東京外大在日外国人交流ネットワーク～Amigos～	482
(2) うりぬり	482
3-2. ボランティア活動参加者	483
(1) 新宿区立大久保小学校学習支援ボランティア	483
(2) 小金井市立小金井第一小学校学習支援ボランティア	483
(3) 府中市学習支援ボランティア	483
(4) 府中国際交流サロン学習支援ボランティア	483
(5) 川崎市立東柿生小学校国際理解教育ボランティア	484
(6) 川崎市立宮前平中学校国際理解教育ボランティア	484
(7) 川崎市立土橋小学校国際理解教育ボランティア	484
(8) 府中市立府中第七中学校国際理解教育ボランティア	484
(9) 新宿区立大久保小学校国際理解教育ボランティア	485
(10) 府中市立小柳小学校国際理解教育ボランティア	485
(11) 狛江市立狛江第一小学校国際理解教育ボランティア	485
(12) 三島市立東小学校国際理解教育ボランティア	485
3-3. スタディ・ツアー「多文化のまち—大久保・百人町を歩く—」	486
3-4. 2006年度夏季多言語多文化共生学講座	486
3-5. 多文化多言語劇	486
3-6. プレ・学生多文化フォーラム、学生多文化フォーラム、調査研究	487
3-7. 活動報告書編集担当	487

第 I 部

平成 18 年度の活動概要

1. 平成 18 年度(2006 年度)の活動概要

文責:武田 千香(運営委員長)

2006 年度は、2005 年度に固めた活動の四本柱、すなわち①学生ボランティア活動支援、②教育・研修、③調査・研究、④多文化共生推進活動に沿って、前年度の内容をほぼそのまま引き継ぐ形式で活動を推進した。だが、いくつか本年度に開始した新たな取り組みもあり、それを中心にそれぞれの活動の概要を述べる。

学生ボランティア活動は、昨年同様、学習支援活動及び国際理解教育の二本立てで推進した。学習支援活動において本年度新たに開始したのは、11月に府中市教育委員会と「東京外国語大学学生が『府中市立小中学校に在籍する外国人児童・生徒への指導』に協力して行うボランティア活動に関する覚書」を取り交わし、同委員会の紹介により、府中市内の公立小・中学校へ学習支援に学生が出向くようになったことである。これまでは学校毎に個別に行っていた活動が、教育委員会と大学という組織同士の活動になったことは意義深い。また、学生の活動場所としては新宿区立大久保小学校が新たに増えた。

国際理解教育については、昨年度までは本学の学生が先方の学校へ出向いて授業を実践していたが、本年度は初めて本学に小学生が来校したことが新規の活動である。これは静岡県三島市立東小学校の6年生が東京への修学旅行を活用して、本学での国際理解教育の受講を希望したことから実現した。

教育・研修プログラムは、昨年通り教育研修プログラム「2006 年夏季多言語多文化共生学講座」、新宿大久保へのスタディ・ツアー、パソコン講習会(イラストレータ及びパワーポイント)を開催した。

調査・研究は、本年度が現代 GP の最終年度にあたることから、これまでの 2 年間の活動の総括を行い、それを学生多文化フォーラムとして発表するという形式をとった。そ

れぞれの活動において、東京外国語大学生であることの強みを活かした活動とはどういうものかを中心に、学習支援活動および国際理解教育それぞれにおいて、本学ならではの活動のあり方を模索し、その成果を 12 月の学生多文化フォーラムで報告した。夏休休暇を用いての調査活動ばかりでなく、本番の学生多文化フォーラムへ向けて、学生のディスカッションと外部講師による講演会を組み合わせたプレ・フォーラムや、ブラジルから専門家を呼んでのプレ・講演会を開催した。このような理由から、本報告書では、本年度の調査・研究の報告は学生多文化フォーラムとして項目を立てた。

多文化共生推進活動は、今年度は学生が主体となった活動により構成されることになった。本年度初めて取り組んだものとして、まず挙げられるのが多文化多言語劇である。これは、国内の外国人の状況や直面している課題を演劇仕立てで考えていくもので、外語祭の企画として実施した。この他本支援室の学習支援の取り組みを日本通訳学会で発表した学生や、日系ブラジル人移民の歴史を、移住が開始した 1908 年から、日本に働きに来るようになった現在までをすごろくで振り返る企画をやはり外語祭で用意した学生もいた。

本年度見られた進展としては、多文化共生推進活動全てが学生からの発意により行われたことや、学生多文化フォーラムについて、企画から実施まで全てが学生の手で行われたことから分かるように、学生の自主的な参加が強まったことである。更に、今年度は現代 GP 開始当初から活動していた学生の多くが卒業してしまう中、こうした学生の自主的な活動の中から、意欲的な 1、2 年次の学生が多く育ち、様々なノウハウが着実に蓄積され、次世代の学生たちにも伝えられていることを特記しておきたい。

2. 学生ボランティア活動支援

学生ボランティア活動に対する支援は、多文化コミュニティ教育支援室の存在理由と言ってよい最も重要な事業である。この事業は、学習支援ボランティア活動に対する支援と国際理解教育ボランティア活動に対する支援の二つの柱からなる。以下、それぞれの分野について、平成18年度の活動概要を述べたい。

2-1. 学生支援ボランティア活動支援

文責：森本 憲治(学習支援担当運営委員)

ボランティア派遣システムの整備

昨年度に引き続き、学生ボランティア派遣システムの整備を進め、主に、学生ボランティア登録制度、活動中の緊急事態への対応策、学生の活動企画に対する支援体制、受入団体との連携体制などを整備した(詳細は第Ⅱ部1-3.「ボランティア支援体制の拡充」参照)。

学習支援活動

今年度において、学習支援ボランティア活動は以下の4箇所で開催したが、これ以外にも様々な地方自治体や学校から依頼や問い合わせがあった。これにより、不定期ではあるが活動を行ったり、また、実際に支援活動をするには至らなかったものの、支援準備を数件行ったりしたことを申し添えたい。

特に、川崎市においては多文化コミュニティ教育支援室の設立前から、東京外大在日外国人交流ネットワーク(Amigos)の学生らが、殿町小学校および京町小学校の2校において、授業の際に児童生徒と一緒に出席し理解を助け、保護者と学校のコミュニケーションの仲立ちをするなどの学習支援ボランティア活動を自主的に行ってきた。今年度に限っては、支援対象の児童について、日本語でのコミュニケーションに不自由が無くなるなど一定の成果が見られたことから、定期的な訪問を一旦休止しているが、新たな支援対象の児童が転入した場合等には早急に再

開することとしており、現在も、通知票の翻訳を行うなどの不定期な活動は継続している。

(1) 新宿区立大久保小学校

新宿区立大久保小学校は、実に約60%が何らかの形で外国に接点を持った児童として在籍し、またある特定の国・地域に限らず、様々な文化を背景に持つ児童が集まっているという点で、まさに多文化共生を実践している学校といえる。

その大久保小学校では、東京外大在日外国人交流ネットワーク(Amigos)で活動している学生が1年生のブラジル人児童に対する学習支援を行ったが、当該児童が支援を受けたことで日本の学校生活への適応が円滑になったこともさることながら、本学の学生が自らの小学生時代に経験したことは様々な意味で異なる環境を体験し、現場で起きている諸問題に向き合いながら活動を継続できたことは、大きな収穫だったといえる。

(2) 府中市教育委員会

今年度に入って新たに開始したものだが、今後の本支援室における学習支援活動のメインになっていくことが予想される活動である。

本活動を開始した経緯であるが、府中市内の小中学校では、来日直後等の理由で学習支援が必要な児童生徒に対し、「教科指導員」という形で、一定期間の支援を従来から行っていたが、昨今の行政改革の流れの中、教科指導員の配置が来日後6ヶ月間に限定されることになったことに伴い、本学の学習支援ボランティアの活用に関して昨年度に府中市教育委員会から打診があったことを発端としている。

その後、府中市教育委員会と本支援室との間での協議を重ねた結果、折しも当時、府中市と本学の間で、いわゆる包括協定という形での連携を検討中であったため、この協定に基づく具体的な活動の一つと位置づけることとし、

その結果、2006(平成 18)年 9 月 13 日に、府中市長と本学学長の間で「国立大学法人東京外国語大学と府中市の協働・連携に関する相互有効協定書」が締結されたことに引き続き、2006(平成 18)年 10 月 25 日に、「東京外国語大学学生が『府中市立小中学校に在籍する外国人児童・生徒への指導』に協力して行うボランティア活動に関する覚書」を締結することとなった。

なお、2006(平成 18)年 11 月から具体的な支援活動を開始し、2007(平成 19)年 3 月現在、この覚書に基づく小中学校への派遣者は 7 名となっているが、この数字は、府中市教育委員会が教科指導員を配置している数には大きく満たない。本支援室の活動は、教科指導員による 6 ヶ月の支援を経た後に、引き続き支援が必要であると府中市教育委員会が判断した者への支援となるが、外国人児童生徒が増加している傾向からすれば、これはあくまでも一時的な数字であり、今後、支援対象者の増加が予想されるため、後述する府中国際交流サロンでの活動と関連しながら、今後の活動への課題となっていくであろう(詳細は第Ⅲ部 1-1. 「学習支援ボランティア活動支援」参照)。

(3) 府中国際交流サロン

府中市の外郭団体である府中国際交流サロンでは、従来から、日本語学習を希望する市内在住の外国人を対象に、ボランティアスタッフが学習支援を行っていたが、児童生徒については、2005(平成 17)年 2 月 18 日から、休暇期間を除く毎週金曜日の夕方に、本学の学生が学習支援ボランティアとして支援することとなった。この体制は今年度も同様とし、2006(平成 18)年 4 月～2007(平成 19)年 3 月の実績としては、のべ 15 人の学生が 11 人の児童生徒に支援を行ったが、学生支援ボランティアを確保するにあたっては、一般的なボランティア活動希望者とは別にリストを管理し、2007(平成 19)年 3 月現在、25 人の学生が登録している。このことにより、主担当として支援する学生の都合がつかなくなった場合には、随時代理の学生が支援を行う体制を構築するだけでなく、前述の府中市教育委員会による学習支援ボランティアを探すにあたっても大きな

効果を上げた。また、児童生徒の出身国については、前述の府中市教育委員会による学習支援ボランティア活動と同様、韓国・中国など様々である。

なお、学習支援を行うにあたって、開始当初は府中国際交流サロンや本支援室が所有する教材、あるいは児童生徒自身が希望する教材などを使って毎回対応していたが、保護者との連携を深め、学習支援計画を学期当初に明確にするべく、2005(平成 17)年後期からは、児童生徒及びその保護者と学習支援ボランティアの学生、サロン関係者、当支援室関係者らの間で面談を行い、教案を作成した上で毎週の支援活動に取り組むこととした。この面談は、原則として半年に 1 回行い、意見交換及び意思統一を図りながら活動を進めるという点で効果を上げている(詳細は第Ⅱ部 1-1. (3)「府中国際交流サロン」参照)。

2-2. 国際理解教育ボランティア活動支援

文責:青山 亨(国際理解教育担当運営委員)

平成 18 年度においても、学生たちによる活発な国際理解教育ボランティア活動があり、支援室による支援が行われた。今年度は、平成 17 年度の反省に基づいて、年度初めに専任スタッフの岡崎と国際理解教育担当委員の青山が、国際理解教育学生ボランティアを申し込んできた小学校及び中学校を訪問した。これは、支援室で新たに用意した協定書と覚書を実施校との間に取り結ぶことが直接の目的であるが、同時に、実施校における国際理解教育担当の教師並びに学校長と直接面談し、支援室の国際理解教育に対する考え方や支援室の活動の方針を説明し、理解を得てもらうことを目的としている。

説明の趣旨は、学生ボランティアは日本人の学生と留学生が組になって活動することを原則としていること、授業の実践は 1 回で終わるのではなく、複数回行うことによって、国籍以前に人間としての留学生に触れる環境を作ること为目标としていること、授業の実践は、担当教師とボランティア学生が共同で作り上げていくことを目標としていることを理解してもらうことであり、結果的に、全ての学校でご理解

を頂くことができた。

打ち合わせには学校長にも同席していただくことによって、実践校の中で国際理解教育を担当する教師が孤立することなく、学校全体のバックアップを得られることを期待している。5月に府中市立府中第七中学校、新宿区立大久保小学校、川崎市立東柿生小学校、川崎市立宮前平中学校、川崎市立土橋小学校を訪問した。なお、川崎市の3校は、いずれも川崎市総合教育センターが開催する川崎市国際理解教育研究会議のメンバーである。

全体として、昨年度の反省に基づいて、上述のようにいくつかの改善を行ったこと、及び、下で述べる活動報告からも分かるように、学生による自主的な活動が進んだことが本年度の特徴である。

なお、5月を過ぎてからも学生ボランティアの申し込みがあり、そのうち、府中市立小柳小学校と狛江市立狛江第一小学校に対して学生ボランティアを実施した。また、三島市立東小学校については、修学旅行で東京を訪れた同校のグループが東京外国語大学を訪れる機会を使って、東京外国語大学において支援室の学生が国際理解教育を行うという試みを行った。

この他に、学生ボランティア・グループの自主的な活動として、東京外大在日外国人交流ネットワーク(Amigos)が大泉町の第5回ブラジル青少年フェスティバルへ参加し、うりぬりが品川区立杜松(としよう)小学校の「すまいるスクール杜松」で実践を行った。

国際理解教育

本年度は、以下の8校について、支援室の支援のもとで学生ボランティアによる国際理解教育が実践された。いずれも教育実践を中心に記載しているが、それぞれの実践の前には複数回の準備会合、実践の後には反省会が開かれている。

(1)川崎市立東柿生小学校

東柿生小学校は川崎市麻生区にある児童数606人の学校である。郊外の里山的景観が残る地区であるが、麻生

区全体では59ヶ国の外国籍の住民がいる。本校に対しては、川崎市国際理解教育研究会議の研究授業の実施校となった昨年度に引き続き、学生ボランティア実践を行った。個々の留学生との交流を通じて、ステレオタイプではない、生きた個人としての外国人とその文化を知ってもらうことに焦点が置かれた。

1年生を対象にしたフランス・チームが6月14日、11月1日、1月24日の3回、2年生を対象にしたブラジル・チームが6月26日、10月23日、1月29日の3回、3年生を対象にしたインドネシア・チームが6月16日、10月27日、1月26日の3回、4年生を対象にしたタイ・チームが6月28日、10月25日、1月24日の3回、5年生を対象にした韓国チームが6月26日、10月30日、1月29日の3回、6年生を対象にしたフランス・チーム(1年生対象とは別チーム)が6月27日、10月31日、1月30日の3回、それぞれ実践を行った。詳細は第Ⅱ部1-2.(1)を参照。

(2)川崎市立宮前平中学校

宮前平中学校は川崎市宮前区にある生徒数525人の学校である。1960年代の東急田園都市線の開業とともに開発が進んだ住宅地区の中にある。昨年度も川崎市国際理解教育研究会議のメンバーであったが、支援室による学生ボランティアの活動を行ったのは今年度が初めてである。中学生を対象にするということもあり、個別的な国の理解ではなく、一般的なコミュニケーション能力の育成に力点が置かれた。本校については、1年生の1クラスを対象にして、6月17日、7月7日、10月13日の3回、実践を行った。詳細は第Ⅱ部1-2.(2)を参照。

(3)川崎市立土橋小学校

宮前平中学校と同じく川崎市宮前区に位置する土橋小学校は、児童数892人、2006年に開校したばかりの新設校である。したがって支援室による学生ボランティア活動は初めてであるが、今年度の国際理解教育研究会議の研究授業の実施校となったため、学生たちが関わった国際理解教育の仕上げである発表会が研究授業となった。帰

国児童や外国籍児童の保護者たちがボランティアで立ち上げた「わかば会」があることにも表れているように、外国とのつながりがある児童が比較的多いことも本校の特徴である。本校については、留学生が外国の文化や生活を紹介するという形式ではなく、留学生や学生と児童が共通の目標に向かって作業をする過程の中から、その人の背景にある文化や考え方の違いを児童に感じ取らせる、という方針で実践を行った。4年生の4クラスを対象に、6月22日、7月13日、10月26日の3回、実践を行った。これらの実践を踏まえて10月30日には研究授業を含む発表会があり、学生たちも参加した。詳細は第Ⅱ部 1-2.(3)を参照。

(4)府中市立府中第七中学校

府中市の北西部に位置する府中第七中学校は生徒数352人の学校である。府中市の人口242,000人に占める外国人登録数は4,200人、およそ1.7%であり、東京都全体の外国人登録数の割合2.9%と比べても低い。このような事情もあり、府中市における国際理解教育への取り組みは川崎市に比べると進んでいない。その中で、昨年度に引き続いて府中第七中学校での学生ボランティア活動が行われたのは、有意義なことであった。

全クラス合同で、アルゼンチン班、ブラジル班、インドネシア班、中国班、グルジア班に分かれ、7月4日と12月12日の2回、実践を行った。詳細は第Ⅱ部 1-2.(4)を参照。

(5)新宿区立大久保小学校

新宿区立大久保小学校は、住民の18%が外国人という新宿区の中でも特にニューカマーが多く住む地域に立地しており、全校児童約150名のうち約6割程度が外国とつながりがある子どもたちという、多言語・多文化が進んだ学校である。したがって、一つの教室の中に、様々な母語を持ち、日本語の運用能力にもばらつきがある児童が比較的多数いることが特徴である。したがって、国際理解教育の面でも教育一般の面でも他の学校の事例とは異なった課題が見られる。

昨年度に引き続いての学生ボランティア活動となるが、今年度は、5、6年生の児童のうち韓国語を選択した20名に対して、韓国の言語と文化をテーマに国際理解教育を行った。

日本人学生1名と日本語専攻の韓国人留学生2名によって、10月17日、11月2日、12月7日、12月14日、12月21日の5回、実践を行った。詳細は第Ⅱ部 1-2.(5)を参照。

(6)府中市立小柳小学校

府中市の南東部に位置する小柳小学校は、学生ボランティアを行なっている学校の中で本学から最も近くに位置する。郊外の住宅地に近く、児童数644名である。昨年度に引き続いての学生ボランティア活動であったが、12月になって初めて打ち合わせに入ったため、実践は2回だけとなった。3年生を対象とするので、個別の国理解ではなく、コミュニケーション力の育成に焦点を置くことになった。3年生全クラスを複数のグループに分け、2月26日、3月1日の2回、実践を行った。詳細は第Ⅱ部 1-2.(6)を参照。

(7)狛江市立狛江第一小学校

調布市と世田谷区に隣接する狛江市は、東京都区部の延長といった雰囲気である。狛江第一小学校の位置は、直線距離では本学から10キロに満たないが、公共交通機関での移動にはかなり時間をとられる。これは、川崎市の学校とも多かれ少なかれ共通する悩みである。児童数は560名である。昨年度に引き続いての学生ボランティア活動であったが、12月になって初めて打ち合わせに入ったため、小柳小学校と同じく実践は2回だけとなった。

6年生を対象に、留学生に自分の夢や日本に留学した動機などを語ってもらうことにした。6年生全クラスを複数のグループに分けて、2月20日、2月27日の2回、実践を行った。詳細は第Ⅱ部 1-2.(7)を参照。

(8)三島市立東小学校

静岡県三島市立東小学校に対する実践の経緯は、他

の学校とは異なっている。2006年7月13日付けの朝日小学生新聞に川崎市立東柿生小学校での実践が取り上げられたのがきっかけで、同校の教師から支援室に国際理解教育の実践の打診があった。距離があるためこちらから学生が出かけることは困難であったが、修学旅行の訪問先の一つとして本学を加えていただくことによって、3年生のうち希望者20名が本学を訪れ、支援室の学生たちと交流学习を行うことになった。

10月25日に東小学校3年生20名教師1名が本学を訪問し、それに対して、支援室の学生及びスタッフ23名が迎え、9時から14時までの5時間の間、ワークショップ、児童による三島の紹介、国際理解教育の実践を行った。詳細は第Ⅱ部1-2.(8)を参照。

2. 学生ボランティア団体による活動

以上は、支援室が直接支援を行った活動であるが、この他に、本学の学生ボランティア団体が自主的に企画し、それに対して支援室が部分的な支援を行った活動がある。

(1)第5回ブラジル青少年フェスティバル

群馬県大泉町は人口約4万2千人のうち外国人が16%近く(ブラジル人だけで10%)を占める外国人集住地域である。10月8日に大泉町文化むらで開催されたブラジル青少年フェスティバルは今年で第5回になる。本学の学生ボランティア団体である東京外大在日外国人交流ネットワーク(Amigos)のメンバー14名が昨年度に続いて参加し、日本とブラジルのことばや文化の共通点と相違点を知り、興味をもってもらうための日本語・ポルトガル語劇の公演などの活動を行った。詳細は第Ⅱ部1-2.(9)を参照。

(2)品川区立杜松小学校「すまいるスクール」

すまいるスクールは、学校施設を利用して放課後等に子どもたちが一緒にのびのび過ごせる場所を提供しようという趣旨で始まった品川区の放課後対策事業である。本学の学生ボランティア組織である「うりぬり」は、昨年度に引き続き、品川区立杜松小学校の「すまいるスクール杜松」において韓国の文化を子どもたちに紹介する活動を行った。昨年度は3ヵ月の期間しか行えなかったが、今年度は1年間かけて22回の実践を行うまでに発展した。詳細は第Ⅱ部1-2.(10)を参照。

3. 教育・研修

文責：河路 由佳(教育研修プログラム担当運営委員)

2006 年度に実施した教育・研修活動は、4 月のスタディ・ツアー「多文化のまち—大久保・百人町を歩く—」、夏の「2006 年度夏季多言語多文化共生学講座」、そして、10 月に実施した「イラストレータ・パワーポイント講習会」であった。このうち、「夏季多言語多文化共生学講座」は、当初の計画に基づき、昨年度に引き続いて、9 月の最終週の一週間に実施した。「スタディ・ツアー」も昨年度とほぼ同じ要領で、4 月に新入生歓迎行事の一環として行った。

今年度新しく実施したのは「イラストレータ・パワーポイント講習会」で、これは学習支援や国際理解教育にボランティアとして携わる学生たちの要望に応じて実現したものである。

なお、昨年度、本プロジェクトの活動として総合科目として開講した「多言語・多文化社会講座」は、今年度多言語・多文化教育研究センターによって開講された、Add-on Program「多言語・多文化社会」に発展的に引き継がれた。

3-1. 教育研修プログラム「2006 年度夏季多言語多文化共生学講座」

「外国人児童・生徒の学習支援ボランティア」を志す大学の学生を対象に、2004 年度から準備を進め、2005 年度 9

月にその第 1 回目を実施した教育研修プログラム「夏季多言語多文化共生学講座」の第 2 回目「2006 年度夏季多言語多文化共生学講座—外国人児童生徒の学習支援ボランティア入門—」を、9 月 25 日(月)から 29 日(金)までの 5 日間の日程で実施した。第 1 回の昨年度は、1 年生から大学院生にわたる多数の受講希望者があったため急遽、定員 30 名のところ、60 余名を受け入れ 2 クラスの開講となったが、今年度は 2 回目でもあり、4 月に主として新入生を中心に支援室の活動紹介の中で参加を呼びかけ、1 年生を主たる対象として実施した。今回も定員 30 名のところ 53 名の応募者数があったが、重複受講を遠慮してもらい、1 年生を優先、2 年生以上は既にボランティア活動をしている学生を優先とし 40 名の学生を受講生として受け入れることとした。

実施までの経過

4 月初めより、ポスター、ちらし、支援室 HP 等を通して多言語多文化共生学講座実施に関する情報提供を開始。

5 月 8 日(月)—26 日(金)までを、申し込み期間とし、受講希望者を募集。(募集人数 20—30 名)

5 月中旬 プログラムの内容を決定、言語以外の講師依頼を開始。講師と連絡をとりながら時間割を確定。

	1 (10:00-11:00)	2 (11:10-12:10)	3 (13:10-14:10)	4 (14:20-15:50)
9/25 (月)	オリエンテーション (河路)	日本の小学校の教科教育 (矢崎)	日本の小学校の教科教育 (矢崎)	ボランティアのための 外国語
9/26 (火)	多文化コミュニティを 理解するために(田村)	多文化コミュニティを 理解するために(田村)	多文化コミュニティを 理解するために(田村)	
9/27 (水)	第二言語習得(海野)	バイリンガリズム (伊東)	子どものための 日本語指導(柏崎)	
9/28 (木)	国際化の進行と日本社会 (野本)	国際化の進行と日本社会 (野本)	子どものための 日本語指導(小林)	
9/29 (金)	対人コミュニケーション (宮城)	対人コミュニケーション (宮城)	子どものための 日本語指導(藤森)	まとめ(河路)

6月3日(金) 運営委員会にて受講者42名を決定。6月5日(月)発表。受講要領、決定通知書を配布。

6月中 外国語については、3名以上の受講希望者のある外国語について当該外国語研修を開講することとした。受講者確定に伴い、開講外国語科目が確定したので、外国語講師への依頼を開始。外国語の授業内容は昨年度に引き続き、小学校中学年の算数とした。目安として以下のような内容のハンドブックを講師の方々には配布した。

1日目 整数のしくみ(位取り、概数など)

…整数の足し算、引き算、かけ算、割り算

2日目 分数、小数(その計算)

…式と計算(計算の順序など)

3日目 測りかた(長さ、重さ、面積、その計算)

…図形(三角形、四角形、角、円と球)

4日目 表とグラフ(棒グラフ、折れ線グラフなど)

…考えの進め方(絵や図を使う、量を比べる、部分と全体、きまりをみつける、など)

しかしながら、対象が1年生であることもあり、学生に応じて内容の詳細は講師にお任せすることとした。

なお、開講された外国語のクラスは、アラビア語、フランス語、スペイン語、朝鮮語、ポルトガル語、中国語、カンボジア語、英語(2クラス)であった。今年度は基本的に専攻言語を原則としたが、3名以上の受講希望者がいなかった場合には英語を受講してもらうこととした。

7月10日 授業担当講師によるシラバス提出期限。

7月20日(木)～26日(水) 受講者に、講座のシラバス、時間割を配布。

9月25日～29日 実施

実施方法

実際に実施した本講座のシラバスと時間割は、本報告書第Ⅱ部に掲げた通りである。受講予定学生40名のうち

1名が事情によりキャンセル、受講生は39名であった。

オリエンテーションで、講座の開講の背景、目的や全体の構成について説明し、各自に「学びの記録」とA5版サイズの冊子を配布した。それぞれの授業について受講後に「何を学んだか、今後の活動にどう活かしたいと思ったかなど、授業を受けて考えたこと、もっと知りたいと思ったこと」を自由に書くよう、指導した。講師に、出欠表を渡して依頼し、毎時間の出欠を記録した。

プログラム最後の「まとめ」の時間には、コーディネーターが講座全体のまとめを行い、その後、「学びの記録」を一時回収、講座についてのアンケートを実施した。また、出欠記録をもとに、全20時間のうち17時間以上出席した受講者36名に学長より与えられた修了証を授与した。授与式には運営委員長、副運営委員長も参加し、挨拶の後、運営委員長より各修了生に修了証が授与された。「学びの記録」は受講者の承諾を得て複写したのち、それぞれ本人に返却した。

「学びの記録」及びアンケートの結果について

アンケートについては、本報告書第Ⅱ部に集計結果を掲げる。「学びの記録」については、個々の学生の学習の定着、促進を主目的として実施したもののだが、実施者側にとっては、授業評価として読み参考にすることができる。今年度はあらかじめこれを運営委員側の参考にすること、報告書に掲載することがあることを学生に話し了承を得て、一時回収し、全て複写をとってから返却した。担当講師には、担当授業分の「学びの記録」の複写を届けた。

夏休み中の自由参加であったが、受講者は積極的に毎日参加し9割以上の学生に修了証が授与されたこと、アンケートの質問(6)、「今回のプログラムの前後で、ボランティアに対する意識や心がまえが変わったか」という問いに対し、回答者36名のうち全員が「変わった」と回答し、自由記入欄に積極的な認識を述べていること、また「学びの記録」の記述等から、本講座は所期の目的をほぼ達成したと言えるようである。なお、このアンケート結果は本報告書の第Ⅱ部に掲載されているので、ご覧いただきたい。

「学びの記録」からも、学生の学習成果を読み取ることができた。今年度はあらかじめ、全員にこのコピーを我々の参考のために利用させてもらうこと、報告書に掲載する可能性のあることについて話し、承諾を得た。第Ⅱ部に、学生の「学びの記録」の抜粋も掲載されているので、こちらもぜひお読みいただきたい。このプログラムを支えた現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代 GP)は、今年度で終了するため、この夏期講座は今年度で終了することを学生に伝えたところ、多くの学生からぜひ来年度以降も実施してもらいたいとの要望が出された。

3-2. スタディ・ツアー「多文化のまち— 大久保・百人町を歩く—」

昨年度に引き続き、多文化コミュニティ教育支援室主催の新学期フェアの一環として、4月22日(土)午後3時半から8時までの予定で実施した。新宿区大久保・百人町を拠点に、グローバル化の中で変貌する地域社会(都市コミュニティ)の新しいあり方を追求している市民のボランティアグループ、共住懇(きょうじゅうこん)の代表の山本重幸氏による1時間ほどの事前講習のあと、山本重幸氏らによるガイドで、実際に「多文化のまち—大久保・百人町」を歩き、多言語多文化化の実験を体験した。最後には、多文化多言語を象徴するような多国籍料理の店で全員で夕食をとりながら語り合った。

当日の参加者は学生16名、教職員5名である。1年生を主たる対象とした新入生歓迎フェアの一環で呼びかけたこともあり、参加学生のうち11名が1年生、他に3年生1名、4年生2名、大学院生2名であった。

1年生は特に地方から初めて東京に来た学生も少なくない。東京、新宿の多言語多文化化の実態に触れて、驚いた学生も多かったようで、その豊かさや問題点について考えるよいきっかけとなったようである。学生たちはイスラム教徒のための食材店、ハラルショップに入ったが、店内にアラビア語、ヒンディー語、英語、日本語が行き交っていた。学生たちはそれぞれに会話を楽しんだりしながら、多

言語多文化状況を身をもって知ることができたようである。

参加学生には終了後、1000字程度のレポートを提出することを求め、後日提出された。

3-3. イラストレータ講習会・ パワーポイント講習会

支援室の活動では、コンピュータを活用して資料を作成したり、プレゼンテーションを行ったりすることで大きな効果をあげることができることから、支援室関係の学生・教職員のスキルアップのために、希望者を対象にしたアドビ・イラストレータ講習会とマイクロソフト・パワーポイント講習会を以下の日程で実施した。昨年度もパワーポイント講習会を行ったが、今回は希望者が多かったイラストレータ講習会も2回にわたって行った。講師には青山運営委員がなった。

10月4日(水) 18時半～19時半

イラストレータ講習会①(支援室にて)

10月11日(水) 17～18時

イラストレータ講習会②(支援室にて)

10月18日(水) 17～18時

パワーポイント講習会(216にて)

参加者数はそれぞれ7人、9人、13人であった。詳細は第Ⅱ部2-3.を参照。

4. 調査・研究

文責：伊東 祐郎(調査・研究担当運営委員)

多文化コミュニティ教育支援室は、設立後 3 年目を迎えた。平成 16 年度から始まった文部科学省の「現代的ニーズ取組支援プログラム」としては、最終年である。この間の活動を振り返ってみると、実に多くの活動に関わってきたことに気づかされる。しかしながら、全てが順調にいったものばかりではない。多くの活動は、何も無いところからの取り組みだったため、試行錯誤を重ねながらの、そして、模索しながらの活動だった。

最終年にあたる本年度は、今一度、これまでの学生によるボランティア活動の軌跡を振り返り、学習支援活動が現役学生にとってどのような意味があったのか、学びとしての活動がどのような形で結実していったのかを検証してみたい。検証といっても、活動をまとめるだけに留まってしまうかもしれない。しかし、この機会に、過去 2 年間の諸活動から見いだされた課題をまとめ、また、最終年にこれまでの活動の締めくくりとして一区切りつけることは、本プログラムの総括をするという点においても、意義のあることであろう。また、次年度以降にも引き継がれる多文化コミュニティ教育支援室の新たな方向性を示すという点においても意味のあることであると確信する。

以上のような経緯から、本年度の「調査・研究」では、支援室活動の四本柱の一つである「学生ボランティア活動」そのものを調査・研究の対象にすることとした。学生によるボランティア活動の中核をなすものは、「学習支援活動」と「国際理解教育」の二つである。これらの活動を総括することを調査・研究の対象として取り上げてみたい。

「学習支援活動」においては、川崎における支援活動がその始まりである。その後、活動の範囲は拡大し、地元府中での支援活動も軌道に乗ってきたところである。

「国際理解教育」においては、これまでの試行錯誤から一つのパターンが構築されつつある。留学生と日本人学生のペアによる活動が本学の特徴とすれば、それは「外大方式」と呼ぶにふさわしいものかもしれない。しかし、この方式を振り返って検証することもなくただ前進するのみでやってきた今、活動モデルをまとめ、その内容や方法等について検証してみたい。

本年度の調査・研究では、報告書作成のための活動に終始しないよう、調査・研究のプロセスを重視し、過去の活動から現在の活動へ、そして将来の活動へのブリッジとなるような調査・研究になることを目的とした。そのために、調査・研究の成果を平成 18 年 12 月に開催した「学生多文化フォーラム」での発表を大目標に掲げ、以下のような調査・研究活動をプロジェクトとして位置づけ、希望する学生を班で構成した。主な、調査・研究の内容と方法は、文献調査、訪問調査、アンケートや聞き取り調査、講演会、ワークショップ、ディスカッション、など多岐にわたり、学生の主体性を優先して実行に移した。

なお、調査・研究の開始に先立って「学生調査研究員」を公募した。調査の概要およびその詳細は、第 II 部 3 章「調査・研究」を参照されたい。

5. 多文化共生推進活動

文責：長田 広介(運営委員)

平成 18 年度の多文化共生活動は東京外大在日外国人交流ネットワーク(Amigos)や多文化コミュニティ教育支援室学生ボランティアの有志団体など、学生団体の自主的活動が主になった。以下、その概要を記す。

フェスタ・ジュニーナ

6 月 18 日に横浜市立潮田小学校で「フェスタ・ジュニーナ」が開かれ、東京外大在日外国人交流ネットワーク(Amigos)がこのイベントスタッフとして参加した。「フェスタ・ジュニーナ」はブラジルで毎年 6 月に開かれ、収穫に感謝する祭りである。潮田小学校がある横浜市鶴見区は、ブラジルにつながるのある約 1,500 人が暮らしており、IAPE(外国人児童生徒保護者交流会)が中心となり、ブラジルの文化を知ってもらおうと数年前から開かれている。詳細は第Ⅱ部 4-2.を参照。

日本語通訳学会

9 月 23 日に本学で開催された日本語通訳学会第 7 回年次大会で、東京外大在日外国人交流ネットワーク(Amigos)の学生(中村未央、和田更沙)が、これまでの団体の活動を振り返りボランティア通訳者という視点から報告を行った。団体の活動の中で抱えた問題点や活動を行う上での重要な視点を提供し、多言語多文化社会における通訳者の役割の一例を紹介した。詳細は第Ⅱ部 4-3.を参照。

ブラジル移民の歴史すごろく

本学の学園祭である外語祭期間中(11 月 22 日から 26 日まで)、東京外大在日外国人交流ネットワーク(Amigos)が展示企画を行った。この展示企画は、Amigos の活動紹介に加えて、在日ブラジル人に焦点を絞り、その移民の歴史を巨大なすごろくにして紹介した。詳細は第Ⅱ部 4-1.を参照。

多文化多言語劇「言葉をつなぐ指輪～共生って大変だよね～」

外語祭期間中の 11 月 23 日に学園祭の主たる企画「語劇」において、多文化コミュニティ教育支援室で活動を行っている学生(阿部靖子ら 14 名)が劇を行った。異なった文化背景を持つ者たちがいかに分かりあうことができるのかということをテーマに、150 名ほどの観客を前に熱演した。詳細は第Ⅱ部 4-4.を参照。

「羽村日本語学習会」日本語学習帳翻訳

東京都羽村市で活動しているボランティア団体「羽村日本語学習会」の依頼を受け、東京外大在日外国人交流ネットワーク(Amigos)が、同団体で使用している日本語学習帳のポルトガル語翻訳を行った。100 ページ弱に及ぶ 1 冊の日本語学習帳をメンバー総出で翻訳し、羽村日本語学習会とやりとりを重ね、2007 年 2 月まで約 1 年をかけて完成に至った。詳細は第Ⅱ部 4-5.を参照。

6. 学生多文化フォーラム

文責：伊東 祐郎（運営委員）

学生多文化フォーラム(以下「フォーラム」と略す)は、多文化コミュニティ教育支援室における調査・研究の総括の発表の場として企画したものである。3 章でも述べたが、「現代的ニーズ取組支援プログラム」の最終年にあたる本年度の調査・研究は、支援室活動の四本柱の一つである「学生ボランティア活動」そのものを振り返ることとした。3 年間の活動の総括を行うことによって、また、その成果を学内外の関係者に公開して、意見交換を行うことによって、学生活動を客観的に見つけ、自らの活動の軌跡と将来に向けての展望が論じられる機会にしたいというのが、企画発案のもとになったのである。当日の内容は第Ⅱ部 5 章で詳細に述べられているので、ここでは、企画から実施にいたるまでの経緯についてまとめてみる。

4 月下旬、運営委員と学生 7 名からなるワーキング・メンバーが打ち合わせ会議をもった。主な目的は、フォーラムの開催時期をいつに設定し、その内容をどのようにするかを検討であった。フォーラム開催の目的は、調査・研究の成果発表の場であり、外部専門家を招聘しての国際シンポジウムレベルの規模で開催することは決定していた。したがって、日程の調整では、調査・研究が終了し、発表内容がまとまる頃で、しかも発表後の報告書執筆が年度内に終わる時期が適切であろうということから、開催時期を 12 月 2 日(土)と決定した。その頃、フォーラムは、「国際シンポジウム」という仮称で呼ばれ、「学生多文化フォーラム」という名称に決定したのは、企画内容が具体的に決まった数ヶ月後であった。

シンポジウムの全体構想では、中心となる部分は「学習支援」と「国際理解教育」に関わる調査・研究の成果の報告であった。そのために、当日のプログラムを考えることは、同時に、春から秋にかけての調査・研究の中身についての検討でもあった。

「学習支援」に関しては、本学の学生の、外国人児童生

徒の日本での学習困難は、子どもたちの異なる文化背景、異なるカリキュラムでの学習体験が影響しているのではないかとの考えから、背景調査、特に子どもたちの母国でのカリキュラムと日本でのカリキュラム、また学校文化の違いを調査することが一つの案として出されていた。そこで、子どもたちの文化的な背景や学習観、学校文化の違いの理解が、学習支援に役立つであろうとの認識から、調査研究の方向性が決められた。

一方、「国際理解教育」では、これまでの活動から一つの形となった、日本人学生と留学生による「外語大方式」を振り返る必要性が挙げられていた。この方式が作り上げられるに至った経緯やその背景を知ること、そして教育的観点からの検討を行い、従来からの教育方法と比較することで、新たに「外語大モデル」が提示できるのではないかとの考えがあった。最終的には、国際理解教育とは何であるか、外大生、留学生が関わる意味、そして学校の子どもたちが受けたインパクトがどのようなものであったのかなど、活動を通して感じられた疑問を解決し、また自らの体験から出た意見などを発信し、支援の成果を確認、検証することを主な目的として調査研究することが決まった。

このように、4 月から 5 月にかけての運営委員とこれまでの活動に参加してきた有志学生との議論を踏まえて、本年度の調査・研究の骨格が決まったことになる。これを受けて、調査研究員募集へとつながり、調査研究プロジェクトが立ち上がったのである。この部分の詳細は、第Ⅱ部 3 章にその概要を述べている。

7 月頃にはほぼ基本的な調査研究の方向性が決定し、「学習支援」「国際理解教育」という二つのプロジェクトが動き出した。特に、「国際理解教育」については、シンポジウムに向けて、これまでの国際理解教育の実践と理論をどのように捉え、融合するかが課題として浮上した。そこで、新たに、「プレ・学生多文化フォーラム」と称して、シンポジ

ウム開催までに専門家による講演会、学生同士のディスカッションなどの企画を立て、国際理解教育そのものをより深く理解することと、自らの実践に教育的な意義づけをする機会を設けることにした。また、フォーラムに先立って、海外から招聘した講師による「プレ・講演会」も開催した。いずれも第Ⅱ部 5 章「学生多文化フォーラム」を参照されたい。

7. 活動年表

年	月 日	活 動 内 容
2003 年	4月21日	東京外大在日外国人交流ネットワーク～Amigos～(以下、東外ネット Amigos)結成
	5月	川崎市立殿町小学校にて学習支援ボランティア活動開始(東外ネット Amigos)
	12月3日	東外ネット Amigos 主催講演会「DEKASSEGUIと日本～私たちにできること」 講師:二宮正人氏(サンパウロ大学教授)
2004 年	7月	川崎市立京町小学校にて学習支援ボランティア活動開始(東外ネット Amigos)
	7月23日	文部科学省平成16年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」申請
	9月24日	文部科学省平成16年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」採択
	10月4日	第1回運営委員会
	10月7日	第1回アドバイザー会議
	10月21日	「多文化コミュニティ教育支援室」開設
	10月22日	開設記念講演会「国際化する日本であなたは何かができますか」 講師:手塚和彰氏(千葉大学法経学部教授)
	10月25日	第1回活動推進会議
	10月25日	第2回運営委員会
	10月28-29日	愛知県豊田市訪問調査、外国人集住都市会議出席(東外ネット Amigos)
	11月10日	第2回アドバイザー会議
	11月24日	第3回運営委員会
	11月30日	オープニング・ワークショップ「在日外国人とコミュニティ—学生・大学は何かができるか？」
	12月13日	第2回活動推進会議
12月13日	第4回運営委員会	
12月19日	静岡県大東町・東京外国語大学共催「日本・ブラジル交流のつどい」参加(東外ネット Amigos)	
2005 年	1月5日	第5回運営委員会
	1月下旬	「多文化コミュニティ支援ボランティア」公募開始
	1月24日	第2回講演会「多文化社会に求められる教育とは—日本の学校ってどこか変？」 講師:小貫大輔氏(CRI-チルドレンズ・リソース・インターナショナル代表)
	1月26日	第6回運営委員会
	1月26日	川崎市立菅小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小6・第1回)
	2月4日	川崎市立菅小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小6・第2回)
	2月9日	外務省・国際移住機関共催シンポジウム「外国人問題にどう対処すべきか—諸外国の抱える問題とその取り組みの経験を踏まえて—」特別取材
	2月11日	ボランティア・コーディネーター研究会「大学におけるボランティア関連の授業の実例—在住外国人支援を中心に」講師:田村太郎氏(多文化共生センター理事)

2005 年	2月17日	第3回アドバイザー会議
	2月18日	府中国際交流サロンにて学習支援ボランティア活動開始
	2月19日	東京都国際交流委員会・国際交流・協力 TOKYO 連絡会主催「国際化市民フォーラム in TOKYO 東京の国際化・国際協力を語る」特別取材
	3月3日	全国市町村国際文化研修所 平成16年度国際交流団体職員セミナー「多文化共生の推進に関する教育機関の取り組み」として当支援室の設立経緯、活動内容及び課題を紹介 報告者:武田千香氏(運営委員長)
	3月4日	第2回ワークショップ「国際理解教育に取り組む先駆的地域・学校・NPO から学ぶ—東京外国語大学に何ができるか？」
	3月15日	第7回運営委員会
	3月末日	「平成16年度 多文化コミュニティ教育支援室 活動報告書」発行
	4月1日	メールマガジン創刊号配信
	4月4日	第3回講演会「ボランティアのための国際理解講座入門編—小学生にどうやって教えるの？国際理解」講師:湯本浩之氏(開発教育協会理事)
	4月11-28日	新学期フェア「専攻語を活かしたボランティアをやってみませんか？」
	4月12日	多文化コミュニティ支援ボランティア登録者数100名を突破
	4月14日	ボランティア募集合同説明会(第1回)
	4月15日	府中国際交流サロンにて学習支援ボランティア活動前期開始
	4月21日	ボランティア募集合同説明会(第2回)
	4月28日	ボランティア募集合同説明会(第3回)
	4月14日	第4回講演会「ここまで来ている日本の多言語多文化化—新大久保の今」 講師:山本重幸氏(共住懇代表)
	4月23日	スタディ・ツアー「多文化のまち—大久保・百人町を歩く—」 ガイド:山本重幸氏(共住懇代表)ほか
	5月2日	第2回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	5月6-27日	「2005年度夏季多言語多文化共生学講座—外国人児童生徒の学習支援ボランティア入門」受講生募集
	5月9日	「TUFS 地域にほんご教室(TUFS Japanese Course for the Community)」前期講習開始 講師:小早川麻衣子氏(本学大学院地域文化研究科日本語教育専修コース博士課程1年)・秋山佳世氏(同修士課程2年)
	5月11日	メールマガジン第2号配信
	5月12日	第4回アドバイザー会議
	5月26日	第3回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	6月3日	学生ボランティア親睦会
	6月6-16日	「日本語指導が必要な外国人児童生徒向けに開発された日本語及び教科指導のための教材調査」学生調査員募集
	6月7日	第1回映画「Gaijin」勉強会(東外ネット Amigos)
	6月9日	第2回映画「Gaijin」勉強会(東外ネット Amigos)

2005 年	6月13日	第4回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	6月14日	メールマガジン第3号配信
	6月14日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小1・第1回)
	6月21日	第1回学生教材調査員説明会
	6月21日	府中市立府中第七中学校にて国際理解教育ボランティア活動(中1・第1回)
	6月22日	第2回学生教材調査員説明会
	6月22日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小3・第1回)
	6月24日	第3回学生教材調査員説明会
	6月24日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小5・第1回) 第5回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	6月27日	多文化コミュニティ支援ボランティア登録者数150名を突破
	6月27日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小2・第1回)
	6月28日	学生教材調査員会議(調査開始)
	6月29日	府中市立府中第七中学校国際理解教育ボランティアによる第1回実践反省会
	6月30日	川崎市立東柿生小学校国際理解教育ボランティアによる第1回実践反省会
	7月1日	第6回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	7月5日	第8回運営委員会
	7月7日	「学習支援のためのパワーポイント講習会」講師:青山亨氏(運営委員)
	7月14日	「TUFS 地域にほんご教室」前期講習終了
	7月15日	高校新聞社が府中国際交流サロンにおける学習支援ボランティア活動取材 府中国際交流サロンにおける学習支援ボランティア活動:前期終了
	7月15日	川崎市立殿町小学校における学習支援ボランティア活動:前期終了(東外ネット Amigos)
	7月19日	メールマガジン第4号配信
	7月21日	川崎市立京町小学校における学習支援ボランティア活動:前期終了(東外ネット Amigos)
	7月19-22日	「2005年度夏季多言語多文化共生学講座—外国人児童生徒の学習支援ボランティア入門」シラバス配布
	7月25日	第7回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	8月5日	国際理解教育学生コーディネーター会議
	8月9日	オープンキャンパスで支援室紹介
	8月17日	国際理解教育学生コーディネーター会議
	8月22日	支援室夏季閉室期間開始
	8月24日	第8・9回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	9月5日	支援室開室
	9月9日	府中国際交流サロンにおける学習支援ボランティア活動:後期開始
9月12日	第10回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席	
9月16日	川崎市立殿町小学校における学習支援ボランティア活動:後期開始(東外ネット Amigos)	

2005 年	9月25日	群馬県大泉町主催「第4回大泉日系ブラジル人青少年フェスティバル」参加(東外ネット Amigos)
	9月26-29日	「2005年度夏季多言語多文化共生学講座—外国人児童生徒の学習支援ボランティア入門」開講
	9月29日	第11回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	10月3日	「TUFUS 地域にほんご教室」後期講習開始 講師:和田沙江香氏(本学大学院地域文化研究科日本語教育専修コース修士課程1年)・古川明子氏(同2年)
	10月6日	川崎市立京町小学校における学習支援ボランティア活動:後期開始(東外ネット Amigos)
	10月7日	後期総合科目「多言語・多文化社会論講座」開講:第1回「オリエンテーション」 講師:船田クラークンさやか氏(運営委員)
	10月9日	多文化共生センター・国立民族博物館共催公開フォーラム「多文化共生社会の形成をめざす実践と研究のために」にて「多言語・多文化社会の求める人材育成を目指して」報告 報告者:武田千香氏(運営委員長)
	10月11日	府中市立府中第七中学校にて国際理解教育ボランティア活動(中1・第2回)
	10月14日	メールマガジン第5号配信
	10月14日	後期総合科目「多言語・多文化社会論講座」第2回「現代世界の特徴—参加型学習くもし世界が100人の村だったら>」講師:湯本浩之氏(開発教育協会理事)
	10月14日	2005年度調布市内・近隣大学等公開講座「多言語・多文化共生と私たち」第1回「在日外国人児童生徒と日本語教育」講師:伊東祐郎氏(運営副委員長)
	10月16日	「川崎市外国人市民代表者会議オープン交流会」特別取材
	10月18日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小1・第2回)
	10月18日	第12回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	10月20日	新宿区立大久保小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小5,6・オリエンテーション)
	10月21日	第9回運営委員会
	10月21日	後期総合科目「多言語・多文化社会論講座」第3回「欧米における『多言語・多文化社会』」講師:杉木明子氏(神戸学院大学法学部助教授)
	10月21日	2005年度調布市内・近隣大学等公開講座「多言語・多文化共生と私たち」第2回「ブラジル社会の多文化・多民族共生論」講師:鈴木茂氏(本学外国語学部助教授)
	10月21日	府中国際交流サロンにて保護者面談を実施
	10月28日	後期総合科目「多言語・多文化社会論講座」第4回「日本における『多言語・多文化社会』の歴史的背景—アイヌ・沖縄・在日」講師:野本京子氏(本学外国語学部教授)
10月28日	2005年度調布市内・近隣大学等公開講座「多言語・多文化共生と私たち」第3回「日本のなかの『ブラジル』/ブラジルの中の『日本』」講師:鈴木茂氏(本学外国語学部助教授)	
10月28日	府中国際交流サロンにて保護者面談を実施	
10月28日	支援室・東外ネット Amigos 共催第5回講演会「在住外国人が見た日本—医師・医療通訳として現場から」講師:中萩エルザ氏(在名古屋ブラジル総領事館医療相談医)	

2005 年	10月30日	川崎市立京町小学校「ふれあいまつり」に参加 国際理解教育イベント「ブラジルってどんなところ？」(東外ネット Amigos)
	11月1日	メールマガジン第6号配信
	11月1日	新宿区立大久保小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小3,4・第1回)
	11月2日	韓国人留学生ボランティアグループ「うりぬり」結成
	11月4日	後期総合科目「多言語・多文化社会論講座」第5回「東南アジアにおける『多言語・多文化社会』」講師:左右田直規氏(本学外国語学部講師)
	11月4日	調布市2005年度市内・近隣大学等公開講座「多言語・多文化共生と私たち」:第4回「多文化社会におけるマイノリティの自立—アイヌ人・沖縄人・在日朝鮮人」 講師:野本京子氏(本学外国語学部教授)
	11月4日	府中国際交流サロン学生ボランティアによる教案検討会 アドバイザー:伊東祐郎氏(運営副委員長)
	11月7日	新宿区立大久保小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小5,6・第1回)
	11月8日	新宿区立大久保小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小3,4・第2回)
	11月10日	川崎市立菅中学校にて国際理解教育ボランティア活動(中1・第1回) 第13回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	11月11日	後期総合科目「多言語・多文化社会論講座」第6回「日本における多文化化する身近な社会」講師:関口耕一郎氏(多文化共生センター・東京21事務局長)
	11月11日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小5・第2回)
	11月11日	外国人集住都市会議よっかいち2005「多文化共生社会をめざして—未来を担う子どもたちのために」特別取材
	11月14日	新宿区立大久保小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小5,6・第2回)
	11月14日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小2・第2回)
	11月14日	川崎市立菅中学校国際理解教育ボランティアによる第1回実践反省会
	11月14日	川崎市立殿町小学校における学習支援ボランティア活動終了(東外ネット Amigos)
	11月15日	多文化コミュニティ支援ボランティア登録者数200名を突破
	11月15日	新宿区立大久保小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小3,4・第3回)
	11月16日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小3・第2回) 川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小5・第3回) 川崎市国際理解教育研究会授業研究会(川崎市国際理解教育研究会主催)出席 第14回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	11月19-23日	外語祭展示「地球人のススメ」(東外ネット Amigos)
	11月20日	オープンキャンパスで支援室紹介
	11月21日	新宿区立大久保小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小5,6・第3回)
	11月22日	新宿区立大久保小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小3,4・第4回)
	11月25日	後期総合科目「多言語・多文化社会論講座」第7回「『多言語・多文化社会』の現場から(1)—司法通訳」講師:中西智恵美氏(東京高等裁判所法廷通訳)
	11月25日	第15回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席

2005 年	11月28日	新宿区立大久保小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小5,6・第4回)
	11月29日	教材調査全体報告会(調査終了)
	12月1日	川崎市立東柿生小学校国際理解教育ボランティアによる第2回実践反省会(1)
	12月1日	韓国文化理解講座「韓国人のライフサイクル」第1回「韓国の結婚式と子育て」 講師:森朴憲治氏(運営委員)
	12月2日	後期総合科目「多言語・多文化社会論講座」第8回「『多言語・多文化社会』の現場から(2)—NGO・ボランティア」講師:猪狩伸平氏(本学大学院地域文化研究科修士課程1年)
	12月3日	品川区立杜松小学校「すまいるスクール」にて韓国語・韓国文化講座(第1回、うりぬり)
	12月5日	メールマガジン第7号配信
	12月8日	川崎市立東柿生小学校国際理解教育ボランティアによる第2回実践反省会(2)
	12月8日	韓国文化理解講座「韓国人のライフサイクル」第2回「小学生から中学生の学校生活」 講師:金智恩氏(本学外国語学部日本語専攻2年)
	12月9日	後期総合科目「多言語・多文化社会論講座」第9回「『多言語・多文化社会』の現場から(3)—学校」講師:辻本昭彦氏(武蔵野市立第一中学校教務主任)
	12月13日	府中市立府中第七中学校にて国際理解教育ボランティア活動(中1・第3回)
	12月15日	韓国文化理解講座「韓国人のライフサイクル」第3回「高校時代から軍隊まで」 講師:朴天榮氏(本学外国語学部日本語専攻2年)
	12月15日	「TUFSS 地域にほんご教室」後期講習終了、修了証授与
	12月16日	後期総合科目「多言語・多文化社会論講座」第10回「日本社会の新しい変化」 講師:米谷匡史氏(本学外国語学部助教授)
	12月16日	川崎市立京町小学校学童保育「わくわく」にて国際理解教育ボランティア活動(第1回、東外ネット Amigos)
	12月17日	品川区立杜松小学校「すまいるスクール」にて韓国語・韓国文化講座(第2回、うりぬり)
	12月19日	ワークショップ「国際理解教育のさまざまなカタチと可能性—小中学校での実践を通して」
	12月21日	第10回運営委員会
	12月27日	第16・17回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	12月下旬	支援室ホームページリニューアル
12月27日	支援室冬季閉室期間開始	
2006 年	1月5日	第18・19回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	1月7日	品川区立杜松小学校「すまいるスクール」にて韓国語・韓国文化講座(第3回、うりぬり)
	1月10日	支援室開室
	1月10日	メールマガジン第8号配信
	1月12-13日	群馬県太田市視察(ぐんま国際アカデミー、ブラジル人学校・ピタゴラス、太田市立旭小学校)
	1月13日	後期総合科目「多言語・多文化社会論講座」第11回「グループディスカッション」 講師:船田クラークンさやか氏(運営委員)

2006 年	1月17-18日	静岡県浜松市視察(浜松市長表敬、浜松市国際課、浜松市教育委員会、浜松市立高校、浜松市立開成中学校、浜松市立瑞穂小学校、ブラジル人学校・アレグリア・デ・サベール、浜松国際交流協会)
	1月20日	第11回運営委員会
	1月23日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小2・第3回)
	1月25日	川崎市立京町小学校学童保育「わくわく」にて国際理解教育ボランティア活動(第2回、東外ネット Amigos)
	1月26日	学習支援のための勉強会「在日フィリピン人児童の抱える問題—日本とフィリピンの学校環境の違いを中心に」講師:高野邦夫氏(本学外国語学部非常勤講師)
	1月27日	後期総合科目「多言語・多文化社会論講座」第12回「グループ発表」 講師:船田クラークンさやか氏(運営委員)
	1月30日	川崎市立菅中学校国際理解教育ボランティア活動(中1・第2回) 第20回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	1月31日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小1・第3回)
	1月31日	地球産業文化研究所主催「第16回 GISPRI シンポジウム:21世紀日本社会は外国人をどう迎え入れるのか—人口減少社会の持続可能な移民政策」特別取材
	2月1日	メールマガジン第9号配信
	2月1日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小3・第3回)
	2月3日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小5・第4回) 第21回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	2月3日	後期総合科目「多言語・多文化社会論講座」第13回「総括」 講師:船田クラークンさやか氏(運営委員)
	2月4日	品川区立杜松小学校「すまいるスクール」にて韓国語・韓国文化講座(第4回・うりぬり)
	2月9日	第22回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	2月10日	府中国際交流サロンにて学生ボランティアによる「お楽しみ会」の実施
	2月10日	後期総合科目「多言語・多文化社会論講座」第14回「多言語・多文化社会の現場から(4)—行政編:我が国における多文化共生施策の現状と課題」(公開講演会) 講師:山崎一樹氏(総務省自治行政局国際室長)
	2月14日	府中市立小柳小学校にて国際理解教育ボランティア活動の事前打ち合わせ
	2月17日	第4回川崎市国際化推進地域連絡協議会及び第14回帰国・外国人生徒と共に進める教育の国際化推進地域研究報告会(川崎市立富士見中学校)出席
	2月18日	品川区立杜松小学校「すまいるスクール」にて韓国語・韓国文化講座(第5回・うりぬり)
	2月21日	府中市立小柳小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小3・全1回) 川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小6・全1回)
	2月24日	狛江市立狛江第一小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小6・全1回) 川崎市立京町小学校学童保育「わくわく」にて国際理解教育ボランティア活動(第3回、東外ネット Amigos)

2006 年	2月24日	府中国際交流サロンにおける学習支援ボランティア活動:後期終了
	2月28日	府中市立府中第七中学校にて国際理解教育ボランティア活動(中1・第4回) 第23回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	3月1日	メールマガジン第10号配信
	3月6日	第24回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席(最終回)
	3月7日	川崎市立京町小学校における学習支援ボランティア活動:後期終了 府中市立府中第七中学校にて国際理解教育ボランティア活動(中1・第5回)
	3月13-14日	運営委員及びスタッフが愛知県立大学・愛知教育大学・甲南女子大学・神戸市多言語放送「FM わいわい」を視察
	3月17日	全国社会福祉協議会 全国ボランティア活動振興センター主催シンポジウム「学生ボランティア活動の可能性と大学ボランティアセンターの展望」にシンポジストとして活動報告及び問題提起 報告者:武田千香氏(運営委員長)
	3月末日	「平成17年度 多文化コミュニティ教育支援室 活動報告書」発行
	4月5日	メールマガジン第11号配信 第12回運営委員会
	4月10日	第13回運営委員会 国際理解教育説明会
	4月11日	国際理解教育説明会
	4月12日	国際理解教育説明会
	4月13日	国際理解教育説明会
	4月14日	第1回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席 府中国際交流サロンにおける学習支援ボランティア活動:前期開始
	4月22日	スタディ・ツアー「多文化のまち—大久保・百人町を歩く—」 ガイド:山本重幸氏(共住懇代表)ほか
	4月24日	府中市立府中第七中学校、新宿区立大久保小学校訪問
	4月28日	第1回学生多文化フォーラム意見交換会
	5月1日	川崎市立土橋小学校、東柿生小学校訪問
	5月2日	第2回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席 メールマガジン第12号配信
	5月11日	第1回国際理解教育ボランティアミーティング
	5月12日	第2回国際理解教育ボランティアミーティング
	5月19日	第3回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	5月30日	第4回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	6月2日	メールマガジン第13号配信
	6月14日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小1・第1回)
	6月16日	川崎市立宮前平中学校にて国際理解教育ボランティア活動(中1・第1回) 川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小3・第1回)

2006 年	6月18日	横浜市立潮田小学校にて「フェスタ・ジュニーナ」参加(東外ネット Amigos)
	6月21日	第1回調査研究員説明会
	6月22日	川崎市立土橋小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小4・第1回) 第6回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席 第2回調査研究員説明会
	6月23日	第3回調査研究員説明会
	6月26日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小2.5・第1回)
	6月27日	川崎市総合教育センターより矢崎真弓教諭来校 川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小6・第1回) 朝日小学生新聞 支援室におけるボランティア活動の取材
	6月28日	川崎市立宮前平中学校の実践についての話し合い(川崎市総合教育センター/矢崎真弓教諭・宮前平中学校/野村志保教諭来校) 川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小4・第1回) 中日新聞 取材
	7月3日	調査研究員発表
	7月4日	学生多文化フォーラムオリエンテーション 府中市立府中第七中学校国際理解教育ボランティア活動(中1・第1回) IPC 支援室におけるボランティア活動の取材 メールマガジン第14号配信
	7月6日	第14回運営委員会 川崎市立東柿生小学校国際理解教育ボランティアによる実践反省会
	7月7日	川崎市立宮前平中学校にて国際理解教育ボランティア活動(中1・第2回) 第7回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席 府中国際交流サロンにて四者面談を実施 府中市立府中第七中学校国際理解教育ボランティアによる実践反省会
	7月13日	川崎市立土橋小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小4・第2回) 第8回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	7月14日	府中国際交流サロンにて四者面談を実施
	7月21日	府中国際交流サロンにて四者面談を実施 府中国際交流サロンにおける学習支援ボランティア活動:前期終了
	8月1日	支援室夏季閉室期間開始
	8月4日	第9回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	8月8日	オープンキャンパスで支援室紹介
	8月9日	学生多文化フォーラム調査研究(学習支援班) 新宿区立大久保小学校訪問
	8月17日	学生多文化フォーラム調査研究(学習支援班) 川崎市立京町小学校訪問
	8月22日	第10・11回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	9月5日	第12回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	9月11日	支援室開室

2006 年	9月14日	第15回運営委員会
	9月15日	府中国際交流サロンにおける学習支援ボランティア活動:後期開始
	9月21日	第13回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	9月23日	日本通訳学会第7回年次大会にて報告(東外ネット Amigos)
	9月25-29日	「2006年度夏季多言語多文化共生学講座—外国人児童生徒の学習支援ボランティア入門」講座
	10月4日	第1回「イラストレータ講習会」講師:青山亨氏(運営委員)
	10月10日	第1回プレ・学生多文化フォーラム 学生ディスカッション「国際理解教育で何を伝えるか」
	10月11日	第2回「イラストレータ講習会」講師:青山亨氏(運営委員) メールマガジン第15号配信
	10月13日	川崎市立宮前平中学校にて国際理解教育ボランティア活動(中1・第3回) 第14回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席 学生多文化フォーラム調査研究(学習支援班) インディア・インターナショナル・スクール・イン・ジャパン訪問
	10月17日	新宿区立大久保小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小5,6・第1回) 第2回プレ・学生多文化フォーラム 佐藤郡衛氏講演会「国際理解教育とその現状」
	10月18日	「パワーポイント講習会」講師:青山亨氏(運営委員)
	10月19日	学生多文化フォーラム調査研究(学習支援班) コレジオ・ピタゴラス・ブラジル 太田校訪問
	10月20日	学生多文化フォーラム調査研究(学習支援班) 中間報告会兼準備会
	10月23日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小2・第2回)
	10月24日	第3回プレ・学生多文化フォーラム 学生ディスカッション「国際理解教育の問題点どうしたら解決できるの?」
	10月25日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小4・第2回) 三島市立東小学校児童(小6)来校、国際理解教育ボランティア活動を本学にて実施 学生多文化フォーラム調査研究(学習支援班) ムンド・デ・アレグリア訪問
	10月26日	川崎市立土橋小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小4・第3回) 第15回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	10月30日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小5・第2回) 川崎市立土橋小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小4・発表会)
	10月31日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小6・第2回) 第16回運営委員会
	11月1日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小1・第2回)
11月2日	新宿区立大久保小学校にて国際理解ボランティア活動(小5,6・第2回) 学生多文化フォーラム調査研究 プレセッション メールマガジン第16号配信	

2006 年	11月6日	第4回プレ・学生多文化フォーラム 山西優二氏講演会「国際理解教育のあり方を考える」
	11月7日	第5回プレ・学生多文化フォーラム 学生ディスカッション「外大生の国際理解教育のカタチ」 三島市立東小学校本学訪問記事掲載(朝日小学生新聞)
	11月9日	第16回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席 学生多文化フォーラム調査研究 プレセッション
	11月13日	多文化多言語劇プレビュー
	11月14日	第6回プレ・学生多文化フォーラム ワークショップ「国際理解教育実践現場から」
	11月17日	学生多文化フォーラム調査研究 プレリハーサル兼ミーティング
	11月21日	学生多文化フォーラム リハーサル
	11月22-26日	外語祭展示「ブラジル移民の歴史すごろく」(東外ネット Amigos)
	11月23日	オープンキャンパスで支援室活動紹介 外語祭にて多文化多言語劇「言葉をつなぐ指輪～共生って大変だよ～」上演
	11月27日	学生多文化フォーラム リハーサル
	11月18日	第17回運営委員会 プレ・学生多文化フォーラム特別編 キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ氏講演会 「“デカセギ”はこうしてやってくる～日系就労者支援事業最前線からの報告」
	11月29日	新宿区立大久保小学校訪問
	11月30日	府中市学習支援ボランティア 府中第九小学校訪問
	12月1日	学生多文化フォーラム プレ・講演会 キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ氏講演会「ブラジルに帰った子どもたちのその後」
	12月2日	学生多文化フォーラム
	12月4日	府中市学習支援ボランティア 府中第一中学校、府中第三中学校、府中第一小学校訪問
	12月6日	府中市学習支援ボランティア 府中第一中学校訪問
	12月7日	新宿区立大久保小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小5,6・第3回)
	12月8日	府中市立小柳小学校訪問 メールマガジン第17号配信
	12月12日	府中市立府中第七中学校にて国際理解教育ボランティア活動(中1・第2回)
	12月14日	新宿区立大久保小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小5,6・第4回)
	12月21日	新宿区立大久保小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小5,6・第5回) 第18回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	12月23日	支援室冬季閉室期間開始
	12月25日	第18回運営委員会 第19回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席

2007 年	1月9日	支援室開室
	1月15日	府中市学習支援ボランティア 府中第四中学校訪問
	1月22日	第20回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	1月23日	第19回運営委員会
	1月24日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小1,4・第3回)
	1月25日	留学生との交流会(うりぬり主催)
	1月26日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小3・第3回)
	1月29日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小2,5・第3回)
	1月30日	川崎市立東柿生小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小6・第3回)
	2月1日	第21回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	2月2日	府中国際交流サロン新規依頼児童及びその保護者との面談
	2月5日	狛江市立狛江第一小学校にて国際理解教育ボランティア活動の事前打ち合わせ
	2月6日	府中市立小柳小学校にて国際理解教育ボランティア活動の事前打ち合わせ
	2月15日	第22回国際理解教育研究会議(川崎市総合教育センター主催)出席
	2月19日	府中市学習支援ボランティア 担当者引き継ぎのため府中第四中学校訪問 支援室コーディネーター会議
	2月20日	狛江市立狛江第一小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小6・第1回)
	2月26日	府中市立小柳小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小3・第1回)
	2月27日	狛江市立狛江第一小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小6・第2回) 府中市学習支援ボランティア 小柳小学校訪問
	2月28日	第23回国際理解教育研究会議 川崎市総合教育センター研究報告会
	3月1日	府中市立小柳小学校にて国際理解教育ボランティア活動(小3・第2回)
	3月2日	連携プログラムについて府中市教育委員会との打ち合わせ
	3月4日	韓国の旧正月体験(うりぬり主催)
	3月6日	府中市学習支援ボランティア 府中第九小学校公開授業視察
	3月9日	アドバイザー会議 第20回運営委員会
	3月14日	第1回府中市学習支援意見交換会
	3月16日	連携プログラムについて川崎市総合教育センターとの打ち合わせ
	3月22日	第2回府中市学習支援意見交換会
	3月23日	在日ブラジル人児童向け教材 一般公開直前フォーラム(多言語・多文化教育研究センター)

多文化コミュニティ教育支援室 活動年表

ボランティア登録者数(2007年3月31日現在):381名(うち留学生65名)、卒業生34名

	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度
多文化 コミュニティ 教育支援室		9月 文部科学省平成16年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」採択 10月 多文化コミュニティ教育支援室開設 1月 「多文化コミュニティ支援室学生ボランティア」学内公募開始		◆4月 多言語・多文化教育研究センター設立
学習支援	5月 川崎市立殿町小学校にてボランティア活動開始(Amigos) 7月 川崎市立殿町小学校にて通知表翻訳開始(Amigos)	7月 川崎市立京町小学校にてボランティア活動開始(Amigos)		4月 小金井市で学習支援活動開始(小金井第一小学校) 5月 新宿区で学習支援活動開始(大久保小学校/Amigos) 11月 府中市教育委員会との協働・連携開始 (「東京外国語大学学生が「府中市立小中学校」に在籍する外国人児童・生徒への指導」に協力して行うボランティア活動に関する覚書」締結)
国際理解教育		2月 府中市で学習支援ボランティア活動開始(府中国際交流サロン) ※実践校:計2校	5月 川崎市総合教育センター主催の国際理解教育研究会議へ加入 6月 府中市で国際理解教育ボランティア活動開始(府中第七中学校、その後小柳小学校) 10月 川崎市立京町小学校児童保育「わくわく」で活動開始(Amigos) 10月 新宿区で国際理解教育ボランティア活動開始(大久保小学校) 12月 品川区で国際理解教育活動開始(社松小学校/うりぬり)	※実践校:7校 10月 三島市立東小学校の児童20名、修学旅行で本学を訪問。国際理解講座を実施。
教育・研修		1月 川崎市で国際理解教育ボランティア活動開始(川崎市立菅小学校) ※実践校:2校	(川崎市立東柿生小学校) (川崎市立菅中学校) 2月 狛江市で国際理解教育活動開始(狛江第一小学校) ※実践校:8校	(川崎市立土橋小学校) (川崎市立宮前平中学校) ※実践校:9校
調査・研究		1月～3月 府中市立小中学校における日本語指導が必要な外国人児童生徒への日本語指導に関する実態調査	9月26～30日 「2005年度夏季多言語多文化共生学講座—外国人児童生徒の学習支援ボランティア入門」開講 10月～2月 後期総合科目「多言語・多文化社会論講座」開講	9月25～29日 「2006年度夏季多言語多文化共生学講座—外国人児童生徒の学習支援ボランティア入門」開講 ◆Add-on Program「多言語・多文化社会」開講(多言語・多文化教育研究センター)
多文化共生 推進活動	4月 東京外大在日外国人交流ネットワーク～Amigos～結成 12月 二宮正人氏講演会(Amigos主催)	9月 群馬県大泉町 日系ブラジル青少年フェスティバル参加(第3回)(Amigos) 10月 手塚和彰氏講演会 12月 静岡県大東町・東京外国語大学共催「日本・ブラジル交流のつどい」開催 1月 小貫大輔氏講演会	4月 山本重幸氏講演会 4月 スタディ・ツアー「多文化のまち—大久保・百人町を歩く—」 4月 湯本浩之氏講演会 4月～12月 TUFFS地域にほんご教室開講 9月 群馬県大泉町 日系ブラジル青少年フェスティバル参加(第4回)(Amigos) 10月 中萩エルザ氏講演会 10月～11月 調布市市内・近隣大学等公開講座「多言語・多文化共生と私たち」 11月 韓国人留学生ボランティア・グループ「うりぬり」結成 12月 韓国文化理解講座	10月～11月 プレ・学生多文化フォーラム 学生ディスカッション 佐藤郡衛氏講演会 山西優二氏講演会 ワークショップ 12月 学生多文化フォーラム ◆在日外国人児童のための教材開発(三井物産/多言語・多文化教育研究センター)
				4月 スタディ・ツアー「多文化のまち—大久保・百人町を歩く—」 6月 フェスタ・ジュニーナ(横浜市立潮田小学校/Amigos) 9月 群馬県大泉町 日系ブラジル青少年フェスティバル参加(第5回)(Amigos) 9月 日本通訳学会 第7回年次大会発表(Amigos) 11月 外語祭で多文化多言語劇「言葉をつなぐ指輪～共生って大変だよ～」上演 11・12月 キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ氏講演会

第Ⅱ部

平成 18 年度の活動推進事業

1. 学生ボランティア支援活動

1-1 学習支援活動

(1) 新宿区立大久保小学校

報告者: 保坂 楽冬(外国語学部ポルトガル語専攻 3年)

活動内容

東京都新宿区立大久保小学校に週 2 回メンバーが訪問し授業に参加した。初めて学校に伺った時に、大久保小学校の児童のうち 60%がなにかしら外国との接点を持った児童だという話を国際理解教育専門の善元先生から伺い驚いた。教室にも中国や韓国籍の児童が多く、子どもたちは異文化交流には慣れていようだった。

指導対象の児童は 1 年生のブラジル人児童で、最初は日本語がわからなかったため、授業中は彼の隣でポルトガル語の会話をすることから始めた。2 学期からは学校にも慣れ、ひとりで授業を受けられるくらいにまで日本語能力も上達したため、担任の先生のサポートとしてクラス全体を見て、必要な時にポルトガル語のサポートをするような形で授業に参加した。

児童の成長の様子

- ・ 私達が話し相手になっている時は落ち着いて授業にも参加していた。
- ・ 日本語がわからないなりに授業に参加しようという意欲が見られた。夏休み明けに会った時には普通の生活に支障がないほど日本語が上達していてこちらが驚かされた。
- ・ 最近は友達も増え、学校が楽しいと感じられるようになったようだ。

活動を通しての感想

- ・ 毎週会うたびに日本語がうまくなっており、子どもの適応能力に驚かされた。
- ・ 支援の対象の児童ばかり見ていると、周りの子が「どう

してあの子だけずっと先生が付いているの？」と気にしてしまうので、生徒と接するバランスにも注意しなければならない。

- ・ 授業に参加していると、子どもを論さなければならぬ場面に遭遇することもあるが、私達は教育の専門家ではないため、どのように対処すればよいかと悩む場面もあった。
- ・ ポルトガル語の能力を活かして自分に何かできることはないかと考え、始めた活動であったが、自分自身もよい経験になったと思う。一見地味に見える草の根の活動の積み重ねこそが重要であることを気づかせてくれる活動であった。

(2) 府中市学習支援ボランティア

報告者: 小島 和美(外国語学部ヒンディー語専攻 3年)

学習者

学年: 小学 2 年 母語: タガログ語

学習状況

会話: 文レベルで日本語会話はまだできない。単語レベルでは筆記用具の名前や毎日授業でよく使う単語を覚えており、それらの単語を用いて他の生徒と意思疎通を図っている。

文字: 平仮名を読むことはできる。しかし書くときには、「あ、い、う、え、お、か、き、く、け、こ、・・・」というように順に数えていかなければ思い出せない文字が多々ある。漢字は自分の名前以外習得していない。

教材名: 小学校の教科書

感想

授業に集中しない、繰り返し練習しても覚えない、総合的な力が不足しているようだ、…。生徒について書かれた書類にはそのように書かれていた。日本人でも授業中に立ち歩いたり、集中できない子どもはいるが、同じようなかんじなのだろうか。とにかくできることをやってみよう！と前向きな考えでボランティアに取り組むことにした。私が小学校へ通い始めた1月には、その生徒は以前と比べて授業態度が大幅に改善されたようで、授業中に立ち歩くことはほとんどなかった。しかし授業に集中せず他のことで遊んだり、嫌なことがあると顔を机に伏せて言うことを聞かなくなることは今なお、よくあることだ。しかし私はこの態度を、「授業態度が悪い」と片付けることはできないと思う。その生徒は日本語で会話できないため、彼の意見を聞くとときや何かを説明するときはほとんど英語で会話している。英語で会話していると、授業中の態度からは想像できない彼の豊かな思考が伺える。そこで、私は日本語を理解できないゆえに彼の授業態度は悪くなってしまっているのではないかと思った。他の外国人児童は静かに授業を受けているので、実際彼だけどこか特別なかもしれない。しかし私は自分自身、理解できない言語で授業を受けることになった場合、今の彼のような態度になる可能性を全面的には否定できない。わからない言語環境におかれることが、どれほど大変か。そのことを考えると、彼は彼なりに頑張っているのではないだろうか。今後、彼が生活しやすい環境をできる限り提供していこうと思う。

課題

- ・ 平仮名を、迷うことなく書けるようにする
- ・ 算数の授業についていく
- ・ 日本語の発言を増やす

報告者: 董 麗雲(外国語学部日本語専攻3年)

学習者

学年: 中学3年 母語: 中国語

学習の現状

まず、会話レベルについて: 日本に来て1年がたち、日本語の習得レベルは普通の日常会話で聞き取りならばほぼ問題なく、ただ答えることに対してはちゃんと最後までは言えずまだ練習が足りないという感じである。また、普段あまり使われていない言葉がかけられると意味が分からなくなることがある。(高校の入試面接の練習の時に、先生の質問に対して聞き取れないことがある)ただし、文章を読む時に、とてもスムーズに読むことができる。学力がかなり高いと思われる。

書くレベルについて: 全体としてまだ語彙が足りない。漢字の書き読みがまだ分からない時が多い。

→全体を見て、日本語は中級レベルである。(日本語能力検定試験3級から2級の間)

使っている教科書は『標準日本語・中級』、『上級漢字』である。

感想

初めて日本語学習支援のボランティアを行い、戸惑うところはかなり多かった。まず、教え方、どういうふうにすれば相手の日本語レベルを高めることができるのかが分からない。そんな中に、自分が昔の日本語学習の経験ややり方と同様に、相手に教えた。一番頭を悩ませたのは助詞などの文法を説明することが詳しく明瞭にできなかったことである。

また、教えていた文法などについて普段があまり使う機会がなくて、なかなか活用できなかったところもあった。先週教えたことが次の週に小テストを行うところ、単語などは大体覚えているが、文法を使って文を作るのが相対的に弱い。(それは、全体の語彙が足りないという原因も含む)

そして、特に気になったのは漢字の読み書きがまだ弱いところである。それに対して、過去自分が通っていた日本語学校で使われていた『上級漢字』を使って、漢字の読み書きを強めることにした。

課題

今後の課題として、大事なのはまず会話レベルのアップであると思う。今回はおもにこちらが一方向的に話して、きち

んと向こうから話してもらおうことができなかつたことがとても残念に思った。これからだんだん日本語のレベルが上がるにつれ、時々小テーマについて話してもらおうのいいのではないかと思う。そして、一方的に話すのではなく、向こうの意見も話してもらったり、日本語の話す能力をアップしたいと思う。

また、普段の会話ではあまり使わない文法について、作文などを通して覚えてもらう方法も考えていた。(学校でもしていることだと思うが)教科書以外の読み物も少しずつ広く読んでもらえればと思う。

そして、もうひとつ大切なのは漢字の読み書きの勉強である。同じ漢字圏として漢字の勉強は他の国の人より勉強しやすい利点もある一方、漢字の意味が分かっている、きちんと書ける、そして読み方が分かることがまだまだ一番力を入れてもらいたいと思う。

報告者:垣平 浩明(外国語学部アラビア語専攻 4年)

学習者

学年:小学1年 母語:アラビア語

学習の現状

簡単な単語や生活に必要な表現は知っているようだが、まだまだ日本語のレベルは高くない。

ただ当初の問題であった心の問題は心配ないと思う。アラビア語が多いのではあるが積極的に話してくれるようになった。

他の児童と同じ国語の教科書を使っていたこともあるが、最近では会話を中心に行っている。

活動の課題

最近、初めにアラビア語で友達になろうとしたのが間違っていたかもしれないと思うようになってきた。

すでに活動を始めてから3ヶ月になるのだが未だにアラビア語の割合が多い。

友達との間では単語だけで喋ることが多く、アラビア語の特性のせいもあるのかもしれないが文になると助詞や助動詞が抜けることが多いのが気になる。

そもそも体系的に日本語を勉強していないので自分で文を作るとなると難しいのかもしれない。

また、まだ1年生であり単語を知っていても文法を学んだことがあるわけではないので、動詞や形容詞の場合形が変化すると別の知らない単語であると認識することがある。

一番頭が痛いのはアラビア語では自分からいろんな話をしてくれるのに日本語だと一言ずつでしか話してくれないことだ。

今後は私の日本語の割合をさらに増やし、発話できなくとも彼女の日本語のリスニング能力を上げていきたいと思う。

そうしなければ彼女はいずれ日本の小学校の勉強についていけなくなるのではないかと心配でならない。

報告者:山田 洋平(外国語学部モンゴル語専攻 4年)

学習者

学年:中学1年 母語:中国語

学習の現状

学習は学校の放課後週2~3回、日本語の授業を行うという形を取っている。適宜授業の宿題など学習支援も行っている。教科書は前任の先生指定の『中日交流標準日本語中級』(人民教育出版社)。

生徒の日本語習得レベルは日常会話にはあまり困らず、授業内容もだいぶ理解している模様。授業内容よりもむしろ中学生同士で使用する俗語に関する質問の方が多くなってきた。「冗談やおちよくなるようなことも言うようになった」と言う(担任談)。日本語教科書の長文も良く読めており、部分的な語彙(例えば文化語彙)の拡充が中心。現在の課題は筆記。作文で間違いを減らすにはもう少し時間が必要であろう。

活動を通しての感想、課題等

自分では当たり前と思っていた言語現象や文化が否定されるとき、日本語教育というものに非常に大きなやりがいを感じる。改めて日本語や日本文化に向き合う機会を与

えてくれるという面でも非常に楽しい。また従来の言語教育で粗末に扱われてきた俗語の問題など考えなくてはならない問題が山積していそうなことにも気付いた。彼の日本語のレベルはかなり向上しているため、教科書に載っているやや古い語彙や堅めの言い回しなども勿論無駄なものではない。しかしながら「中学生がその学校生活などにおいて必要とする語」というものの重要性はそれを大きく上回るものである。こうした点を含め、今後も精力的に取り組んでいけたらと思う。

報告者: 李 冬梅(外国語学部日本語専攻3年)

学習者

学年: 中学1年 母語: 福州語(中国福建省出身で北京語ができる)

学習の現状

1. 教材に関して

日本に来て1年経ち、半年ぐらい府中市から派遣された日本語教師の元で日本語学習補導を受けたが、1からの学習のようで、基礎が弱いと思われる。使っている教材は現在3冊—学校の「国語」テキスト、支援室から「日本語スーパーキット2」、後「中学生の文法教室」である。

1) 国語テキストを使って:

国語テキストを使う狙いとしてはクラスの学習進度と今後進学などを考え、1日も早く国語文章の仕組みになれ、「予習」、「自習」、「復習」の習慣を身に着けることである。また、文章を読みながら頻繁に使いそうな単語、簡単な文型を拾って説明してあげる。初印象でひらかな・カタカナ読みに問題がないと感じていたが、実際国語テキストの本文を読ませるとまだそれほど読みが定着してないことが分かった。彼女が出来る範囲内で本文の読み、意味を辞書で調べてきてもらい、それを声を出して読むことで意味理解だけでなく、ひらかな・カタカナの発音も確認していく。

2) 「日本語スーパーキット2」を使って

国語テキストの本文が1つ終わった所で、スーパーキットを使い基礎文法学習をする。最初、動詞の種類(五段・1

段・カ変・サ変動詞)と活用(ます形、タ形、テ形、ナイ否定形)の大体の体系と特徴を説明していく。その間にゲームを入れたり面白い話をしたり、ワンクッションを入れるように気をつける。全体の説明が終わったら、次は知識点を1個ずつ学習していく。私が探してきた単語だけではなく、彼女にもそれぞれ動詞を探して、活用してきてもらう以外に、スーパーキットの活用カードを使い繰り返し練習をする。また、毎回スーパーキットから相応の練習問題を配り宿題としてやってきてもらい、それをチェックしながら知識点を確認する。練習、確認、説明を繰り返し、「動詞」をしっかりと認識させる。同じ方法で形容詞なども学習するつもりである。

3) 「中学生の文法教室」を使って

国語の先生から文法学習の参考にできればと渡していただいた本である。内容を分かりやすくまとめていて、スーパーキットの練習問題の盲点を補うのにちょうどいいと思い、途中から使用している。スーパーキットの練習問題は1つの知識点に対して集中練習問題であって、問題は少し違いがあるものの実際は理解できてなくても「マネ」することでできてしまう傾向がある。確認して、間違った所を整理するようにしているが、やはり理解できているかは分からないことが多い。そこで、文法教室をつかって、今までの学習をまとめつつ違う応用をさせて理解度を確認することができる。

2. 学習レベル

彼女の日本語は日常会話でも、学習言語でもとても不安定である。これは難しいだろうと思うところは簡単にできたり、これは知っているだろうと思う所ができなかったりする。基礎からしっかりと学習が必要ということで、強いて言うと初級である。

感想・課題

活動しながら、彼女は内気で自分から積極的に何かを行くタイプではないというのは誤解だと分かった。実際本人の話を聞くとクラス内での活動にも積極的に参加しているし、クラスメートとは旨く話せないがコミュニケーションを取ろうという姿勢が見える。ただ、まだ現在日本語を自由に使えないことから自信が足りなく、ちょっと躊躇してしまう

ようである。陽気で頑張り屋であることに安心した。本人が発表に向かって書いていた原稿には「日本で暮らしている、特に学校生活を1年経った今慣れはじめています」、「日本語をわかり、話せるようになっていく」、「友達がいっぱい教えてくれた」などの表現があった。(注:発表テーマを途中で変更してしまった)自信がついてきているようなので、周りのサポートが大事だと思った。

自分の活動が終わるまでやれるところは焦らず、じっくりと教えて行きたいと思う。課題としては彼女の日本語能力をもっと伸ばすことはもちろん、学校の先生と彼女が直接に、遠慮なくやりとりできるようになればいいと思う。

報告者: 潤間 拓郎(外国語学部フィリピン語専攻3年)

学習者

学年: 中学1年 母語: セブアノ語(フィリピンの1地方語)

学習状況

私が学習支援している科目は、英語、国語、数学です。英語の理解は全く問題なく出来ているが、英文を日本語に訳すことや、日本語の指示にまだついていけない。国語は、別教室で学校の教科書を使って、指導している。それ以外に特別な教材は使わないが、教科書の文章を声に出して読み進めて、意味のわからない言葉や漢字が出てくると説明をするようにしている。

日本語レベルは、ひらがなは一通り覚えているので、読むことは出来ても、発音どおりに書くことが出来ない。漢字はまだ読めないものが多いので、よみ仮名を本人に書いてもらいながら、字を確認している。本人に声を出してもらうことを心がけて、同じところでつまづかないようになったと思う。数学も別教室での指導となっている。計算は問題なく出来るが、図形の問題、特に作図の問題では問題の内容がわからないため、何をしたいのかかわからないときがある。

感想

日本語に限らず、言葉を教えることは繰り返し練習をすることに尽きると思うが、やはり、声に出して読むことは効

果があると思う。同じ漢字でつまづかないようになり、ぎこちなくとも読むことができるようになっていく。ただ、日本語で文章を書くことが学校以外の場所で少ないように思う。ひらがなでも書き間違えてしまうことがなかなか直らないのは、学校を離れた時に、実際に書いて使ってみる機会が少ないことに原因があるのでは? 家庭などでも日本語を書く機会をもつことを意識してもらえば、指導の効果は更に上がると思う。また、宿題や提出物については、指導することができなかった。一人になるとわからないもの、出来ないものがどうしても出てきてしまう。それらは、成績や内申点にも関係すると思うので、宿題なども含めた指導が必要になるのかもしれないと感じることがあった。一言アドバイスやヒントがあれば、できるものもあると思う。

指導中集中力が欠けるときがあり、やはり、難しいというのが正直なところなんだろう。特に、別教室になると雑談をしてくるが、やはり、普段なかなか上手に喋れないからなのか、などと思いながら、それにも乗りつつ、勉強を無理に押し付けるのではなく、メリハリをつけながら進めることが大切だと思った。

(3) 府中国際交流サロン

1) 学習指導計画

報告者: 上武 布美(外国語学部朝鮮語専攻2年)

学習者

学年: 中学2年 母語: 韓国語

指導内容

主に学校の英語や国語・数学の予習や復習をしている。試験前になると試験勉強を一緒にやる。英語を教えるときはなるべく本人に読んで訳してもらい最後に英作文をやってもらう。国語の時は教科書を音読してもらい、漢字の読み方や書き方を教えている。

現状

明るく誰に対しても気を配っていて、新しいことを習うことに楽しみを感じているが、時に集中力がきれて、勉強をしないで遊んでしまうときがある。

目標

面談時にご両親から言われたように、より成績向上のためにこちらから課題を出したり、やる気を出させたりするよう努力していきたい。またそれと共に勉強だけでなく、このサロンが生徒にとっての憩いの場としての役割を果たせるよう努力していきたいと思う。

報告者: 出町 仁美(外国語学部朝鮮語専攻 2年)

学習者

学年: 中学 1 年 母語: 中国語

指導内容

中学 1 年生の国語の教科書を用いて読みの練習、単語の確認。

漢字ドリル(現在は小学校 5 年生のもの)

作文

現状

< 良い点 >

教科書を音読するのが早くなった。また漢字の練習に苦手意識が少なく、覚えも良い。

< 課題 >

自分の伝えたいことを言葉で表現することが苦手なよう。また作文をすると、話している通りに書くので表記の違い、文法の違いが見られる。

今後の目標

これまで通り、国語の教科書を用いての読みの練習内容の確認は毎時間進めていく。また作文と漢字ドリルを 1 週間ごとに交代で行う。保護者との面談の結果、外であまり話さないこと、家で勉強している時に漢字の違いが見られることを気にしていた。この点を作文を通して改善

することが今後の目標だ。具体的には、作文を書く前に内容に関していろいろ質問をすることで、自分のやったこと・感じたことなどを説明する練習にしよう。また漢字や文法・表記の違いの確認はそのつど行う。

報告者: 小島 和美(外国語学部ヒンディー語専攻 3年)

学習者

学年: 中学 2 年 母語: 英語・中国語

資格: 日本語能力試験 2 級

指導内容

学校の宿題

- ・ 国語: 漢詩・俳句の暗記
- ・ 社会: 職業体験の報告をまとめる

現状

< 良い点 >

何事にも積極的で真面目に取り組む姿勢。俳句や漢詩を覚える宿題が出たとき、私たち日本人にとっても難しい文章を、不満を漏らすことなく積極的に覚えようとしていた。

< 課題 >

語彙不足。彼女の日本語力には 1 見問題がないようにみえるが、しばしば会話中で日本語の単語が見つからなかったり、私の発した単語の意味を理解できないことがある。

今後の目標

- ・ 難しい意味の単語を覚え、日本語の語彙を増やす
- ・ 日本語能力試験 1 級に向けて問題集を解き、日本語力をさらに高める

報告者: 山田 寛子(外国語学部フランス語専攻 4年)

学習者

学年: 小学 6 年 母語: 韓国語

日本語力: 流暢に話すことができ、語彙力もある。書かれた文章を読み取る力がある。

指導内容

- ・ 自宅で解いてきた問題集(国語・算数)の疑問点を解説する。
- ・ 学校のテスト(国語・算数・社会・理科)で間違えた問題の解説をする。
- ・ 短い作文を書く練習をする。

現状

<良い点>

- ・ 国語の読解力が優れている。
- ・ 算数では基本を理解し、応用問題に生かすことができる。
- ・ 常体と敬体の違い、句読点の打ち方など、文章を書くときの基本がわかる。

<課題>

- ・ 国語で、漢字表記すべきところを平仮名で書いてしまうことがある。
- ・ ことわざや慣用句に慣れていない。
- ・ 算数で途中過程を残さず答えだけ書いてしまう。

今後の目標

来年中学生になるので、その準備をすることが目標である。ご両親からは、親の自分たちが答えられないことわざや、俳句など日本独自のことを解説して欲しいと要望があった。実際、中学に入ると古典や歴史で難しい単語や、なじみのない習慣が教科書に出てくる。それに拒否反応をおこさないように、今のうちから日本の古い習慣について親しみを持てるようにしたい。また、現在先取り学習として、数学に手をつけているが、数学に出てくる用語にも慣れるとよい。作文は引き続き、時間を見つけて行いたい。

報告者:黒野 美香(外国語学部日本語専攻4年)

学習者

学年:中学2年 母語:英語

日本語力:日常会話には全く問題は見られない。ただ、語彙力が不足しており、そのことが国語以外(理科・社会や

数学の文章問題等)の学習に支障をきたしている。漢字は、小学校高学年レベルになると読み書きできないものがある。

指導内容

これまでは、作文を中心に指導を行ってきた。毎日の日記添削に加え、毎週テーマに沿って400字程度の作文を書いてきてもらい、それを添削したり、よりよい文に書き直したりした。

現状

<良い点>

- ・ 日本語の学習に積極的である。特に、漢字の学習にとっても熱心である。
- ・ 社交的な性格のため、日本語を聞いたり使用したりする機会が多い。

<課題>

- ・ 時々話に夢中になりすぎてしまう。
- ・ 日本語を書くことや辞書をひくことをめんどくさがる。

今後の目標

大分日本語の読み書きはできるようになったが、やはり教科書の学習は難しいようである。中でも社会は「教科書に書かれている内容が理解できない。用語集の説明も理解できない。」という状況なので、これからはそのサポートを中心に活動を行っていく予定である。

報告者:柴本 智代(外国語学部カンボジア語専攻1年)

学習者

学年:中学2年 母語:中国語

日本語力:会話は問題なく出来るが、社会科科目など授業内容の理解が難しい。

指導内容

主に数学・英語・歴史・国語・理科の授業の復習や、授

業でわからなかった所の説明などを行った。特に歴史・理科については、教科書に書いてある文章の理解が難しく、ひとつひとつの語句を理解できるよう説明を行った。国語については、古文の暗唱テストのために、一緒に暗唱を頑張っていた。最初は覚えられなかったが、繰り返し頑張っていくうちに全部覚えることが出来た。また、教科書の本文にある漢字の読みの確認をした。

現状

学習に対してとても意欲があり、来年は中学3年生になり受験もあるので、この頑張りを続けていって欲しいと思う。英語に関してはとても発音がきれいである。また、問題点としては、歴史・理科の授業内容の理解がある。教科書の内容や、歴史などの専門用語の理解が難しい。

今後の目標

今後は、歴史科目の授業内容を理解することを目標とする。教科書の内容についての丁寧な説明、解説を必ず行っていく。歴史については、単に用語を暗記するのではなく、歴史の流れを理解することが出来るようにする。また、理科については、“電圧”や“抵抗”、“電流”といった専門用語をしっかり理解できるように指導を行う。

2) 学習支援報告と感想

報告者:上武 布美(外国語学部朝鮮語専攻2年)

学習者

学年: 中学2年 母語: 韓国語

報告

私が担当する韓国人の生徒は日本語を話したり書いたりすることに問題はなかったため、主に中学校の勉強の復習と予習をしました。英語に関しては教科書を音読したり、文書に出てきた単語をテストしたり、習った文法を使って英作文をしました。国語に関しては教科書を音読したり、漢字を練習したり、作文を書いてもらいました。音読に関してはさほど問題がなかったのですが、漢字の読みや書くこ

とは苦手でした。しかし同じ部屋にいる友達に教えてもらったり、逆に自分が教えたりすることで覚えていきました。社会科に関しては歴史の教科書を読んだり、問題集を解いたりしました。私が気になったのは歴史で出てくる漢字の読み方ができないということでした。例えば「御触書」を「ごふれかき」とよんだり「生類憐みの令」を「せいるいあわれみのれい」と読んでしまったりすることが多々あったのでその都度おしえていきました。ただやはり韓国の歴史には詳しくて、私は驚嘆しました。1年間を通して勉強面でもそれ以外の面でも成長していくのが実感できました。

感想

去年の5月ごろからこの府中サロンの活動を始めて、最初は自分が支援できるのだろうかと思い、活動をしていても本当に生徒のためになっているのかと不安になることが多かったです。特に私が担当していた子は日本語能力には問題が無かったため、私はなぜ日本語が話せるのにこのサロンに来るのだろうか疑問に思っていました。しかし時間が経って、何で話し合える関係になると、彼女がこのサロンに求めているものが分かってきた気がしました。韓国は勉強熱心な国として知られているように、彼女の両親はとても勉強熱心な方であるため、彼女は友達と遊びに行くことが許されていなかったのです。私がお母さんと面談した時もその熱心さは伝わってきました。その重荷から少しでも解放されるのが府中サロンという場だったのではないかと思います。私はそのことに気付いてから、前よりも勉強の支援に重点を置くのではなく、彼女の話を聞いたり、好きなことを一緒に共感したり、悩みを聞いたりすることに重点を置くようにしました。学習支援とは必ずしも日本語や勉強を教えるだけではなく、生徒にとって安心できる場を作っていくことでもあるのだと、1年を通じてわたしは思いました。

報告者:出町 仁美(外国語学部朝鮮語専攻2年)

学習者

学年: 中学2年 母語: 中国語

報告

国語の教科書のサポート、漢字練習を中心に行っている。最近、最初の頃に比べて教科書を読むスピードが早くなり、語彙力も増えてきたようだ。また知らない単語も見当をつけて読むということができるようになってきた。漢字は、中国式の書き方をしてしまうこともあるが、ほぼ問題はない。書く練習というより、漢字ドリルをやりながら書ける語彙を増やせばいいのではないかと。作文と漢字ドリルを交互に行うというのはあまりうまくできていない状態だ。教科書のみで時間が過ぎてしまうという時もあるが、こちらが作文の題材を提供できていないという問題点もあると思う。書くことに苦手意識は持っているが、ある程度は書くことができるので、もっと書く機会を提供できれば慣れるのではないかと思う。お正月明けに少し日本のお正月を紹介したら興味を示してくれた。そのためそれ以降、何回か日本のお正月に関連するものを写真を用いて説明し、同じように中国の旧正月についても質問して少し話してもらった。会話に関しても、最初に比べ質問したことに関して話す量が増えた。日常会話については問題なく、説明をする時に単語が出てこないこともあるようなので、そのつど語彙を教えればより多く話せるようになるのではないかと。

感想

今年度からこのサロンの活動に関わり始め、探りながらやっている状態だった。きちんとできているか常に不安になってしまいがちだが、ミーティングの時にメンバーとサロンについて話し合ったり、伊東先生にアドバイスを頂いたりしたことが支えになったと思う。慣れない中でいろんな人から話を聞けるということは大きかった。この活動をやって一番嬉しいのは、やはり生徒に変化が見られた時だった。最初に比べて話す量が増えたことや知っている単語が増えたという小さな変化でも、それがあつてやりがいを感じることができる。またサロン自体が、メンバーとの親睦会や一時期行っていた休憩時間のおかげで、最初に比べ居心地のいい空間になった気がする。また生徒同士もよく話していて雰囲気がいいようだ。府中サロンの活動を1年間行ってみて、このサロンの雰囲気を多くの人に体験してもらいたいというのが今感じていることだ。

報告者:原田星来(外国語学部トルコ語専攻1年)

<前期>

学習者

学年:小学6年 母語:中国語、マレー語

感想

初めて府中サロンで担当児童と接したときの感想は「こんなに日本語が上手な子に何を教えればよいのだろう」というものだった。もともと両親は日本人で、家庭では日本語を使用していた彼女はボランティアや他のサロンの児童と話すときにもまったく不自由を感じていない。しかし学校の勉強となるとやはり話は別なようだった。国語に関しては、毎日の出来事を日記に書いてもらうこと、毎回ひとつの話題について作文を仕上げ、それらを添削することが主な活動だった。また漢字には非常に興味を持っているのでレベルにあった漢字ドリルと一緒に学習をしていった。特に難しいと感じたのはオノマトペを使用する作文課題で、英語ではどのように言うのかなどを話題にしながら教えていった。彼女の場合は家庭内で日本語を使用しているため比較的教えやすかったのではないかと思うが、外国人児童の場合はより難しいのではないかと思う。前期の後半は保護者との面談時に特に社会科を教えてほしいと頼まれたので、国語は日記の添削だけにし、社会科の試験問題を一緒に見直したり、「時代」の概念や、日本人ならば誰でも知っている歴史上の人物、たとえば「聖徳太子」などを教えていった。試験問題の文章にはすべて学校の教師によって振り仮名が振ってあり、試験時は日本人の生徒とは別の教室で指導助手の先生に日本語の意味を聞きながら試験を受けたということだったが、やはり、日本語を読むことには不自由せずとも理解するのは難しいという。また、ただのひらがなの羅列よりは漢字で部首などから意味を想像したほうがわかりやすい場合もあると言っていたため、すべての漢字に振り仮名を打つよりは、語句の1つ1つを丁寧に説明したほうがいいのではないかと感じた。

受験を控えて、教科指導と日本語指導を同時にするのは難しい面もあったが、楽しみながら勉強できる場を作っ

てあげられるかどうかをいつも気にかけてサロンに行っていた。彼女を担当したのは前期のみだったが、日本語指導について彼女や他のサロンのボランティアの方から多くのことを教えていただいた。

<後期>

学習者

学年:小学6年 母語:中国語、マレー語

感想

後期から正式に担当することになったが、夏期休暇以前からサポートメンバーとして担当したことがあるため、特に問題もなくすぐに仲良くなった。彼女は3年前に日本に来て以来小学校で日本語を学び、日常会話にはまったく不自由しない。そのため基本は教科指導だが、教科指導についても「外国人児童だから」「日本語ネイティブではないから」という理由で勉強がわからないというわけではなく、日本人の同年代の児童と授業の理解度に差はないように思う。

普段の学習内容は、学校の宿題をサロンに持参してもらい、わからない部分を教えたり一緒に問題を問いたりすることである。出身国であるマレーシアの学校の方が厳しく「日本はとても楽!」といつも言っている。日本の学校を厳しいと感じるか緩いと感じるかは、児童の出身国の学校事情によってまったく異なるものだと感じた。彼女は中国語も話せるので漢字にも抵抗はなく、むしろ日本の小学生レベルの漢字は簡単すぎて飽きてしまうようだ。

教科指導では算数や国語、社会科が多いが、特に算数は苦手なようである。わたしも苦手なので、2人で他のボランティアの先生に聞きに行きながら解いている。しかしわからないとはいってもやはりその理由は彼女が外国人児童だからというわけではないと思う。

また、教科以外の総合科目で発表の内容を考えたり新聞を書く宿題をサポートすることもある。まだ小学生で受験の予定もないため「教える」というよりは「一緒に活動する」という雰囲気毎回サロンに行くのが楽しかった。大学生と小学生が交流する場はそうあるものではないが、国際交

流サロンはこれができる貴重な場所である。わたしも府中サロンで活動した1年間を通して児童たちと接して多くのものを学べたと思う。

報告者:山田寛子(外国語学部フランス語専攻4年)

学習者

学年:小学6年 母語:韓国語

感想

担当した児童は、日本語を流暢に話すことができ、教科を学ぶ際に用いる日本語にも問題はないように感じた。しかし、児童や保護者との三者面談を行ってみて、いくつか問題があることがわかった。まず児童や保護者には、出身国である韓国より宿題が少ないことに対する不安があった。また、児童が知らないことわざや慣用句に出会ったとき、日本人の親であればすぐに答えられるのに、親として教えてあげられないことにハンディを感じるなど、保護者が抱える不安も感じられた。

そこで、指導内容として、児童が学校の宿題とは別に解いてくる国語の読解ドリルを解説することを続けた。このことで、家庭で取り組む課題が増え、問題を解けなかに生じた疑問は金曜のサロンの時間に解説するので、保護者が抱える不安にも対応できたように思う。

国語ドリルの解説を続けるうちに、児童は読解力がすぐれているものの、それを文章であらわす力が少し弱く感じるようになった。そこで、月に2回ほど、指導を始める前に短い作文を書かせることにした。児童は作文に苦手意識があり、「作文は嫌いだ」と言っていたため、テーマはその日学校であった出来事、旅行の計画、将来の夢、習い事の発表会の見所など興味の内容を選んだ。また、雑談しながら話を引き出し、その後に書かせることで、児童が取り組みやすいようにした。

その際、漢字を知っているのに平仮名で書いてしまう、文章中に「習ってる」や「してる」など話し言葉で書いてしまうなど、問題は都度生じたが、そのたびに注意して漢字に慣れさせたり、話し言葉と書き言葉が違うことを説明したりした。今後は、児童がいかにそれを思い出しながら文

章が書けるかである。

国語ドリルの解説は、ほぼ問題なく進んだ。ただ、児童は俳句や短歌に苦手意識があったので、その單元だけはじっくり取り組んだ。そして季語や歌が読まれた当時の習慣には無知であったため、あせらず予備知識を教えることから始めた。俳句や短歌に詠まれる題材には、日本の古くからの習慣に根付くものがあるため、説明が難しかった。この問題は児童が中学に入学して古典を習う際に出会う難しさかもしれない。それを克服していくのが課題になるだろう。

私は1年間同じ児童を担当してきた。その中で、信頼関係が築けたと感じる。児童は毎回、学校での楽しかった出来事、愚痴など良いことも悪いことも話してくれた。私についても大学の話や出身地の話、恋愛の話に至るまで、何でも知りたがった。そのため、毎回雑談の時間をもち、いろんな話をした。これは、信頼してくれたからこそできたのだと思う。もちろん、指導と直接の関わりはない。しかし、何でも話せるくらいに親しくなれたことを、私は嬉しく思う。

府中サロンに来る児童・生徒たちの目的は様々である。日本語に不安を感じる生徒もいれば、学校の宿題を教わりに来る児童もいる。それぞれの望むものを知り、各々にあった指導をするためには、やはり話をすることが大切だとも思う。なにげない会話をするなかで、ニーズをさぐることができると思う。また、私達大学生は、学校の教師達より年齢も近く、児童・生徒のお兄さん、お姉さんのような存在になれる。彼らの話をよく聞くことで彼らに向かい合い、教か指導や日本語指導だけでなく、学校生活の悩みにも対応できると思う。それは、週に1度、1対1で向き合う時間が持てる、府中サロンならではの良さだと思う。

報告者:柴本 智代(外国語学部カンボジア語専攻1年)

学習者

学年:中学2年 母語:中国語

日本語力:会話は問題なく出来るが、社会科科目など授業内容の理解が難しい。

感想

7月から府中サロンの活動に参加しました。すごく興味があって参加したのですが、最初は不安だらけでした。どうやって教えたらいいいのか、この教え方で合っているのか、など、本当にたくさんの不安がありました。1年たった今も、学習支援という点では、私はまだまだ未熟で、至らない所や反省点、改善点が多々あります。1年を通して得た様々な経験を来年度に生かし、また、自分自身たくさん勉強したり本を読んだりして知識を増やし、よりよい学習支援を行っていきたいです。また、やっていく中で、だんだん生徒との信頼関係を築くことができ、勉強を教える、ということだけではなく、学校のこと、好きなことなど、お互いいろんなことを話すことが出来ました。このことは私にとってとても嬉しいことでした。生徒が、「先生とたくさん話しをすることができてよかったです」という感想を言ってくれたときは、本当に本当に嬉しかったです。活動を通して、勉強を教えるだけではなく、生徒からたくさんのことを教わり、私自身がすごく成長することが出来たと思います。みんなが笑顔で頑張っているところを見て、私自身もパワーや元気をたくさんもらいました。普段の学習支援活動だけでなく、クリスマスやハロウィーンのときにみんなでお菓子を食べたり、いろんな話をしたことがとても心に残っています。本などで、外国から来た子どもたちの抱える問題などを知ることができますが、府中サロンで子どもたちと接し、彼らの抱える問題というのがすごく身近に感じます。だからこそ、自分にできることは何なのかと考えたり、責任の大きさも感じます。これから、学習支援の教え方や、子どもたちをとりまく環境や問題について、もっと多くのことを学ぼうと思います。右も左もわからない手探り状態から始めたこの活動ですが、1年を終えた今、この活動に参加することが出来て本当によかった、と思います。一緒に活動をしていた学生の方々、そして、いつも元気で笑顔の子ども達、本当にありがとうございました。来年度もがんばります!!!

1-2. 国際理解教育

(1)川崎市立東柿生小学校

1) 概要

報告者:門脇 弘典(外国語学部フランス語専攻3年)

東柿生小学校での国際理解教育は、今年で2年目になる。昨年の成果と反省を踏まえた上で、更に質のよい授業作りを目指した。

昨年の活動と比べて、変わった点と変えなかった点がある。まず変えなかった点は、各学年3クラスを対象に、継続的に年3回授業を行なったことだ。また、学生側のコミュニケーションについても、昨年同様の体制を敷いた。週1回全体ミーティングを行ない、各種連絡はもちろん、授業案の検討や実践報告をすることによって、参加者全員で考え、情報を共有できるようにした。

昨年から変わった点もいくつかある。一つ目は、1回目の授業を作り始める前に、小学校の先生と学生で話し合う場を設けたことだ。小学校側からは各学年の担当の先生が、学生側は各チームの代表者が出席し、国際理解教育のねらいを考え、1年間の授業方針を話し合った。最初に両者の間で共通の認識を図ることができたのは、有意義であった。二つ目は、対象とする学年が全学年に広がったこと

だ。今後もこの活動が続いていけば、児童は小学校6年間毎年、私たちと共有する時間を持つことになる。この活動の特長の一つである継続性が、更に増進したわけである。

2) 各チームからの報告

フランスチーム(小学1年生対象):第一回

報告者:指山 亜希子(外国語学部スペイン語専攻3年)

タイトル フランス人留学生、フィリップさんとの交流

参加メンバー フィリップ・マガン(研究生)、徳光直子(外国語学部フランス語専攻3年)、坂本悠(外国語学部カンボジア語専攻1年)、指山亜希子(外国語学部スペイン語専攻3年)

活動日時 6月14日(水)、9:00~1:30(9:30まで先生方との打ち合わせ、2~4時限実践、最後に児童と給食)

活動の目的 フィリップさんを通して、日本とは違う世界の1国の存在を知ろう。英語偏重主義をなくす。

活動の内容 (場所:多目的ホール)

	行ったこと	児童の反応
5分	1. メンバー全員のあいさつ、フィリップによるフランス語の挨拶の紹介 ・日本人学生とペアになって、「こんにちは(サリュウ)」、「元気?(サヴァ?)」を動作とともにやってみせる。 ・皆で声に出して言う。 →英語だけではなく、外国語の挨拶があることを伝える	・全員で大きな声で繰り返した。「サリュウは動物のサルみたいだね」とフィリップが言うと、記憶がより定着したようだった。「サバは魚のサバみたいだ」と反応する児童もいた。 ・何回か練習はしたが、授業後にはすっかり忘れていた様子であったため、その場で楽しむことを優先してよかったようだ。
10分	2. 地球儀、世界地図を使って、いろんな世界の国	・ワールドカップの影響か、多くの国の名前が挙げられ、

	<p>を見て、フランスに行き着く。</p> <ul style="list-style-type: none"> 小学生に知っている国名を挙げてもらい、それぞれ探す。 フランスについてはフィリップが飛行機でどれくらいかかるか、電車でどれくらいかかるか説明。 	<p>收拾がつかないほどだった。</p> <ul style="list-style-type: none"> 電車では1週間以上かかる、というと驚いた様子だった。 世界地図を見て、日本が小さい、フランスは遠い、と反応する児童もいた。
10分	<p>3. フィリップによる毎日の生活を紹介(小学生の時の生活の例)</p> <ul style="list-style-type: none"> 最初にクイズ形式でフィリップが8歳だったころの写真を見せ、誰だか当てさせる。 1日の生活(給食ではなく家で食べた、などの違いも混ぜて)を写真をつかって紹介(家族写真や実家の写真、家の近くのベルサイユ宮殿等も) 大学生になってからの生活を写真で紹介(パリの写真) チーズクイズ(フランス人は何キロチーズを1年で食べるか、など) 食事の紹介(カタツムリ料理等) →写真を児童に見せ、なにか当てさせる 	<ul style="list-style-type: none"> 写真は大きくしたほうがよい 家の写真には「豪華だ、なんでこんなに大きいの?」といった声があがった。 「チーズは皆と同じ重さくらいの量を食べる」といってもあまり反応していないようだった。 児童は写真をはやく見たがるあまり移動したのでクラス全体が騒がしくなってしまった。 カタツムリを食べる、というと気持ち悪がっている児童もいた。
15分	<p>4. フランス版だるまさん転んだ遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> フランス語では「1、2、3、太陽」という。 ルールを説明し、学生で実演した後、皆でフランス語を繰り返し、出来たらゲームを始める。 鬼(だるまさん?)はフィリップと一緒に「1、2、3、太陽(ソレイユ)」と試みる。 	<ul style="list-style-type: none"> 鬼になりたがる児童、何回もやりたがる児童が多く、盛り上がった。 練習をしてから行ったものの、フランス語を大きな声で言える子どもはほとんどいなかったため、だるまさんがころんだ遊びに夢中になる結果にはなったが、留学生と触れ合えるよい機会であった。 やはり、男の子や活発な女の子が前に出がちで、後ろで参加できていない子もいたので、少人数でもよかった フィリップ自身に関する質問(好きなもの、など)があった一方、国名を挙げ場所を尋ねる児童も多かった。
5分	5. 質問時間、まとめ	

反省点

授業の進め方について(テクニック、手段に関して)

①プログラム構想段階で留意すべきこと。

- ・ 1年生で集中力を持続させるのは難しい。情報をそのまま挙げるよりも、クイズに基づいて、言いたいことを伝える手段を考えた方が良い。(フィリップ、坂本)
- ・ クラスの雰囲気、学年の特徴、静かにさせる方法をあらかじめ打ち合わせておくべき。
→クラスによって、多少の差異はあるが、「発言するときは必ず当てられてから」という原則が、1年生には存在した。また、クラスによって、生徒の積極性、やんちゃさも異なるので、あらかじめ先生にお話を伺っておくが良い。
- ・ 授業で雰囲気(どのように進行させていくか)がつかめただけれど、前もって練習していれば、もっとスムーズに授業を進められたと思った(坂本)
- ・ 1年生が対象であったため、もっと説明を少なくして、生徒が主体的に参加していける授業にできればよかった。全体的に、留学生が1人で説明している時間が、予想していた以上に多かったように感じられたので、日本人学生もより積極的に留学生と小学生の間の架け橋的役割が果たせる方法がほかにもあるように感じられた。(指山)

②実践中に留意すべきこと。

- ・ 早口であり、小学1年生にはもう少しゆっくり話してほしいとの指摘を受けた。
- ・ 呼び方に注意。「おうちのひと」と言うのがベター。
東柿生小学校の生徒の中には、父子家庭または母子家庭の子どももいるため、必ず、保護者を指す場合は「おうちのひと」という表現を使う必要がある。
- ・ また、フランス語で子どもと、ゲームをするのは良いと思われるが、始まる前に、必ず、「危ないですから、皆気を付けてね」と子どもに言う方が賢明だ。(フィリップ)
- ・ なるべく大きな声での呼びかけをしないと1年生は聞いてくれないと実感したので、次回は声にも気を配りたいと思う。(坂本)

プログラムの内容に関して

- ・ フィリップさん、一個人に迫るのではなく、漠然とした大きな紹介になってしまった印象がある。(徳光)
- ・ 世界地図を見せたのは、世界には英語だけではなくいろんな国があって色々な言葉が話されている、ということを示すのが目的であったが、結果的に多くの国の名前を列挙したに過ぎない感があったのは残念。(徳光)
- ・ 児童の日常と比べて、共通点、相違点を明確にすることができなかった。私たちのものの見方では小学生が理解できないことがたくさんあると思う。その説明をいかに小学生の身近なもの(具体的なもの)と結びつけるかが大切だと感じた。プログラムの打ち合わせだけでなく、どのように紹介するか、もう少し学生間で確認しておくことが必要だ。
- ・ 前半にみせた世界地図の印象がとても強かったようで、最後の質問の時間にも、地図に関する質問が多く出たクラスがあった。地理の時間ではないのだが、子どもたちが一番興味を持つものの紹介がもっとできたらよかったのかもしれない。しかしながら、最後に体を動かしたことは、有意義であったと思う。全体的に男子生徒が前に出できてしまい、おとなしい子どもたちが参加できていないようにも見受けられたが、皆楽しんでくれていたようだ。(指山)

授業で使う道具に関して

- ・ 写真が小さかった 大きなものを用意すべき。小さい写真を回すのは時間もかかるし、子どもも興奮してくる傾向がある。

感想

児童に見せた写真の一部、例えば食べ物やフィリップが生まれ育った家等の写真は、児童にとって身近に感じられる題材だったようで、初めて目にするものに驚きを感じる一方、共通の食べ物や学校生活については、「こんなに離れている国だけれど、一緒のものもある」ということを部分的にはあるが気づかせることが出来たように思う。フィリップの家族や実家の写真を見て興奮して目を輝かせている子ども達の表情が印象的であった。プログラム全体の

運び方としては、体を使ったゲームやクイズを挟んだり適宜発言を求めたりすることによって、児童の集中力がある程度持続させることができた。しかしながら、最初に世界地図をみせたことに関しては、説明方法の詰めが不十分であったために、世界の多様性を児童に気づかせることはできなく結果的にただの国名の列挙になってしまったこと、また、全体として児童に自分達の日常生活とフィリップの生活を比べさせ気付きを与えるための方法が徹底していなかったために漠然とした情報提供のようになってしまったことは深く反省すると同時に次回の実践で改善していくべきだと思った。以上、さまざまな反省はあるが、私たち自身、児童と一緒に実践を楽しむことができ、とても嬉しかった。(徳光)

まずは、同じ班のみんなに感謝したいと思います。特に徳光さんとフィリップは、昨年から活動していることもあり、初参加であり何も知らない私は沢山学ぶことができました。緊張はありましたが、予想以上に子どもたちが歓迎してくれ、非常に楽しい時間をすごすことができました。私の準備も悪く、スムーズに行かない点も出てしまい、反省しました。時期がほかの班に比べ早かったとはいえ、もっと念入りに準備しておくべきでした。私自身が小学生であった時分に、教室を訪れたオーストラリアからの留学生との交流の記憶は非常に鮮明に残っていますが、東柿生の小学

生にとってもフランス人留学生との交流を通じて、フランスという国、海外からの留学生という存在が、ぐっと身近になり、また、将来に渡って日常の節々で影響がでてくるのではないかと考えると、次回はさらに、明確な目標を立て、よりそれを達成でき、小学生が楽しめる授業を考えて、実践を行いたいです。(指山)

フランスチーム(小学1年生対象):第二回

報告者:指山 亜希子(外国語学部スペイン語専攻3年)

タイトル フランス人留学生、フィリップさんとの交流

参加メンバー フィリップ・マガン(研究生)、坂本悠(外国語学部カンボジア語専攻1年)、指山亜希子(外国語学部スペイン語専攻3年)

活動日時 11月1日、9:00~1:30(9:30まで先生方との打ち合わせ、2~4時限実践、最後に児童と給食)

活動の目的 フィリップさんを通して、日本とは違う世界の1国の存在を知ろう。もっとフランスを身近に感じよう。

活動の内容 (場所:多目的ホール)

	行ったこと	児童の反応
5分	2. メンバー全員のあいさつ、フィリップによるフランス語の挨拶の紹介 <ul style="list-style-type: none"> ・ 前回勉強した「やあ」「元気?」という挨拶を復習した ・ 皆で声に出して言う。 ・ そして今回は「ありがとう」も一緒に勉強した →英語だけではなく、外国語の挨拶があることを伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全員で大きな声で繰り返した。挨拶を覚えている子の中にはいた。 ・ フィリップのことはみな良く覚えていてくれた
10分	2. 写真をプロジェクタで映して、日本とフランスの	<ul style="list-style-type: none"> ・ 皆東京タワーを知っているようで、フランスのエッフェル

	<p>建物比較</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 東京タワーとエッフェル塔 ・ 大阪城とベルサイユ宮殿 ・ 2重橋とローマ式水道橋 	<p>塔との比較を楽しんでいた。どちらが古いか、どちらが高いかなどのクイズ形式にしたが、まだ歴史を知らないため、難しいようだった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ とても興奮する子どもも多かった。
10分	<p>3. 同じく写真をスライドに写して日本とフランスの鉄道・車の比較</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本の車とフランスの車 ・ 日本の新幹線とフランスの新幹線 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本の車とフランスの車の違いはわかりにくい、ハンドルのついている場所、そして車の走る側の違いを説明した。 ・ フランスの新幹線を見たことがあるという子が多かった。小田急線のロマンスカーとにているらしい。 ・ 皆新幹線を知っているようで、比較しやすかったようだ ・ 皆興奮していた
10分	<p>4. フランス語でじゃんけんぽん フィリップを王様にして王様じゃんけん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ルールを説明し、学生で実演した後、皆でフランス語を繰り返し、出来たらゲームを始める。 ・ 最後まで勝ち残った子には、フランス語で「おめでとう」という 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 少し難しかったが、皆一生懸命じゃんけんぽんを覚えてくれた
5分	<p>質問時間、まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ フィリップの好きな食べ物は、好きな色は、など、個人的な質問も多く見られた ・ 「フランスの生活はどうですか」という少々難しいものも見受けられた。

反省点

- ・ 今回パソコンを使って写真を映した時、小学生の注目がそっちにいつってしまったのが残念。
- ・ 今回は用意というか先生方との連絡が不十分だったのでもっと細かく連絡をとるべきだった。
- ・ 次の実践では子どもたちのすぐ身近なものを扱おうと思う。(坂本)
- ・ なるべく子どもが興奮しないゲームをするほうが良い
- ・ 次回は小学1年生が把握していない概念を使わないようにする(例:物の重さの単位等)
- ・ 目ですぐに比較できるものを使用するほうがよい
新しい言葉を覚えやすい小さい子どもであるため、フ

ランス語を教えてあげるのも得策だと考えた(フィリップ・マガン)

学校側との交渉を始めるのが遅くなり、十分に意見を交わすことができなかつたため、次回は早い段階から準備を進めていく必要があると感じた。小学生は皆フィリップさんのことをしっかりと覚えていたが、簡単なフランス語の挨拶を覚えていた児童は少なかったため、次回言葉を教えてほしいとの以来を先生方から受けたが、親しむ程度の気持ちで接する事ができるようにしてあげると将来的に語学の勉強を嫌いにならずにすむのかもしれないと感じた。次回は、小学生が身近に感じている日本のものと比較できる

フランスのものを紹介してほしいとの依頼を受けている。お行えたらと思いました。(指山)

との打ち合わせ、2～4 時限実践、最後に児童と給食)

フランスチーム(小学1年生対象):第三回

報告者:指山 亜希子(外国語学部スペイン語専攻3年)

タイトル フランス人留学生、フィリップさんとの交流

参加メンバー フィリップ・マガン(研究生)、坂本悠(外国語学部カンボジア語専攻1年)、指山亜希子(外国語学部スペイン語専攻3年)

活動日時 1月24日(水) 9:00～1:30(9:30まで先生方)

活動の目的 フィリップさんを通して自分達とはちがうものを知ろう。もっとフランスを身近に感じよう

活動の内容 フランス語とフランスのクリスマスの紹介
(場所:小学生が座って話を聞け、プロジェクタを使用することができる場所→多目的ルーム)
(学生が用意するもの:フランス語の意味を書いた紙、紹介する映像をとりこんだ CD-ROM)
(先生方に用意していただくもの:プロジェクタおよびパソコン)

	行なったこと	備考
5分	1. メンバー全員のあいさつ、フィリップによるフランス語の挨拶の紹介 ・ 前回勉強した「やあ(サリュール)」「元気?(サバ)」「ありがとう(メルシー)」という挨拶を復習する。 ・ 子どもたちが前回までのものを覚えていたら「どういたしまして」等も加えた ・ 皆で声に出して言ってみる。	・ 先生方に、フランス語と接することに重点を置いてほしいと前回指示を受けた。 →クラスによっては覚えていていたクラスもあったが、サリュールは比較的覚えていた。 反省会でも出たことだが、「ひとつの言葉を重点的にやってもよかった」と感じた。
20分	2. クリスマス・お正月の紹介 ・ フィリップさんの家のクリスマスの様子を写真をプロジェクタで映して紹介する。 ・ 12月のクリスマス、小学生のみんなはどのようにすごしたかな 例 クリスマスツリー クリスマス食事 クリスマスケーキ クリスマスの歌	・ フィリップさんが昨年のクリスマスに実家に帰った時に撮影したものを使用した。 ・ また、フランスのクリスマスに相当する日本のお正月に関してもみんなで話す。(フランスのクリスマスと日本のお正月の比較をする) ・ ひとつずつ、小学生のみんなのものはどうであったのか、振り返りながら紹介していくという計画であったが、ひとつの質問をするとなかなかその話題から離れられなくなるため、適宜切っていった。
10分	3. クリスマス・お正月に関するものをフランス語で言ってみよう	・ 日本語の意味を書いたカードのみを用意し、「メリークリスマス」

10分	<p>4. フランス語を使ってゲームをしよう</p> <p>まず、フランス語で 1, 2, 3, 4, 5 を紹介し、その数であつまって座るといゲームをした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ルールを説明し、学生で実演した後、皆でフランス語を繰り返し、出来たらゲームを始める <p>また、最後にじゃんけんもして、フランス語にふれる機会を作ってみた。</p>	<p>「あけましておめでとう」</p> <p>「クリスマスプレゼント」をフランス語で紹介する。</p>
-----	--	---

感想・反省等

今回が最後ということで、非常に感慨深い回になりました。準備の段階で気をつけたことは、先生方とこまめに連絡をとるといことでした。FAX と電話で上手く対応できたと思います。

本番に関しては、やはり早くにやったクラスよりも後にやったクラスのほうが上手くいったということです。写真を見せる機械の関係もあり、スムーズに行かない部分もありましたが、小学生が興味を持つよい道具であったことは間違いありません。今回はフィリップさんを通して英語ではない外国語であるフランス語にふれ、外国人＝アメリカ人ではないことを教えたく思いましたが、とりあえずフィリップさんと触れ合う機会が持てた子ども達にとって、今回のことは今後外国人を考える上でよいイメージになることと思います。(指山)

この3回の実践を通して授業作りの大変さがわかったし、いかに授業を行なえば自分たちが伝えたいことをわかってもらえるかどうか悩んだ。

私達の担当は1年生であったためにそもそも外国ということ自体わかってもらえなかったかも知れないが、これから大きくなるにつれて今回の国際理解教育でやったものが心に残っていてくれればよいと思う。(坂本)

ブラジルチーム(小学2年生対象):第一回

報告者: 森本 舞(外国語学部日本語専攻4年)

参加メンバー ファウスト・ペレイラ(大学院地域文化研究科博士前期課程日本語教育専修コース2年)、瀬戸真由子(外国語学部ポルトガル語専攻3年)、門脇弘典(外国語学部フランス語専攻3年)、森本舞(外国語学部日本語専攻4年)

活動日時 2006年6月26日(月)

学習過程(場所:体育館)

	学習過程	児童の反応
0分	1. ブラジルについて知っていることをあげてもらおう。	・ワールドカップのブラジル対日本戦の4日後であったため、児童のブラジルに対する気持ちが高まっていた。
5分	2. ファウスト・日本人学生の自己紹介(各専攻語で)	

	3. あいさつの紹介	・児童たちは、頬へのキスはしないものの、握手に抵抗は感じていない様子だった。
15分	4. ブラジルはどこかな？ 地球儀で、ブラジルは日本の反対側にあることを確認する。	・希望した児童たちが順に前へ出て地球儀をまわしブラジルを探した。なかなか見つけられなかったが、児童たちは楽しんでた。
25分	5. フェスタ・ジュニーナ(6月祭り) みんなで踊る。	・児童が走り回ってしまい、学生の指示が行き届かない場面もあった。
35分	6. 質問タイム	
45分	今日のまとめ さようなら。	

児童から出た質問

- ・ ブラジルはなぜサッカーが強いのか。
- ・ ファウストさんはどんな小学校時代を送ったのか。
- ・ ブラジルの小学校にはどんな教科があるか？
- ・ ファウストさんの趣味は何か？ 何のスポーツが好きか？

感想、反省

去年の韓国班に続き、今年はブラジル班として東柿生小学校で国際理解教育に参加することになりました。偶然また2年生の担当ですが、去年の第一回と比べると、今年第一回の方が子どもたちとの距離が小さくできたと思います。去年は挨拶のとき留学生しか子どもたちと直接に言葉を交わしませんでした。今回は日本人学生も子どもの中に入っていました。また、握手をするというスキンシップも、学生と児童を近づける上で役に立ったと思います。踊りも楽しんでいたので、本時の目標である「ファウストさんと仲良くなろう」は達成出来たろうと思います。

実践が終わって帰るときに、去年担当した2年生、つまり

今の3年生の子どもたちと会いましたが、みな私のことを覚えていてくれました。それとも隣にいた金さんのことを覚えていたのかも知れませんが、とにかく、同じ人が年3回授業をすることが、学生と児童の人間関係を作るうえで有効であると感じました。(門脇)

あいさつで頬をあわせてのキスをするところは児童の反応もよくて、もっと恥ずかしがってしてくれないかと思っていたが、意外としてくれる児童も多くてうれしかった。フランスやトルコでもそうだったということを知っていたのもうれしかった。

ペルーにルーツのある児童がペルーの場所を知らないことが少し気になった。

質問の内容がバラバラで、先生がブラジルの就学率の話を出したり、同じ質問が何回も出たりなど、まとまりのない感じになっていたのではないかと思った。ファウストさんが水泳が好きというのは「ブラジル＝サッカー」という先入観を取り払うもので、児童たちも少し驚いていたみたいだったし、よかったのではないかと思う。

質問コーナーのとき、同じ児童が何回もあたって、ずっと手を挙げていたのに当てられない児童がいたので、次回からはもっと公平になるようにしたいと思った。

今回初めて国際理解教育に参加したので、最初は何がなんだか分からない状態だったが、クラスが進むごとに慣れていって、全体としてはとても楽しかった、今回はほかのメンバー3人に頼りっぱなしでほとんど何もしなかったので、次回からはもっとしっかりして、自分の役割をちゃんと果たしたいと思った。(瀬戸)

昨年度の活動で目標を達成できたとのことだったので、昨年度の活動と関連づけを図りたかった。しかしどのように関連づけるかまで準備できなかったので安易な思い出しに終わってしまったのが残念だった。

また今回の活動はすべて集団での活動で、中には授業に参加している気持ちのあまりない子どももいたのではないかな。活動の中にわずかな時間であっても児童とブラジルが1対1で向き合える時間を用意すべきだったろう。私たちの活動も2年目になった。外国の人や大学生がやってきた、という目新しさだけでなく、児童の心にずっと残る何かを伝えられるよう、次回以降も努力したい。

最後に、フェスタジュニーナのダンスを児童らが楽しんで

くれたのがうれしかった。またあいさつの時間に児童1人1人と握手できたのがよかった。(森本)

ブラジルチーム(小学2年生対象):第二回

報告者:森本 舞(外国語学部日本語専攻4年)

参加メンバー ファウスト・ペレイラ(大学院地域文化研究科博士前期課程日本語教育専修コース2年)、瀬戸真由子(外国語学部ポルトガル語専攻3年)、門脇弘典(外国語学部フランス語専攻3年)、森本舞(外国語学部日本語専攻4年)

活動日時

2006年10月23日(月)

2時間目 9:30~10:15 3組

3時間目 10:40~11:25 1組

4時間目 11:25~12:10 2組

活動の目標 ファウストさんのことをもっと知ろう!

学習過程(場所:体育館)

	学習過程(◇学生の活動)	児童の反応
0分	1. あいさつしよう! 学生の自己紹介を聞く。 みんなであいさつをする。 ◇簡潔に自己紹介をする。 ◇子どもたちひとりひとりと手をつなぐ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童はあいさつを覚えていなかった。 ・ 手を出すとうれしそうに握手してくれた
5分	2. 遊びから学ぼう。 今日の活動の説明を聞く。 ◇子どもを3グループに分ける。 ◇活動の内容を説明する。 ◇10分ごとに子どもを入れ替える。	

10分	◇時間の区切りは笛を吹いて知らせる。	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>○×クイズ アマレリーニャ(ブラジルの伝承遊び) 質問コーナー</p> </div> <p style="text-align: right; margin-right: 20px;">門脇弘典 瀬戸真由子 ファウスト・ペレイラ、森本舞</p>	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>○×クイズ</p> </div> <p>◇絵を見せながらクイズをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの日 <ul style="list-style-type: none"> ・ブラジルでは子どもの日にピラニアのぼりをあげる。× ・ブラジルでは子どもの日に、子どもはおもちゃを買ってもらう。○ ・ブラジルの子どもの日は学校がある。× ・家など <ul style="list-style-type: none"> ・ブラジルでは家の中でみんなはだしである。× ・ブラジル人もお風呂は毎日湯船にゆっくりつかる。× ・ブラジルの子どもに人気の職業は、サッカー選手とモデルである。○ ・バス <ul style="list-style-type: none"> ・ブラジルのバスはバス停で手をあげないと止まってくれない。○ ・ブラジルのバスも日本と同じように時刻表がある。× ・ブラジルのバスは運転手のほかにお金を集める人がいる。○ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 問題によって反応がまちまちだった。 ・ 反応がよかったもの(ピラニアのぼり、風呂) ・ 反応がわるかったもの(子どもの日のプレゼント) ・ 楽しんで学習していた。 ・ ブラジルに興味を持ってもらえた。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>アマレリーニャ</p> </div> <p>お手玉を投げて落ちた枠は踏まないように飛ぶ。日本のけんけんばに近い遊び。</p>	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>質問コーナー</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ブラジルの学校について ・ 虫について

40分	ブラジルのこと、ファウストのことを自由に質問する。 3. 今日のふりかえり 集合する。 ◇ 今日は何をしたかな？ ◇ どんなことを知ったかな？	
-----	---	--

感想

今回の活動は3つの「ブース」に分けて行われて、各ブースには1つのグループを担当することになった。それによって、より効率よく子どもたちとのインタラクションができたと思う。また、各ブースで10分程度の活動を行うことで、子どもたちの注目が集めやすくなったと思う。私はブラジルについての質問コーナーを担当した。3つのクラスの反応はそれぞれ異なって、以下では細かく述べる。

1つ目のクラスの対応は非常によかった。それぞれのグループは有意義な質問をして、子どもたちにとって楽しくブラジルについて覚えることができたと思う。また、そのクラスの子どもたち全員は積極的に質問した。

2つ目のクラスはそれに比べて、対応はあまりよくなかったと思う。1つのグループには一方的にブラジルと関係のない質問をする子どもがいて、ペースを乱した。また、他のグループは消極的であり、有意義な質問がそれほど多くなかった。

3つ目のクラスは1つ目ほどでもなかったが、対応はよかったと思う。しかし、それぞれのグループは若干消極的で、子どもたちが質問を全くしないこともあり、その時に質問するように誘導しなければいけなくなった。

それぞれのクラスの対応を見て、次の点に改良の必要があると思う。

- ・ 予備質問の準備：子どもたちからは、何を質問すればいいかわからないという雰囲気のみられた。それをカバーするため、予めある程度の内容の準備をする必要があると思った。たとえば、子どもたちが質問しないとき、いくつか

のテーマを用意して、それについて質問してもらうように誘導する。

- ・ 視聴教材の準備：ある程度のイラストや地図などを用意しておけば、より簡単かつわかりやすく説明できる内容があるように感じた。

- ・ 子どもの態度：今回の活動を楽しく行う目的があった。しかし、ただの遊びのように関係のない質問をする子どもがいて、他の子どもを邪魔してしまうことにもなり、活動のペースが乱してしまった。それに対する指導が必要であるが、同時にデリケートなことでもある。態度のよくない子どもへの対応は個人的に難しいと思う。

子どもたちからは、何を質問すればいいかわからないという雰囲気がみられた。それをカバーするため、予めある程度の内容の準備をする必要があると思った。たとえば、子どもたちが質問しないとき、いくつかのテーマを用意して、それについて質問してもらうように誘導する。(ファウスト・ペレイラ)

私は今回〇×クイズコーナーを担当しました。子どもたちの反応は概ね良かったです。特にピラニアのぼりの絵を見せたときは「何これー！？」と面白がっていました。クイズの絵は全て私たちが手ずから描いたのですが、子どもたちに「誰が描いたの？うまいね。」と言われてとても嬉しくなりました。先生にも、絵を用いたのは良かったと言っていたので、心を込めれば私のような稚拙な絵でも人を引き付けることができるのだなと思いました。

反省点は、クイズの解説に時間をかけすぎてしまったことです。最初のグループは2問しかできませんでした。後のグループになるに従って改善しましたが、解説の途中で時間が来てしまうこともありました。予定では最後の問題を「ブラジルの小学生の夢」にして、子どもたちの将来の夢を聞こうと思っていたのですが、その通りできたグループが少なかったのが残念です。時間の管理が今後の課題と。(門脇)

準備にずいぶん悩みました。いったい何ができれば国際理解になるのか、子どもたちはどういう活動を求めているのか、私たちの活動は子どもにとって押し付けになっていないか、という課題をチームのみんなや土谷先生と解決し、なんとか当日を迎えることができました。

ブース別の活動の時間私は全体に目を配りながらファウストさんの質問コーナーについていました。ファウストさんへの質問を1人3つほど事前に考えておくよう担任の先生に伝えておけばよかったと思いました。またファウストさんにもっと大きな声でゆっくり、そして子どものところまで降りて来て一緒に楽しんでもらうようにすればよかったとも思いました。私たちは先生ではありません。先生然として振舞うのではなく私たちも一緒に楽しんで、子どもとの交流を大切にすることが子どもの期待にこたえることではないかと感じました。(森本)

アマレリーニャではみんな積極的に参加してくれて、楽しんでもらえたと思います。実際のルールにはないけれど、お手玉を2個に増やしたり、自分たちでルールを作ったりとやれるところがいいと思いました。この後も、地面にマスを書いて石を投げてできるね、と子どもたちから言ってくれて嬉しかったです。(瀬戸)

工夫した点

- ・ ひとつの活動を短くして(10分)多くのことを子どもに伝えられるようにした。
- ・ 動の活動(クイズ、アマレリーニャ)と静の活動(質問コーナー)を取り入れ、メリハリを持たせた。
- ・ 冒頭で学生と子どもたちが握手をし、子どもと学生の距離を縮めた。
- ・ クイズとアマレリーニャは子どもの興味を引くために使った。

ブラジルチーム(小学2年生対象):第三回

報告者:森本 舞(外国語学部日本語専攻4年)

参加メンバー ファウスト・ペレイラ(大学院地域文化研究科博士前期課程日本語教育専修コース2年)、瀬戸真由子(外国語学部ポルトガル語専攻3年)、門脇弘典(外国語学部フランス語専攻3年)、森本舞(外国語学部日本語専攻4年)

活動日時 2007年1月29日(月) 2時限~4時限

活動の目標 ファウストさんと一緒に作ろう

活動の内容 活動場所は教室。1クラスが5グループにわかれて活動した。「夢の遊び場」をみんなで考え、模造紙に描いた。活動を通して、児童同士、また児童と学生の対話が活発に行われることを期待した。

学習過程(場所:教室)

	学習過程	児童の反応
0分	机、椅子をさげる 児童が5グループにわかれる 学生のあいさつ	
5分	今日の活動を説明する ・活動の手順を黒板に貼る ・説明の後、模造紙を配布	
10分	「夢の遊び場」をグループで考え、模造紙(色付き、半分)に描く ・「遊び場」にあつたらいいなと思うものを考える ・「遊び場」に置くものを決める ・模造紙に絵を描き「遊び場」を整えて完成させる ・完成後時間が余ったら・・・ 1. 自分たちを書き込む 2. 遊び場に名前をつける	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめは wii やプレステをあげていた。 ・しだいに空想の世界を思い浮かべるようになった。 虹の滑り台、空が飛べたら・・・など ・自分の希望について友達の詳細を得られるよう、説得していた。 ・みんなでひとつの作品を創ろうという意識は薄く、場所を仕切って個人個人で描き込んでいた。
45分	学生のあいさつ、おわかれ	

感想

第三回の授業は前の2回とは違い、大学生から何かを教えるのではなく、小学生が考えていることや思っていることを聞かせてもらう狙いがあった。ただ授業をただだけでは「児童」とひとくくりにしてしまいがちなので、もっと子ども達1人1人の個性を見たかったからだ。その目的は概ね達成することができたように思う。計画当初は自分の「夢」について話してもらおうと考えたが、漠然としている・人前では本当の夢を話さずいかもしれないなどの理由で、変更になった。遊び場という設定にしたおかげで具体性が出て、児童も考えやすかったようだ。夢を直接語ってもらうものではなかったが、子ども達の絵からはそれぞれの人となりを感じ取ることができた。

反省すべきは、初めのクラスで説明するときに、「夢の遊び場とは、みんなの行きたい場所で、欲しい物があって、会いたい人に会える場所です」と言ってしまったために、「みんなの」遊び場であることを意識させられなかったことだ。そのため、各自が紙の上で陣地分けし、好きなものをばらばらに描いてしまった。自分と他人の意見を合わせてひとつのものを作ることができなかったのが残念だ。また、妙に現実的なものが多くなってしまったのも気になった。子どもが望んでいることと言えばそうかも知れないが、想像力を働かせる必要がないものばかりというのは寂しい。次のクラスからは、まず児童の普段の遊びを聞いてから、「夢の遊び場では、みんながいつもはできないようなことができます。みんなで楽しめる場所にしましょう」という説明にし

たので、こちらの意図がより正確に伝わったようだ。(門脇)

「夢の遊び場」をつくる作業を通して、児童の普段の生活の話など気どらない話が出てよかったと思う。何も言わなくても絵の中に人を描きこんでる児童もいて、自分たちが遊んでいる姿を実際に想像しながら「夢の遊び場」をつくっているのではないかと思ってうれしかった。

1 組は机を下げている状態だったので少し作業がしにくかった。ちゃんとの先生にも連絡が伝わるようにしたいと思った。あと2組の授業が長引いてしまい、3組の時間が短くなってしまったのも反省だった。(瀬戸)

2 回目の実践の打ち合わせの時、土谷先生が「国際理解教育を通してコミュニケーション能力を伸ばさせたい」とおっしゃっていたのを思い出し、3 回目はこの実践内容を行った。実践を通して児童同士、児童と学生の対話が活発に行われることを期待していた。だがふたを開けてみると、児童と学生の関わり方に問題があったように感じた。児

童と学生の対話が想定したより少なかった。とはいえ、児童たちは楽しそうに取り組み、また引っ込み思案な児童に対しては周りの児童がサポートする場面も見られ、やってよかったと思っている。(森本)

インドネシアチーム(小学3年生対象):第一回

報告者:猪狩伸平(大学院地域文化研究科博士前期課程
地域研究コース2年)

参加メンバー スリ・ブディ・ルスタリ(大学院地域文化研究科博士前期課程言語文化コース2年)、中村未央(外国語学部ポルトガル語専攻4年)、猪狩伸平(大学院地域文化研究科博士前期課程地域研究コース2年)

活動の目標 「タリさん、外語大生と仲良くなろう」

年間目標 「一見違う国や違う地域にすんでいるから、違うものを食べているから、違うように思える。でも同じところにすんでいて、同じように夢を見ている。その共通点を探す。最終的には、身近に感じる。」

必要な道具 ボール3つ

活動日時 6月16日(金)

活動	子どもたちの反応
自己紹介ゲーム 【大学生・留学生用のいすも用意してください。学生らが隣り合わないようしてください。また、ぜひ担任の先生も輪の中に入ってください】 教室に入り、すぐ空いているいすのところへ行き、名前、専攻などをごく簡単に紹介したあと、自己紹介ゲームを始める。 ・自己紹介ゲームスタート(3つのボールを使う)	・先生にもはいてもらいました。 ・学生が歌を歌い、それに合わせて手拍子を子どもたちにうってもらいました。歌い終わったあとに「ストップ」などと声をかけを1回目は各自徹底していなかったため混乱もありました。 ・子どもたちがボールを渡さなかったり、転がしてしまっ

<p>ボールを手拍子に合わせてまわしていく。手拍子がとまった時点でボールをもっていた人が自分の名前と番号に合わせた質問に答える。</p> <p>【質問】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 自分の家の近くで一番好きなお店 2. 今まで行った一番遠いところ 3. 自分が一番好きなイベント <p>・ボールがまわってこなかった児童には、ゲームの最後に1～3のどれかの質問に答えてもらう。ただし、10分ほど経過した時点で答えていない児童が多数いる場合には、「給食の時間にまたくるからそのとき教えてね」と打ち切る。</p> <p>・最後、1～3の質問に学生・留学生が答えて自己紹介ゲーム終了</p> <p>※ここまでで15分ほどを予定しています。</p> <p>ゲーム「好きですか、嫌いですか」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 回目 タリさんは留学生、外語大生の練習のために普段どおりにゲームをしてもらう 2 回目 答: なっとう(児童がおに) 3 回目 タリさんが鬼になる。質問は学生が児童と相談しながらコントロールして決める。 今想定しているのは「梅雨」。日本にはある梅雨はインドネシアにはあるのかということをおにさんに簡単に説明してもらう。 4 回目 タリさんが再びおにになり、児童が質問したい内容を考える。 5 回目 答: 学校(児童がおに) この質問が終わったあと、おにさんに簡単に日本の小学校の生活、自分の小さかったときの生活と比較してもらう。 6 回目 答え: 児童に考えてもらう。児童がおに。 7 回目 答え: じゃんけん(児童がおに) 日本のものとはずいぶん異なるので、おにさんにインドネ 	<p>たりでボールを使うことによる混乱がありました。先生からは、事前に想定しうる問題点については注意を与えておくとういだろうというコメントをもらいました。</p> <p>・子どもたちはまだ的確に質問に答えられる子とそうでない子の差がありました。これは、事前に担任の先生から指摘があったところなので、すぐ対応できました。子どもの様子はやはり担任の先生が一番よく知っていると感じました</p> <p>・想定していたより時間が掛かりました。黒板に質問事項を板書しましたが、模造紙に書いて貼る方がよかったように思います。ただ、質問事項を子どもたちに音読してもらったので、質問自体がわかっていない子どもはいなかったように思われました。</p> <p>・クラスごとにルールが異なる部分があったりして混乱しましたが、実際に活動するうえではあまり問題にはなりませんでした。</p> <p>・かなりみな積極的に手を挙げて活動に参加したがっていましたが、やはり手をあげられない子どももいたので、そのフォローをどのようにするかが必要です。</p> <p>・また、今回は子どもを指名するのはすべて先生にやっていただきました。公平性を保つのが目的でした。</p> <p>・こちらが考えてきた質問を児童に言ってもらおうと考えていた部分では、児童が自分なりの質問を言いたがる部分があり、どこまでコントロールするのか悩みました。先生方からはもうすこしコントロールしてもよいという指摘をいただきました。</p> <p>・ゲーム自体を子どもたちは楽しんでいました。おにさん自身へも積極的な質問ができていました。</p>
---	---

シアのじゃんけんも紹介してもらいます。

その他答えの候補:はだし・地震

※20分から25分程度で、時間に応じて質問を切り上げます。

まとめ・質問(残り5分程度)

児童からの感想・質問を聞く。

感想

3年生という学年にイメージがわきにくく、このゲームという設定が彼らに対してやさしすぎるのではないかと考え、その点が実践前の懸念事項であった。その点では適切な教材であったと思われる。普段やっている遊びのなかにも工夫次第で国際理解の観点から授業作りができるという点に力をいれてやってみた。その目論見の半分は達成できたように思える。問題としては、子どもたちをどこまでコントロールするのか。押し付けにもならず、放任にもならない線引きが難しかった。3つ目のクラスでは「次は僕が質問をだすよ」などとあらかじめ断りながら進めていくことができたので、肝心なところはある程度押さえられたように思う。以後の課題としたい。(猪狩)

初めて参加し子ども達がどのような反応を示してくれるかわからなかったが、実践では子ども達の反応が予想以上に元気いっぱい私自身が実践を楽しむことができた。(中村)

インドネシアチーム(小学3年生対象):第二回

報告者:猪狩伸平(大学院地域文化研究科博士前期課程
地域研究コース2年)

参加メンバー スリ・ブディ・ルスタリ(大学院地域文化研究科博士前期課程言語文化コース2年)、中村未央(外国語学部ポルトガル語専攻4年)、猪狩伸平(大学院地域文

化研究科博士前期課程地域研究コース2年)

活動の目標 「タリさんのもっと身近なところを知ってみよう」

年間目標 「一見違う国や違う地域にすんでいるから、違うものを食べているから、違うように思える。でも同じところにすんでいて、同じように夢を見ている。その共通点を探す。最終的には、身近に感じる。」

ねらい

タリさんのもっと身近なところを知ってみようというのが今回のテーマです。そこで、タリさんが子ども時代に一体どのような生活をしてきたかについて紹介することにしました。日々の生活におけるタリさんの子ども時代の相違点とともに、共通点を知ることによって子どもたちがタリさんに親近感を感じることができればと考えています。

同時に、タリさんも日本の小学生が実際どのような生活を送っているのか知らないという状況があります。そのタリさんのわからない、知らないという点を子どもたちの側から積極的に発表してくれることを期待しています。

必要な道具 模造紙、児童用プリント、

活動日時 10月27日(金)

活動	児童の様子
<p>・自己紹介 それぞれが簡単な挨拶</p> <p>・イントロダクション 今回のメインテーマの説明 「小学校のときのタリさんの1日」 タリさんが小学校3年生時の生活をクイズ形式で紹介することを説明</p> <p>・朝、学校に行くまで編 タリさんの起床時間について学生から質問。 タリさんと学生のやり取りの後児童への質問へ 質問「みんな何時におきていますか」 ・なんでこんな違いがあるのかな？ ▽タリさん「学校に行く準備と大家族だからみんな準備に時間がかかる。」</p> <p>・クイズ では、タリさんが学校に行く前にしていた準備って何だろう？ ①みずあび ②朝ごはん ③ランニング</p> <p>・正解発表 正解は「水あび」と「朝ごはん」⇒同時に、タリさん井戸から水を汲んで水浴びをしていた話を簡単にしてもらおう。 タリ:水浴びをしてから朝ごはんです。また、制服に着替えて学校に行っていたことも紹介。</p> <p>学生:「逆にみんなに質問したいな。朝はどんなことをしているのかな？」などの質問</p> <p>学校に行く間編 ・学生とタリの間でタリさんが学校に来るまでの交通手段についての話を紹介(エピソード⑥)</p>	<p>・しっかりと指示を聞いて鉛筆と消しゴムを用意することができた。</p> <p>・タリさんが5時といった時には「おお～」というかなり大きな反響があった。</p> <p>「何時におきていますか」という質問に対してはまちまちに大きな声で答えてくれた。</p> <p>・子どもたちは最初の指示をしっかりと聞いていたので、答が1つだけではないことを意識し、答を真剣に考えていた。</p> <p>インドネシアは暑いので、兄弟4人に両親が水浴びをさせるという話は説得力があるようだった。</p> <p>・学校に行く準備としてどのようなことをしているかを教えてくれた。</p>

<p>・児童にどうやって学校に通っていたかを質問(簡単に)</p> <p>学校編</p> <p>・クイズ</p> <p>学校につきました。今日は金曜日なんだけど、金曜日はタリさんの学校では特別な行事がありました。それはなんでしょう？</p> <p>①体操②読書③合唱</p> <p>正解</p> <p>→ラジオ体操のようなもの。</p> <p>・学校が7時半から授業であることを紹介。さらにエピソード③を紹介。</p> <p>・10時までの間に2コマ授業があるので、2時間目をテストの設定する</p> <p>休み時間編</p> <p>・クイズ</p> <p>この時間は一体何をしておすごしていたかな？</p> <p>①おしゃべり②おやつ③おあそび</p> <p>・タリさんがこの時間何をしていたのか考えてみよう。</p> <p>・休み時間の時間は20分で一緒であるが、学校内にあるお店などでいろいろお買い物ができる点(エピソード④、⑨)を紹介。</p> <p>・みんなの休み時間の遊びなどを聞き、タリさんの遊びも聞いてみる。</p> <p>・タリさんはなんでこんな時間にお菓子を食べたりしているんだろう。考えよう</p> <p>お昼編</p> <p>・クイズ</p> <p>授業は12時半までです。やっどご飯！ではタリさんは一体どこでご飯を食べるのかな</p> <p>①教室でみんなで給食②学校のカフェテリアで食事③家にかえって家族と。</p>	<p>・バスで20分という話を聞いて、かなり学校と家が離れていることに驚いているようだった。</p> <p>・学校の始まる時間に大きな違いがあることをまず認識したようであった。</p> <p>・学校でおかしが食べられるという点に特に驚いていた。</p> <p>そこにさらに質問を加えることで、「おいしいから」食べるというだけでなく、必然性があるということを教えることができたと思う。</p> <p>・カフェテリアという答えを言う子どもたちが多かったなど振り返って考えたときに、タリさんがお菓子を食べるのは食堂で…という話をしていたのが子どもたちの心に残っ</p>
--	---

<ul style="list-style-type: none"> ・給食はなく、お昼は家に帰って食べることを紹介。学校に帰る際もバス。 ・給食の後にどのようにすごしているかを児童に質問 ・児童の振り返り、質問の時間 児童からの質問をうけつける。 また、あまり質問が出ないようなら振り返りシートに今日の感想を書いてもらう ・おわりの挨拶 	<p>たのではないかと思われる。真剣に聞いていた証拠である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間が押し気味になってしまったので感想を書いてもらえなかったのは残念であった。
--	--

感想

今回の実践について、特に良かったと思う点は、テーマと授業の流れ方です。小学校 3 年の時のごく普段やっていたことを伝えることによって、インドネシアと日本の小学生生活の共通点・相違点がいろいろ伝わったと思います。共通点がたくさん引き出されて非常に良かったと思います。例えば、金曜日の 1 日に絞って、その日の特別な行事(朝体操)を話すことによって、インドネシアの学校も日本の学校も、生徒全員集まって一緒にやる行事がある、ということは伝わったことなどです。クイズも楽しくやることができたと思うが、いくつか反省点があります。あまりにも手を挙げてくれた生徒が多かったので、次回やるときにもう少し質問の数を減らし、もっとたくさんの生徒に当てた方がいいと思います。せっかく手を挙げてくれたのに、当てられなくて悔しいと思った子もいるかもしれないし、個人的にもいろいろ答やコメントを聞ければよかったと思うこともあります。今回は、低学年のわりに、意外と創造力を働かせて正解を出せた子が何人かいました。最後に、今回は生徒たちの感想をあまり聞けなくてちょっと残念だと思います。全体的に今回の実践で生徒たちともっと身近になれたと思います。(スリ・ブディ・ルスタリ)

前回の実践の目標である「タリさんについて知ってもらう」ということから展開して、今回は目標として「タリさんのこ

ともっと深く知り、インドネシアの生活も知ってもらう」ということを挙げた。国の特徴も今回は交えて伝えるよう、日本との違いと共通点を実践に含めることができたのではないかと思います。ただ、それらを 3 年生に興味を持ってもらえるようにするにはどうすればいいか苦心した。でも実践では児童がクイズを楽しんでくれたし、クイズの答の理由も 1 人 1 人しっかり考えてくれた様子だった。また、タリさんの質問について考えてもらうだけでなく、自分たちの日常生活についても考え、タリさんに伝えることができたのではないかと思います。

自然な会話のやりとりを基本とした実践だったので、クラスごとに進行具合や内容の深め方を変えなければならなかったことが難しかった。反省点は、児童たちに渡したプリントを全部活用はできなかったことだ。プリント中の内容で、必ず埋めてほしい部分・そうではない部分をもっと事前に打ち合わせをして望めば、よりスムーズに進められたのではと思った。

第三回は最後の実践なので、タリさんを忘れられない存在として児童の記憶に残るような実践にしたいと思う。(中村)

今回の実践の中心は「タリさんの 1 日」と「みなさんの 1 日」を比較することであった。また、同時に 1 つ目の質問にさらに「なぜ」を重ねることで単純なやり取りだけではなく、さらに

深く考えさせることを目標とした。

質問に関しては、子どもたちはとても積極的で、自分たちが期待している以上の内容について発言してくれる子どもたちもおり非常に感心させられた。1学期のときよりもしつかり授業に取り組むという姿勢ができていたように思われる。

タリさんの1日と皆の1日の比較については、どちらかというとなりさんの生活紹介のようになってしまい、自らの生活と比較して何か結論を引き出すところまで持っていくことができなかつたのは反省である。指示の仕方や板書の使い方についての修正が必要であると思われた。具体的には、紙に子どもたちの普段の活動内容を書き、それを磁石で貼ったりすることで、子どもたちからみてどのようなことをすべきかが明確になったように思われる。また、プリントの矢印にも答が書き込みやすいように枠をつけてもよかった。以後の反省である。そして、そのプリントの中の2つの矢印を比較することで最終的に子どもが違いや相違点を発見できるようにしていくことが今後の課題である。

3回目の実践は、卒業する実践者3人にとっても最後の授業になるので、子どもたちのこころの中に少しでも残るメッセージを伝えられればと考えている。(猪狩)

インドネシアチーム(小学3年生対象):第三回

報告者:猪狩伸平(大学院地域文化研究科博士前期課程
地域研究コース2年)

参加メンバー スリ・ブディ・ルスタリ(大学院地域文化研究科博士前期課程言語文化コース2年)、中村未央(外国語学部ポルトガル語専攻4年)、猪狩伸平(大学院地域文化研究科博士前期課程地域研究コース2年)

活動の目標 「タリさんの家に遊びに行こう」

年間目標 「一見違う国や違う地域にすんでいるから、違うものを食べているから、違うように思える。でも同じところにすんでいて、同じように夢を見ている。その共通点を探す。最終的には、身近に感じる。」

必要な道具 地図、プリント

活動日時 1月26日(金)

ねらい

これまで、タリさんと仲良くなるという目的は少しずつ達成されていったものの、タリさんの背景部分については知らない部分が多かったように思われる。今回は、タリさんが住んでいた「インドネシア」を面白おかしく紹介する

工夫

グループ活動とする。大まかなイメージとしては、教室の中でグループに別れ、黒板に張られたスゴロク図をいかに各グループが早くタリさんの家というゴールにたどり着けるかを競いながら、その中でインドネシアの地理、気候をタリさんを通して知る。

活動	児童の様子
<p>「春休み、タリさんの家に遊びに行ってみよう」集合場所:各教室</p> <p>・導入3分</p> <p>今日やることの説明</p> <p>・何を持っていこうかな(12分)</p> <p>グループ活動</p> <p>洋服グループ×2</p> <p>食べ物グループ×2</p> <p>遊び道具・タリさんの家族に見せたいもの×2</p> <p>⇒グループで話し合っ、持っていく物を何故そう思ったのか「理由を添えて」発表する。発表は全チームが行う。</p> <p>検討時間は5分、残り7分でタリさんのコメントを含めて発表する。[タリさんのコメントは短く]</p> <p>・どうやって言葉を話そう(5分)</p> <p>全体</p> <p>ここまでは、各グループが同じペースですすむ。ここから、グループ間の競い合い</p> <p>・インドネシアのタリさんの家にいこう</p> <p>4択クイズ(10分)</p> <p>(グループでの話し合い時間30秒)</p> <p>問題</p> <p>①インドネシアはどれでしょう。</p> <p>②東柿生小学校から成田空港までどのくらい</p> <p>③成田ージャカルタ(首都)までの時間はどれくらいでしょう。</p> <p>④インドネシアから日本が買っているもので有名なものは何?</p> <p>⑤インドネシアのジャカルタにお昼につきました。最初の挨拶はどれ</p> <p>⑥レストランに行きましょう。魚をたべます。何を使って食べるかな。</p>	<p>・自由帳などを出し、考えたものを書き出すように指示を出すと、各班よく話し合っ、様々な答えを書き出していた。</p> <p>自分の好きなものを挙げる子、タリさんに持っていきたいものを考えた子、インドネシアが暑いということを踏まえて答えを挙げた子など様々だった。</p> <p>・検討時間が5分あっても、なかなか促さないと話し始めないが、学生が廻って話を聞くと、答えと理由をきちんと考えている様子が見受けられた。</p> <p>・タリさんのコメントと自分達が挙げた答えが同じであると、児童はとても喜んでいて。</p> <p>・繰り返すように促すと、元気に言葉を発音していた。5つの挨拶言葉を即座に覚えるのは、3年生には少し難しいようだった。ローマ字ではなく、カタカナで表記することも来年は考慮した方がいいかもしれない。</p> <p>・インドネシアの位置を地図で確認すると、「へー、近いんだ」という反応が見られた。はっきりとした位置を覚えていない子もいたが、何となく南に位置するということは覚えていたようだ。</p> <p>・「インドネシアは島国」ということをヒントで出すと、④の答えは自然と理解できたようだ。</p> <p>・挨拶は一度練習したものの、覚えるのは困難なように見えた。</p> <p>・クイズ問題を入れ、班毎に対抗のすごろく形式したの</p>

<p>⑦ご飯を食べたらのがかわいた。何をのもうかな。</p> <p>⑧タリさんの家族が迎えに来てくれました。家につきました。玄関で靴をどうしますか</p> <p>⑨そろそろ疲れたな。ねよう。どうやって寝ますか</p> <p>⑩夜暑くて汗をかいたな。お風呂にはいりたい。どうしよう</p> <p>⑪楽しかったタリさんの家。ありがとうの挨拶はどれ？</p> <p>・タリさんが日本に来るときに何を持って来たのかな？</p> <p>(10分)</p> <p>グループでの話し合い。</p> <p>・まとめ 5分</p>	<p>で、盛り上がりが大きかった。</p> <p>・時間がなかったので 2 クラス目だけ、「タリさんの家に持っていくもの」とセットにして考えてもらった。カップラーメンがインドネシアにもあることに驚いていた。</p>
--	---

感想

今回の実践でとても嬉しかったことは、おぼろげながらもかもしれないが、私達が今までの 2 回の実践で伝えたことを覚えてくれていたことだ。今までの実践ではそこまでインドネシアを強く意識させるようにはしていなかったつもりだったが、児童の中では「南の国・インドネシアから来たタリさん」というイメージが残ったようだ。今回は、タリさんの家に遊びに行くときに持って行きたいものを班毎に挙げてもらったのだが、インドネシアが暑い国だからということを理解して、体が涼しくなるような食べ物をたくさん挙げてくれた。騒がしくてこちらの話を聞いているか不安に思うクラスでも、意外ときちんと考えてくれていたようで、児童の発想の豊かさには正直驚いた。

反省点としては、最初に行ったクラスで時間配分を間違えてしまったことだ。内容的に盛りだくさんだった感はあるが、回を重ねるにつれてやりたかったことができるようになった。

3 回の実践を通して、私達が外国のこと・人を伝えるという目的を果たせたことも有意義だったが、どんな子ども達がいる、どんなことを 1 人 1 人考えているのか感じることができた。私達が実践案を作成しているときに想像もしなかったような嬉しい反応が子ども達から返ってくる事もあり、このやりがいに支えられて 3 回の実践を行なうことができたのだと本当に思う。これから実践を行なう人達にも、この充実感や子ども達の元気を得てほしいし、いつまでも活動を

続けていってほしい。(中村)

【今回の実践にあたって】

実践を行うに当って、今回あらためて反省したことが 2 点ある。「時間配分」と「子どもの力量にあった実践内容」である。子どもに対してあれも伝えたい、これも伝えたいとしていろいろと詰め込みすぎると授業として何を伝えたいのかが曖昧なままになってしまう。また、時間より早く終わってしまったらどうしようという不安が常に頭をよぎるがために多くの内容を盛り込みすぎてしまう。この点については、1 日の長がある先生方のアドバイスを積極的に取り入れていくことが必要であろう。

【2 年間で振り返って】

東柿生小学校との実践の最終回を今回で迎えた。実践を重ねるごとに一体何を伝えたらよいかかわからなくなる時もあり、実践にどのように向かいあうのがよいか、メンバーとどのように実践を作り上げていくべきなのか、どのように東柿生小学校での実践を行うグループをつくりあげていくのなど様々な課題について考えさせられた日々であった。そういった日々の実践の中から感じられたことを以下にあげてみよう。まず、一番大事なのは、子どもたちにとって、どのような実践を行うのがよいかということを考えることである。「学生が、留学生とともに、学生の出来る事を、教師とは異なった目線で提供する」事にこの実践の意義があると考えている。時に、学校との関係、支援室との関

係、メンバー同士の関係において不安、不満、悩みを抱えることもあるだろう。だが、この実践の意図を粘りつよく説明していく中で、またよい変化が生まれると思う。そして、次に大事なものは、続ける事である。そのことによって信頼を得ることができる。どんなに素晴らしい実践もそのとき限りで終わってしまえば意味がないと思われる。是非継続して続けていってほしいと思う。(猪狩)

今回は最後の授業でした。3 回ともとてもよかったです。ゲームをやりながら仲よくなって、意外と児童たちは前回やった授業の内容を覚えていて感動しました。

今回、最後の授業で時間配分がうまくできなくて用意したスゴロクの質問が全部やれませんでした。実践の最後にいうメッセージは特にスゴロクの内容を反映させたものだったので、特に最初のクラスの時にうまくそのメッセージが伝わっているかどうか心配です。

しかし、個人的には実践の最初の活動「インドネシアに行くとしたら何を持って行きますか」の部分が一番よかったと思います。全く知らない国だったが、いきなり行くことになっても堂々と自分が持っていきたいもの、見せたいもの、紹介したいものなどを考えて発表してもらえました。インドネシアのことを児童たちに身近に感じてもらったのではないかと思います。その他に、この活動を通して色々インドネシアと日本の共通点について紹介できました。例えば、インドネシア人もお米、カップラーメン、大豆、西瓜を食べ

たり、インドネシアの子どもたちはたこ揚げやサッカーをやったりすることです。

給食の時に、私が豚肉を食べられないことが不思議に思っている子がたくさんいて、担任の先生が「インドネシアは豚肉を食べない国ですよ」と説明してくれました。これから、インドネシアのような宗教が生活に非常に関わっている国について小学生に教える機会があるかと思いますが、その時にどこまで宗教のことを教えればいいのかと考えなければならない課題だと個人的に思います。(スリ・ブディ・ルスタリ)

タイチーム(小学4年生対象): 第一回

報告者: 河原 新(外国語学部ロシア語専攻2年)

タイトル タイを知ろう 導入編

参加メンバー モンコンチャイ・アッカラチャイ(研究生)、河原新(外国語学部ロシア語専攻2年)、田代哲嗣(外国語学部ロシア語専攻1年)

活動日時 6月28日(水)2~4時間目

活動の目的 タイがどのような国かを写真やタイ独特の文字を使って実感してもらう。

活動の内容

	内容	児童の反応
2分	1 メンバー紹介	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 0 auto; width: fit-content;"> モンコンチャイ・アッカラチャイ(ゴルフ)さんと交流を深めよう タイ数字を実際に遊びで使ってみよう </div>	
15分	2 タイ数字を覚える ・ゴルフさんと一緒に数字は10まで教える 生年月日を書かせる タイ数字を使った計算をする。	・大きな声で復唱してくれた。西暦の生年月日を書けない児童が沢山いたことが反省でした。 ・意外と盛り上がった。褒めることは児童にいつそうの盛り上がりを加えました。

28分	<p>2～3問児童に解かせる。</p> <p>3</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童に6班に分かれてもらいたいタイの写真4枚コピーしたものを各班に配り、聞きたい事を考えてもらい1班1人発表してもらおう。 ゴルフさんはその都度答える。 	<p>数字の盛り上がり功を奏し、みんな真剣に考えてくれたので単純な質問はなかった。</p> <p>質問の内容</p> <p>タクシーの色がたくさんあるけど何ですか？果物の値段の前の文字が読めないのですがグラムとか量とかで売ってるのですか？看板に英語が書いてあると思うんだけど、タイなのにタイ語で書かないんですか？果物屋さんの写真の左上に豆みたいのがありますが何ですか？など</p> <p>答 タイにも沢山タクシー会社がある、果物は量り売り、日本と同様に英語が氾濫、豆も果物に含める、など</p>
-----	--	---

反省・感想

- 西暦の生年月日が書けない児童がいました。
- 4年生の知識が予想以上だったこと、ドラゴンフルーツの名前、味、暑い所でできること、などの確に答えられる児童が3クラスともいたこと、しかし分からない児童もいた。
- タイではフルーツをグラムで売っているという話をしたら、「それって肉買う時とおなじだ」とどンドン欲しい答えが勝手に返ってきて、児童の自己の日常生活と照らし合わせて気付く能力の高さに驚きました。何よりも「これ何？」で終わる児童がほとんどいなかったことに関心の高さが垣間見えました。
- 泣いた児童のフォローを先生がしてくれて助かった。自分が少しオドオドしてしまいました。
- 時間配分に余裕を持たせたことと、時間を確認しながら動けた点では周囲の状況が去年よりも見えるようになったと思いました。
- 先生が今年赴任した人ばかりだったので自由に実践させてもらえました。(河原)
- とても楽しむことができました。タイの数字や写真を紹介して、子ども達が本当に真剣にやってくれて、たくさんの

様々な質問もしてくれてすごく良かったとおもいます。

- 給食もとてもおいしくて、たくさん食べてしまいました。(モンコンチャイ・アッカラチャイ)
- はじめてこういう経験をしましたが、すごく新鮮な気持ちでいっぱいです。外大で小学校の免許がとれなくて諦めていましたが、取ろうと決意しました。
- 反省点は、自己紹介の準備が不十分で本番で忘れてしまったこと、カメラやビデオの動作確認をしなかったこと、自分は大阪出身で個人的な問題なのですが、標準語で話すことが大変だったこと。特に標準語をもっと話せるようにしたいと思いました。(田代)

先生からの感想

全体の進め方、内容、児童の反応はよかったが、もう少し児童によっては「待つ」ことを大切にしてほしいと言われました。私たちはサポートのつもりで答えに詰まった児童にすぐにヒントを与えていたのですが、先生によれば「待つ」ことで児童は自分で答えを出すということでした。

タイチーム(小学4年生対象):第二回

報告者:河原 新(外国語学部ロシア語専攻2年)

活動日時 10月25日(水) 研究授業が午後からあるため、2時間の枠で3クラス同時に80分で行った。

参加メンバー モンコンチャイ・アッカラチャイ(研究生)、河原 新(外国語学部ロシア語専攻2年)、田代 哲嗣(外国語学部ロシア語専攻1年)

活動の目的 自国の文化を発表し、かつ相手の文化を理解することによって、自己文化啓発を芽生えさせる。自分の半ば無意識にやっていた踊りを客観的に分析することによって、物事を客観的に分析する力を養う。

活動の内容(場所:体育館)

活動内容	様子
1. 導入・自己紹介、クイズ(5分)	簡単な自己紹介の後のアイスブレイキングに使ったタイのクイズはかなり盛り上がった。
2. 子どもたちによる踊り披露(10分)	先生に指揮をとってもらい踊りを披露してもらった。この際、メンバーは4がスムーズに進行するように、注意深く見た。ここで質問などを考えておいた。
3. メンバー、タイの踊り「ラーマキエン」披露と説明(10分)	
4. それを通して子どもたちの踊った日本の踊りが何を表しているのか想像してもらい考えてもらう。手を挙げて意見を言ってもらう。(15分)	メンバーは児童が詰まったときにフォローを入れた。
5. 日本人2人はタイの踊りを踊りたい児童にレクチャー。一方でゴルフさんは日本の踊りを児童から教えてもらう。(15分)	ブースを2つ作って、その間の児童の行き来は自由。先生がうまくコントロールしてくれた。
6. 全員を集めて学生(河原)のタイ旅行記を見せる。(10分)	小学生にとって身近な写真(マクドナルド、ジャンプ、電車など)をみせたのでまた盛り上がった。
7. 学生のタイ旅行記で見せた写真についての質疑応答、その後、児童がタイについて調べたものについての発表と質疑応答。(15分)	河原がタイにいったことがあることから、ゴルフさんが説明に困ったときフォローができた。

感想・反省

まず何よりも自分が実際にタイに行って踊りを修行、研究したのがよかった。また、実際いかないと気づかないことも多く、その経験などが質疑応答で生きた。途中、興奮した児童がゴルフさんのマイクを奪う場面もあった。写真も実際タイに行って感動したり面白いと思った写真を撮ってきたので、インターネットなどやゴルフさんなどと違った面白い視点の写真が提供できた。また、児童が調べ学習によってタイをある程度知っていたのもよかった。

またアジアの民族衣装を着ていったことで本当の踊り手のようにみえたのも視覚的に良かった。

アイスブレイキングも功を奏し、子どもたちといい雰囲気でした。踊りを教えるときに際しては予想通り男子児童が興奮したので先生にうまくコントロールしてもらった。(河原)

初めて大勢の人の前でタイの踊りをしたので、本当に恥ずかしかったです。その後、子どもたちが「エイサー」という沖縄の伝統舞踊を教えてくれて、一緒に踊ってとても楽しかったです。やはり時間が足りなくて、子どもたちはタイについてまだ聞きたいことが残っているようです。昼ごはんのとき、タイの踊りについて聞いてくれた子どもたちもいたし、踊って見せてくれた子もいました。みなこれだけタイのこと知って覚えてくれて本当に感動しました。(モンコンチャイ・

アッカラチャイ)

2回目になって顔見知りの子どももできてうまく接することができた。関西弁で接してうまくコミュニケーションがとれた。エイサーがうまく踊れていたので自分たちのタイの踊りがうまくいっているのか不安だった。タイの踊りも楽しそうにやってくれた。タイの子どもたちが画用紙でたくさん調べ学習をしていたのに感動した。(田代)

タイチーム(小学4年生対象):第三回

報告者: 田代 哲嗣(外国語学部ロシア語専攻1年)

参加メンバー モンコンチャイ・アッカラチャイ(研究生)、河原 新(外国語学部ロシア語専攻2年)、田代 哲嗣(外国語学部ロシア語専攻1年)

活動日時 1月24日(水)

活動の目的 「国境を越えた価値観」

日本とタイの大学生の小学4年生のときと今の話を聞くことによって、小学生自身の将来の夢を見つめて欲しい。子どもの自殺が騒がれている中、生きる目的を見出して欲しい。

活動の内容(場所:教室)

活動内容	詳細・児童の反応
1.ゴルフさんの小学校の話、タイの環境の話(5分)	子どもたちは静かに聞いていたが、内容が少なく、次の話への持っていくかたが不自然。
2.大学生3人の小学生の時の夢と今の夢についての話(10分) 宝物(単語帳、タイのおまもり)を見せながら話した。	子どもたちの反応はまあまあだった。使う言葉の難しさに問題はあったかもしれないが、静かに聞いていた。
3.話をもとにワークシートを記入(15分) ワークシートの内容:	時間が余るクラスもあった。早めに書き終わった児童は周りとしゃべりだした。

<p>①将来の夢 ②そのために頑張っていること ③3人の話について聞きたいこと</p> <p>4.全体発表(10分) 子どもを何人か指して、教室の前に出てもらい発表させた。</p> <p>5.質疑応答(5分)</p>	<p>見ようとする紙を隠す児童が多かった。</p> <p>発表したがる児童が数名いた。 発表した児童に対する対応には課題あり。 どのような質問をするのか、どのタイミングで質問するのかが難しく、しんとした空気になることも。答えを引き出すのが難しい。</p> <p>質問する児童は多かった。 3人の将来に関する真面目な質問が多い。 雰囲気はよかった。</p>
--	---

感想

今日は児童たちの夢を聞かせてもらったり、自分の小学校の時の夢と今の夢を語ったりしてとてもおもしろかったです。児童たちがスポーツ選手やパイロットなどになりたいと言っていたが、「ゲームデザイナー」という子も何人もいて、とてもビックリしました。ほんとうにタイの小学校とは違うなど実感しました。

反省したいのは自分の話し方です。やはり小学校4年生のレベルはどれぐらい話せばいいか今までまだまだ分からなくて本当に難しいと思います。特に留学生にとってどのような日本語(言葉)を使ったらいいか選ぶのは簡単なことではないと思うので、今度は「言葉」だけでなく、「動き」のような活動をやればいいのかと思いました。

最後に、今回の活動を通して自分の昔の夢をまた思い出してよかったと思います。そして児童たちが話してくれた夢と自分の小学生の時の夢と同じで、「違う国でも『共通』の夢を持っている人たちもいるね」と面白く聞いていました。本当に楽しかったです。(モンコンチャイ・アッカラチャイ)

反省:もう少しタイに関連付けた話をしたかった。

前回と違って夢の内容なのではずかしがって発表が控えめだった。

良かったこと:子どもたちの将来へのベクトルと自信、希望を与えられたと思う。(河原)

熱心にうなずいて聞いている子どももいたが、言うことをしっかり考えていなかったのも、わかりやすい言い方ができたかという満足のものではない。

あと、話に盛り上がりがなく、たんとしゃべっている感じで、飽きてしまう子どももいたと思う。次からはもっと声を大きくし、相手に理解してもらえる話し方を考えていくことが課題である。

しかし伝えたいことが話せたのはよかったと思う。僕の話を書いた先生たちはよかったと言ってくれた。国際理解教育という点では不満足だとは思いますが、教育という点では、子どもたちの心に何か大事なものを残せたと思うし、満足できた。本当に勉強になり、楽しかった。(田代)

韓国チーム(小学5年生対象):第一回

(外国語学部フランス語専攻3年)

報告者:津久井優(外国語学部フランス語専攻3年)

活動日時 2006年6月26日(月) 2限から4限まで

タイトル 智恩さんの韓国での生活と私たち日本での生活の違いを考えよう

活動の目的 生活の端々に文化の違いを見つける

参加メンバー 金智恩(外国語学部日本語専攻3年)、柴本智代(外国語学部カンボジア語専攻1年)、津久井優

活動の内容

行なったこと	児童の反応																				
<p>1.学生の自己紹介</p> <p>名前、出身地、勉強している言葉</p> <p>2.韓国と日本の生活の違いについての考察</p> <p>智恩さんの韓国での小学校時代の1日と児童の生活を比較しながら、韓国と日本の違う点をみていく。</p> <p><具体的な内容></p> <table border="0" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="text-align: center; width: 50%; border: 1px solid black;">日本(例)</td> <td style="text-align: center; width: 50%; border: 1px solid black;">韓国</td> </tr> <tr> <td>朝: ごはん、納豆</td> <td>キムチ</td> </tr> <tr> <td>お箸を使う</td> <td>お箸とスプーン</td> </tr> <tr> <td>ランドセルで通学</td> <td>ランドセルなし</td> </tr> <tr> <td>車は左側通行</td> <td>車は右側通行</td> </tr> <tr> <td>「おはよう」</td> <td>「アニョハセヨ」</td> </tr> <tr> <td>昼: 「こんにちは」</td> <td>「アニョハセヨ」</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">「花いちもんめ」で遊ぶ (共通点)</td> </tr> <tr> <td>畳あり</td> <td>畳なし</td> </tr> <tr> <td>夜: 「こんばんは」</td> <td>「アニョハセヨ」</td> </tr> </table> <p>3.花いちもんめ</p> <p>日韓共通の遊び・花いちもんめを韓国語でやってみよう。</p> <p>4.まとめ・児童からの質問</p>	日本(例)	韓国	朝: ごはん、納豆	キムチ	お箸を使う	お箸とスプーン	ランドセルで通学	ランドセルなし	車は左側通行	車は右側通行	「おはよう」	「アニョハセヨ」	昼: 「こんにちは」	「アニョハセヨ」	「花いちもんめ」で遊ぶ (共通点)		畳あり	畳なし	夜: 「こんばんは」	「アニョハセヨ」	<ul style="list-style-type: none"> ・ ここでは日本の例のほうはこちらから提示してしまうのではなく児童から発表してもらおう方式にした。かなり盛んにみんな発表してくれた。 ・ 韓国の子どもや道路や家の写真を見せると、「(韓国の子どものかばんが)かっこいい!」や、「(家の写真をみて)えー、これが韓国?」など盛んな反応が聞こえた。 ・ 《左側通行》ということについては、児童はあまり理解できないのではないかと思っていたが、皆わかっているようだった。 ・ 《花いちもんめ》は9割ぐらゐの児童が経験しており、とても身近に感じているようだった。 ・ 皆とても喜んで楽しそうに遊んでくれた(少し度が過ぎてしまったところもあったが)。男女の間で手をつなぐのを恥ずかしがっている子も何人かいた。多くの児童が韓国語の「じゃんけんぼん」を覚えようとしてくれていた。
日本(例)	韓国																				
朝: ごはん、納豆	キムチ																				
お箸を使う	お箸とスプーン																				
ランドセルで通学	ランドセルなし																				
車は左側通行	車は右側通行																				
「おはよう」	「アニョハセヨ」																				
昼: 「こんにちは」	「アニョハセヨ」																				
「花いちもんめ」で遊ぶ (共通点)																					
畳あり	畳なし																				
夜: 「こんばんは」	「アニョハセヨ」																				

感想

去年に引き続き、また東柿生小学校への「国際理解教室」に参加した理由は何よりも子どもたちの笑顔が忘れられなかったからです。大変とはいえ、実は子どもと絡んで遊べた時間がどれだけ楽しい時間だったのか誰よりもよく知っています。

今年は去年担当した学年よりは上である 5 年を希望したのはよりまじめな話ができればいいかなということでした。それで、話ができただかというすぐ答えられないですが、5 年生は 5 年生で独特な雰囲気があって楽しかったです。私が今回得た一番大事なものは、楽しさではなく、人間と人間の付き合いです。私は留学生であって、子どもたちにとってはよそのともいえる「外国人」であるにも関わらず、私を外国人ではなく、遠くからきた大学生のお姉さんとしてうけとめているような気がしました。給食の時間に質問を受けましたが、質問のほとんどが韓国という国のことではなく、私に向けての質問でした。

友たちになるに国籍なんか要らないというようなことをよく言います。しかし、私の場合、実はどうしても気になるのは国籍という壁でした。しかし、子どもたちには国籍自体が意識されず、仲良くしたいという気持ちがものすごく分かりました。そのような感覚をむしろ習ってきました。(金智恩)

今回初めて参加し、とても緊張しました。でも、1 回目の活動を終えた今、この活動に参加することができてほんとうによかったと思っています。今回の活動で、一番心に残っていることは、授業の後、授業で覚えた韓国語のじゃんけんが子どもたちが遊んでくれていたことです。また、子どもたちが興味深々に話を聞いてくれていたこともすごくうれしかったです。日本と韓国の 1 日を例に比較しながら、それぞれの文化とか習慣を教えることで、子どもたちにとってわかりやすく、また、韓国の文化を身近に感じやすかったのではないかな、と思います。今回の活動での反省点を次回に生かして、次回も充実した活動にしたいです。(柴本)

まだまだ国際理解教室の「こ」の字もわかっていないような私が学年の責任者を務めることになり、初めはとても不安だった。しかしメンバーがとても協力的で、2 人には本当に助けられた。

今回の実践を通して、「外国」に対してまだまだ子どもたちがステレオタイプを抱えてしまっている部分、また逆に子どもたちの柔軟な思考によって寛容に受け入れられる部分を少し感じることができた。3 回の実践を通して、子どもたちが視野を広げる手伝いできれば、と思っている。

第一回でやれることはできたと思う。これを第二回、第三回につなげられるように次回の実践案を創意工夫してみたい。(津久井)

韓国チーム(小学 5 年生対象):第二回

報告者:津久井優(外国語学部フランス語専攻 3 年)

タイトル 金さん、柴本さん、津久井さんの大切なものはどれ?

参加メンバー 金智恩(外国語学部日本語専攻 3 年)、柴本智代(外国語学部カンボジア語専攻 1 年)、津久井優(外国語学部フランス語専攻 2 年)

活動日時 2006 年 10 月 30 日(月) 2 限から 4 限まで

活動の目的 3 人それぞれの「もの」がどれかを考え話し合うことにより 3 人をより身近に感じ、同時に国籍や国の違いを厭わない心を育てるきっかけとする

活動の内容

行なったこと	児童の反応
<p>1. <u>簡単な挨拶</u> ごく短く前回の復習</p> <p>2. <u>考えてみよう「金さんのもの、柴本さんのもの、津久井さんのものはどれ？」</u></p> <p>①まず児童を5～6人ずつグループに分ける</p> <p>②3人の思い入れのあるもの(1人2つ計6つ)を別々に写真にとってプリントアウトし、それを組み合わせの異なる2枚ずつ各グループに配布</p> <p>写真・・・トルコ人歌手のCD、夏目漱石・吉本ばなの本(津久井)、ラクソスのクロス、地球儀型貯金箱(柴本)、てるてるぼうず、絵描き道具(金)</p> <p>③児童には配布された2枚がそれぞれ誰のものなのか、何故そう思ったのかを話し合ってもらう(10～15分)</p> <p>※答のヒントとして3人のプロフィール提示(項目:名前、出身地、誕生日、好きな食べ物、好きな番組、好きな言葉、夢中になっていること、将来の夢)</p> <p>※「これは誰のものですか？」以外の質問は全て良しとする</p> <p>3. <u>児童の発表・3人による紹介</u></p> <p>①それぞれの「もの」について、児童より話し合った内容の発表</p> <p>②3人より「もの」についての紹介</p> <p>4. <u>まとめ</u></p> <p>児童には感想を紙に書いてもらう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 様々な写真は児童の関心を引いたようである。 ・ 1クラスめで「質問は3つだけ」としたところ、私たちに話しかけるのをためらってしまっている様子だったので、2クラスめからは質問はいくつでもありとした。その結果、児童がより活発に話しかけてくるようになった。 ・ 児童だけでは話し合いがあまり進んでいないグループも、学生や教師が助言することにより会話が増えていた。 ・ 私たちが予想していなかった観点から発言する児童も多く、児童の発想の多様さには驚かされた。 ・ 実物を見せ、実際にCDをかけたたり絵を見せたりすると非常に反応が良かった。 ・ 「私たちが身近に感じる」ことができたという児童は多かったが、「国籍や国を厭わないこと」がどれだけの児童に伝わったかはわからない。しかし私たちが少しそのことに触れると、賛同して付け加えてくれる児童もいた。

感想

今回の実践は前回と違って子どもたちと会話がたくさんできてよかったと思います。やはり、一方的な授業よりは子どもが参加できるほうが良いと思いました。思ったよりも子どもたちの発想や、考え方が多様で面白かったです。私たちが考えることができなかったことも子どもたちとの会話を通じて新たに感じたり、考え直されたりしました。

まとめの時間に感想を聞いたり、書いてもらって気づいたことですが、子どもたちが思っていることが、むりやり「韓国と日本の違いを探ろう」とするのが感じられ、必ずしも、今回の授業が韓国と日本の比較ではないことだったのが伝わらなかった部分もあったのかと思いました。中には、私たちの1人1人のことをちゃんと理解して、身近に感じてもらった子どもたちもいたので、ある程度目的は達成し

たのかなという感じもします。

最後の授業には、もうちょっと子どもたちとじっくり会話ができる実践にしたいと思いました。(金智恩)

今回は、2 回目で、自分は司会を担当させていただきました。やる前はどうか、とても緊張していたけど、やり始めると緊張がとけ、津久井さんや金さんのフォローのおかげで、楽しく進めることができました。クイズは、子どもたちから「ちょっと難しい～」という声も聞かれたが、子どもたちが一生懸命班のみんなで話し合ってくれていました。また、私たちからの正解発表のとき、子どもたちが目をキラキラさせて私たちの話を聞いてくれている姿がとても嬉しかったです。

少し不安に残った点としては、子どもたちが最終的な目標について考えることができていたか、ということです。でも、子どもたちからの感想文を読んで、私たちひとりひとりに対する理解が今回で深まったことを感じることができました。私たちひとりひとりを理解することが活動の最終的な目標につながっていると思いました。(柴本)

今回の実践は本当に、ふたを開けてみるまで子どもたちがどう反応してくれるかわからなかったのも、とても楽しみであり同時にとても不安であった。しかし授業を通して、子どもたちの素朴な感性や立派に発言する姿に触れることができ、私たちが伝えたかったことを子どもたちが理解しようとしてくれているのがわかり、とても嬉しかった。授業の鍵である「もの」を何にするかということでぎりぎりまで試行錯誤したが、最終的に私たちの本当に思い入れのあるものを私たちの言葉で語ることで、子どもたちにメッセージを伝えることができ、「もの」をうまく選択することができたと感じた。子どもたちの感想を読みると、「私たちを身近に感じるができた」「話し合いを通じて成長できた」「国の違いは関係ないのだとわかった」の 3 つが多かったが、こ

のどれもが私たちの意図していたことであり、子どもたちの成長のほんの小さなきっかけを提供できたのではないかと思う。

今回私たちは「韓国」という枠組みにこだわらずに実践を行ったが、今後の国際理解教室でこのように 1 つの国に限らない試みをもっとあっても良いと思う。

とはいえ低学年にとってはまだまだ、1 つの国を例にとることで異文化を考えるとという単純なプロセスも必要だと思うので、どの学年を対象に行ったらよいかを判断するのは難しいところである。また、今回の私たちのその意図を教師があまり理解していなかったのは少し残念だった。教師との関わりについてはまだまだ改善点が残る。次回は最終回の実践なので、この 3 回が全体としてなにか子どもたちの頭の片隅に残るようなものになれば、と思っている。(津久井)

韓国チーム(小学 5 年生対象):第三回

報告者: 津久井優(外国語学部フランス語専攻 3 年)

タイトル なんて外国語を学ぶの？

参加メンバー 金智恩(外国語学部日本語専攻 3 年)、柴本智代(外国語学部カンボジア語専攻 1 年)(実践には不参加)、津久井優(外国語学部フランス語専攻 3 年)

活動日時 2007 年 1 月 29 日(月) 2 限から 4 限まで

活動の目的 ことばの大切さに触れ、同時に人と人との心のつながりを感じる

活動の内容

	行なうこと	児童の反応
5分	<p><u>1.導入</u></p> <p>前回は持ち物、今回は外国語というキーワード</p> <p>児童に質問「私たちはなんで外国語を勉強しているんだと思う？」</p>	<ul style="list-style-type: none"> 視覚的なものを多用した前回の授業は児童の心に残ったようで、多くの児童が覚えていてくれた。
20分	<p><u>2.ゲーム「自分の言いたいこと、伝わるかな？」</u></p> <p>①児童を3～4人ずつグループにわけ</p> <p>②グループの1人が他の3人に、私たちが出した問題に対する自分の答を伝える</p> <p>グループのメンバーは、その人が何を言おうとしているのかを考える(制限時間1分半)</p> <p>※ルール※</p> <p>使えるもの:紙、鉛筆、絵、数字、身振り、表情</p> <p>使えないもの:言葉を喋ること、漢字、かたかな、ひらがな</p> <p>問題</p> <ul style="list-style-type: none"> おじいちゃんおばあちゃんはどこに住んでいる？ 今一番食べたいものはなんですか？ 昨日何をした？ お正月の一番の思い出は？ <p>③全問終了後、児童に感想を聞く</p>	<ul style="list-style-type: none"> グループ分けを事前に先生にお願いしていたところ、スムーズに始めることができた。 問題についての説明のしかたがあまりうまくいかず、「私たちが何という問題を出したか」を当てれば良いと考えた児童も中にはいたようだ。もっと上手く説明できればよかった。 ゲームをととても楽しんでくれていた。いつもはよく喋る児童たちもこのときはルールを遵守してくれて、ゲームが意味のあるものになった。 私たちが何も促さなくとも児童たちはこのゲームから、ことばの大切さ、またことばが無くても通じることもあるんだという喜び、外国語に対する興味などを感じてくれた。 身近なことを話すとても真剣に聞いてくれるが、そうでないと集中力が切れてしまうこともある。 時間の関係上じっくり児童の話を書いたのは1クラスだけだった。しかし様々に感じたことをたくさん発言してくれた。
10分	<p><u>3.私たちの想い</u></p> <p>金・津久井がどんな想いで外国語を勉強しているかについての話</p>	<ul style="list-style-type: none"> 外国語での挨拶のとき、全ての児童が息を飲んで聞いていた。かなりするどい推測をした児童も多くいて驚いた。
10分	<p><u>4.まとめ・児童からの感想・質問</u></p> <p>児童からの3回の実践を通しての感想を聞く</p> <p>最後に金から韓国語で、津久井からフランス語(トルコ語でお礼の言葉を言い、児童は私たちが何と言ったのかを遊び感覚で考える</p>	

感想

グループのメンバーで話し合っ、今回も「韓国」という国にこだわらないスタンスで実践を行うことにしたが、こうしてみても良かったと思う。私が韓国が好きとか嫌いとか知っているとか知らないとかそういう問題ではなく、このやり方だと私も自分を表現しながら子どもたちと接することができると感じたからだ。5年生という学年もこのような実践を行いやすい対象だった。智恩さんがパートナーだったことも私は本当に恵まれていた。急遽進行をお願いしたにも関わらず、眩しいほど素晴らしい進め方だった。

授業の内容は、私が予想した以上に充実していた。このゲームだけをやって外国人とのコミュニケーションまで話を膨らめられる子がいると思っていたが、たくさんの子がそのことに触れて発言してくれて本当に驚いた。ことばが伝わらないもどかしさだけでなく、こころが通じるんだという嬉しさを述べてくれた子どももいた。それは私たちが伝えたいことのひとつだったが、私たちが言うまでも無く子どもたちは感じてくれた。

3回の実践を通して得たものは多すぎてなかなか整理できない。とにかく第一に、同じ韓国班のメンバーであった金智恩さんと柴本智代さんに、そして東柿生国際理解教室のメンバーみんなに、支援室のあらゆる方々に、お礼を言いたい。1年間本当にありがとうございました。(津久井)

最後の実践はいつも寂しいです。

今回も寂しい実践だったような気がします。メンバーの事情で2人での実践だったから寂しかったのもあるし、小学校の事情で最後の実践のまとまりがバタバタして寂しかったかなとも思います。

次に、授業内容までのプロセスの感想です。

事前の小学校の先生との打ち合わせがスムーズではなかったというか、お互い食い違ったままの気持ちで進めたような気がします。窓口役であった先生とのコミュニケーションが難しかったような気がします。私たちが望む「国際理解教育」と先生側が望むその差を縮めるには今回は力が足りなかったように思います。この辺は先生とのやりとりをしてくれた津久井さんの方が一番大変だったと思います。

それでも、私たちの意思をちゃんとまとめて、先生に説明してくれた事、感謝しています。それで、私たちが望んでいる「国際理解教育」がどこまで通用できるか、そして、それを小学校と共有するためにはどうすべきかをまず考えなければいけないと思いました。

授業の感想としては、各クラスごと、反応が結構違ってその原因が何かと思いました。まずはクラスの雰囲気と担任先生の役割によってかなり変わってきます。私の場合ですが、2組ではあまりにも先生を意識し、思う存分私がやりたかった事が伝わらなかったです。3組では思いもよらなかった事が起きて、担任先生の不在の中で進められたせいだと思いますが、今までの雰囲気と違って、予想した結果に至らなかったと思いました。ここで、我々が実践を行う中での担任先生の役割についても考えるきっかけになりました。先生によって「国際理解教室」に営む姿勢は違うと思います。

それで、先生に最小限やってもらいたい事や最大限できることを事前に実践を行う人が承知しておいてもいいかなと思います。

何がどうであれ、私が望むことはひとつだけです。今回私たちに会った子ども達が、韓国、フランス、トルコ、カンボジアを少しでも身近に感じていればそれでいいかなと思います。

将来、韓国と日本の歴史を学び、テレビとかで、「日の丸を燃やしている韓国人の姿」をみても、それが韓国人すべてではないことを言えるような青年になってほしいです。(金智恩)

まず、今回は参加できず、申し訳ありませんでした。東柿生小学校での1年間にわたる3回の実践を終えて、まだまだ「国際理解教育」というのがどんなものなのか、わからないことがたくさんあります。でも、この活動を通して子どもたちの世界を見る目がひとつでも増えたら、すごく嬉しいことだと思います。また、授業中の子どもたちの新しいことを知った時の新鮮な顔とか、たくさん笑顔を見ることができたのも私にとってすごく嬉しかったです。授業の進め方とかそのための準備など、活動全体を通して学ぶことが

本当に多かったです。この1年間で自分が感じたこと、学んだこと、得たことを、来年につなげてがんばっていこうと思います。本当にありがとうございました！！(柴本)

ルトガル語専攻3年)、葛山紋子(外国語学部スペイン語専攻4年)

フランスチーム(小学6年生対象):第一回

報告者:葛山 紋子(外国語学部スペイン語専攻4年)

活動日時 2006年6月27日(火)、8:30~13:00(1限目:授業の流れの確認と先生との打ち合わせ、2限目:2組、3限目:1組、4限目:3組で実践、その後生徒と一緒に給食)

タイトル フランスに興味をもってもらおう

活動の目的

1年間を通して、子どもたちが考え、自分なりの意見を持てるようにすること、自信を持って発表できるようにすることを目標としている。そのための学習意欲を持てるように、第一回ではフランスを身近に感じてもらう、興味を持ってもらうようにする。

参加メンバー ヴィルジル・マクレ(研究生)、玉置汐莉(外国語学部フランス語専攻3年)、中川寛子(外国語学部ポ

行なったこと	児童の反応
<p>1.メンバー紹介 ヴィルジルさんはフランス語と日本語、日本人学生は専攻語と日本語で自己紹介をする。</p> <p>2.フランスのイメージ 知っていること、思っていることを書いてもらう。 ・ 個人個人考えて、紙に書く ・ グループで話し合っ、発表してもらう</p> <p>3.フランスの紹介 地図などで使って最低限知って欲しいことを確認する。 白地図を配ってフランスを探してもらう。 ユーロを見せる。 ヴィルジルさんが小学生時代の話、パリに住んできた頃の話などをする。写真を見せながら玉置さんがフランス旅行の話をする。</p> <p>4.移民についての導入 「今、ワールドカップが行なわれているけど、みんなワールドカップ見てる？フランスの代表選手って知ってる？」</p>	<p>・ 「料理、サッカー、青い目、ワイン、フランスパン、エッフェル塔、背と鼻が高い、ヨーロッパ、髪が茶色、金髪、町並み・家がおしゃれ、パリ、ジダン、肌が白い」などの回答が出た。ワールドカップの開催中ということもあり、サッカーのイメージが強かった。</p> <p>・ 白地図を渡すと、地図帳を取り出す・地図を見に行くなど、意欲的に探していた。フランスを早く探し終わって、他の国の名前も書き込んでいる児童もいた。</p> <p>・ ユーロには非常に関心を示していた。どういう単位か、日本円でいくらくらいかなど質問をしていた。</p> <p>・ 子どもたちにとって身近だったためか、ヴィルジルさんの小学校時代の話は興味を引いた。パリにお寿司が売っている話などに興味を持っていた。</p> <p>・ 授業のはじめに確認したように多くの人が白人・青い目のイメージを持っていたので、ワールドカップのチームの写真で黒人が多いことに驚いていた。</p>

<p>ワールドカップのフランス代表選手の写真を見せる。</p> <p>「フランスって 100 年くらい前は白人ばかりの国だったんだけど、今は白人だけの国ではないんだよ」</p> <p>ヴィルジルさんの住んでいた街やアパート、クラスメイトなどの話をしてもらおう</p> <p>「なぜ白人でないフランス人がいるのでしょうか？」</p> <p>少し話し合ってもらおう</p> <p>「これにはフランス語を話す国が関わっています。ここで次の授業に向けての宿題があります。</p> <p>① フランス以外でフランス語を話す国はどこでしょう？</p> <p>② なぜその国はフランス語を話すのでしょうか？」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「フランスの領土が大きくなったから。領土を取られた人がフランスに住んだから。差別をなくすために黒人を入れたから。白人の国は幸せだから。差別があって、国の出入りが簡単になったから。フランスが進んだ文化の国だから。黒人が白人を襲ったから。黒人が移り住んだから。黒人とフランス人の子ども、国籍を変えたから」などの回答がでた。 ・自主的に話し合ったりするなど、調べ学習に対して意欲を見せていた。
---	---

反省点

- ・子どもたちが授業の内容を全部聞き取れないこともあるので、黒板に書くなどもっと視覚的に情報を残せるとよい
- ・次の話題に入る前に少し間をあげ、子どもたちの聞く体勢がととのってから話し始めるとよい
- ・担任の先生の授業へのかかわり方を事前に話し合っておくべきだった
- ・時間配分をもう少し考える必要があった
- ・ユーロ硬貨を各班に見せるタイミングを考えるべきだった(話をしているときに配らない)

感想

初めての参加で、6年生という難しい年頃ということもあり、どのように授業を進めるか、どうやって子どもたちに接していくか心配でしたが、思っていた以上に子どもたちの反応がよく、私自身も楽しく、学ぶことの多い実践でした。子どもたちは、フランスはおしゃれな国、フランス人は肌が白

くて金髪で目が青いというイメージを持っていたようで、ヴィルジルさんの話やワールドカップのフランス代表の写真から、自分たちがイメージしていたのとは違うフランスの一面を知り、驚いていたようでした。この驚きをうまく次の学習意欲へとつなげていけたら良いのではないかと思います。クラスによって進行が異なり考える時間が十分にとれなかったことや、担任の先生の授業への関わり方など今回の実践での反省を次回に生かしていきたいと思います。(中川寛子)

今回で2回目の参加でしたが、6年生と授業をやるのは初めてでした。6年生という難しい年頃で、積極的に発言してくれるかどうか、こちらが提示したことに反応してくれるかどうか心配でした。授業が始まると、思った以上に驚いてくれたり、質問をいっぱいしてくれたり、さらにたくさん発言してくれたりして、賑やかな雰囲気の中で私も楽し

むことができました。子どもたちに緊張をほぐしてもらった気がしました。今回は、フランスの「移民」についての導入の授業でしたが、今後、このフランスの事実を 6 年生の視点で、どのように伝えていか、もっと考えたいと思います。(玉置汐莉)

思った以上に子どもたちがフランスについてイメージもっていたので、ワールドカップの写真などを効果的に使えてよかったと思いました。積極的に発表してくれる子どもも多く、楽しい雰囲気での授業ができたと思います。新しいものに触れ、課題に意欲的に取り組んでいる子どもたちの姿が印象的でした。第一回目のフランスに興味を持ってもらうという目標は達成できたと思います。これを調べ学習、次回への実践へとつなげていきたいと思っています。次回に向けて、「移民」をどのように扱っていかを考えていく必要があると思います。(葛山紋子)

フランスチーム(小学6年生対象):第二回

報告者:葛山 紋子(外国語学部スペイン語専攻4年)

タイトル 世界の人の移動を知ろう

参加メンバー

ヴィルジル・マクレ(研究生)、周 首能(外国語学部朝鮮語専攻3年) 中川寛子(外国語学部ポルトガル語専攻3年)、葛山紋子(外国語学部スペイン語専攻4年)

活動日時

2006年10月31日(火)、9:30~13:00(2限目:3組、3限:1組、4限目:2組で実践、その後生徒と一緒に給食)

活動の目的

1年間を通して、子どもたちが考え、自分なりの意見を持てるようにすること、自信を持って発表できるようにすることを目標としている。第三回の実践は、調べ学習を経ての発表とするので、それにつなげる。子どもたちにとって身近な川崎市に焦点をあて、調べて、知ってもらうために、フランスの話から日本の話へ移し、日本にも多くの外国人がいるということを知ってもらい、興味を持ってもらう。

	◆活動	児童の反応
5分	<p>◆メンバー紹介 自己紹介・新メンバー(周さん)の紹介</p> <p>◆課題の答え合わせ</p> <p>①フランス以外でフランス語を話す国はどこでしょう?</p> <p>②なぜその国はフランス語を話すのでしょうか?</p> <p>①の問いを子どもたちに手を上げて、答えてもらう。(5人)</p> <p>↓</p> <p>「ほかにもこんな国があります」 地図を見せて確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> メンバーが違うということを入ってくる時に言っていた子もいて、第一回の実践を覚えてくれているようだった。新メンバーということもあり、かなり興味を示していた。 1つのクラスでは、担任の先生が指導していなかったため、課題をやっておらず、答え合わせもできなかったため、授業が進行できなかった。 他の2つのクラスでは、調べてきてくれた子どもも多く、たくさんの国名を意欲的に調べてきている子もいた。発表も積極的にしてくれた。 植民地については習っていなかったため、少し難しかったようだった。しかし、なんとなく知っている子もいた。子どもたちに身近な英語を例にあ

<p>②の問いを子どもたちに手を上げて、答えてもらう。 (2人) ↓ ヴィルジルさんから説明</p> <p>その後、フランスへの人の移動の経緯を話す。 「フランス語を話すアフリカのこれらの国の人々がフランスにやってくるようになりました。アジアやほかのヨーロッパの国からもフランスに人が来ています」</p> <p>「どんな理由で人が来ていますか？」</p> <p>「あと、勉強に来ている人もいます。玉置さんはフランスに留学に行っています」</p> <p>「ヨーロッパからフランスへ来ている人はどんな人がいますか？」</p> <p>「ヴィルジルさんが住んでいた地域はどうでしたか？」</p> <p>「周さんはフランスへ行ったことはありますか？チャイナ・タウンはありましたか？(メロの話)」</p> <p>周さんがニューヨークで見かけたチャイナ・タウンの話をする。</p> <p>ニューヨークのチャイナ・タウンの写真を見せて、どこか聞いてみる。 周さんが訪れたときの話をします。</p> <p>横浜中華街の写真を見せて、どこか聞いてみる。 ヴィルジルさん・周さんが受けた印象や中華街の始まりを話す。</p> <p>大泉の写真を見せて、どこか聞いてみる。 大泉に行ったことのある中川さんが受けた印象や、人口の15%がブラジル人であることを話す。</p>	<p>げたので、わかりやすくなったようだった。(実践者の専攻語であるポルトガル語・スペイン語も例に挙げたクラスもあった)英語を話している国はどこか質問すると、アメリカ合衆国をあげる子が多かった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 視覚的な写真やクイズなどもなかったので、子どもたちの集中力が少し続かないと感じる面があった。 ・ 玉置さんからのエピソードで、学生の出身国でいろんな国名が出ていて、子どもたちは驚いていた。 ・ パリのある地域やメロの駅では白人を探すほうが難しいという話に驚いていた。 ・ 周さんがメロの中で、中国語で話しかけられた話に興味を示していた。 ・ 漢字が書かれた看板が多くあったこともあり、ニューヨークの写真ということにかなり驚いていて、反応がよかった。子どもたちは口々に思いつく国名を言っていた。 ・ 1つ前の写真が意外な場所であったので、すぐはわからなかったようだが、写真の横浜という文字を見つけ、日本と答えていた。 ・ 「英語が書いてある」と言っている子が多かった(実際はポルトガル語)。アルファベットを見ると、やはり英語だと思うようだった。アルファベット
--	--

<p>45分</p>	<p>新大久保の写真を見せて、どこか聞いてみる。 周・葛山が受けた印象を話す。</p> <p>「実は、日本にも多くの外国人が住んでいます」</p> <p>「じゃあ、この川崎にはどれくらいの外国人がいるでしょう？」</p> <p>ヴィルジルさん、周さん、中川さん、葛山全員が知らないということを伝え、私たちに次回教えてくれるように頼む。</p> <p>課題を提示する。 課題①日本における移民の歴史について調査する。「地元の図書館などで本や資料を使って調べる」 課題②川崎市(麻生区)に住んでいる外国人について調査する。「区役所などに行って、外国人担当のスタッフに直接聞く」 課題③身の回りの人達の外国人に対するイメージを調査する。「自分の家族や親戚、そして近所の人々にインタビューする」</p> <p>(質問など)</p>	<p>の看板だったので、日本だということがなかなかわからず、群馬県というところがかなり驚いていて、良い反応だった。中には鋭い観察力の子もいて、自動販売機などを観察して、日本と答えた子もいた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ハングルが大きく書いてある電柱だったので、最初はすぐに韓国と答えたが、すぐ下に新宿と書いてあることに気付き、日本と答えていた。ハングルばかりの看板やお店の写真には驚いていた。 周りで見かけたことがあるか、身近にいろんな国の人がいるという質問に、あると答えている子もいたが、全くない、川崎市の外国人は0%と答える子どももいて、今まであまり意識したことがない子が多いようだった。
------------	---	--

反省点

- ・ 授業時間をきちんと把握し、時間配分を考える。課題がなされていなかったことや、授業時間を間違えていたため、時間があまってしまった。
- ・ 視覚的な資料をもっと増やす、クイズ形式を取り入れるなどで授業が単調にならないように工夫をする。前半部分では、話が続いたため、子どもの集中力が続かなかったと

感じる面があった。

- ・ 子どもたちが知っていること、知らないことをきちんと把握する。植民地を習っていなかったため、説明が理解してもらえなかった。

感想

- ・ 担任の先生方の中で連絡が十分にとれていなかったた

め、時間が予定と大幅にずれてしまうなど多々うまくいかなかった点はありましたが、2 クラス目、3 クラス目では最初のクラスでの反省を生かし実践を行うことができました。次回の実践に向けて、もっと先生方の協力を得て授業作りをすすめていけたらと思います。内容に関しては、「ここ川崎にはどのくらい外国から来た人が住んでいるでしょう」という質問に対し、同じクラスに中国からやって来た子がいるにも関わらず、「0%」という答えが返ってきたことに驚きました。人の移動という小学生にとっては少し難しいテーマを扱っていますが、私たちの実践が、身の回りに住んでいる外国の人々に目を向けるきっかけとなり、またヴィルジルさんや周さんと知り合うことで、そういった人々を身近に感じられるようになればよいのではないかと思います。(中川)

- ・ 今回の実践は思うよりうまくいかなかったが、そこから学んだ経験も大きい。まずこういう難しいテーマを扱う時、実践する学生と小学校側の先生との間に、親密な協力関係が必要である。学生に一方的に任せるだけじゃ、やはり思うような結果を作り出すことは難しい。学生と先生との間に、直接的な打ち合わせも必要だと思います。お互いの考えを完璧に理解しなければならぬのです。(周)

- ・ 担任の先生との食い違いがあり、授業が当初考えていたように進まなかった。授業をつくる上で、担任の先生をどのように巻き込んでいくか、協力を得るかという点が非常に重要であると改めて感じた。行き当たりばったりになってしまった部分はあるものの、2 つ目、3 つ目の授業は工夫し

て行なうことができた。また、テーマをどのように扱うかについて、もう少し考える必要があったと思う。子ども達がテーマをいかに身近なこととして捉えられるか、楽しんで興味をもってもらえるような内容にするかもうひと工夫必要だったと思った。今回のことが、興味を持つきっかけになったらいいなと思った。(葛山)

フランスチーム(小学6年生対象):第三回

報告者: 葛山 紋子(外国語学部スペイン語専攻4年)

本時の目標 「世界の人々が住みよい町に」

子どもたちが調べ学習をし、発表することを通して、自信を持ち、人前で発言できるようになる。社会科の内容に関連したテーマについて調べ、その後の学習に興味を持たせる。

参加メンバー

ヴィルジル・マクレ(研究生)、玉置汐莉(外国語学部フランス語専攻3年)、中川寛子(外国語学部ポルトガル語専攻3年)、葛山紋子(外国語学部スペイン語専攻4年)

活動日時

1月30日(火) 2~4時間目(2組、1組、3組)

学習過程

実践日以前の子どものための調べ学習

<p>第一次 課題の提示</p> <p>【課題】</p> <p>川崎市市内には、多くの外国人が住んでいます。日本人も外国から来た方々も、誰もが住みよい社会にするためには、どうしたら良いでしょうか。</p>	<p>□麻生区に住んでいる外国人の方々がどのくらいいるか 資料提示(麻生区には、中国・韓国・フィリピンの住民が多い、59カ国の住民登録がある)</p>
--	---

<p>◎もし、みんなが麻生区に暮らす外国人だったら、わたしたちの毎日の生活で困ってしまうことはあるのだろうか。考えてみましょう。</p> <p>◎東柿生の周辺で、誰もが(障害のある人、外国人も、健常者も)すみよい町になるような工夫があるかを調べてみよう</p> <p>第二次</p> <p>◎東柿生周辺で、住みよい町作りの工夫について調べてみよう。</p> <p>◎分かったこと・考えたことをまとめる。</p>	<p><input type="checkbox"/>小田急・南武線の駅表示を示し、違いについて興味を持たせる。</p> <p><input type="checkbox"/>国際交流センターに依頼して、外国人の方々にアンケート調査</p> <p><input type="checkbox"/>周りの人に意見を聞く</p> <p><input type="checkbox"/>インターネットなどで情報を採取</p>
---	---

1/30 当日

時間	活動	ねらい
2	・あいさつ	
32	・子どもたちの発表 6班(2組)、8班(1, 3組)	自信を持って人前で発言できるようにする。
40	・学生からのコメント、意見 ①子どもたちの発表に対するコメント ②学生が考える住みやすい町 話しやすいように、3～4つのグループに分けて、学生がグループに入るようにする。	子どもたちの発表の良い点をなるべくほめ、自信を持たせるようにする。 学生が経験したこと、感じたことなどを話すことで、子どもたちにこのテーマにさらに興味を持たせ、視野を広げる。
45	・まとめ	

感想

今回の授業は流れがシンプルで我々学生からすると、2回目と比べてよほどやりやすかったです。子どもたちはいろいろ調べてきたようで、まじめに発表してくれました。内容は言葉の壁に関する問題が発表の大半を占めました。ゆえにそれぞれの発表に重なるところが多かったのですが、考えてみれば私の日本での生活の中でやはり言葉が唯一苦勞するところなので子どもの話に色濃く表れるのも当然といえるでしょう。(ヴィルジル)

今回の授業は児童の発表が主でしたが、それぞれのグループが外国からきた人々が日々の生活で困っていることを調べ、自分たちなりにその解決策をまとめていて、とてもよい発表でした。発表の後、グループに分けて少人数で感想や意見の交換を行ったので、先生方とは違った、子どもたちに近い立場から話をすることができました。3回の実践を通して、はじめは身近に外国から来た人がいることにさえ気づいていなかった子どもたちが、外国から来た人も自分たちもみんなが住みやすい町にするにはどうしたらよいかということを少しずつ意識するようになったのではないかと思います。私たちの実践が、少しでも子どもたちのこれからの成長に役立ったらうれしいなと思います。(中川)

子ども達は大変よく調べてくれて、授業も時間通りに進行出来たので、大変良かったと思います。授業後の反省会においても、先生方と良い話が出来て、これからの繋ぐ意味で大きな進展をしたと言えるのではないでしょうか。(周)

子どもたちは調べて、工夫して発表していて良かったと思いました。6月当初考えていた内容とは少し異なるものの、第三回では子どもたちが発表し、自信をつけさせるという目標は達成できたように思います。こちらから一方的に伝えるだけでなく、子どもたちのセルフエスティームにつながるに授業になったと思います。社会科の授業と連携した内容であったことも良かったです。今回少しでも、知り考えたことをきっかけに、今後さまざまな人に出会うであろう子どもたちにとって少しでも役立つことになればよいと思います。(葛山)





サッカーフランス代表チームの写真を見せながら、みんなに
問いかけるヴィルジルさん（中央）と学生たち＝神奈川県川
崎市の東柿生小で

いろいろな文化を知り ちがいを認め合おう

いろいろな文化を知り、ちがいをみとめ合っていくと、東京外国語大学（東京都府中市）の留学生が、国際理解の出前授業を行っています。

「ボンジュール（こんにちは）。神奈川県川崎市東柿生小、六年生の教室にフランス語がひびきます。六月後半、フランスからの留学生、ヴィルジル・マクレ

さん（三十二歳）と日本人の学生三人が、授業におとすれました。三回の授業の第一回目です。最初みんなが聞かれたのは「フランスについて知っていることは？」

フランスはパリ、エッフェル塔、色が白い、青い目、鼻が高い……。さまざまなかえが出ました。

フランスの小学校のようすなどを話したヴィルジルさんたちは、次にサッカーフランス代表

チームの写真を見せました。「白い肌、青い目っていろいろあつたけど、いろんな肌の色の人があるよね。何でだろう？」フランス人とせつするのは、ほとんど

の子が初めて。岩下陸太郎くんは「サッカー選手しか知らなかったの、イメージがかわった」。中川沙月さんは「テレビや本とちがいで、じかに話すと「自分と関係のある人」だと感じる」。

授業を行ったのは、大学の多文化コミュニケーション教育支援室のボランティア。留学生約六十人をふくむ二百人ほどが登録しています。外国人の子どもの学習を支援する中で、子どもたちが楽しく学校生活を送るには、まわりの理解がかかせないと、こうした授業を始めました。

「ちがいをみとめ合つたらえで、みんな同じ人間だということをおわかってほしい」と、同大の武田千香助教授は話しています。
(中田美和子)

取材記事「いろいろな文化を知りちがいを認め合おう」

(朝日小学生新聞 2006年7月13日)

(2)川崎市立宮前平中学校

部日本語専攻3年)

1) 概要

報告者:木矢 恵梨子 (大学院地域文化研究科博士
前期課程言語文化コース2年)

活動日時 6月16日(金)
7月7日(金)
10月13日(金) 5校時(全3回)

参加メンバー

木矢 恵梨子(大学院地域文化研究科博士前期課程言語文化コース2年)、小宮山 陽子(外国語学部ドイツ語専攻1年)、伊藤 洋(外国語学部ロシア語専攻1年)、小谷 健太(外国語学部カンボジア語専攻1年)、河野 千早穂(外国語学部ポルトガル語専攻1年)、李 冬梅(外国語学

単元名 将来こんなふうになりたい
～外語大生との交流を通じて考えてみよう～

授業形態 学生との3回の交流学习を通して(現在、留学生2名(中国)と外語大生4名(1年)の予定)

以下は、川崎市総合教育センター国際理解教育研究会議と協働し作成したものである。

授業計画 (学生が参加する授業は3回)

	ねらい	授業(活動)内容
1	学生との出会いを楽しみ、相手の話を聞くなかで、自分と似ている点や異なる点に気づくことができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の多言語での簡単な自己紹介。 ・ 5文で自己紹介文を書く。 ・ 班ごとに講師と自己紹介。 ・ 学生と関わりのある国の写真を見て、質問する。 ・ 次回班ごとに話し合うテーマを決める。
2	相手との対話を通して、自分の考えを相手に伝え、他者の考えを受けとめることができる。(さらに、自分の考えを深めていくことができる)	<ul style="list-style-type: none"> ・ テーマについて各自ランキングを行う。(クラスで3つ、2つの班が同じテーマ) *テーマ(案) ①幸せって何だろう②なぜ勉強するのか③50年後の日本 ・ 学生を交えて、班ごとに意見交換を行う。 ・ 班ごとに話し合った結果を発表
3	「将来こんなふうになりたい」というイメージを抱く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2回目で扱ったテーマについて、さらに意見交換を行う。

2) 第一回目 授業案

報告者: 木矢 恵梨子(大学院地域文化研究科博士前期
課程言語文化コース2年)

活動日時 6月16日(金) 5校時 13時10分～14時

生徒の実態

入学して約2ヶ月がたち、だいぶ中学校生活に慣れてきた様子が伺える。全体的には素直で、前向きに取り組もうとする生徒が多い。しかし本校では海外生活経験をしたことのある生徒が比較的多く、初めの頃は、友人との気持ち

のすれ違いや自分の気持ちをうまく伝えられなかったために、トラブルになったことも多かった。また、休み時間など仲の良い生徒どうしではよく話しているが、人前で話をしたり、意見を述べることを恥ずかしがる生徒が多いように感じられる。

ねらい

学生との出会いを楽しみ、言葉や文化などに興味を持つことができる。話を聞いたり、自己紹介をするなかで、自分と似ている点や異なる点に気づくことができる。

活動の内容

学 習 活 動	◇ 支援と評価
1. 東京外国語大学の留学生と学生による簡単な自己紹介を聞く。5分	◇ 東京外国語大学の留学生の母語と学生が専攻している言葉(北京語、中国語、ドイツ語、ロシア語、カンボジア語、ポルトガル語)で、ゆっくり簡単な自己紹介(あいさつ・名前・好きなもの)をしてもらう。
2. ウォームアップ活動(未定)5分	◇ なごやかな雰囲気にする。
3. 「私は～です」の形式で5文の簡単な自己紹介文を書く。8分	◇ 自分が得意なことや、思い出に残っていることなどを書くように指示する。 (1文だけ事実と違う内容にして、クイズ形式にする?)
4. 学生をまじえて、班ごとに、先程書いた自己紹介文を発表する。1人の紹介を終えたごとに班員1人ずつ、特に興味を持った内容について質問する。25分 (学生の自己紹介の時に、国の様子や家族の写真を見せていただき、質問する。)	◇ なごやかな雰囲気でき自己紹介ができるように気を配る。 学生と握手をする。
5. 次回話しあうテーマを班ごとに希望を出して決める。5分	◇ (クラスで3つ、2つの班が同じテーマ) *テーマ(案) ①幸せって何だろう ②なぜ勉強するのか ③50年後の日本

感想

自己紹介の形式が有効だった。今回は自己紹介を通じてお互い理解してもらい、今後の活動につなげていこうとする狙いがある、成功したと考える。一番よかったのは自己紹介の形式ではないか。いつもの通りだったら、生徒の興味も参加意欲もなく、ただ一通り名を言って、生年月日に趣味で終わる。しかし、今回は1つだけのうそを混ぜて、ちょっとした「なぞなぞ」風にし、従来どおりの自己紹介形式とは違う斬新なものだった。どのように書こうかと生徒が一段と工夫し、思考能力も、倫理能力も鍛えられたと思うし、生徒の所有の常識や知識面も伺えることができだと思われる。生徒の反応は純粋でよかった。最初は積極振りをアピールしようと思ったのか、「私」抜きで、テンポ早く進んで行って戸惑いを感じたが、その後は皆さんバランスよく自己紹介をしていった。お互いに疑問を持つところや自分の感想などを子どもらしく、自分らしく率直に質問して、考え、判断する姿勢がかわいらしかった。(李)

生徒の反応

積極的に意見を出していた。特に男子生徒が活発に発言していた。一方、あまり発言をしない生徒もおり、こちらから質問をうながさなくてはならなかった。

反省・評価点

全員が均等に発言できるようにうながせなかった。生徒が積極的に発言してくれたのでやりやすかった。

初めての実践であり、また中学生はどういった話をするのかさえ、まったく検討がつかない状態だったので不安が大きかった。今回は単なる自己紹介ではなく、クイズ形式だったので、やりやすかった。というも話を聞くだけではなく、共に考える工程があったことが生徒とうまく時間を共有できたことに繋がった。講師としての立場を意識するより、

生徒と同じ視点にたって話そうとするほうが、お互いを理解しやすく、なにより打ち解けやすいと感じた。(伊藤)

生徒の反応

双方向型の自己紹介を取り入れたことで、生徒が固くならず、打ち解けた雰囲気になれたし、クイズ形式だったので、楽しんでいる様子だった。

反省点

積極的な子は、質問などよく発言していたが、やっぱり発言できない子もいて、そういう子たちから、どうやって言葉を引き出していかかが、課題だと思う。また、班ごとの話し合いだったので、他の班の人の声で、なかなか自分の班の人の声が聞き取りづらかった。

全体的な評価

もともとクラスの雰囲気がよかったのと、工夫された自己紹介だったので、オリエンテーションとして、とてもよい授業だったが、時間が、少し足りなかったと思う。(小宮山)

生徒間の意見交換はできていたか？

私の担当の班は男の子3人女の子3人の計6人の班で、男の子女の子も互いの問題提起に興味をもち、質問などをして今までよりもお互いのことについて知ることができた様子。

生徒と交流できたか？

生徒が自分から進んで私に意見を求めてくれたこともあって自分のことについて生徒に伝えられたと思う。

この活動でよかったこと

初めて生徒たちと会って比較的早い段階から交流ができたことがこれからの2回目、3回目の活動につながると思う。(小谷)

3) 第二回目 授業案

報告者: 木矢 恵梨子(大学院地域文化研究科博士前期課程言語文化コース2年)

活動日時 7月7日(金) 5校時 13時10分~14時

生徒の実態

本校は、静かな住宅街の中にあり、落ち着いた環境のなかにある。海外からの編入や海外で生活したことのある生徒が比較的多く、クラスにも、アメリカや台湾、香港での生活経験者が5名ほどいる。全体的には素直で、前向きに取り組もうとする生徒が多い。しかし、友人との気持ちのすれ違いや自分の気持ちをうまく伝えられなかったためにトラブルになったことも多かった。また、休み時間など仲の良い生徒どうしではよく話しているが、人前で話をしたり、意見を述べることを恥ずかしがる生徒が多いように感じられる。人の話をしっかり聞いて理解しようとする姿勢を身に付け、

自分の考えや意見を述べられるようになってほしいの思いから、まずグループ単位での話し合い活動を実施しようと考えた。

また、教育熱心な家庭も多く、受験に向けての勉強には熱心で、卒業後の高校進学には関心が高いものの、将来どんな職業につきたいのか、どんなふうに生きていきたいのか、について考えたり、イメージする機会が少ない。今回、東京外国語大学の学生や留学生との交流や話し合い活動を通じて、「将来こんなふうに生きたい」という気持ちを持って、自己実現のために、様々な活動に精一杯取り組んでいこうとする姿勢を見つけたいと考え、この単元を設定した。

ねらい

- ・ 学生との意見交換を通じて、学生との交流を深めていく。
- ・ 学生やクラスメートとの対話を通して、自分の考えを相手に伝え、他者の考え方を理解しようとするができる。

活動の内容

学 習 活 動	担任(◇支援と☆評価)	講師(◇支援と☆評価)
1. 東京外国語大学の留学生と学生とのあいさつ。2分		◇東京外国語大学の留学生の母語と学生が専攻している言葉で、あいさつする。
2. 今日の話し合いのテーマを説明する。2分	◇ クラス全体に今日の話し合いのテーマと方法を説明する。	

「今度の夏休みに1ヶ月ホームステイをすることになりました。6枚の写真の中でどこがいいですか？その理由を各班で学生と一緒に話し合ってみよう。まず、6枚の写真についてよく見てわかったことや疑問に思ったことを、各班で情報交換をしてみよう。次に自分が行きたいと思う写真を一つ決めて、カードに書き、班のみんなにその理由を説明してみよう。」

3. 班ごとに話し合う。
約35分

◇全班を巡回し、必要に応じて、支援をする。

◇各班で真ん中に座り、生徒と話し合い活動を行い、支援をする。

1. 6枚の写真をよく見て、わかったことや疑問に思う点など、お互いに情報交換をする。10分
2. 自分が行きたいと思う写真の番号をカードに書き、できたら理由も書く。3分
3. 一人ずつ選んだ番号とその理由を班員に説明していく。7分
4. 学生は、なぜ以下のような結果になったのかを生徒に投げかけ、話し合っていく。(互いの価値観の相違を認識させていく)
15分
 - a. 「多数派」と「少数派」に分かれた場合
なぜ大勢が同じ写真を選んだのか。例えば自然が豊かだからなのか、その理由を問いかけていく。
それに対し、少数派がその写真を選んだ理由は？
似た視点(理由)で選んだのか、違うのか？
 - b. みんな違う写真を選んだ場合
それぞれ写真を選んだ理由を考え、違う場合には互いの価値観が違うことに気付かせる。またはその中に共通性が見いだせる場合には、その点にもふれていく。
5. 班長は話し合いの様子を他の班に報告する準備をする。3分

◇各班の進行状況を見て、先に進むように促す。

◇生徒の支援をする。

<p>4. 班ごとに話し合った様子を報告する。6分</p> <p>5. 振り返りシートに記入する。5分</p> <p>6. あいさつ 2分</p>	<p>◇1～6班に今日話し合った様子を報告するように指示する。</p> <p>◇振り返りシートを班長に配り、記入させる。</p>	<p>◇東京外国語大学の留学生の母語と学生が専攻している言葉で、さようならと言う。</p>
---	--	---

感想

生徒の反応

- ・ 第一回目と比べると、生徒に積極性がみられた。意見が活発に交わされ、全員が話し合いに参加していた。
- ・ 生徒同士の意見交換が多くなった。

反省・評価点

- ・ 前回と比べると、生徒の意見交換が活発になった。2回目ということで、慣れてきたのかもしれない。特に、私の担当した班で前回ほとんど意見を言わなかった女性が自分から話し合いに参加していた。さらに、目についたのは生徒同士で質疑応答していたことだ。私が促さなくても生徒自身で疑問点をみつけて質問していた。
- ・ 反省点として、計画案のねらいまで生徒を誘導できなかったことがある。目先の質問などにつられてもっとも肝心なところを見逃してしまったようにおもえる。また、特定の生徒と話すために、他の生徒たちに、生徒同士で話し合いをするように言ったが、すぐ雑談をしていた。今後はやはり全員をいれた話し合いをしていかなければいけない。(伊藤)

生徒の反応

写真のビジュアルさや、普段目にする事のない他国の生活風景が、生徒たちを強く惹きつけたと思う。

テーマ設定がとてもレベルの高いものだったから、生徒がどこまで深く考えられたかわからない部分もあるが、自分なりに写真から見えるものを考え、伝えようとしてくれたと思う。

反省点

写真のビジュアルさは、生徒の興味をひく上ではとてもよかったと思うが、テーマが高度だったため、写真から直接わかること[気候、生活環境等]についての表面的な意見の出し合いに終始してしまい、議論に深みを持たせるころまでいけなかった。また、議論するということが難しかったようで、意見交換になってしまった。

全体的な評価

テーマが豊かさという難しいものであったため、生徒がどこまでその方向性で考えることができたか疑問だが、意見を出し合う際に、自分と違う価値観を持つ友達の意見も自分の考えに取り込もうとする姿勢が見えたりして、全体的にどの生徒も話し合いには積極的に参加していたと思う。(小宮山)

活動の様子

全体として、目標の1つであったディスカッションという形にはなっていなかった。誰かが意見を言うとそれに対する反論や意見が出ることはあまりなく、1つの意見から発展し

ていくことはなかった。また全体として 1 つの議場という感じではなく、班の中でもいくつかのグループに分かれてしまい、その中での意見の出し合いという場面が多かった。しかし、こちらから意見を求めると、考え込んだりすぐに発言したりの差はあったが、誰もが自分の意見を述べていた。

感想・反省点

今回は2回目ということで、以前より私自身も中に入っていけて、もう少し分かってもらえたのではないと思う。しかし今回難しいと感じた点は、生徒を 1 つにまとめ集中させることだった。こちらに話を聞いてもらうというのにも、一工夫が必要なかもしれない。お互いの価値観をより深く知り合うというのが今回のテーマの 1 つだったが、話し合いを続けていった中で生徒がそのことに気づけたかどうかははっきり言えない。しかし、1 つの事柄に関してこちらが予想していたのとは違った意見もでたりして、なかなかおもしろい内容だったと思う。(河野)

生徒の反応

1. 一時受け入れ中の生徒など、担当班の生徒が 7 名だったため、全員を一度に集中させることができなかった。特に机の端のほうに座っていた生徒同士で個人的に意見を交換していることが多く、全体でのディスカッションが成立しにくかったといえる。
2. 写真を見比べている途中で、1 人の男子生徒が閉鎖的な態度を示し、写真が小さすぎて何も見えないといひ始めた。そこで、他の生徒が言葉で写真 1 枚 1 枚を説明し、非常にいい情報交換をすることができた。しかし、そのため予定よりも時間がかかってしまい、後半の結果について、十分なディスカッションをすることができなかった。

反省・評価点

1. 本来 5 班を担当していたアンジェラさんが、大学の試験のため欠席していたので、私が代役をつとめた。私は前

回は、撮影を担当していたため、ほとんど生徒とは面識がなく、やや緊張しているように感じられた。第三回ではアンジェラさんが再び担当することになっているが、都合もあり不確実である。連続した授業効果を狙うのは難しい点もあるかもしれない。

2. 今回の授業案を決めるにあたっては、先生方と話し合う非常にたくさんの機会をいただいた。大学生として私たちが取り組む意義と、生徒に何を与えられるのかということについて改めて考えさせられた。
3. 授業案を検討する際、学生と生徒が同じ視点で意見を交換できるようにと考え、あらかじめどのような写真を見せるのかといった説明を、学生に対して一切行わなかった。しかし実践中には、学生が進め方に困難を感じる場面も多かったようで、あらかじめ見せてから授業に臨んだほうがよかったのではという反省がなされた。(木矢)

生徒間で意見交換はできていたか？

前回の授業より、難しいテーマについてのディスカッションだったが、みんな積極的に意見交換に参加していた。

生徒と交流できたか？

生徒が自分から進んで私に意見を求めてくれたこともあって、自分のカンボジアについての思いを生徒達に伝えられたと思う。そして私も生徒 1 人ひとりの考え方がわかってきた。次回の活動の時に生かせそうだ。

この活動でよかったこと。

生徒が自分の意見をもつことの難しさがわかったこと。そして生徒達がたがいに意見を交換することで、自分にはなかった考えを知ることができたこと。(小谷)

4) 第三回目 授業案

報告者: 木矢 恵梨子(大学院地域文化研究科博士前期
課程言語文化コース2年)

活動日時 10月13日(金) 5校時13時10分~14時

生徒の実態

本校は、海外からの編入や海外で生活したことのある生徒が比較的多く、クラスにも、アメリカや台湾、香港での生活経験者が5名ほどいる。全体的には素直で、部活動や行事、学習などに真面目に取り組もうとする生徒が多い。しかし、自分の気持ちをうまく伝えられなかったり、友人の気持ちを理解することができず、気持ちがすれ違い、トラブルになることも多い。休み時間など仲の良い生徒どうし

ではよく話しているが、意見を述べたり、人前で話することを恥ずかしがる生徒が多いように感じられる。また、教育熱心な家庭も多く、受験に向けての勉強には熱心で、卒業後の高校進学には関心が高いものの、将来どんな職業につきたいのか、どんなふうに生きていきたいのか、について考えたり、イメージすることが少ないように感じられる。

ねらい

- ・学生との対話を通して、自分の現実をみつめ、自分の生き方、考え方について考えることができる。
- ・学生への質問を通して、学生の中学時代や目指していることなどを知り、学生の考え方を理解しようとすることができる。

生徒から学生への質問・回答

外語大生の 李 冬梅 さんから 1班のみんなへ

☆みんなからの質問の中から5つ選んで、答えてもらいました。どんな話が聞けるでしょうか？

Q1. 李さんのご家族はどんな方ですか？
A. 私は四人家族です。父は小さな水力発電所で働いていて、母は無職です。父は落ち着きが足りない性格です。その点は母がカバーしています。私の性格は父に似て、顔は母に似ています。下に今年18歳になる弟がいますが口癖は「なんでもいいよ」、「別に」とかでちょっと情けないですね。今年大学試験を受けたのですが、成績がよくなく今家族全員でどうするかと頭を悩ましています。家族のことは面倒くさいけど、大好きです。
Q2. どんな中学生でしたか？
A. 周りから認めてもらうために一生懸命でした。家でも学校でもいい子だったので、ちょっとした証書をもったりして、両親の誇りだったかも…いつも友情に飢えていて、「親友」二文字に弱く彼(彼女)のためなら何でもやりました。しかし、やるだけで自分の考えをきちんと伝えることができなかったので、友達に誤解され悔しくてよく泣きました。昔も今も泣き虫です。
Q3. 今の中国の子供たちと私たちの違いは何ですか？
A. 地域経済の発展状況によって子供達を取り巻く環境は全然違います。すごく恵まれた環境化で勉強や個人技能を伸ばせる子供がいれば、条件が揃わず勉強をあきらめなければならぬ子供もいっぱいいます。みんなすごく過酷で狭い選択肢内で一生懸命に勉強しています。勉強できる子はどんどん伸ばしてあげて、勉強できない子は切り捨てられるといっても過言ではないです。日本の子供達は本当に恵まれていると思いますよ。学校に優れた物的環境が整っているから個性を重要視する教育を受け、多彩な部活もできる楽しい学校生活を過ごしていますよね。だから自分が恵まれていることを知って、何でも頑張してほしいです。

Q4. 理想の大人とは、どんな人だと思いますか？
A. 日本の年齢の数え方だと私は今年 23 ですが、中国の数え方だと今年 25 です。どちらでも年齢からするとおばさんと呼んでもいい「大人」ですね。でも、まだ自分が大人になった気がしませんし、どんなのが大人かはっきりと分からないままよく「大人にならなきゃ」と考えたりします。今の段階で私が言える大人というのは「社会のルールに旨く則って、自己管理ができる人」だと思います。そして「理想な大人」というのは「自分の夢を見失わずそれに向かって頑張れる人と、自分の夢を実現できた大人」だと思います。みんなはまだ中一ですが、所所は私よりも全然大人です。一つだけハッキリいえるのは大人であるか子供であるかは年齢で決められないとのことかな、
Q5. どんな生き方をしたいですか？
A. 日本に来て 6 年目に突入しました。毎日夢と現実の間で悪戦苦闘しています。バランスがうまく取れなくていつもぎりぎりの生活を送っています。原因は自分にあると思いながらも、現状から逃げたり言い訳をしたりしています。このような自分だから、今描いている将来の生き方は①目の前のことを一日きちんとできるように頑張ること(リアルにいうと大学を無事に卒業すること)②大学院に入り学位をとること、この間に夢をなるべく具体的に描くこと(日本語教育にかかわる事業で自分が一番向くものを絞ることかな?)③経済力をつけること(お金がないと本当に大変だから、夢にも資金がいっぱい必要だから)④夢の実現段階に入ることなどなどですかね。夢も生き方も時間とともによく変わります。夢と生き方を貫くことも大事ですが、変わるというのもある種の進歩ではないですかね。

外語大生の 木矢恵梨子 さんから 5班のみんなへ

☆みんなからの質問の中から 5 つ選んで、答えてもらいました。どんな話が聞けるでしょうか？

Q1. どんな中学校に通っていましたか？
A. 私は中高一貫の女子校に通っていました。というのも、6 歳からバレエを習っていて、高校受験の年にある発表会を、受験勉強に邪魔されたくなかったのです。それくらいバレエが好きだったので、高校受験のない中高一貫の学校に進学しようと思いました。(でもバレエは背が伸びすぎてしまったので、中学校でやめました。)
Q2. 受験前の勉強方法を教えてください。
A. 外大をめざしていたので、ほとんど英語ばかりやっていました。といっても、英語はすごく嫌いだったので、飽きると世界史の本などを読んでいました。どちらかというと、世界の出来事に対する関心が強かったように思います。基本的には、自分の夢に向かって、好きで勉強していると感じていたので、嫌だと思ったことはないです。
Q3. 大学は、休みがなくなるほど、忙しいですか？
A. 私はサークルなどに入っていなかったので、一年生のときはそれほど忙しくありませんでした。年々、忙しさが加速してきているように思います。でも大学生は、あらゆることに触れて自分の興味を深めることが本分だと思っているので、雑誌を読んだり、映画を観たり、旅行に行ったりするのも勉強の 1 つ、というわけです。でも授業料がもったいないので、自分で選択した授業を休んだことはほとんどありません。
Q4. 日本と専攻語国の文化などの違いや同じところを教えてください
A. イタリアと日本は、違う所だらけで、同じところなんて、人間だということだけじゃないかと思ってしまうくらいです。人生に対する構え方が全く違います。社会より何より、自分が人生を楽しむことを優先していることが最大の違いかもしれません。

Q5. 将来、一番頑張りたいことは何ですか？

A. 本を作る会社に就職することが決まったので、はやく仕事を覚えて、本を作れるよう一人前になることが目標です。世界中から、自分がいいと思う本を見つけて日本で出版することが夢です。

外語大生の 小宮山陽子 さんから 3班のみんなへ

☆みんなからの質問の中から5つ選んで、答えてもらいました。どんな話が聞けるでしょうか？

Q1. 中学生時代、どんな中学生でしたか？どんなことに熱中していましたか？部活は？好きな教科は？

A. 中学生の頃は、外国大好き！！という感じで、その頃から洋楽にはまっていました・笑。私は、校則が厳しい私立に通っていたのですが、その中ではかなりふざけていた方だと思います・笑。部活はESSに入っていました。好きな教科は、やっぱり英語でした。でも、成績は全然よくなかったですが・・・。

Q2. 高校はどんなところですか？楽しかったですか？

A. 中高一貫だったので、中学の時と雰囲気は変わりませんでした。高校生になると勉強も大変になったけど、運動会や文化祭を運営する側にまわって充実していました☆

Q3. 中学時代の夢は、何でしたか？

A. 夢・・・特になかったですが、英語は話せるようになりたいと思っていました。今も実現していないですが・・・。

Q4. どうして外語大に行こうと思ったのですか？中学生の頃から、外語大に行こうと思っていましたか？

A. 外語大には、26言語の学科があるということが、まず魅力的でした。とは言っても、実際に自分が専門的に学べる言語は限られてきますが、こういう環境にいるというだけで、日本という枠を超えた視点に立てる気がします。私は、日本の文化とは異なる文化を知ることが大好きです。それは、中学生くらいの時から、自覚していたことです。異なる文化を知るということは、さまざまなものの考え方を知ることにつながります。そして、結果的には、自分の国を違う視点から見つめなおし、深く理解することができると思います。文化は、言葉と直接結びついています。だから、言語を学ぶことは、その言語を内包する文化を知ることになります。私が、外語大に行こうと思ったのは、確かに他の国の文化に対する興味があったからというのも理由のひとつですが、自分の価値観の幅を広げて外国だけでなく日本も、もっと深く見つめなおしたいというのが、一番の理由です・・・と、優等生的な答えになってしまいましたが、やっぱり言語というツールを使って、全く異なる文化世界の人とつながれるのは、単純に楽しいでしょう。中学生の頃は、大学について考えたことはないです・・・。

Q5. 将来、どういう人になりたいですか？

A. 外語大に行く理由とかぶるのですが、物事をいろいろな角度から見ることのできる人になりたいです。ドイツ語と英語がきれいに話せる人にもなりたいです・・・。

活動の内容(二重カッコは、学生と生徒の協働活動)

学習活動	学生の役割	◇教師の支援 と ☆評価
<p>1. 今日の授業のねらいについて知る。3分</p> <p>2. 班ごとに、学生に中学生の頃や、どうして外語大で学んでいるのか、これからどのように生きていきたいかなどについて、事前を書いてもらったプロフィールをもとに、班長が司会を担当し、インタビューを進める。25分～30分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の質問に答えながら、自分の目標をイメージさせるために、生徒にも質問をしていく。 	<p>◇今日の授業のねらいと方法を説明する。</p> <p>自分自身どんな生き方をしたいのか、について考えさせるように、発問していく。</p> <p>☆ 学生の話聞き、学生の考え方を理解しようとしているか。</p> <p>☆ 学生へのインタビューを通して、自分自身どんな生き方をしたいのか、について考えようとしているか。</p>
<p>自分自身を振り返り、これからどのような生き方をしていきたいか、などについて考えていく。</p>		
<p>3. 時間がとれた班は、下の項目を参考にして、自分が大事だと思うものについて、意見交換を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ どうしてそう考えたのか、生徒に考えさせるような質問をしていく。 	<p>◇話し合いにあまり参加していない生徒や、話し合いがうまく進んでいないは班に入って支援する。</p>
<p><u>あなたにとって、どんな生き方が理想的ですか？</u> (この授業までに生徒の意見を加えて、10項目程度を提示する)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. あまり、好きでなくても収入の多い職業を選びたい。 2. 興味を持てる仕事が一番適していると考え、自分を生かす道だと思ふ。 3. 将来、有名になるように努力し、それなりの地位や名誉、財産を得たい。 4. 仕事で無理をしないように、健康を第一にして生活したい。 5. 多くの人々に役立ちたいので、ボランティア活動などを積極的に行いたい。 6. 私は趣味や好きなことに時間やお金をかけ、楽しく生活していきたい。 7. 他人にさしずを受けず、自由に仕事をしたい。 8. たとえ、上司や会社と意見が食い違っても理想を実現するために頑張りたい。 9. 仕事のためなら、自分の時間を犠牲にしても構わない。 10. どんな時でも、自分の気持ちや考えを偽らないように生活していきたい。 		
<p>4. 学生へのインタビューを通じてわかったことなどを、各班の班長が報告する。10分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生から3回の授業の感想を述べてもらう。 	<p>◇今日の授業及びこれまでの3回の交流授業について、振り返りをさせる。</p>

感想

生徒に質問し、考えさせることを意識し、話を進められたと思う。自分の意見をはっきりのべることはできたと思う。その反面、生徒の考えを引き出すことにあまり時間を割

けなかったような気がする。話を始めると、自分の話に酔っているのを自覚し、恥ずかしかった。最近になって考えるようになった、自分の生き方像。中学1年生には難しい話だったと思うが、これを契機に考えるきっかけとなったな

ら大変うれしく思う。

普段頭の中で考えていることは、言葉にしようとするときごく難しかった。今回の授業で一番収穫を得たのは自分であり、大変良い経験だった。

実践において心がけたこと

前回、活動のねらい通りに話を進められなかった反省を生かし、活動内容の内容通りに話をすすめられるようにした。

3回の活動を通しての感想

1回目、始めて授業をするときはどうなるのか大変緊張したが案外なんとかなるもんだと実感した。2回、3回と回数を重ねるうちに生徒もなじんでくれて、とても楽しかった。

特に3回目はテーマが大変難しかったため、授業に行く前に何を話すべきか、何を伝えればいいのかすごく考えた。まとまらない状態だった。しかしその場でしゃべったことは普通にげなく考えていることだった。一見無駄に思えることがこういう場で生きていることを実感し、うれしく思った。3回目で感じたのは、何を伝えるべきかということではなく、何を伝えたいかということが一番大切になってくるということ。この活動は自分にとって稔り多い物だった。(伊藤)

生徒の反応

話題がわたしたち自身のことで話す内容に困ることがなかった。話を違う方向に発展させやすく生徒の方も興味を持ってついてきてくれたと思う。こっちが、話を振ると沈黙になってしまうこともあったが、問いかけに対して真剣に考えてくれて積極的に発言しようとしてくれていた。

反省点

授業では、生徒との言葉のキャッチボールを目指していたが、生徒が質問して私が答えて話がとまってしまうことが多かった。私も話が双方向になるように努めた。一方通行的な対話になりがちだった。やっぱり発言に積極的な子とそうでない子がいるので、どうやって、みんなが話の輪に加わるようにするかを考えなければいけないと感じた。

全体的な評価

今回は、私たちのフリートークのような感じだったので、生徒の方もとつきやすかったのではないと思う。

内容も、私たちの中高生の頃のことや今の学生生活のことが大半を占め、生徒にとって身近で興味深かったようだ。特に、大学生活のことは、想像がつかないらしく、その関連の話はとても反応がよかった。確かに、言葉のキャッチボールそのものがスムーズにできたとはいえないが、今までの授業の中で、一番生徒にとってメッセージ性がある授業になったのではないと思う。

全3回を通してのまとめ

各、授業それぞれテーマをもってしたが、人とコミュニケーションするという一貫した包括的なテーマがあった。確かに、普段のたあいなおしゃべりなら、誰とでも気負いなくできるが、1つの深いテーマに対して、自分の意見をしっかり持ち、他者にわかりやすく伝え、また他者の意見を聞くというのは、実際には難しいことだ。今回のボランティアで、そのことをとても強く感じた。わたしたちは、一応授業をサポートする側として参加したけれど、テーマが豊かさや職業価値観、コミュニケーションなど普遍的なものだったので、生徒と話す中で、私のほうが考えさせられることが多かった。今、インターネットなどのデジタルメディアが発達してコミュニケーションの形が多様化している中で、コミュニケーションの重要性はより高まっているから、こうした形の授業はとても必要だと思う。(小宮山)

活動において心がけたこと

まず、こちらからも問いかける際に、将来について考えるような問いをしていくことを心がけた。いかに問いかければ、生徒が自分のことや、これからのことを考える機会になるだろうかに注意して対話を行った。また、1人の生徒が質問をしてくる際に、1対1の会話になってしまわないよう、できるだけ全員と話すことを意識した。

感想・結果

今回は3回目ということもあり、みんな比較的うち解けた雰囲気の中で行え、一部の生徒からは積極的な発言もあって、私自身一番満足のいくものだった。話をしていく中で将来つきたい職業、今好きなこと等を訪ねる機会もあり、少しは授業の目標を達成できたのではないかと思う。初め席に着く前に女子生徒2名が私を呼びに来てくれたり、席に着くと、今回初めて会う生徒のことを紹介してくれたりすることがあったのだが、その時は私もその班に馴染むことができたのかな、と感じ嬉しかった。反省点は、最後の、将来優先したい事柄を話し合ったときに、1人ずつ理由を挙げていっただけで終わってしまったので、もう少し議論等で内容をふくらませることができると良かった。また、今回初めてあった生徒や自分からはあまり積極的に発言しない生徒とは、どうしても話す回数が減ってしまったのが残念だ。

3回を通しての感想

最初はやり方、目的、全体の流れ等がよく分かっておらず、また中学1年生という年齢もぴんとこないこともあって多少不安があった。しかし3回の作業を通して徐々に方向が見えてきて、生徒とも互いに知り合えるようになった。3回を通してまず重要だと感じたのは、実践だけでなく、その過程の方向を決める話し合いにも参加することだ。私が参加したのは2回目の授業の前の話し合いだったが、それに加わることで意図や方向性が理解でき、自分も参加し考えることで、新たな視点で2回目の実践に望めた。実践では計画通りに事を運ぶことが難しく、目標をどれだけ達成できたか自信はないが、中学生と話し合う機会がもてたことは普段にはない、非常によい体験だった。私自身も実践を行う際に自らを振り返るといった作業を行うことで、新たな発見や気づきがあり、得たものは多かった。3回という回数でしっかりしたことはできなかったかもしれないが、みんなが何らかのことで感じてくれていたら嬉しく思う。(河野)

実践において心がけたこと

出来る限り即答する〔直感で答える〕

感想、結果

第一回、二回よりもみな笑顔で受け答えができていた。談話みたいな雰囲気が進めることが出来た。そして私がカンボジアについての質問に答えていることで、興味を持ってくれたみたいで今度が外祭に来るそうです。

3回を通しての感想

生徒の反応の変化を見ることができた。特に質問に対する姿勢が積極的になっていった点。(小谷)

(3)川崎市立土橋小学校

1) 概要

報告者: 甲田 友子(外国語学部ドイツ語専攻4年)

外大の学生が土橋小学校で授業を行うのは、今回が初の試みである。

そもそも土橋小学校は今年度開校した新しい学校であり、川崎市で帰国児童の受け入れを積極的に行っている富士見台小学校等、周辺の三校から児童が集まっている。そのため特徴として、各クラスに数名ずつ海外での生活経験のある子どもがいる。子どもたちの外国への関心は高く、習い事で英語をやっている子どもも多い。

児童の学力は比較的高く、漢字や計算などよくできる子どもが多い。また話すことも上手で、人前でも自分のことをしっかり話せる子が多い。しかし、人の話を聞くのは苦手で、他人の話に耳を傾けて内容を聞きとったり、それについて的確な意見が言える子どもは少ないという。

そこで今回、外大の学生が行う授業は、「聞く力を育てる」ことに重点を置いて進めていくことになった。

授業は、4年生の1~4組、合計4クラスで実施する。「なにが作れるかな?力をあわせて~留学生・日本人学生との交流を通して~」と題し、全3回の授業を通して子どもと学生とで制作活動を行う。参加学生は、日本人学生3人、留学生3人の計6人だが、授業の際には1人ずつ、5~6人の子どものグループを担当する。何を制作するかはグループごとに異なり、まず学生から大まかな枠組みを設定

した上で、子どもとの話し合いで具体的なことを決定していく。そのため、同じ学生が担当していても、クラスごとに違った活動をするようになる。国際理解教育というと、留学生と日本人学生がペアになり、留学生の国の文化・慣習を紹介するという授業が多い。しかし今回の授業はそうではなく、協働で留学生や日本人学生と何かを作成する過程の中で、子どもが「その人の背景に流れている文化や考え方を感じ取れる」ようになることをねらいとしている。

また「聞く力を育てる」ことを重視しているので、学生が子どもを指導していくような授業にはせず、子どもと一緒に話し合う姿勢を取ってほしいとのことだった。そのため学生は、グループ内での子ども同士の意見交換を大切に授業を心がけた。

活動日程

① 6/22	第一回目 実践授業
② 6月第5週	この授業のための自習時間を、1時間各クラスでとる グループで制作を進める
③ 7月第1週	同上 自習時間
④ 7/13	第二回目 実践授業
⑤ 9月第2週	自習時間
⑥	自習時間
⑦ 10/26	第三回目 実践授業
⑧ 10/30	発表会 制作したものを発表する

授業期間外も FAX を使って、学生と子どもたちはやりとりをした。自習時間が終わると、子どもからどこまで作業が進んだかの報告と、質問などが支援室あてに FAX で送られてくる。学生はそれに答えて、小学校に FAX を送り返す。4クラス全てで、頻繁にこのやりとりを行った。

最後の発表会の様子をビデオに撮影し、それを学生の親や友達に見てもらった。そしてその見た人に感想を書いてもらい、それを小学校に送った。これは子どもと学生の交流と、「学生の親・友達が見る」ということで子どもの発表会へのモチベーションを高めることを意図したものである。

参加メンバー

遠田友香(外国語学部日本語専攻 4 年)、相川奈美(外国語学部フランス語専攻 3 年)、砂田かおり(外国語学部ドイツ語専攻 1 年)、鄭 仁淑(外国語学部日本語専攻 3 年)、朴 志禮(外国語学部日本語専攻 3 年)、モンコンチャイ・アッカラチャイ(研究生)、甲田友子(外国語学部ドイツ語専攻 4 年・コーディネーター)、廣瀬美穂(外国語学部ドイツ語専攻 4 年・コーディネーター補佐)

タイトル

「なにが作れるかな？力をあわせて～留学生・日本人学生の交流を通して～」

各班の主な制作内容

遠田友香： 寸劇

相川奈美： 飛び出す絵本

砂田かおり： ストリートチルドレン、難民などの暮らしについて知った上で、発表会ではクイズ形式で他の班にこうした子どもたちの暮らしについて紹介する。また「僕たち・私たちの望む世界・住みたい世界」をテーマに班で 1 枚絵を作成する。

朴 志禮 : 「夢の場所」の絵を、1 枚の大きな画用紙に描く

鄭 仁淑 : 紙芝居を、写真を使って作成する

モンコンチャイ・アッカラチャイ: タイの歌「ぞうさん」を歌い、それにあわせて踊り
を考える、タイ文字で
自分の名刺をつくるなど

2) 第一回授業報告

活動日時 2006 年 6 月 22 日(木)、2 時間目～5 時間目
(9:30～14:15)

活動の内容 事前に学生のプロフィールとともに、以下の
ように、その学生がやりたいことを子どもに知らせている。

遠田友香	劇
相川奈美	飛び出す絵本
砂田かおり	世界の子どもについて知る
朴 志禮	夢の場所を考える
鄭 仁淑	写真を使って紙芝居をつくる
モンコンチャイ・アッカラチャイ	タイ文字を使った制作・タイの歌やダンス

子どもは第一回の授業までに、1 人ずつ具体的な案を
考えてきている。例えば、劇の班ならどんな劇がやりたい

か、絵本ならそのストーリーなどである。

第一回目の授業ではまず、その子どもが出してきた案
(6 人グループなら 6 つの案が出る)をつきあわせて、話し
合いながら実際に何をするか決める。また、次回(7/13)の
授業までに、子どもが自習時間でやっておくことの、課題
を出す。

授業の流れ

学生が前に出て自己紹介。この時、クラス全体に向
けて「聞くことの大切さ」を知らせる。

↓

各グループに分かれての話し合い。はじめはお互いを
知り合うために自己紹介を行う。

↓

グループでその日決まったこと、次回までの宿題を子ど
もの代表が発表。

また、学生からそれぞれのグループがどのように話し合え
ていたかを発表する。

メンバーからの報告

1. 報告者:相川 奈美(外国語学部フランス語専攻 3 年)

活動の内容 制作テーマ「飛び出す絵本」

(1) 1 組 (2 時間目)

行ったこと	児童の反応
飛び出す絵本のテーマを決め、次回までにやることなどを話し合った。 テーマ「冒険物語」 まず船で海を航海している場面から始まり無人島にたどり着く。最終的には無人島で宝を発見するという冒険物語。	みんなそれぞれやりたいテーマを考えてくれて、話し合いがスムーズに進んだ。また決まったテーマに対しても積極的に意見やアイデアを出してくれた上に他の人の行ったアイデアにも耳を傾けていたので内容の濃いものができた。

(2) 2組 (3時間目)

飛び出す絵本のテーマを決め、次回までにやることなどを話し合った。 テーマ「未来にあるだろうもの」 未来にあるだろうものを想像して、それを説明するような仕掛けを組み込んだ絵本をつくる。	はじめはテーマを考えていなかった子どもたちもテーマが決まってからはちゃんとやりたいことを発表した。恥ずかしがって自分の意見を言えない子がいたがリーダーになった子が話し合いをちゃんとまとめていた。
---	---

(3) 3組 (4時間目)

飛び出す絵本のテーマを決め、次回までにやることなどを話し合った。 テーマ「未定(話をつくりそれを絵本にする)」 様々な意見が出たために1回目の授業で1つにまとめることができなかった。しかし今後の授業で上手くストーリーをまとめていく。	子どもたちがそれぞれに自分の思ったことをどんどん発言はしたものの、話し合いながら1つにまとめることがあまりできなかった。しかし、班の子どもたち同士がお互いそのような人の話を聞こうとしない態度を注意しあっていた点はとてもよかった。
--	--

(4) 4組 (5時間目)

飛び出す絵本のテーマを決め、次回までにやることなどを話し合った。 テーマ「世界一周旅行」 班のメンバーである6人それぞれが自分の興味のある国について紹介する仕掛け絵本をつくり紹介する。1人1ページを担当しそれを最後にまとめて本にし、それを見た人たちが世界を旅行した気分になれるようにする。	ちゃんと事前にそれぞれがテーマを考えてきてくれたので話し合いが進みやすかった。また決まったテーマに対しみんなが興味を持ち、積極的に様々なアイデアを出せた。人の話を聞くという態度もなかなかできていたと思う。自分が興味を持った国を調べながら本を作っていくために子どもたちそれぞれが責任を持って自発的に取り組もうとしていた。
--	---

反省点

今回の授業では事前に模擬授業などを行っていたわけではなかったのでぶっつけ本番の状況になってしまい話し合いの進め方が手探り状態になってしまったと思う。また、子どもたちから出た多種多様なアイデアを1つにまとめる際、本当ならば全て子どもたちに任せるべきだったと思うが時間の問題上自分で話をまとめてしまった。これらの反省点生かし、次回からは子どもたちが話し合いをスムーズに進められるようにもっと時間配分を上手く考えながら話し合いを導く役になれるようにしたいと思う。

感想

子どもたちが自由な発想をもっていてどんどん意見を出すところに感心した。また自分たちが興味を持ったことに対して積極的に発言をするところもよかった。自分の考えと他の人の考えを話し合いながら融合しようとする姿にも感心した。しかし、中にはまったく話を聞かない児童や自分の意見を譲らない児童がいたため、話し合いがうまく進まないときもあった。しかしそのような状況においても私が注意するだけでなく、子どもたちがお互い注意しあっている点はとてもよかったと思う。

2. 報告者:砂田かおり(外国語学部ドイツ語専攻1年)

活動の内容 制作テーマ「世界の子どもたち」

(1) 1組 (2時間目)

行ったこと	児童の反応
<p>資料写真を提示してクイズ ～コレは何をしているところ？ どうして？ というクイズを出し、児童に写真(6～7枚)から見える世界の子どもたちに関連する問題を考えさせる。世界地図で、写真の場所も確認させる。特にどうして？という部分を深く考察させる。</p> <p>写真を見終わった後は、戦争や飢餓に関する写真集を見せてその解説をした。</p> <p>～宿題:ワークシートを埋める。ワークシートはクイズをよく聞いていれば解けるようになっている。一部調べるように要求してあるが、基本的には自分たちで考えて行う。また、世界の子どもたちの現状についてクラスみんなに詳しく知ってもらうためにクイズを作成する。クイズでは正解のみ提示するのではなく、その詳しい説明まで要求する。</p>	<p>基本的に落ち着いた児童が多く、話はよく聞けていた。宿題もよく理解していたように思う。写真の場所を地図上で確認するときは興味津々といった様子だった。歴史や戦争について見識のある子どもが多かった。</p>

(2) 2組 (3時間目)

同上	<p>おとなしい子が多く、女の子は正解を必死に出そうとして引っ込み思案になっていたように思う。男の子は行っていることが理解できなかったのか定かではないが、意見を言わない児童が多かった。こちら側としては児童が提示した解答の正確さではなく考察の過程がより大切であると考えているので、調べるのではなく児童同士の議論を通してグループとしての解答案を導き出してほしい。また、障害者の児童にどう接すればよいのか分からず嫌な思いをさせてしまったように思う。</p>
----	---

(3) 3組 (4時間目)

同上	<p>写真や説明をよく見、よく聞けており、意見も1人1人まんべんなく言えていた。途中から集中力が欠け、つまらなそうにする児童もいたがみな興味津々といった様子だった。ただこちら側の説明が悪かったのか、宿題やその後の展望についてはよく理解できていないように思った。机椅子の配置が適当だった。</p>
----	---

(4) 4組 (5時間目)

同上	おとなしい児童が多く意見がどんどん出てくる、といった様子ではなかった。よく聞けているものの、聞く環境のせいもあってか注意力が散漫していたように思う。またある1人の児童が写真について深く考えようとしておらず、そちらに注意ばかりいってしまい思うようにうまく進まなかった。だからと進んでしまったため途中で児童を飽きさせてしまった。宿題についてはよく理解できており、児童だけの話し合いは比較的スムーズに出来るのではないだろうかと思う。
----	---

反省点

「小学校4年生」の実情や学習・知識レベルについて十分に理解できていないままグループワークに臨んだため、こちらの予想と食い違いがあり若干軌道修正した。児童の見識が予想外に深く、こちら側が出題するクイズ(ワークシート)は児童にとって簡単すぎたように思える。今回は「世界の子どもたちを知る」というテーマのもとグループワークを行ったため「聞く力」が占めるウエイトが大きすぎ、その結果児童同士の話し合いの中で譲歩したり意見を戦わせたりということが全くなくなり、児童を途中で飽きさせてしまった。

感想

概ね予定通りに進んだが、児童の見識の深さには驚かされた。私が担当したグループは人の話をよく聞けて、自分の意見をきちんと言う児童が比較的多かった。その反面、聞かない児童は全く聞かないという二極化が見られたように思う。クイズや絵(絵は9月に入ってから行う)の作成を通して創造・想像力を働かせて世界の子どもたちについて表層的な情報のみを知るのではなく「なぜ」の部分をしっかり考えてほしい。

3. 報告者:遠田友香(外国語学部日本語専攻4年)

活動内容 制作テーマ「劇」

(1) 1組 (2時間目)

行ったこと	児童の反応
子どもたちが具体的にどのような劇を作りたいのかの話し合い。台本を作るのか、既存のものをやるのか話し合った。宿題は、やりたい漫画を持ち寄ること。	興奮してしまって、少し違う方向に行ってしまうこともあったが、意欲的であるゆえの行動であると認識している。

(2) 2組 (3時間目)

どんな劇をやるかの話し合い。1組の反省を生かして私がそれとなく国語の教科書の小説を提案。四年生の教科書的小説を英語に訳して上演することに決定。配役も決定した。宿題は必要な衣装や小道具を準備すること。	全員女の子だったということもあって、最初はみんな恥ずかしがって意見を言わなかったが、教科書のような身近な小説で話をすすめると知っていることを一生懸命私に話そうとしてくれていた。
---	--

(3) 3組 (4時間目)

どんな劇をやるかの話し合い。2年生の教科書の小説に決定。 宿題は配役の決定と必要な衣装や小道具を準備すること。	子どもたちによるいろいろな提案が錯綜してはじめは混乱したが、台本が決定すると、配役について楽しそうに考えていた。ただ、教科書の別の小説について話し込む児童もいて、戸惑ってしまった。
--	--

(4) 4組 (5時間目)

どんな劇をやるかの話し合い。白雪姫を英語に訳して上演することに決定。配役も決定。 宿題は必要な衣装や小道具を準備すること。	配役でもめたが、譲歩する子もいて、穏便に決めることができた。英語が話せる子がいるようで、その子の意見に流されがちなのもあって、それが心配である。
--	--

反省点

子どもたちにすべてをゆだねるつもりで当日挑んでしまったので、こんなに話がすすまないという想定をしていなく、甘く見ていたなと反省しました。いくつか台本を用意していくべきだったかなとおもいます。

感想

まずは、小4のパワーに圧倒されました。課外授業ということもあってかみんな興奮していてまとめるのが大変でした。大学生の講師として、ふざけて話し合いを妨害する子どもたちにはどんな対応をすればいいのかわかりませんでした。でもそんな中、まとめようとしていたり、きちんと話を聞こうとする子もいて、大人になると消えて行く個性も、子どものうちはみんな豊かなんだと実感しました。それなのに、子どもたち同士苗字で呼ばせあうやり方は、子どもを無理にオトナに近づける方法のような気がして、不自然さを感じました。

4.報告者: 朴 志禮 (外国語学部日本語専攻3年)

活動内容 制作テーマ「夢の場所」

(1) 1組 (2時間目)

行ったこと	児童の反応
題(夢の世界)に沿って話し合い。夢の世界にあって欲しいものとその理由を発表してもらった。	男の子たちがとても活発でよく発表してくれたがその分、女の子たちは黙ってしまうような気がした。1人ずつ発表することを念頭に入れておくようにするのが重要。

(2) 2組 (3時間目)

1組と同じ。	女の子だけの班で落ち着いた感じ。聞くのは上手なんだけど話すのが苦手だと思う。両方の力を育てられたらと思う。
--------	---

(3) 3組 (4時間目)

1組と同じ。	男女の児童のバランスが取れていてよかった。話を聞こうと努力するのが結構みえた。
--------	---

(4) 4組 (5時間目)

1組と同じ。	3組と似たような感じを受けた。
--------	-----------------

反省点

クラスによって同じ作業でもそれぞれ反応が違ったので、それに沿って進行方法を工夫しないといけないと思う。

次回までの課題は、4回目の授業(7/13)に実際ものを作るので具体的に何が作りたいかをリストアップしておくこと。紙に書き留めておくので良い。(希望としては20~30個くらいは考えてもらいたい)

5.報告者:鄭 仁淑 (外国語学部日本語専攻3年)

活動内容 制作テーマ「写真を使った紙芝居」

(1) 1組 (2時間目)

行ったこと	児童の反応
紙芝居でどういう物語をするか、そして何枚くらいの紙芝居にするかを話し合った。 その結果、空を冒険する話をやることに決めた。	女の子だけのグループだったのでおとなしかったが、しっかり自分の意見を述べつつほかの人の話もよく聞いていた。

(2) 2組 (3時間目)

紙芝居でどういう物語をするか、そして何枚くらいの紙芝居にするかを話し合った。 その結果、天才サッカー少年物語をやることを決めた。	男の子だけのグループだったせいか、活発すぎる感じだった。 意見がみんなバラバラでまとめるのが大変だった。が、誰も意見を言わないよりはいいかなと思った。
---	--

(3) 3組 (4時間目)

紙芝居でどういう物語をするか、そして何枚くらいの紙芝居にするかを話し合った。 その結果、桃太郎物語をやることを決めた。	みんな意見を言ってくれた。また、他の人の意見に対して自分の意見を譲ったりしていた。話がけっこう進んでよかった。
--	---

(4) 4組 (5時間目)

紙芝居でどうい物語をするか、そして何枚くらいの紙芝居にするかを話し合った。 宇宙人と戦う物語をやることを決めた。	いろんな意見があったが、みんなほかの人の話をちゃんと聞いたので話はひとつの方向にまとまった。
---	--

反省点

子どもをコントロールできない自分のことが情けないと思った。

感想

思ったよりけっこう大変だと思った。大変であるがやり遂げたときの満足感は大きいだろうと思った。

6. 報告者:モンコンチャイ・アッカラチャイ(研究生)

活動内容 制作テーマ「タイ文字を使って何かをつくる・タイの歌を歌いながらダンスをする」

(1) 1組 (2時間目)

行ったこと	児童の反応
それぞれの子どもの意見を出してもらい、それができるかどうか話し合いで判断した。	子どもたちは、自分の考えてきたことを積極的に発言した。しかし、あまり発言しなかった子どももいた。そこで、その子にいろいろ聞いてみたら、ちゃんと言ってくれてよかった。決まったことは子どもたちがやりたいことなので、みんな目がキラキラしてやる気があるように感じられる。
<u>決まったこと</u> <ul style="list-style-type: none">・ タイの文字で名刺を作る・ タイの「象さん」という歌を歌いながら踊る	
<u>宿題</u> <ul style="list-style-type: none">・ 「象さん」の歌を練習する・ この歌に踊りを合わせる(創造)	

(2) 2組 (3時間目)

それぞれの子どもの意見を出してもらい、それができるかどうか話し合いで判断した。	同上
<u>決まったこと</u> <ul style="list-style-type: none">・ 「象」というテーマで紙芝居、もしくはポスターを作成・ タイの「象さん」という歌を歌いながら踊る	
<u>宿題</u> <ul style="list-style-type: none">・ 「象さん」の歌を練習する・ この歌に踊りを合わせる(創造)	

(3) 3組 (4時間目)

それぞれの子どもの意見を出してもらい、それはできるかどうか話し合いで判断した。 <u>決まったこと</u> <ul style="list-style-type: none">・ タイの文字で名刺を作る・ タイの「象さん」という歌を歌いながら踊る <u>宿題</u> <ul style="list-style-type: none">・ 「象さん」の歌を練習する・ この歌に踊りを合わせる(創造)	同上
--	----

(4) 4組 (5時間目)

それぞれの子どもの意見を出してもらい、それはできるかどうか話し合いで判断した。 <u>決まったこと</u> <ul style="list-style-type: none">・ タイ語で自己紹介して、友達に通訳してもらう・ 自己紹介カード(A3ぐらい)を作成 <u>宿題</u> <ul style="list-style-type: none">・ 自己紹介の内容を準備・ 自己紹介カードを飾る物を用意	同上 4組は特に自分の意見を出した後、ちゃんとその理由を加えていてとてもよかった。最初、自己紹介カードの紙のサイズに関する意見が二分したのだが、話し合いでちゃんと意見や理由を発言し、最後は合意に達することができた。
--	--

感想

子どもたちのやる気を見て、自分も発表会でどうなるかを本当に楽しみにしている。きつうまくできるだろうと思う。今回、子どもたちは協力してくれて、話し合いでちゃんと意見を出したり、友達の意見に反論したりして本当に感動した。とても話しやすい子どもだと思う。

3) 第二回授業報告

活動日時 2006年7月13日(木)、2時間目～5時間目
(9:30～14:15)

活動の内容

それぞれのグループで、制作活動を進めていく

授業の流れ

各グループに分かれての話し合い

↓

前回同様、授業の終わりに、子どもからその日やったことと次回までの宿題を発表させる。また、学生はグループの話し合いの様子についてコメントする。

メンバーからの報告

1. 報告者:相川奈美(外国語学部フランス語専攻3年)

タイトル 「飛び出す絵本を作ろう！」

授業の目的

前回は各クラス絵本の話の内容を決め、各自どのようなページを作成するかグループ内で相談しながら進めた。今

回はその下書きを基によりよい作品を作れるようにグループ内で話し合いを行い意見交換した。また、次の授業まで

の宿題などを決めた。

活動の内容

(1) 1組 (2時間目)

行ったこと	児童の反応
「冒険」をテーマにした飛び出す絵本の制作準備。 自分のページの下書きを作ってもらい、どのように飛び出す仕掛けを作るかを話し合った。	子どもたちが事前に飛び出す絵本の作り方の資料を読んでおり、そのアイデアを上手く応用させて自分の仕掛けを作ろうとして、とても積極的であった。またグループ内でアドバイスを与え、それを真剣に聞いて議論を交わしていた。聞く力だけでなく自分の意見を話す力もついているように感じた。

(2) 2組 (3時間目)

「未来」をテーマにした飛び出す絵本の制作準備。 前回決めた大まかな話の流れを再度確認し、それから各自が担当するページをどのように工夫し、つながりを持たせるかを話し合った。	制作するものが具体的になってきたことにより、前回よりもより活発に意見が言えるようになった。また子どもたちが制作のヒントになる本などを自主的に持ち寄り、それをグループで共有していたのがとてもよかった。
--	---

(3) 3組 (4時間目)

「冒険」をテーマにした飛び出す絵本の制作準備。 前回話し合いで決めたストーリーを再度確認した。また各自の担当のページを話し合いにより決めどのように仕掛けを作るかも話し合った。	話し合いは女の子によりうまく進行されていた。前回に比べ話し合いする際の「聞く姿勢」は改善され、それぞれが自分の意見だけでなく人の意見をちゃんと聞くようになった。また意見を言う際にもしっかりと自分の番を待っていたのが印象的だった。そのために話し合いにより不平不満なく担当ページがスムーズに決まった。
--	--

(4) 4組 (5時間目)

「世界一周」をテーマにした飛び出す絵本の制作準備。 グループのメンバーがそれぞれ興味のある国について調べたものをメンバーに報告し、今後どのように仕掛け絵本を作成するかを話し合った。	子どもたちが積極的に調べ学習をしていて感心した。下書きを終えて清書段階に入っている子どももいて、積極性を感じた。また人の話を静かに聞いていた。調べ学習は個人的な活動になってしまったが、授業では話し合いをしながらお互いの制作しているページがよりいいものになるように意見を交換していた。
---	---

感想・反省点

前回に比べ、どのクラスにおいても話し合いが円滑に進むようになった。子どもたちが自分のやるべきことをより具体的に理解し始めたために積極的に質問や意見を言い合ったからだと思う。しかし、「話し合い」により子どもたちの意見を尊重して決めていきかけたが、時間が限られていた

ためにやむを得ずこちら側から指示することになってしまったのが反省点である。また話しの聞いている程度は子どもたちそれぞれで異なったため、あまり聞いていない子どもにはより注意を払うように心がけた。しかし、そうすると今度はグループ全体の話し合いが進まなくなってしまい結局は面倒を見切れなかったのが反省点である。

2. 報告者:砂田かおり(外国語学部ドイツ語専攻1年)

タイトル 世界の子どもたち

授業の目的

前回課題にしたワークシートの解答、発表用クイズの問

題・解答解説の作成(ワークシート答え合わせ段階では解答提示者である学生の意見を、クイズ作成段階では児童の意見をよく聞くようにする。活発な意見交換や互いの価値観の違い・それに対する譲歩などもクイズ作成過程での議論で学び考える)。

活動の内容

(1) 1組 (2時間目)

行ったこと	児童の反応
ワークシート答え合わせ、クイズ作成	学生の話を書く時は非常に静かに聞いているのだがクイズを考えようとすると考えが浮かばないのかみな黙り込んでしまった。集中力も散漫していたように思う。自然と学生側が誘導するような形になってしまい児童による議論が活発化し友達の意見を聞くという理想的な活動には到らなかった。

(2) 2組 (3時間目)

ワークシート答え合わせ、クイズ作成	比較的作業の進み具合が早かったため児童が作ってきたクイズに助言を与えるという形になった。グループ内での役割分担など、1人1人が意見を言う機会を持つことができたと思う。児童間では話し合いをするのだが学生の意見はあまり聞けていない気がした。最後のあたりでは時間をもてあましてしまい、ただ単におしゃべりの時間となってしまった。
-------------------	--

(3) 3組 (4時間目)

ワークシート答え合わせ、クイズ作成	よく意見を言い、話を聞いている児童もいれば意見を学生側から求めても答えない児童やつまらなそうにする児童もあり、二極化が顕著なグループである。クイズについては児童が考えてきたものを生かすことができず、かなり学生側で誘導してしまった。クイズ作成にあたっては一部児童しか参加していないので「どう思う？」などとまんべんなく意見を言える・聞けるようにした。余った時間で次回の課題である絵の参考資料として持参した平和に関する絵本を見もらった。
-------------------	---

(4) 4組 (5時間目)

ワークシート答え合わせ、クイズ作成	班員が少ないせいもあってか活発な意見交換が出来た。しかしやはり意見を言わない・関心を示さない児童中にはみられた。グループ内での役割分担をするなどして個人が責任を持ってすべき仕事に対しての意識を明確にさせ話し合いへの参加を促がすようにした結果、お互いの意見を取り入れて上手に軌道修正しつつ話し合いを進めることができた。
-------------------	--

反省点

聞く力を育てるという目標に関して、①学生の話聞く ②児童(友達)の話聞く という二項目について反省すると、①では全般的にあまり達成できていないように思う。例えば課題について児童に話した後「次の宿題は何ですか」と児童に問われるケースがほぼすべての班で見られた。しかし聞いている児童の多くは学生の目をしっかり見てうなずいたり相槌を打ったりするなど、聞くことに一生懸命である様子がこちら側にも非常によく伝わってきた。またワークシート作成についても初回の活動(6月22日)の段階で答えに結びつくキーワードやほぼそのままの答えを学生側から提示していたにも関わらず全く異なる解答を児童が示しているなど、学生の話が聞けていないのではと思う部分が多々見受けられた。話が長いという児童側からの指摘にもあるとおり、おそらく私個人の話し方の力量も関係しているのだと思っている。

感想

児童間での意見交換があまり活発に行われなかったことから、とりあげたトピックや助言などが少し難しすぎたように感じている。クイズ問題を何にするかという取り組み難しい論点よりも比較的考える必要のない話題についての議論が集中したことに関しては私が想像・理想としていた話し合いの形態からは遠ざかっているものの議論の1端であることを思えばそれはそれでよいのではないかとも思う(例えばワークシートを元にクイズを作成しようとしてもなかなか意見は出ないのだが、いざ3択問題のクイズで答えを何番にするかという議論になると即座に皆が反応する、など)。また、意見が出ないためどうしても学生側が誘導するような形となり、結局学生の話聞くことに活動の大半を費やしてしまう班もあった。学生側の助言が助言以上のものになっている感は否めない。しかし次回からの活動は発表に向けての話し合いも活発化するだろうと思われる(せざるを得ない)ので、児童がお互いの意見を聞き譲歩しつつ協力して1つのものを作り上げる過程で多くを学ぶことができるのではないかと考えている。

3. 報告者:遠田友香(外国語学部日本語専攻4年)**授業の目的**

台本と小道具の製作状況を確認し、本読みをする。1人1人自己主張をしつつ他の子の意見にも耳を傾ける。

タイトル 劇を作ろう

活動の内容**(1) 1組 (2時間目)**

行ったこと	児童の反応
台本の確認、削るところを決めた。 作る小道具の確認。 本読み。	子どもたちが自ら本を選出してきたため積極的だと感心した。途中少し喧嘩のような状況になったが、空気を読んで事態を收拾する子もいた。本読みは恥ずかしがる子が多かった。

(2) 2組 (3時間目)

英語での本読み。 小道具の製作。	子どもたちは恥ずかしがって英語を読もうとせず、苦勞した。
---------------------	------------------------------

(3) 3組 (4時間目)

小道具の製作。 本読み。	自分たちで身につけるものを製作しているということもあってみんな楽しそうに製作していた。本読みのおきも、みんなで工夫して話し合って読み方を決めるなど、感心する場面もあった。
-----------------	---

(4) 4組 (5時間目)

本読み。 立ち稽古。	帰国子女の子がいたこともあり、台本を自分たちで作ってくるなど積極的な姿勢が見られた。ただ、立ち稽古の段に入ると男子が恥ずかしがってやろうとしないなど混乱も生じたが、改善してくれそうなので期待をしたい。
---------------	--

反省点

聞く力については、興奮すると自分が自分がという具合になってしまう子もいたが、私が話す時は話を一生懸命聞いてくれようとする子が多いように思われた。子ども同士での聞く力を育てるのは難しいことだと感じた。

感想

みんな積極的に授業に参加する姿勢が見られ、好きなことをさせるときの子どもの力はすごいなあと再確認しました。勉強では発揮できない力をこのような授業で発揮できる子があらわれるといいなと思いました。

4. 報告者: 朴 志禮(外国語学部日本語専攻 3 年)

活動の目的

タイトル 夢の世界をつくらう

聞く力を育てる授業になるために、班のみんなが互いに意見交換をすることを中心にして進める。単なる自分の意見発表に留まらず、相手の意見をしっかり聞く姿勢をとれるようにする。

活動の内容

(1) 1 組 (2 時間目)

行ったこと	児童の反応
夢の世界にあるもののリストづくり。 リストに従って夢の世界づくり。	班のみんなが前回に自分の意見ばかり主張していたに対して、結構まとまった感じになっていた。このまま最後までお互い尊重しながら進めてほしい。

(2) 2 組 (3 時間目)

夢の世界にあるもののリストづくり。 リストに従って夢の世界づくり。	女子児童の班だけであってやや消極的には発表をしたのが気になる。もっと自分の意見を発表し、増して相手の意見をちゃんと聞いてあげてほしい。
--------------------------------------	---

(3) 3 組 (4 時間目)

夢の世界にあるもののリストづくり。 リストに従って夢の世界づくり。	自分の意見を発表する際に、相手にことも考えながら、発言の順番を譲りあうようになってきたのでとても感心した。
--------------------------------------	---

(4) 4 組 (5 時間目)

夢の世界にあるもののリストづくり。 リストに従って夢の世界づくり。	全体的にまとまった感じ。しかし 4 組でも女子児童たちが控えめであったのが気になる。
--------------------------------------	--

反省点

第一回目の授業を行った限り、相手の意見を聞くのが苦手な児童が多いという印象が強かった。特定の 1 人に話す時間が傾かないようにした。発言する際には、手をあげて発言することをみんなに伝えてから、一人ずつ発表していくようにした。

5. 報告者:鄭 仁淑(外国語学部日本語専攻3年)

授業の目的 各シーンを写真で撮ること

タイトル 「写真を使った紙芝居」

活動の内容

(1) 1組 (2時間目)

行ったこと	児童の反応
校庭で空を旅する写真を撮った。	最初はみんな恥ずかしいと思って消極的であったが、少し慣れてからはどんどん意見を出しあって撮影を進めていた。

(2) 2組 (3時間目)

校庭でサッカーする写真を撮った。	生徒がみんなサッカー好きで、ボールを蹴りたいと言い出してそれを止めることが一番大変だった。生徒たちは紙芝居の内容を話し合っって撮影を進めることより、ボールを蹴ることに集中していた。
------------------	--

(3) 3組 (4時間目)

小学校の隣にあるふれあい広場で桃太郎の話の演じながら写真を撮った。	移動に時間がかかったが、写真取るときは意見を出したりして最後まで写真が撮れた。
-----------------------------------	---

(4) 4組 (5時間目)

校庭で宇宙人と戦う場面を撮影した。	撮影が一番スムーズに進んだ。 みんな積極的に意見を出しあった。そして、撮影をそのまま受け入れるのではなく取り直したりすることができた。
-------------------	--

反省点

外での撮影だったので生徒を集中させることが十分にできてないと思った。そして、時間が短い反面進めることが多かったことに焦り私の意見を出しすぎたのかと思った。

感想

いろいろと大変だが、子どもたちが自ら動いてくれるのが見えて、始めたときの不安は少し減った。

6. 報告者:モンコンチャイ・アッカラチャイ(研究生)

授業の目的

タイトル タイの文字を楽しもう!

各組の児童と、前回決定した活動が始める。活動している間に、多少やり方を変える可能性があるので、そのつど話し合いをし、決定する。

活動の内容

(1) 1組 (2時間目)

行ったこと	児童の反応
<ul style="list-style-type: none">・児童が自分の名前をタイの文字でどう書くか調べて書いた。その各自の名前をチェックした。その後、自分の名前を書くための紙のサイズを話し合いで決めた。・『象さん』の歌を練習した。	みんな積極的に話し合ったりした。特に歌の練習のとき、全員頑張って歌っていた。

(2) 2組 (3時間目)

<ul style="list-style-type: none">・前回決定した活動は児童から多少変えたいという意見が出た。そのとき、話し合いが行われ、各自「象の紹介カード」を作成することに決めた。・初めは、普通に『象さん』の歌を歌って練習していたが、児童からの意見でリコーダーを吹きながら、歌うということに決めた。歌を歌う担当とリコーダーを吹く担当については児童が話し合って決めた。	みんなお互いに助け合って、いろいろ議論した。話し手は自分の意見を積極的に出し、聞き手もちゃんとそれにコメントした。
--	---

(3) 3組 (4時間目)

<ul style="list-style-type: none">・話し合いでネームカードのサイズは7X10にした。・児童と一緒にタイ語で各自の名前を書いた。・「象さん」の歌を練習した。	CDをまだ聞いていなかったため、なかなか歌の練習は進んでいないが、みんな努力して歌っていた。
--	--

(4) 4組 (5時間目)

<ul style="list-style-type: none">・各自の名前をタイ語で書いた。・通訳の練習をした。	話し合いをするための授業時間が足りず、残念ながらこの班ではほとんどできなかった。しかし、私が言ったことはちゃんと聞いてくれた。
--	---

反省点

しなければならないことがたくさんあるが、時間があまりにも短いため、話し合いの場がなかなか作れなかったということ。

感想

児童はみんなやる気があるように感じられる。みんな積極的に活動をしている様子を見て、本当に感動した。

4) 第三回授業報告

活動日時 2006年10月26日(木)、2時間目～5時間目
(9:30～14:10) 30日(月)、同上(5時間目の4組の授業は、小学校の研究授業)

活動の内容

26日 各グループで、制作の仕上げをするとともに発表の準備をする。

30日 発表会

各グループで、子どもたちが制作したものを発表する様子をビデオに撮影した。そのビデオは学生が、両親や友達に見せて感想の手紙をもらった。後日、その手紙を小学校に送った。

メンバーからの報告

1. 報告者:相川奈美(外国語学部フランス語専攻3年)

タイトル 「飛び出す絵本を作ろう」

授業の目的

26日: 子どもたちが作ってきた絵本をまとめ、発表の練習をする。

30日: 完成した作品ならびに活動の発表をビデオに撮る。

(1) 1組 (2時間目)

	行ったこと	児童の反応
26日	本番までにどのように仕上げていくかなど話し合い 発表スタイルを決める	絵本が作り終わっていないことに対して不安があったようだが、話し合いをすることでいつまでにどうすれば終わるかという目標を決めたことでやる気を出したようだった。最終段階に近づくにつれて積極的に質問や意見をしてくるようになった。
30日	発表の練習と本番の撮影 今回の活動の振り返り	はずかしがりながらも自分たちのページを生き生きと紹介してくれた。反省会の時に子どもたちそれぞれが「グループで1つのものを作り上げるときの話し合いの難しさ」と、同時に「聞くことの大切さ」身をもって学んだと言ってくれた。

(2) 2組 (3時間目)

26日	飛び出す絵本の発表練習	既に本を完成させていて、あとは練習を重ねながらよりよく発表できるように工夫を凝らしていた。作品が形になるにつれ連帯感が生まれた上にそれぞれが意見をするようになっていた。
30日	発表の練習と本番の撮影 今回の活動の振り返り	最初は何をしていいかわからず話し合いもなかなか進まなかったが、撮影に一生懸命取り組む姿を見ることで子どもたちなりに工夫を凝らし取り組んできたことがよくわかった。

(3) 3組 (4時間目)

26日	絵本のまとめと発表の練習	自分たちの作品が形になるとだんだん結束力が出てきた。女の子が中心になって班の子どもたちの意見を上手くまとめていた上に、発表はよりいいものを目指し何度も練習と工夫を凝らしていた。
30日	発表の練習と本番の撮影 今回の活動の振り返り	とても生き生きと撮影をしていた。最初はそれぞれが意見を言うだけでなかなか譲らなかったが、結果的にそれぞれのやりたいことを上手く混ぜ合わせ作品を作れたために満足しているようだった。

(4) 4組 (5時間目)

26日	絵本のまとめと練習	どのように発表するかなどを決めた。自分のページについての発表のみならず他の子の発表に対するアドバイスなどをお互いがしていた。
30日	発表の練習と本番の撮影 今回の活動の振り返り	撮影の練習をしながらもっとよりいいものを作ろうと工夫をしていた。比較的話し合いをスムーズに進めてきた班ではあるが、回数を重ねていくうちに発言するときのタイミングなどが上手くなっていたと感じた。

反省点

上でも触れたように今回の作業を通じて『聞く力を付ける』を意識的に行い、それを上手く学ばせることが出来たクラスと、そうでないクラスがあった。最終日での反省会で、班員同士の批判で終わってしまったクラスもありとても残念。しかし、私自身は実際には子どもたちの話し合いの態度はよくなっており『聞く力』もついてきたというのは感じた。最初は様々な意見を投げ合うだけであったが、徐々に相手の話を聞く力を養ったことで相手の意見に対して的確な発言を出来るようになり『言葉のキャッチボール』ができるようになったと思った。また1つの作品が形になるとその力が急激に伸びた気がしたが、これは子どもたちが同じ目的を共有したからではないかと思った。このように子どもたち自身の成長はあるが、それを上手く気付かせることが出来ないときがありそこは反省点であると感じた。

全体の活動を通しての感想

子どもたちの吸収力には驚いた。最初は何をしていいのかわからずにいたが徐々に自分たちのやりたいものが形なるにつれて積極的に意見を言うようになるなど変化が見られた。話し合いの進行も授業の回数を重ねていくうちに話し合いの軌道修正をする回数が減り、最終的には全く私が介入しなくても自分たちで話し合いを出来るようになっていた班もあった。このようなグループでの作業で1つのものを作り上げる経験をする事で、自分以外の人の考えにじかに触れ合いながら相手の考えを尊重できる力を小学生のうちから養うことはとても大切であると改めて感じた上に、このような子どもたちの成長に少しでも関わることがなによりいい経験になった。

2. 報告者:砂田かおり(外国語学部ドイツ語専攻1年)**授業の目的**

タイトル 世界の子どもたち

26日:リハーサルを行い、最終確認をする。今時は学生側からあまり指示を出さないようにし、児童たちが主体的に行動し議論するに任せる。

30日:完成した作品ならびに活動の発表をビデオに撮る。

活動の内容**(1) 1組 (2時間目)**

	行ったこと	児童の反応
26日	発表準備(話し合い)	発表の際の分担が決まっておらず、リハーサルもままならない状況であったので大学生1人があせりを感じつつの話し合いであった。男の子はすぐに話をそらし、本気で考えようとしていない。結局大学生が多くを指示する形となった
30日	ビデオ撮りと反省会	ビデオ撮りを始めようとするときも落ち着きがないなど、協力の姿勢が男の子にあまりみられなかった。話し合いの時も、ある1人の女の子(班のリーダーシップをとっていた)だけが大学生の目を見て真剣に話を聞き、活動の感想を述べていた。男の子に話をふってもすぐに話をはぐらかすなど自分の感想について深く考えようとしていなかった。

(2) 2組 (3時間目)

26日	リハーサル	班員全員が協力しており、自分のやるべき仕事と果たすべき責任を個人で把握できていた。大学生が入り込む余地がないほど自分たちでしっかりと意見を戦わせ、1つのものを作りあげようとしていた。最後の反省会では、全員が大学生の意見に耳を傾けていた。
30日	ビデオ撮りと反省会	ビデオ撮りは互いが協力しスムーズに行うことが出来た。児童たちはみんなそれぞれ意見を持っているのだが、この時はあちこちで同時に話し出すなど互いの意見を聞く姿勢があまりみられなかった。大学生の話も、あまり集中して聴くことができないようだった。

(3) 3組 (4時間目)

26日	リハーサル	ああだこうだとお互いの意見を戦わせながらも、女子が中心となって班をまとめあげよいものを作ろうとみんなで頑張っていた。2組の場合と同様、児童による積極的な言動で非常に有意義な時間であった。
30日	ビデオ撮りと反省会	振り返りシートに記入することに気をとられ、なかなか話し合い

		<p>が進まなかった。女の子は意見を言うが、男の子は全く言わなかったり話を茶化したりと感想を述べようとしなかった。</p> <p>少し気が緩むとすぐ男子同士で遊んでしまう。まとまった話し合いをすることができなかったので女の子たちは「これで終わっていいの？」と口々にもらしていた。</p>
--	--	---

(4) 4組 (5時間目)

26日	リハーサル	<p>2、3組と同様、児童間でどんどん意見を出しながら創造的活動ができた。大学生側が特に支持をしなくても自主的に考えて取り組み、班員全員が議論に参加している様子を見て理想的な活動だなあと思いつつ眺めていた。</p>
30日	ビデオ撮りと反省会	<p>ふりかえりシートに時間をかけすぎてしまった。ビデオ撮り後の話し合いでは、観覧の先生方が多かったせいか児童が緊張してしまい、話がなかなか前に進まない場面もあった。途中で発表にむけて仕事をきちんとしなかった人のことで口論になりかけたが児童と大学生とでなんとか静めた。全体的にこの班が一番話し合いにおいてもお互いの意見を聞くことができていたように思う。</p>

反省点

この活動では「聞く力を育てる」という目標が掲げられていたが、私が関わった子どもたちに関して言えばこの活動により聞く力を養うことが出来たかといえば正直疑問しい。というより聞く力がある児童と全く話に耳を傾けようとしない児童の差が顕著であるように思われる。本当に話を聞いている児童は班に1~2人しかいなかったように記憶している。私の話や話し方が冗長で、退屈な内容であったことは否めないがそれを差し引いても児童間の聞く力の差は大きいだろう。私個人の反省としては、もう少し児童にとって分かりやすい説明や解説を加えるべきであったと思っている。そうすれば児童の反応も違っていたのではないだろうか。

全体の活動を通しての感想

私が授業のテーマを「世界の子どもたち」と設定したのは、児童たちに自分と同年代の子が世界でどのような暮らしをしているのかを知り、視野を世界へと広げてほしかつたからである。10月2回の活動では、児童たちは「最初は勉強みたいで嫌だなと思ったけど、調べていくうちにいろいろな子どもたちについて知ることができて楽しかった。よかった。」と言ってくれたので、啓発活動の一翼を担うことが出来たことに対しては嬉しく思う。ただ、小学4年生には少し難しいテーマだったかもしれないとは今でも思う部分があるが、子どもたちにとってこれが世界に目を向ける1つの契機となってくれば幸いである。

授業を行う学校・学年内で意見や活動内容、児童への姿勢やテーマとするものなど首尾一貫した協調性が必要である。児童に直接影響を及ぼすことになるので、授業を提供する側として大学生・先生との両者のまとまりが重要になってくるだろう。児童間との連携に関しては、FAXでやりとりするなどして大学生と児童のコミュニケーションを深めることができたことが活動の成功につながったと思う。

3. 報告者:遠田 友香(外国語学部日本語専攻 4年)

授業の目的

タイトル 劇を作ろう！

26 日: 劇のリハーサルをして、気になる点を話し合う。
30 日: 完成した作品ならびに活動の発表をビデオに撮る。

活動の内容

(1) 1組 (2時間目)

	行ったこと	児童の反応
26 日	劇のリハーサルを 2 回して、出る位置の確認や、直したらいいところを話し合った。	予想以上の出来上がりにとっても驚いた。前回に比べて本当に進んでいたため、子どもたちも私に見せたくて仕方がない様子だった。大道具も小道具も自分たちで作っていて感心した。ほぼ完成の段階にあるせいか、子どもたちは非常に生き生きと、楽しそうに取り組んでいた。
30 日	ビデオの撮影を 2 回して、反省会をし、プリントに記入してもらった。	1 回目の撮影で最後の最後に大道具が壊れてしまうというハプニングも起きましたが、切り替えてすぐに撮り直しに移れていて感心した。みんな本番だということもあって、ふざけている子どもは子ども同士で注意しあっていて、小さな社会でちゃんと秩序がとれていると感じた。

(2) 2組 (3時間目)

26 日	英語の練習とリハーサル。	私が送ったはずの英語のカセットテープを聞いていなかったようで、リハーサルができるような状況ではなかったので少し困惑した。子どもたちは、女の子しかいないせいか消極的で、英語を話すことに恥ずかしさを感じている子達も多く、完成が危ぶまれた。しかし、一方で英語を話してみようとやる気を見せる子どもたちが主役の 2 人だったので、2 人が全体の気持ちをひっぱっていったようだった。
30 日	セットの配置を話し合い、ビデオを撮影する。その後反省会とプリントの記入。	劇が完璧には完成していなかったため、撮影まで少しもたついてしまったが、ここまでつくってきたものをきちんとした形で仕上げたいという子どもたちの気持ちも手伝って、思ったよりスムーズに進んだ。やる気のある子どもの気持ちが、そうでない子どもを変えていた。 反省では、英語を習ったら私が書いた台本を、カタカナじゃなくて英語の方をもう 1 回読んでみたいと言う子がいるなど、感動してしまう場面もあった。

(3) 3組 (4時間目)

26日	劇のリハーサルを2回して、出る位置の確認や、直したらいいところを話し合った。	私がいらない間の授業で小道具をきちんとそれぞれ用意できていて、私に見せたくて仕方がない様子だった。途中でふざけてしまう男の子もいたが、少し放っておくと子どもたちで解決してくれるということがわかった。ふざけてしまう子も、劇をやるのが楽しくて、つい興奮してしまってふざけてしまっている様子だった。
30日	ビデオの撮影を2回して、反省会をし、プリントに記入してもらった。	ビデオの撮影ということではいつもより更に興奮気味だったが、今までの成果をきちんとした形で残したいという意志が見え、1回目もうまくいったのに2回目の撮影を行った。みんな生き生きと演技をしていてよかった。

(4) 4組 (5時間目)

26日	劇のリハーサルを2回して、出る位置の確認や、直したらいいところを話し合った。	衣装を用意するなど、ただならぬやる気が伝わってきて圧倒された。劇もほぼ完璧に出来上がっていたため、あまり言うことはなかった。ただ、男の子たちは劇になると恥ずかしがって声が小さくなってしまっているので、それがかわいくて可笑しかった。女子に指摘されて頑張って声を出そうとすると、顔が赤くなってしまいうもいて、それはそのままで見ていることにした。
30日	ビデオの撮影を2回して、反省会をし、プリントに記入してもらった。	衣装の着替えに少し時間がとられたが、撮影はうまく進行した。気合が入っていたあまりに、「はじめの言葉」での言葉を忘れた忘れないで一時喧嘩が起きそうだったがなんとか乗り切ることができた。ギャラリーの多さに恥ずかしがり屋の男子が圧倒されていたのがかわいそうだった。

反省点

聞く力を育てるために私が試みたことは、子どもがはしゃいだりして混乱が生じたときになるべく混乱がおさまるまで「待つ」ということです。收拾のつかないような混乱ではもちろん一言濁を入れますが、なるべく子どもたちの間で解決することで、聞く力が養われるのではないかと考えてやってみました。結果、子どもたちの中に注意する子や「やろうよ」とやる気を失っている子を促す子が必ずグループに何人かいるため、自分たちで解決してくれたので成功したのではないかと考えています。

全体の活動を通しての感想

普段触れ合うことのない年代の子たちと話し合ったりして劇を作っていたことは、本当に私の刺激になりました。子どもたちの一挙一動が私には新鮮で、観察していて気づかされることがいろいろありました。

最初の授業のときは、この年代の子どもたちには何かを教える機会どころか触れ合う機会さえないため、どう対応していいのかわからず、とても戸惑ってしまいました。しかし、回数を重ねてだんだん対処の仕方がわかってきて余裕もでき、混乱が生じてあわてたりイライラしたりしないで済むようになりました。このように余裕を持って人と接することは、社会に出てからも役に立つことなのかもしれないと思

います。ここで言葉にしつづることができないのが残念ですが、他にも私のこれからの財産になったことは本当にたくさんあります。子どもたちにもう会えないことがとても残念ですが、このボランティアを、次のボランティアの意欲につなげていきたいと思っています。

4. 報告者: 朴 志禮(外国語学部日本語専攻3年)

タイトル 夢の世界づくり

授業の目的

26日: 最終回に向かって総まとめをする。韓国人の友人に見せることにしたので韓国語で挨拶の練習をする。

30日: 完成した作品ならびに活動の発表をビデオに撮る。

活動の内容

(1) 1組 (2時間目)

	行ったこと	児童の反応
26日	前回まで作った夢の世界に入るアイテムをどんな形で入るかをみんなで話し合い。	児童たち1人1人が熱心に取り組んだ様子だった。
30日	ビデオ撮影を兼ねた授業だったので少し緊張した様子。	時間の配分において、混同したので順調に進むのかが不安だったが、予定通り無事撮影終了。

(2) 2組 (3時間目)

26日	夢の世界は前回まで作成が終了したので、今回は次回の発表に向かってリハーサルを実践。	事前に台本まで用意してあったのがよかった
30日	1組と同様。	ビデオ撮影を兼ねた授業だったので少し緊張した様子。

(3) 3組 (4時間目)

26日	夢の世界は前回まで作成が終了したので、今回は次回の発表に向かってリハーサルを実践。	韓国語の挨拶の練習するところで多言語にふれる事に興味を持っている様子。
30日	1組と同様。	ビデオ撮影を兼ねた授業だったので少し緊張した様子。

(4) 4組 (5時間目)

26日	夢の世界の規模が予想より大きくなっていたので紹介の順番を少し変更して、さらにコメントの修正をした	3組の児たちと同様に韓国語の挨拶を練習するところで多言語にふれる事に興味を持っている様子。
30日	1組と同様。	ビデオ撮影を兼ねた授業だったので少し緊張した様子。

反省点

最初は児童からの話もあったように、お互いの話を聞いてくれる力が若干欠けていたと思う。授業を重ねることによってお互いに話を聞いてあげられるようになってきたと思われる。

全体の活動を通しての感想 反省点と同様。

5. 報告者:鄭 仁淑(外国語学部日本語専攻3年)

タイトル 写真で作る紙芝居

授業の目的

26日: お互い意見をまとめて作品を完成して発表のリハーサルをした。

リハーサルした後、みんなに作業中の感想を聞いてみた。

30日: 完成した作品ならびに活動の発表をビデオに撮る。

活動の内容

(1) 1組 (2時間目)

	行ったこと	児童の反応
26日	まとまってない最後の話をまとめた。	なかなか意見がまとまらず、ドタバタしていた。
30日	残りの作業をやってビデオを撮った。	26日以降、お互い自分の意見を言い出していて作品は完成していなかった。

(2) 2組 (3時間目)

26日	完成した作品に台詞を加えた。そしてリハーサルも行った。	台詞の担当を決めるときちょっとしたもめごとはあった。
30日	完成した作品の発表をビデオで撮った。	途中で些細な事で喧嘩があったが、撮影の時はみんなちゃんとやってくれた。

(3) 3組 (4時間目)

26日	台詞の担当を決めた後リハーサルを行った。	ふざけたりする子どももいたが、リハーサルの時は真剣にやってくれた。
30日	完成した作品の発表をビデオで撮った。	撮影の前は走ったりしていたが、本番の時は集中したので無事に終わった。

(4) 4組 (5時間目)

26日	残りの写真を貼った後リハーサルを行った。	何をしなければいけないかをちゃんとわかっていたので作業は順調に進んだ。
30日	完成した作品の発表をビデオで撮った。	撮影は上出来だった。しかし、他のクラスとは違ってギャラリーが多かったのでみんな緊張気味だった。

反省点

何かを作り始めることは最後まで完成しなければならないという重圧感を与える。

今回の活動はグループ作業の中で聞く力を育てるという目的であった。しかし、子どもたちには作品を完成することで精一杯になってしまい、聞く力を育てるという目的はうまく伝わったのかと言う疑問が残った。

全体の活動を通しての感想

合同作業というのは作業を進める過程の中で自分の意見を相手に伝えたり、相手の意見を聞いたりする能力が育てられるいい方法だと思う。参加した子どもたちに作品を作るときどうだったのかを感想を聞いてみたら楽しかったとか大変だったとかなどの意見があった。そして結構喧嘩もし

たらしい。喧嘩があったということは意見の交換があったということになる。子どもたちは喧嘩をしてお互いの意見を受け入れてまた新たな結論を出してきたと思う。その過程の中でみんなは人の話を聞くことの大切さを考えるようになったらいいなと思った。

6. 報告者: モンコンチャイ・アッカラチャイ(研究生)

タイトル タイの文字を楽しもう!

授業の目的

26 日: 話し合いで発表仕方を決める目的とする。

30 日: 完成した作品ならびに活動の発表をビデオにとる。

活動の内容

(1) 1 組 (2 時間目)

	行ったこと	児童の反応
26 日	夏休みの間、練習していたことを発表してもらった。本番でどのように発表すればいいかを話し合って決定した。	少しけんかになりそうな場面があったが、結局意見が 1 致した。
30 日	① タイ語で挨拶 ② 自己紹介 ③ 「ゾウさん」の歌の発表 ④ 交流のふりかえり(文章) ⑤ 反省会・感想	今日はいつもと違って子どもたちが興奮したせいかわからないが、なかなか落ち着けられなかった。しかし、いつもグルーブリーダーが言ったら、しばらく冷静になり話を聞いたのである。

(2) 2 組 (3 時間目)

26 日	夏休みの間、練習していたことを発表してもらった。本番でどのように発表すればいいかを話し合って決定した。	グルーブリーダーが言ったことをみんなちゃんと聞いたが、グルーブリーダーはあまり他人の意見を聞かないよいに感じられた。
30 日	① タイ語で挨拶 ② 自己紹介 ③ 「ゾウさん」の話 ④ 「ゾウさん」の歌の発表 ⑤ 交流のふりかえり(文章) ⑥ 反省会・感想	失敗したところが多く、みんな発表のことをがっかりしたように思われる。撮り直すように数度頼まれた。しかし、時間があまりないため、そのまま撮ってしまった。反省会で、「ふざけたりしているひとが多かった」のような友達の失敗について言ってばかりいた。グルーブリーダーは積極的にみんなを引っ張っていきように見えるのだが、やり過ぎて他の人が言ったことを聞かなくなったということが感じられた。

(3) 3組 (4時間目)

26日	夏休みの間、練習していたことを発表してもらった。本番でどのように発表すればいいかを話し合っただけで決定した。	発表の仕方は全然考えていなく、いろいろ意見を出しながら、話し合っただけで決定した。最後にいい形になって良かったと思う。
30日	① タイ語で挨拶 ② 「ゾウさん」の歌の発表 ③ 交流のふりかえり(文章) ④ 反省会・感想	やはりみんな「緊張！緊張！」と言ったが、子どもなりの発表がよくなったと思う。反省会でみんな冷静でおとなしく反省したりして良かったと思う。

(4) 4組 (5時間目)

26日	夏休みの間、練習していたことを発表してもらった。本番でどのように発表すればいいかを話し合っただけで決定した。	話し合いでなくジャンゲンでクイズ発表の順番を決めたのである。
30日	① タイ語で挨拶 ② 自己紹介+通訳 ③ タイに関するクイズ ④ 交流のふりかえり(文章) ⑤ 反省会・感想	発表の中でも、反省会でも子どもたちが他人の意見や考えをよく聞くということを意識して制作活動をしたと感じられた。他の班と違って自らそのようなことを言っていたからである。

反省点

グループで話し合い、相談しながら、制作活動に取り組んでいくという形でしてきたが、最後の発表の反省会で気付いたことは子どもたちが発表のことしか考えず、失敗してしまった時文句ばかり言っており、本当に他人の意見を聞く力がよくなってきたかは不明。しかし、きちんと出来ている班ももちろんあった。

全体の活動を通しての感想

最初はどのように話し合いの場を作るかを全然分からなくて、とても困った。しかし、やっているうちに、だんだん分かってきてよかったと思った。

子どもたちの興味関心によって制作活動を決定した時とても心配だった。小学校4年生にとっては難しすぎるのではないかと考えていたが、次々来校しだんだん行けそうに感じていた。本番でみんな頑張って上手に発表ができ、とても嬉しかった。

総括

授業が始まった時は、学生メンバーは授業の進め方や、どう子どもと接すればいいのかということが分からずに戸惑っていた。しかし回を重ねるにつれ、授業を行うことに慣れるとともに子どもとの距離も縮まり、徐々に余裕が出てきていた。1クラスにつき1回45分の授業時間で、制作を進めるとともに子どもとの話し合いも重視しなくてはいけないため、「時間が足りない」という声が多く聞かれた。制作するのに手一杯で子どもとあまり触れ合えなかった、休み時間も有効に使って子どもと接するべきであった、という意見があり、次回に向けての改善点といえる。

「相手の話をちゃんと聞く」という目標について、子どもに本当に伝わったかどうかは授業だけでは判断できずやや不安であった。しかし、後日届いた子どもからの感想を見ると、「人の話をちゃんと聞かなくてはならないことが分かった。今度から、気をつけたいと思う」ということが多く書かれており、ちゃんと伝わっていたのだと分かり安心した。

学生は1人で4グループの異なる活動を見なくてはならず、負担は決して軽いものではなかったと思うが、学生にとっては、それだけにやりがいが大きかったようである。

特に、今回の活動を通しては、子どもの持つ力に驚かされることが多かった。例えば、第二回から第三回の授業は3ヶ月ほど間があいてしまうため、メンバーは、子どもがその間にちゃんと作業を進めることができるか心配していた。しかし、いざ10月に小学校に行ってみると、多くの班でこちらの予想を上回る出来で制作を進めており、皆、安心して子どもと子どもとの工夫・創造力に感動していた。また、担当の三井先生によれば、この授業では子どもが自発的に動いており、FAXも先生を介さず自分たちでどんどん送っていたという。子どもたちも、授業を楽しんでくれたようで良かったと思う。

土橋小学校での授業は、学生側にとっても、とても良い経験となった。子どもたちも、今回、学生・留学生との授業をきっかけに、自らの興味・関心を広げていってくれば良いと思う。



(4)府中市立府中第七中学校

1) 概要

英語圏以外からの留学生の文化紹介を通じて、アメリカ以外の外国へと視界を広げたい、という府中第七中学校の先生からの要望のもと、留学生の人選から活動を始めた。留学生が決まりしだい中学校に連絡し、総合学習の時間を使って生徒たちが各留学生の出身国について調べる、という作業の末、第一回の実践日を迎えた。前準備の状況はクラスごとにバラつきがあったものの、生徒が留学生に質問を行うなど、活発な交流が見られた。第一回の活動では次回に行なわれる生徒の発表のネタとなるように全般的な出身国紹介を行ない、第二回の活動は生徒の発表を評価することに重点が置かれた。第一回と第二回の際に時間があっても関わらず、中学校の生徒と連絡が取れなかったことが悔やまれるが、生徒たちはそれぞれ精一杯の発表を私たちに披露してくれた。

2) 第一回活動

活動日時 2006年7月4日、13:25～15:15

参加メンバー

- 和田 はる菜 (外国語学部フランス語専攻3年)
- 露木 智子 (外国語学部スペイン語専攻4年)
- 葛山 紋子 (外国語学部スペイン語専攻4年)
- 飛田 美由紀 (外国語学部ロシア語専攻4年)
- 中村 未央 (外国語学部ポルトガル語専攻4年)
- 矢ヶ部 真理 (外国語学部ロシア語専攻4年)
- 河野 千早穂 (外国語学部ポルトガル語専攻1年)
- バラシオ・フェルナンド (PCS)
- ツェレテリ・タマラ (PCS)
- ファウスト・ペレイラ (大学院地域文化研究科博士前期課程日本語教育専修コース2年)
- 李 松蘭 (研究生)
- アルベルトウス (研究生)

各チームからの報告

参加メンバー

アルゼンチン班

報告者:葛山 紋子(スペイン語外国語学部専攻4年)

パラシオ・フェルナンド(PCS)、葛山紋子(外国語学部スペイン語専攻4年)

活動の内容

行なったこと	生徒の反応
第一部:アルゼンチンを知ろう	写真などを使って、視覚的に紹介したので、非常に興味を引くことができた。
1) クイズ 国旗、伝統的な料理、飲み物、母国語、大陸、山脈、首都、日本と比較した面積・人口、アルゼンチンの人・国のスポーツ・動物、アルゼンチンにいる動物、踊り、人気のある漫画	大陸、首都、国旗、人口、面積などは事前に調べ学習をしていたようだった。人口と面積との比較の際に、家の大きさなどの質問が出た。首都の写真 サッカーの国というイメージが強かったと思うので、国技がバトというスポーツだったということに驚いていた。
2) アルゼンチンの名所・動物 ・イグアスの滝、ウマワカの谷、バタゴニア、ペリトモレノ氷河、バルデス半島、砂漠、サンフアン ・ピューマ、ラマ、鯨、カルピンチョ、アルマジロ、レア	ペンギンがアルゼンチンにいることを知らなかったので、よく話し合っていた。 アルゼンチンの国の動物コンドルについて、大きさなどの説明を聞き、驚いていた。
3) スペイン語を学ぼう あいさつ・自己紹介	氷河の動く音の話に興味を示していた。 アルゼンチンにも白夜についての質問が出た。
4) 質疑応答	あいさつの練習でも大きな声で参加していた。フェルナンドとの会話のやりとりも意欲的に参加してくれる子もいて、興味を持って来ていた。
第二部アルゼンチンの踊り(チャカレラ)	アルゼンチンではやっているもの、農作物、アルゼンチンで虫が有名か。 男の子はやる気があったが、女の子は最初照れてなかなか参加しなかった。指示を聞きながら、一生懸命踊ろうとしていた。

感想

非常に興味深い活動だったことを、何よりも強調したい。

生徒達が前もって下調べをしていたことに感動したし、友好の印として日本とアルゼンチンの旗を作っておいてくれたことも嬉しかった。

もちろん先生の協力があってこそ成り立った作業(下調べなど)もあったと思うが、学校全体が私たちの活動にとっても協力的であったことが意外だった。

「私」の生徒だけでなく、他の生徒や先生方も私たちのことを温かく迎えてくれたのが印象に残っている。

私はアルゼンチンの文化や歴史、食べ物や慣わしなどについてクイズ形式で発表を行ったが、国によって社会の仕組みや常識が異なることをとても楽しみながら学んでくれたようだ。

例えば、アルゼンチン人にとってクジラはとても大切な生物だが、クジラは食べないとか…

私の国、アルゼンチンについて生徒たちが恥ずかしがりながらも、知りたがっていると感じたことが一番嬉しかった。発表の最後に行なった質疑応答では非常に深い質問も飛び出し、私はかなり真剣に考えなければいけなかったくらいだった。

そのような点からすれば、紋子がいてくれたおかげで私の語学力を補ってもらえ、とても助かった。あと、ダンスを授業の最後に踊ったのもよかった。

全員でチャカレラというアルゼンチンの伝統舞踊を踊ったが、みんなで踊る日本の盆踊りとどこか共通点があるようでおもしろかった。特に女の子たちは最初のうちは踊ることに対してあまり乗り気ではなかったが、徐々に、汗をかきながら踊りまわるくらい活発に参加してくれるようになった。

私自身も十分この授業を楽しんだし、下調べや私が教えた踊りなど、この授業に参加してくれたことで生徒たちもたくさんのことを学んだはずだ。

外大のボランティア活動に参加している学生にはもっとこのような活動を広げていって欲しい。

このようなプロジェクトは外国人に対する偏見や恐怖感を取り除く助けになるし、日本とは全く異なった社会に住む人々の実際を学ぶ貴重な機会を子どもたちに提供する

ことができるからだ。

このような、異文化に対する理解力を深めるプロジェクトに対し協力していただいた府中市の方々に感謝する。

(原文)

First of all I must say that it was a very very interesting activity. I was really moved by the fact that the students had prepared themselves well in advance. They all had read something about Argentina, they had painted the 2 flags, Argentina and Japan as a way to show friendship and that was very nice.

Of course the teacher there was very supportive and he had done a very good job in making the kids interested in researching about my country before hand.

It was also interesting that the whole school was looking forward to the event and so everybody welcomed us very nicely, not only "my" students but all the students and staff at the school.

While I did my presentation, I had prepared a quiz on Argentina, its culture, its history, foods and traditions and it was very interesting to see that the kids were having fun with that and that they knew some of the answers from before hand and some of the new information came to their minds to understand how things work differently in different countries. For example they were surprised about the fact that for us, Argentinean, whales are very important and that we don't eat them...

One of the things I liked the best was the fact that kids were really willing to learn about my country, they were shy of course, but they were interested. At the end of my presentation they also did many interesting questions that I had to think well before answering. In this sense it was great that Ayako was with me because my Japanese was not enough to explain all.

The last thing that was good was the “dance” we had before finishing. We all danced a traditional Argentinean dance called Chacarera, somehow similar to the one Japanese dance in the matsuries, because we all dance together and is more a group dance than a couple dance.

In the beginning kids, especially girls, were kind of reluctant to dance, but after a bit they were sweating a lot as well because they were dancing and moving.

I think it was a lot of fun and I believe that the children learnt new things, both by researching before hand and by participating in the class with me.

I want to encourage the group of volunteers from Gaidai to keep on working on the project because it really helps people overcoming their fears to foreigners and it makes the young students learn about peoples and realities that are very very different from the ones they live in everyday life in Japan.

In this sense I should also congratulate the authorities of the school in Fuchu as they were willing to take part of the project. (Fernando Palasio)

クイズ形式だったこともあり、生徒達は楽しんで参加してくれたと思う。内容が盛りだくさんだったこともあり、時間が足りなくなりましたが、休憩時間をなくしても授業をやってほしいというほど生徒達は意欲的だった。中学生ということで、スペイン語のあいさつの練習などに参加してくれるか心配だったが、積極的に参加してくれたのでよかった。質疑応答では、いろいろな質問が出ていて、アルゼンチンに興味を持ってもらえてよかったと思う。第二部の踊りでは、女の子がなかなか参加してくれなかったのが、難しかった。参加しやすいようにするには、どうすればいいかを考える必要があると思った。(葛山 紋子)

ブラジル班

報告者:河野 千早穂(外国語学部ポルトガル語専攻
1年)

参加メンバー

ファウスト・ペレイラ(大学院地域文化研究科博士前期課程
日本語教育専修コース2年)、河野千早穂(外国語学部ポ
ルトガル語専攻1年)

活動の目的

ブラジルの地理、文化、言語などを紹介することでブラジルに興味を持ってもらい、その後の調べ学習に役立ててもらおう。

活動の内容

行ったこと	生徒たちの反応
1) 自己紹介 2) 位置、気候、地理、人種紹介 ・地球儀上のブラジルを1人の生徒に代表で示してもらおう。 ・地図を使ってブラジルの大きさ、それ故の気候の多様性を紹介。 ・写真を使ったりクイズを交えたりして、人種の多様性、国旗の由来、食事などを紹介。	・位置は分かっていた。 ・サンパウロ州と日本の本州がほぼ同じ面積だという説明で23倍を具体的に示したとき、驚きの声が多数上がった。 ・クイズなどには参加してくれたが、説明が長引くと集中力が切れてしまう生徒が多かった。

<p>3) ブラジル観光ゲーム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・班ごとに、内容を示した紙を元に多数の写真の中から適当なものを選んでもらい、それを簡単に発表してもらおう。こちらからも写真の説明を補足する。 <p>4) 音楽</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際に曲を流し、ブラジルの音楽を紹介。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 写真を探す段階では活発だったが、その後の発表ではやはり集中力が持たなかった。 ・ 音楽が流れると生徒の顔があがった。
--	---

改善すべき点

こちらの説明ばかりではなく、実際体を動かしたり考えたりする、もっと生徒が参加できるものが望ましかった。また、途中で一度も休憩を入れなかったのもう少し時間配分に気を配るとよかった。

感想

時間の面から見ると授業のための活動の数は充分だったが、私たちは生徒たちの反応に対する準備が足りなかったと思う。生徒たちが授業のために勉強しておいた。授業はクイズ形式で行って、生徒たちは簡単に聞かれた質問に答えた。また、生徒たちは想像以上に静かで、実際に彼らの興味を引いているかどうか分かるためのフィードバックをつかめなかった。そのせいか、最初の段階の活動は計画よりずっと早く終わった。グループのメンバーは全員積極的に参加したが、授業の実践の前にもう少しリハーサルしておけばよかったと感じた。1回のフルタイムの模擬授業も必要だったと思われる。

授業の環境は良かった。不足する教材はなく、使いやすかった。

発表のもっとも重要な問題は時間管理だったと思う。発表を全体的に見ると、次の改良点があると思う。

1 つは活動の計画については、時間が余ることを防ぐのに、予備の活動を用意することである。

もう1つはリハーサルの数を増やすことである。

さらに今後、生徒の反応の可能性を考えて、反応が薄い生徒のケースのためにも用意する必要があると思う。以前経験した、小学校の発表に比べると中学校の生徒がおとなしく、騒いでいる生徒を静かにさせるためのタイムロースはない。

以上を踏まえて、今度より、生徒たちの興味を引き、ブラ

ジルや他の海外の国々に知りたい気持ちを生かせるのに貢献したい。(ファウスト)

今回授業を行ってみて、生徒を引きつけつつ必要なことを伝えていくという作業が、いかに難しいものかがよく分かった。ブラジルのことを広く紹介する中で、こちらとしてはその中にその後調べるテーマをさり気なく散りばめたつもりだったが、はっきり「こういうのを調べるといい」と言わないと、自主的には感じ取ってもらえなかったかもしれない。それというのも中学1年生という年齢がイメージしにくく、思っていたよりも幼かったからだと思われるので、そのあたりの対応の臨機応変さも必要だと思った。しかし今回は準備段階からすべて考えて授業に望むという形で、それに責任を感じた分、有意義な体験だった。今後この経験を生かしていけたらいいと思う。(河野)

インドネシア班

報告者: 中村 未央(外国語学部ポルトガル語専攻4年)

参加メンバー

アルベルトゥス(外国語学部日本語専攻2年)、中村 未央(外国語学部ポルトガル語専攻4年)

活動の目的

留学生とのふれあいを通して、中学校の教科書からは吸収することが出来ないであろうインドネシアの多様性を一緒に想像する。第二回目の自主的な調べ学習の一助となるように、ステレオタイプな見方を越えて、インドネシアをどうやって理解していけばいいのか問いかけていきたい。

活動の内容

活動実施内容	子ども達の反応
<p>1) 自己紹介(5分)</p> <p>2) 「レヌカの学び」→「アルビの学び」</p> <p>①日本人学生の場合＝ブラジル留学体験、の例をまずウォーミングアップとしてやってみた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童 4 人程度の班に分け、4 枚のカードを使い話し合いながら分類してもらった。 ・ 黒板に各班がカードを貼って、分類の仕方をクラス全体で共有した。又、なぜそのような分類にしたのか生徒に説明してもらった。 ・ 日本人学生が正解を言い、児童に理由を説明した。(あくまでも 1 個人から見たターニングポイントであることを強調) <p>② 留学生の場合＝アルビの学び(インドネシアバージョン)をやってみる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ カードを 10 枚使って、4 人ごとの班で相談話し合ってもらった。(あとは日本人学生の場合と同じプロセス) <p>※「レヌカの学び」とは・・・</p> <p>留学生について質問を生徒に投げかける。</p> <p>「この出来事(事柄)はアルベルトゥスさんが日本に来る前にしていたことでしょうか？それとも来た後にしたことでしょうか？」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 10px auto;">休憩 10 分</div> <p>3) 質問コーナー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・留学生が生徒に質問するように促し、質問に答えつつ、インドネシアについて掘り下げて語った。 <p>4) まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・初めはどう分類するか戸惑っていたようだが、班毎にいろいろな理由付けを考えてくれていた。 ・発表する際、恥ずかしがって発表できない子が多くいた。 ・正解を私たちが発表し、解説をしている時、生徒達は話をじっくり聞いている様子だった。 <p>・2 回目の方が皆ゲームに慣れたらしく、班毎の議論も活発になり、楽しんでくれていたようだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・しっかりと話をメモにとっている姿が見られた。 <p>・休憩時間も留学生の周りに集まって、自分が疑問だと思っていることを積極的にぶつけてくる様子が見られた。(質問)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インドネシアの植物、流行のスポーツ、調味料、名前、果物、ビール、気候、言葉等 ・インドネシア語の発音に挑戦するのが気に入った様子だった。

改善すべき点

- ・各班がどこに座っているかわかりづらかった。次回班を作って分かれてもらう時には、班の番号を書いたプレートを用意した方が良い。
- ・生徒が質問を沢山用意してくれていたので事前にある程度聞いておけば、もっと的確な答えを用意できただろう。

感想

- 最初、子どもがついて来られるかは心配ですが、実際にやってみれば子どもたちは熱心だったのでビックリしました。
- 私は、子どもたちに知識を与えるのではなく、子どもたちと一緒に何か考える授業がいいと思います。
- 中学生生徒が意外と授業に積極的に参加してくれて、そ

の感触がとても良かったので安心したと共に、一緒に多文化のことを考えてくれた生徒さんたちに感謝したい気持ちで1杯である。(アルベルトゥス)

「アルビの学び」で、異文化体験がどのような形でターニングポイントになるのか考えてもらった時、生徒達が自分の頭で想像してくれた事、答えと違っていても新しい発見をつかんでくれたであろう事が、私たちの今回の活動での収穫だったと思う。

また、生徒が事前に質問を沢山考えてくれていたため、「インドネシア・レクチャー」ではなく質問コーナーにしたが、かえって生徒さんの希望にこたえられて良かったと思う。

ステレオタイプ的な見方ではなく、よく異文化を見てみる/考えることの大切さを、次の調べ学習段階で思い出してくれれば良いと願っている。(中村)

中国班

報告者：飛田 美由紀(外国語学部ロシア語専攻4年)

参加メンバー

李 松蘭(研究生)、飛田 美由紀(外国語学部ロシア語専攻4年)

活動の目的

留学生の経験を通して中国の言語や文化を紹介し、関心をもってもらう。また、調べ学習の一助となるようにする。

活動の内容

行ったこと	生徒たちの反応
<p>1) 現地語導入</p> <ul style="list-style-type: none"> 留学生が中国語のみで漢字の結び・1～5の足し算あいさつを説明。 20分後に実は日本語が話せるということを暴露する。 	<ul style="list-style-type: none"> 留学生が日本語を話せないと思い、最初は戸惑っていたが、徐々に真剣に話を理解しようとしており、問題にも答えられた。 日本語が話せるということが分かって、安堵の表情がみられた。
<p>2) 中国の祭日の話</p> <p>労働の日などを説明。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 10月に1週間の休みがあると言うと、「いいな～」と言っていた生徒が何人かいた。
<p>3) 留学生が中学校時代で思い出に残っている話</p> <p>「李さんが中学校時代で思い出に残っていることは何でしょう？」と質問し、答えがでたところでエピソードを語った。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 席取の話には興味を示さなかったが、誕生会で長家を飲んだ話をすると喜んでいました。 ここで緊張がほぐれた。
<p>4) 民族の話</p> <p>「李さんは中国語と日本語のほかにもう1つ言語が話せます。それは何でしょう？」という質問から始め、その理由を説明しつつ、中国の民族の話をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 母語や母国語、民族といったことを説明してもピンと来ないようで、反応がなかった。
<p>5) 漢字クイズ</p>	

<ul style="list-style-type: none"> ・中国語の漢字を書いたカードを見せ、日本語の何を表しているかを答えてもらった。 ・正解した子にはお菓子をあげた。 <p>6) 質問コーナー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なるべく李さんに関しての質問をするようお願いした。 ・質問してくれた子にはお菓子をあげるようにした。 <p>7) 羽織り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お手玉のようなものを足でける遊びをチームに分かれて競い合った。 ・合計得点の一番高いチームにお菓子をあげた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字クイズが一番盛り上がっていた。 ・皆が次々に手を挙げて答えてくれた。 <ul style="list-style-type: none"> ・聞きたいことがたくさんあったようで、次々と質問がでた。 ・お菓子の袋に中国語で一言メッセージを書いたので、それを見てはしゃいでいた。 <ul style="list-style-type: none"> ・夢中になってやっていた。 ・初めは恥ずかしがりながらも、皆楽しんでいった。
--	---

改善すべき点

1) 民族の話があまり伝わらなかった。シミュレーションゲームをするか、映像を見せないといけないと感じた。

2) また、遊びでお菓子をあげたのが失敗だった。生徒がお菓子のために頑張っているような気もしたし、貰える子と貰えない子が出てきてしまった。あげるのであれば全員にあげたほうがよかった。

3) 第二回活動

活動日時 2006年12月12日(火)、13:25～15:15

参加メンバー

(コーディネーター)
 和田 はる菜 (外国語学部フランス語専攻3年)
 露木 智子 (外国語学部スペイン語専攻4年)
 (スタッフ)
 葛山 紋子 (外国語学部スペイン語専攻4年)

飛田 美由紀 (外国語学部ロシア語専攻4年)
 中村 未央 (ポルトガル語4年)
 矢ヶ部 真理 (外国語学部ロシア語専攻4年)
 河野 千早穂 (外国語学部ポルトガル語専攻1年)
 パラシオ・フェルナンド (PCS)
 ツエレテリ・タマラ (PCS)
 ファウスト・ペレイラ (大学院地域文化研究科博士前期課程日本語教育専修コース2年)
 李 松蘭 (研究生)
 アルベルトウス (研究生)

アルゼンチン班

報告者: 葛山 紋子 (外国語学部スペイン語専攻4年)

参加メンバー

マルティン・ミランダ (JLC)、葛山紋子 (外国語学部スペイン語専攻4年)

活動の目的

生徒たちの中間発表を聞き、感想・改善点を述べる。

生徒の発表内容	メンバーのアドバイス・コメント
1) 独立前の歴史	<p>マルティン・葛山:9カ国の国名を説明したほうが良いと思う。</p> <p>葛山:独立の経緯を説明したほうが良いと思う。クイズを入れているのは工夫されていてよい</p>
2) 学校(制度・科目・生徒の様子など)	<p>マルティン:クイズの答えがいくつか間違っている(年度の始まり、制服、ランドセルなど)。学校で習う科目について。</p> <p>葛山:日本人学校についてと、アルゼンチン一般の学校について分けて発表したほうが良いと思う。</p>
3) 祝日(秘書・学生・恋人・友達・子ども・正直者・死者の日など)	<p>マルティン:他の祝日もある。</p> <p>葛山:祝日というテーマが面白いと思った。他の祝日も簡単に説明するとういと思った。</p>
4) 農作物(品目・生産量など)	<p>マルティン:農業と地理についての関係についてコメント。</p> <p>葛山:表やグラフを使って説明している点がわかりやすくよい。他の国と比較している点もよい。</p>
5) 食べ物(ミラネーサ・ロクロ・ア・ラ・クリオージャ・チョリパン)	<p>マルティン:いろんな写真を使っている点がよかった。料理の起源についてのコメント。</p> <p>葛山:写真を使っている点がよかった。料理名についても説明している点がよかった。なぜこのテーマを扱ったかを言ったところもよかった。</p>
6) 食べ物(アサド・エンパナーダス・デザート・お菓子)	<p>マルティン:アルゼンチン人が1年に食べる牛肉の量をコメント。お菓子の食べ方についてコメント。</p> <p>葛山:作り方や味について説明している点がよかった。</p>
7) 飲み物(お茶類〈マテ茶〉・酒類〈ワイン〉)	<p>マルティン:ワインの種類についてコメント。</p> <p>葛山:具体的に説明できていてよかった。</p>
8) アンデスの動物(リャマ・グアナコ・アルパカ)	<p>マルティン:アルパカについて詳しくコメント。</p> <p>葛山:写真を使ってわかりやすく説明していてよかった。</p>
9) 海辺の動物(ペンギン・オタリア・クジラ・)	<p>葛山:種類などをもう少し詳しく説明するとういと思う。調べた感</p>

シャチ)	想を述べていてよかった。
10) 自然現象(気候・漂流・オーロラ・白夜)	マルティン:オーロラについて詳しいコメント。 葛山:オーロラのでき方、見られる場所など、非常に詳しく説明できていてよかった。興味深いテーマを選んでいると思った。表をうまく使っていてよかった。
11) 楽器(バンドネオン・チャランゴ)	マルティン:楽器の起源、使う機会についてコメント。音源もあるとさらにいいと思う。 葛山:楽器というテーマが面白いと思った。楽器の形体などを詳しく説明していてよかった。
12) アルゼンチンタンゴ	マルティン:踊っている映像もあるとよいと思う。 葛山:アルゼンチンタンゴの始まりについて説明していてよかった。
13) 民族衣装(ガウチョ)	マルティン:ガウチョが唯一の民族衣装ということをコメント。 葛山:女性について考えて、感想を述べているところが非常によかった。
14) パト(歴史・ルール・道具など)	マルティン:パトの詳しいルールについて説明。 葛山:写真などもあるといいと思う。
15) マファルダと言語(スペイン語の挨拶など)	葛山:読者や物語について説明していてよかったと思う。

感想

学校側の不備がいくつかあったと思った。1)メンバー紹介がなかった。2)15分遅れた。3)メンバーは生徒に背を向けて意見していた。4)パワーポイントがきちんと準備されていないものもあった(古いバージョン)。(マルティン・ミランダ)

全体的によく調べていると思いました。少人数で調べ、発表をしていて、よくがんばっていると思いました。選んでいるテーマも興味深いと思いました。ただ、私たちの役割があまりよくわかりませんでした。アドバイスを聞いて、メモ

している様子もなかった。また、質問を事前に FAX などで送って、返すことができれば発表のときに活かせるのではないかと思います。(葛山紋子)

ブラジル班

報告者:河野 千早穂(外国語学部ポルトガル語専攻
1年)

参加メンバー

ファウスト・ペレイラ(大学院地域文化研究科博士前期課程

日本語教育専修コース2年)、河野千早穂(外国語学部ポ
ルトガル語専攻1年)

活動の目的

以前の活動を受けた発表を聞き、補足やアドバイスを

活動の内容

生徒の発表内容	メンバーのアドバイス・コメント
<p>1 班の発表 「ブラジルと日本の共通点と違い」</p> <ul style="list-style-type: none">ブラジルでは時間にルーズなことが多いレストランでは料理を残すことが一般的野菜・果物・コーヒー・サトウキビが盛ん、鉄鉱石が豊富	<p>ファウスト:発表ほど時間にルーズなわけではなく、特に仕事の場などでは時間にルーズなのはよくないとされている。</p> <p>食べ物を残すことは良くないという認識がある。</p>
<p>2 班の発表 「ブラジルの・人種・まち・市場」</p> <ul style="list-style-type: none">インディオとポルトガル人の混血の存在黒人、ヨーロッパ移民、日系人など、多様な人種の存在サンパウロは移民の町、東洋人街市場にはサンパウロ、サルバドール、フェイラの青空市などがある	<p>ファウスト:人種が多様なので、法に差別を禁止するものがある。</p> <p>混血が進み、特定できないほど様々な血を受け継いだ人が多い。</p> <p>フェイラは市場という意味なので、固有名詞ではない。</p> <p>河野:逆に日本にも日系ブラジル人が大勢来ているので、背景などを調べてみると良い。</p>
<p>3 班の発表 「ブラジルの気候・農業・工業」</p> <ul style="list-style-type: none">ブラジルの地域的な気候の特徴(雨期・乾期、熱帯、高原、北東部等)農業の土地利用、農業人口状況、コーヒー・大豆栽培が盛ん工業では鉄鉱石の資源などが採れる	<p>ファウスト:農業面積はブラジル国土の31%になる。</p> <p>鉄鉱石のような資源の採掘だけでなく、それらを精錬することも盛ん。</p> <p>河野:グラフ等でまとめてあり、見やすかった。</p> <p>ブラジルではサトウキビの代替エネルギーや航空機などの工業分野も世界トップクラスである。</p>
<p>4 班の発表 「ブラジルの音楽・概要・動物」</p> <ul style="list-style-type: none">有名な音楽にはボサノバ・サンバがある首都はブラジリアで公用語はポルトガル語サッカーが盛ん	<p>ファウスト:音楽には例えばMPBのように他に100種以上があるので調べると良い。</p> <p>河野:ワニはユニークな発想。ブラジルといえばサッカーのイメージだが、他にもバレーやF1が強い。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・ ブラジルといえばワニで、ワニの説明 <p>5 班の発表 「ブラジルの料理とお菓子」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ヨーロッパと黒人と地元の料理の融合が見られる ・ 有名な料理はフェイジョアーダ ・ 有名なお菓子はポン・デ・ケージョ <p>6 班の発表 「ブラジルの世界遺産」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 遺産の紹介(ディアマンティーナ・ゴイアス・オウロプレット・イグアスなど) 	<p>ファウスト:ブラジルでも米を食べる。ただし日本とは少し食べ方が異なる。</p> <p>日本に比べブラジルでは牛肉が安い。1 kg 100 円くらい。</p> <p>河野:ポン・デ・ケージョはおいしいので、機会があったら是非食べてみてほしい。</p> <p>ファウスト:(世界遺産の写真を紹介)</p> <p>河野:例えばオウロプレットは金で栄えた町であるが、遺産から広がってブラジルの歴史について調べるのもおもしろいかもしれない。</p>
---	--

改善点

学校側との連携をもっととれるとよかった。生徒がどのような内容を、どのように発表するのかということを事前にもう少し具体的に知ることができたら、こちらも的確なコメントを用意できたのではないかと思う。(河野)

感想

今度の活動は生徒による発表であった。6 つのグループがそれぞれブラジルに関わる一つのテーマについて調べて、発表をした。それぞれのテーマはブラジルの日常生活や社会などの広い幅をカバーして、バリエーション豊かだった。

私たちに知らされたテーマの題目は多少大雑把であったため、それぞれの発表に対応できるためどう準備すればよいかちょっと迷っていた。また、役立ちそうな資料も用意した。

それぞれのグループはよく調べたことがわかったが、多少の偏りのある見方も見られた。たとえば、マイノリティー的な行動や側面がマジョリティーのように扱われて、現代ブラジルの本当の姿を描写しないものもあったと思われる。インターネットで得られた情報に基づいた発表が多かったと思われる。しかし、生徒たちが 1 つのデータ源だけでは

なく、ある側面についていくつかの観点を集めれば、発表の偏りが避けられ、より良い発表ができたのだらうと思われる。

以上を踏まえて、今後の活動では、生徒とのコミュニケーションを高める必要があると思われる。たとえば、今度以前に受けた発表にテーマに対して、いくつかの情報を生徒たちに提供することで、より細かく調べることができたと思われる。たとえ生徒たちが前を持ってインターネットの検索で使用されるわずかなキーワードでも知っていれば発表が大きく変ると思われる。(ファウスト・ペレイラ)

生徒たちは多岐にわたる分野を調べていて、聞いていておもしろかった。活動終了後に担当の先生から「本当はもっと調べてあったが発表のために短くした」ということを聞いて、生徒たちのがんばりが伺えた。また発表の内容に関しても、第一回の実践の時に私たちがふれた内容が多く含まれていて、多少は参考になったのだろうかと考えるとやりがいを感じた。

全体を通して感じたこととしては、私たちの班の府中第七中学校の国際理解教育の形は、一方的な情報の伝達に終わってしまったのではないかということだ。私たちが取り扱った内容に対して生徒たちが発表するという形でのやりとりはあったが、例えばファウストさん、私と生徒が個人的

に話すといったような直接的なふれあいはなかった。今回行ったことも国際理解教育の1つの形であると思うが、もう少し違うアプローチの仕方もあったかもしれない。(河野)

インドネシア班

報告者: 中村 未央(外国語学部ポルトガル語専攻 4年)

参加メンバー アルベルトゥス(外国語学部日本語専攻 2年)、中村 未央(外国語学部ポルトガル語専攻 4年)

活動の目的

生徒達が取り組んだインドネシアについての調べ学習にコメントして、生徒達のインドネシアについての深い理解を目指す

活動の内容

第一回目の授業を踏まえて生徒達がどのような発表をするのか見て、内容についてのコメント、調べ学習の本番の発表に向けてアドバイスをした。

生徒の発表内容	メンバーのアドバイス・コメント
<p>1. はじめのあいさつ</p> <p>2. 各グループの発表とそれに対するアドバイス</p> <p>1) インドネシアの言葉について 数字、アルファベット、アニメ、略語(アルファベットで表す略語について)、方言について発表した。数字の読み方に意味が含まれていることや、日本のアニメがインドネシアでも放映されていることがわかった。</p> <p>2) インドネシアの食べ物について 米、インドネシア料理の特徴、有名な料理、よく獲れる魚、果物(ランブータン、バナナ等)、お菓子、ファーストフード、屋台について調べた。異なる香辛料を使うことや、屋台で食事をする人が多いのに興味を持ったようだ。</p>	<p>アルベルトゥス(以降 A と表記): 単に調べるだけでなく、調べたものの中で関係性を見つけるべきである。似ているところがあったら、自分なりにどうしてそうなのか考えること。 (先生からの質問「インドネシアのアニメが調べにくかったそうだが、どう調べるとよいか?」に対して) インターネットの Yahoo だけでなく Google で調べると良い。インターネット辞書 Wikipedia を活用してもいいと思う。 モスラはインドネシア語なので調べてみるといい。</p> <p>中村(以降 N と表記): 感想の時に、日本と比較してどう違うと思うかを入れるのもっと良い。調べる部分は充分できている。もっと数字の表を大きく紙に書くと見やすい。</p> <p>A: 日本のものと共通性があると言っていたので、どうして共通しているのか調べてほしい。生徒からの感想で「料理を調べることでインドネシア語が少し分かった」というのがあったが、料理から見るインドネシア語に着目すると面白いだろう。 N: 絵がきれいで良かった。バナナの種類がいろいろあると言っていたが、食材を調べる時は種類を調べる</p>

<p>3) インドネシアの家について 建材、家の構造、家内部の家具、マンディ(水浴び)について発表した。家の住み方、暑い気候を持つ国なので水浴びを頻繁にするということがわかったようだ。</p> <p>4) インドネシアの動植物について 猿、ゴキブリ、犬、ワニ、豚、インドネシアの代表的な植物について発表した。日本のものとは異なる動植物、宗教的な意味を持つ動物のことを調べていた。</p> <p>5) インドネシアのお金について 貨幣・紙幣の種類や価値、お札の人物・スカルノ大統領の経歴、対日輸出・輸入の状況について発表した。当日はパワーポイントが使用できなかったが色とりどりの貨幣の写真を持って説明していて工夫されていた。</p>	<p>だけでなく、どのように調理されるのか、何を使って食べられるかも調べてみると良い。</p> <p>A: 居住に関わる習慣についても調べられていて具体的な発表だった。民族によっても住む家の種類が違うので、そこを調べてみればさらに良い。</p> <p>N: 習慣について調べていたところが良かった。発表を聞いている人が実際にインドネシアの生活をイメージしやすくなるからだ。インドネシアのどこに住んでいるかによって家の種類も違うらしいので、他に家の外の様子を写した写真もあれば載せてみてはどうか。</p> <p>A: 細かく調べられていた。ただ調べるだけでなく、調べたものが何を意味するのかを考えていくべきだ。</p> <p>N: よく調べていたと思う。植物の絵はあったが、動物の絵もあったほうが良いと思った。というのは、インドネシアでは日本とは形・大きさが違う動物が存在するからだ。また、地域によって植物が違うとアルベルトウスさんが言っていたので、地図も使用するとわかりやすいだろう。</p> <p>A: インドネシアの貨幣・ルピアの価値を具体的にイメージさせるために、その貨幣を使って何が買えるか調べてみると良い。</p> <p>(生徒の感想で、「様々な資料を調べると、違う内容が書いてあり、どれが本当のことを言っているのかわからなかった。」ということに関して) 迷った時は、出所をはっきりさせておくべきだ。</p> <p>N: 貨幣の写真とその説明がビジュアル的にわかりやすく非常に良かった。パワーポイント等の機材が使えることが素晴らしい。自分の意見を言えるようになってほしいと思った。なぜスカルノ大統領が貨幣に出てきたか考えてほしい。というのも、様々な大統領が今までいた中で、スカルノ大統領が貨幣に出たことには、それなりの国民の信頼があったからだろう。彼が在任中に何をしたか、国民にはどう考えられているのか。確かに様々な情報があって迷うところもあるだろうが、それ</p>
--	--

<p>6) インドネシアの儀式について 成人式、ジャワやバリにおける結婚、葬式、イスラム教について発表した。カーニバルのような盛り上がりを見せる葬式がある島もあるということを知って驚いたようだ。</p> <p>7) インドネシアの民族音楽について 民族文化、独特の楽器について発表した。日本とは形状の違う様々な楽器について、写真を使って説明した。</p> <p>3.おわりのあいさつ</p>	<p>らの情報をもとに自分達ならどう考えるかという点を含めると、より充実したものになるだろう。インドネシアの貿易の部分で、日本にあるインドネシアの身近な商品をあげるともっと良い。</p> <p>A:日本は無宗教だが、インドネシアには多くの宗教がある。なぜそうであるのか調べていると良い。世界にはイスラム教を信じている国がたくさんあるので、インドネシアにおけるイスラム教と他国におけるイスラム教について調べてみてほしい。</p> <p>N:儀式の説明の時、パネルを使ってやっていたのが、とてもインパクトがあって素晴らしかった。イスラム教が多くの人々に支持されている意味、メリットについても触れてほしい。インドネシアだけでなく、世界中で信仰を集めている宗教だからだ。イスラム教は馴染みがなく、聞く人にとっては難しいと思うので、その儀式がどのようなものか、どんな意味を持つのか噛み砕いていくといいと思う。</p> <p>A:バリ島の中でも場所によって、民族が違うのでその点についても調べると良い。</p> <p>N:写真を使っていたので、わかりやすく良かった。音楽があったらもっと良かったと思う。インターネット等でもガムランなどの音をとることはできるはずなので、できたらやってほしい。民族楽器が使われるシチュエーションについても調べられると良い。</p>
---	--

改善点

生徒達にさらに追求してもらいたいことは、調べた事実を踏まえた後に、自分達はそれに対してどのような意見を持つのか明確にする事である。発表とはあくまでも、個人あるいは各班自身が考えている立場から行われるものではないだろうか。調べるという作業は現段階でできているので、自分達の意見を発表することを目指してほしい。

コメントする側の反省点は、生徒と密に連絡が取れなかったことである。1回目の実践の後に生徒達は調べ学習で

行き詰まることがあったと、担任の教師が語っていた。1回目の実践で私達は、異文化を理解する時に偏見を持った目で見ないで、実際に外国人・留学生と触れ合って自分たちの目で実際に見てみる事の重要性を伝えた。生徒達からインドネシアに関する疑問や調べ学習を進める上での悩みを受けられるようにこまめに連絡を取れていれば、さらに内容的に深い調べ学習ができたのではと思った。

感想

子どもたちは、誰よりも純粋な目を持ち、すべてを見通すような鋭い感性を持っています。大人になると、いつしかこの能力がなくなります。私は、インドネシアのことを教えに来たのですが、いつの間にか子どもたちから教わるようになりました。

子どもたちが大人になる時、私のことを覚えているかどうか知りませんが、私にとって、子どもたちとの触れ合いは、何よりの国際交流であり、心支えでもありました。交流の場を設けて頂いて感謝します。(アルベルトゥス)

印象的だった事は、生徒達が予想以上に詳しくインドネシアの事物を調べていたことだ。インターネットだけをほぼ頼りにしていたため、様々な視点が盛り込まれている発表とは言えないが、生徒達が自分の好奇心に沿って、調べ学習を楽しんで行っているように見えた。

生徒達の中には、「情報はたくさんあったが、どの情報が正しいのかわからなくて困った。」という生徒がいた。インターネットの検索ボタンを押せば簡単に多くの情報が得られる時代であるが、その中で本当に有用な情報かどうかを見分けるのは難しい。中学生の段階でこのような困難を感じたという事は、生徒達にとって貴重な経験になったのではないかと思う。

また、「インドネシアの情報がなかなか見つからなくて困った」という生徒の意見もあった。インターネットや文献で調べられることには限界がある。その意味で、留学生が自分の出身国について生身の語りをする事は、生徒達がわからなかったことを埋めるのに役に立つだろう。だからこそ、2回の実践の時だけでなく、生徒が調べ学習で困った時にはいつでも、生徒と学生ボランティアの間に連絡が取れるようにしておくべきだったと思う。

来年度に期待することは、1回目と2回目の実践との期間、もっと密に生徒と学生の間でコミュニケーションをとり、「人理解」を充実させることだ。(中村)

中国班

報告者: 飛田 美由紀(外国語学部ロシア語専攻4年)

参加メンバー

周首能(外国語学部朝鮮語専攻2年)、飛田美由紀(外国語学部ロシア語専攻4年)

活動の目的

第一回の授業をふまえて生徒が調べ学習をして、発表を聞き、アドバイスをする。

活動の内容

生徒の発表内容	メンバーのアドバイス・コメント
1) 始めの言葉 2) 各グループの発表とそれに対するアドバイス (1)「中国の料理について」 中国四大料理についてパワーポイントを用いて紹介した。クイズや珍しい料理も紹介していた。(目玉料理など)	飛田: パワーポイントを使っていて見やすかった。 発表の仕方については、もうすこしスムーズにすると良い。 周: 写真もあって見やすかった。四大料理は確かに代表的な料理だが、実際は4種類だけではなくもっとたくさんある。
(2)「中国のスポーツについて」 クイズ形式で中国の代表的なスポーツについて紹介した。(卓球、少林寺など)	飛田: クイズは面白かったが、正解を発表したら、それについてももう少し説明を加えてほしい。 周: 少林寺は正確にはスポーツではない。自己防衛の

<p>(3)「日本と中国の文字の違いについて」 中国の漢字の意味をクイズ形式で紹介した。 («手机»は携帯電話の意味)</p> <p>(4)「日本と中国の関係(唐・漢・清)」 年表を作って、それぞれの時代に起こっていたことを整理して発表した。(遣唐使など)</p> <p>(5)「中国の動物について」 中国で有名な動物から始まり、最近発見されて話題になった動物も紹介していた。 (パンダなど)</p> <p>(6)「中国の学校(日本との違い)」 中国では日本より授業数が多いこと、塾がないことを発表した。</p> <p>(7)「中国の服装とことば」 中国の伝統的な民族衣装やあいさつなどについて紹介した。</p> <p>(8)「民族の楽器」 中国の伝統的な楽器について、イラストを交えて紹介した。</p>	<p>ための武術で、人と戦うものではない。</p> <p>飛田:中国漢字の意外な意味が分かって面白かった。しかし、クイズで正解者が出ないときにはヒントを言ったり、正解を言ってしまったりして、展開を素早くしてほしかった。</p> <p>周:自分も知らなかった漢字の意味もあり、驚いた。よく調べてあった。</p> <p>飛田:ただなんとなくこの3つの時代に絞ったと言っていたので、連続した時代で調べると系統性があって良い。</p> <p>周:年表はよくできていた。これから学校の授業などでもっと日本と中国の関係について学んでいってほしい。</p> <p>飛田:写真もあったし、最新のニュースも取り入れていて興味深かった。しかし紹介するならその動物がどんな特徴を持っているのかももう少し詳しく調べてあるとよかったです。</p> <p>周:パンダ以外にも中国では朱鷺が有名である。</p> <p>飛田:図を使ってわかりやすく説明していてよかった。時間割を作っていて見やすかった。</p> <p>周:時間割は分かりやすかったが、全ての教科を網羅していなかった。実際は各学校によって少し違うこともある。</p> <p>飛田:写真があって見やすかった。ただ服装とことばというテーマはあまり結びついていないように思われるので、服装だけに絞ると良かった。</p> <p>周:紹介された民族衣装は漢民族だけが着るものである。中国人みんなが着るというわけではない。</p> <p>飛田:手書きのイラストが描いてあってよかった。発表の仕方もスムーズだった。</p> <p>周:よく調べてあった。イラストが大きくて見やすかった。</p>
---	---

<p>(9)「民族について(数・宗教・生活習慣)」</p> <p>中国の民族について数などをグラフにして紹介した。</p> <p>3) 終わりの言葉</p>	<p>飛田:最後に自分達の見も加えていたのが良かった。難しい問題にも関わらずよく取り組んでいた。</p> <p>周:良い発表だった。興味が有ったらこれから具体的な民族問題について勉強して行ってほしい。</p>
--	--

改善すべき点

反省点として時間が長引いたこと、発表を聞く側が私語をしたり、メモに夢中になっていたりしたことがあげられる。発表する側は役割分担を明確にし、また発表後は生徒からも質問をするようにすると互いに内容が共有できると思う。

発表の仕方については、独自の意見も交えて詳しく発表する班もあれば、打ち合わせ不足なのか途中で止まってしまう班もあり様々だった。後日の学年発表会に備え、各班反省をして他の班の良いところを取り入れていくと良い。

感想

子ども達の発表にすごく感心した！特にパワーポイントを使った班には本当に驚いた。時代の差を感じさせられた(笑)。ほとんどの皆さんがまじめに調べてくれたようで、本当に良かったと思う。

中には適当な班もあったが、しかし全体で通して見るとやはりしっかりとした授業と言えるのではないだろうか？(周首能)

1 班のメンバーが 2、3 人だったためか、全員が積極的に協力して発表していて良かった。前回の授業で説明したことを発表テーマにした班もあり、覚えていてくれて嬉しかった。

また、生徒達は本やインターネットを通じて調べたものをそのまま発表していたが、周さんが生で感じた中国の実情について話してくれたため、ステレオタイプのものがなくなってよかったと思う。私も地域によって、また人によって異なってくるということを改めて強く実感させられた。

最後に、今回の授業は生徒が主体的ということでは良かったとは思いますが、前回の発表内容と直接的には結びついていないことが残念だった。一般的なことを発表してアドバイスをして終わってしまったので、むしろ第一回目の授業で今回のような発表をさせ、第二回目で国際理解の授業をしたほうがより国に対する固定観念がなくなったのではないかと、個人的には感じた。来年以降第一回目と第二回目の授業のつながりに関して学生と学校でお互いの授業目標を話し合うと良い。(飛田)

グルジア班

報告者: 矢ヶ部 真理(外国語学部ロシア語専攻 4年)

活動目的

生徒のグルジアの発表を聞いてアドバイスや訂正をする。

参加メンバー

ツェレテリ・タマラ(PCS)、矢ヶ部真理(外国語学部ロシア語専攻 4年)

活動の内容

生徒の発表内容	メンバーのアドバイス・コメント
1.あいさつ 2.各グループの発表とそれに対するアドバイス 料理、年中行事(クリスマス、お正月など)、 学校制度、食事	とてもよく調べられていて、ほとんど間違っているところはありませんでした。 間違っていたのは、グルジアの学校制度についての発表で、「グルジアの学生は小学校で刑務所見学がある」というものがありました。みんながそれをやるわけではないそうです。

感想

生徒のみなさんは、はっきりと元気よく発表していて態度がとてもよかったですし、発表内容もレベルの高いものだったと思います。(矢ヶ部)

(5)新宿区立大久保小学校

報告者: 山田 洋平(外国語学部モンゴル語専攻 4年)

参加メンバー

金 智恩(外国語学部日本語専攻 3年) 11/2, 12/14, 21
朴 志禮(外国語学部日本語専攻 3年) 10/17, 12/7
山田洋平(外国語学部モンゴル語専攻 4年)

活動日時

2006年10月17日、11月2日、12月7・14・21日(計5回) 13:50~14:35

活動の内容

5・6学年の児童のうち、児童の希望により韓国語を選択した20名に対し以下のような授業を行なった。生徒には韓

国や他の国から来た児童、韓国語がわかる児童が含まれる。内容は基本的に語学に重点を置いて、とのことであったが韓国語の知識の差で不平等が生じる可能性があったため(韓国語を知っている児童にとってつまらない内容にならないように)文化的な内容も扱っている。以下の内容は他の言語を選択しても同様な授業内容になるように学校側から指定されたものを基本としている。

第一回 あいさつ・自己紹介。自分の名前をハングルで書いてみる。

「こんにちは」「私は～です」といった表現を使って自己紹介。予め参加児童の名前を聞き、各児童の名前をプリントして配布。自分の名前を書く練習をし、余力があれば友達の名前も書いてみる。

第二回 学校にあるものを韓国語で言う。

小学生向けの韓国語テキストを参考に、語彙の学習を

行った。ハングル表記・振り仮名を付したカードを提示し、発音して覚えさせる。余力があればハングル表記を書き写す。

第三回 ティータイム

学校側からの希望では「お茶の作法」ということであったが、これを拡大解釈し「韓国のティータイム:お茶とお菓子について」という内容を扱った。韓国でポピュラーなお茶 5 種類とお菓子を用意し、味わってもらおうというもの。前半はゲームを行い、お茶の名前および数字(1~4)を覚えてもらう。後半お茶の名前を思い出しながら試飲・試食。

第四回 遊び

チームを組んで韓国でポピュラーな遊び(ユンノリ)をした。これを通じてユンノリで使う用語を韓国語で覚えるばかりでなく前回の数字の続きなども使うようにした。

第五回 調理(チジミ)。

4 班に分かれ家庭科室にて調理を行なった。食材は小麦粉・卵・調味料・ニンジン・ニラなど。食品衛生上、生肉は用いなかった。全体での説明後、各班を回って指示。言葉としては「いただきます」「ごちそうさま」の表現を復習。片付け後、班ごとに国際理解教室の感想を述べてもらった。

児童の反応

韓国語の知識などにバラツキが見られるものの、基本的には自主的に韓国語を選択してきた児童とあって韓国語に対する関心は強く感じられた。しかし当初は内容が簡単すぎる児童にとっては集中が続かず、授業の進行がうまくいかない場面もあった。後半、ゲームなど動きを取り入れた内容にすることで全体のまとまりが取れてきて多くの児童が積極的な姿勢で取り組んでくれた。

感想・課題

大久保小学校は様々な文化背景を持つ児童がいるという点で自分自身勉強になるところが多かった。自分がいかに隣国のことを知らなかったか再認識したとともに、児童たちにどのような視点で国際理解教室は行なわれるべきかという点が課題として残った。彼らにとって意識しなければ殊更に「外国」などと区別する必要のない、しかしながら

文化や言葉の面での隔たりは大きな隣国に関して児童はどのような視点で今回の授業を吸収していたのかもっと注意を払えば良かったと思う。学習の方法として視覚的な資料を効果的に使用し、ゲームなどで全員がうまく参加できるような形でメリハリをつけて集中力の削がれない構成にもっと工夫をすべきであった。



(6)府中市立小柳小学校

1) 概要

報告者: 田村かすみ(外国語学部スペイン語専攻1年)

参加メンバー

田村 かすみ (外国語学部スペイン語専攻1年)
青木 美江 (外国語学部スペイン語専攻1年)
森本 舞 (外国語学部日本語専攻4年)
和田 更沙 (外国語学部ポルトガル語専攻4年)
遠田 友香 (外国語学部日本語専攻4年)
李 冬梅 (外国語学部日本語専攻3年)
中村 理香 (外国語学部日本語専攻3年)
黄 美花 (外国語学部日本語専攻2年)
豊田 真也 (外国語学部朝鮮語専攻2年)
池北 眞帆 (外国語学部スペイン語専攻1年)
橋本 沙織 (外国語学部スペイン語専攻1年)
伊井 紘子 (外国語学部スペイン語専攻1年)
神宮 桃子 (外国語学部スペイン語専攻1年)
田代 真優 (外国語学部スペイン語専攻1年)
税所 佳奈 (外国語学部スペイン語専攻1年)
北村 美沙子 (外国語学部スペイン語専攻1年)

仲山 和也 (外国語学部ポルトガル専攻 1 年)
山田 大成 (外国語学部ポルトガル語専攻 1 年)
内山 ゆみ (外国語学部ドイツ語専攻 1 年)
陳 哲軒 (ISEP)
ベンジャチャチャーワーン・ジュリー (ISEP)
シーヌアン・ウォララット (ISEP)
トーイン・チャンジュター (ISEP)

活動日時

2007 年 2 月 26 日(月)、3 月 1 日(木) 10:45~12:20

コンセプト

昨年末に行われた多文化学生フォーラムで東外大スタイルとして示された「国理解」ではなく「人理解」、「1 人称で語る国際理解教育」の姿勢をできるだけ体現しようとした。チーム編成ではこの姿勢のもと、昨年までのようにチーム名を国名で付けるのではなく中国出身の留学生 3 人の名前をチーム名とし、彼らを中心として編成を行いました。また、1 日目の授業で外側から留学生のことを知った後、2 日目の授業では留学生個人のことを知るための授業案を班ごとに作成しました。

授業の内容

1 日目:「○○さん(留学生)のおうちへ行ってみよう! すごろく」の作成

活動は各クラス(全 3 クラス)で行いました。中国からの留学生 3 人を中心とした 3 つのチームをそれぞれのクラスに配置し、府中から中国出身の留学生のおうちまで行くすごろくを作成しました。具体的には小学生を 5 グループに分け、各グループに中国出身の留学生以外の学生が付き、班ごとに 1 つのすごろくを作るようにしました。子どもたちの中には府中を出ることすら想像することが難しい子どもも少なくない、とのことだったので交通手段と通過ポイントを提示したマップを作成し、それを参考にして作成することにしました。

2 日目:2 日目…「○○さん(留学生)のことを知ろう!」

1 日目の授業で外側から知ることができた留学生のことを、より深く知ることができるように授業案を作成しました。具体

的な授業案の内容は各チームの報告に載せています。

2) 各チームからの報告

李さんチーム

報告者:池北 真帆(外国語学部スペイン語専攻 1 年)

1 日目 子どもたちの様子

内容説明

積極的に、興味を持って聞いてくれていた。

作戦タイム

私たちがフォローしていくと(半ば誘導尋問のような感じではあったが)、質問を思いつけるという感じではあった。やはり中国に行くことに関してピンときていない子もいた。

質問タイム

質問の内容が重複してしまってふてくされてしまった子もいた。

すごろく作成

これだけの人数で意見をまとめることはとても難しかった。けんかが始まって泣き出す子も出て、大変だったグループもあった。また、中国の都市に関してはやはりピンときてなくて、わからない子が多かった。

発表

発表の準備の時間がなかったので戸惑いながら発表している子もいた。それでもそれなりに自分たちのチームの良さを考えて発表していた。質問のときも、質問しにくい内容ではあったと思うが、積極的に質問していて良かった。

2 日目 活動の内容

(1)あいさつ、自己紹介(5 分)

(2)「李さんはどんな子どもだったのかな?」(45 分)

内容説明(5 分)

クイズ、李さんのお話(10分×4問):クイズを交えながら、李さんの家族と子ども時代(生まれてから小学生まで)について知る。クイズは4問あり、形式は4択にして4隅にボランティアメンバーが選択肢(A,B,C,D)を書いた紙を持って立ち、正解だと思うものに移動した。その後、なぜその答えを選んだかを李さんから子ども達に質問し、写真について李さんにお話してもらった。

(3)「李さんにみんなのことを紹介しよう！」(45分)

内容説明・体制変更(10分)

話し合い(10分)

発表(15分)

李さんからの質問(10分)

子どもたちを8つのグループ分けて、各グループ1つのテーマを話し合う(例:みんなが好きな遊び、みんなが思いでに残っている学校行事…など)テーマは4つ用意し、同じテーマを2つの班がそれぞれ話し合ってもらった。その際、日本人学生4人が2つの班を担当して交互に見た。

感想

1日目:実践が初めてで緊張したが、子ども達とはすぐになじむ事ができた。想像以上に子ども達が色々考えてすぐろくを作っていたので感心した。やる気のない子どもの意欲をどう引き出せばよいのかが分からず、グループをまとめるのは難しかった。子ども達の様子:積極的に取り組む子どもと退屈そうにしていたりふざけてばかりだったりする子どもの差がかなりあった。

2日目:クラスは違って少し緊張したが、1日目より余裕をもって子ども達と接する事ができた。授業は留学生の負担が大きすぎたけれど、子ども達の集中力は想像以上で驚いた。話し合いの時は子ども達が色々な事を考えるきっかけを作る事が重要だと実感した。

反省点

- ・李さん任せの授業案になってしまった。
- ・子どもたちが盛り上がりすぎたときに上手くまとめられなかった。

成功した点

- ・時間配分がぴったりだった。

- ・子どもたちが飽きることなく集中して取り組んでくれた。
- ・李さんから子どもたちへ、だけでなく、子どもたちが李さんに自分たちのことを教えるという時間も設けた授業だったので、みんな積極的に参加してくれた。

感想

1日目と2日目でクラスが違ったので、なじめるか心配だったが、みんなすぐ懐いてくれて楽しく活動できた。しっかり意見を持っている子が多く、感心させられた。また話し合いのサポートの仕方によって、子どもたちが色々なことを考えるきっかけを与えることができるということを実感した。子どもたちとの活動は純粋に楽しかったので、またぜひこのような活動に参加したい。(内山)

私は初めて日本の小学校に行ったので、いい経験ももらいました。その日はとても楽しかったです。もし機会があったらボランティアをやりたいと思っています。(トイン・チャンジュター)

子どもたちは僕たちがくるのがとても楽しみだったようで元気いっぱい活動してくれた。すぐろく作成の時には、子どもたちは自分の考えを次から次に言ってくれて、積極的に取り組んでいた。その反面、同じグループ内で、意見の相違から一部の子どもたちが口げんかをしてしまって、思うようには作業が進まなかった。けんかをした子どもたちの1人が、2人ですぐろくを作ったときのほうがよかったと言っていたので、多人数のグループワークは難しかったのかなと思った。

ボランティア活動を通してあまり日常的には接することのない子どもたちと共に過ごして貴重な体験ができた。なかでも、彼らの想像力の高さに非常に感心し、驚かされた。(仲山)

1日目…子どもたちの元気に最初は戸惑ったが、すぐろく作りを一緒にやっていくうちに自然に打ち解けることが出来た。そういう意味でもすぐろく作りは1日目のアクティビティに最適だったと思う。子どもたちもはじめは警戒してか少しおとなしかったが、だんだんと積極的に活動に参加し

始め、いろんな意見を述べるようになった。活動していくうちに子どもたちそれぞれの特徴がなんとなく分かってきて、ますます子どもたちと接することが楽しくなっていた。1人または複数人の積極的な子ばかりがすごろく作りをどんどん進めていかないように、スタッフが他のあまり積極的でない子にも話しかけたりして目をかけることも大事だと思った。想像していたより子どもたちが活発だったので、2日目も頑張ろうという気持ちになった。

2日目…なんと言っても2日目の李さんの授業の運び方が非常に上手かった。自分のことばかりを話すのではなく、子どもたちに質問をして彼らの意見に耳を傾け、その意見に対してまた自分がコメントをするというやり方がとてもよかった。これこそ国際理解・人理解のためにもっとも重要なやりとりではないかと強く感じた。しかし、今回は留学生の李さんが日本語も上手く、授業もきちんとかなせるような人だったからよかったが、もっと日本語が話せなくて授業運びも苦手な留学生とともに国際理解教育をするときに、いかにして留学生をサポートし、伝えたいことを伝え、知ってもらいたいことを知ってもらえるかが今後の課題だと思った。後半のアクティビティは子どもたちならではのユニークな発想に触れることが出来てとても楽しかった。国理解ではなく人理解という観点からすれば、このアクティビティが一番その目的を達成できた活動だったと思う。(子どもたちと李さんの間の理解だけでなく、子どもたちの間の理解もあったから。)

以下、自分の思う反省点と解決策をあげておきます。(反省点に関してはしょうがない点もいくつかありますが)

・1日目の質問タイムで、後のほうに質問するグループが質問することがなくなり、そのせいで質問できなかったグループのムードが悪くなっていた。

→あらかじめスタッフの方で質問の内容を考えておき(チーム数×3つの質問)、子どもたちのネタが尽きたらスタッフが何とか誘導してそれらの質問をさせるように仕向ける。

・すごろく作成に思ったより時間がかかった。

→時間がかかることはしょうがないにしても、切り上げ方が悪かった。始めの段階で「作成の途中でも発表してもらいますが、その時でも工夫したところや面白いと思うところを

発表してくれればいいです」みたいなことを言っておいたほうが良い。

・発表の内容が浅く感じられた。他の班の発表を聞く態度が良くないところもあった。

→これも始めの段階で発表の仕方や発表してもらう内容を具体的にこちらから示しておく。それもあらかじめ紙に書いて黒板に貼っておくと良い。聞く側の態度も同様に。

・2日目の最初の授業が李さんに頼りっぱなしの授業だった。

→日本の学生も話の間で少し参加できるような形が理想かも。英語でしゃべらナイトみたいな感じ。ただ今回に関しては李さんの授業の運び方が良かったので、ヘタに他の学生が口出ししないのが逆に良かったのかもしれない。

良かったと思う点

・2日目の最初の授業の子どもたちの話を聞く位置。

→李さんを半円で囲むような形が、自然と李さんと子どもたちの距離をだいたい均等にして、話が聞きやすくなっていった。

・スタッフが立っている位置。

→李さんだけを前に立たせ他のスタッフは四隅にばらけるという形が、これまた自然と子どもたちに主役は誰なのかということをうまく認識させやすかった。

・2日目の最後の授業が個人的には一番よかった気がする。

→子どもたちが主体的に意見を述べられるような活動だったし、子どもたちならではのユニークな発想が聞けて面白かった。子どもたちの発表に対してさらに李さんが自分の意見を述べるというのも対話をしているようで非常に良かった。(山田)

ミーティングに出席することなく急遽実践に参加することになりましたが、授業の流れが分かりやすかったので、生徒と交流しながらうまくすごろくを完成させることが出来たと思います。各クラスが6グループに分けられ、そこへ学生が1人ずつつくと聞いていました。しかし実際に教室へ行ってみると、グループは5つしかなく少し戸惑いました。また、すごろく作りの注意事項の説明をする人や全体の時

間配分を見る人、DVD を撮る人などの担当が事前に決められておらず、当日の朝や実践中にばたばたとしてしまいました。当日の担当を早めに決め、細かな打合せにも時間をかけられればもっとよかったと思います。また、もう少し 1 グループの児童数が少なくなるように実践に参加する学生を出来るだけ多く確保することも大切だと思いました。(和田)

1 日目:小学生達の元気さに驚きました。日本ではゆとり教育が問題だと騒いでいるのですが皆とても素晴らしい教育を受けていると思います。小学生の時から一緒にいろいろな発表や話し合い、作る作業などやっているから皆こんなに元気でしっかりしていると思いました。

2 日目:遊び心が刺激されてなかなかまとめるのが大変でしたが、皆きちんと話を聞いてくれたし四択から選択してそれなりの理由も述べてくれました。又、皆「外国人」の李さんではなく外国人の「李さん」として話しかけてくれたので今回活動の宗旨にも沿った成功だと思います。子どもは純粋で可愛く、知っているのも多く大人より包容力あると感動しました。いい経験させて頂きました。協力して下さい先生と 1 組の皆さんありがとうございました。(李冬梅)

ボランティアに行く前は小学校 3 年生がどんなものかというがよく分からなかった。実際に接してみると、男の子は思ったよりも元気で反応がいいと感じた。特に 1 日目は、自分で仕切りたがる子が、けんかを始めたりして戸惑うこともあった。女の子は落ち着いている子が多かった。また、小学校 3 年生なりに色々考えているということも感じた。それを引き出してあげるのが私たちの役割だと思ったが、1 日目はまず子どもたちをまとめるのに精一杯で、上手く出来なかった。特に参加しようしない子、参加する気はあるができない子に関しては私たちがフォローしてあげなくてはと感じた。(池北)

黄さんチーム

報告者:青木美江(外国語学部スペイン語専攻 1 年)

一日目

流れ	子どもたちの様子
内容説明	先生から事前に指摘されていた通り、興奮状態の子どもが多く、落ち着いて内容説明を聞くまでに多少の時間がかかった。 内容説明では抱いた疑問をすぐに質問してくる子どもが多かった。
作戦タイム	日本人学生がサポートしないとすごろく作成に適する質問を考えるという段階まで至らない班が多かった。
質問タイム	他の班の質問と黄さんの回答をちゃんと聞かない子どもも多く、とにかく自分の班が黄さんに質問するということに集中していた。
すごろく作成	積極的に活動し、同じ班のほかの子どもに作業を促す子どもがいる一方、すごろくに全く興味を示さず手遊びを始める子もいた。また何をやればいいのかわからない、自分は何もできないといった子どもも見受けられた。そのような子どもたちに日本人学生

発表	<p>は話しかけるようにしていたが、作成の時間が少なく、ひとつの班に 6~7 人の子どもたちがいたのでうまく対応できないことも多かったと思う。</p> <p>黄さんも積極的に各班を回っていたので、その都度子どもたちは質問をしていた。日本人学生が少しヒントを与えることで、各班とてもユニークなすごろくを作成することができたように思う。</p> <p>やはり他の班の発表をきちんと聞くことができない子どもは多かった。</p> <p>しかし、それぞれの班が工夫した点など自分たちの意見をしっかり発表することはできていた。</p>
----	---

2 日目

流れ	子どもたちの様子
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">あいさつ、自己紹介</div>	<p>ボランティアメンバーのことをほとんどの子どもたちがフルネームで覚えていてくれた。服装など詳細まで覚えている子どもたちも多かった。また 2 日目は参加できなかったメンバーについて尋ねる子どもたちもいた。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">ブレイン・ストーミング</div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 黄さんについて子どもたちが想像し、用意した紙に書いてもらう。 ・ 2 人 1 組で作成する。 <p>[流れ] 内容説明 作成 クラス全体でシェアしながら黄さんに語ってもらう</p>	<p>きちんと説明を聞こうとする姿勢が見られた。すぐにルールを理解してくれたように思う。</p> <p>当初の予定ではひとつの班で 1 枚のブレイン・ストーミングを作成する予定だったが、1 日目の反省から 2 人、または 3 人で 1 枚のブレイン・ストーミングを作成してもらうことにしたので、子どもたちは作業しやすいようだった。1 日目ではやることに関心を示さなかった子どもも積極的に黄さんに質問をしていた。子どもたちが黄さんについて考え、想像してもらうことが趣旨だったが、とにかく正解を書こうと必死になっていた。そのせいか、全くわからないと言ってなかなか書くことができない子どももいた。</p> <p>シェアする時間では積極的に発表する子どもが多かった。</p> <p>1 日目のすごろくで得た情報をきちんと生かしている子どもたちが多かった。</p> <p>時間が経つにつれ、子どもたち同士で喋り始め、集中しない子どもも出てきた。</p> <p>クイズは夢中になって答えようとする姿勢が多く見受けられた。</p>

<p>黄さんの小学生の時間割クイズ</p> <p>小柳小学校の時間割りと違う点をクイズにして、黄さんが学校生活について語った</p> <p>〔流れ〕</p> <p>小柳小の子どもたちが学ぶ教科と黄さんが学んだ教科の違い、給食の違いについて、黄さんが子どもたちに質問しながら語る。</p> <p>クイズを行う。</p> <p>算数の時間ということで、黄さんが中国語と朝鮮語で1から10までの数字を教える。</p> <p>目の体操を行う。</p>	<p>給食の違いには関心を持った子どもたちが多かった。</p> <p>実際に手を動かしながら、声にして数字を学ぶことは楽しんでいたようだ。</p> <p>目の体操もものめずらしい感じで行っていた。</p>
--	--

感想

私にとっては初めてのボランティアということで、ほぼ手探りの状態でした。いざ本番となると3年生の圧倒的なパワーで正直精神的に疲れてしまいました。1日目のすぐろくはなかなか生徒達が集中出来なくて、作り上げるのがやっとなかったです。中には自分から参加しようとする子もいてそういう子に如何に興味を持たせるかという点においては自分の力不足を痛感しました。2日目のブレインストーミングはふざけて書いている部分もあったけど、参加しようとする姿が多く見られて良かったのではないのでしょうか。模擬授業形式は黄さんに任せっきりで自分は前につたっていただけだったので、何かフォローすべきだったと反省しています。全体としては、自分の考えが甘すぎたし、もう少し心構え(?)をしていけば良かったと思いました。あとは、小学校の先生の大変さや教育の難しさを改めて感じた2日間でした。懐かしい給食が食べられて嬉しかったです。(税所)

その日、一緒に子どもたちと遊んで本当に楽しかったです。今度、機会があれば、また行きたいと思っています。ありがとうございました。(ベンジャチャーワー・ジュリー)

反省としては、先生方も指摘されていた様に1班の人数が多かったことで、私の班は7人いて話し合いに入れず遊んでしまう子がいたり、むしろ話し合いにならなかったりだった。私達学生も含めてかもしれないが、皆すごろく15マスはどう作ればいいのかよくわからなかったようで実際の交通手段を考えたあとなかなか進まなかった。黄さんへの質問も予想したより(お土産を買うのに黄さんは何人家族か、黄さんは実際どう帰っているのかなど)あまり出ず、小3に合わせた授業案を考えるのは難しいと実感した。でも児童達がすごく興味を持って授業にのぞんでくれたのがわかり、豊かな発想や好奇心に驚き、今回参加して良かったと思った。(神宮)

全体を通しては成功といえるものだったのではないかと思います。私の考える反省点を以下列挙します。

- ・ すごろくを作る時間が意外と足りなかったため、多数の児童が他の班の発表に耳を傾けず、自分たちのすごろくを仕上げることに集中してしまっていた。
→発表方法を工夫するべきだった。
- ・ すごろく作りに参加しようとする児童がやはり出なかった。(ある程度は仕方ないが。)
- ・ 先生もおっしゃっていたが、グループの人数が多くて意見を一致させるのが難しく生徒同士の言い合いに

なることもしばしばだった。

- ・ブレインストーミングが連想というよりもクイズになってしまい、児童が想像しようとせず答をあてることに焦点をあててしまっていた。
- ・休憩をはさまなかったため児童たちの集中力が続かず最後には遊び始める児童もいた。

一言で言えばとても勉強になる活動でした。国際理解教育という趣旨からは外れるのですが、いかに児童たちに興味をもたせるかということの難しさを痛感しました。少しでも興味がなくなると児童たちはすぐに違うことをやり始めたり、話を聞かなくなってしまうります。特に2日目は1日目に比べて遊び的要素が少なかったためそれがネックになっていたような気がします。

しかし、黄さんの話を聞いて頷く児童や、声を出して驚く児童など、様々な反応が見られたのは嬉しかったです。時間割や数字、目の体操に児童たちがしっかり反応を示してくれていたのである程度までは成功といえるのではないのでしょうか。国際理解というラインまで達しなくとも、日本と中国との違いに少しでも興味を持ってくれたのであれば、この活動の意義はあったのではないかと思います。

(田代)

学生多文化フォーラムに参加したものの国際理解教育の実践を行うのは初めての経験で、やはり知識をただ得ることと実際に活動することの違いを実感した。一番大変だ

ったのは授業案作成であったように思う。「国理解」でとどまらず「人理解」を目標とする中で小学3年生のレベルにあわせた授業案を作成することは難しく、何度も練り直した。最終的な授業案が決定したのが遅かったため、チーム内でのミーティングや準備が行き届かなかった点多かったと思う。

実際に2日間の授業を通して子どもたちの反応や考え、行動を少しでも知ることができ、とても勉強になった。1日目ではあまり関心を示さず積極的ではなかった子が、2日目では留学生に一生懸命質問している様子が見られたりしたのは正直うれしい出来事だった。留学生の黄さんがうまく授業を進めていってくれたが、私たち日本人学生がそれをうまくサポートできなかったのは反省すべき点である。

今回の実践で学んだことや反省すべきことは次回に生かしていきたい。(青木)

2日間の小学校での実践はとても楽しかったです。日本の小学生と初めて接したこと、給食を食べてみたこと、日本と中国の小学生の時間割が異なっていたことなど、新鮮な経験をし、学んだことが多いです。

2回の授業で、「何を小学生たちにいちばん伝えたかったのか」という主題がはっきりしなかったような気がしました。もっと時間の余裕をもって準備をすればより良い授業になれたのではないかと思います。(黄 美花)

陳(ヴィクター)さんチーム

報告者: 田村かすみ(外国語学部スペイン語専攻1年)

1日目

流れ	子どもたちの様子
内容説明	何が始まるのか興味深々といった様子。 初めて見るボランティアメンバーたちにあまり人見知りしている様子はなかった。
作戦タイム	何を質問するかなかなか話し合いが進まなかった班も多かった。
質問タイム	すごろく作成とはあまり関係のない質問もでた。 おみやげを買う際に知っておく必要のあるヴィクターさんの好きなものは何かを聞く質問もあり、このときの答えが2日目の授業の際に役立った。
すごろく作成	どのような交通手段を取るか、どこを通っていくかなかなか進まない班も多かった。 うまく班での活動に関われず自分の好きなことを初めてしまふ子どもや意見をあまり言えない子どももいた。
発表	鈴木先生がしきってくれたおかげでスムーズに進むことができた。

2日目

流れ	子どもたちの様子
あいさつ、自己紹介	予想していたよりもボランティアメンバーのことを詳細に覚えていた。
クイズ「誰が好きなもの？」 〔概要〕 ヴィクターさんと日本人学生(代表1名)が自分の好きなものを写真に撮り、子どもたちにどちらが好きなものか当ててもらおう。 〔流れ〕 ・説明	1日目の授業の質問タイムの際の質問の答えを子どもたちがよく覚えていたため、思ったより簡単に正解を当てられてしまった。 子どもたちはエピソードよりもゲームの答えを当てることに一生懸命になっていて、言いたかったことがうまく伝えられなかったような気がした。

<p>・考える時間 ・答え合わせ、エピソード</p> <p>「ヴィクターさんに3年3組を紹介しよう！」</p> <p>〔概要〕 子どもたちに自分たちのクラスを紹介してもらおう。</p> <p>〔流れ〕 ・説明、考える時間 ・紹介</p> <p>漢字当てクイズ</p> <p>日本、香港、中国で使われている漢字を提示し、どれがどこで使われているのかあててもらおう。 →「中国語」は1つではない、ということ伝える。</p> <p>子どもたちにとって身近なものを広東語で示し、何なのか当ててもらおう。(例:ドラえもん)</p> <p>ボランティアメンバーにニックネームを付けよう！</p> <p>質問コーナー</p> <p>子どもたちからヴィクターさんへの質問だけでなく、ヴィクターさんから子どもたちの質問もする。</p>	<p>自分たちのことであるからか子どもたちが楽しそうに、かつ比較的集中して話し合ってくれた。</p> <p>発表の際に後ろの方の班の声が聞き取れなかった。発表形態に工夫が必要だった。また、子どもたちの発表に対してコメントを入れることもできず、話を広げることができなかった。</p> <p>メインにしていた上記の2つのアクティビティが予想外に早く終わってしまい、あわててする予定ではなかった広東語で書かれたドラえもんが何なのかを当ててもらおうクイズを追加した。</p> <p>時間が余ってしまったために、急遽行うことにした。</p> <p>結局ヴィクターさんへだけではなく、他のボランティアメンバーへの質問、他のボランティアメンバーからの質問のコーナーになってしまった。</p>
--	--

感想

今回は初めてのボランティア活動であった。皆のおかげで、様々なことが勉強できて、本当にありがとうございました。

子どもと共に過ごした時間を通じて、小学の教育制度の長所と短所がよく分かった。まず、本当に日本の教室の自由度に驚いた。授業の最中なのに、みんなが遊んでいた。そのような教室が香港では絶対考えられない。混乱な教室を管理するために、先生が優しく子どもに正しいマナーを教えた。先生のその優しさにもよく感心した。もし同じことが香港の教室で起これば、叱りは唯一な解決の方法と言えよう。それ以外、先生と学生の友人のような関係が素晴らしいと思う。それに対して、香港の先生と学生の間に未

だ広い溝があって、緊張感が何となく感じる。

確かに鈴木先生は経験が多くあって、素晴らしい先生だが、そういう先生の人数は少ないだろう。経験を積んだ先生の不足は学級崩壊の原因の1つとして働いていると考えられる。そのため、先生の訓練が大事だと思える。それは日本だけでなく、香港にも同じだ。

次は今回の活動で反省すべきなどころである。もちろん皆さんのおかげで、完全に完成したが、困難なところもあった。まず漢字クイズの不足などころだ。確かに漢字クイズは国際教育の一環として有効的な活動と思われる。しかし、子どもがやっぱりあまり興味ないのを見られた。結局、思ったより早く終わってしまって、時間が多く残った。そう考えれば、活動の意義と面白さのバランスはあまりよくなかった

と思える。また、残った時間を潰すために、急にあまり準備しなかった提案を使って、さらに緊張になってしまった。幸いに、田村さんのおかげで、何となくできた。

難しいところはあるが、本当に楽しかった。ありがとう。
(陳哲軒(ヴィクター))

参加する前は子ども達をうまくサポートできるかなど心配なことがたくさんあったけれど、実際に活動してみると私が口を出さなくても子ども達ならではの自由な発想で一生懸命真剣に頑張ってくれて、正直、小学生の力を甘く見ていたなと感じた。私達に対して人懐っこく、進んで話しかけてくれて嬉しかったし、留学生にもとても興味を示していたのが印象的だった。

反省点・課題としては始めに担任の先生からお話があったように課題を真剣に行う子、集中力を欠いてしまう子、発言を積極的にする子、引っ込み思案な子などがやはりでてしまい、1人1人がうまく活動に参加できるように役割を与えるということが難しかった。それから、2日目は話し合いが多かったこともあり子ども達が集中力を欠かしがちになってしまっていたのでやはり授業案を考えると遊びの要素をどう取り入れるかに重点を置く必要があると思った。

初めて参加して子ども達から私自身も多くのことを学ぶことができ、とてもいい経験になった。(橋本)

今回初めてボランティアに参加させていただいて感じたことは子どもたちがすごく国際理解に興味を持っているということです。給食の時間の時に私に英語を勉強したときの話をすごく楽しそうに話してくれたのが印象的でした。まだ小学3年生なのにしっかりとヴィクターさんの話に耳を傾けていた姿をみてこのような授業をもっと普及させたら何かかわるのかもしれないと感じました。子どもたちは元気に時に騒がしくなってしまうときもありましたがしっかりと班の中で話し合うときは話し合っ人が話しているときはちゃんと聞く、というけじめをつけていたことに驚きました。今後でもできる限り参加していきたいと思っているのでよろしくお願いします！(伊井)

今回のボランティア活動で、子ども達が積極的に自分達とは違う他者、異文化を理解しようとする努力が伝わってきた。また自分とは違うバックグラウンドを持つ相手に対して賢明に自分を伝えるためにいろいろな努力をしている場面も多々見られた。子ども達がヴィクターさんに対して自分達の言っていることが伝わらないとわかるとボディランゲージやわかりやすい言葉を使ってコミュニケーションをとろうとしているところが印象的だった。こうした経験は世界には自分達とは違う文化背景を持った人が存在することを理解し、自分達の文化を相対化する上で子ども達にとって貴重な経験になったのではないかと思う。また今、子ども達がそう実感できていなかったとしても大人になって外国人の方と接する機会があった場合に今回の授業の内容は将来の子ども達にとって大きな意味をもつはずだと信じている。(豊田)

初めて子ども達とすごろくをやって楽しかったです。昼ごはんの時もよく話し合って面白かったです。みんなは元気で、あかるくて、本当にかわいい。もしチャンスがあれば、またボランティアをしたいなあと思います。経験になりました。(シーヌアン・ウォララット(トロン))

1日目は鈴木先生の助けもあり、どうにか終わらせることができたが、2日目についてはうまくいったとは言い難い出来だったと思う。

まず、授業案作成の時点で、子どもたちの集中力を見誤っていたため時間配分を失敗してしまった。思ったよりスムーズに進んだため時間が余ってしまい、急遽予定にはなかったアクティビティを入れることになってしまった。

それから、授業形態にももう一工夫する必要があった。ボランティア終了後、ボランティアメンバーの立ち位置1つでも子どもたちの集中力が変わってくるとの指摘があったのだが、自分たちは何も考えずに黒板の前に1列に立っただけで、子どもたちの視点で誰がメインなのかかわりにくかっただろうと思う。授業をうまく進めるためにどのように効果的な「場」を作るのかを再考する必要があると感じた。

何よりも、今回の授業案で「人理解」を達成できたとはとてもではないが言うことはできないだろう。授業案の内容にしても、授業の進め方にしてもヴィクターさんの持つ独自の「文化」を子どもたちに伝えるには不十分であった。どのようにしたらその人ならではの「文化」を子どもたちにもわかるように際立たせ、子どもたちが飽きることなしに伝えることができるのだろうか。難しい課題であるが、これからも支援室の活動をする機会があるならぜひ追求していきたいと思った。(田村)

(7) 狛江市立狛江第一小学校

1) 概要

報告者: 柴本 智代(外国語学部カンボジア語専攻1年)

授業の詳細

小学校6年生の93名を対象に2月20日(火)・27日(火)の2回にわたって行いました。1回目の20日は、学年全体を世界に例え、『世界がもし100人の村だったら』という、ゲーム活動をしました。2回目の27日は、フランス、韓国、アルゼンチンの3つの班が各クラスに分かれ、3時間目は学生側からの授業(主に留学生の日本留学のきっかけや将来の夢)を行い、4時間目は子どもたちからの発表(子どもたちの好きなもの、今欲しいものなどの発表)を行いました。

感想

今回コーディネーターとしての仕事を担当させて頂くことになり、今までの活動とは違い、学校側と連絡を取ったり、ミーティングを行ったり…と、“全体をまとめていく”という仕事をしました。「自分に出来るのか」とか、「これで大丈夫か」など、自分の中で本当にたくさんの不安がありました。なので、無事2回の授業を終えることができた時は、本当に心からほっとして、嬉しかったです。この2回の活動が本当に充実したものとなり、無事終わることが出来たのは、狛江第一小学校の先生方、元気な子どもたち、支援室スタッフの方々、未熟な私に適切なアドバイスをたくさん頂き、ひ

っぱりしてくれた飛田さん、一緒に活動をしてきたボランティアメンバーの学生・留学生の方々、「世界がもし100人の村だったら」のゲームで協力をしてくださった葛山さん、本当にたくさんの方々の支えがあってこそであり、感謝の気持ちでいっぱいです。

全体を通しての振り返り

反省点としてあげられることは、メンバーが確定し、全体が動き出してから実践本番までの期間がすごく短期間であり、かつ、学期末のテストとも重なっていたため、もっと早くから(出来れば12月頃から)メンバーを集めて、年明けには実践案の作成など、準備に取り掛かっていたら、よりよい授業を行うことが出来たのではないか、ということです。良かった点は、まず、学校側との連絡は、スムーズに取れていたことです。実践前に実際に学校へ行き、直接先生方とお話をしながら、授業の打ち合わせを行うことができたのもとてもよかったです。夜まで時間はかかってしまいましたが、事前に先生方と念入りに打ち合わせを行うことができ、2回の実践が本当に充実したものになりました。次に、授業が学生側からだけでなく、子ども達側からの発表もあったことです。留学生や学生達も、子ども達の発表を聞き、今の子ども達の様子や、好きなことなど、たくさんを知ることができました。また、2回目の授業の中で、事前に子ども達に聞いた留学生への質問事項をインタビュー形式などで答えていったことで、児童達の知りたいことに対してたくさん答えられたのではないかと思います。

2) 各チームからの報告

アルゼンチン班

報告者: 伊藤 洋(外国語学部ロシア語専攻1年)

参加メンバー マルティン・ミランダ(留日センター) 中村 恵理(外国語学部スペイン語専攻2年) 伊藤洋(外国語学部ロシア語専攻1年)

活動日時 2007年2月27日(火) 3、4時間目

活動の目的 マルティンさんの話を聞いて、外国人の日本観を実感するとともにアルゼンチンについて理解を深める。

活動の内容

行ったこと	生徒たちの反応
1. 簡単な自己紹介 ・はじめに学生が、最後にマルティンさんが自己紹介をする。	自己紹介で名前を言う前に生徒から名前を叫ばれる始末。全体としてかなり反応がよかった。
2. アルゼンチンについての簡単なクイズ、回答をマルティンが解説。 例「アルゼンチンの面積は日本の何倍？」	積極的に挙手が見られた。 マルティンの少々難解な解説を熱心に聞いていた。その一方で学生が踊ったときにはかなり盛り上がっていた。
3.マルティンに質問 ・マルティンに学生からあらかじめ生徒から出ていた質問をして、答えてもらう。 例「日本に興味を持ったきっかけは？」 生徒による質問	クイズの時よりも熱心に話を聞いていた。教室が静まりかえったときもあった。 アルゼンチンに関することより、マルティンに関する質問が多かった。

感想

ボランティア当日、こちらから提供する資料や呼び掛けに対して生徒からどんな反応が返ってくるか不安だった。というのも、ボランティア実践の前、小学校の先生から子どもたちは恥ずかしがり屋だと聞いていたからだ。しかし、授業が始まると留学生の話にしっかり耳を傾け、純粋に驚き、その場で素直な感想を示してくれた。生徒にさかんに話し掛けながら進行していったためか、打ち解けた雰囲気が進めることができた。近い距離での外国との出会いを提供できた今回の実践内容はかなり満足のいくものだったと思う。

ただ、実践に行く前にもっと小学6年生の雰囲気や学習のレベルを把握できていたらよかったと思う。生徒に対する質問の内容や、話し掛ける口調などは、授業の満足度に直接関わってくる。過去のボランティアの資料や生徒

が使う教科書など、少しでも目を通しておいたら実践前の心持ちも違っていただろう。

また、すべての生徒が最初から最後まで集中力を切らさずに話を聴いていたかという点、そうではない。中には友達と小声で話した子や、自分の世界に入って話に集中できない子などさまざまな生徒がいた。しかし地図や音楽などの視覚、聴覚にうったえるものに関しては全員の反応がよかった。やはり単に話すことだけに偏らない、生徒の興味をひく、かつ印象に残るような工夫は必要だと思った。(中村)

2回目は1回目と比べて格段に生徒との距離が縮まったようだ。生徒と同じ目線で接しようと心がけた成果と見られる。授業に関しては、生徒の勢いが強すぎて進行しにくい時があったが、時間通り遂行することができた。留学生

のマルティンの話には熱心に耳を傾け、話を聞いている姿に小学生から中学生に上がろうとしている生徒を見ることが出来たと思う。個人的にはクラスの半分の生徒が塾に通っている事に驚いた。話を聞くと教育界では 2002 年問題(ゆとり教育の開始)が大きいらしい。小学校や中学校で勉強のほかにクラブ活動や企画活動で友達と触れあうことと、それから学ぶことが将来大切になってくると思う。勉強熱心になることがクラブ活動をしなくなるには簡単には繋がらないと思うが、そのことを大切に生活して欲しいと思った。(伊藤)

私は 27 日にだけ参加しました。予定の観点として、問題はあまりありませんでした。ただ、最初学校の生徒は私達にちょっと遅く迎えに来ましたから、その後の時間は短くなりました。その後、予定通り行いました。

生徒達の学校の生活に関する発表は良かったと思いました。単なる留学生が生徒達に自分の文化のことを教える

ことではなく、留学生が生徒から日本文化について教えてもらえたら、とてもいい経験になると思いました。

最後、花や留学生へのプレゼントは意外に素晴らしかったです。(マルティン・ミランダ)

フランス班

報告者: 井田 明日香(外国語学部フランス語専攻 4 年)

参加メンバー フィリップ・マガン(研究生)、井田明日香(外国語学部フランス語専攻 4 年)、加藤芽実(外国語学部イタリア語専攻 1 年)

活動日時 2007 年 2 月 27 日(火) 3、4 時間目

活動の目的 留学生の国や文化の紹介。留学生が日本に留学するきっかけとなったことを通して、将来を考えるきっかけとする。

活動の内容

行なったこと	生徒たちの反応
<p>1.専攻語での挨拶 留学生から順番に自分の専攻語と日本語で自己紹介。</p>	<p>→留学生からの挨拶では、聞きなれない言語にびっくりしていた。</p>
<p>2.留学生の国紹介 「フランスと言えば何を連想するか？」 「フランス人ってどんな感じ？」と生徒に質問。 世界地図を使ってフランスの説明。人口は日本の半分だが、面積は日本の 2 倍。</p>	<p>→最初は意見が出なかったが、「エッフェル塔」「フランスパン」という意見が出た。エッフェル塔を知っている人は多かった。 →フランス人の印象として、「背が高い」「色白」「青い目」ということを挙げていた。</p>
<p>3.留学生の 12 歳の頃の生活の紹介 水士日は学校が休みだった。 水曜日はテニスをしていた。 学校は 16 時過ぎまでと、日本の学校より長かった。 お昼を食べに家に戻っていた。</p>	<p>→水曜日が休みということに、皆驚いていた。</p>
<p>4.日本留学を決意したきっかけ 日本のアニメが好きだった。</p>	

<p>12歳か13歳の頃から日本で勉強しようと決めていた。</p> <p>5.質問コーナー</p> <p>1週間前に書いてもらったアンケートを基に、児童から積極的に質問が出される。</p> <p>(例)旅行で行って一番よかった国はどこですか？</p> <p>フランス料理で好きな料理は何ですか？</p> <p>何で納豆が好きなのですか？</p> <p>好きな日本食は何ですか？</p> <p>6.数字を使ってグループを作ろう</p> <p>フランス語で1～5の発音練習。</p> <p>その後、その人数で集まって座る。</p> <p>7.留学生からのメッセージ</p> <p>白人＝アメリカ人ではない。</p> <p>普段道端で歩いていて、「Hello!」と言われると傷つく。フランス人としてのプライドがある。英語で話しかける前に、どこの国出身か、と聞いてほしい。</p>	<p>→皆熱心に話に聞き入っていた。</p> <p>→好きなフランス料理が「うさぎのマスタード焼き」だということにびっくりしていた。</p> <p>留学生とだいぶ打ち解けた感じだった。</p> <p>→4と5の発音が混同するようだったが、すぐに数字を覚えてグループを作れた。皆楽しんでた。</p> <p>→なかなか実感が沸かないような感じだったが、熱心に聞き入っていた。</p>
---	---

反省点

数字を使ってグループを作るゲームにもっと時間を割きたかった。また、全体的に時間が押していて、少し急ぎ足になってしまった。

感想

少し時間が足りなくて、焦ったけど、内容的に特に問題はありませんでした。少しフランス語の勉強をしたんですが、時間が足りなかったのが、5分しか出来なくて、残念と個人的には思った。(フィリップ・マガン)

初めての多文化教育支援のボランティア活動に参加し、大変貴重な経験をさせていただきました。私自身フランスに対する新たな発見がありましたし、児童の普段接する機会のない人(留学生・大学生共に)に対する好奇心、そして溢れるエネルギーを感じ、非常に楽しんで活動を行なうことができました。また、9年ほど前になる小学校生活を思い出し、懐かしい気持ちにもなりました。

今回は多文化教育支援ということで、異文化理解のノウハウというより、子ども達と接する楽しみ、子ども達の視点からの様々な発見、また感情の共有、といったことを経験でき、非常に勉強になりました。

また、留学生フィリップの日本に対する思いや、日本に対する深い知識にも感心するばかりでした。この経験を今後私自身がやっている別のボランティア活動でも生かしていけたらと思います。コーディネーターの皆さん、支援室の皆さん、貴重な機会を与えてくださり、ありがとうございました。(井田)

今回初めて国際理解教育に参加してどのような実践になるか不安もあったが、コーディネーターと狛江小の先生方そして児童たちの協力のお陰で本当に楽しく充実した授業ができたと思う。我々が授業をするだけでなく、児童の参加や発表を多く取り入れられたのが良かった。今回の反省を活かしてぜひまたこの活動に参加したい。(加藤)

韓国班

(外国語学部英語専攻 4 年)

報告者: 重廣 里織 (外国語学部カンボジア語専攻 1 年)

活動の目的 日本の大学で勉強している留学生の視点から、異なる国への理解を促す。また、ゲームなどの活動を通して、韓国の言葉や文化を知ってもらう。

活動日時: 2006 年 2 月 27 日 (火)

参加メンバー 金 旼慶 (外国語学部日本語専攻 2 年)、
重廣里織 (外国語学部カンボジア語専攻 1 年)、春山奈保

活動の内容

行なったこと	生徒たちの反応
1.挨拶・自己紹介	1 英語に関しては分かる生徒も多く学生側から分かったか投げかけると反応はよかった。カンボジア語という普段耳にすることのない言葉で話すと感嘆の声を漏らしていた。本場の韓国語には拍手も起きた。 2 「おいしい」という意味の 3 つの異なる文字を前にへえへと驚き、関心を見せていた。 3 まずは流れを作るために学生側が用意した質問を金さんにした。真剣に聞いていた。 4 移動を伴うゲームだったので楽しい分ふざける生徒もいたが、学生や金さんが話すとすぐに聞く姿勢を見せ、韓国の文化などを示す写真と説明に目を輝かせて聞き入っているようだった。 5 3 のインタビューの直後に生徒に質問を促したときはなかなかでなかったが、ゲームの後のせいとか特に男子生徒から積極的に質問があがった。よく聞いていたが長くなると気が散りだす場面もあった。 その他 4 限の生徒たちからの発表のあとの金さんの将来の夢に関する話などには、生徒たちが現在ちょうど直面している問題なのかとても一言一言を真摯に受け止めているようだった。
2.各専攻語を用いた言葉の紹介	
3.金さんへのインタビュー	
4.韓国クイズ	
5.生徒からの質問	

改善すべき点

1) 今回はうまく行ったから良かったものの、もう少し事前の準備はしっかりしたい。

2) 今回は教える側と子どもたちという境界線が比較的はつきりしていたので、子どもたちと一緒に遊ぶなどのやりかたもいいかもしれない。どちらがいいのか。

3) 韓国クイズに関して、子どもたちは移動するという活動に夢中になるあまり留学生によるカードの説明の部分が

少しうるさくなってしまうこともあった。また、クイズの内容が結構簡単だったようなので、後半もう少し難易度の高いものも混ぜるとよかったかもしれない。

感想

まず、とても楽しかったです。そしてまだ小6なのに色々調べて準備して、さらに人の前でそのように発表が出来るというのにとっても驚きました。また先生がなるべく干渉せず、子どもたちにすべてをまかせていた所も印象深かったです。とてもいい体験でした。(金)

準備も慌ただしくリハーサルもできず、うまくいか不安だったけれど適所適所に子どもたちが食い付いてくれてこちら側も楽しくやることができました。金さんへの質問や子どもたちからの発表を見ていても、まだまだ幼く思える部分としっかり自我をもち子どもとは一概に言えないような面も垣間見ることができ、貴重な体験ができてよかった。(重廣)

時間が足りるかどうかわ不安だったが、子どもたちもしっかりと学生や留学生の話すことを聞いていて、スムーズに運んだのでよかった。留学生である金さんが日本に来たきっかけ、驚いたこと、困ったことなどは、児童たちは普段はあまり触れることのない視点だと思う。今回の交流が、少しでも児童たちにとって異なる国の文化や考え方を知る機会となったならよいと思うし、今後もこういった活動をどんどん体験してほしい。「やりたいと思うことが見つかったら、人になんと思われようと実現させてください」という、キムさんの将来の夢についてのお話を聞く児童たちの真剣な顔が、今でも目に焼きついている。(春山)

(8)三島市立東小学校

報告者: 森本 舞(外国語学部日本語専攻4年)

参加メンバー

森本 舞(日本語専攻4年) コーディネーター
掛本 繭子(日本語専攻3年) ワークショップ版「世界がもし100人の村だったら」ファシリテーター

葛山 紋子(スペイン語4年) ワークショップ版「世界がもし100人の村だったら」ファシリテーター
黄 世忠(日本語3年) 国際理解教育
岡田 真悠子(朝鮮語2年) 国際理解教育
麻 春祿(日本語2年) 国際理解教育
佐藤 千秋(朝鮮語2年) 国際理解教育
周 首能(朝鮮語2年) 国際理解教育
オ・ミヨン(研究生) 国際理解教育

以下 ワークショップ版「世界がもし100人の村だったら」参加者

佐藤 美幸(ロシア語3年)
門脇 弘典(フランス語3年)
原田 史歩(アラビア語4年)
南 龍太(ペルシア語4年)
岡 直樹(日本語4年)
栗原 朋応(日本語4年)
中川 寛子(ポルトガル語3年)
萩原 礼子(ポルトガル語4年)
田村 かすみ(スペイン語1年)
武田 千香先生(運営委員)
青山 亨先生(運営委員)
森朴 憲治(運営委員)
岡崎 智子(支援室スタッフ)
相原 幸子(支援室スタッフ)
その他学生数名

活動日時

2006年10月25日(水) 9時~14時

場所

東京外国語大学内

留学生日本語教育センター・さくらホール

食堂1階ミール

附属図書館

研究講義棟 105 教室、106 教室、110 教室、

206 教室<支援室>

活動の経緯

2006年7月13日の朝日小学生新聞に、川崎市立東柿生小学校での実践が取り上げられた。その記事を見た三島市立東小学校入野康孝教諭から、ぜひ東小学校の6年生にも国際理解教育を、と支援室に連絡があった。三島市立東小学校6年生は修学旅行で東京に来ることになっていた。そこで修学旅行の訪問先の1つに東京外国語大学が加わり、希望者20名と入野先生が東京外国語大学を訪問し、東京外国語大学学生との交流学習が行われることとなった。

活動の目的

- 1) 国際理解教育
- 2) 1日大学生体験

ワークショップ版世界がもし100人の村だったら

(9時～11時、留学生日本語教育センター・さくらホール)
パワーポイントを表示し、私たちの日常生活と世界がつながっていることを伝えた。(例: てんぷらうどんの海老)

児童、学生、教職員と一緒に「ワークショップ版世界がもし100人の村だったら」を行い、世界が直面する貧困の問題をシミュレーション学習した。活動のあとグループでの意見交換、児童1人1人が意見を持ち、発表することを重視した。児童は世界の貧困を解決するために自分達にできることを考えた。(例: 給食を残さない)

以下、資料の一部を参照

- ・役割カード
- ・パワーポイント資料

役割カード

1. 性別：男性
2. 地域：アジア
3. 言語：中国語
あいさつの言葉：ニーハオ
4. กรุณานั่ง

この表記は、「座ってください」という意味です。これを見せられたらその通り（座る）にしてください。このことは、他の人には言わないで下さい。

役割カード

1. 性別：男性
2. 地域：アジア
3. 言語：ウルドゥ語
あいさつの言葉：ジュレ
4. กรุณานั่ง

この表記は、「座ってください」という意味です。これを見せられたらその通り（座る）にしてください。このことは、他の人には言わないで下さい。

役割カード

1. 性別：男性
2. 地域：アジア
3. 言語：ヒンディ語
あいさつの言葉：ナマステ

4. กรุณานั่ง

この表記は、「座ってください」という意味です。これを見せられたらその通り（座る）にしてください。このことは、他の人には言わないで下さい。

役割カード

1. 性別：男性
2. 地域：アジア
3. 言語：ジャワ語
あいさつの言葉：スラムツシアン

4. กรุณานั่ง

この表記は、「座ってください」という意味です。これを見せられたらその通り（座る）にしてください。このことは、他の人には言わないで下さい。

役割カード

1. 性別：男性
2. 地域：アジア
3. 言語：テルグ語
あいさつの言葉：ナマステ

4. กรุณานั่ง

この表記は、「座ってください」という意味です。これを見せられたらその通り（座る）にしてください。このことは、他の人には言わないで下さい。

役割カード

1. 性別：男性
2. 地域：アジア
3. 言語：ベンガル語
あいさつの言葉：
アッサラーム アライクム

4. กรุณานั่ง

この表記は、「座ってください」という意味です。これを見せられたらその通り（座る）にしてください。このことは、他の人には言わないで下さい。

役割カード

1. 性別：男性
2. 地域：アフリカ
3. 言語：アラビア語
あいさつの言葉：
アッサラーム アライクム

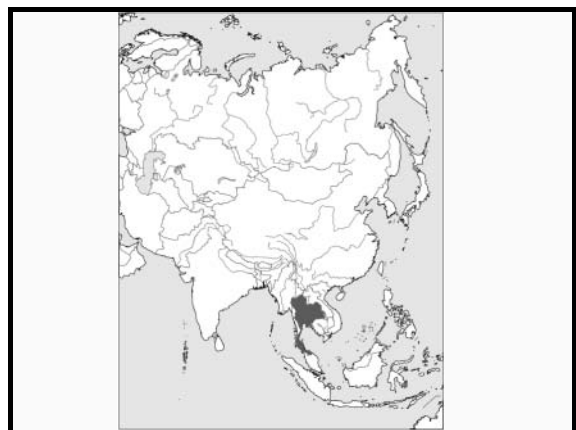
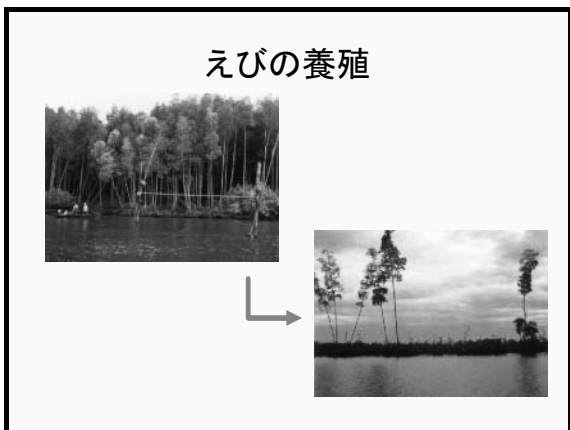
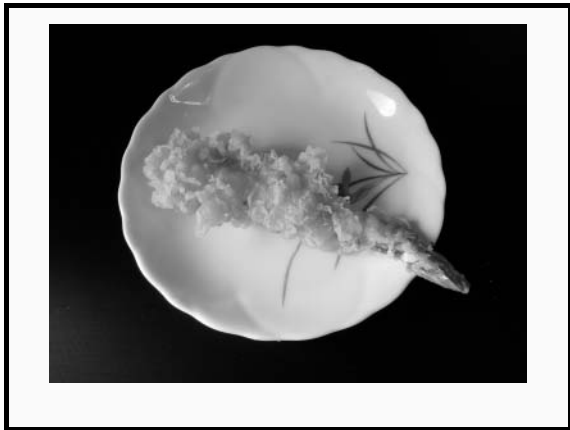
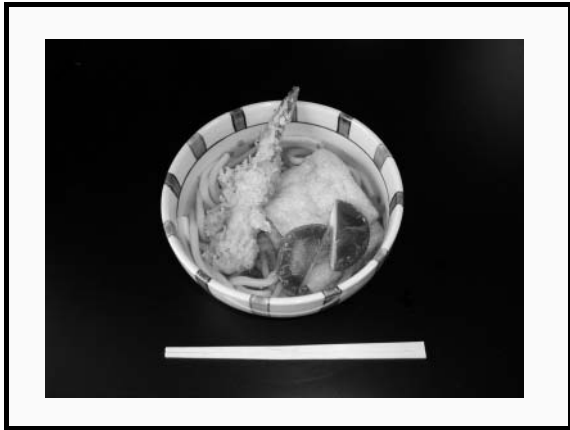
4. あなたは字が読めません。

役割カード

1. 性別：男性
2. 地域：アフリカ
3. 言語：ヨルバ語
あいさつの言葉：エ カサンウ

4. กรุณานั่ง

この表記は、「座ってください」という意味です。これを見せられたらその通り（座る）にしてください。このことは、他の人には言わないで下さい。



昼食、昼休み

(11時～12時15分、食堂1階ミール、付属図書館、講義棟)

児童が学食を体験し、学生と自由に交流できる時間とした。大学生協の方の協力で食券を作っていただき、スムーズに食事を準備することができた。その後付属図書館と研究講義棟内を見学した。図書館では外国語で書かれた本に興味を示す児童や、かくれんぼをする児童がいた。

児童による三島の紹介

(12時20分～13時10分、講義棟110教室)

児童が大学生に向けて、3島の歴史や景勝地、特産物を紹介した。昼休みであったため多くの学生が聞きに来た。学生のうちなずき、感嘆しながら聞く姿勢に児童は喜んでくれたようだ。

国際理解教育

(13時20分～13時50分、研究講義棟105教室、106教室、110教室、206教室〈支援室〉)

(1)ソウルチーム(オ・ミョン、佐藤 美幸)

「料理を通して知る韓国」講座 地域によって様々なキムチを紹介した。

(2)吉林チーム(麻 春禄、佐藤 千秋)

吉林で有名な樹氷を中心に、食べ物、特産物などを紹介した。

(3)大連チーム(周 首能、森本 舞)

周さんが日本に来たきっかけを紹介しながら、中国と日本の違いと共通点を伝えた

(4)台湾チーム(黄 世忠、岡田真悠子)

台湾の言葉を学習。貴さんのギターの演奏で楽しみながら交流した。

まとめ・記念撮影

(13時50分～14時、講義棟110教室)

児童からお礼の言葉とお土産「福太郎」をいただいた。

活動をふりかえって

(1)タイムスケジュール

児童も学生も楽しむことができ5時間という時間があったという間に感じられたが、一部の児童に疲労がみられた。修学旅行の2日目ということを考慮し、もっと弾力性のあるスケジュールで児童を迎え入れるべきだったろう。今後小学生が外語大を訪問することがあれば、大人と児童の体力差、さらに児童がおかれている状況(今回の場合、修学旅行2日目であること)を考慮すべきである。

ワークショップ版「世界がもし100人の村だったら」は120分要すると考えていたが、スライド上映を含めて90分で十分だった。そのため最後の方が間延びしてしまった。また教室予約がうまくできず、予約した教室が授業中であったため、昼食後のスケジュールに遅れが生じた。

(2)ワークショップ版「世界がもし100人の村だったら」

ファシリテーターの学生が人数比率をできる限り再現するため準備をしてくれた。児童はしっかりと自分の意見を持つことができ、「自分はこう思う。なぜならば・・・」と活発に意見交換をしてくれた。活動が早く終わってしまい意見交換の時間が長くなってしまったが、苦労なく話し合いを続けることができた。

(3)昼食・昼休み

急遽図書館見学をすることになった。児童はそれぞれに図書館を楽しんでいたようだった。昼食を食べながら児童と大学生が会話した。

(4)国際理解教育

留学生1人、日本人学生1人、児童5人と少人数で輪になって話しをした。写真を見せると子どもたちはぐっと引き込まれた様子だった。支援室の他の国際理解教育と違い、今回は1回だけのイベントであったため、料理や景勝地の紹介を行ったチームが多かった。(韓国チーム:料理、主にキムチを通して知る韓国講座・吉林チーム:吉林の名物樹氷について・台湾チーム:台湾ってどんなところ?・携帯電話の普及率など、大連チーム:周さんが日本に来た理由を通して、日中の違いと共通点に気づく)

(5)準備

学生の募集を共生学講座の1週間に行い、10月3日から準備を始めた。だがなかなか学生、特に留学生を集めることができず、予定した通り準備に入ることができなかった。平日の日中に時間のある学生は少ない。そのため全ての活動に関わる学生数名と、午前中に参加する学生、午後に参加する学生に分けて対応した。



参考文献

100 人村教材編集委員会編集「ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら」(2003年、非特定営利活動法人開発教育協会)



修学旅行で 留学生と交流

国際理解について
学んできた、静岡県
三島市東小の六年生
二十人が、修学旅行
で東京都府中市の東
京外国語大学（東外
大）をおとすれ、留
学生や学生と交流し
ました。留学生の母
国の話を聞き、自分
たちもふるさと三島
を紹介しました。

静岡・三島市東小6年生 東京外国語大を訪問



中国出身の学生（右）から中国の地理を説明して
もらう東小の子どもたち＝東京外国語大学で

つする機会が持てな
いかと考えていたと
ころ、朝小の記事で
東外大の留学生らが
国際理解の授業をし
ていると知り、修学
旅行のコースに組み
入れました。

二時まで約五時間。
世界の貧富の差につ
いて考えるゲームを
し、午後は、紙芝居
などで三島を紹介、
中国や韓国、台湾の
留学生らから話を聞
きました。

「中国のお金とか
実際に使ってるもの
が見られて、本で勉
強するのはちがっ
た」と小野優花さん。
武田朋起くんは「こ
れまで台湾のことは
全然知らなかったけ
ど、世界一高いビル
とかいろいろな世界
一があると知った」。
交流を行った多文
化コミュニケーション
支援室を運営する武
田千香助教授は「留
学生とせつすること
で、その国のできご
とに敏感になってく
れば、外国への扉
や視野が開けたら
いいですね」と話して
います。

（中田美和子）

取材記事「修学旅行で留学生と交流」(朝日小学生新聞 2006年11月7日)

(9)第 5 回大泉日系ブラジル青少年フェスティバル

報告者: 向井 香純(外国語学部ポルトガル語専攻 2 年)

参加について

2006 年 10 月 8 日、群馬県大泉町文化村大ホールにて行われた第 5 回大泉ブラジル青少年フェスティバルに参加した。

当フェスティバルへは 2004 年から参加しており、本年も主催者である高野祥子さんからお招きいただき、参加させていただけることとなった。本年度は、ことばや文化の共通点・相違点を知り、面白さに気付き、興味をもってもらうことを目標として、日本語とポルトガル語のことばの中に見られる共通点と相違点、また文化の違いを紹介する劇を制作した。準備の段階では、紹介するトピックの発案、台本の作成、ポルトガル語翻訳、留学経験のあるメンバーとネイティブの留学生による添削といった作業を行った。また、当日は 14 名のメンバーが参加した。

感想・反省点

準備の段階では、発案、台本の作成で少し手間取ったこともあり、かなりバタバタとしてしまった。特定の作業に関わるメンバーが偏ってしまっていたので、それらの作業がスムーズに行かなかったのだと反省している。もったきちんと役割分担をするべきだと思った。

準備で手間取っていたために、事前の練習があまり行えず、当日の本番までの時間を練習に費やした。そのため他の団体の発表を見たり、会場に来ているブラジル人の方々と交流をする時間をあまり持てなかった。昨年までの反省でも言われていた事だが、改善できなかったのが残念であった。

発表自体に関しては、とくにトラブルもなくスムーズに行えたのでよかったと思う。劇の内容を観客の方々、とくに小さな子どもが理解してくれるかどうか不安だったが、最中に笑いがおこる場面があり、また劇中のクイズに楽しそうに反応する子どもの姿もみられた。

この発表で目指していた、「ことばや文化の共通点・相違点を知り、面白さに気付き、興味をもってもらう」という目

標について、そのような機会を与えるという意味においては達成できたのではないかと思う。

発表の内容

以下に発表の内容を紹介する。

発表は、ポルトガル語と日本語の両方を用いて行われた。

登場人物: ナレーター、ブラジル人留学生クラウジア、祖父、祖母、父、母、兄、姉、妹(黒子、音響・照明、記録)
設定: ブラジル人留学生クラウジアは日本の一家のもとでホームステイしている。場面は夕飯の食卓。

ナレーター:

Bom dia! Nós somos estudantes que membro da Rede de Intercâmbio com os Estrangeiros Residentes no Japão da Universidade de Estudos Estrangeiros de Tóquio. É nosso apelido é AMIGOS. Na universidade, estudamos língua, sociedade e cultura dos países estrangeiros. AMIGOS faz vários intercâmbios com os estrangeiros residentes no Japão. Nossas palavras chaves são contato, comunicação, palavra e aprendizado. Hoje, vamos fazer um teatro que apresenta o interesse de palavras. Então assistam, por favor. Nós gostaríamos de falar como interessante as palavras japonesas.

こんにちは！私たちは東京外国語大学の東京外大在日外国人交流ネットワーク、アミーゴスに所属している学生です。大学では、外国の言語や社会、文化について勉強しています。アミーゴスでは、それらを生かし、ふれあい、伝える、ことば、学ぶをキーワードにして、在日外国人の方々のさまざまな交流活動を行っています。今日は、みなさんにことばのおもしろさを紹介する劇を行いたいと思います。それではご覧ください。

Ha um mês desde que Claudia que é brasileira e intercambista começou a morar em casa de Takeda. Ela têm um interesse pela cultura japonesa e veio ao Japão para estudar japonês. Ela se assustou muitas vezes na vida

no Japão todos os dias. Agora está a hora de jantar agora. Conversando com alegre. Vamos assistir. Olha, eles estão conversando com alegria.

武田一家にブラジル人留学生クラウジアがやってきて1ヶ月になりました。彼女は日本の文化に興味を持ち、日本語を勉強しにやってきましたが、新しい発見の連続で、毎日驚くことばかりです。ちょっと彼女の様子を覗いてみましょう。

(少し間をおいて)あ、ちょうど今は武田家の夕食の時間です。何やら盛り上がっているようですよ・・・。

(はける)(フェードイン)

一同:ハハハハと笑い声

母 :Então, estão todos aqui?!? Vamos comer.

じゃあみんなそろったわね。

一同:いただきます (食べ始める)

父 :Mm ... , a croquete da mãe é gostosa.

うーん、おかあさんのコロッケはうまいなあ。

姉 :Claudia,você já acostuma com a vida do Japão?

クラウジア、日本にはもう慣れた?

クラウジア(以下ク) :Já acostumei.

うん、だいぶ慣れたよ。

兄 :Tem alguma diferença entre a vida do Brasil e do Japão?

ブラジルの生活とは違うことはなかった?

ク:Tem.Quando japoneses comem soba,fazem barulho,né?

ああ、あったよ。日本人がそばを食べる時に音をたてるのよね。

母 :No Japao, nos comemos soba com fazendo barulho.

Isto pode significa que comida é gostosa. Quer dizer, isso é o sentimento de agradecimento.

日本では、音を立てて食べることで、その料理がおいしいことを表すの。つまり、感謝の気持ちの表れなのよ。

ク :Ah, é? entendi.Além disso,quando japoneses se cumprimentam,me parece uma atitude deles fria.

へえ。そういえば日本人のあいさつってとてもそっけないと思ったわ。

祖母 :Porque? Porque você acha assim?

なんで?なんでそんなふうに思うの?

ク :Porque,normarmente brasileiros se abraçam e beijam para cumprimentar. Japoneses não fazem assim.

なぜならブラジル人はあいさつのたびにハグとキスをするの。日本人はそうしないわ。

妹 :Entendi. Como você faz isso?

へえ、それどうやってやるの?教えて。

ク :Então,vou mostrar pra você.

じゃあやってみせるわ。

(クラウジアが妹にハグしようとする)

妹 :Ah,está a hora do programa de chibimaruko na TV!

Eu gosto deste programa muito!

あ、私の好きなちびまるこちゃんの時間だ!

(テレビを付けに行く、そしてクラウジアかわされる)

(おどるぼんぼりんの曲,妹はテレビの方へむかう。)

ク :Eu sempre penso que esta marukochan é menina bonitinha aqui no japão.

Mas no Brasil, o nome Marco é usado para homens. Eu tenho um amigo que se chama Marco.

Ele é o homem macho. Por isso Marukochan parece estranha para mim. Em português, uma palavra termina com o é o substantivo masculino.

前から思っていたんだけど、まるこちゃんはおもしろい女の子だけど、ブラジルではマルコは男性の名前として使われるのよ。私の友人にもマルコという男の子がいるけど、彼はダンディーでマッチョなの。だからとても変な感じがするのよ。ポルトガル語では語尾にOがつくと男性名詞だからそう感じるんだと思うわ。

姉 : Ah, é! Não sabia. Que legal! A diferença da cultura é muito interessante. Eu quero saber mais!

へえ、知らなかった。びっくりだわ。やっぱり文化の違いはおもしろいわね。もっといろいろ知りたいわ。

ク : Hoje, eu estudei o provérbio japonês na universidade. Em português, tem muitos provérbios que significam quase igual como os japoneses. Japoneses e Brasileiros têm cultura diferente. Mas pensam mesma coisa. Achei muito interessante.

それならば私、今日学校で日本語のことわざを習ったのだけれど、ポルトガル語にも似たような意味のことわざがあるの。違う文化をもつ人が同じようなことを考えているって知ったらとてもおもしろくない?

妹 : Me dá alguns exemplos! Eu quero saber.

へえどんなのがあるの? 教えて!

ク : Vou te perguntar sobre os provérbios que aprendi hoje na aula. Eu queria que você pensassem juntos!!

じゃあ今日習ったことわざでクイズを出すわね。客席のみなさんも一緒に考えてみてくださいね。

(一同舞台前方に移動)

Primeira questão. O provérbio Calcanhar de Aquiles significa o ponto fraco onde nós não queremos que outra pessoa toque, e em português, significa o tendão de aquiles. E em japonês, tem o provérbio que significa o ponto fraco como assim. É benkeionakidokoro. Benkei é o nome do homem. E este provérbio significa o ponto fraco de Benkei. Aqui é uma questão onde é o benkeionakidokoro.

第一問. calcanhar de Aquiles は力を持っている者の、人に触れられたくない弱点という意味で、ポルトガル語ではアキレス腱のことを言うのだけれど、同じ意味の日本語のことわざに「弁慶の泣き所」があるの。それでは「弁慶の泣き所」はどこでしょうか。

(黒子が出てきて説明のブラカードを掲げる)

①cotovelo ②glavera ③canela

①ひじ ②眉間 ③すね

(黒子がブラカードを持ってきて祖母、母、兄に手渡す。3人は順にブラカードを掲げて読み上げる。)

祖父 : Eu sei! Esta resposta é número 3. Benkei é o herói japonês antigo. E Aquiles é o herói dos mitos da Grécia. Assim como o ponto fraco de Aquiles foi tendão de aquiles, é de Benkei foi canela. Por isso canela significa “o ponto fraco de benkei”

わしは知っておるぞ。答えは③のすねじゃ!(③のブラカード以外をおろす)弁慶とは日本の昔の英雄なんじゃ。ギリシャ神話に登場する英雄のアキレスの弱点がアキレス腱だったのと同様に弁慶の弱点がすねだったことから、すねのことを「弁慶の泣き所」というんじゃない。

(一同、感心する)

ク :Segunda questão. Vocês sabem um provérbio "Gato que corre atrás de dois ratos, fica sem nenhum" não é? Em japonês há um provérbio que tem o mesmo significado. Segundo o provérbio japonês, as coisas comparadas são diferentes.

Tem um questão. O que são esses?

それでは第二問。Gato que corre atrás de dois ratos, fica sem nenhum。は日本語にも同じようなことわざがあるのだけど、日本のことわざの場合、たとえられるものが違うの。さあ何と何にたとえられるでしょうか。

①homem e mulher ②homem e coelho ③coelho e tartaruga

①男と女 ②人間とウサギ ③うさぎとカメ

(黒子がプラカードを持ってきて父、姉、妹に手渡す。3人は順にプラカードを掲げて読み上げる。)

兄 :Já sei! Esta resposta é número 2.

Isso é o provérbio japonês, "二兎追うものは一兎も得ず", não é? Quando tentar a conseguir as duas coisas, finalmente não pode ganhar as duas. Em português um gato e uns ratos é são usados para ser comparados, mas em japonês um caçador e uns coelhos são usados. Os dois provérbios têm mesmos significados, mas os animais comparados são muito diferentes. Isso é muito interessante, não é?

わかった！答えは②の人間とウサギだよ。(②のプラカード以外をおろす)日本のことわざの「二兎を追うものは一兎も得ず」だろう？欲張って2つのものを欲しがっているのは結局2つともを得られないという意味だ。ポルトガル語ではネコとネズミだけど、日本語では狩りをする人間とウサギにたとえられるんだね。同じ意味なのにたとえられるものがまったく違うなんてとてもおもしろいよね。

(一同、頷く) (フェードアウト)

ナレーター:

Parece que todos têm muitas interesse pela língua.

E vocês? Nós queríamos que vocês pensassem as diferenças de sentimento que vem do diferença de língua, e os comuns apesar da diferença de língua portuguesa e japonesa.

クラウジアも武田家の皆も、ことばにとっても関心を抱いているようですね。みなさんはいかがでしたか？ことばのちがいでよって起こる考え方の違いや、また反対に、ことばがちがっても同じように感じ、表現するときもあるということのおもしろさ、不思議さを感じていただけたら私たちはとてもうれいのです。

(出演者が皆出てきて並ぶ)

ナレーター:

Então, me deixa apresentar nossa atividade.

Nossa entidade é *Rede de Intercâmbio com os Estrangeiros Residentes no Japão da Universidade de Estudos Estrangeiros de Tóquio*, que se chama *Amigos*. Foi organizada pelos estudantes que queriam ajudar as crianças residentes no Japão a estudar nas escolas japonesas. Agora fazemos várias atividades significantes: por exemplo, além de atividade da assistência educativa para as crianças estrangeiras numa escola primária em Tóquio, fazer a tradução e organizar os simpósios. Também participamos ativamente de festas e eventos como a do hoje. Se vocês tiverem interesses na nossa atividade, tomam contato conosco!!!!!!!

それでは、私たちの活動を紹介します。

東京外大在日外国人交流ネットワークアミーゴスは、在日外国人児童の学習支援をしたいという学生の思いから始められました。現在は、東京の小学校における学習支援活動だけでなく、翻訳活動、勉強会やシンポジウムの開催などを行っていたり、このようなフェスティバルに積極的に参加したりしています。興味を持ったらぜひアミーゴスにアクセスしてみてください。

一同:Muito obrigado!!!!!!

ありがとうございました。



(10)品川区立社松小学校すまいるスクール

報告者:金 智恩(外国語学部日本語専攻3年)

去年に引き続き、今年もうりぬりでは品川区立社松小学校でのすまいるスクールで「韓国教室」を実施しました。去年と違うのは、去年は3ヶ月間の短期間での実践でしたが、今年は1年にかけて全部で22回の実践を行いました。

品川区立社松小学校のすまいるスクールは他校の「国際理解教育」と比べ、いくつかの相違点があります。

まず一つ目は、韓国人留学生だけのペアで行っていることです。うりぬりというサークルが最初できた時、韓国人留学生が中心となっていたということと、去年からは日本人学生も増えてきたものの希望者がいなかったため、韓国人留学生だけの実践を行っています。

二つ目はすまいるスクールは放課後の活動であることです。すまいるスクールは品川区教育委員会が実施している活動で主催が小学校ではなく、品川区教育委員会であることです。品川区内の小学校の全40校が実施しています。社松小学校はその一つであります。放課後の活動であるため、束縛性はなく、参加を希望する児童のクラスであります。社松小学校の全児童の人数が少ないというもあり、今年の参加希望者は子ども10人以内という少数の人数で行われました(固定メンバーは4人で入れ替えが毎月あります)。本来は児童たちの活動場でありましたが、保護者を同行する児童もいて、保護者3人が定期的に参加しました。参加希望者を募集して行う授業であるため、学年が統一していないのもすまいるスクールの特徴です。

三つ目は品川区立社松小学校での「国際理解教育」はすまいるスクールの当初の目的ではなく、外大で行っている「国際理解教育」の形を取り組んだのはうりぬりのメンバーの要請からだということです。そのため、授業内容への希望や、事前の打ち合わせはほとんどなく、実践を行っている学生二人での打ち合わせのみです。完全に学生に任せている状態です。

何よりも長期間にわたっての実践なので、児童と学生とのコミュニケーションが十分にとれることが一番の特徴であります。

第1回 2006年5月6日 韓国ってどんな国？

韓国の基礎知識を写真を見せながらクイズ形式で学習しました。クイズの問題は韓国の国旗、国技、服、国歌、民族舞踊などに関するもので全部10問を出しました。選択肢には韓国のもの写真と他国のもの写真があってその中から韓国のものを選び出す形式にしました。この授業の狙いは韓国を知ることだけではなく、ほかの国についての情報も取り入れつつ、日本との比較および、世界の人々の生活の相違点についても児童に伝えられるようにすることにありました。

第2回 2006年5月20日 韓国ってどんな国？

前回に行った授業の内容が大量であったことと、韓国について全く初めて接する児童もいたため、ゆっくりしたペースで復習を行いました。韓国についての疑問とか、すまいるスクールで「韓国教室」に参加した理由など、児童が前回の授業で思ったことや、韓国について思っていることについて一人ひとりの意見を聞きました。

第3回 2006年6月3日 韓国語を書いてみよう

学年が1年生から5年生まで多様であったため、学習能力の差があり、韓国の文字を教えるには無理があると判断、自分と家族の名前、前回習った韓国のもの名前をかいてみる程度の授業を行いました。まったく、韓国語を知らないため、白紙に韓国語を書くのは難しく、事前に児童の名前を韓国語で書いた紙を各児童に配り、その上になぞる方法で練習をしました。

この授業の狙いは、韓国の文化を異文化で感じながらも、自分の名前を書くことで親近感を覚えることにあります。

第4回 2006年6月17日 韓国語をしゃべる

これから授業を進めるなか最小限必要となる答えや呼称を韓国語で教え、授業中に使えるように練習しました。自己紹介と簡単な挨拶、「はい」「いいえ」など教室で使える言葉を教えることで、簡単な会話ができることを目的にしました。なるべく文字を使わずに声だけの練習をし、「耳で聞いてしゃべる」という形式で進めました。

とても簡単な会話ではありますが、児童たちは韓国人と韓国語で会話ができたと達成感とこれから韓国人に会ったら会話ができるかもしれないという自信を持ち始めました。この授業は留学生との距離を縮めるきっかけにもなりました。

第5回 2006年7月1日 これは何ですか

すまいるスクールの雰囲気特性上、子どもたちからの質問が多いです。それに、少人数なのでその質問に答えることもできるので、質問の仕方を韓国語で教えました。

第6回 2006年7月15日 韓国で買い物したら？

買い物をする場面を設定した上で使える韓国語を教え、韓国の紙幣についての授業をしました。数の数え方から、「～をください」の表現を教え、「これは何ですか」「これは～です」などの表現を復習しました。この授業は児童と保護者の希望の声があつて行った授業で、「韓国へ行ってみよう」から「行ったらすぐ使える韓国語は何かあるか」などを考えて設定した授業でした。

第7回 2006年8月5日 語彙を増やそう

韓国語の単語帳を作り、言葉の発音の練習とこれまで学んだ表現に言葉を入れて応用する授業を行いました。身の回りのものから児童が「これは韓国語でなに？」という質問になるべく答えように授業を進めました。

第8回 2006年8月19日 韓国の童謡

最近韓国で児童たちによく歌われている韓国の童謡を教えました。「オルチェンイソング」というおたまじゃくしがカエルになる過程の内容の歌です。歌の歌詞に出てくるおたまじゃくしやカエルの動きなどを表現する言葉にも注目し、同じことを見ても表現する言葉が違うのは言語が違うためなのか、感じ方が違うためなのかということについて話し合いをしました。

第9回 2006年9月2日 韓国語で色を覚えよう

虹色と韓国の国旗の色である白、黒を加え、塗り絵をしながら色を覚えました。

第10回 2006年9月16日 韓国語での挨拶

韓国のあいさつは日本のあいさつと違うところがいくつかあって、それを教えながら練習を行いました。朝、昼、晩のあいさつが全部同じであることはこれまでの学習で覚えていた内容ですが、「さよなら」を韓国語にしたら、立場によって喋る言葉が変わってくるのでその内容を詳しく説明しました。日本語にはない感覚だったので児童が覚えるにはとても大変でしたが、毎回会うときと別れるときに繰り返して練習することで、自然に覚えるようになりました。

第11回 2006年10月7日 動物の鳴き声

動物の名前と鳴き声を覚えました。まず、動物の名前を韓国語で覚え、その動物の鳴き声を韓国語で言ってみました。鳴き声を韓国語と日本語にしたら、かなり違うので児童たちからは違和感があるという意見もありましたが、その分楽しく覚えることもできました。動物の名前や鳴き声を覚えることだけではなく、動物の顔を折り紙で作りました。

第12回 2006年10月21日 韓服を折り紙で作ろう

韓国の伝統的な服である、韓服を折り紙で作ってみました。これまでの授業でいろんな場面から写真などで見てきた韓服を作ることでさらに、韓国の服になじみができました。

第13回 2006年11月4日 韓国の結婚式

韓国の結婚式や儀式の写真を見ながら、結婚式の内容についての授業を行いました。結婚式で着る服や使われる食べ物、儀式の意味など、韓国だけの結婚式の特徴について話し合いをしました。

第14回 2006年11月18日 日本と韓国のカレンダー

韓国の祝日や祭日などについて韓国のカレンダーを見ながら授業を行いました。お正月やお盆が旧暦であること、

8月15日が日本と韓国では違う記念日になっていること、そして、日本にはない祝日についても話し合いをしました。

児童からは日本にしかない祝日についても話してもらい、お互いの国の祝日の特徴についても考えるきっかけになりました。

第15回 2006年12月2日 韓国のお正月

韓国のお正月についての授業を行いました。お正月の遊びや食べ物について、日本のお正月と比較しながら話し合いをしました。意外と韓国の民族遊びというものが日本の遊びと似ていて、児童の理解も早かったです。写真を見せながらやり方や名前など説明し、次回の予定である「ユンノリ」のやり方やルールについて詳しく教えました。

第16回 2006年12月16日 ユンノリで遊ぼう

韓国の民族遊びである「ユンノリ」を行いました。これは去年も行ったもので、去年に引き続きすまいるスクールに参加している児童からの強い要望がありました。第15回目で民族遊びを勉強した上で行ったため、内容もよく知っていて、スムーズに進行することができました。

第17回 2007年1月6日 韓国の季節と天気

10回以上、授業の流れが韓国だけの特徴とか、日本との比較になってしまったため、日本と韓国の共通点について授業をすることにしました。韓国と日本は近いので天気も季節もよく似ているということから、韓国の天気について話をしました。韓国にも四つの季節があること、梅雨があることなどについて教え、天気予報で使う言葉を覚えました。「天気の時計」というのを作りました。天気の様子を絵と言葉を(晴れ、曇り、雨、雪など)書いて、毎日の天気を児童が針を動かして表せるようなものです。

第18回 2007年1月19日 韓国のお茶とお菓子

韓国人が楽しむお茶を飲みながら、今まで授業でやってきた内容をクイズ形式に復習をしました。韓国の「ゆず茶」「ドゥングレ茶」「ナツメ茶」などいろんな種類を飲んでみま

した。これまでの授業で、写真をみるとか話を聞くだけだとよく想像がつかなかったものもあったので、飲んだり食べたりする体験式の授業を行うことで、韓国の食文化も物の理解もしやすくなってきました。

第19回 2007年2月3日 韓国の昔

韓国の昔の風景や物を写真で見せながら、韓国の昔を想像してみました。その写真を日本にはないけれど韓国にはあったもの、日本にも昔はあったものと比べながら、それぞれの国の人々の生活について話し合いをしました。例えば、「竹で作られた抱き枕」は日本にはなかったけど、韓国人は昔によく使っていた、なぜなら、暑い夏に涼しく眠れるからであるというような「ものを見て人々の暮らしの様子を想像してみる」形式に進めました。韓国だからこそあるものもあって、キムチや味噌、醤油などを保管していたつぼを見ながら、韓国人の知恵についても話し合いをしました。

この授業の狙いは時代が変わって「韓国でも昔は使ったものを使わなくなっているのはなぜだろうか」「今の韓国人の生活と昔の生活が違うのはなぜだろうか」などについて話し、日本の生活の変化についても改めて考えてみることでした。

第20回 2007年2月17日 韓国の食文化

韓国では食事をするときにどういふものを使っているかというのを実物を見ながら手にとって触ってみながら話し合いをしました。また、日本の食事マナーと比べながら韓国人の食事マナーについても学びました。

第21回 2007年3月3日 韓国の食べ物

韓国の料理でみんながよく知っているチヂミをみんなで作って食べました。

第22回 2007年3月17日 まとめ

全体的なすまいるスクールの雰囲気がとてもリラックスしている雰囲気です。授業というよりも「プレイ」に近い感覚で行われました。そのため、内容を軽くし、学生が一方的に伝

えるよりは児童一人ひとりの意見を聞いたり、質問に答えられるようにしました。大体の授業の内容が韓国語を教えるような授業の題名にはなっていますが、韓国語を覚えることが中心ではなく、あくまでも児童と学生がコミュニケーションをとる一つの素材としての韓国語です。比較の授業が多かったのは、最初からの狙いではなく、学生が準備していく授業の内容に対して、児童からの自然に出てきた「日本の場合は～だ」「日本にもある」「日本にはないのに…」のような声をひろい、それに対するコメントをしたためであります。授業の内容は韓国と日本の相違点について行ったものが多いものの、1年間の韓国人留学生との付き合いで何よりも韓国人と韓国について親近感を覚えることができました。

すまいるスクールは授業の一環ではないため、児童のモチベーションも学校の授業とは少し違います。厳しい授業よりは学生との会話が気楽にできたところがむしろ、児童と学生の人間関係を形成するには効果的であったと思います。

1時間の授業で何かを学ぶことも大事ですが、日々児童と学生の距離が近づいてきていることを感じられる実践でした。



1-3. ボランティア支援体制の拡充

文責:岡崎 智子(専従スタッフ)

今年度の支援室の活動は、昨年度に増して精力的に、また多岐に渡って行われた。学習支援活動では、11月に府中市教育委員会と覚書を交わして以来、府中市の小中学校においても学習支援活動を行うことになり、今年度は計7校で実施された。今年度のペースを考えると、来年度も引き続き依頼が増えるのではないかと予想される。対象児童生徒の母語は様々で、まさに本学ならではのサポートと言えるだろう。また、国際理解教育活動といった昨年度の活動以外に、今年度は「多文化多言語劇」や「学生多文化フォーラム」など学生主体の催しがいくつも企画、実施された。内容はもちろん学生が自主的に動く姿勢こそ、この支援室の大きな特徴でもあり、そういった学生を育てることが支援室スタッフの一つの任務とも言える。

支援室での活動を通して、学生は社会における自分を知り、様々な問題にぶつかりながらそのたびに少しずつ成長している。昨年12月に行われた「学生多文化フォーラム」においては、当日まで何度もディスカッションを重ね、多くの準備を要した。学生たちは妥協することなく、最後の最後まで当日発表する内容について粘った。まさに社会人にも劣らないその姿に、大学で勉強しただけでは身につかない何かを彼らは得たのだと、私は思った。

本節では、支援室スタッフによる学生ボランティア支援について、今年度の具体的な活動内容を提示し、現在あげられる課題をもとに、来年度の指針を立てていきたい。

(1) 学生ボランティア登録者数と活動参加状況

2007年3月31日現在の学生ボランティア登録者数および活動参加状況は、表1の通りである。2006年度ボランティア活動実績の詳細については、本節末の「ボランティア活動明細」をご覧ください。

このうち、「東京外大在日外国人交流ネットワーク～Amigos～(以下、東外ネット)」の活動と「うりぬり」の活動は学生による企画であり、その他は支援室が企画または外部から依頼されて開始した活動である。

支援室で活動することのメリットの一つとして、学年・専攻・国籍を越えた人との関係を築くことができる。活動人数が増えたこともあり、実際支援室のスペースでは手狭に感じることよくある。そのため「東外ネット」や「うりぬり」など大人数でのミーティングは別教室で行うこともしばしばあった。だが、そうすることで、活動しているメンバーを支援室スタッフが把握できなかったり、そのグループ内の学生としか関わりのない学生ボランティアが何人もいる、といった事態が出てきた。人数によっては難しいかもしれないが、なるべくミーティングを支援室で行うこと、同じ空間の中で顔を合わせることで、そのこと自体にも大きな意味があるのではないと思う。

(2) 学生による活動企画状況

支援室では、学生の自主的な企画を随時募集している。2006年度、支援室に申請された活動企画書(支援申請書)は8件である(表2を参照)。申請された企画は、運営委員会によって承認するかどうかが審議される。

(3) サポート内容の多様化

学生ボランティアへのサポートと一口に言っても、活動内容だけでなく、関わる学生の求めるものも様々で、日々多様化している。今年度支援室スタッフが行ってきた主なサポート内容は、表3の通りである。

(4) 現在の課題と来年度の指針

各活動において、それぞれ新たな課題が出てきており、改めてその活動の意味、目的を考え、それぞれに応じた対応が今後必要になってくるだろう。課題についての詳細は、以下の通りである。

・府中国際交流サロンにおいて、これまでの児童生徒の日本語能力は極めて高く、サロンでの活動は日本語指導ではなく教科指導をとっていた。ただ、最近になって、日本に来てまだ間もない児童生徒が増え、学生も始めての対応に試行錯誤している。またサロンで催される「お楽しみ会」などで、日本語の話せる児童生徒と、話

せない児童生徒との交流がなかなかうまくいかないことも課題のひとつである。今後は、例えば「お楽しみ会」で言葉を必要としないゲームで交流をはかったり、生徒同士を結び付けるような工夫が必要になってくるだろう。

・府中市の学習支援ボランティアに関しては、11月に覚書を交わし12月から活動が始まったところで、様々な面で手探りの段階である。学生たちのほとんどが、日本語指導に関しての知識や経験がなく、児童生徒からの質問(例:助詞がなぜ必要か、など)に答えられないといったこともあった。学生たちは個別に活動していることもあり、お互いにそれぞれの疑問や課題を共有できればということで、3月に学生を集めて意見交換会を行ったところ、これが非常に意義のあるものになった。今後は定期的に意見交換会を行うことと、この活動を行っている学生のメーリングリストをもっと利用し、メーリングリスト上でも意見交換をできるようにする予定である。また、教員との連携もまだ開拓の余地が大いにあるので、今後の課題として取り組んでいきたい。

・国際理解教育では、依然として学校との事前打ち合わせが不足しているという声をよく聞く。外大と学校との距離といった立地上の問題もあるが、できるだけ直接教員と学生が議論できるような場面を今後設定していきたい。また、授業案を作るにあたって、実践する学年、クラスの様子を事前に知ることは不可欠であるので、そのあたりも今後教員との連携が重要となるだろう。

・活動全般に関するものとして、支援室に登録したもののまだ一度も活動をしていない学生もかなりいるのが現状である。活動している学生に話を聞くと、そのほとんどが最初支援室に足を踏み入れるのに勇気がいったと言う。活動している学生同士の親密な関係が出来上がっている中で、どうやってその中に一人飛び込んでいくか。そういった現状を認識し、スタッフ含め活動している学生たちも、うまく活動に誘導できるようなアクションをとっていく必要があると思う。物理的な対策として、支援室の扉をガラス扉に付け替えたが、そういったこともアクションの一步になったのではないだろうか。

表1 学生ボランティア登録者数および活動参加状況(2007年3月31日現在)

(1) 学生ボランティア登録者数			381名	
(2) 活動参加者数			260名	
(内訳)	①	府中国際交流サロンにおける学習支援	30名	
	②	小金井市立小金井第一小学校における学習支援	1名	
	③	府中市教育委員会から依頼のあった学校における学習支援	8名	
	④	川崎市立東柿生小学校における国際理解教育	23名	
	⑤	川崎市立土橋小学校における国際理解教育	8名	
	⑥	川崎市立宮前平中学校における国際理解教育	7名	
	⑦	府中市立府中第七中学校における国際理解教育	14名	
	⑧	府中市立小柳小学校における国際理解教育	23名	
	⑨	新宿区立大久保小学校における国際理解教育	3名	
	⑩	狛江市立狛江第一小学校における国際理解教育	13名	
	⑪	三島市立東小学校における国際理解教育	10名	
	⑫	学生多文化フォーラム・プレフォーラムにおける 実行委員及びサポート	29名	
	(活動内容)		学習支援に関する調査研究	(14名)
			国際理解教育班	(13名)
			フォーラム当日のサポート	(2名)
	⑬	東京外大在日外国人交流ネットワーク～Amigos ～の活動		29名
	(活動内容)		新宿区立大久保小学校における 学習支援	(3名)
			大泉日系ブラジル青少年フェス ティバル参加	(14名)
			フェスタジュニーナ(横浜市立潮 田小学校)参加	(10名)
			川崎市立殿町小学校における 通信簿翻訳	(29名)
⑭	うりぬりの活動		48名	
(活動内容)		品川区立杜松小学校「すまいる スクール」における国際理解 教育	(5名)	
⑮	多文化多言語劇		14名	

表 2 申請された学生企画の概要(2006 年度)

	1	2	3	4
申請日	06.4.20	06.5.11	06.5.23	06.6.18
申請者	金智恩	石井まり	鈴木啓之	向井香純
専攻 学年	日本語 3 年	ポルトガル語 2 年	アラビア語 1 年	ポルトガル語 2 年
活動の名称	「すまいるスクー ル」韓国講座	学習支援活動	多文化多言語劇	フェスタジュニーナ
団体名	うりぬり	東外ネット (注 1)	多文化多言語劇	東外ネット
概要	品川区立杜松小学 校学童保育「すまい るスクール」で、韓国 の文化から韓国語ま で、韓国の全般的な ことを紹介する。(第 一,第三土曜日)	新宿区立大久保小 学校にて、ブラジル から来た児童に学習 支援を行う。(毎週 火,木曜日)	外語祭もしくはその 後のフォーラムなど で劇を演じる。語劇 を通して、地域社会 における多文化交流 の際に起こった問題 を伝え、スムーズな 交流のための情報を 提供する。また、多く の言語を劇中に用 い、語学のおもしろさ を伝える。	横浜市鶴見区の潮 田小学校で、IAPE (外国人児童生徒保 護者交流会)や在日 ブラジル人児童生徒 の保護者が中心とな って催されるフェスタ ジュニーナに参加し、 開催や運営の手伝 いをする。
支援 要求額(円)	1,500/回 × 2 名	920/回 × 参加者数	特になし	17,200
使途	学生交通費 教材のコピー	学生交通費	文具類 資料のコピー	学生交通費
審査 合否	○	○	○	○
実施	○	○	○	○

(注 1)「東京外大在日外国人ネットワーク～Amigos～」を指す。

	5	6	7	8	9
申請日	06.6.27	06.9.15	06.9.22	06.11.10	06.12.01
申請者	飛田美由紀	中村未央	石井まり	秋田祐実	徐康源
専攻 学年	ロシア語 4年	ポルトガル語 4年	ポルトガル語 2年	ポルトガル語 2年	日本語 2年
活動の名称	JOCAスキルアップセミナーの会	日本通訳学会 第七回年次大会	第五回ブラジル 青少年フェスティバル	外語祭「巨大すごろく」	異文化理解講座
団体名	個人	東外ネット	東外ネット	東外ネット	うりぬり
概要	JOCAの「地球生活体験学習スキルアップセミナー」に参加する。職員のアドバイスを得たり、OG・OBの方と意見交換したり、また実際に生徒の立場になって講義を受けたりし、これらを支援室での活動に生かす。	9月23日に本学で開催される日本通訳学会第七回年次大会で、東外ネット～Amigos～の外国人児童への学習支援における取り組みについて発表する。	10月8日に大泉で開催される第五回ブラジル青少年フェスティバルに参加する。今回は、日本語のおもしろさを知ってもらうために、劇とクイズを交えた出し物を行う。	Amigosとして外語祭に企画参加し、その中で、来場者にブラジル移民の歴史およびAmigosの活動を紹介する。	以下の内容で、異文化に関するプレゼンテーションを行う。①韓国と日本の食文化②韓国と日本の地下鉄③韓国と日本の家族
支援 要求額 (円)	500/回 ×参加者数	特になし	3,380 ×参加者数	特になし	特になし
使途	参加費	教室・機材 活動報告書	学生交通費 文具類	機材・文具類	教室・機材
審査 合否	×	○	○	○	○
実施	○	○	○	○	○

表 3 スタッフによる主なサポート内容

＜全般＞	1	学生ボランティア登録者及び各活動グループの名簿管理
	2	ボランティア活動参加者の把握・記録
	3	物品購入や交通費支給のための手続き
	4	傷害保険加入の周知と確認
	5	学生用各種メーリングリストの管理と情報提供
	6	学生専用書架・パソコン等、支援室利用のための整備と管理
＜対派遣先団体＞	7	派遣先団体との定期的なミーティング・保護者面談
	8	派遣先団体とトラブルが発生したときの対応
	9	学生ボランティアと児童生徒とのマッチング(コーディネート)
	10	関連する研究会・会議・講演会等への出席と報告
＜对学生ボランティア＞	11	個別テーマ(「学習支援」・「国際理解教育」など)について、活動内容や教案作成に関するアドバイスと実施の手助け
	12	学生コーディネーターに対する活動推進に関するアドバイスと実施の手助け
	13	学生ボランティアからのボランティア活動に関する相談の受付と対応
	14	企画申請者に対するアドバイスと手助け(企画書の作成、立ち上げまでの作業や外部との交渉など)

2. 教育・研修

2-1. 教育研修プログラム「2006年度夏季多言語多文化共生学講座」

(1) 授業概要

講義名:オリエンテーション

講師:河路 由佳

多言語・多文化が同じ空間で豊かに響きあって暮らせる社会環境を如何に実現してゆくか、は、現代日本社会の大きな課題です。

中でも日本語を母語としない子どもたち(以下、JSL 児童・生徒)のための学習支援は最も深刻な問題のひとつですが、これまでの様々な実践、研究の成果から、最近特に注目されているのは、JSL 児童・生徒の学習支援の上で、彼らの母語を尊重し、育てることの重要性です。本プログラムは、社会の要望に応えるべく、子どもたちの母語にあたる言語を用いた学習支援ボランティアに必要な知識、技能を養うことを趣旨としています。

オリエンテーションでは、まずその趣旨への理解を深めてもらい、本プログラムを通して学ぶべき目的意識を確かなものにしてもらおうと思います。

ボランティアのための「やさしい日本語」についても問題提起をし、とりくみの現状をご紹介します予定です。

読んでおいてほしい本:

宮島喬・太田晴雄編(2005)

『外国人の子どもと日本の教育——不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会

講義名:日本の小学校の教科教育

講師:矢崎 満夫

日本の小学校における教科教育を JSL 児童(日本語指導が必要な児童)に対して行う場合、指導者はどのような点に配慮していくといいのだろうか。算数と国語の教科内容を中心に実際に教材を検討しながら、教える立場にな

ったときに役立つと思われる具体的な対処の方法について、受講生とともに考えていきたい。

講義名:多文化コミュニティを理解するために

講師:田村 太郎

日本で暮らす外国人は年々増え続けています。とりわけ地域によっては新入生の 1/4 が外国人児童という小学校も出現するなど、子どもを取り巻く環境は急速に「多文化」化しています。本講義では、外国人住民の現状と今後の課題について、各地の事例を取り混ぜながら紹介します。また教室で起きているさまざまな出来事をケーススタディとしてとりあげ、演習を通して今後の多文化社会における学校のあり方や、ボランティアの役割についても考えます。この講義を通して、日本における外国人住民の現状への理解を深め、今後外大生に求められる役割について考えるきっかけをつかんでもらうことを期待します。

講義名:第二言語習得

講師:海野 多枝

この講義では、外国人児童生徒が避けて通れない第二言語としての日本語習得を支援する上で必要となる第二言語習得理論の基礎を扱う。まず、学習者の日本語習得の問題を、第二言語能力の発達過程という観点から捉え、第二言語学習者の言語能力の特性について様々な観点から考察する。その上で、第二言語習得環境で学ぶ学習者の言語発達過程の特徴について、学習者言語データの具体例を交えて紹介する。また、これに関与する学習者の内的メカニズムと環境要因の影響関係についても時間の許す限り論じたい。

これらの議論を踏まえて、外国人児童生徒の日本語習得を支援する際に考慮すべき点について考察を加えるのがねらいである。

講義名: バイリンガリズム

講師: 伊東 祐郎

来日した子どもたちは1~2年もすれば流暢な日本語を話すようになるが、その流暢さは必ずしも学力と結びついたものではない。学習言語力の習得には5~7年かかると言われている。成人学習者の場合は、既に母語が確立し、認知能力も高いレベルにあるが、児童生徒の場合は、第一言語が発達段階にあるため、メタ認知力も成人ほど発達していない。外国人児童生徒への学習支援においては、成人とは異なった観点から取り組まなければならない。バイリンガリズムを概観し、有効な学習支援のための手がかりを探ってみたい。

講義名: 子どものための日本語指導(1)-初期指導のためのカリキュラムガイドラインと日本語文法を概観する-

講師: 柏崎 雅世

外国人児童生徒のための日本語指導においては、まずはじめは、生活言語を習得する段階の初期指導が考えられる。この段階の指導のための指針として「カリキュラムガイドライン」が作成されている。このガイドラインで提示されているシラバスを検討するとともに、その文法構造シラバスの全体像を把握するために、日本語教育における文法体系を、国語教育の知識と対照させながら概観する。

参考文献:

東京外国語大学留学生日本語教育センター編集(1998)『外国人児童生徒のための日本語指導第1分冊-カリキュラム・ガイドラインと評価-』ぎょうせい
吉川武時(1989)『日本語文法入門』アルク

講義名: 子どものための日本語指導(2)-学習日本語の指導-

講師: 小林 幸江

講義では以下の2点について取り上げる。

1. 日本語指導の必要な子どもたちに、日本語の何をどのように指導するかについて。
この中で、子供向け教材の代表的なものを紹介する。
2. 習得に時間がかかる学習日本語の実態、および学習日本語の何をどのように学ぶかについて。

科研での調査・研究の成果を踏まえ、具体的な事例をあげながら話を進めていく。

参考書・教材:

「教科学習につながる外国人児童用日本語教材および教授法の開発」平成14-17年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)

研究報告書(研究代表者・横田淳子)2006・3

講義名: 子どものための日本語指導(3)-コミュニケーションゲームを使った指導法-

講師: 藤森 弘子

本演習では、年少者が楽しく学べるようゲームを使って、日本語文型や表現の練習や定着をはかる指導法の説明および実践を行う。★文型例)N1はN2です/NはP(位置詞)にあります・います/T(時間)+P(場所)でNをVしました/どんなNですか/つぎに何をしますか<Vて形>/これは何だと思えますか ★活動例)ジェスチャーゲーム/動物あてゲーム/クイズグランプリ/カードゲーム(助数詞・形容詞・動詞)など

参考図書:

藤森他『日本語コミュニケーションゲーム80』(ジャパントイムズ出版1995)
足立他『絵で導入・絵で練習』(凡人社2004)
春原他『にほんご宝船-いっしょに作る活動集-』(アスク語学事業部2004)

講義名: 国際化の進行と日本社会(科目名: 日本の社会と文化)-農村における国際結婚を中心に-

講師: 野本 京子

1980年代後半から「ニューカマー」とよばれる人々が急増してきますが、まずそれは外国人労働者問題としてたちあられました。現在は定住化が進み、外国人市民として生活する個人・家族が増えているのは、皆さん周知のことだと思います。ここでは、まずその背景や事情について理解していただきたいと思います。

具体的に取り上げたいのは、日本における国際結婚の動向です。とりわけ1980年代後半に社会問題となった日本の農村地帯への「アジアからの花嫁」問題とその後につ

いてです。結婚とはきわめて個人的な行為ですが、それが社会問題となった背景には、どのような状況があったのでしょうか。日本の農村の現状も視点に入れながら考えていきます。

講義名:対人コミュニケーション

講師:宮城 徹

外国人児童生徒の学習支援ボランティア活動では、当然のことながら色々な人たちとのコミュニケーションがその活動の中心となります。みなさんの能力やスキルを最大限に発揮できるような対人関係の作り方についてアクティビティを通じて学んでいきましょう。

講義名:まとめ

講師:河路 由佳

全5日間のプログラムで学んだことについて、アンケートの記入などを通して確認し、学習の定着を図ります。できたら、それぞれの成果を受講者全体で交換、共有し、今後、それをどのようにそれぞれが生かしてゆくか、考えてもらいたいと思います。

その後、修了証の授与、支援室で行っている学習支援ボランティア活動の紹介を行なう予定です。

講義名:学習支援ボランティアのための外国語

英語(中級以上)A	アリソン・メアリー・スチュワート
英語(中級以上)B	宮原万寿子
アラビア語(初級)	エル・カワーウィシュ・ハナン・ラウィーク・モハンマド
カンボジア語(初級)	岡田ウンサー・マロム
中国語(初級)	王 亮
スペイン語(初級)	フランシスコ ホセ バレラ ロドリゲス
ポルトガル語(初級)	ロドリゴ・ケンジ・ヤマシタ
フランス語(初級)	フランソワ・ルーセル
朝鮮語(初級)	申悠琳

外国から新しくやってきて日本で暮らす外国人の方は年々増えています。それにとまって日本語を母語としない子どもたちの教育が、大きな問題になっています。子ども

たちが、どこにいても健やかに成長できるように教育の機会を提供してゆくべきであることは、「子どもの権利条約」などでも定められています。また、多様な文化背景をもつ子どもたちがそれを魅力的な個性としてもつ豊かな人材に育ててゆくことは、未来の地球社会にとっても望ましいことです。

しかしながら、今まで日本語を母語とする子どもたちばかりを対象として考えられてきた日本の小中学校での教育においては、日本語以外の言語を母語とする子どもたちが、学びはぐれてしまう現実も多く報告されています。日本語以外の言語が話せるということが生かされず、「ことばのできない子ども」とみなされることの問題も指摘されています。

子どもたちの母語は発展途上で、小学校、中学校で学ぶことがらや考え方を母語で話す力を持ちませんが、理想的には、日本語とともに母語も年齢相応に伸ばすことができることが、子どもの十全な発達のために望ましいといわれています。子どもたちがその父母や祖父母と自由に会話できる力を保障してゆくことも大切です。

子どもたちの多くは親の都合で来日し、いつまた親の都合で日本を離れるかわからない状況にあり、日本語指導だけでは十分ではないのです。

本プログラムの外国語の授業は、こうした状況をふまえて実施されます。

受講者のみなさんの希望で外国語のクラスを設定したところ、今回は、英語、アラビア語、カンボジア語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、フランス語、朝鮮語のクラスを開講できるはこびとなりました。

みなさんが子どもたちの母語を用いての学習支援ができるようになることを想定し、今回は、小学校で学ぶ算数(特に小学校3、4年生)をとりあげることにしました。

4日間で扱える内容は限られていますが、講師は、それぞれの言語の使われる地域の教育事情などにも明るい方ですから、言語以外の事情も学べるはずでです。子どもたちの母語による学習支援について、有用な知識をいろいろと学んでください。

外国語のクラスは、原則として学生の専攻語である言語の初級レベルのクラスと、中上級レベルの英語クラスに分かれています。

初級は、その言語を専攻語とする 1 年生が主たる対象です。4 月から学び始めた新しい言語ですが、今後その言語の専門家に育ってゆくことが期待されている学生たちです。基本的な知識を補いながら、「算数」の単語や言い方を学びます。

英語のクラスは、中上級となります。対象学生は、言語学習の基礎は終えています、小学校の「算数」を学ぶ機会はなかったものと考えられます。今回の授業では「算数」で学ぶ基本的な単語や言い方に慣れ、「算数」をその言語で説明することを学びます。

子どもたちは、ボランティアの学生が自分の母語を少しでも話せると、とても心強く思うようです。数字や＋、－、×、÷などの読み方などの基本から初めて、小学校での子どもたちとの日常会話も視野に入れ、言語の基礎を学びます。

(河路 由香)

講義名: 学習ボランティアのための外国語 英語 A

講師: アリソン・メアリー・スチュワート

Because of the relatively high level of mathematics in Japanese elementary schools, priority is given to math instruction.

MONDAY:

Arithmetic, addition, subtraction, multiplication, division

TUESDAY:

Fractions, percentages, time, money

WEDNESDAY:

Geometry, circumference, area, angles

THURSDAY:

Collecting and presenting data: graphs, charts. Problem solving (math) Problem solving (daily school life)

Students will be given handouts of useful vocabulary and models of explanations (spoken and written). There will be lots of opportunity to practice explaining problems in English both in pairs and at the blackboard.

講義名: 学習ボランティアのための外国語 英語 B

講師: 宮原万寿子

I. Aims and Purposes of the Four -Day Program

The four-day program provides the basic English language necessary to explain arithmetic skills covered in the 9th and 10th grade math textbooks in Japan. Activities and games with numbers that help motivate young learners will also be introduced. The course is hands-on, and participants will be expected to present a mock lesson on the last day of the program.

II. Topics for the Four-Day Program

(subject to slight changes)

DAY ONE: “Mostly Numbers!!! (Part I)”

1. Numbers and the Number System
2. Calculations: Addition, Subtraction, Multiplication and Division
3. Multiples and Factors
4. Prime Numbers / Odd, Even, Square and Cube Numbers

DAY TWO:

A. “Mostly Numbers !!! (Part II)”

1. Fractions
2. Decimals
3. Ratio and Percentages
4. Roots
5. Rounding Off, Estimating, Approximating

B. “Angles and Shapes ???!”

1. Angles (using rulers, protractors)
2. Various Shapes (circles, squares, rectangles, etc)
3. Perimeters, Areas, Volumes
4. Solids, Nets and Projections
5. Polygons
6. Symmetry

DAY THREE:

A. Measurements (weight, length, capacity, conversions)

B. Handling Data (bar charts, pie charts, line graphs, tables)

C. Probability

DAY FOUR:

A. Problem Solving

B. Presentation

講義名:学習ボランティアのための外国語 アラビア語

講師:エル・カワーウィシュ・ハナン・ラウィーク・モハンマド

予定されている日程が、ちょうどラマダン(断食月)の初めに当たるので、アラビア語の授業時間は、9月30日(土)と10月1日(日)の朝10:00からに振り替えて実施します。受講者はこの日時にアラビア語の研究室に来てください。両日、2コマずつ、授業をします。

アラビア語で書かれた算数の教科書を見てもらい、アラビア語での算数の学習について学びましょう。また、日本で生活するアラビア語圏の子どもたちは、イスラム文化を背景に持つ子どもたちが多く、文化の面で苦勞することが多いようです。文化の面での問題点や支援のための知識なども、とりあげる予定です。

講義名:学習ボランティアのための外国語 カンボジア語

講師:岡田ウンサー・マロム

受講生が将来カンボジアの小学生を指導するために必要なカンボジア語の基礎力を養うことを目的とする。教材として、カンボジアの小学校で使用されている算数の教科書及び講師が作成したプリントを利用する。日本の小学校で学ぶ算数について、整数の四則計算を中心に、算数の記号の呼び方、掛け算の暗誦の方法等を学ぶ。同時に、小学生との会話を想定し、円滑なコミュニケーションのために必要な語彙や表現を学ぶ。また、指導対象となる小学生が、日本の小学校で困っていることを推測できるように、カンボジアの小学校の学校設備、カリキュラム、教科書、時間割などの事情や、都市部・農村部それぞれの小学生がどのような生活を送っているかについても適宜解説する

講義名:学習ボランティアのための外国語 中国語

講師:王 亮

授業紹介:

日本と中国の間には「世界一」の「近いようで遠い」文化があると思います。そういった両国文化の違いを完全に理解することは大変難しいが、しかし、その一側面である「小学生の算数」から、なるべく皆様に日中文化の相違点や共通点を紹介し、理解していただきたいです。

内容:

「小学生の算数」という大きいタイトルの基で、中国の小学校で使う算数の用語を学んでいただきます。その上、中国の小学校算数についての教わるシステムややり方を体験していただきます。授業進行と共に、皆様が関心のある中国の小学校事情や中国小学生の考え方などにも質疑応答の形(ご要望があれば講義でも可)で紹介いたします。

目的:

短い期間でなるべく多くのことを皆様に体験していただきたいと思います。文化というものは「勉強」によって理解するより、身を投じて馴染むのがもっと大切で効果があると思います。まして異国の文化を理解することは尚更だと思えます。したがって、今回の「授業」を通じて、皆様は中国の文化をより多く理解できることに目的を置く所存であります。

講義名:学習ボランティアのための外国語 スペイン語

講師:フランシスコ・ジョゼ・バレラ・ロドリゲズ

スペイン語を母国語とする子ども達を対象に、「算数」を教えるために必要な「基本的な専門用語」や、「学習支援に役立つ表現」を学習します。講座では、日本で使用されている小学3・4年生向けの算数の教科書を教材に、具体的な例題を挙げながら実際に声に出して、「説明する事」に挑戦します。1日目は、「基本的な専門用語」と「整数のしくみ」を身につけ、「足算・引算・掛算・割算」へ展開します。2日目は「分数」や「小数」などの表し方、3日目には「重さ」「広さ」等の物の単位を、最終日には「復習とまとめ」を行い、子ども達への学習支援に役立てられるよう、応用的な活用を学びます。

講義名:学習ボランティアのための外国語 ポルトガル語

講師:ロドリゴ・ケンジ・ヤマシタ

この講義では受講者が少ないため、できるだけ学生たちに多く話してもらいたい。ポルトガル語での数学用語の言い方にとどまらず、数学の問題解答を正しいポルトガル語で説明できることを一番の目標とする。小学校3、4年レベルのポルトガル語で書いた問題のプリントを配って、最初に必要な用語の言い方を教えてから、皆さんに解答を説明してもらう。この流れで皆さんのポルトガル語を補いな

がら数学用語を身につけることがねらいである。プラスアルファとして、ブラジルの新聞記事から現在のブラジルの教育や社会全体の状況を分析する。ただし、新聞を読む自信がない学生は心配する必要はない。

est prévu en fin de session.

講義名:学習ボランティアのための外国語 フランス語

講師:フランソワ・ルーセル

Nous étudierons ensemble comment transmettre en langue française certains éléments du programme de mathématiques de l'école japonaise : les surfaces, les volumes, les graphiques et tableaux, l'utilisation de « □ », etc. (vous pouvez aussi m'indiquer vos souhaits par courriel : rousset@tufs.ac.jp). Un mini-test d'application

講義名:学習ボランティアのための外国語 朝鮮語

講師:申 悠琳

본 수업에서는 산수를 중심으로 학생들의 별런티어 활동에 있어 필요한 어휘와 표현 의사소통 능력의 함양을 그 목적으로 한다. 한정된 기간에 효율적 습득을 위하여 매회의 과제물들과 더불어 학생들에게는 예습과 복습을 한 후 수업에 임하기를 바란다. 수업에서는 독해뿐만 아니라 소수 인원의 장점을 살려 구두연습과 질의에 답하기 등 실전에 필요한 부분들을 중시하여 연습해나가기로 한다.

(2) 時間割

	1 (10:00-11:00)	2 (11:10-12:10)	3 (13:10-14:10)	4 (14:20-15:50)
9/25(月)	オリエンテーション (河路)	日本の小学校の教科教育 (矢崎)	日本の小学校の教科教育 (矢崎)	ボランティアの ための外国語
9/26(火)	多文化コミュニティを 理解するために (田村)	多文化コミュニティを 理解するために (田村)	多文化コミュニティを 理解するために (田村)	
9/27(水)	第二言語習得 (海野)	バイリンガリズム (伊東)	子どものための日本語指導 (柏崎)	
9/28(木)	国際化の進行と日本社会 (野本)	国際化の進行と日本社会 (野本)	子どものための日本語指導 (小林)	
9/29(金)	対人コミュニケーション (宮城)	対人コミュニケーション (宮城)	子どものための日本語指導 (藤森)	まとめ (河路)

(教室)

ボランティアのための外国語以外の授業…104

ボランティアのための外国語 英語 A…220(アリソン・メアリー・スチュワート)

英語 B…222(宮原万寿子)

中国語…208(王亮)

アラビア語…813(ハナン)※9/30 10/1 10:00～に変更

カンボジア語…308(岡田ウンサー・マロム)

スペイン語…309(フランシスコ・ホセ・バレラ・ロドリゲス)

ポルトガル語…310(ロドリゴ・ケンジ・ヤマシタ)

朝鮮語…311(申悠琳)

フランス語…312(フランソワ・ルーセル)

(3) 学びの記録

第1日目 1時間目 オリエンテーション

講師 河路 由佳

外国語学部日本語専攻 3年 掛本 繭子

JSLという言葉を知って初めて知った。今までは、うまく表せず困っていた。私もJSL児童に日本語を指導する際、日本語が話せることに安心し、母語への配慮をしていなかった。しかし、授業後試しに児童へ母語を交えての指導を実践してみた。すると、今まで児童がわかっているふりをしてきた言葉が見つかったり、児童も母語を交えて会話することで意志の疎通が容易になったりと効果が見られた。

外国語学部ポルトガル語専攻 1年 山田 大成

今回は JSL 児童・学生のことや、母語を保つことの大切さ、やさしい日本語の重要性について簡単ではあったが学ぶことができるとも有意義だった。特にやさしい日本語についてはこれからJSL児童・学生またそれ以外の日本で暮らしている外国人と接していく上で、ぜひしっかりと学んで身に付けたいと思った。これからの5日間でのどのようなことを学んでいくのかが大体つかめたという点でいいオリエンテーションだった。

外国語学部カンボジア語専攻 1年 丸田 友紀

言語喪失、セミリンガルなど、JSL 児童の子ども達に関わる問題の深刻さに改めて気づきました。JSL の子ども達をサポートして日本の国内に豊かな多言語・多文化社会を築いていくことの重要性を感じました。この授業ではじめて「やさしい日本語」のことを知りました。外国人に対してはとにかく英語と決めつけてしまいがちだと思いますが、日本にいる外国人たちにとってやさしい日本語で情報を伝えることが、これからのことを考えても有効だとわかりました。

外国語学部イタリア語専攻 1年 加藤 芽実

私は日本語教師という職業に興味があるので、その知識を得るためという漠然とした気持ちでこの講座の受講を決めたが、オリエンテーションでより明確な趣旨・目的とそ

の深さを実感した。

JSL 児童・生徒のための母語・日本語双方による学習支援は、その子ども自身のためのみならず、多言語多文化が進むこれからの社会で日本が言語的文化的に豊かになるための第一歩である。また、子どもたちが母語言語を喪失したり、セミリンガルになること、又、言語習得の不完全さによる精神的不安に陥ることを防ぐ助けをするために、日本にある最も多言語多文化な東京外国語大学に属する私たちにできることは、大いにあるだろう。その一員としての自覚を持ってこの講座に臨みたい。

研究生 モンコンチャイ アッカラチャイ

JSL 児童という用語は初めて本当の意味・概念がわかるようになりました。そして、今現在彼らに関する問題なども前より具体的に理解できるようになりました。

本プログラムを通してJSL児童生徒に自分は何かできるか(助けられるか)を学んでいきたいと思います。

第1日目 2・3時間目 日本の小学校の教科教育

講師:矢崎 満夫

外国語学部朝鮮語専攻 1年 有銘 佑理

久しぶりに小学校の教科書を開いてみて、国語の教科書の内容には日本語という言葉だけでなく、日本文化の色も強い部分があるなど感じました。

私たちのとった国語の教科書に「“ふゆ”から思いうかぶものは？」という内容がありました。お年玉やたこあげ、こたつなど日本独特の文化を挙げていて、JSL 児童にはひとつひとつ説明や実際の経験が必要だと思いました。また、「さむい、つめたい、ゆきがっせん」なども挙げていましたが、ここで「常夏の島の子はまず冬を知らないかもね」というグループメンバーや矢崎先生からの指摘もありました。その時、本当に多言語だけでなく、多文化の難しさを知りました。

自分が当たり前だと思っていて、そうではないことに気づくのはとても難しいことですが、JSL 児童・生徒がクラスに一人いることでその部分に気づくというポジティブな面があるということに気がつきました。

外国語学部英語専攻 1年 渡辺 美香

児童が楽しみながら学べるような工夫やアイデアがたくさんあって、魅力的な授業だと思った。もし私が小学生だったら、絶対に矢崎先生の授業を受けてみたい！と思う。やはり何をするにしても、第一に、児童・生徒のことを思うということが大事なのではないかと思った。

最後に実際に矢崎先生がモンゴル出身の児童に教えているビデオを見て、日本語を母語としない児童・生徒に教えるのは、頭で考えるよりも数倍難しいのだということに気づいた。私たち日本人にとっては感覚でわかってしまうことも、JSL 児童・生徒にはわからないため、一から教えていかねばならない。どうしたら彼らに理解してもらえるか、教育者側は常に彼らの視点に立って考えていかねばならないと思った。

外国語学部英語専攻 1年 安藤 さゆり

矢崎先生からは日本の小学校における教科教育について講義を聞きました。矢崎先生の学習メソッドはおもしろいものばかりでした。相手が小学生というだけあって、カードを作って漢字を覚えさせたり、ゲーム形式で競わせたり、児童を飽きさせない工夫が盛りだくさんで感心させられました。学習内容が充実しているだけでなく、ビジュアル的にも楽しい教材でなければならないことを学びました。

また、外国人児童にだけ意識を集中させるのではなく、クラスの生徒と仲良くなって、日本語学習に巻き込んでいく、ということもなるほどと感心しました。

外国語学部スペイン語専攻 1年 田村 かすみ

JSL 児童・生徒たちが学校での勉強をスムーズに理解できるためには、教える側にも工夫が必要であるということを実感した。また、わかりやすさだけでなく、カードゲームなどの遊びなどを通して、子どもが楽しんで学べる工夫も大切だと思った。

JSL 児童・生徒の指導は、時間・手間がかかり、学校では十分に補えない部分もあると思うので、私たちボランティアが一人一人の子どもに向き合って、きちんとした理解をうながせるように頑張らなくては、と改めて思った。

外国語学部ポルトガル専攻 1年 河野 千早穂

まずこの授業で感じたのは、自分が相手の立場に立ってみることの重要性だった。教えることばかりに考えがいつてしまい、相手に理解してもらうことを求めがちだったが、もし自分が慣れない言語だけで授業を受けることを考えると強く要求しすぎるのはよくないと思った。相手のペースでやることを心がけたい。(中略)

日本語の授業よりも教科内容も理解を優先する。

ビデオを見ていて、相手は子どもなのでただ教えるだけではいけないと感じた。集中力が切れたり話を聞かなくなったりすることもあるだろうし、ひきつける工夫が必要。自分の思い通りにばかりいかないことも認識しなくてはいけない。

第2日目 1・2・3時間目 多文化コミュニティを理解するために

講師: 田村 太郎

外国語学部カンボジア専攻 1年 野 衣久美

グループワークでの問題には、深く考えさせられた。私たちの意識の中に当たり前のようにステレオタイプが染み付いていると思うと、何だかこわくなった。

外国語学部イタリア語専攻 1年 本山 綾乃

現場で起きている出来事をケーススタディとしてとりあげ、「課題」「理想の姿」「ボランティア(外大生)として具体的にできること」を議論した。とてもいい経験になった。

また皆の発表を聞いて、すごく刺激を受けた。それらのケーススタディを吟味してみて、学校側(受け入れる側)の事前の準備がかなり不足していることを知った。また、これらの事前の準備がとても重要だとわかったし、ボランティアの大切さに気づいた。外大生のようなボランティアを欲している児童・生徒が多くいることがわかったので、これから積極的にボランティアに参加しようという意識をもてたし、とても楽しい授業を受けられたと思う。

外国語学部カンボジア語専攻 1年 重廣 里織

田村さん自身の経験をより実感しやすく“人の移動”というものが誰のせいでもなく、生きていくために起こる自然な

現象だということがわかった。

また、多文化共生と教室をめぐるケーススタディでは、JSL 児童の抱える問題をいくつかの事例をもとに考え、課題・理想の姿・そしてそれに近づくための具体的な活動をはっきりさせ、3つのバランスをとることが大切だと知った。

現場の先生としてできることと私たち外大生にしかできないこととの違いもあることを知り、自分が外大生である誇りと使命感を感じた。ただ、JSL 児童の抱える問題の中に、教える側・ボランティア側の“JSL は日本と〇〇国の架け橋になりたいはず”といったステレオタイプにより、苦しむケースがあることは少しはっとさせられ、覚えておきたいと思った。

外国語学部フランス語専攻 1年 谷 あゆみ

多文化共生の基本的な概念と、移民が増えている原因がわかった。ケーススタディでは、いろいろな意見が聞けて勉強になった。「Hidden Curriculum」というのは、初めて聞く言語だったが、まったくその通りだと思った。さまざまな人種・文化・背景の人がいて当たり前という環境を作ることが大切。

日本のテレビは、アメリカやカナダのような規定はないけれど、もっと多文化化に配慮した番組作りをしてほしい。「こんび太郎」の話も出たが、お笑いなどの中には、外国人をばかにしたようなものもあるので、子ども達に悪いイメージを抱かせてしまうのではないかと思う。

ボランティアや教える側のステレオタイプもなくなっていくはならない。今日学んだことをこれからしっかり活かしたいと思った。

外国語学部アラビア語専攻 1年 原田 真里

ケーススタディは面白かった。2限目のディスカッションを経て、私は迷わずケース3についてディスカッションしようと思った。というのは、日本人生徒(児童)の一人が発した「やっぱりガイジン踊りがうまいんだね」という言葉全体と「ガイジン」という言葉には、日本人の持つ排他的な見方や外国の人々に対する固定観念や彼らに関する知識不足が表れているように感じたが、それをどう生徒に伝えるかについて、自分でうまく答えが出せなかったからだ。ディ

スカッションでいろんな人の意見を聞けて、とても勉強になった。また他人の意見について自分の意見を出したりして、提案を発展させていくのはとても楽しかった。このディスカッションを通して、日本人の持つ排他的な見方、「ガイジン(=alien?!)」的な見方をなくしていくためには、自国と多国の文化や言語について知り、互いに尊重することが必要なのだと感じた。

また、ケース4について、陳さんが日本に懂れて日本に来た場合/陳さんが自分の意思に反して日本に来た場合と陳さんが幼い場合/陳さんがある程度の年齢の場合に分けて検証したグループがあったが、彼らの発表はとても興味深かった。「中国人であることを早く忘れたい」という陳さんの真意を知るためには、これらの視点は非常に大切だと思う。私たちは日本に来る外国の人々に対して、彼らは自国に誇りを持っているに違いないと思ひこみ、“異文化理解のため”彼らに自国の文化などについて話すよう求めがちである。しかし考えてみよう。私たちが外国に行ったとして、現地の人々に日本文化について尋ねられた時、多くを語れるであろうか。その国の国民としてのあり方は一人一人違っている。私たちがJSL児童・生徒の学習支援を行う際には、上に挙げた2つの視点などから、その人の「〇〇人としてのアイデンティティ」を理解した上で、私たち日本人と「互いに学び合う」姿勢で取り組む必要があると感じた。

第3日目 1時間目 第二言語習得

講師：海野 多枝

外国語学部ロシア語専攻 1年 大石 寛子

外国人児童生徒の第二言語習得の程度を判断する際には、表面上会話できているから年齢相応であると考えてはいけな分りました。教科学習における言語能力から習得の程度を考慮する必要があると知りました。

2言語の到達度による分類で、モノリンガル、部分的、完全、制限的バイリンガルの4種類が絵で表されているのが分かりやすかったです。沈黙期は性格の外交的か内向的かによって差があるということに驚きました。

子どもが沈黙期に入ると、親が心配して無理に話させよ

うとすると聞きましたが、沈黙期は第一言語、母語習得の際のゆりかご時代のように単語を蓄積したり状況を判断しようとしているので、悪い時期ではないと知りました。

外国語学部カンボジア語専攻 1年 柴本 智代

外国人児童生徒が直面する問題の一つ、第二言語習得について学問的に詳しく知ることができたと思う。特にわかりやすく、印象に残ったのは、2 言語の到達度による分類を示した図である。制限的バイリンガルの子たちが 1 割程度存在していることを初めて知った。

第二言語習得に関する課題は、児童生徒に日本語を教えたりするときに必ず知っておかなければならないことだな、と強く思った。

研究生 モンコンチャイ アツカラチャイ

JSL 児童生徒の日本語能力の発達に影響する要因を少しわかってきました。受講する前に、環境や教授法、指導法といった外的要因 (external factors) しか考えていません。しかし、これ以外に、性格や動機などといった内的要因 (internal factors) もあるということがわかるようになりました。特に現場で日本語を教えることになったら、その JSL 児童生徒の動機や好きな学習スタイルということも知らないと、児童の勉強する気がなくなり、能力の発達がなかなか見えなくなるでしょう。

また、沈黙期 (silent period) もおもしろかった。海野先生が自分自身体験したことも含めて教えていただいて、分かるようになりました。

外国語学部トルコ語専攻 1年 萩原 絵理香

興味のある分野だったので、おもしろかった。私は 0 歳 10ヶ月～5歳7ヶ月までアメリカに住んでいたが、当時話していた英語は忘れてしまった。小学校で、いくつかのカタカナ言葉にアクセントのなまりが残った(「インタビュー」など)が、高学年になる頃にはなくなった。ただ、一貫して「言葉」への興味は強く持っていた。こうした経験から、「私の言葉への関心は外国在住と関係があるのだろうか」「当時染みこんだ英語は消えてしまったのだろうか」という疑問を持っていた。この講義を聞くことで、その疑問を解く学問

分野に触れることができた。また、そうした理論だけでなく、その実践としての教育にも関心を持つことができた。

外国語学部ロシア語専攻 1年 松井 真雪

「第一言語」の位置づけと重要性について考えさせられた。L2を発達させるには L1もある程度運用できる能力が必要とされることなどは、私たちが専攻語の力を伸ばしていく上でも念頭に置いておくべきことだと思った。

しかし、「第一言語」とは一体何なのか。私はそれぞれの人がアイデンティティを感じる言語こそが、その人にとっての第一言語であると思う。

第3日目 2時間目 バイリンガリズム

講師：伊東 祐郎

外国語学部朝鮮語専攻 2年 岡田 真悠子

外国人児童・生徒に対する日本語教育制度があまりにも不十分であることに衝撃を受けた。他の講義でも聞いたが、外国人児童・生徒が日本語で会話することができても、学校の授業についていくことは困難であるようだ。もし学校側が「この子は日本語が話せる」と判断してしまえば、その子どもは日本語の読み書きの訓練を受けずに、日本語の在籍授業へ参加させられることになる。そうすると、外国人児童・生徒には大きな負担がかかり、授業についていくことが困難になってしまう。外国人児童・生徒を在籍授業に戻す際の判断基準を明確にするなど、日本語教育制度には改善されるべき点はまだあると思った。

外国語学部中国語専攻 1年 小磯 友美

- ・「臨界期」の前の子とも後の子ともて、教育アプローチは異なる。
- ・ JSL 児童・生徒は個々人の家庭環境によってモチベーションは違う。
- ・ 国語教育は日本語コミュニケーションが十分可能なことが前提にある。
- ・ 中学生以上の JSL 生徒になると、個人の中で確立された母語を引き出しつつ、日本語の力を伸ばすことが、一番有効とされ、外大生にはこれができる。

外国語学部ポルトガル語専攻 4年 和田 更沙

部屋の 4 隅というのを初めて知り、初めてやった。それぞれの立場の人の考えが聞けておもしろかった。挙手によるアンケートよりも、考えや行動が人により様々であることが実感しやすかった。

日本にいるのだから日本語というのではなく、確かに日本語も大切ではあるが、母語の能力や母語で学んできたことが L2 においても応用できること、母語の重要性を改めて認識した。

また、ことばそのものというよりは、周りの環境を整えてあげること、教室や地域に置ける人間関係作り、家庭環境など、安定した環境作りにも気を配らねばならない。範囲の広い問題だと思う。

Amigos で行ったふれあい祭り参加や大泉フェスティバルなど、児童のことばの習得そのものには関係ないけれども、ブラジルのことを知ってもらい、人間関係を築くという意味において、間接的にはあっても貢献できていたかな、と感じた。よかった！

外国語学部日本語専攻 1年 草川 鮎子

- ・ 書き言葉は強く強要していかないと、必然性が低いので習得が難しい。
- ・ 教科の先生と日本語学級の先生は、互いに密接し、情報交換をしながら、JSL 児童の指導にあたっていくべき。
- ・ 子どものこれからの人生に合わせて指導体制を考える必要がある。例) 日本に永住する子と帰国の可能性がある子
- ・ 自分の居場所・精神の安定・周囲の子ども達とのかかわり等が確保できた上で「学習」はできるので、これらを構築していくことが重要。
- ・ 言語習得のプロセスは子どもだけでなく、自分が言語を学ぶ上でもあてはまることだったので、興味深かった。アウトプットをできるだけ多くするには、良質な内容をインプットすることが大切。

外国語学部英語専攻 1年 渡辺 美香

最初 4 隅に分かれるゲームでいろいろな考え方やバック

グラウンドを持っている人がいるということを知れてよかった。

JSL 児童・生徒に教える側は、その子たちに理解してもらいたい、身に付けてもらいたいと思って、どうしても「学び」の方を重視しがちだけれども、その前に、その子たち全員が気持ちよく楽しく学校に来られる環境を作ってあげることが必要だということを忘れてはいけないと思った。また、児童や生徒一人一人学習意欲は違うということも覚えておかねばならないことだと思った。

いずれにしても、やはり、JSL 児童・生徒の立場になって考えることが大切だと思う。しかしこれは何も JSL 児童・生徒に限ったことではない。私は今、塾で個別指導のアルバイトをしているが、その際にも、生徒一人一人の現状・性格に合わせた授業を考えようと思った。

外国語学部スペイン語専攻 1年 野村 沙紀

JSL 児童・生徒のことや、言語習得の臨界期などを学んだ。パイリンガルは 2 つの言葉で違う能を使うものだった。パイリンガルは 2 つの言葉で違う能を使うものだった。パイリンガルは 2 つの言葉で違う能を使うものだった。パイリンガルは 2 つの言葉で違う能を使うものだった。

第 3 日目 3 時間目 子どものための日本語指導(1)

講師：柏崎 雅世

外国語学部イタリア語専攻 1年 本山 綾乃

私は日本語を第二言語や外国語として習得するのは難しいと考えていた。しかし「N は N です」で、身の回りのものが説明できることや、順序を変えなくても文末に「か」をつけることで疑問文に変えられるから「簡単！」という留学生がいるときいて、目からウロコだった。授業を受ける中で、助詞などはやはり難しいのではないかと思ったが、そういうふうに一言語として日本語を捉える視点をもてた気がして、とても嬉しい。

外国語学部カンボジア語専攻 1年 野 衣久美

日本語指導というと、日本人なら誰でもできるような感じがしたが、実際はそうではないと知れてよかった。

いつでも相手側の気持ちになってやるのが大切だと強く思った。自己満足ではダメだ。

外国語学部日本語専攻 3年 掛本 繭子

算数の問題を扱ったケーススタディが大変興味深かった。時制の書き方の違いが児童にとって大きな壁であることを感じた。まだ論理的な思考のままならない児童に文法を指導していくのは難しい。ガイドラインは大変参考になった。

外国語学部スペイン語専攻 1年 田村 かすみ

日本語教育について学ぶのは、今回が初めてで、文型での教育法には目からウロコだった。

私たちのように、日本語を母語とする者からしてみれば、何てことない文章でも、第二言語として学んでいる JSL の子どもたちにしてみれば理解しがたいのもでもあるのだ、ということを実感し、子ども達が教科書や問題文をよく理解するために、文型を教えたり、内容をやさしい日本語で説明したりするなどの工夫が必要だと思った。

外国語学部フランス語専攻 1年 谷 あゆみ

日本語を母語としていると、あまり深く考えずに、感覚で使っているけれど、助詞の使い分けは説明がとても難しい。今聞かれても、きっと答えてあげられないだろうと思う。プロとして日本語を教えている方は、どのように説明しているのか、実際に見てみたいと思った。

中学校の教科書に出てくる文法表現はほとんど小学校で学ぶもの。中学生になってから来日した子どもは、教科書の内容が難しくなるだけでなく、出てくる日本語も高度になって大変。早く、中学校にも、JSL 児童・生徒に対応できるサポート体制を作らなければならないと感じた。

第4日目 1・2時間目 国際化の進行と日本社会

講師:野本 京子

外国語学部日本語専攻 1年 草川 鮎子

- ・ 80年代の「不法残留」のマイナスイメージが現在にも影響を及ぼしている。
- ・ 日本国籍へ帰化する人の多さ、同化主義的帰化
- ・ 国際結婚の増加、普段あまり意識していなかったが、具体的な数字を見ると、急激な増え方に驚かされた。

- ・ アジアからの花嫁、村の存続が危ぶまれるからといって、結婚までの日数や外国人女性に対して出す条件などについて、村側は勝手なように思えた。母国でかなり活躍できそうな人が、母国よりも経済的に発展した他国の一農村で農業に従事する、労働力としての人の移動について考えさせられた。

外国語学部ロシア語専攻 1年 大石 寛子

不法就労摘発者数がかかり多いのに、実際の数はもっと多いと知って驚きました。外国人問題について考える場合、オールドカマーではなくニューカマーばかりに焦点を当てていたことに気がつきました。在日韓国人の数だけ割合が一気に低下していたのは家族ぐるみで日本籍に変えるという「帰化」によって起こったと知りました。

農村の外国人妻についての現象は本当に興味深いものであるとともに、日本人の農業に対するイメージの悪さが社会現象として現れるようになったとショックでもありました。外大の常識が世間の常識ではないという意識は今まであまり強くありませんでしたが、世間をゆさぶられるような活動を外大生としてやってみたいです。

外国語学部スペイン語専攻 1年 飯岡 由香

在日コリアンの歴史的背景を具体的に詳しく知ることができた。オールドカマー、ニューカマーのきちんとした定義も学べてよかった。

私の身のまわりでは、夫が日本人で妻がアジア系外国人であるパターンがほとんどであったし、メディアで見るとようなカップルもこの組み合わせが多かったのも、そもそもこのスタイルだと思っていたが、時代とともにその数が増加し、組み合わせも変化した結果であることを知り、大変興味深かった。

外国語学部カンボジア語専攻 1年 丸田 友紀

多文化共生というとき、ニューカマーだけでなくオールドカマーについても今までどのように対応して来たかを見直し、これからの共生を考えていかなければならないということを知りました。オールドカマーについては言葉には不自由しないけれど犯罪などと結びつけ悪いイメージを持って

いる日本人が多いことが問題で、そういう偏見をなくすことが大切だと思いました。

また、国境を越えた人の移動に、農村における国際結婚があることをはじめて知りました。結婚するまでの期間が短く、「目的」のある結婚なので、機械的というか、すこし違和感を感じます。今回の授業ではケーススタディがなかったので、実際どういうところにこの問題が出ているのかとか、それに対してできることが明確に見えませんでした。これから増えていく国際結婚から広がる多文化社会について考えてみたいと思いました。

外国語学部イタリア語専攻 1年 本山 綾乃

外大にいと、どの国籍の外国人も日本人と平等に扱われ、生活し、学んでいると思うが、ここから一歩外に出ると、こことは全く違う世界があるのだと聞いてハッとしました。大学内では多言語・多文化保持者が共生していると思っていましたが、世間一般のそういった問題に目を向けなければならぬと思った。また、現在たくさんある国際結婚について、知らなかったことがたくさんあった。村の存在を守るためにも、と村をあげて花嫁探しに躍起になるところ。それで村が何とかなくなったとしても、花嫁を「買った」ことにはならないのか、幸せになり裕福な生活ができる花嫁はそれが良いのか。まだまだ知らなければならぬことがたくさんあると分かった。

第4日目 3時間目 子どものための日本語指導(2)

講師：小林 幸江

外国語学部スペイン語専攻 1年 飯岡 由香

JSL 児童を指導する上で使う教材を選ぶことは、重要なポイントであることがわかった。指導する側に日本語を外国語としてとらえる意識がどれだけあるかによるのだなと思った。

初級の英語の本と1年生の国語の本の文章が2つプリントに載っていたが、全く方針が、目的が異なることがわかった。この違いを指導者が側はもっと理解し、JSL 児童・生徒の日本語指導にあたるべきだと思った。

外国語学部ポルトガル語専攻 1年 山田 大成

この講義では、JSL 指導でどう教えるかの中の初級指導における指導上の留意点という所がすごく参考になった。生活言語を身に付けさせる上で、視覚的な補助を使ったり、表現の簡単な日本語を用いたり、児童生徒の沈黙期を考慮したりすることが、とても大切なことだと学んだ。

また、日本語学習指導の場合は、学習日本語の特徴をしっかりと学んだ上で児童生徒が学習内容・問題の内容をしっかりと理解できるように、我々教える側が工夫して分かりやすく教えなければならぬと感じた。

外国語学部イタリア語専攻 1年 加藤 芽実

JSL 児童・生徒に対しても、教育を受ける権利は保障されている。ところが教室で「少数」である彼らに十分な教育が行われているかという、そうではないのが現状だ。

オーストラリアやニュージーランドにおける ESL 指導に比べると日本の JSL 指導はまだ歴史が浅い。しかし JSL 児童・生徒は増える傾向にあるから、一刻も早い教育確立が必要だと思う。

現在行われている(だろう)取り出し指導はもちろん、母学級で個人的にサポートをつけることや、母語を用いた指導も必要だとされている。

初期指導においては、指導者が配慮すべき点が多くあった。例えば、視覚的な指示、わかりやすい表現で子どもの知識の量に合わせること、自分の日本語がモデルになることも意識しなければならない。適切な教材不足などもあるが、教師側の努力が反映されるのだと思った。

外国語学部スペイン語専攻 1年 野村 沙紀

日本の小1の国語教科書は外国人児童にはとても難しいこと、学習言語は身に付きにくいことなどを学んだ。教科書の文をところどころ切れれば、内容が分かるなど、教えるにはどうしたらいいかがわかった。沈黙期がコントロール会話についても知った。

外国語学部朝鮮語専攻 2年 岡田 真悠子

授業に参加できずに、授業中ずっと絵を描いていた南米出身の女の子のように、日本語で行われる授業につい

ていけない子どもたちがたくさんいて、そのまま学校を辞めてしまうこともあるという現状を聞いて大きなショックを受けた。JSL 指導の歴史の浅さを改めて感じた。

日本の小学校の教科書で使われている日本語例の資料を見て、私たちが普段使っている話し言葉と教科書に使われている日本語はかなり違うということに気づいた。話し言葉で助詞は省かれることが多いが、教科書には頻繁に出てくる。私たち母語話者は、このような違いを意識することは少ないが、外国人の子どもたちにとってはとても難しいことだと思った。

外国語学部ポルトガル語専攻 4年 和田 更沙

意識しながら、改めて教科書の日本語を見てみると、ひらがなに加え、カタカナ・漢字・異なる文体・長い文章、こんなにも外国人児童にとって難しいだろうと思われる場所があるのだとわかった。

第5日目 1・2時間目 対人コミュニケーション

講師：宮城 徹

外国語学部英語専攻 1年 安藤 さゆり

講義の中で相手にあいづちを打ってもらわないのは、とても話しにくくて、雰囲気が悪くなることだと気づきました。

あと、自分はわりと聞き手で、話すときに話したいことがあっても、聞き手に理解してもらえるような筋道のしっかり立った話し方ができないので、頭を整理して、考えをまとめられるようになりたいです。

また、今日自分の考えを話した時に、周りのみんなが自分の話をあいづちを打ちながら聞いてくれて嬉しかったのと、話し終わった後に普段は感じない疲れを味わったので、脳を使って話したんだなど実感しました。

外国語学部日本語専攻 4年 森本 舞

- ・ スキルとは体験から学ぶもの。
- ・ 対人コミュニケーションの基本は聴く姿勢、聴いているよという態度。
- ・ 相手を受容し、受容していることを相手に伝えることが大切。

- ・ 初めて会う人たちとディスカッションをする。
(ほどよい緊張感、もっと知りたい、もっと聞きたい、あいづち、質問、反応)
- ・ 体験や思っていることを聞くと、聞く前よりずっとその人を身近に感じられた。

外国語学部フランス語専攻 4年 山田 寛子

誰かと会話をするとき、聴くという意識したことはなかったが、反応されることの嬉しさを初めて知った。

A グループでディスカッションしたとき、後で習った開いた質問にあたるだろう質問が多かったので、会話がはずんだと思う。

外国語学部カンボジア語専攻 1年 坂本 悠

- ・ グループディスカッションをすることで様々な意見を言い合い、聴くことができる。そういう場を設けて話し合うのは良いことだと思う。
- ・ 話しているときの自分がどうかを客観的に見たりするのは難しい。どんな風に話せば相手は理解してくれるかを考えて、易しい言葉で伝えられたらと思う。
- ・ 相手の立場になって、ものを考えることをして、話を聞けたらいいと思う。
- ・ みんなが参加できる話し合いを目指す！
- ・ 自分はディスカッションをしていて、とても楽しめたので、これからディスカッションをやる時は、みんなが楽しめるのを目指したい。

外国語学部日本語専攻 4年 松崎 舞子

この授業では、対人関係を築く上での基礎となる「聴く」と「話す」ことについて考えさせられた。

普段はなんとなく話したり、なんとなく聞いたりしていることが多いが、このように意識してみると、様々なことが見え始めるように感じた。

自分のことに関して言うと、相手の話に心を集中させて聴くことはできたが、自分の感じたことや意見などをうまく返すことができなかったように思う。そうすると「聴く」ということの意義・効果が半減してしまうように思え、こうして意識を集中して考えてみて、「会話のキャッチボール」をすることの大

切さを改めて知ることができた。

外国語学部中国語専攻 1年 小磯 友美

- ・ 見ず知らずの人たちと自己紹介をし合い、共生学講座の受講動機がなんなのかなどをお互い発表し合い、聴くことの大変さや自分の話したいことを伝えることの難しさを学んだ。
- ・ 話すとき、聴くとき、こんなに頭を使うとは思わなかった。

第5日目 3時間目 子どものための日本語指導(3)

講師：藤森 弘子

外国語学部アラビア語専攻 1年 原田 真里

今日の授業は、今までの授業で習った日本語文法をより実践面で生かすためのゲームだったので、昨日までの授業よりも取り組みやすく、面白かった。文字を覚えたり、文法を学ぶことも言語学習の上ではとても重要だが、あいさつや買い物など、日常の場面において、まず音(聞いた声に出すなど)から、日本語を学ぶ方が、楽しくそして身につくのも早いのではないかと思った。

外国語学部カンボジア語専攻 1年 柴本 智代

ひらがなラップ！すごびっくりしました。でもなんだか、現代的な教材だなと思いました。子どもたちに日本語を教えるには、このようなコミュニケーションゲームを使うことはとてもよい方法だなと思います。何より子どもは遊ぶことが好きだと思うからです。絵も入っていて、見ただけでもなんだか楽しそう、と思える教材だなと思いました。

外国語学部フランス語専攻 4年 山田 寛子

ゲームでコミュニケーション能力を伸ばすというものをいくつか見た。実際にたくさん使えるし、ディスコースの部分でも役に立つとわかった。教える！と思うと、ついついストイックになりがちだが、情報面を和らげるのも大切だ。

外国語学部日本語専攻 3年 李 冬梅

- ・ 「ひらがな」ラップ→単調無味な「50音図」をカナダの留学生センターではこのような面白い教授ができると思っ

てはいなかった。ぜひ広めていきたい。

- ・ 勉強をしなければならない→もっと広い範囲で広めてほしい。
- ・ 文型とゲームのうまい結合を常に探索し、キャッチすべきである。
- ・ 「死んだ日本語」をいかに「生きた日本語」として教えるか、教授法が問われる。

外国語学部カンボジア専攻 1年 重廣 里織

様々なゲームを使っの日本語教育を紹介してくれた。ひらがなラップなどはネイティブの私たちからすると、思わず笑ってしまいそうだが、よく考えれば英語をはじめた頃はABCの歌や数の数え方の歌もよく歌ったものだった。また他の人と質問し合って、情報を得るインターアクションを促進するゲームは、初歩的な人とのコミュニケーション能力や語学を身に付けられて有効である。

ゲームを使うことによって、学習者へのストレスを減らし、楽しく日本語の文化・言葉に触れて積極性が向上し、記憶力を助けてくれるなら、一石何鳥でとてもよい。またそのゲームをする学習者を先生が見ることで、生徒のレベルを把握することができる面もあることを知り感心した。

第5日目 4時間目 まとめ

講師：河路 由佳

外国語学部トルコ語専攻 1年 萩原 絵理香

どの講義も本当に充実していて、先生方の熱意も大いに伝わるものだった。今後に活かせる経験をした。中身の詰まった5日間だった。

私は理論的な視点で第二言語習得に関心があり、このプログラムに参加した。大変興味深い話を聞くことができた。また、同時に日本語指導のボランティアにも大きな関心を持った。ぜひチャレンジしてみたいと思った。

5日間を見通す形で河路先生のまとめを聴くことが出来た。1つの視点にとらわれず、常に広い視野を持てるようにしたい。

外国語学部スペイン語専攻 1年 飯岡 由香

今日本社会が多言語・多文化化に向かって進んでいることを肌で感じてはいたものの、きちんと理解したり、どういう成り立ちであるのかをしらなかつたので、この現状を知れて本当によかった。

参加したことで同じような目的や関心をもった友達ができ、私も私にとっては大きな収穫だった。(グループワークのおかげであると思う)

今までの自分の経験とこの授業がリンクすることもあったが、まだまだ知識として得た部分が多い。これからここで得た知識を実体験で生かしていきたいし、そうできた時にこのプログラムを受けた意味が増すと思った。

外国語学部ポルトガル語専攻 1年 河野 千早穂

このプログラムを通して何度も耳にし、大切だと言われたことはクラスの中での場所だったり、教える側との関係とといった人とかかわりだった。教える場合経験がないと教えることばかりに目をむけてしまうが、それより以前にもっと基礎的な人類に共通している大切なことがあるということを中心に留めておこうと思う。たとえば、JSL 児童と接するとき、その子をまずは 1 人の人間としてとらえ、その後文化などの付随的なものを、必要に応じて気にかけるという方法をとるとよいということを学んだ。

外国語学部日本語専攻 4年 松崎 舞子

JSL 児童生徒の学習支援について、今まで知らなかつた外国人問題について考えたり、日本のみのことに限らず多言語多文化共生ということについて初めて気づいたことがあったり、コミュニケーションについて考えてみると、自分が支援する JSL 児童生徒のみならず、自分自身のためになったことがとても多かった。

内容の濃い 5 日間になり、夏休みの自由時間を削ってまで参加してよかったと心から思う。

外国語学部朝鮮語専攻 1年 有銘 佑理

5 日間、本当に中身の濃い授業ばかりでした。外国語を学んでいると、海外で活躍することが目標になりがちですが、もう日本の中でも活躍の場が本当に大きくなってきて

いるということを感じました。日本人は外国人に対して、また国際化している日本社会に対して意識がまだ薄いといわれていますが、意識はありながら「どう行動していいかわからない」という人がたくさんいるのではないかと思います。この講座では JSL 児童・生徒の学習面・心理面の問題、またそれを深刻化させている社会の問題とそれに対してどうアプローチするかを深く考える機会がたくさんあって、本当によかったです。1つの問題にもいろいろな側面があり、本当に複雑なことですが、自分の意識や知識を相手に押し付けるのではなく、常に自分も学ぶ姿勢を持ってこの多言語・多文化の社会に対して何か行動を起こしていきたいです。

外国語学部カンボジア語専攻 1年 柴本 智代

今回のプログラムで学んだこと、得たことはとても一言で言い表せない、言い尽くせないと思います。頭で学んだことももちろんたくさんあったけど、カンボジア語での算数の授業を通して、外国語で勉強を教わることの大変さを体験することができたのは、私にとってすごく貴重なものでした。府中サロンでの学習支援活動に参加している中で、子どもたちが日本語で勉強する姿を見ていて、今までは「大変だろうな…」とは思っていましたが、ここまで大変なことだということを今回自分が体験することで初めて気がつきました。

5 日間、アクティビティの授業もあり、すごくよかったです。このようなことは、勉強したい！とおもっていたのですが、なかなか授業とかでもなかつたので、今回勉強することができてすごく嬉しいです。この 5 日間で学んだこと、得たことを、今後の自分の活動に精一杯生かしていこうと思っています。本当にありがとうございました。

外国語学部カンボジア語専攻 1年 坂本 悠

興味本位でやろうと思ったこのプログラム、5 日間を経て色んなものを得られたと思います。これからの大学生活に生かして生きたいし、もっとたくさんの事に挑戦したいです。授業でも人との交流の機会はほとんどないですし、グループディスカッションを出来たことはとてもよい経験になりました。もし、またこのようなプログラムがあれば、ぜひ参加した

と思います。この5日間はとても充実していました。こんなに楽しい授業を設けていただいた事に本当に感謝します。短い間ではありましたがどうもありがとうございました。

外国語学部日本語専攻 3年 李 冬梅

今までの多文化共生の講座やボランティア活動、中国などと結びながら今回の授業を通じてこれまで「これ」と感じながらはつきりしなかった知識点が分かるようになりました。

外国語大学はやはり「宝物」です。大学で勉強しているみなさんはいいチャンスに恵まれ、大きな可能性を秘めていると強く思います。私に出来ることはなんだろう、これからやるべきこと、河路先生の夢が実現できたように一步一步地道にがんばっていきたいです。知識を習い続け、方法を探し続けたいです。夢が膨らみました。「信頼」できるいい先生になりたい。いい架け橋になりたいです。

外国語学部ドイツ語専攻 1年 小山 遥

興味深い科目ばかり、特にボランティアのための外国語では今回私は英語を学びましたが、新しく得ることが本当に多かったです。今回の講座では、参加型のディスカッションの授業が多かったのも魅力だと思います。

今までディスカッションなどは苦手だったのですが、人と意見を交換することは有意義なことなのだと気づきました。

外国語学部英語専攻 1年 渡辺 美香

この5日間は非常に密度が濃く、有意義なものであったと思う。

これから生きていく中で、指標のようなものが出来た気がする。最後の河路先生の話聞いて、非常に心を打たれた。今まで外国人児童・生徒はつらい思いをして、苦勞しているという話しが中心だったので、そういうことばかりではない、ひとつの見方でもものを見てはいけないということに気づいてよかったと思う。これから、将来、外国人児童・生徒の学習支援にかかわることが出来るかはわからないけれど、今回身につけた知識や経験、今回感じたこと、学んだことを自分自身の糧にして、いきいきしたいと思う。

外国語学部中国語専攻 2年 岩瀬 和恵

もともと日本語教育に興味があり、日本語教育に関する授業もうけてきましたが、JSL 児童・生徒についてはほとんど詳しい事情を知りませんでした。テレビで何度か取り上げられているのを見たことがありますが、なんだか他人事のように深く考えることもありませんでした。今回この講座を受けて学んだことは、ボランティアに関わるか関わらないに関係なく、今日本が抱えているこの JSL 児童・生徒の問題は誰にとってもとても身近なことであるということです。今まで考えもしなかったことについて考えるきっかけとなりとても有意義でした。ありがとうございました。

外国語学部ドイツ語専攻 1年 内山 ゆみ

多言語多文化について様々な視点から学べて本当に有意義だった。ボランティアとして活動することは、ただ言語を教えればよいという単純な問題ではなく、子どもの交友関係や生活にとっても影響を与えるとよく分かった。

それは本当に難しいことなので、もっと自分で勉強をしていきたいと思うし、同時に実際のボランティアを経験して、そこからいろいろ考えていきたい。何事も思い込みや固定観念で枠を作ってしまったら知らないうちに相手を傷つけてしまったり、うまくいかなくなったりということがよく分かった。

外国語学部アラビア語専攻 1年 鈴木 啓之

共通して先生方がおっしゃっていたこと。

- ・ 日常会話と学習日本語の違い
→理解した支援を！
- ・ 単純化、法則化しない
→「～人の場合は」「～年生の場合は」ではない
「～人」というカテゴリー化、「～すれば覚える」という法則化はダメ。一人ひとり、個人差があることを忘れずに。
- ・ これはあくまで理論、現場へ行って実践して！

外国語学部アラビア語専攻 1年 平川 大地

一番強く感じるのは、「とても貴重な体験だった」ということである。この講座を通して、様々なことを新鮮な視点で見ることができた。アラビア語の授業で、いつもの授業では

一味違ったアラビア語を見ることができたのは言うまでもないが、「教育」というものを「外国人」の視点で考察できたのはとても大きいと思う。

同時に、日本の教育制度がいろいろな意味で改善されるべき点を有していることを痛感した。

外国語学部カンボジア語専攻 1年 小谷 健太

このプログラムの働きかけは教師側、発起人の共感により実現。前々からお互い「何かを変えたい」という気持ちがあった⇒キッカケが重要

誇りの問題、必ず「誇り」＝「identity」とつながるわけではない。特に誇り＝出生地と結びつける必要はない。単なる概念データであり、そこからその人物の identity につながるわけではない。それでは何が identity を形成するのか？最終的には自分自身の考え＝行動＝経験のこのサイクルがその人を作っていく。信頼し合い、相手の気持ちになって行動することで前にすすめる。

外国語学部フランス語専攻 1年 高木 亜麻子

この講座では期待していた以上にいろいろなものを得ることができた。講義では今まで知らなかった日本の中での外国人の現状や JSL 児童の支援の大切さについて知ることができて自分もボランティア活動してみたいと思ったし、日本語教育にも興味がわいた。フランス語の算数の授業は難しかったけれど少しでも自分の力になったし、もっと勉強してフランス語を話せるようになりたいと思った。もうひとつこの講座で得たことは、人と話すことの面白さだと思う。普段はただきだけの授業が多いのでグループ活動などでいろんな人の意見を聴いて、自分の考えも伝えるということがとても刺激になってよかった。新しい友達もできて、自分の世界がまた広がったと思う。

講義名:学習支援ボランティアのための外国語(アラビア語)

講師：ハナン

外国語学部アラビア語専攻 1年 原田 真理

この授業で、アラビア語の算数や理科の授業の様子、それに関する単語が学べただけでなく、エジプトでの学校

生活やハナン先生のお子さんの日本での学校生活についてのお話を、ハナン先生がたくさん話してくださったのでとても楽しかった。

特にそのお話の中で、「日本ではみんな同じじゃないとダメなのが困る。ハナン先生の子どもには出来て日本の子どもには出来ないこと、また、その逆のこともあるのだということをお話してほしい。」とおっしゃったのが印象に残った。世界規模でヒトの移動が起きている今、日本で「みんな同じじゃないとダメ。」というルールは通用しなくなるだろう。JSL 児童・生徒への日本語支援体制を整備すると共に、私たちの意識の変革が必要なのだと感じた。

外国語学部アラビア語専攻 1年 平川 大地

- ・ エジプトの小中学生用教科書・参考書を読解する。
先生の日本での子育ての体験談。
- ・ 「結びなさい」「出しなさい」「完成させなさい」など、教科書特有の語法
- ・ 「正三角形」「降順・昇順」「たす・ひく・わる・かける」など、各教科の専門用語
- ・ 日本の学校に子どもを通わせる大変さ(生活習慣・規則・宗教・制度の違い)
- ・ まずは親に日本の学校事情をはっきりと説明してほしい。

外国語学部アラビア語専攻 1年 鈴木 啓之

- ・ 習慣の違いを子どもの親に説明してあげる。
ー食べ物:ーハラール、ブタ、エキス、ポーク →表記がわかりづらい。麦、茶、米、しょうゆ、みそ →甘くない、味付けが違う。
ー掃除:ー下働きではないことの説明が必要
ー学級:ー一担任を通して親は行動すべきだと説明。
担任も率直さが求められる。
ー語学:始める歳のちがいがいい。エジプトのシステム。
ーラマダーンについて
なんと、プリント 1.5~1.6cmの分厚さ！すごい熱意です。完全にではないかもしれないけれど、しっかり受け止めました。
・ 時間を忘れるほど惹きつけられる内容でした。自分が(日本人として、圧倒的多数として)おっくってきた生活の

記憶からは想像もつかない多くの問題が、少ない理解の中で当事者(本人、家族)による解決を、待たざる得ない状態で放置されていることを教えていただきました。それだけに自分たちにかかっている期待は、決して国外に出て行くことだけではなく、勉強している国・地域を国内に紹介することやそれらの国・地域から日本に来た人々のサポートであるのだと感じました。

- ・ ハナン先生には、ラマダーン中にも関わらず、このような発見多き講義をしていただいたことに感謝します。

講義名:学習支援ボランティアのための外国語(中国語)

講師: 王 亮

外国語学部中国語専攻 1年 小磯 友美

- ・ 算数における基本的な用語を中国語で読むとどうなるのか、また現在の中国の小中学校の状況や王先生が生徒だった時の面白いエピソード、授業の後に行なわれている「眼保健操」も教えてくださいました。
- ・ 私は1年生なので、授業についていけるかとても不安でしたが、何とかついていくことができ、「 $+$ 」「 $-$ 」「 \times 」「 \div 」式や分数の大小比較など、いろいろなのが中国語で説明できるようになり、自信になりました。
- ・ 王老師に教わったことを決して無駄にしないよう、これからも日常会話のほうを磨き、ボランティアにいけるくらい中国語に自信がついたら、教わったことを実践して、中国人のJSL児童・生徒の助けになればと思います。

外国語学部中国語専攻 2年 岩瀬 和恵

- ・ どんなに難しい文章でも漢字で書いてあげれば、読み方を調べることが出来るけど、記号で書いてあると、意味はわかるのに読み方がまったくわからず、今まで授業でも%の読み方くらいしかやったことがありませんでした。また、中国独特の計算方法や語句など普通の授業では学べないことをたくさん知ることが出来ました。
- ・ 他にも、ネイティブな先生だからこそ分かる中国の事情を教えてください、毎回とても楽しかったです。

外国語学部中国語専攻 4年 松崎 舞子

- ・ ほとんど中国語が出来ないため、最初はついていけるか心配だったが、4日間を終えた今、毎回とても楽しく勉強できたように思う。普通の中国語の授業では習えないような、しかし算数を教えるにはとても基本的なことを学ぶことができ、とてもためになった。
- ・ また、毎回、中国の小学校の事情や現代の教育問題などについて教えていただいたのが、とても面白かった。

講義名:学習支援ボランティアのための外国語(スペイン語)

講師: フランシスコ・ジョゼ・バレーラ・ロドリゲズ

外国語学部スペイン語専攻 4年 葛山 紋子

La clase era muy interesante. Aprendí las parabras y frases de matemáticas que no estudiamos en la clase universalia. También aprendí cómo enseñar a los niños. Sentí que es muy difícil enseñar con una lengua extranjera lo que ya he conocido. Pero los alumnos de JSL tendrán aún más dificultad. Entonces es muy importante hacer clase divertida con juegos y quiz.

非常に面白い授業でした。大学の授業で習うことのない算数の単語や言い方だけでなく、どのように子どもに教えるかを学びました。自分が当たり前だと思っていることを外国語で教えるのは難しいと思いました。でも、JSL児童はそれにもまして学習に困難を感じているのだと思います。だから、一方的に教えるのではなく、クイズやゲームを使うことで楽しんで学習したくなるような工夫をすることが非常に大切だと思いました。

外国語学部スペイン語専攻 1年 田村 かすみ

- ・ スペイン語での算数は正直かなり難しかった。単位や概念などの単語はもちろんのこと、「たす」「ひく」「かける」「わる」などの基本的表現も日本語とはだいぶ勝手が違い、かなり苦戦した。しかし、実際にスペイン語での授業を受けることで、子どもたちがいかに苦労して日々の授業を受けているか実感できたし、先生が難しいところを日本語で説明してくれたおかげでずいぶん理解できたことから、母語の活用の有効性を実感した。
- ・ スペイン語での説明は難しいが、私がスペイン語で説

明することで子どもたちが理解しやすくなるのなら、実践してみたいと思う。

外国語学部スペイン語専攻 1年 飯岡 由香

- ・ ある程度まで出来てしまうと、理由などを考えずに出来るようになってしまうため、いちいちかけ算の理由などを問われると答えに詰まってしまうことが多かった。「こうなのだから覚えるしかない」のような態度ではなく、きちんと説明してあげる視点を身につけられたと思う。
- ・ この授業を受けてみて、短い間ではあったが、その中で教え方を具体的に学べ、おさえるべきポイントやそれに伴うスペイン語を知り、このような教育を受けるのと受けけないのでは大きな違いがあるなと思った。

外国語学部スペイン語専攻 1年 野村 沙紀

- ・ スペイン語がまだよく分からないので、分からない部分もあって大変だったが、知っている記号をスペイン語でなんとするか、表記の違いなど学べておもしろかった。
- ・ スペイン語で説明するという体験もできてよかった。

講義名:学習支援ボランティアのための外国語(ポルトガル語)

講師:ロドリゴ・ケンジ・ヤマシタ

外国語学部ポルトガル語専攻 4年 和田 更紗

とにかくおもしろかった。4年間専攻語としてポルトガル語を学んだが、その間こういったことはやらなかった。第一言語での知識は、第二言語を学ぶときにも活きるということをこの講座を通して学んだが、この語学の授業でそれを実感した。計算のやり方自体は、今まで、自分も学んできたのももちろん分かるのだが、それをどうやってポルトガル語で説明すればいいのか。計算そのものは簡単に解けてしまうので、その分、他言語で上手く説明できないのが、とてももどかしかった。

また、学ぶ中で、割り算の筆算のやり方や小数点の書き方、九九や割り算の余りに対しての考え方の違いなど、新しい発見もあり、それもまた勉強になった。

1年生には少し難しかったかもしれない。よくついてきて

いるな、すごいなと思いましたが。逆に、3、4年生と一緒に学べていたら、他にももっと多くの範囲に手を上げられたかも、と思う。ですが、Rodrigo先生にはとても感謝します。

外国語学部ポルトガル語専攻 1年 山田 大成

この講義では、数字の読み方から、足し算、引き算、掛け算、割り算、分数、少数、幾何学、実践的な文章問題など、算数や数学に必要な知識をポルトガル語で学ぶことができた。本当に有意義な時間だった。普段の授業ではこのようなことは学べないので、少し得た気分にもなった。しかも、この講義ではほとんどがポルトガル語で話され、説明されていたので、聞き取れなかったり、単語が分からなかったりして、ついていけない時も少しあったが、ポルトガル語の聞き取りの勉強にもなったりして、とてもよかった。

外国語学部ポルトガル語専攻 1年 河野 千早穂

この授業で習った数学の知識は、大学の講義や一般的な語学書では触れないようなものであり、かつ実際学習支援を行う際には、有用なものだったと思う。実践的でとてもよかった。

また、授業がポルトガル語で行われたため、多少ではあるが、JSL 児童・生徒の立場に立てたようで、今後を考えたもよい経験になった。理解のできない言語で新しいことを学習する難しさであったり、その中で図や身振り、知っている単語などから内容を推測することを身を持って体験したので、今後日本語で教える立場になった時に適切な態度を取ることができるのではないだろうかと思う。

講義名:学習支援ボランティアのための外国語(フランス語)

講師:フランソワ・ルーセル

外国語学部フランス語専攻 1年 高木 亜麻子

算数に出てくるフランス語の単語やフランスでの算数の教え方や日本との違いを知ることができておもしろかった。フランスの教科書もいろいろ見られてよかった。ただ1年生にとっては少し難しかったので、ボランティアで使える表現とかも日本語を交えながら教えてもらえればよかったと思う。

外国語学部フランス語専攻 1年 谷 あゆみ

自分のフランス語の能力がまだ初歩の初歩で、フランス語で指導できるレベルではなかったので、「フランス語がわからない小学生」のような気分だった。その意味では、JSL 児童・生徒の気持ちになれたような気がする。算数はどこの国でも同じだと思っていたが、割り算の記号(÷はフランスでは:)、小数点(フランスでは,)、筆算のやり方、数字の書き方まで、いろいろなことが違っていた。私は質問の内容も理解できなかつたりしたけれど、3、4年生はさすが！教え方がとても上手だった。ボランティアや実践の場で専攻語が活かせるよう、しっかり学んでいこうと思った。

外国語学部フランス語専攻 4年 山田 寛子

- Ce que j' ai appris :
- Il faut toujours une phrase complète en mathématique en France.
 - Ces trois verbes : compléter, observer, reproduire sont nécessaires pour apprendre les tableaux.
 - J' ai obtenu beaucoup de mots qui m' aident beaucoup à transmettre en français certains éléments du programme de math de l' école japonaise : les unités, une somme ;poser l' addition ;l' abscisse etc
- 学習支援に役立つことや日本との違いとして、以下のことを学んだ。
- フランスの数学では、常に文章で答える習慣があり、日本と違う。
 - 表を説明するには、compléter, observer, reproduire を使うと説明できる。
- また、役立つ語彙が増えた。

講義名:学習支援ボランティアのための外国語(朝鮮語)

講師: 申 悠琳

外国語学部朝鮮語専攻 1年 有銘 佑理

この朝鮮語の授業を受けて本当によかった。主専の授業でもこんな少人数で先生と一人ひとりが接することはできないので、少人数の環境がとてもよかった。最初は難し

く見えた数学の教え方も一つずつ先生と対話しながらすすめていくとよくわかって、たどたどしいけど四則の計算も説明できるようになった。

本当に一人ひとりの発話量も多く、発音や語彙についても細かい説明を受けることができた。これを本当にボランティアの活動で生かしていきたいと思う。

外国語学部日本語専攻 3年 掛本 繭子

講義もわかりやすく、各自のレベルに合わせて行えた。最終的に計算の説明ができたことで自信がついた。

外国語学部日本語専攻 3年 李 冬梅

「虎」は韓国語では「호랑이」(ホランイ)もちろんこの名詞は知っているが、ふと聞かれたときに出てきたのは「トラ」。先生いわく私が行っているのは「한자어」⇒「漢字語」らしい。他のちがっている名詞や名称をみても自分が使っているものは「漢字」の影響下で直訳とも言えるものが多かった。また、日本語との影響も受けている。中国の古い発音、文字体系の研究には日本語の漢字と訓読みが役に立つとよく言われるが、韓国語の変化過程の研究では「朝鮮語」が一役買うのではないのでしょうか。

先生が中国語の意味を聞くのに、日本語のイメージを言ったり私が使う朝鮮語を聞くのに「韓国語」を意識して答えたり、頭の中の「言語」が入れ変わりが激しかった。⇒この現象の原理があると思うが名称が？

外国語学部朝鮮語専攻 2年 岡田 真悠子

数字や記号の読み方、計算の説明方法などを学んだ。ボランティアで使うような表現は、普通の授業ではなかなか触れる機会がないので今回は学べてよかった。数字の読み方など基礎的なこともじっくり練習する機会がなかったので、よい復習になった。実際に黒板を使って韓国語で算数の授業を行なったりもした。緊張したが、最終日にはかなりスムーズに授業が行なえるようになった。とてもよい経験が出来たと思う。

講義名:学習支援ボランティアのための外国語(英語)

講師：アリソン・メアリー・スチュワート

外国語学部ドイツ語専攻 1年 小山 進

1st day Addition, subtraction, multiplication, division

2nd day Fractions, decimals

3rd day Distance, shapes

4th day Graphs

I really enjoyed this class. I had much trouble to explain even so easy problem at first, but I could learned many math vocabulary and expression, and that made it easier to show how to solve. I'd like to make good use of this experience someday.

外国語学部トルコ語専攻 1年 萩原 絵理香

算数(小4)について英語で問題を翻訳し、解き方を教える練習をした。2人組で教えあう練習をしたので、発言する機会が多く、自分の説明だけでなく相手の説明のしかたも聞くことができ、勉強になった。図形の名称や分度器などの器具、分母や分子といった独特の言い回しを知ることができた。普段の学習からは得にくい分野であり、今後の活動に大いに役立つと感じた。

外国語学部イタリア語専攻 1年 加藤 芽実

4日間の講義で小学3・4年生の算数を説明する基本的な英語表現を教わった。語彙は普段使わないものばかりなので難しいとは思っていたが、日本語ではやさしく感じられる算数の問題をわかりやすく、簡単な英語で訳すという作業が大変だった。また計算のしかたも日本とイギリスでは少し違いがあった。自分の英語に自信がなく、口ごもってしまうこともあったが、子どもを不安にさせないよう拙くても自信をもって根気強く教えなくてはいけないということをもつて身をもってした。また算数用語だけでなく日常表現も少し学べたのでとても充実したものだった。これを生かせる機会を自分で見つけていきたい。

外国語学部ドイツ語専攻 1年 内山 ゆみ

生徒の立場にたってプロセスを一つずつ説明したほう

が、子どもたちが計算についていきやすい。四則計算だけでも特殊な表現を使うことが結構あるので、それを使えるように訓練しないと教えられない。

「算数」といっても問題文を読み取らないと解けないので日本語が分からないととても難しい。図を使えば多少は伝えられるけど…。

計算だけで解けてしまうものは比較的説明しやすいが、もしどうしてそうなるのか、といったような質問をされたとしたら、それに答えるのは難しい。

外国語学部英語専攻 1年 安藤 さゆり

普段の英会話学習では学ぶことのない算数の用語を学ぶことができました。図形の名前は特に知らないものが多くてとまどいましたが、ギリシャ起源の単語は少し神秘的に感じました。相手が小学生なので図や絵を使って説明するのも大事だと思いました。

算数以外にも理科、社会、国語などもありますが特に国語、社会は難しそうなのでその教科ならではの単語の勉強もしたいです。

外国語学部英語専攻 1年 渡辺 美香

実際にペアや先生の前で教科書を訳したり、解き方を説明する作業を通していかにそれが難しいことであるか、ということがわかりました。簡単なことでも、それを英語でわかりやすく伝えるのには本当に苦労した。

しかし、今回は少人数で即座に質問したり先生に適切な表現を教えてもらうことができ、また、今まで知らなかった単語や表現をたくさん学ぶことができたので、非常に勉強になったし、すこしでも身につけることができているのではないかと思います。

「使える」表現をたくさん知ることができてよかった。

講義名:学習支援ボランティアのための外国語(カンボジア語)

講師：岡田ウンサー・マロム

外国語学部カンボジア語専攻 1年 丸田 友紀

算数に使う用語はすべてはじめての単語だったので、

カンボジア語だけの授業では身振り手振りを交えてもらえないとなかなか理解できなかったです。生活言語と学習言語の違いを身をもって感じました。

1日目は90分の授業が本当に疲れたけれど不思議と2日目以降はなれてきて、自分から進んで先生の言っていることを汲み取ろうとすることができました。子どもの場合は特に適応が早いと思いますが、慣れるまでの時間がつらいのかなと思いました。

外国語学部カンボジア語専攻 1年 坂本 悠

小学校3、4年生の算数のやり方を学んだが、日本とやり方が違い理解するのが難しかった。言葉の壁は大きいものなんだと実感。計算すること自体には日本のやり方でよいと思うが、図形のような問題を解くときは一筋縄ではいかない。単語もしらなければ何を求めていかもわからない。こういう時は図形をみてわかる範囲でどうかしなければいけないと思った。

自分は今、もう大学生で少しは言葉がわかるので楽しいと思うがもし自分がJSL児童のような立場だったらほとんど理解できなくて頭を痛めると思う。

円の名前等固有名詞はやはりおぼえるのが大変だと思った。(計算はできても)

外国語学部カンボジア語専攻 1年 野 衣久美

足し算、引き算、やっているときはすごく簡単なはずなのに、言葉がよく分からないと、とても難しく感じた。分かったような、分からないような…とてももどかしく、在日外国人の子どもたちは大変な思いをしているのだなあと思えた。(そして、教えるということも、すごく大変なことなのだ、と知ることができました。)

引き算の繰り下げのやり方、割り算の式の書き方などは日本と違苦勞したが理解できた時は嬉しかったし、日本には無い単位など、とても興味深かった。最初は訳がわからなかったこともマロム先生のたとえの説明がとても分かりやすく、理解することができました。そのときの達成感がとても新鮮でした。

外国語学部カンボジア語専攻 1年 重広 里織

日本語でなら何の問題もない小学生で習う計算も、なれない言葉ややり方だとこんなにも戸惑い大変だとは思わなかった。計算の仕方をすでに知っている私でさえこんなに苦勞するのに、新しく習う児童としてはどれだけのものだろう、わかるわけないということが身をもって体験できて本当に意義深かったと思う。ただ、日を重ねることで数学などは繰り返し使う記号がでてきたり、図などだと視覚の効果などもあって理解できるとうれしくてやる気になることも実感した。「繰り返し勉強すること」「一生懸命理解しよう」と集中することが大切だと思った。もし私が児童に教えることになったらその2つをやりやすくさせるような授業をしなくてはと思った。

外国語学部カンボジア語専攻 1年 小谷 健太

គណិតវិជ្ជាអត់ពិបាកប៉ុន្តែនិយាយភាសាខ្មែរ
ជាមួយលោកគ្រូមារម្យមានជាខ្ញុំនឹងរៀនភាសា
ខ្មែរ
ឱ្យរៀនខ្ញុំមិនសូវស្តាប់ភាសាខ្មែរអរគុណច្រើន

今回習った算数は難しくありませんでした。しかしマロム先生と話してもっとカンボジア語を勉強しようと思いました。今はまだカンボジア語があまり聞き取れません。ありがとうございます。

講義名: 学習支援ボランティアのための外国語(英語)

講師: 宮原 万寿子

外国語学部ロシア語専攻 1年 松井 真雪

私は日本語で習った数学も苦手だったので、英語で教える数学はさらに難しかったです。しかし、相手にいかに簡潔に、わかりやすく伝えるのか、という点に意識し、伝えようとする術を学べた気がします。また同じ問題を説明する場合も人それぞれに違う説明の仕方があって、非常に興味深かったです。この4年間で学んだことは必ず将来何かの役に立つと思います。Thank you very much

外国語学部ロシア語専攻 1年 大石 寛子

英語で算数を教えるというのは初めての経験だったので、とても興味深かったです。高校のときにホームステイをした際、ニュージーランド人の小学校5年生のホストブラザーに、算数について質問されたことがあったのですが、日本語では説明できても、違う言語で説明しようとすると、中・高と数年間学んできた英語でも知らない用語ばかりで困ったことがありました。

グラフや図のつくり方や概念も、教えるときのために、日本語自体でもどのように言葉で表現するのかを学んでおく必要があるのと強く感じました。今回、算数の用語や特有の形式、質問や説明の仕方を学んだことは、今後英語で子どもたちに教えるだけでなく、自分自身が生きていくうえで必要な知識を得て、概念自体についても考えを深めることができたのでよかったです。

研究生 モンコンチャイ・アツカラチャイ

単語や言い回しだけでなく、それぞれの項目の簡単な説明方法も教えてくださって、とてもよかったと思います。やはり、質問は難しくありませんが、どのように簡単に説明するのかは大変難しいです。でも先生の指導方法がとてもわかりやすいし、今の自分は少し英語で算数を説明することができるようになったと感じました。

外国語学部フィリピン語専攻 1年 濱嶋 奈保子

- ・ 教科特有の単語は覚える EX 図形の名前、式の読み方など
- ・ 子どもが相手
⇒授業時間中ただ説明してばかりではダメ
 - － activity でならった事を復習
 - － ice break
- ・ 言葉は出来るかぎり簡単に
- ・ 用語はその言語でも説明できるように

外国語学部日本語専攻 1年 草川 鮎子

私は小学生の頃、算数が苦手だったため、何か新しい問題を教わるときにはいつも細かい手順、考え方の説明が

ほしいと思っていた。なので、英語で小学生に説明するとなると、どうしても細かく説明しようとしてしまい文が複雑になったり長くなってしまったりした。シンプルに分かりやすく説明することはとても難しいと感じた。

授業前やあとのちょっとしたゲームのようなものは、授業に入る前のウォーミングアップにもなるし、授業に対するモチベーションも上がる。子どもには絶対こういったものをやったほうがすんなりと授業内容に入れると思う。ぜひ参考にしたい。

(4) アンケート集計結果

1. 今回のプログラムは期待通りでしたか。 (計 36 名)

- a. 期待通りだった……………27 人
- b. 期待とは少し違っていた →2 へ……………6 人
- c. 期待とはかなり違っていた →2 へ……………3 人

2.1 (b.c.)の主な理由は何ですか。

(b を選択した理由)+評価

- ・ 常に講義を聞き、ノートを取るような形式の授業をやるのではと考えていましたが、実際は、学生たちが授業内で動いたり、喋ったりで、参加型のものだったので、少し驚きました。けれども、充実した時間を過ごせたので良かったです。
- ・ 期待していたよりもはるかに充実した講座だった。
- ・ 良い意味で、思っていたものとは違いました。色々な先生方の話を聞いて、自分の興味を広げることができました。
- ・ 期待していたよりも、かなり良かった！
- ・ もっと講義中心の講座だと思っていたから。ですが、結果的に参加型の授業もいくつかあったことは、私にとってとても良かった。
- ・ 思っていたよりもはるかに充実したプログラムだった。参加してよかったと心から思う。

(c を選択した理由)+評価

- ・ 今まで大学で多文化社会に関する講義はたくさん受けており、今回も似たような内容なのだろうと思っていた。しかし、どの講義も熱心にやっていただき、期待以上の感動のある講義だった。

- ・ 期待以上だった。意欲をかき立てられるものばかりだった。
- ・ 予期以上に充実していたので。

3. 今回のプログラムの内容は、よく理解できましたか。

- a. だいたい理解できた。…………… 34人
- b. 半分以上は理解できた。……………2人
- c. あまり理解できなかった。……………0人

4. プログラムの内容で、「むずかしかったところ」「わかりにくかったところ」は何ですか。

- ・ 日本語の文法などは、普段意識したことがなかったので、教える立場になると難しいと思った。
- ・ 特にないが、日本語の文法の授業は、以前やったことがない人にとっては、難しかったかもしれない。
- ・ 「子どものための日本語指導」で日本語教育文法の説明が早すぎるように感じた。もっとじっくり話を聞きたかった。
- ・ JSL 児童・生徒の戸籍やそれにまつわる、法改正などの歴史のお話。
- ・ あえて言うならば、「国際化の進行と日本社会」のレジュメが読みにくく、講義の内容も少し分かりにくかった。
- ・ 第二言語習得論などは、実際に目に見えて分かることではないので、難しかった。
- ・ 講師の方の話を聞くだけの授業。アクティビティで実感が伴った授業と比べて、吸収しにくかった。
- ・ 具体的にどのような人材が求められているのか？
／JSL 児童・生徒
- ・ ボランティアのための外国語。
- ・ 外国語の授業で、まだ1年生なので先生が言っていることが、理解しにくいことがあった。
- ・ 留学生センターの先生方々の用語中、専門的知識語が、ちょっと分からなかったです。英語の知識が足りなかったもので、カタカナ名称が出た時、他人より難しいと感じられたと思います。
- ・ ボランティアのための外国語講座が1年生にとっては少し難しかった。

- ・ やはり専門的用語が多く授業の中で出てくると、難しいな…と感じました。勉強不足だけなんですけど…。
- ・ 第二言語習得の講義は、専門用語が多くて、理解しにくいところもあった。
- ・ 田村先生のケース・スタディーがむずかしかったが、考えることができてよかった。
- ・ わかりにくかったことは全くなかった。むしろ、レジュメ以上の説明や講師の方の解説が充実しており、とても理解し易かった。ただし、時間内で扱うには、少し内容が多すぎるのでは、と感じたことはあった。
- ・ JSL 児童・生徒について、教師や学校側の問題については、良く分かったのですが、実際の教室内で、他の生徒達がどのように振舞うことが、JSL 児童たちを傷つけたり、悪影響を及ぼしているかについて、もう少し詳しく説明して欲しかったです。
- ・ もちろん内容的には高度なこともあったが、参考文献もあり、先生方も質問を受けつけてくださるとおっしゃっていたので、特に問題はないです。
- ・ 韓国語、掛け算と割り算を説明すること。
- ・ 特にないが、1コマの時間に余裕がなく、説明が省かれたものがあったのが、少し残念でした。
- ・ 日本語指導に関して、全く知らなかったのが、難しいと感じた。
- ・ スペイン語での算数が難しかった！！しかし、先生がパワーポイントを使ったり、とくに難しいところは日本語で説明してくれて、日本語がわからないJSLの子どもたちも私達が工夫して教えたり、母語で補助することで、わかりやすくなるのだなと実感した。
- ・ 特になかった。
- ・ 1コマのだけの授業の場合、内容が多すぎたり、ペースが速すぎたりして、わかりにくかったものがいくつかあった。
- ・ 特にありません。とてもわかりやすかったです。
- ・ 語学の授業は、1年生にとっては少し難しい部分があったかと思います。
- ・ 日本語文法の授業。普段当たり前で話している日本語が、第二言語として捉えた時に、こんなに難し

いとは思わなかった。文法面での説明も重要だが、挨拶や買い物など、日常生活に即して教える方が、わかりやすいし、楽しいと思う。(旅行用の会話集などを教材に使ってみては?)

- ・ 日本語文法、句型。教えようとする大変難しい。いかに自分が入り組んだ言語を使っているかを知りたかった。

5. プログラムの中で、特に印象に残ったことは何ですか。

- ・ 各々の先生の授業に個性があること。
- ・ 田村さんの授業。聴くスキルの必要性。河路先生のお話。
- ・ 田村さんのお話。
- ・ ボランティアのための外国語の授業。自分の専攻語を生かせる授業だったので、とてもおもしろかった。
- ・ 最終日の講義と田村先生の講義と林先生の講義。
- ・ ボランティアのための外国語は、普通の授業ではやらないことだし、実際のボランティアでも使えそうな題材だったので、とてもためになった。しかも講座は全てポルトガル語だったので、実際に日本語が分からない児童・生徒の気持ちが少し分かって、その経験も良かった。
- ・ 田村先生のグループワークでケース 4 について話し合ったこと。
- ・ 全てのグループアクティビティ。語学の授業。田村先生がおっしゃったこと:何か行動を起こそうという意識をもったまま終わるのではなく、そこから一歩ふみだすことが大切!
- ・ グループディスカッションを楽しんで出来たこと。たくさんの人とふれ合えたこと(いろいろな先生方の話を聞いたこと。)
- ・ 毎日先生が変わり、勉強する内容も様々だった点が、とても良かった。
- ・ 現場で活躍している先生達の話を開けたこと。
- ・ 学生さんは、言語が分からなくても「全身アンテナ」を張り、一生懸命にやっている。／「信頼できる先生」は子供の強い心の支えとなる。／言語習得は、話すだけではなく「居場所」の確保が大事である。／「聴く・聞く」のスキルは表面ではなく、いかに「用心」して対処するかである。／同じ関心のある皆と話をはずませ、夢や思いを

語り合えてよかった。

- ・ 対人コミュニケーションのグループディスカッションでは、聴くこと、話すことの難しさを感じたと共に、この講座に参加した人たちの思いをきくことができ、とても刺激になった。
- ・ フィールドワークやディスカッションを通して、多くの人の様々な考えを知ることができたこと。
- ・ ディスカッションなどで、他の人と意見を交換できたこと。
- ・ 先生方の余談も含めて、世界中での体験のお話が聞けたこと。
- ・ 田村太郎先生の授業と、外国語による算数の授業です。
- ・ 田村先生の講義での富の不均衡の現状がショックでした。人々が国境を渡るには、理由があるということを当然のことながら再認識しました。
- ・ フランス語での算数。割り算の仕方、記号の使い方などの違いを、なんとか伝える努力ができたこと。JSL 児童・生徒を含めて、みんなに働きかけること。
- ・ 日本の社会、特に教育界が急速に国際していること。更に、普段何気なく使っている日本語がいかに複雑であるかを教わったこと。
- ・ 各言語の授業の中で、先生がその国の小学校の様子について、とても細かく説明して下さったことです。日本と違うところだけでなく、日本とこんな所が似ているんだなという驚きも沢山ありました。
- ・ ボランティアをする側がステレオタイプを持つため、それが子供たちの負担となっている場合があるということ。
- ・ 5 日目の 1・2 限目のディスカッション
- ・ ディスカッションやケース・スタディをしたこと。
- ・ 実際の現場で起こっている具体例。
- ・ 田村先生の「ボランティアのための三本柱」を軸にディスカッションしたこと。／ボランティアのための外国語の授業。特に専門語の多い数学は、単語一つ一つも大切な勉強になりました。
- ・ 最後の授業で河路先生や最初の授業で田村先生が言っていたことで、「～人であることの誇り」を要求することが、必ずしも全ての人にとって、プラスにはならないというお話が心に残りました。今まで自分は誇りというもの大事かなあと思っていたけれど、見方が変わりました。

- ・ 田村先生の授業でやったグループワーク。子どもにどうやったら、違いを気にせず周りの子を受け入れていくか、ということを知りやすく伝えられるのか、難しかったですが、みなさんの意見をききながら、考えることでとても勉強になりました。
- ・ 実際に教える際の方法や学習日本語といった様な、この講座を受けないとなかなか手に入らない情報がよかったですと思う。
- ・ 田村太郎さんの授業でいったケース・スタディ。／野本京子さんの在日コリアンの授業。／ボランティアのための外国語(スペイン語)
- ・ みんな意見交換場、という印象に残っています。
- ・ 語学の授業。今まで、算数を外国語で説明しようと思ったが、単語を習って試みたことがなかったので、とても楽しい印象深いものになりました。
- ・ 第二言語としての日本語の難しさ。／田村先生のお話。「ボランティアの3つの柱」

課題	→	理想像
	↑	具体的な活動
- ・ 日本で JSL 児童・生徒に対する教育支援ボランティア以外でも、海外でボランティアをしたり、老人ホームでボランティアをする際にも、この 3 つの柱を考えることは大事だと思う。／まとめでの河路先生のお話。「～人であることの誇り」を問うことの是非について。当初私は、「日本にきた外国人(JSL 児童・生徒、留学生、etc)は「～人である」ことに誇りを持っている、または持つべきであると考えていた。しかし、世界規模で人々の移動が起きている現代において、それを問うことは不適切、あるいは無意味になりうると感じた。「～人」としてではなく、一人の人間として他者と向き合い、互いの違いを認め、尊重し合うことが重要なのだとわかった。
- ・ ここがスタートだと多くの先生がおっしゃっていたこと。実際に結びつけなければと思った。

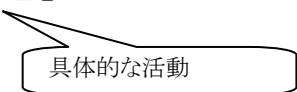
6. 今回のプログラムの前後で、ボランティアに対する意識や心がまえが変わりましたか。

- a. 変わった → 7 へ……………36 人
- b. 変わらなかった → 8 へ……………0 人

7. (6 で a と答えた人へ) どんどころがどのように変わりましたか。

- ・ 日本語を効果的に教える方法がわかったこと。
- ・ ボランティアに興味はあったが、ボランティアという言葉に少し抵抗があった。まるで自分がいい子だとも言っているようで。でも今回の授業を受けることで、純粋にボランティアでやっていることに興味を持てたので、外国人児童に教えてみたいと思った。
- ・ 田崎さんの「理想と課題」を考えて作らないと続かない、との話を聞き、内容を吟味する必要があることを感じた。
- ・ ボランティアは、団体に所属したりして「ボランティアをやっています！」というような人たちだけがやるものではないと思った。専門家だけでなく、地域社会に生きる人全員ができることだと思った。
- ・ 今まで、やりたいとは思っていましたが、なんとなく敷居が高くて、一歩踏み出せずにいましたが、今回の講義でボランティアへの関心・意欲は更に高まり、親近感も湧いてきて、何か学んだことをアウトプットしていきたいと思います。
- ・ JSL 児童・生徒のボランティアの際、JSL 児童生徒の抱えている問題をしっかり理解して、固定観念を捨て、ボランティアする側が、しっかりと責任を持つてのぞまないといけなと感じるようになった。
- ・ ボランティアを必要とする人がいて、自分にもできることがある、と知ったこと。そして実際、何かやろう！という気持ちになれたこと。(今までは、ボランティアは結局、自己満足じゃないか、と思っていたので「……」)
- ・ ボランティアの重要性(必要性)がかなり大きいとわかったし、私たちが何かやらなければならないというふうになった。
- ・ 以前も、少なからずボランティアには興味があり、実際に小学校での活動もやりましたが、今の自分にできることがあれば、なるべくそれにもっともっとチャレンジしたいと思うようになりました。
- ・ JSL 児童・生徒との関わり方や、周りの日本人の生徒との関わり方に対する心構え。

- その子の母語がきちんとできないとやれないものだと思っていたが、そうでもないことがわかった。
- ボランティアとして熱中し、落ちやすい所が見えて、これからもっと気を配らなくてはならないと思いました。／「一人の日本語教師」としてのぞむボランティアは、知識もスキルも必要で、何よりも「人間性」が問われると思いました。
- 今までボランティアに興味はあったけれど、なぜそのボランティアが必要なのかなどの基本的なことが分かっていなかったので、今回の講座でそういうことを学んで、ぜひボランティアを通して、学習支援をしたいと思った。
- 今まで施設を訪問したりする際にも、準備はしていたものの、あまり相手の気持ちを、相手の視点に立って考えるということができていなかったように思う。それが、今回、プログラムを受けて、相手の視点に立って考えることがいかに大切かがわかり、実践しようと思うようになった。
- ボランティア支援として実際どのように活動するか、よく分かっていなかったが、少しそれが分かった。それと同時に、状況に柔軟に対応し、色々な工夫をする必要がある、という難しさも分かった。
- あまり気張らずに取り組めばよいということ。しかし、事前の準備は必要。
- 今まででは、どんなふうに教えたらいいのか、どんなことを教えたらいいのか、よくわからない部分が多いまま、学習支援活動に加わってしまいました。でも、今回のプログラムで、本当に多くのことを学ぶことができ、今後の活動に活かせるな、と思ったことがたくさんあります。
- 小学生に日本語を教える時は、その児童だけ焦点をあてるのではなく、クラスの友達をまきこんで、学習に巻き込んでいくという心構えが芽生えました。
- 課題 → 理想



この図のように意識して行ったことはなかった。ただ

- 活動していた。今は、理想を持ち、それを一緒に活動する仲間と共有したい。
- ボランティアで重視することの中心が、自己実現・事業の成功から、お世話する人(この場合 JSL 児童・生徒)に変わった。お世話する人の立場・心理を理解し、それを活動の中心に据えることの大切さを実感した。
- ボランティアという“補助”というイメージが強かったのですが、特に外国語が話せるという外語大生に出来ることは思っている以上に多いのだということが分かりました。
- 今までではボランティアというと、「弱い立場の人を助ける」というようなイメージがあったけれど、ボランティアを通して、自分自身も成長できるものだと感じるようになった。
- 理論的な関心があって参加したが、実践に生かしたいと感じ、ボランティアに参加したいと思った。
- ボランティアとは、課題と理想の姿をつなぐための一時的な活動である。一時的であるゆえ、「無報酬」。ボランティアの支援がなくても理想の姿を維持できるよう努めなければならない。
- 自分の知識や力を生かせる場は必ずあるのだから、積極的に行動しようと思った。
- すぐ周りを見れば、自分にできることがあると感じた。できることをやろうと思った。
- もともと興味があったボランティアに踏み出せずにいたが、5 日間で学んだことをもとに挑戦してみたい！と思えるようになった。
- 今まで、いきなり外国人児童・生徒に接したり、国際理解教育に参加したりすることに対して、「自分にできるのかな？」と引っ込み思案でしたが、「具体的に何か行動したい！」と思うようになりました。コミュニティ支援室の活動をもっと詳しく知るために、足を運んでみたいです。
- 学習支援などのボランティアをするためには、いっぱい自分で知識を取り入れて準備しないといけないのかと考えていて、ちょっと身構えてしまっていたけれど、実践から学ぶこともあるのだと思いました。

- ・今回実際の現場で行われていることやその様子を具体的な教材・VTR・グループワーク・ゲームなどを通して体験することができたので、ボランティア活動が自分にとってより身近に感じられるようになりました。私でも、何かできそう、と思えたことも良かったです。
- ・今までボランティアというものを漠然と「何かを行うこと」としかとらえていなかったが、実際には、課題や目標をふまえてはならないという基本的なことを、まずは理解した。他にも外国から来た人たちへの接し方も、例えば「～人」という概念についてなど、今までの考え方とは全く異なる見方を学び、意識が変わった面が多かった。
- ・支援させてもらう児童達・生徒達の背景に対する理解が深まった。又、彼らに対してどのように接し、どのような方向にもっていったらいいかを知ることができた。(来た児童・生徒にその国の“誇り”をもたせることが、本当に必要なことなのかどうか? etc)
- ・国際理解教育という活動に参加しているのですが、いつもただ自分の国の文化の紹介だけ考えていました。JSL 児童・生徒の問題も全然知らなかったです。
- ・今まで、どのように接すればいいのか、教えればいいのか、伝えればいいのか、ということが分からず、困ったり、悩んだりしていましたが、こうすればいいのだ、あの時の振る舞いはあれで良かったんだなど、わかるようになりました。
- ・今まで、ボランティアをしようとする際に、具体的な活動ばかり目がいって、そもそも(支援?)を必要とする根本の課題や、活動を通して目指す理想について、考えたことがなかったが、今回の講座を通してそれを考えることの大切さを知った。
- ・日本語のとらえ方(日常&学習など)

8. (6でbと答えた人へ)それは、なぜですか。

(回答なし)

9. 外国人児童・生徒への学習支援ボランティアに関して、今後、もっと知りたいこと、聞きたいことは何ですか。

- ・生徒には小学校で教えるのですか? /どのくらいの間一人の生徒を担当するのですか? 実際に行って体験したいです。
- ・児童(JSL もそうでない子も)の異文化受容・適応について。
- ・実際にボランティアをしたことのある学生さんに、JSL 児童・生徒にどのように接したらいいのか、お話しして欲しいと思いました。
- ・知りたいこと聞きたいことは今はないが、支援するにあたっては、しっかりとポルトガル語及び支援のための日本語をもっと学びたいし、これからぶつかる疑問や壁は今回の講座で学んだことを思い出して参考にしながら乗り越えていきたい。
- ・どんな人達がどこで、どんな風に行っているのか。(実際に自分も関りたいと思っているので) / 詳しい支援内容(例えば、教材の教え方など)
- ・支援室から届くメール(ボランティアのお願い)を、これからよく読んで、参加できそうなものには参加しようと思うので、できるだけその主旨とボランティア内容をわかりやすくしてほしいと思う。
- ・私達、外大生ができることは? / 私達にできる事でボランティアの需要があれば、やってみたい。
- ・今回シラバスには書いてあって実際紹介していただけなかった「絵を用いた日本語指導」について知りたい。
- ・事前にどれくらい準備などをするのか知りたい。
- ・もっと外国語でどう説明するのか、表現をたくさん知りたい。
- ・実際にボランティア活動をした学生の体験談。
- ・教科ごとの教授法・日本語指導法を、もう少し実践的に知りたいです。
- ・第一言語が定着していない児童に日本語指導するとき、第一言語を喪失させないためにはどうすればいいのか。日本語だけ教えていけば、よいのか。
- ・実際に小学校・中学校で取り出しを行っている先生に話してもらおう。

- ・ 日本政府(特に文科省)は JSL 児童・生徒、日本語教育に関してどんな取り組みを行っているのか。
- ・ 中東、特にアラブ系の子供達は、日本でどんな暮らしをしているのか。
- ・ 海外からの日本の政策に対する声には、どのようなものがあるのか。
- ・ 実践してみたいです。
- ・ JSL 児童・生徒の母文化・母語やアイデンティティの問題についてもっと知りたいです。「～人として」というのが、子供たちにとって負担になることも知って、それにどう対応していくべきなのかいろんな意見をきいてみたいと思いました。
- ・ 算数だけでなく、他の教科の教え方も教わるのができたらいいなと思います。
- ・ スペイン語での指導方法をもっと学びたい。／児童心理についてもっと知りたい。
- ・ 今回算数だったので、理科や社会など彼らがつまづきやすい分野の単語など。
- ・ JSL 児童(小学生)と JSL 生徒(中学生)の求める支援の内容の違い。
- ・ 事前学習(国際理解など)の進め方、分野(言葉、宗教、その他の文化)。
→重要であるとおっしゃっていたので。

10. 今回の「2006 年度夏季多言語多文化共生学講座—外国人児童・生徒の学習支援ボランティア入門—」についての意見・感想をお書きください。

- ・ 入門というよりも、今すぐに活動に移すことができるスキルを身につけることができた。これを活動に移すことで、本当にこの経験を生かすことができるだろう。
- ・ とても充実した 5 日間でした。ここで終わりにしないで、何か具体的な活動に取り組めたらいいと思っています。またこのような授業があれば、是非参加したいです。
- ・ 5 日間という短い期間ではあったが、多くのことを学べた。ボランティアに対する意識も高まった。
- ・ とても有意義で、ボランティアに少しでも興味のある人、外国人児童・生徒に関心のある人にとっては、最高だと

思います。これからも、このような講義があればと思います。

- ・ ボランティアへの意識や心構えがとても変わったし、多言語多文化共生ということについても、考えさせられることが多くて、すごくいい経験だった。こうした学習講座はもっと多くの人に知ってもらいたいと思った。
- ・ 自分の考えに幅がでる、とても良い機会だと思います。普段、自分が接することのできない方々の話(先生はもちろん、他語科の人たちの話)を聞いて、良かった。
- ・ かなり良かったです。大学生活の方向が少し見えた気がします。また、こういうものをやってほしいです。
- ・ とても自分のためになった。なので、今後また、このような機会を設けていただければ、ぜひ、また参加したいです。
- ・ ボランティアのための外国語は、開設する言語は限定しても仕方がないと思うが、その中でなら必ず第一希望の言語を受けられるようにすべきだと思う。実際に今、支援している子供の言語での算数の言い方を知る必要があるのに、全く関係のない言語になってしまって、残念だった。楽しく学習できたが、やはり、最も必要性のある言語で学べる方がいいと思う。
- ・ あまり言語やバイリンガルには興味がなかったけれど、今回の講座を受けて面白かった。今まで、日本語教師などの職業になりたいかと思ったことがなかったけれど、興味を持った。視野が広がった。
- ・ 出られなかった初日、本当に惜しいと思います。このような講座を増やし続けてほしいです。
- ・ 今まで知らなかったことをいろいろ知ることができ、これからやってみたいと思えることも見つかったので、本当に出てよかったです。
- ・ 5 日間はあっという間でしたが、とても楽しく勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ どの科目も JSL 児童・生徒をピンポイントにした授業ばかりだったけれど、その JSL 児童・生徒の持つ背景や事情は様々で、それに対応していく柔軟性が必要になるなあと感じました。5 日間中身の濃い授業を受けることができたのをとても嬉しく思います。ぜひ実践に生かしたいです。

- 本当に有意義な講座だったと思います。聞くだけの授業ではなく、アクティビティも多く含まれていて、楽しかったところもたくさんありました。このようなことは、普段の授業では、あまり学べないことなので、これからもこのような講座を開いてほしいと思います。
- 学部の授業では、拝見することのない先生方にお越しいただき、貴重なお話をしてくださって、本当に参加してよかったと思いました。日本にいる外国籍の人に対する意識が変わったと思います。
- 参加型(ディスカッション)でとてもおもしろかった。
- 外大ならではの、非常に画期的・有意義な講座であった。「国際社会で活躍する」といのは、単に海外で何かをすることだけではなく、ここ日本で国境・文化・言語を越えた活動をするのも意味しているのだと、強く感じた。なぜなら、ここ日本もとりもなおさず、「国際社会の一部」だからである。この講座は、日本社会、日本語、外国人生徒など、様々なものを多角的にとらえる大きなきっかけとなった。参加して本当に良かった。お世話をして下さった先生方、スタッフの皆様へ心から感謝したい。
- 私は元々日本語教育に興味があり、特に子供に教えたいと思っていたのですが、日本にいる外国人児童・生徒への日本語教育については、あまり考えたことがありませんでした。今回の講座で自分の専攻語についての興味もさらに増え、それに外国にばかり目を向けていた自分に気付きました。これからの日本では、外国人児童・生徒は増えていくと思いますし、自分にできることを実際にやってみようという気持ちになりました。
- 多言語多文化社会についても、学習支援についても、たくさんの知識を得られたし、いろいろな人の意見を聞くことで、自分の中でも意識を高めることができたと思うので、良かったです。
- 大変充実した 5 日間でした。視野が広がったこと、多くの人と知り合えたことが、良かったです。
- 大阪外語大にボランティア論という授業があるのをうらやましく思った。とても楽しい講座だった。一緒に学ぶ仲間がいるといのは、何て素晴らしいことなのだろう。
- 今回の講座をとって良かったです。ぜひまた開いてほしいと思います。これからどんどん学んだことを生かしていきたいです。
- 授業の内容は非常に興味深かった。また、学年をこえたメンバーでディスカッションができた点も良かったと思った。
- 非常にためになったと思う。今回で打ち切りということだが、ぜひまた開いてほしい。この 5 日間で学んだことを、ぜひ次のステップへ生かしたいと思った。
- 一つ一つの授業に「ハッ」とさせられることが多くありました。グループワークが多かったことで、いろんな人と語り合えたことも良かったです。留日センターにいる留学生と外国人児童・生徒の学習支援についても考えることができれば良かったなと思います。
- とても濃い 5 日間でした。この 5 日間で一緒に勉強した仲間ともこれから多言語多文化社会の問題を考えていきたいです。1コマ 60 分といのは短いですが、入門講座として、浅くいろいろ知るのは、ちょうどいいと思います。
- どの授業もとても興味深いものばかりで、出席できて本当にうれしかったです。この講座は今年で終わりとのことですが、また形は違っても、こういった講座をぜひ開いて欲しいです。お願いします！！
- この講座に出ないと得られない知識も多く、とても有意義だった。今後もこのような場があったら参加したいと思うし、ここで得たものを生かしていききたいと思う。
- すごく内容の濃い 1 週間だった。本当に参加できて良かったです。ありがとうございます。この経験を“知識”で終わらせないように、“行動”を起こしていきたいです！！
- とても素晴らしいプログラムです。今年で終わると聞いて、残念に思うのですが、毎年やり続けられればいいなと思いました。
- 語学の授業をレベル別にする。授業によっては、1 年生より 2 年生以上を中心とした方がいいものもあったかな、と思います。でも、話を聞いていると、動機はそれぞれでも、各自得るものはあったようなので、トータルでは良かったと思います！！ありがとうございます。
- とても勉強になった。私はもともと、海外でのボランティア活動に興味があったが、外大に入って、「多言語多文

化社会論入門」を受講して、日本での多言語・多文化化の状況を知り、さらにこの講座で実際に JSL 児童・生徒に対する日本語指導を行っている方の講義を受けて、日本でも私達にできる活動があること、そして私達の支援を必要としている人がいるのだと強く感じた。この講座をきっかけにして、私も何らかの形でボランティアに関わっていきたい。ありがとうございました。

- ・ 語学指導のハナン先生の熱意がプリントの厚みに、滲み出ている、自分達がしっかりやらねばと思った。そして、すべての先生がそれに劣らず「伝えねば」という強い意識を滲ませる授業をしていらっしやっただけで、とても楽しい(interesting)1 週間で過ごすことができた。

2-2. スタディ・ツアー「多文化のまち一大久保・百人町を歩く」

文責:長田 広介(運営委員)

日時:2006 年 4 月 22 日(土)15 時 30 分~20 時

場所:新宿区大久保・百人町

講師:山本重幸氏(共住懇)

本企画は、私たちの身近で進みつつある多言語・多文化化を実体験するスタディ・ツアーである。ツアーの舞台は新宿区大久保・百人町。アジアを中心とした 5000 人を超える外国籍住民が生活しており、まさに国内の、しかも私たちの足元で進みつつある多言語・多文化化を実感できる地域である。講師を務めていただくのは、「共住懇」の代表を務める山本重幸氏。「共住懇」は大久保・百人町を拠点に、グローバル化の中で変貌する地域社会(都市コミュニティ)の新しいあり方を追求している市民のボランティアグループである。

スタディ・ツアーには学生 16 名と教職員 5 名が参加し、講演とツアーの 2 部構成で行われた。第 1 部の講演では、山本重幸氏や他のメンバーの方から“多文化のまち”大久保・百人町の現状をお話いただき、そこで起きている様々な問題について理解を深めた。そして第 2 部では、講演で学習したことを踏まえ、実際に町を歩く。学生にとっては、講演で学んだことについて実際に町を歩いて実体験でき、私たちの身近で進みつつある多言語多文化化に

ついて意識を高める良い機会となったであろう。ツアー後の懇親会では、様々な国の食文化が融合しているマレーシア料理を食べ、学生、教職員、そして「共住懇」の方々と交流を深めることができた。

多文化コミュニティ教育支援室主催の新学期フェア「専攻語を活かしたボランティアをやってみませんか？」の一環として行われた本企画は、今後、支援室のメンバーとなって活躍してくれる学生を発掘すると共に、学生、教職員が一緒になって学習し、感じたこと、体験したことを共有できるという意味でも、意義深い企画である。

なお、以下は参加した学生の報告書である。多言語・多文化化を実体験した彼らの報告を、是非ご一読願いたい。

外国語学部フランス語専攻 3 年 三浦 圭織

1 年間で街はそんなに変わるのだろうか。2 年連続してこのスタディ・ツアーに参加したのは、単純に去年参加して街歩きが楽しかったからだけではない。韓流ブームが下火になってきた今、大久保の街はどうなっているのか。衰退しているのか、逆にさらに活気に満ちた街になっているのか、そもそもたったの 1 年間で街はそれほど変化するのだろうか。その答えを知るために、今回のスタディ・ツアーに参加した。

そこに住む人々が入れ替わっても、街の構造や雰囲気は変わらない、私はこのように考えていた。しかし、大久保の街は明らかに一年前とは変わっていた。

まず街の雰囲気だ。前回のツアーでは、大久保の特色である「多文化」の中でも韓国色だけが飛びぬけて目立っていた。韓国系の飲食店や韓国人経営のお店が多く立ち並び、すれ違う人々も韓国語を話す人達が多かった。しかし、今回は、より多国籍になっているように感じた。韓国以外のアジア諸国の飲食店が増え、街を歩いても韓国語以外の言葉を話す人達が多く見受けられたのである。逆に、韓国系列のお店は減ったようだ。といっても、(私の記憶によれば)そのお店はほとんどが韓流スターのプロモイドなどを売っていた、いわゆる日本の主婦層を対象にしたようなお店である。韓流ブームが落ち着いてきた昨今では、店舗数が減るのも当然かもしれない。

大久保の多国籍化に加えてもう一つ気づいた点は、異

なる宗教の共存である。世界の他のどの場所に、一つのビルにお寺とキリスト教が共存しているところがあるだろうか。今回のツアーでは訪れることができなかったが、イスラム教の礼拝所も近くにあるそうで、大久保では世界三大宗教がうまく共存しているといえる。これも多文化共生の一体系であろう。前回のツアーでは、宗教に関してあまり注意を払っていなかったのも、一年前と比べて変化があったのかはわからない。

大久保では人や店の移り変わりが激しく、新しくできた店舗が2、3ヶ月でたまたまれることも珍しくないそうだ。この短期間での変化の激しさを、外国籍の方も日本国籍の方も含めて大久保の住民はどう受け止めているのだろうか。その機会はあったのに、大久保住民の生の声を聞くことができなかったことは反省点である。

街は普遍的なものではなく、その時々々の住民によって日々変化するものであり、ましてや一年間という長期間においてはなおさらである。しかし、今回気づいた街の変化や異なる宗教の共存は、すべて多文化共生につながっており、大久保の多文化を受け入れる根本的な姿勢は変わっていないのではないだろうか。

外国語学部日本語専攻 1年 榎本 るい

私は、今回初めて大久保のような多文化の街に行ってみて色々なことを学んだ。大久保の第一印象は、「不思議な街」であった。というのも、国は日本のはずなのに、街のいたるところに韓国語やアラビア語などの異国の文字で書かれた看板があるのが目に入ったからである。まるで、日本ではないどこか他の国にいるような錯覚を覚えた。また、道を歩いている人も外国人が多かったので余計にそのような錯覚にとらわれた。しかし、街を長時間歩いていると不思議なことにそのような違和感を感じなくなっていた。ツアーの途中で入ったアラビア系の食料品店の店主は、相手がどこの国の人かに関わらず親切に話しかけてきてくれて、色々な話をしてくれた。また、韓国料理店では、韓国語だけでなく日本人の客も普通にきていて街に溶け込んでいた。最初は様々な国が入り混じったような街だと思ったけれど、大久保は様々な国があつてこそ一つの街なのだと思う。

一緒に大久保を訪れた韓国人が、大久保は本場の韓国料理が食べられるうえに、それ以外の韓国のお店も多いから、韓国に帰ってきたみたいで落ち着くと言っていた。きっと、韓国人だけでなくイスラム系やアジア系の日本在住の人々も、同じような感情を抱くのだろう。親や兄弟、親戚などと離れて日本で暮らしている外国人には、このような母国を思い出せる街の存在がとても大きいのだと思う。

このように、様々な国の人々がほとんど大きな仲違いもなく生活できているのは、今回のツアーで私達を案内して下さった「共住懇」の方々の活動のおかげだと思う。「共住懇」は、普段は接しづらい印象がある外国人と触れ合う場を提供したり、一緒に防災訓練をする機会を設けたりして、日本人と外国人が協力する姿勢を作り出して、地域の国際交流にとっても大きな役割を果たしている。

つい最近、日本人と結婚して中国からやってきた女性が日本語があまりうまくなかったために、地域の人々の輪に入れず、自分の子どもも友達に受け入れられていないのではないかと考えるようになり、他人の子どもを殺してしまうという事件が起こった。私は、もしこの地域にも大久保の「共住懇」のようなシステムがあれば、このような悲惨な事件は起こらなかったのではないかと思う。

私達は外国から来て日本に住んでいる人々を「外国人」という枠でくくらずに、同じ地域の住民として受け入れて、コミュニケーションをとり、共に協力して生活していくことでお互い心地良い暮らしをおくることができるだろう。

外国語学部日本語専攻 1年 崔 安鎮

今回の「新宿の現状について～大久保・百人町を中心に～」というプログラムに参加したのは河路先生の誘いからでした。私は日本の福岡に3年間住んでいて、東京のあたりは何も知らなかったです。しかし、韓国人の人々に「大久保」にはたくさんの韓国の店や人々がいて、まるで韓国にきたように思うと聞きました。そのため、いつかは是非行きたいと思い、今回参加することにしました。

まずは、大久保で勤めている方からの大久保の紹介をされました。東京都新宿区は10年余りで、人口約30万人のうち3万人の外国人登録がある外国人集住地域であること。私自身が外国人だけれども、そんなにたくさんの外

国人が住んでいるとは思いませんでした。特に、大久保、百人町では住民比率で3割くらいになり、7000人を超える外国籍区民が住んでいることを教えてくれました。実際に大久保に着くと、色々な言葉の看板を見つけることはもちろん、たくさんの外国人がいました。本当に外国に来たような気がしたのです。

特に、大久保小学校の話にはびっくりすることが多かったです。この学校の児童は、総数約145人のうち約60パーセントが、外国人の両親、もしくは外国人と日本人の両親を持つ子どもたちだということです。そのために、日本語が理解できない子どものための日本語教室や国際理解教室などが開かれているそうです。また、学校から親に向けて配られる配布物も6言語に対応していることはとても驚きました。小学校の時から自然と異文化に対する偏見もなくとてもいいとおもいました。普通の学校だとお互いの違いを認めず、尊重し難いと考えられるが、グローバル化のよい例だと思います。

実際に大久保のあたりを歩いてみると、不思議にも日本にいるような気がしませんでした。韓国語を含めた、たくさんの言語の看板や色んなところからの外国人が共に生きているところでした。私たちが食べたマレーシアの料理は普段食べている料理と似たような点もありましたが、生まれて初めて味わう食べ物や飲み物が多かったです。とても、新鮮な気持ちになって友達と一緒にたのしむことができました。

このような町が世界のどこかにまたあることを想像しながら、私が外国人ながらも、いろんな外国人に役に立てることや、日本人に異文化を理解させることはできないのかと考えるようになりました。是非役立てることを見つけ、実践していきたいと思います。また、これからもこのようなスタディ・ツアーがあれば是非参加したいです。

外国語学部フランス語専攻 1年 谷 あゆみ

わたしがこのツアーに参加してみようと思ったきっかけは、日本語がわからず行き先の違うバスに乗ってしまって困っていた中国人の家族を見たことだった。目的地とはまったく違う場所に着いてしまって、とても不安だったと思う。わたし自身そのバスに乗るのは初めてで、中国語もわから

ず、力になることは出来なかった。

大久保・百人町に行ったのは今回が初めてのことだった。多文化のまちと聞いて、わたしは真っ先に、アメリカにある日本人街、中国人街といったひとつの民族がまとまって暮らしているような町を思い浮かべた。しかし実際の大久保は、確かに韓国人の多いエリア、イスラム系の多いエリアなどもあるが、ひとつのブロックにさまざまな言語の看板が立ち並んでいて、「多文化」を実感した。特に韓国料理の店が目立ち、耳にする外国語も韓国語が多く、まるで韓国の街を歩いているようだった。これも近年の「韓流ブーム」の影響があるのだろうか。

「多文化のまち」とはいえ、そこに住む外国人と日本人の間にはトラブルもあるようだった。やはりコミュニケーションの問題が一番大きいという。日本語がわからないから、地域の日本人住民と話せない。地域のルール(例えばゴミだし)もわからず、ルールを守ることが出来なくなってしまって、日本人の住民に悪印象を与えてしまう。それですますコミュニケーションが難しくなり…というような悪循環。これを断ち切るために、回覧板に翻訳をつける、在日外国人のための相談会などは非常に重要なことだとわかった。わたしの住んでいる地域でも中国人や、ブラジル系と思われる人を見かけることがある。このような取り組みがなされているのかどうか調べてみようと思った。

コミュニケーションの他にも、日本に移住する外国人にはたくさんの問題がある。そのひとつが子育てだ。日本で生活していくために、両親が夜遅くまで働かなくてはならない家庭は、日本人家庭にも多い。近所に信頼できる人がいればその人に留守中を頼むこともできるかもしれないが、子どもを狙った犯罪も増えているし、簡単ではない。大久保にはエイビイシイ保育園という24時間体制の認可保育園がある。無認可、23時間体制で始め、残りの1時間の確保、認可のためかなりの年月を要したという。共働きの家庭が増えた今、保育園の数は圧倒的に少ない。外国人の住みよい国にするには、まず日本人も暮らしやすい国にしなければならぬ。

「多文化共生」とは一体何なのか、スタディ・ツアーに参加してからずっと考えていた。ただ単に多くの文化や人種、民族が平等であるだけではない。この「多文化共生」という

言葉を定義することは、とても難しいことであると思う。今回のスタディ・ツアーで日本の多文化化の一端を体験することができ、ますます興味を持った。これからの大学生活の中で、「多文化共生」のあり方について模索していきたいと思う。

外国語学部フランス語専攻 4年 山田 寛子

私が大久保、百人町を訪れるのは 2 度目であった。初めて訪れたときというのは、韓国通の友人に連れられてのことで、韓流スターショップを見たり、韓国料理店で数々の料理を食べたりしたので、私の中には「大久保＝限りなく韓国に近い町」というイメージが形成されていた。

今回、このスタディ・ツアーに参加したことで、そのイメージが変化して、「大久保＝多国籍、多言語、多文化の温かい街」という実感になった。印象的だったことを述べたい。

HALAL ショップの存在を初めて知った。食材を、タブーに触れることなく購入できることは、外国人、特に日本語がよく読めない人達にとっては、心強いと思った。その HALAL ショップのうちのひとつに入店した。ヒンディー語、アラビア語、英語、日本語を操り、私たちにラッシーをくれた気前のよい社長や、アラビア語を話す男性二人、フランス人の彼氏を持つコートジボワールの女性がいて、しばらく会話を楽しんだ。この小さな店の中だけで、4 言語も聞いたことに驚き、大久保の多言語さを感じた。いろんな母語を持つ彼らと話すのは、とても楽しかった。

大久保小学校の外観を見学した。思ったよりも小さな学校だった。私が府中国際交流サロンで学習支援を始めるきっかけが、この学校だった。よくテレビ番組で取り上げられるらしい。講習会では山本さんが、子どもたちの学習や、夜間保育の問題について話してくださった。府中とは、少し背景が違うなあと感じた。

小学校周辺には木造築何十年という共同住宅や、ワンルームにひと家族が住んでいるアパートがあった。各国料理や、各国スターの店などを見ると華やかだが、少し裏通りに入ると驚いてしまう。お勤めに向かう若い女性ともすれちがった。驚くほど安いビジネスホテルが何軒もあった。友人と遊びに来たときには気づかなかった、違う大久保を見たように感じた。

講習会や、後の懇親会の会話で「ごみ、騒音、におい」の問題が話題になった。在日外国人の問題とはこの 3 つだという。日本語があまりわからぬうちは、ごみの分別や出す日にちなどを完璧にこなすことは難しいし、野外での立ち話、マンション中にいきわたってしまうような出身国独自の料理の香り。日本人にとっては慣れないものだから、問題視されてしまう。ただ、会話の中で出てきたのだが、日本人にとっておなじみの醤油の香りが、外国の人々にとっては不快に思えることもあるのではないか。このように、「ごみ、騒音、におい」の問題というのは、お互いにあると言えるのかもしれない。大久保の町が、全国の在日外国人の問題を集約しているとしたら、なおさら、これらの問題にも取り組めるとよいと思った。外国から来た人々のおかげで、日本の商店街が活性化し、韓流ブームのおかげで主婦層の客が増えた。良いことも悪いことも考えたい。

他にも、いろんな国のよさがつまったマレーシア料理に感動したり、あまりに細い道を車が走っていたり、多くのことに驚き、感動し、考えたスタディ・ツアーだった。

外国語学部アラビア語専攻 1年 鈴木 啓之

このレポートでは大久保・百人町周辺スタディ・ツアーで得られた情報を元にして多文化共生社会について考察したい。

新大久保・百人町の位置する新宿区では、外国人登録者が都内で最も多く、人口 30 万人のうちの約 10% を占めている。その中でも新大久保・百人町においては、住民の約 33% を外国籍住民が占める。そしてこの地域で特に注目すべきは、その混住・共生の形態である。

町を歩くと、通りに面した店の多様性にまず驚かされる。扱う品物の多様性もさるものながら、店の看板に書かれた文字の多彩さには目を見張るものがある。多くはハングルや中国漢字であるが、中にはいくつかの判別不可能な文字も含まれている。それらは一見して別の世界へ迷い込んだような錯覚を来訪者に与えるが、それは海外での感覚とはまた違うものである。それをよく表す例として文字の混用を挙げたい。

公園の前にあった一軒の韓国料理店の看板がそれである。それにはハングルで二文字書いた後から「食堂」と

漢字で付け加えられていた。この看板に見られる文字の使用法は、この町における共生の形を物語っている。自分の持つ文化を主張しながらも、異国日本の文化を受け入れているのである。つまり、個人レベルで多文化社会が形成されているのだ。ここでは同じ国籍の者同士での“集団孤立型”社会や、居住国による押し付けの“文化統一型”社会は形成されていない。むしろ住民の多くは、この“意思疎通ある多文化”を楽しんでいるようである。町のいたる所に貼られた語学・文化理解講座のお知らせや、地域情報誌・掲示板での多言語表記などは、そのような姿勢の表れであろう。相手の立場の理解と、自分の立場の発信がみごとに両立されているのだ。

そして、この様な働きかけが“日本－外国”の枠に限定されないところが、特筆すべき点である。行程で立ち寄ったハラール(حلال:許された)食品店では、少なくとも日本語・アラビア語・英語・フランス語が通じ、他の多くの店でも2～3種の文字併記は当たり前のように行われている。交流がすべての文化を縦横につないでおり、これがこの町特有の連帯感を生み出しているようである。

このような社会が形成された背景の1つとして考えられるのは、この町における居住の形態ではないかと思われる。ある程度の波はあるものの、多くの外国籍住民が、他の文化圏の外国籍住民と並行して来日している。そのため1つの共同住宅に国籍の異なる人々が一緒に暮らしているのが当たり前の、混住社会が作り出されてきた。異国日本において、さらに他の文化との交流の必要性が生ずるのである。ここからは私見であるが、彼らの間での交流も片言の日本語や挨拶を通じて、大変ごちなく始まったに違いない。完璧を奉じる日本人には難しいかもしれないが、その姿勢に学ぶべきものは多いと思われる。

外国語学部カンボジア語専攻 1年 柴本智代

私は、このスタディ・ツアーに参加して、現在の日本社会における多文化共生の“まち”を実際に自分の足で歩き、体験するというとても貴重な体験をすることができました。

まず私が驚いたのは、駅近くで見かけた電柱です。なんと5種類もの言語で書かれているのを見つけました。さすが多文化のまち！と思いました。とても身近なところから、

わたしの住んでいるまちとは全然違う！と思いました。

町を歩く前に、共住懇の方からお話を聞いた。その中で、今の久保のまちには、外国籍の方が平均3割近く住んでいることを知り、とても驚きました。だからこそ、多文化共生のまちづくりが進んでいるんだなあ、と思いました。また、「おいしい“まち”ガイド」という冊子を頂き、その中に紹介されている外国料理店の数の多さ、種類の多様さに驚きました。

説明の後、まちを歩き出してみると、そこはまさに、韓国にいるような感じでした。韓国料理店、韓国雑貨店など、韓国語で書かれている看板がいたるところにありました。韓流ブームの影響もあるのかもしれないけど、それにしてもすごい数だなあ、と思いました。

私は、国際理解教育に興味があり、児童の半数以上が、両親のどちらかが外国籍という久保小学校にも、非常に興味を持ちました。学校通信が多言語化、連絡網は言語別、母語維持教育、国際日本語教室など、久保小学校の様々な取り組みを知ることができました。まさに地域とともに歩む学校だ、と思いました。

今回、このスタディ・ツアーで、共住懇の方に案内して頂き、久保のまちを普段とは違った目線で見ることが出来て、普段生活しているだけでは気づくことのできなかった久保のまちの様々なところを知ることが出来ました。とてもよい経験となりました。たくさんの韓国料理、雑貨店、多国籍料理店には、ぜひ今度行ってみよう！と思います。これから変わり、進み続ける多文化共生社会を、もっと知っていききたい、と思いました。そして、自分には何が出来たのか、探し、実践していこう、と思います。非常に貴重で有意義な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

外国語学部日本語専攻 1年 板久 梓織

近年国際化が叫ばれている日本の中でも、久保という町は特異な町と言える。なぜなら久保・百人町地域の住民比率の平均三割は外国人であり、国際化している町というより外国そのものと言った方がふさわしいからだ。日本に旅行に来た外国人が母国の料理が恋しくなった時久保の町へ行き、母国の料理を食べるといった話を聞く。ま

た日本人を含めて、多民族が混ざっている大久保という町を中心に現在日本では「多文化共生」という概念が推進されている。「多文化共生」とは互いの違いを認め、共に尊重し合い、豊かに生きていくことができるような社会をつくらうという概念である。しかし日本人と外国人という境界線は明白に分かれているものではない。大多数の日本人と違う肌であろうとも日本でしか居住経験がなく、日本語しか話せない人々を「外国人」と定義することはできないだろう。では、そういった人々や日本に居住しながら多文化の町で暮らす日本人のアイデンティティの形成はどうなるのだろうか、検証したい。

沖縄やアイヌの人々は同じ日本とされながら本土の人々とは違うアイデンティティを形成しているといつてよい。私たちはこの二つの地域を外国のように捉える傾向がある。同じ「日本人」であるのに全く理解できない言語(方言と定義される場合もある。)を話すし、文化を持っているからだ。しかし彼らを「日本人」と考えるのは、本土の人々と同様の教育が行われているからだということが一つ挙げられる。このことを大久保の大久保小学校で考えてみると、日本人と外国人の境界線がいかにあやふやなものであるかわかる。大久保小学校も他の小学校と同様の教育を行っている。また沖縄やアイヌの人々は本土と同じ教育を受けているが、同時に自分の民族の歴史と文化を学び、本土の人とは違うアイデンティティを形成していく。同じように大久保小学校でも自分の母国(同じ民族が暮らす国)へたとえ行ったことがなくても日本語以外の言語を学ばせ、自らの中で様々な文化を交錯させアイデンティティを形成させている。その中で生活する「日本人」は他の地域の「日本人」とは違い自国らしさを認識することは困難かもしれない。無意識の内に得られるものではないからだ。ここで必要なのは他の文化と比較する力と様々な文化を吸収することだ。アイデンティティを自ら構築していく過程は他の地域のように知らずに形成されるものではないため難しいかもしれないが同時に「日本人」とは何なのかを意識する機会である。ここで言うアイデンティティとは日本人外国人というアイデンティティだけでなく個人一人ひとりの自分らしさを考える根本として構築されるべきだと私は考える。

外国語学部日本語専攻 1年 阿部康史

今回私がスタディ・ツアーへ参加をしようと思ったのは、今日の日本の多言語多文化化に興味があったのはもちろん、いままでやってこなかったボランティアというものに挑戦しようと思ったからです。また多文化コミュニティ教育支援室での体験がこれからの目標である日本語教師という職業に役に立つとおもったからです。まず、大久保という町を歩いてみて思ったことは、自分とほかのツアー参加者との多文化の捉えかたの差でした。私は地方出身ということもあって、まわりから日本語以外の言葉が聞こえてくれば驚きの目を向け、外国人のやっている店というものにも無意識のうちに抵抗感を持っていました。大学生活をはじめでなんとなく感じていたことなので、この意識を変えられればいいなと思ったのもツアー参加の理由です。次に、町のいたるところに外国語の看板が並んでいることが非常に新鮮でした。地元の新潟に住んでいたときは日本の多文化化ということはまったく実感できませんでしたが、大久保の町を歩くことで切と体で感じることができました。例えば、韓国人の経営している理容店の看板の「パーマ」や「カット」が「パマ」、「カト」になっていて驚きました。大久保内で日本人居住者と外国人居住者の関係がよくないことは「共生懇」の方から聞きましたが、「パマ」「カト」のような看板の誤りが正されないことに日本人と外国人との隔たりを感じました。一方で、一歩アラブ系の人達がやっている食料品店に入ってみると、20人近い人数で押しかけたにも関わらず、全員にヨーグルトのような飲み物をご馳走してくれました。今まで持っていた抵抗感も薄まりました。自分たちから積極的に語りかけていけば「壁」なんてどうってことないように感じました。しかし案内して下さった方の話を聞くと、外国人の日常生活での知識不足による不注意や、彼らのやっている夜の仕事などが日本人の不審をかっているそうです。それは小さな問題で、話し合えば解決できそうですが、実際にはそういった話し合いの場はないそうです。なぜ、日本人は話をしようとししないのだろうか？多文化化のすすむ日本がこれから抱えていくことになる問題を大久保というその縮図のなかで垣間見れた気がする。その後の懇親会でも、多文化化にあまり関係のない話も含め、いろいろなひととの話を聞けて非常に勉強になりました。これからも積極

的に支援室の活動に参加していきたいので、よろしくお願いします。最後に、レポートの提出が期限ぎりぎりになってしまい申し訳ありませんでした。

2-3. イラストレータ講習会・パワーポイント講習会

文責:青山 亨(運営委員)

支援室の活動にはマイクロソフト・パワーポイントを使ったプレゼンテーションやアドビ・イラストレータを使ったポスター作成の技能は不可欠であるという声を受けて、昨年度のパワーポイント講習会に引き続き、支援室関係の教職員・学生のスキルアップのために、初心者を対象にしたパワーポイントおよびイラストレータ講習会を開催した。講師は運営委員の青山が担当した。

イラストレータ講習会

10月4日(水)18時半～19時半、支援室にて第1回を開催。参加者9人。アドビ社イラストレータの基本について講義を受けたあと、参加者各自がパソコンを操作して簡単なポスターの作製に取り組んだ。

10月11日(水)17～18時、支援室にて第2回を開催。参加者13人。文字デザインの基本について講義を受けたあと、第1回に引き続き、参加者各自がポスターの作製をおこなった。別紙資料を参照。

パワーポイント講習会

10月18日(水)17～18時、216のパソコン室にて開催。参加者7人。マイクロソフト社パワーポイントによるスライド作成の基本について講義を受けたあと、参加者各自がパソコンを操作してハロウィンをテーマにした簡単なスライド・プレゼンテーションを作成した。別紙資料を参照。

イラストレータ講習会

(1) 全体の流れ

1. 第1週:イラストレータの考え方、「部品」作り
2. 第2週:テキストの作成、背景の配置

(2) イラストレータの考え方

1. 「アートボード」(キャンバス)と「作業エリア」(机)と「アートワーク」(作品)
2. 「ツール」と「パレット」
3. 「レイヤー」
4. 「オブジェクト」
5. 「点と線と面」
6. Word や Photoshop とどこが違うの？

(3) ステップ1:「新規書類」を作ってみよう:

1. 新規書類の作成 RGB, CMYK
2. 「アートワーク」の構造
3. 「アートワーク」の保存 AI, PDF, EPS および SVG

(4) ステップ2:オブジェクトの取り扱い

1. オブジェクトを構成する要素
2. 「箱」型オブジェクトの作成と変形
3. 「線」型オブジェクトの作成と変形:ベジェ曲線
4. オブジェクトの線と面
5. 複数オブジェクトの組み合わせ

(5) ステップ3:文字の取り扱い

1. 文字の入力
2. フォントの設定
3. 段落の設定

(6) ステップ4:画像ファイルの取り扱い

1. 画像ファイルの読み込み
2. 画像ファイルの変形
3. マスク
4. ビットマップ画像とベクトル画像

(7) その他

1. 注意事項
2. 参考資料

パワーポイント講習会

(1) パワーポイントの使いこなし

パワーポイントの使いこなし

青山 亨
東京外国語大学

注意: 1~9のスライドは、デザインを適用する前の状態を示しています。

説明の流れ

1. パワーポイントの基本概念
2. パワーポイントでできること
3. スライド作成の基本的流れ その1
4. スライド作成の基本的流れ その2
5. スライド作成の応用テクニック
6. プレゼンテーション実施上の注意点
7. まとめ

パワーポイントとは？

- パワーポイントはプレゼンテーションの道具。
- プレゼンテーションとは、言葉とそれを助ける視覚資料を使って、その場にいる多数の人々に、自分の考え(アイデア、意見、発見など)を、提示すること。
- present>presentation。「もらってうれしい」

1. パワーポイントの基本概念

- スライド
- オブジェクト
- 両者の関係は紙芝居と切り紙に類似

スライドとオブジェクト: 紙芝居と切り紙

- プレゼンテーションの最小単位はスライド
 - スライドは紙芝居の1枚の紙に相当
- スライドに貼り付けられたものがオブジェクト
 - オブジェクトは紙芝居に貼られた切り紙に相当
 - スライド上の図、写真、表や文字テキストはすべてオブジェクト

スライドの特徴

- 追加ができる
- 複製が作れる
- 順番の変更ができる
- 削除ができる

- 視覚効果: 画面切り替え

オブジェクトの特徴

- 追加・削除ができる
- 配置が変更できる
- 重ねることができる
- 大きさの変更ができる
- オブジェクトによっては、色・形の変更ができる

- 視覚効果:アニメーション。ただし、やりすぎは禁物

2. パワーポイントでできること

- 説明:聴衆に新しい情報や概念を伝える
 - 例:「インドネシア各地方の子どもの遊び」
 - 例:「インドネシアの遊びの場面」(写真)
- 説得:聴衆にある行動を取るよう説得する。
 - 例:「語劇に多くの観客を呼ぶための戦略」

パワーポイントでできること: 注意点

- もっとも大切な要素:
 - データ(事実)
 - データを説得的につなぐストーリー(論理)
- 二次的な要素:
 - デザインやアニメーションなどの視覚的な効果
 - しつぱ本末転倒となるので注意

ハロウィンの起源

外大花子

ハロウィンの起源

- Halloween
 - ヨーロッパの年中行事
 - 10月31日の夜
- 古代ケルト人の信仰
 - 死の神サムハインをたたえ、新年と冬を迎える祭
- キリスト教と融合
 - 諸聖人をたたえる万聖節(ばんせいせつ)の前夜と位置づけられる。

ハロウィンの語源

- Hallow= アングロ・サクソン語で「聖徒」(英語のsaint)
- All Hallows Even(万聖節前夜祭)がなまって「Halloween」

ハロウインの行事

- 北米の子どもの祭り
- Jack-o'-lantern: 大きなカボチャをくり抜き、目鼻口をつけた提灯
- 怪物、魔女などに仮装した子どもたちが近所を回ってお菓子をもらう。
- Trick or treat!

ハロウインの風景



ハロウインの風景



日本のハロウイン

- 原宿キディランドで日本最初のハロウインパレードが実施。
- 英会話教室などのイベントを通じて普及。

ありがとうございました。

(2) Power Pointによるプレゼンテーションの基礎－基礎からスライド作りのABCまで－

1. パワーポイントの基本概念

複数のスライドを講演者が意図した順番に提示することによってプレゼンテーションをおこなうソフト。

ふつう1枚のスライドには、1つ以上のオブジェクトが貼り付けられている。

オブジェクトとは、スライドに貼り付けられたテキストもしくは画像(写真、グラフ、表など)などの要素のことである。スライドとオブジェクトの関係は、紙芝居の台紙と台紙に貼り付けられた切り紙のような関係である。

2. パワーポイントを使ったプレゼンテーションのポイント

説明:聴衆に新しい情報や概念を伝える。例:「七夕の起源」「ココス島旅行写真日記」など

説得:聴衆にある行動を取るよう説得する。例:「語劇に多くの観客を呼ぶための戦略」

いずれの場合も、データ(事実)とそれを説得的につなぐストーリー(論理)の二つが最重要であり、デザインやアニメーションなどの視覚的な効果は二次的である。

3. スライド制作の基本的流れ

3.1 新しいファイルを作る・保存する・開く

- (1) ファイル>新規作成
- (2) ファイル>名前を付けて保存
 - ◆「ファイルの種類」に注意。外大ではファイル・サーバに保存する。
- (3) ファイル>上書き保存
 - ◆頻繁におこなうこと。左手のキーボード・ショートカットを覚えること。【補足説明参照】
- (4) ファイル>開く

3.2 スライドを新規作成する・追加する・差し替える

◆パワーポイントの画面が標準表示(左、中央、右の3面構成)になっていることを確認。

- (1) 左ウィンドウで最後のスライドを選択>右クリック>新しいスライド

- (2) 右ウィンドウの「テキストのレイアウト」から適切なレイアウトを選択>テキストを入力

- ◆テキストの基本はリスト形式
- ◆リターン・キーを押すと改行
- ◆タブ・キーを押すとレベルが一つ下がる
- ◆シフト+タブ・キーを押すとレベルが一つ上がる
- ◆リストの行頭文字は変えることができる:
変えたい範囲を選択>書式>箇条書きと段落番号>OK

3.3 スライドに図・写真などを挿入する

- (1) 左ウィンドウで最後のスライドを選択>右クリック>新しいスライド
- (2) 右ウィンドウの「コンテンツのレイアウト」から適切なレイアウトを選択
- (3) 図の挿入をクリック>挿入したい図を選択し「図を挿入」をクリック
- (4) 別のファイルやウェブ上の画像をコピー&ペーストしてもよい。たとえば、

- <<http://office.microsoft.com/clipart/>>
- ◆挿入された図は、大きさを自由に変えることができる。少し大きめの図を挿入し、スライドにあわせて縮めるのがコツ。【補足説明参照】
- ◆挿入された図は、位置を自由に変えることができる。
- ◆挿入された図は、トリミングすることができる:
図の上でダブル・クリック>図>トリミング範囲の数字を設定>OK

3.4 表示モードの切り替え

- ◆左下の3つのアイコン:(左から)

「標準表示」

「スライド一覧表示」

「スライドショー」



- (1) 「標準表示」:スライドの作成
- (2) 「スライド一覧表示」:スライドの一覧表示・順番の入れ替え

◆コピー、カット、ペーストを活用する。

- (3) 「スライドショー」:プレゼンテーションの実行

3.5 スライドにデザインを付ける

- (1) 右ウィンドウに「スライドのデザイン(デザイン・テンプレート)」を表示させる。

- (2) 適切なデザインを選びクリックする(すべてのスライドに適用される)。

- (3) 特定のスライドのデザインを変更する場合:右クリック>選択したスライドに適用。

◆デザインというのは、すべてのスライドに共通した統一的な様式のこと。

◆レイアウトというのは、個々のスライドの特徴に応じたテキストや図の標準的な配置のこと。

◆背景というのは、デザインに適用される背景色のこと。通常は変更しなくてよい。

3.6 スライドショーをおこなう

- (1) 表示モードを「スライドショー」に切り替える。

◆スライドの現在の位置からスライドショーが開始する。

- (2) キーボードの右カーソル・キーで次の、左カーソル・キーで前のスライドに移動する。

◆マウスをクリックしても次のスライドに移動する。

- (3) スライドショーを中断するときはエスケープ・キーを押す

◆遠くのスライドに直行するには、一時中断し、「スライド一覧表示」で目的のスライドを選び、「スライドショー」を再開すると効率的。

スライドショーを自動プレゼンテーションに設定していた場合は、次の手順で手動に切り替える。

- (1) スライドショー>スライドショーの設定>「種類」を「発表者として使用する」に設定

- (2) スライドショー>スライドショーの設定>「スライドの切り替え」を「クリック時」に設定

3.7 自動的なスライドショー

- (1) スライドショー>リハーサル>各スライドの表示時間

を設定

- (2) スライドショー>スライドショーの設定>「種類」を「自動プレゼンテーション」に設定

- (3) スライドショー>スライドショーの設定>「スライドの切り替え」を「保存時のタイミング」に設定

- (4) スライドショーを実行

◆中断するときはエスケープ・キーを押す

3.8 スライドを印刷して配布資料を作る

ファイル>印刷プレビュー>印刷対象:配布資料

◆プリントアウトして配布資料を作るときに便利。1ページに9画面まで縮小して入れることが可能。

◆モノクロ印刷の場合は色の使い方に注意。

4. スライドに視覚効果をつける

4.1 アニメーション

◆アニメーションは、スライド内のオブジェクトを表示するときの視覚効果。

- (1) 右ウィンドウを「アニメーションの設定」に変更する。

- (2) 中心ウィンドウでアニメーション効果をつけたいオブジェクトを選択>右ウィンドウでアニメーションを設定

4.2 画面切り替え

◆画面の切り替えは、スライドから次のスライドへ切り替えるときの視覚効果。

- (1) 右ウィンドウの表示を「画面切り替え」に変更する。

- (2) 左ウィンドウで画面切り替え効果をつけたいスライドを選択>右ウィンドウで画面切り替え効果を設定

◆視覚効果は(デザインやレイアウトと違って)モニターやプロジェクタで提示するときに有効。

5. プレゼンテーションの実施上の注意点

- (1) 必要なものを確認する:

パソコン、プロジェクタまたはモニター(パソコンとモニターをつなぐケーブル、電源ケーブル、延長コードなども確認)。ポインタも使えるが、レーザー・ポインタがあると便利。

(2) ファイルの移動方法:

作成したファイルを他のパソコンに移す場合にはその方法をあらかじめ考えておくこと。画像の多いファイルは巨大なのでフロッピー・ディスクに保存したり、メールの添付ファイルとして送ったりできないことがある。CD-Rに焼く、USBフラッシュメモリなどに保存する、ネット・サーバを仲介するなどの方法を考える必要がある。

(3) パソコンとプロジェクタの接続を確認する:

プレゼンテーションに先立って、パソコンとプロジェクタを接続し試写をおこなうこと。パワーポイントによるプレゼンテーションで起こるトラブルのほとんどは接続で起こる。パソコンの画面が表示されない場合は以下のポイントをチェック:

- パソコンとプロジェクタの接続
- プロジェクタ側の入力が入力になっていることを確認
- パソコンの画面出力が外部モニタになっていることを確認

(4) パワーポイントのバージョン:

作成したパソコンとプレゼンテーションで使うパソコンが異なる場合(会場のパソコンを借りて使うときなど)、インストールされているパワーポイントのバージョンに注意。新しいバージョンの視覚効果が使えないことがある。

6. 参考文献

飯田英明「4時間でつくるパワーポイントのコツWEB版」(<http://www.brain-d.co.jp/ppin4/>).

住中光夫「住中光夫のパワフルプレゼンテーション」(<http://arena.nikkeibp.co.jp/tokushu/biz/20040406/108360/>).

永山嘉昭『説得できるプレゼンの鉄則 PowerPoint徹底活用編—ライバルに差を付ける「プロ」の技はこう使う』日経BP社, 2002.

プロジェクトA, できるシリーズ編集部『できる

PowerPoint 2003 Windows XP対応』インプレス, 2004.

7. この講習で扱わなかったこと

- (1) アウトラインを使ってプレゼンテーションを準備する
- (2) パワーポイントで図を作り加工する
- (3) パワーポイントで表を作る

8. 補足説明

【ショート・カット】

■Windowsの操作体系の特徴はマウスを使ったポイント・アンド・クリックであるが、キーボードを使ったショート・カットも覚えておくことで作業が効率的になる。次のショート・カットは(右手はマウスに置いたまま)左手だけでできるので便利。

Ctrl + X: カット

Ctrl + C: コピー

Ctrl + V: ペースト

Ctrl + Z: 元に戻す

Ctrl + S: 上書き保存

【写真ファイル】

■写真のファイルを用意するには次の方法がある。フィルムから大量にスキャンする必要がある場合にはお店に頼むという選択肢もある。

(1) デジカメで撮影した写真: JPEG形式で保存したファイルはそのまま使用可能。最近のデジカメは最低でも200万画素はあるから「普通」モードで撮れば十分。

(2) 写真プリント: 普通のスキャナでスキャンし、JPEG形式で保存。スキャンする時の解像度は実用的には96~300dpi(dot per inch)位を目安にする。一般に、元の写真が大きいほど解像度は低くてよい。

(3) ネガまたはポジ(スライド)のフィルム: フィルム・スキャナでスキャンし、JPEG形式で保存。

■使用する写真のファイルサイズは100KB位であれば十分に実用に耐える。

■使用する写真のファイルは、通し番号を付けて一

つのフォルダにまとめておくと便利。

例:「tanabata2005-001.jpg」「tanabata2005-002.jpg」
など。

【解像度】

■解像度は1インチ(2.54センチ)あたりの画素(ピクセル/ドットとも)の数で表される。

■画像の解像度は高いほど綺麗に表示されるように思われがちだが、実は解像度の高さが問題になるのは紙に印刷する場合である。パワーポイントのようにパソコンの画面で表示することだけを目的にする場合には、解像度をやたらと高くする必要はない。なぜなら、一般のパソコンの画面は1インチあたり96ドットほどしか表示できないからである。

現在のパソコンの画面は横1024ドット×縦768ドット(XGA)ドットか横1280ドット×縦960ドット(SXGA)で表示されている。これは、XGAだとおよそ78万画素、SXGAでも122万画素しか表示できないということである。プロジェクトで大きな画面に投影された場合でも、レンズで拡大されているだけのことで、映っているドットの数には変わりはない。

したがって、これ以上のドットで構成されている(解像度の高い)画像をパソコンで表示しても画面からはみ出るだけである。確かに細かな部分はよく見えるが全体像はつかめない。そのうえ、解像度が高い画像が多くなるとファイル・サイズが極端に大きくなって動作が重くなる点にも要注意である。

なぜ解像度を理解することが大切なのか？

画像はパワーポイントやワードのようなソフトの中でも自由に拡大・縮小できる。しかし、画像の画質はその画像がもっている解像度によって決まる。とくに画像を大きくするに従って、解像度の高さが画質に反映するからである。



解像度の低い画像 小さいサイズでは画質は問題とされないが(左)、画面いっぱいに拡大すると画質の粗さが目立つ(中)。



解像度の高い画像 小さいサイズでは解像度が高くても目に見える違いはない(左)。画面いっぱいに拡大しても当然画質はきれいである(中)。本来の大ききで表示すると高い解像度の威力が発揮されるが、画面には納まりきらない(右)。解像度が不必要に高い画像はファイルのサイズが大きくて扱いにくい。過ぎたるは及ばざるが如しである。



解像度の適切な画像 小さいサイズでは画質は問題とならない(左)。本来の大ききで表示したときにきれいな画質で画面いっぱいになる(右)。

3. 調査・研究

3-1. 調査

(1) 調査概要

本年度の調査研究にかかわる募集要項について紹介する。基本的には、一般公募の形をとり、興味関心のある学生であれば誰でも参加できる態勢で臨んだ。

調査研究の概要、ならびに調査研究の流れを把握するため、以下に、学生に配布された「募集要項」(=学生「調査研究員」募集と調査研究にかかわる概要=)を紹介し、その後に、「作業工程一覧表」を付しておく。

(2) 調査報告

調査研究の報告は、12月に実施された「学生多文化フォーラム」での口頭発表と、本報告書向けに執筆された2部構成でまとめている。

※詳細は、第Ⅱ部、5章「学生多文化フォーラム」を参照

=学生「調査研究員」募集と調査研究にかかわる概要=

(2006.6.21 東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター 調査研究プロジェクト資料)

多文化コミュニティ教育支援室は、設立後3年目を迎えました。これまでの学生によるボランティア活動を振り返って、将来の活動に生かすための調査研究を企画しています。以下の調査研究に興味・関心のある本学の学生を対象に調査研究員を募集することになりました。ふるって応募ください。特に、過去あるいは現在活動している学生の方の応募を歓迎します。

【説明会】

調査研究の具体的な内容等についての説明会を以下の日時で開きます。質問等を受けつけますので、いずれかの日に参加してください。

①6月21日(水)昼休み 208教室、②6月22日(木)昼休み 210教室、

③6月23日(金)昼休み 208教室

【調査研究目的】

ボランティア活動の中核をなす2つのプロジェクト「学習支援活動」と「国際理解教育」のこれまでの振り返り、将来の学生活動に生かすための調査研究を行います。あわせて、調査研究の成果を本年12月に開催予定の「学生フォーラム」(仮称)で発表し、3年間の総括を行います。

「学習支援活動」においては、JSL児童生徒(JSL:Japanese as a Second Languageの略で、日本語を第二言語として使用する児童生徒)の出身国の教科教育内容、学校文化、あわせて、来日目的などの調査研究を行います。

「国際理解教育」においては、これまでの実践の経緯、活動状況を総括し、「外大方式」として作り上げてきた留学生と日本人学生による活動モデルをまとめ、その内容や方法等について検証します。

【調査研究の内容と方法】

上記の2つのプロジェクトを実行するための班を構成します。調査方法は、文献調査、アンケートや聞き取り調査などによります。

(1)「学習支援活動(プロジェクト)」班

- 1)国内の外国人学校(代表的な学校を選定)での教科カリキュラムを理解する。
- 2)教科カリキュラムの内容や配列を調査する。
- 3)調査結果から、JSL児童生徒の出身国の教科「算数」「理科」「社会」の学習項目、配列順、到達目標等を整理する。
- 4)3)に対応する日本の教科カリキュラムの実情を把握する。
- 5)JSL児童生徒の母文化、特に学校文化を調査して、日本の学校文化との比較検討を行う。
- 6)共通点や相違点を把握し、異文化理解の助けとなる情報をまとめる。
- 7)JSL児童生徒の来日目的にかかわる実情を調べ、教育の方法について検討する。
- 8)1)～7)までの成果を活用できる資料としてまとめる。

(2)「国際理解教育(プロジェクト)」班

- 1)多文化コミュニティ教育支援室が設立当初から行ってきた国際理解教育の活動内容を理解する。
- 2)小・中学校で実施されている国際理解教育の目的、内容等を文献や聞き取り調査によって理解する。
- 3)国際理解教育にかかわる実情や課題等を文献や実際の活動から把握する。
- 4)学生によるこれまでの活動内容について理解し、まとめる。
- 5)「外大方式」(留学生と日本人学生による活動)ができあがってきた背景・経緯をまとめる。
- 6)「外大方式」における活動の課題、成果を検証するために、派遣先学校の教師や児童生徒を対象に聞き取り(アンケート)調査を行う。
- 7)この方式の有効性を検証しつつ、一つのモデルとしてまとめる。
- 8)今後の活動に資するアドバイスをまとめる。

(3)「学生フォーラム(プロジェクト)」班

- 1)この班は、上記2つの班を合同したメンバーで構成する。
- 2)「学習支援活動」班と「国際理解教育」班のそれぞれの成果を発表できるイベントを企画する。
- 3)12月2日(土)に開催予定の「学生フォーラム」(仮称:名称等も決める)の具体的内容を企画する。
- 4)当日の「学生フォーラム(仮称)」の運営を行う。
- 5)学生フォーラムでの成果を報告書にまとめる。

【募集人員】各班6～10名(本学在籍生で主体的に参加できる者)

【調査研究期間】

2006年7月～12月(毎日ではありません。)、ただし、調査は11月末までに終えてください。

※調査研究員には、調査研究活動にかかわる経費(交通費等)が支給されます。

【募集期間】

2006年6月19日(月)～6月30日(金)

【応募方法】

調査研究員を希望する者は、①希望する班名(「学習支援活動」または「国際理解教育」のいずれか)、②郵便番号、③住所、④氏名(ふりがな)、⑤性別、⑥年齢、⑦電話番号、⑧専攻・学年、⑨所属している関連団体名(もしあれば)、FAXまたは電子メールで送信してください。

【調査研究員の発表】

7月3日(月)昼休み 多文化コミュニティ教育支援室前の掲示板で発表します。

【オリエンテーション】

調査研究員発表後、活動を開始するためのオリエンテーションを以下の日時に開きます。

調査研究員になった学生は必ず出席してください。

7月4日(火)昼休み (事務棟2階 中会議室)

※当日、都合の悪い学生は、5日(水)の予備日の昼休みに支援室に来てください。

【問い合わせ先】

多文化コミュニティ教育支援室(研究講義棟2階206号室) 平日9:00～18:00

「学習支援活動班」調査研究工程表

(2006.6.21 作成資料)

	(2006年) 7月	8月～9月	10月～11月
1)国内の外国人学校 (代表的な学校を選定) での教科カリキュラムを 理解する。		○調査対象学校の選定、連絡 ○学校訪問等の許可内諾 ○調査日程を立案 ○関連文献の調査開始	
2)教科カリキュラムの内 容や配列を調査する。	<p><オリエンテーション> 7月4日(火) 12:10～1:10</p> <ul style="list-style-type: none"> ・班構成 	○関連資料の調査 ○学校訪問 ○聞き取り調査	○収集した情報のまとめ
3)JSL児童生徒の出身 国の教科「算数」「理科」 「社会」の学習項目、 配列順、到達目標など を整理する。	<ul style="list-style-type: none"> ・調査研究事項確認 ・調査研究計画 ・実行プラン ・その他 	○学校訪問、関連資料からJSL 児童生徒の教科内容を調査	→→ →→ ○収集した情報のまとめ
4)3)に対応する日本の 教科カリキュラムの実情 を把握する。	<p><学生フォーラム班></p> <ul style="list-style-type: none"> ・構想→企画 ・内容 ・予算 	○関連資料の文献調査	→→ →→ ○収集した情報のまとめ
5)JSL児童生徒の母文 化、学校文化を調査し て、日本の学校文化と の比較検討を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・招待者の有無 ・会場等の予約手配 	○日本の教科カリキュラムに関 する文献調査 ○教科書調査 ○日本の学校訪問調査(必要 に応じて) ○聞き取り調査	→→ →→
		○JSL児童生徒の学校文化と 日本の学校文化に関わる資料 の収集 ○比較・検討	

6)共通点や相違点を把握し、異文化理解の助けとなる情報をまとめる。				○文献調査・聞き取り調査を踏まえ、基礎資料の作成
7)JSL児童生徒の来日目的にかかわる実情を調べ、教育の方法について検討する。				○「学生フォーラム」への発表準備、資料作成 <報告書作成・完成>

「国際理解教育班」調査研究工程表

(2006.6.21 作成資料)

	(2006年) 7月	8月～9月	10月～11月
1)多文化コミュニティ教育支援室が設立当初から行ってきた国際理解教育の内容を理解する。		○支援室発行『報告書』等の文献調査 ○実際の活動状況を把握	
2)小・中学校で実施されている国際理解教育の目的、内容等を文献や聞き取り調査によって理解する。	<オリエンテーション> 7月4日(火) 12:10～1:10 ・班構成 ・調査研究事項確認 ・調査研究計画 ・実行プラン ・その他	○文献調査 ○WEB等による実情把握 ○活動中の学生に対する聞き取り調査	○収集した情報のまとめ
3)国際理解教育にかかわる実情や課題等を文献や実際の活動から把握する。		○文献調査 ○WEB等による実情把握 ○活動中の学生に対する聞き取り調査	→→ →→ ○収集した情報のまとめ
4)学生によるこれまでの活動内容について理解し、まとめる。		○関連資料の文献調査	→→ ○収集した情報のまとめ

<p>5)「外大方式」(留学生と日本人学生による活動)ができあがってきた背景や経緯をまとめる。</p>	<p><学生フォーラム班></p> <ul style="list-style-type: none"> ・構想→企画 ・内容 ・予算 ・招待者の有無 ・会場等の予約手配 		<ul style="list-style-type: none"> ○文献調査・聞き取り調査を踏まえ、JSL児童生徒向けの教材教具に関わるニーズ分析・検討 	<p>→→ →→</p>
<p>6)「外大方式」と活動の課題、成果を検証するために、派遣先学校の教師や児童生徒を対象に聞き取り(アンケート)調査を行う。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ○調査対象校の選定、連絡 ○アンケート企画 ○質問紙の検討、作成 	<ul style="list-style-type: none"> ○アンケート調査実施 ○聞き取り調査 ○モデルとして構築 	<p>→→ →→ →→</p>
<p>7)この方式の有効性を検証しつつ、一つのモデルとしてまとめる。</p>				<ul style="list-style-type: none"> ○調査結果のまとめ、検討 ○外大モデルの検証作業
<p>8)今後の活動に資するアドバイスをまとめる。</p>				<ul style="list-style-type: none"> ○文献調査・聞き取り調査を踏まえ、今後の活動に役立つ基礎資料の作成 ○「学生フォーラム」への発表準備、資料作成 <p><報告書作成・完成></p>

4. 多文化共生推進活動

4-1. 外語祭展示「巨大すごろく」

報告者: 秋田 祐実(外国語学部ポルトガル語専攻2年)

日時: 2006年11月22日～26日

場所: 東京外国語大学研究講義棟111教室

主催: 東京外大在日外国人交流ネットワーク Amigos

(1) 第84回外語祭 Amigos 企画内容

私たち東京外大在日外国人交流ネットワーク～Amigos～は、第84回の外語祭に室内の展示企画として参加しました。学内の学生をはじめ、一般のお客さんも多数来場される学校の行事で、私たちの活動を多くの方々に知ってもらうことを目的に、Amigos のサークル紹介と今まで行ってきた活動の紹介をパネルにて行いました。それと同時に今年、在日外国人の中でもブラジル人に焦点を絞り、その長い移民の歴史を巨大なすごろくに紹介しました。2008年に移民100周年を迎えるにあたり、来ていただいた多くの方々にその歴史をすごろくという形で実際に体験してもらうことにより、よりよく知ってもらいたいということが私たちの想いでした。例年に比べ、大変多くのお客さんに足を運んでいただき、様々な激励のコメントをいただきました。特に今年はテレビ局の取材や移民資料館の方々、ポルトガル語専攻 OB/OG や日本の大学で勉強するブラジル人留学生・日系ブラジル人の方々などにも来ていただき、様々なお話を聞くことにより自分たちも同時に多くのことを教わりました。半年にわたる準備はとて大変なものでしたが、結果的には非常によいものに仕上がったと思います。企画を行うことで自分たちも様々なことを学ぶことができたのが大きな収穫です。来年再来年と企画の質を高め様々なことに挑戦していきたいと思います。

(2) 活動の流れ

5月上旬 室内企画という形での外語祭への参加を決定

5月17日～30日 外語祭企画登録

5月31日 第一回外語祭企画代表者会議

(以後月2回 12月6日まで)

6月16日 企画案の募集

7月 企画決定

10月18日

・ 外語祭までの活動の流れを記載した書類配布

・ 移民の歴史すごろくおよび活動紹介の調べもの開始

10月27日 コマの調整 担当者の決定

11月10日

・ すごろくのコマ、活動紹介の細かい内容・形式の決定

11月13日

・ すごろく・Amigos 紹介の作成のための台本

・ 完成した企画をイメージした設計図作成

→ 作業開始!

11月14日

・ Amigos 引継ぎ資料に記載された関係者に外語祭
宣伝ポスター配送

11月21日 準備日

11月22日～26日 第84回外語祭(111教室)

11月27日 片付け日

(3) すごろくのコマ

1) 1908年

- ・ 笠戸丸に乗ってブラジルへ出発! …スタート
- ・ コーヒー農場で雇われ、働き始める …1 マス進む
- ・ 朝から晩まで仕事。大変だあ…スクワット2回
- ・ コーヒーが高く売れなくなり、生活が苦しくなる…1 回休み
- ・ 新たにやってきた日本人の仲間が増える …2 マス進む
- ・ コーヒーがたくさん実る …1 マス進む
- ・ ブラジルで日本人と結婚
- ・ 日本人会を作る
- …遠い日本を思い出して、好きな童謡のサビを歌おう

2) 戦時中

- ・ 弟がマラリアで死んでしまう。
1915年～:マラリア・イナゴ・干ばつ・霜などに苦しむ。
…1 マス戻る
- ・ 生活が少し楽になる
1921年:日本の政府がブラジル移民への援助を始めた
…2 マス進む
- ・ 仲間が増えてうれしいな♪
1929～34年:ブラジルへ渡る日本人の数が最も多い時期
…1 マス進む
- ・ 日本語が使えなくなってしまう。
1930年～:ヴァルガス政権による同化政策で自由に生活しづらくなる
(同化政策=移民の生活様式や思想、言語を強制的にブラジル風に変える政策)
…ポルトガル語で「おはよう」と言おう“Bom dia!”
- ・ クイズ:最初の移民はブラジルのどこに着いたでしょう?
①サントス ②リオ・デ・ジャネイロ
*教室の中にヒントがあるよ!…正解したら3 マス進む
- ・ 両親と連絡がとれなくなってしまう。
1941年:日本とブラジルが国交断絶し、寂しい思いをする
…1 マス戻る
- ・ ブラジルで子どもが生まれる(二世誕生)
…1 マス進む

3) 戦後(二世ゾーン)

- ・ 戦争は終わったが、負けたという人と勝ったという人との間で争いが起こる
- ・ ブラジル人の恋人ができる♪やったあ～
…2 マス進む
- ・ ブラジルで日本人社会を形成してブラジル社会に溶け込んでいった
…1 マス進む

4) 入管法

- ・ 日本に行けるチャンス!
1990年:日本の出入国管理法が改正される

…日本語の練習に「となりの客はよく柿食う客だ」を
2 回言おう

- ・ 飛行機に乗っていざ日本へ …3 マス進む
- ・ おにぎり工場で働く。肉体労働はつらいよ …1 回休み
- ・ 生活も安定。家族を日本によびよせる …1 マス進む

5) 現在・未来

- ・ クイズ:「日本のブラジル」と呼ばれる都市はどこでしょう?
①群馬県大泉町 ②新宿区大久保
*教室の中にヒントがあるよ!…正解したら2 マス進む
- ・ 子どもが学校から泣いて帰ってくる。
日本語が分からなくてつらい …1 マス戻る
- ・ 日本の友達と一緒にブラジルのお祭り“フェスタジュニーナ”に参加 …サンバを踊ろう
- ・ 日本で開いたブラジル料理店が大繁盛! …2 マス進む
- ・ 外語祭に出かける
…ブラジル風ソーセージ リングイッサを食べる
- ・ 2008年:日本人ブラジル移民100周年を迎える
→式典に参加するためブラジルへ行く
…ゴール

(4) 客者統計

	10時 ～12時	13時 ～15時	15時 ～17時	計	平均
22日	11人	16	0	27	13.5
23日	32(以上)	47	34	113	37.6
24日	4	15	0	19	9.5
25日	33	40	20	93	31
26日	30	35	39	104	34.6
計	110	153	93	356	
平均	22	30.6	31		

(5) 来客者感想

- ・ ブラジルについてとても勉強になりました
- ・ Foi muito divertido.
- ・ ブラジル移民が辛い道のりをたどっていて悲しかったけど、すごろくは楽しめました

- ・ゲームは楽しかったです
- ・結婚して子供までできたのにそのあと恋人ができました。不思議
- ・〇〇さんに勝った！
恋人もつくらないで旦那とゴールしました
- ・〇〇ちゃんに勝った！サンバを踊りました♪支援の説明ってかたいイメージがあるけど、こういう展示のやり方とても楽しくていいと思います
- ・在日外国人については日本人として何が出来るか課題があると思います。これから色んな形で情報交換できたらいいです
- ・私は、移民の事・戦争の事など少しは知っていたけど、こんなに色々な事が分かったので良かったです
- ・いろいろなブラジルのことをしれてたのしかったです
三年生の時にブラジルのことをしらべた時にならったこといいにもはじめてしたこといっぱいありました
- ・さいころをころがすところがとてもたのしかったです
- ・在学中にこのサークルがあったら入りたかったです。
がんばってくださいね(ポル科卒業生)
- ・弟と一緒に楽しませてもらいました
- ・活動のことがよく分かった
- ・たのしかった
- ・展示の文字の位置をもっと上にすると読みやすくなると思います
- ・移民のこと調べてあって楽しみながら勉強できます
- ・写真をとるのがおもしろかった
- ・群馬以外にもブラジル移民がいるとは知りませんでした
- ・よく調べて、スゴロクもうまく作っているなと思いました
ブラジル国籍の人間も日本人のことをもっと知ろうと努めて欲しい
- ・面白かったです
- ・ブラジル移民の歴史がよくわかった
- ・地道な活動に熱心にとりくんでいてよくわかりました
- ・問題意識を持って取り組んでいることに対して敬意を表します。私はいつも思うのですが、問題が提起されて話題になり…それで終わってしまうことが多いのですが、問題が解決されるまで地道にいつまでも取り組

んで下さい。そして問題の根本は何か他の事柄とどうつながっているかよく考えてください

- ・単に紹介しているだけでなく、問題に対して具体的な行動をしており、それがとても参考になりました。私はインドネシアや韓国からの留学生とよく話をしますが、なかなか日本になじめない人もいるので、なんとかしてあげたいと常々思っていました。私も皆さんのようにがんばりたいです
- ・ポルトガルには一度行ったことがあります。ブラジルには行ったことがありませんが、スゴロクをやって少しはブラジルの文化に触れることができたかなと思います

(6) 質問されたこと

- ・1921年日本政府の援助って具体的に何？
- ・全部で何人移民した？
- ・日本にいるブラジル人は何人ぐらいいるか？
- ・どこが移民を推進したか？
- ・ブラジル人児童だけ対象なのか？
- ・大泉に多い工場の企業名は？
- ・大泉町って太田市ですっけ？
- ・Amigosってどういう意味？
- ・移民って何？
- ・“勝ち組”“負け組”って？

(7) 写真





4-2. フェスタジュニーナ

報告者: 加藤 麻衣(外国語学部ポルトガル語専攻2年)

日時: 2006年6月18日(日)

場所: 横浜市立潮田中学校

活動内容

フェスタジュニーナというのはブラジルの収穫に感謝するための伝統的なお祭りであり、鶴見区では IAPE(外国人児童生徒保護者交流会)が中心となり、ブラジルの文化を地域の人々に知ってもらうため数年前から開催されています。

今回、私たちはこの運営の補助をさせていただきました。その内容は、会場となった体育館の飾りつけなどの設営、飲み物や催し物のチケットの販売、そして会場の後片付けなどです。

当日の会場は児童やその保護者、地域住民などであふれかえていました。中にはチェック柄のシャツにそばかす風のメイクといった格好の児童も見られました。また、地域のお店によるブラジル料理、お菓子の販売やゲームなどの催し物のほかに児童、生徒たちによって、ブラジル

の伝統的なダンスである「クアドリーリャ」や格闘技ダンス「カポエイラ」などの発表が行われました。

当日チケット売り場には多くの日本人児童も詰めかけ、ブラジルの文化に大きな興味を示していたように思われました。

以下、当日の様子です。



4-3. 日本通訳学会

報告者: 中村 未央 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)

日時: 2006 年 9 月 23 日 (土・祝) 17 時～17 時 30 分

場所: 東京外国語大学 第一会場

参加者: 中村 未央 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)

和田 更沙 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)

奥出 桂子 (大学院博士前期課程国際コミュニケーション専修コース学年)

(1) 通訳学会の趣旨

第七回年次大会のテーマは、「多言語・多文化社会における通訳者の役割」(“The Roles of Interpreters in Multilingual and Multicultural Societies”)であった。午前の基調講演から午後の各研究発表まで、多言語・多文化化する社会において通訳の立場からどのような貢献が可能かという軸をもとに構成されていた。

私達の発表は中でも「コミュニティ通訳関連テーマ」という分野に位置付けられ、教育現場に入り通訳的な役割をもって活動したという経験について紹介した。

(2) 発表の要旨

学会プログラムに掲載された要旨文は以下の通りである。

「自分達が学んでいる外国語を生かして草の根レベルでの活動をやりたい」というポルトガル語専攻の学生 20 名ほどが中心になって始まった学生ボランティアグループ「東京外大在日外国人交流ネットワーク～Amigos～」は今年で 4 年目をむかえた。同グループはこれまで川崎市や新宿区の小学校でおもにブラジル人児童への学習支援ボランティア活動を行ってきた。東京外国語大学では、この学生の活動を受けて 2004 年 10 月に『多文化コミュニティ教育支援室』を開設し、『Amigos』の活動支援だけでなく、同支援室主催の各国語専攻学生や留学生による公立小中学校の国際理解教育ボランティア、府中国際交流サロンでの日本語学習支援ボランティアなど活動の幅を広げている。また、同支援室は研修プログラムや調査研究の実施、

多言語多文化社会論講座の開催等を通じて、多言語多文化共生推進活動を行い、さらに本年 6 月には「多言語・多文化教育研究センター」を発足させた。

今回は公立小学校における外国人児童への学習支援としてのボランティア通訳活動を実践者が報告し、多言語多文化社会における通訳者の役割の一例を提示したい。

(3) 発表内容

発表は導入として「ニューカマーと学校教育」の現状について述べた後、「1.活動の歴史と概要」、「2.活動内容」、「3.活動を通しての感想及び問題提起」、「4.東京外国語大学の取り組み」と続く。では、以下で付録のパワーポイント資料に沿って、発表内容を追っていく。

<導入> ニューカマーと学校教育

現在日本では、益々増加するであろう外国人人口と、それに伴う外国人児童への教育ニーズの高まりが話題となっている。平成 17 年度の外国人登録者数は 200 万人の大台を突破し、日本総人口の 1.57%を占めている。その内訳において注目すべき点は、オールドカマーと呼ばれる韓国・朝鮮(30%)および中国(26%)出身者が大多数を占めるだけでなく、ブラジル(15%)、フィリピン(9%)、ペルー(3%)出身者といったニューカマーの人々、すなわち 1980 年代後半から議論された出入国管理法改正の前後に多数やってきた人々が存在力を増しているということだ。

この傾向は、日本の学校現場にも影響を与えつつある。日本語指導が必要な外国人児童生徒は、平成 16 年度に約 2 万人を数えた。平成 17 年 9 月現在、中国語を母語とする児童生徒の約 4600 人に加え、南米系外国人の急増によって、ポルトガル語(約 7000 人)やスペイン語(約 3000 人)を母語とする児童生徒が増え、学校・教育現場の日本語指導及び教科指導においても、これらの言語に通じる人材が必要となってきたのである。

1) 活動の歴史と概要

東京外大在日外国人交流ネットワーク～Amigos～は、2003 年に結成されてから現在で 4 年目を迎える。当初は

10名程度のメンバーから構成されていたが、2005年9月時点で、ポルトガル語専攻の学生30名とスペイン語専攻の学生1名が所属する。

このネットワークは当時、ポルトガル語専攻の学生数名とポルトガル語専攻の教師の間で共有された問題意識の芽生えから誕生したものである。外国人が増える一方で、その対応に手をこまねている地域社会の姿があった。この現状を前に何かできることはないだろうかという教師の呼びかけに対し、同じ問題意識を持った学生が、学生と言う立場で協力できることを模索し始めた。外国人に関わる領域は、医療や生活支援など多様である。しかし、学生と言う立場を十分に生かすことができるという観点から、Amigosは子ども達と関わること、つまり教育に焦点を絞ることにしたのである。

まず活動の対象となる学校を探すために、東京都や千葉県、神奈川県や埼玉県などの教育委員会に連絡を取り、ブラジル人児童生徒の在籍状況について調べた。(当初はポルトガル語に通じているメンバーしかいなかったためである。)しかし、教育に関して知識も経験もない学生の活動に理解を示してくれる教育機関は少なく、門前払いされることが多かったようである。ようやく理解を示してくれたのが、川崎市の教育委員会・川崎市総合教育センターであった。川崎市立殿町小学校にブラジル人児童がいるとの紹介を受けて、2003年5月より学習支援ボランティア活動を開始した。これ以降、川崎市との結びつきができ、翌年2004年7月からは川崎市立京町小学校でも活動が開始される。

2004年10月には「多文化コミュニティ教育支援室」が開設される。これによって、Amigosの学生自身が負担していた小学校までの交通費は、全額支給されることになった。また、学習支援活動をするに当たって生じるトラブルや悩みに対しても、当支援室のスタッフからのアドバイスを受けようになり、徐々に体制が固まってきたといえる。

2005年11月に2年間ほど継続していた殿町小学校の学習支援ボランティア活動を一時休止した。その理由は、対象児童の日本語能力がAmigosの支援継続を必要とするものでないレベルに達していることや、学習支援の範囲

を越えた生活への支援(児童保護者の職業探しなど)が求められることがあり、学生という立場では対応しきれないと判断したためであった。また、翌2006年3月には支援を必要とする対象児童がいなくなったため、京町小学校の学習支援活動も一時休止した。そして、同年6月には支援室とつながりのあった新宿区大久保小学校で新規に活動を開始することになった。

次に、年間活動の流れについて紹介する。まず年度始めの4月に対象校と連絡を取り、外国人児童数、学年、訪問希望曜日(通常、日本語指導等協力者の学習指導がない曜日・時間に設定される)について調査する。条件が合うと、5月に顧問の教師と学生が学校に挨拶に行き、契約を交わし、訪問を始める。殿町小学校に関しては、各学期末の7・12・3月に児童の通知表を受けとり、学生メンバーで分担して翻訳作業をする。

2) 活動内容

前述したようにAmigosの学習支援活動は川崎市と新宿区の小学校で行われた。学校の違いによって、学習支援の形態や支援の仕方に違いが見られる。以下で二つの地域の小学校における活動内容を、それらの違いにも焦点を当てながら、具体的に見ていく。

・川崎市の小学校の例

対象児童は3年生のブラジル人児童2名である。支援は週に1~2回で、児童一人につき一人の学生ボランティアを派遣した。支援内容は、「学校-家庭間のコミュニケーション支援」と「教室内での学習支援」である。

「学校-家庭間のコミュニケーション支援」とは、日本語をよく解さない対象児童の保護者と学校との連絡をスムーズにさせるよう、仲介的な役割を果たすことである。通知表や学校からのプリント、入学案内の翻訳をしたり、家まで訪問して保護者に学校からの連絡事項を通訳したりする。

「教室内での学習支援」とは、教室に入り、支援対象児童の横に椅子を持ってきて座り、児童の質問に応じる形態である。担任教師の言葉を必要に応じてやさしい日本語やポルトガル語で言い換えたり、「わからない」とすぐ勉強

を諦めてしまいがちな児童に「一緒に勉強しようね」など声をかけて学習を促したりする。

・ 新宿区の小学校の例

対象児童は1年生のブラジル人児童1名である。学生が週に2回、各一人ずつ訪問した。支援は5月から始まり、これまで約半年間続けている。支援内容は川崎市の小学校の例と同様に「教室内での学習支援」であるが、その形態は、対象児童だけでなくクラス全体の学習の様子を見るという点で川崎市のものとは異なる。

この学習支援形態における違いは、学校環境・雰囲気の違いに根ざしているものだ。新宿区の小学校の場合、近隣に新宿や池袋といった繁華街があり、この地域で働く外国人にとって住みやすい場所である。そのためこの小学校にも外国人児童が多く、韓国、中国、スペイン語など6カ国語対応をしている。そのため、教室で支援を行う際は対象のブラジル人児童だけ特別扱いするのではなく、クラス全体を回り他の児童の様子も同じように見ることが重要である。

また、担任教諭の言葉をわかりやすく言い換えるとともに、ここでも児童に学習を促すことが特に大切である。低学年であるため、教師の話すことを聞き逃していることも多いからだ。次の学習の準備が遅れているときは、他の児童と比べて学習に遅れが出ないように声をかけたりする。

3) 活動を通しての感想及び問題提起

活動をしていて良かったと感じた点が、3つある。

第一に、学校と保護者間のコミュニケーションの手助けができたことだ。川崎市の小学校の例であったように、日本語を十分に解さない保護者とその対応・コミュニケーションに困っている学校との仲介役を果たすことができた。手紙の配布といった日常的な支援から、保護者と先生との面談の通訳まで、言語を生かして支援することができた。

第二に、担当児童の成長を見守ることができたことだ。確かに、外国人児童の学習支援は一朝一夕に結果が伴ってくるものではなく、自分達の支援が児童にとってどのように役に立っているのか見えにくい。しかし、数ヶ月という長

い期間で児童に向き合っているからこそ見える児童の成長過程に感激することもある。ひらがなが書けなかった児童がひらがなを書けるようになった時など、ささいなことではあるが、やりがいや充実感を感じることができるものである。

第三に、訪問した各小学校が学習支援の意義を認めてくれ、やりがいがあるという点である。Amigos が発足した2003年度から今年度で4年目になるが、このように学習支援を継続することができたのは各学校からの理解があったからである。前述したように、活動を始めて1年後に殿町小学校での私達の活動を知った京町小学校から派遣の依頼を受けた。殿町小学校から京町小学校へ、川崎市から新宿区へと活動を展開することができたのは、各小学校が私達の活動の趣旨をよく理解し、迎え入れてくれたことにはかならないだろう。

逆に、活動を通して困った点を3点挙げる。

まず、役割の範囲が明確でない点である。「担任教師のやるべき範囲までやっていないか」、「教師の『手伝い屋』になっていないか」ということで常に私たちは葛藤してきた。その原因は、ボランティアと教師の役割の境界が曖昧である事が多いからだ。例えば、川崎市の小学校の場合、教育とは直接関係ない保護者の職業相談にメンバーが乗るといった事例があった。役に立ちたいという思いはあったとしても、知識や経験の面で不十分な学生の立場でどこまで可能であるか、学習支援ボランティアのやるべきことは何かを明確にすることが必要である。

第二に、外国人児童だけでなく、周囲の児童にも十分に対応・配慮していかなければならないことだ。しばしば、日本人児童から「なぜあの子だけ特別扱いするのか。」と問われることがある。外国人児童の学習や学校への適応を手助けするはずの私たちの存在が、逆に、彼らは特別だという意識を他の生徒に与えることになってしまっている。たとえ対象児童の横に座って支援を行う時も、時には教室内を回って他の児童の質問に乗ったり、声をかけたりする必要がある。

第三に、児童のやる気をいかに引き出すかという点である。対象児童は時に、勉強ができないから授業が楽しくないと考え、勉強にやる気を出さないことがある。授業に興

味を持たず集中することができないと、周囲の児童にちょっとしたかきを出してしまうこともある。そのため、児童が問題を解くことができたらくちめてあげて自信を持たせたり、授業の中身を楽しいと思ってもらうように注意を促したりするようにしている。

このように私達 Amigos の学習支援活動は、児童生徒、保護者、教師の関係においてスムーズなコミュニケーションができるように言語を介して手助けすることであるが、逐次話していることを通訳するだけではない。特に児童の学習を見る場合にはむしろ、周囲の日本人児童生徒との関係に気遣うことや、学習に対する児童のやる気を引き出すことなど、言語面を越えた人と人との関わり方の工夫がより重要になってくるだろう。

最後に、今後の活動について述べる。2006年度の活動の中心は大久保小学校の学習支援活動である。週2回程度、それぞれボランティア一人ずつの支援で対応する。また、川崎市の学校から依頼される通知表の翻訳活動も継続する。来年度の活動に関しては、年度始めに受ける各学校からの依頼次第である。

4) 東京外国語大学の取り組み

まとめとして、本学の多言語・多文化社会に貢献する取り組みについて紹介する。

・ 多文化コミュニティ教育支援室

当支援室における活動の柱は、「国際理解教育」と「学習支援活動」である。「国際理解教育」とは、留学生と日本人学生が一緒になってグループを作り、小中学校に訪問して留学生出身国の国や文化を授業で紹介し、異文化に対する理解を深めてもらう試みである。「学習支援活動」は、Amigos の他に、府中国際交流サロンでの活動がある。支援室はその二つの柱の活動において、学生ボランティアの派遣、学生ボランティアへのアドバイス、交通費等補助といったサポートをしている。

・ 多言語・多文化教育研究センター

当センターは多文化コミュニティ教育支援室の活動をさ

らに発展させ、「教育」「研究」「社会貢献」の3分野を活動の柱とし、自治体、国際交流団体、企業などの要請に応えるために平成18年4月に設立された。

教育の取り組みとして、学部生を対象とした「Add-on Program 多言語・多文化社会」が本学ですでに開始されている。これは、多言語・多文化共生社会に関する教育で、理論的な部分だけでなく、実習など実践的な活動も含むプログラムである。

その他にも、研究会や教材開発を中心とした研究活動や地域社会への貢献を目指した社会連携活動にも活動を展開している。

(4) 参考資料

・ 法務省入国管理局(2006)

『平成17年度末現在における外国人登録者統計について』
法務省入国管理局ホームページ

<http://www.moj.go.jp/PRESS/060530-1/06530-1.html> .

・ 文部科学省(2006)

『日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査(平成17年度)の結果』平成18年4月26日
文部科学省ホームページ

http://mext.go.jp/b_menu/houdou/18/04/06042520/001/001htm

学生ボランティアグループ 「アミーゴス」活動報告

東京外国語大学大学院 奥出桂子
東京外国語大学 和田更沙・中村未央

ニューカマーと学校教育

- 外国人登録者数200万人突破(平成17年)
総人口の1.57パーセント
韓国・朝鮮 30% 中国 26% ブラジル 15%
フィリピン 9% ペルー 3% 米国 2.5%
- 日本語指導が必要な外国人児童生徒
約2万人 (平成16年度)
ポルトガル語 約7000人 中国語 約4600人
スペイン語 約3000人

発表の流れ

- I 活動の歴史と概要
 - 1.「アミーゴス」誕生
 - 2.活動年表
 - 3.年間活動スケジュール
- II 活動内容
 - 1.学校と保護者のコミュニケーション支援
 - 2.教室内での学習支援
- III 活動を通しての感想及び問題提起
 - 1.感想
 - 2.今後の活動
- IV 東京外国語大学の取り組み

活動の歴史と概要

- Amigosの誕生
 - 顧問の、学生に対する呼びかけ
 - 学生と言う立場で出来る事は？
...子供達と関わること
→教育に焦点を絞る
 - 東京都や千葉県、神奈川県や埼玉県などの教育委員会に連絡をし、ブラジル人児童生徒の在籍状況について調べる
...川崎市総合教育センターに川崎市立殿町小学校をして頂く

活動の歴史と概要

■ 活動年表

年	月日	活動内容
2003	4月	東京外大在日外国人交流ネットワーク(Amigos)結成
	5月	川崎市立殿町小学校にて学習支援ボランティア活動開始
2004	7月	川崎市立京町小学校にて学習支援ボランティア活動開始
	10月	「多文化コミュニティ教育支援室」開設
2005	11月	殿町小学校学習支援ボランティア活動一時休止
2006	3月	京町小学校学習支援ボランティア活動一時休止
	5月	新宿区立大久保小学校にて学習支援ボランティア活動開始

活動の歴史と概要

- 年間活動の流れ
 - 4月 今年度の依頼を調査
(人数、学年、曜日など)
 - 5月 挨拶、訪問開始
 - 7月、12月、3月(各学期末)通知表翻訳

活動内容

(川崎市の小学校の例)

- 対象 ブラジル人児童2名(3年生)
- 期間 約2年間
- 内容
 - 学校⇄家のコミュニケーション支援
 - 教室内での学習支援

活動内容

(川崎市の小学校の例)

- 学校⇄家のコミュニケーション支援
 - 翻訳(通知表、プリントや入学の案内など)
 - 通訳(学校からの連絡事項の伝達など)

活動内容

(川崎市の小学校の例)

- 教室内での学習支援
 - 形態 教室に入り、支援対象児童の横に椅子を持ってきて座る
 - 内容
 - 担任教諭の言葉を、必要に応じてやさしい日本語やポルトガル語で言い換える
 - 児童に学習を促す

活動内容

(新宿区の小学校の例)

- 対象 ブラジル人児童1名(1年生)
- 期間 約半年
- 内容 教室内での学習支援

活動内容

(新宿区の小学校の例)

- 教室内での学習支援
 - 形態 教室に入り、対象児童だけでなく、クラス全体の学習の様子を見る。
→当小学校には、他にも外国人児童が多く在籍するため
 - 内容
 - 担任教諭の言葉を、必要に応じてやさしい日本語やポルトガル語に言い換える
 - 児童に学習を促す

活動を通しての感想

- 良かった点
 - 学校、保護者間のコミュニケーションの手助けが出来た
 - 担当児童の成長を見守る事が出来た
 - 学校が学習支援の意義を認めてくれ、やりがいがある

活動を通しての感想

- 困った点
 - 役割の範囲が明確でない
 - 周囲の児童への対応や配慮
 - いかに授業に興味を持ってもらい、やる気を引き出すか

今後の活動

- 大久保小学校支援(週2回程度、それぞれ一人ずつ)
- 通知表翻訳

- 来年度の活動については、各小学校からの依頼次第

東京外国語大学の取り組み

- 多文化コミュニティ教育支援室
 - 国際理解教育
 - 学習支援活動 府中国際交流サロン
- 多言語・多文化教育研究センター
 - 教育 Add-On Program「多言語・多文化社会」
 - 研究 研究会 ワークショップ 教材作成
 - 社会連携 自治体国際化協会(CLAIR)委託事業
 - ブラジル人児童のための補助教材作成
 - 東京外国人支援ネットワーク相談会協力

4-4. 多文化多言語劇

報告者：阿部 靖子(外国語学部朝鮮語専攻3年)

(1) 活動趣旨

国際交流の日常化によって作り出された“多言語多文化社会”では、文化間の意識や常識の違いによる行き違いや問題が数多く発生し、試行錯誤の中で多くの解決策が考え出されてきた。そのような実際に起こった問題を取り上げ、それがどのように解決されてきたかを多くの人に伝えたいと思い、企画された。特に多文化交流で起こりうる問題をテーマとした脚本を作り、外語祭で上演して、その解決策を示すきっかけとなればとの思いであった。

おおまかな活動主旨としては、次の通りである。

- 1) 語劇を通して地域社会での多文化間交流の際に起こった問題を伝え、スムーズな交流のための情報を提供する。
- 2) 劇中に外語大ならではの多くの言語を用い、語学や言葉のおもしろさを伝える。

1)に関しては、『国際結婚』を選んだ。それは、いかなる国にかかわらず、結婚という問題が、私たちにとって身近な問題であるからである。現在いわゆる『国際結婚』は増加しており、今後私たちが結婚相手を選ぶ上で、起こりうる可能性もある。観客の皆様にも、劇の内容を、あたかも今後自分たちのこととして捉え、考えてほしくて、このテーマを選んだ。

2)に関しては、多言語を用いることによって、現在の日本の、多言語状態を表現することを目標とした。劇のあらすじ、また表現方法については、後述することにする。

(2) 活動概要

- 1) 東京外国語大学外語祭において劇を上演する。またその練習。
- 2) テーマである「国際結婚」について、取材など事前調査を行なう。
- 3) 2)に基づいて、脚本を作成する。今回はシェイクスピアの戯曲「真夏の夜の夢」を原作とした。

(3) 活動経過

7月	8/9月	10月	11月
・参加者募集 ・第一回会議 企画趣旨説明 ・脚本の 選定/作成 ・配役決定 ・映画鑑賞 (参考のため)	・取材 ・練習開始 9月1日 ～	・練習 ・脚本の修正 ・大道具/ 小道具/ 字幕 などの作成	・練習 ・広報に着手 (パンフレット /ポスター) ・本番 (11月23日) ・本番を踏ま えて反省

8・9月は夏休みのため、連絡を取りあうのが難しかった。

10月には夏休みに作成した脚本のおおまかな修正があり、苦労した。

(4) 活動メンバー

阿部靖子(外国語学部朝鮮語専攻3年)
 朽木夢(外国語学部ドイツ語専攻1年)
 居倉悠香(外国語学部英語専攻1年)
 吉永真紀子(外国語学部ドイツ語専攻1年)
 原田星来(外国語学部トルコ語専攻1年)
 砂田かおり(外国語学部ドイツ語専攻1年)
 竹田由佳(外国語学部中国語専攻2年)
 守屋久美子(外国語学部中国語専攻2年)
 河原新(外国語学部ロシア語専攻2年)
 門脇弘典(外国語学部フランス語専攻3年)
 溝端直毅(外国語学部ロシア語専攻3年)
 山田寛子(外国語学部フランス語専攻4年)
 山田洋平(外国語学部モンゴル語専攻4年)
 張仁瑄(ISEP)

(5) スタッフ割り当て

脚本・代表:阿部靖子、字幕:竹田由佳、舞台照明:守屋久美子、会計:原田星来、演出・企画:阿部靖子・朽木夢、音響:吉永真紀子、大道具・照明:原田星来、広報:砂田かおり

(6) あらすじと作中人物・設定

1) 当日パンフレットより

『言葉が通じなければ思いも通じない—考え方が違えば分かり合えない—ホントに？

語学教師として来日したばかりで、言葉の壁に戸惑うロシア人：アレクセイ。

日本語教師を目指し勉強する傍ら、ボランティア活動にも熱心な日本人：やす子。

ふとしたきっかけで2人は恋に落ちた。国を超えた幸せな日々、でも・・・

—「えっ、結婚?」「そろそろ真剣に考えてくれないか」「・・・」—
二人の思いは徐々にすれ違っていく。

人の意見は様々で、それぞれ自分の本当の気持ちを見失ってしまうアレクセイとやす子。

そんな悩める恋人たちを見かねて、妖精オーベロンとその弟子パックは魔法の指輪で手助けしようとするが・・・。

何語でも話せる指輪、あなたなら受け取る?それとも・・・』

物語は、日本人の女性とロシア人の男性の恋物語を軸としている。しかし、彼らにはさまざまな超えるべき課題を抱えている。家族、言語、どこで住むのか……。物語の前半は、舞台をT 外国語大学、F 中市に据え、このような問題を中心に展開していく。

しかし、ロシア人である主人公は、「日本語をもっとうまく話せるようになりたい」と願うようになる。そこで、彼が手に入れたのは「どんな言葉でも理解できるようになる指輪」であった。しかし、指輪には副作用があったのだ。それは、指輪を用いた人間は、人間界ではない、他の世界に行ってしまうことである。

そして後半では、この指輪によって、別世界にきてしまった人間たちを描く。この場面ではロシア語、英語、スペイン語、朝鮮語を用いた。それによって、現在の日本の多言語状態を表現している。

登場人物はそれぞれ、日本にいる外国籍の人を代表するような人物となっている。

(作中人物名、職業、国籍、使用言語)

アレクセイ: 語学学校講師

ロシア人: ロシア語

アジュンマ・在日韓国・朝鮮人: 朝鮮語

ステラ(フィリピン人、ダンサー): 英語

サントス(ペルー人、出稼ぎに日本に行こうとした): スペイン語

ジヒョン(韓国人、ニューカマー): 朝鮮語

2) 作中人物と設定

アレクセイ(河原新): ロシア人。大手英会話学校のロシア語講師として来日。27歳。アニメと漫画をきっかけに日本を知るようになる。日本語は余り話せない。F 中市在住。外国人登録のときに助けてもらった縁で、やす子と知り合う。

門脇やす子(山田寛子): 日本人。T 外国語大学大学院日本語教育博士前期課程2年。日本語教師として就職が決まっている。しかし、コクサイケッコンについてはやや消極的。24歳。…支援室で活動している学生に近い人物。

山田洋太郎(山田洋平): 日本人。T 外国語大学大学院日本語教育課程博士前期課程2年。将来は研究者を目指す。趣味はラグビー。一見調子が良いように見えて実は鋭い。25歳。

竹田直子先生(阿部靖子): やす子と洋太郎の指導教官。夫はブラジル人。

…「国際結婚」が身近にあるということを表現。

イワン(溝端直毅): アレクセイの友人。ロシア人コミュニティのうちの一人。

…外国人コミュニティを表現。

やす子の父(門脇弘典): 良き家庭人。…『国際結婚』に対し、反対意見を持つ人の代表。

ここまでが主に劇前半の登場人物である。前半は、『国際結婚』に関してやや消極的なやす子が、ゼミ仲間の洋太郎、指導教官との対話を通して、徐々に理解を示していく様子を示した。

妖精界: →主に後半、現在の日本の多文化多言語状態を表現。

パック: 明るいがうっかりモノの妖精。

オーベロン:妖精界の王。

外国人 1:サントス(山田洋平)。ラ米の出身。母語はスペイン語。

母国で失業。

外国人 2:ステラ(井倉悠香)。フィリピン人。

日本で働いた経験がある。

外国人 3:ジヒョン(張仁瑄)。韓国人。ニューカマー。

外国人 4:アジュンマ(阿部靖子)。在日韓国人一世。



~共生って大変だよね~

原作：真夏の夜の夢

11月23日(祝)10時 学生有志



この劇は、2つのテーマを掲げています。

1つ目は、多文化社会で起こりうる問題を劇という形で伝えること。2つ目は、外語大の特徴を生かして多言語を用いて劇をするということです。特に私阿部個人としましては、多言語を用いることによって現在の日本の多言語状態を表現したいと思っています。それが、普通の語劇との異なる点です。

まず、テーマとして『国際結婚』を選びました。それは、いかなる国にかかわらず結婚という問題が私たちにとって身近な問題であるからです。現在いわゆる『国際結婚』は増加しており、今後私たちが結婚相手を選ぶ上で起こりうる可能性もあります。劇の内容をあたかも今後自分たちのこととして捉え、考えてほしくて、このテーマを選びました。

物語は、日本人の女性とロシア人の男性の恋物語を軸としています。

あるきっかけで、2人は恋に落ちます。しかし、彼らにはさまざまな超えるべき課題を抱えています。家族、言語、どこで住むのか…。物語の前半は舞台をT外国語大学、F中市に据え、このような問題を中心に展開していきます。

しかし、ロシア人である主人公は『日本語をもっとうまく話せるようになりたい』と願うようになります。そこで、彼が手に入れたのは『どんな言葉でも理解できるようになる指輪』でした。しかし、指輪には副作用があったのです。指輪を用いた人間は、なんと人間界ではない、他の世界に行ってしまうのです。

そして、この指輪によって別世界にきてしまった人間たちを描きます。

たとえば、日系ブラジル人、フィリピン人、韓国人など、それぞれ日本にいる外国籍の方を代表するような人物が登場します。それは多文化社会の縮図となっています。

結末はあなたの目でたしかめてください。そして、あなた自身の問題として考えただければ幸いです。どなたでも楽しめるよう、コメディタッチに仕上げています。

また、この語劇は、多文化コミュニティ教育支援室を軸としてボランティア活動を行っている学生で組織され、各専攻語の知識を持ち寄って学生有志全員で脚本段階から少しずつ練り上げていったものです。不十分な点、至らない点など多々あるかと思しますので、ご意見・ご感想等がございましたらぜひアンケート用紙にてお知らせ下さい。

それでは私たちの「多文化多言語劇」、どうぞ最後までごゆっくりお楽しみ下さい！！

多文化多言語劇学生有志 代表

朝鮮語3年 阿部靖子



言葉が通じなければ思いも通じない—考え方が違えば分かり合えない—ホントに？

語学講師として来日したばかりで、言葉の壁に戸惑うロシア人：アレクセイ。
日本語教師を目指し勉強する傍ら、ボランティア活動にも熱心な日本人：やす子。
ふとしたきっかけで二人は恋に落ちた。国を越えた幸せな日々、でも・・・
—「えっ、結婚？」「そろそろ真剣に考えてくれないか」「・・・」—
二人の思いは徐々にすれ違っていく。
人の意見は様々で、それぞれ自分の本当の気持ちを見失ってしまうアレクセイとやす子。
そんな悩める恋人たちを見かねて、妖精オーベロンとその弟子バックは魔法の指輪で手助けしようとするが・・・。

何語でも話せるようになる指輪、あなたなら受け取る？それとも・・・

@人間界

- アレクセイ・・・ロシア人。大手英会話学校のロシア語講師として来日。F中市に
(アリョーシャ) 住む。来日当初は言葉の壁に苦しむが、徐々に日本語を覚えていく。
外国人登録の時に助けてもらった縁で、やす子と知り合う
- 門脇やす子・・・日本人。T 外国語大学大学院日本語教育課程修士2年。日本語教師として就職が決まっている。国際結婚についてはやや消極的
- 山田洋太郎・・・日本人。T 外国語大学大学院日本語教育課程修士2年。将来は研究者を目指す。やす子に思いをよせている、実はいいヤツ
- 竹田直子先生・・・やす子と洋太郎の指導教官。夫はブラジル人
- イワン・・・アレクセイの友人。ロシア人コミュニティのうちの1人
- やす子の父・・・やす子思いだがコクサイケッコンに関しては・・・??

@妖精界

- オーベロン・・・妖精界の王
- バック・・・明るいがうっかりモノの妖精。人間世界に興味津々
- サントス・・・日系ペルー人。母国で失業
- アジュンマ・・・在日韓国人一世。妖精界のカギを握る人物
- ステラ・・・フィリピン人。日本で働いていたが、事情により帰国

CAST & STAFF

脚本／代表・・・阿部 靖子（朝鮮語3）
演出／企画・・・阿部 靖子、朽木 夢（ドイツ語1）

アレクセイ・・・河原 新（ロシア語2）
門脇やす子・・・山田 寛子（フランス語4）
山田洋太郎／サントス・・・山田 洋平（モンゴル語4）
竹田先生／アジュンマ・・・阿部 靖子
やす子の父・・・門脇 弘典（フランス語3）
やす子の友達／ステラ・・・居倉 悠香（英語1）

市役所職員／イワン／オーベロン・・・溝端 直毅（ロシア語3）
妖精①・・・キム インソン（留日センター）
バック・・・朽木 夢

字幕・・・竹田 由佳（中国語2）
音響・・・吉永 真紀子（ドイツ語1）
舞台照明・・・守屋 久美子（中国語2）
大道具／照明・・・原田 星来（トルコ語1）、
砂田 かおり（ドイツ語1）
会計・・・原田 星来
広報・・・砂田 かおり



Special Thanks to....

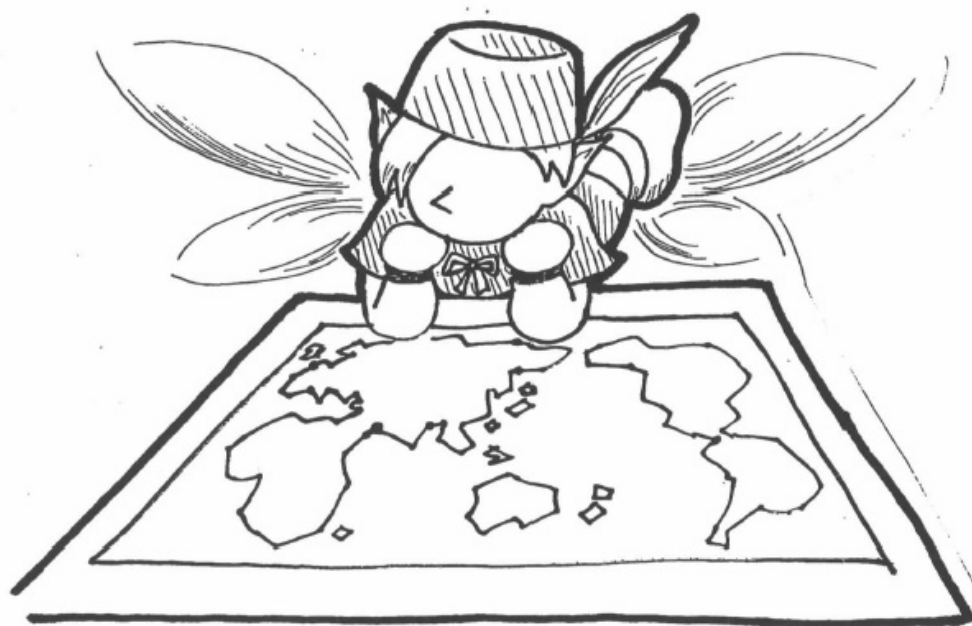
多文化コミュニティ教育支援室運営委員のみなさま

アドバイザー 武田 千香先生 (同運営委員長)
伊東 祐郎先生 (同運営副委員長)
河路 由佳先生 (同運営委員)
取材協力 青山 亨先生 (同運営委員)
森朴 憲治さん (同運営委員)

本日この講演に足を運んで下さったみなさま

本当にありがとうございました。





2006. 多文化多言語劇

(7) 事前学習（取材について）

1) 「国際結婚」を主題として扱うために、取材を行なうことにした。その目的の一つはメンバー内で問題意識を共有する必要があったためである。二つ目は、外語祭で上演するので、不特定多数の人の目に触れる。そのために、事実にもとづいて脚本を作らなければならなかった。

2) 取材対象

青山亨(多文化コミュニティ教育支援室運営委員)
森朴憲治(多文化コミュニティ教育支援室運営委員)

3) 取材日時

森朴憲治 平成 18 年 8 月 7 日 12 時より 支援室にて
青山亨 平成 18 年 8 月 18 日 14 時より インドネシア語
専攻共同研究室(633)にて

4) 取材メンバー

8 月 7 日 森朴運営委員
聞き取り:居倉悠香、阿部靖子、溝端直毅
書記:山田寛子
8 月 18 日 青山運営委員
聞き取り:阿部靖子、溝端直毅、山田寛子
書記:居倉悠香

5) 質問票

- ・ どこで、どうやって知り合ったのですか？
- ・ 国際結婚をして大変だったこと、よかったこと
 - ー 大変だったこと・特に結婚に伴ういろいろな手続きの問題(婚姻届提出時、戸籍などの問題について)、両親の反応はどうだったか、生活をして文化(言語)の違いによって、大変だったことはありましたか？
 - ー よかったこと
- ・ こどもの問題
 - ー 出生届や戸籍など制度上の問題について
 - ー 子育て方針/教育などに両国の考え方の違いなどはあったか？
- ・ 演出や、問題提起に関して、どんな劇にしたいですか？

(8) 実践を踏まえて

1) メンバーより

今回、役者として参加させて頂き、本当に楽しく、また、多文化社会の実態についての知識もかなり得られ、非常にためになった。来年に向けて、私はメンバーの確保が重要だと思う。「多言語で劇をやる」という画期的な企画なのだから、やはり大掛かりなものをやりたいし、今回問題となっていた集まりの悪さは、人数が多ければある程度は補えると思う。今回で多くの人にこの企画を知ってもらえたと思うので、来年に期待したい。
(英語専攻 1 年 井倉悠香)

台本の改訂がぎりぎりまでつづき、全て間に合わせのものになってしまった気がする。メンバーの専攻・学年が違うがゆえのメリットは何か、またこの活動の目的は何か、追求していく必要があるのではないかと。自由参加の活動だからこそ、メンバーは最後まで責任をもって参加すべきである。でないと他の人に迷惑がかかる。支援室の他の活動と連携を深めたらどうか。
(中国語専攻 2 年 竹田由佳)

2) アドバイザーより

今回の多文化多言語劇は、学習中の言語を使用して各専攻の学生が演じる通常の語劇とは異なり、シナリオにおいて多文化共生社会の実現を目指すためのメッセージを編み出すという困難な作業に加え、様々な専攻語を学ぶ学生がそれぞれの言語で演じ、さらには専攻語とは異なる言語を話す役にあつた人はその言語でセリフを暗記するなど、シナリオ作りとセリフ作りの両方において、筆舌に尽くし難い苦労があつたと思います。そんな中、私自身、学生時代に3回語劇の舞台に立ちましたが、今回、自らの国際結婚の経験を通して、陰ながら 4 回目の語劇作りに携わることができたことは大変光栄に思いますし、代表者の阿部さんをはじめとする関係者のみなさんに敬意を表したいと思います。ただ、敢えて今後の提案を述べさせていただけるならば、今回は初めての試みでシナリオ作りやセリフ作りで精一杯だつたと思いますので、次回は外国人を

演ずることの役作りの向上を図ることに期待いたします。いずれにいたしましても、この語劇に携わった私たちが、今回の経験を活かして、劇の中だけにとどまらず、真の多文化共生社会の実現に寄与することを願ってやみません。

(森朴憲治)

(9) 反省・来年度に向けて

今年度は初めての試みであり、参加者も専攻や学年が異なったため、連絡やスケジュール管理などの困難があった。それでも、外語祭で劇という形で発表できたことは、参加者のみならずアドバイザーの方々や支援室の皆様の協力があったと考える。ここで厚く御礼を申しあげたい。以下反省点などを述べる。

第一に参加者からの指摘にもあったとおり、活動の趣旨を参加者間で掘り下げていく必要があっただろう。脚本の変更がぎりぎりまで続いたこと、また専攻・学年が異なることによる連携の困難さが多く指摘されている。これは初期段階の計画不足によるものと考え。初期段階で、参加者間で活動の趣旨を話し合い、その目的を把握し、脚本の作成から完成、そして当日まで視野に入れた計画をじっくり練るべきだったと思う。今回は諸事情により活動開始が7月と出遅れてしまったので、夏休みに入るまでに、脚本の完成・練習案など具体的な活動に入れるよう計画を練ることは必要である。

第二に演技力である。今回は演劇経験の有無が参加者によって異なった。演技力の強化のために、例えば発声練習の強化、演劇鑑賞などを通して、実際の演技以外の部分で演劇に触れる機会を増やしてほしい。

最後に言語と文化の問題である。当日、多文化多言語劇なのだから、その民族特有のジェスチャーなどを加えるべきではないだろうかという声が観客からあがった。参加者間でも、それぞれの言語に対する知識や、その言語の背景にある文化に対する知識の差異があった。私個人としては、その差異が本番直前になって目立ちはじめ、度重なる脚本の変更の原因となってしまったと考えている。活動開始前や活動の最中に、参加者間でそれぞれの言語や文化に関する勉強会などを開く必要があるだろう。その

他、スタッフ面の問題として舞台監督の必要性、事前の集金、留学生や教員が役者として出演したら面白いのではないか、広報面では時間のある夏休みにホームページを作成する、アンケートの実施等があがった。私は夏休み前の初期段階での十分な計画を練ること、参加者間で趣旨を話し合い、連携を深めること、そして夏休みを有効活用することがこれらの問題を解決する上で必要ではないかと感じた。

参加者の一部から上がった声だが、多文化社会の実態について参加者自身が学び、考え直すきっかけとなったということである。また支援室の活動に参加していたメンバーが、その経験を脚本に反映させてくれ、とても助けになった。だがその問題を観客に伝えるというのが今回の一番の目的だったが、それが若干弱かったと思う。語劇は多数の観客が訪れる。今年度の反省点を踏まえ、今後支援室の外の活動と連携するなどして、観客によりリアルに多文化社会の問題を感じてもらえるような劇にしてほしいと願う。最後までついてきてくれた参加者の皆さん、ご協力くださった皆様、本当にありがとうございました。

(朝鮮語専攻3年 阿部靖子)

4-5. 羽村日本語学習帳翻訳

報告者: 服部 聡依(外国語学部ポルトガル語専攻4年)

石井 まり(外国語学部ポルトガル語専攻2年)

(1) 経緯

2006年1月に、ホームページで Amigos の活動を知ったボランティア団体、「羽村日本語学習会」の代表者の方から連絡を受け、日本語学習帳ポルトガル語版の翻訳を依頼された。同団体のある東京都羽村市には多数の在日外国人が生活しており、同学習会では、在日外国人のための日本語教室を開催している。さらに教室で使用する教材として「日本語学習帳」を独自に作成し、英語、中国語、スペイン語の各言語に翻訳してきた。ポルトガル語版については翻訳者が見つからず、これまで作られてこなかった。しかし、羽村市には大変多くのブラジル人も生活し、働いている。日本で暮らす外国人への支援を活動目的と

する Amigos のメンバーは、彼らのためにも少しでも教材を役立てたいという代表者の方の強い思いに共感し、翻訳依頼を引き受けることにした。

(2)翻訳内容

依頼を受け Amigos では、2006 年の新学期より翻訳作業を始めた。100 ページ弱に及ぶ 1 冊の学習帳を、1 年生から留学経験のある 4 年生までで数ページずつ分担し、日本語からポルトガル語への翻訳作業を行っていった。

日本語学習帳は、在日外国人が日本で生活していく上で役に立つと思われる単語や、日本語独特の表現、言い回しなどを、それぞれ似ている動詞ごとに項目を分ける等(例えば燃やす、温める、焼く、消す、といった動詞を一つの項目にまとめている)、日本語学習会の代表者の方が独自に考案し、作成したテキストである。見開きのページごとにテーマが分かれており、各ページの上段に単語、下段にはそれらの単語を使った簡単な例文、というように構成されている。

Amigos では、翻訳していく中で、元々の日本語のテキスト原稿で使われている単語やフレーズ、構成の意味を壊さないよう、出来る限り忠実にポルトガル語に訳すことを心掛けた。表現したい日本語にあてはまる単語がポルトガル語にはない等、翻訳が難しい箇所もあったが、ブラジル人留学生に相談するなどして解決していった。完成した翻訳原稿は、再度ブラジルからの留学生にスペルチェックをしてもらい、完成した原稿を羽村日本語学習会へ引渡した。その後、学習会側による確認、訂正の要望に沿って再度修正を重ね、2007 年 2 月に最終的な完成原稿を引渡した。また、日本語学習帳の巻末には、翻訳者として Amigos の名前を載せていただくことになっている。

CADERNO DE CONVERSACÃO

NIHONGO GAKUSHÛCHÔ

〈 対話のヒント 日本語学習帳 (動詞編) ポルトガル語・語彙訳 〉

《 VERBOS 》

VERSÃO PORTUGUÊSA

6	行き い Ida	帰り かえ Volta	往復 おう ふく Ida e volta	発着 はつ ちやく Partida e chegada	乗り降り の お Embarque e desembarque	
駅 えき estação	会社 かいしゃ companhia	学校 がっこう escola	病院 びょういん hospital	買い物(に) か もの compras	へ 行く に い ir	いく
友達(が) ともだち amigo/amiga	お客(が) きやく hóspede	バス(が) ônibus	わたしの家(に) いえ minha casa	ここ(に) aqui	が 来る に く vir	◇ くる
会社 かいしゃ companhia	学校 がっこう escola	料理教室 りょうりきょうしつ aulas de culinária	歯医者 はいしゃ dentista	プール piscina	に 通う に かよ ir regulamente	WA
会社 かいしゃ companhia	学校 がっこう escola	仕事 しごと trabalho	買い物 か もの compras	旅行 りょこう viagem	から 帰る から かえ voltar	◇ RA
会社 かいしゃ companhia	友達の所 ともだち ところ casa do amigo	近所 きんじよ vizinhança	散歩 さんぽ passeio	買い物 か もの compras	に 出掛ける に でか sair	KE
学校(を) がっこう escola	ホテル(を) hotel	成田(から) なりた Narita	羽田(から) はねだ Haneda	ヨーロッパ (へ) Europa	を 出発する から しゅっぱつ へ partir	スル

5. 学生多文化フォーラム

5-1. プレ・学生多文化フォーラム

(1) 学生ディスカッション報告

報告者: 萩原 礼子(外国語学部ポルトガル語専攻 4年)

本プレ・学生多文化フォーラムは2006年12月2日(土)に行われた学生多文化フォーラムに先駆けて、本学学生ボランティアによる国際理解教育実践の総括をすべく、全6回のシリーズで学生ディスカッションと講演会、ワークショップを行った。

国際理解教育の実践は、各学校でコーディネーターが立てられてメンバーの募集をし、実践まで学校単位で進んでいくために、活動する学校が違えば学生ボランティア同士の交流がないという状況があった。さらに、授業の打ち合わせや準備に時間がかかり、では「国際理解教育」とは一体何かといった根本の課題についてじっくり取り組む時間や、学生ボランティアが行ってきた授業をいかに改善していくべきかなどについて考える機会がないというのも事実であった。

そこで、講演会では国際理解教育についての知識を深めること、学生ディスカッションでは学生の交流、意見交換をすることを目的として本プレ・多文化学生フォーラムを開催した。学生ディスカッションでは毎回、実際に授業を行った学生に実践報告をしてもらった。

また、学生多文化フォーラム当日に講演をいただいたキョウコ・ヤナギダ・ナカガワ先生に、プレ・学生多文化フォーラム・特別編「“デカセーギ”はこうしてやってくる～日系就労者支援事業最前線からの報告～」と学生多文化フォーラム・プレ講演会「ブラジルに帰った子どもたちのその後」と題してお話をいただいた。

プレ・学生多文化フォーラムの成果は学生多文化フォーラムの国際理解教育の部のとおりである。

プレ・学生多文化フォーラム プログラム

第1回 10月10日(火) 18:10～20:00

講義棟 313教室にて

学生ディスカッション「国際理解教育で何を伝えるか」

第2回 10月17日(火) 18:10～20:00

留学生日本語教育センター さくらホールにて

講演会「国際理解教育とその現状」

講師: 佐藤郡衛氏(東京学芸大学教授、異文化間教育)

第3回 10月24日(火) 18:10～20:00

講義棟 313教室にて

学生ディスカッション「国際理解教育の問題点どうしたら解決できるの？」

第4回 11月6日(月) 18:10～20:00

本部管理棟 中会議室にて

講演会「国際理解教育のあり方を考える」

講師: 山西優二氏(早稲田大学教授、比較・国際教育学)

第5回 11月7日(火) 18:10～20:00

講義棟 313教室にて

学生ディスカッション「外大生の国際理解教育のカタチ」

第6回 11月14日(火) 18:10～20:00

本部管理棟 中会議室にて

ワークショップ「国際理解教育実践現場から」

川崎市 小・中学校教諭

特別編 11月28日(火) 18:10～20:00

本部管理棟 中会議室にて

ワークショップ「“デカセーギ”はこうしてやってくる～日系就労者支援事業最前線からの報告～」

講師: キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ氏

特別編 12月1日(金) 13:10～15:10

本部管理棟 中会議室にて

プレ・講演会「ブラジルに帰った子どもたちのその後」講師:
キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ氏

各講演会・ワークショップの趣旨

複数回の講演会は既述したように国際理解教育に関する知識を深め、そもそも国際理解教育とは何かと掘り下げて考えようという目的で行った。

1 回目は佐藤郡衛先生に「国際理解教育とその現状」と題して、国際理解教育がどのようにして始まり、どのように現在のよう形になったのかについてお話をいただいた。4 回目では山西優二先生に「国際理解教育のあり方を考える」と題して、本学の特性から文化紹介や国にこだわりがちになっていた国際理解教育の実践を問い直すべく開発教育からの視点からも、ワークショップの紹介を含めてお話をいただいた。最終回では実際に学校の先生方を交えて、学生ディスカッションの中で出てきた疑問や不安に感じていることをもとに意見交換会という形でワークショップを行った。また特別編のキョウコ・ヤナギダ・ナカガワ先生には、多文化コミュニティ教育支援室のもう一つの柱でもある学習支援にも役立つであろうということで、ブラジルで生活される先生の視点から「デカセーギ」はこうしてやってくる～日系就労者支援事業最前線からの報告～と「ブラジルに帰った子どもたちのその後」と題してお話をいただいた。

国際理解教育授業実践報告

第1回学生ディスカッションより

報告者:門脇 弘典(外国語学部フランス語専攻3年)

1.実践内容報告(資料参照)

(1)ビデオ上映

授業の様子を撮影したビデオ(一部)を見せた。

(2)実践内容説明

特に名札作成と韓国クイズ大会について詳しく説明した。

2.問題提起

国際理解教育には2つの側面がある。「国」の理解と、「人」の理解だ。国の理解を柱にした国際理解の授業とは、子ども達に世界の国々についての知識をつけさせるものだ。この報告で紹介した授業で言えば、韓国クイズ大会がその例となる。その国の文化、言語、生活等を、語りや写真を使って子ども達に伝える。国際理解教育と聞いて、まず最初に思い浮かぶものだろう。

対して、人の理解を中心に据えた授業は、他者を受け入れる「寛容の精神」を育むことを目的とする。なぜ国際理解教育で人の理解を扱うかというと、自分との隔たりが大きい他者と付き合うときの方が、より寛容の精神を必要とするからである。近い他者との間では、お互いに特別の注意を払わずとも問題なく生活できるかもしれないが、遠い他者については、理解しよう、受け入れようという態度が求められる。自分との隔たりは、国籍の違いだけでなく、世代や出自の違いからでも生じるから、日本人学生が子ども達と授業をするのも十分意味がある。国の違いを必ずしも前提としないから、国際理解よりも異文化理解に近いかもしれない。この形の授業の例を挙げることは難しいが、報告した授業の名札作成も、人を題材にしたという点では、ひとつの例になるだろう。川崎市立宮前平中学校での国際理解教育も、いい例になる。

以上のことを踏まえ、本学の学生が目指す国際理解教育は、国と人、どちらをメインにすべきだろうか。

(資料)

2005年度東柿生小学校国際理解教育第2回活動報告書: 韓国班

報告者:門脇弘典(外国語学部フランス語専攻2年)

①タイトル ハングルで名前を書こう

②参加メンバー 金智恩(外国語学部日本語専攻2年)、林恵令(外国語学部日本語専攻2年)、朴志禮(外国語学部日本語専攻2年)、吉田麻里子(外国語学部英語専攻3年)、門脇弘典(外国語学部フランス語専攻2年)

③活動日時 11月14日、8:30～13:00

- ・1時間目:授業の流れと機材の確認、先生との打合せ
- ・2～4時間目:2年3組、2組、1組

- ・児童と一緒に給食
- ・佐藤公孝先生、水木先生と意見交換

④活動の目的

留学生と交流し、韓国の文化を知ることで、自分とは異なる国や文化に対する興味を引き出す。

⑤活動内容

行ったこと	児童の反応
<p>第1部 新しい留学生の紹介、前回の復習(5分)</p> <p>1)留学生当てクイズ再び</p> <p>林さんと朴さんのどちらが留学生か、2人とも留学生か当てる。</p> <p>林さんと朴さんが韓国語で自己紹介。その後日本語で自己紹介。</p> <p>2)前回の復習</p> <p>前回教えた韓国語の挨拶を復習。</p>	<p>(教室は前にスペースを空け、机を10ずつ3つにグループ分けして配置しておいてもらった。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月にも来たことを皆覚えていた。 ・「アニョハセヨ」はほとんどの子が覚えていたが、「アンニョン」はあまり覚えていなかった。
<p>第2部 名札作成、自己紹介(20分)</p> <p>1)ハングルで名前を書く</p> <p>練習用紙を配る。練習用紙には児童の名前(平仮名、ハングル(黒:お手本)、ハングル(灰色:なぞる))と四角(書き入れる)が書いてある。</p> <p>練習の後、自分の名札の裏にハングルで名前を書く。</p> <p>学生はクラスを回り書くのを手助け。</p> <p>2)韓国語で自己紹介</p> <p>「私は～です」は韓国語で「チョヌン～イムニダ」と言うことを教える。留学生がグループごとに分かれ、児童1人1人と韓国語で自己紹介しあう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・練習用紙を配ると「すごい！」「変なの！」などとはしゃいでいた。 ・楽しそうに書く子が多かったが、中には嫌がる子もいた。 ・書き順の質問が多く出た。 ・書く早さがばらばらで、早く書き終わって他の人の名前を書いている子もいれば手持ち無沙汰の子もいた。練習用紙に何度も書き直している子もいた。 ・「チョヌン～イムニダ」は言っただけでは覚えるのが難しく、黒板にハングルと片仮名で書いた。 ・自己紹介し終わった子は、友達同士でやっている子もいれば手持ち無沙汰の子もいた。
<p>第3部 韓国クイズ大会(15分)</p> <p>クイズは3択。留学生が教室の前3箇所に写真を持って立ち、正解だと思う所に集まる。制限時間は1問30秒で、移動中は韓国の童謡のCDを流す。</p> <p>クイズは6問とも「韓国の○○はどれでしょう？」形式で、○○はスポーツ、服、花、建物、お金、踊り。</p> <p>正解を解説し、一緒に繰り返し発音してみる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・クイズ大会をすると言う一気に盛り上がった。 ・集まった後立たせたままだと落ち着かないので、2クラス目からは座らせるようにした。 ・音楽が流れるとリズムに乗って楽しそうに踊る子もいた。 ・正解の解説を聞くのに集中できない子がいた。不正解の子は特に。 ・発音は大きな声でしていた。
<p>まとめ(5分)</p> <p>授業で何をやったか確認し、ハングル五十音表を配布。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・五十音表を配ると興味をいたくそそられたようで、私たちのことは眼中になかった。

反省点

×練習用紙が足りない、児童の名前が間違っているなどのトラブルがあった。余っている紙に即席で作ることで解決したが、このような事態を予想して対応することが必要。

×名札作成や自己紹介のときに何もすることがなくなってしまった子をどうするか考えていなかった。

×クイズの振り返りができるように、写真をプリントにして配ればよかったかも知れない。

・クイズの答えの選び方が「見たことのないもの・珍しいもの」に偏った気がする。

○子どもたちを静かにさせる方法を先生に教わったので、前回よりは楽だった。

○時間配分はぴったりだった。

学校からの意見

・クイズでなぜその選択肢を選んだのか聞けば、小学2年生なりの判断の仕方をうかがい知ることができて良かったのではないだろうか。

・名前を「書く」とこと、クイズで「楽しむ」とことのバランスが取れていた。

・繰り返し発音するのは2年生にはちょうど良かった。5年生だと言ってくれないかも知れない。

・お手本を配ったのは良かった。五十音表を見せただけでは難しかっただろう。

・写真を見せたのは良かった。言葉や文字だけでは何をしていたか分からなかっただろう。

・書くのがただの単語ではなく自分の名前だったので興味がそそることができた。

感想

今回は前回と違って、留学生が私を含め3人いたので私は非常に負担が少なくなりました。

今回はビジュアル的な材料をたくさん使い、子どもたちに理解を得ることも簡単に教える私たちの立場も楽だったような気がします。先生方からの評判もよくて大変満足しています。

クイズもハングルを書くという作業も大成功って感じで前回より子どもたちも、吸収するのが早かったし楽しくやって

いけたと思います。

時間割りもよくて、時間が余ることもなく足りなくもなく、ちょうどよかったと思います。

今回は予想以上の時間が余ってしまい、質問の時間があって子どもたちとの会話が出来ましたが、今回は質問タイムがなかったので会話ができなかったのが少しさびしいかなって感じです。

個人的には前回つかめなかった流れや授業の方式などを把握することが出来たかなと思います。これからはもっといい授業をやっていけると思います。(金)

今回の授業は小学校の2年生のレベルにちょうどよいプログラムを使ったと思う。ハングルで自分の名前を書く事は自分の名前だからこそもっと関心を持って書いたと思うし、クイズの時も写真を見せたり、またその写真を見ながら韓国語を発音して見たりした事が子どもたちにとってはわかりやすかったと思う。こういう授業は子どもたちにはなかなか経験できないものだったと思う。そういう点からみれば、ハングルで書かれた(私たちが事前の用意した)紙も、後でプレゼントとして渡したハングルの五十音図も子どもたちにとっては大切なものになるだろう。(林)

まず、今回東柿生の2年生の授業に参加することが出来て嬉しいと想います。45分という時間をどう使えば良いだろうという事と二つの事をどんな風につなげば自然な流れに進行させることができるかという所がとても気にかかりました。ハングルを書く作業も難しくて皆がちゃんとできてなかったらどうしようというのもありましたがお手本に添って練習させたのが効果的だったと思います。次回もよろしくお願いします。(朴)

2年生のレベルに合わせて、わかりやすい活動を心掛けましたが、2年生の子どもたちが何ができるのか、またどういいう活動なら興味を持って積極的に参加してくれるのか、予想するのが難しく、準備の段階でかなり悩みました。しかし実際に実践を行ってみて、子どもたちが楽しそうに取り組んでくれていたのがうれしかったです。

もちろん、すべての子どもが積極的に参加していたわけ

ではありませんが、例えばハングルで名前を書くのにこずっていた子も3択クイズでは主体的に参加できていたり、韓国語での自己紹介をいやがっていた子がハングルの五十音表をもらったときにとても興味を持っていて、うれしそうだったのが印象的でした。2年生の集中度に合わせるためだけでなく、いろいろな能力や興味を持った子どもそれぞれが参加できるように、1回の授業の中に、目線を変えた様々な活動を取り入れる必要があると感じました。反省点としては、クイズがそれだけの活動として完結してしまった部分があることです。ハングルとつなげたり日本にある似たものと比較する、などの工夫はしましたが、あとで振り返りができるように、プリントをつくって配付できればと思いました。また個人的な反省としては、子どもたちに韓国のことを質問されたときに、答えられないことが多かったことです。せっかく子どもたちが韓国に興味を持って、たくさん質問してくれたので、私ももう少し勉強しないといけないなと思いました。(吉田)

準備に手間をかけた分だけ子どもたちに興味を持ってもらえたと思います。児童1人1人のお手本、ハングル五十音表、クイズの写真など、留学生と日本人学生の総力を結集して作成しました。特に林さんと朴さんは今回が初めての参加だったにも関わらず、積極的に参加してくれたのでとても助かりました。

子どもたちは前回よりも成長して少し落ち着いた雰囲気でした。とは言ってもクイズのときは大はしゃぎで収拾するのが大変でしたが。

反省しなければならないのは、余裕を持って準備をすることができなかったことです。授業の内容がなかなか決まらず、十分時間をかけて話し合ったりリハーサルをすることができませんでした。次回はもっと早く動き出したいと思います。おおむね成功したと言えますが、課題も残す実践となりました。(門脇)

第3回学生ディスカッションより

報告者:河野千早穂(外国語学部ポルトガル語専攻1年)

1.実践内容報告

(1)授業内容説明(資料参照)

府中市立府中第七中学校で行ったブラジル班の授業内容を説明した。

- ・自己紹介(ブラジル人のパートナーはポルトガル語で行い、河野が訳した)
- ・地球儀を使いブラジルの位置を確認
- ・地図を使い、ブラジルの大きさ、それ故の気候の多様性を紹介
- ・写真を使ったブラジルの人種の多様性、料理の紹介
- ・実際に音楽をかけて、ブラジル音楽を紹介
- ・ブラジル観光ゲーム:ブラジルの名所などの特徴を記した紙を元に、多数の写真の中から、正しいものを選んでもらうというもの

(2)ビデオ上映

国際理解教育を行っている映像を流し、説明した内容に具体性を持たせた。

2.問題提起

当日のテーマである「国際理解教育の問題点を解決するには」の問題提起として、感想の中で国際理解教育を行ってみて感じたことや反省点などを述べた。

- ・当初、国際理解教育を他文化・国の紹介だととらえていたために、ブラジルについてのこちらからの一方的な情報提供になってしまった。しかし今回は学校側が後の調べ学習につながる内容を求めてきたので、それでも良かったとも考えられる。
- ・留学生との共同作業だったが、なかなか時間がとれず、直前までしっかりした構想が練れていなかった。もう少しお互いにコミュニケーションをとって、きちんと準備しておくべきだったと感じる。

3.感想

今までの活動の内容を報告するものだったが、用意した資料や発表内容に抽象的なものが多かったのは改

善すべき点だと思う。そのために出た質問にも、準備不足のための確な答えが返せなかった。しかし、プレフォーラムのような意見交換の場は非常に有意義な場であると思う。私もこの場に参加して、国際理解教育のとらえかたや、どのような活動が考えられるかなどについて様々な意見を聞くことができ、大変参考になった。他の人がどのような活動を行っているか知って、さらにそこから良い方向へ学んでいくためにも、このような活動が続いていくと良いと思う。

(資料)

府中市立府中第七中学校国際理解教室第1回活動報告書:ブラジル班

報告者:河野千早穂(外国語学部ポルトガル語専攻1年)

- ① チームネーム:ブラジルチーム
- ②参加メンバー:ファウスト・ペレイラ(大学院地域文化研究科博士前期課程日本語教育専修コース2年)、河野千早穂(外国語学部ポルトガル語専攻1年)
- ③活動日時:7月4日
- ④活動目的:ブラジルの地理、文化、言語などを紹介することでブラジルに興味を持ってもらい、その後の調べ学習に役立ててもらう。

⑤活動内容

行ったこと	生徒たちの反応
<p>1. 自己紹介</p> <p>2. 位置、気候、地理、人種紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地球儀上のブラジルを一人の生徒に代表で示してもらう。 ・地図を使ってブラジルの大きさ、それ故の気候の多様性を紹介。 ・写真を使ったりクイズを交えたりして、人種の多様性、国旗の由来、食事などを紹介。 <p>3. ブラジル観光ゲーム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・班ごとに、内容を示した紙を元に多数の写真の中から適当なものを選んでもらい、それを簡単に発表してもらう。こちらからも写真の説明を補足する。 <p>4. 音楽</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際に曲を流し、ブラジルの音楽を紹介。 	<ul style="list-style-type: none"> ・位置は分かっていた。 ・サンパウロ州と日本の本州がほぼ同じ面積だという説明で23倍を具体的に示したとき、驚きの声が多数上がった。 ・クイズなどには参加してくれたが、説明が長引くと集中力が切れてしまう生徒が多かった。 ・写真を探す段階では活発だったが、その後の発表ではやはり集中力が持たなかった。 ・音楽が流れると生徒の顔があがった。

改善すべき点

こちらの説明ばかりではなく、実際体を動かしたり考えたりする、もっと生徒が参加できるものが望ましかった。また、途中で一度も休憩を入れなかったのも、もう少し時間配分に気を配るとよかった。

感想

時間の面から見ると授業のための活動の数は充分だったが、私たちは生徒たちの反応に対する準備が足りなかつ

ったと思う。生徒たちは授業のために勉強しておいた。授業はクイズ形式で行って、生徒たちは簡単に聞かれた質問に答えた。また、生徒たちは想像以上に静かで、実際に彼らの興味を引いているかどうか分かるためのフィードバックをつかめなかった。そのせいか、最初の段階の活動は計画よりずっと早く終わった。

グループのメンバーは全員積極的に参加したが、授業の実践の前に、もう少しリハーサルしておけばよかったと感じた。1回のフルタイムの模擬授業も必要だったと思われ

る。

授業の環境は良かった。不足する教材はなく、使いやすかった。

発表のもっとも重要な問題は時間管理だったと思う。発表を全体的に見ると、次の改良点があると思う。

一つは活動の計画については、時間が余ることを防ぐのに、予備の活動を用意することである。

もう一つはリハーサルの数を増やすことである。

さらに今後、生徒の反応の可能性を考えて、反応が薄い生徒のケースのためにも用意する必要があると思う。以前経験した、小学校の発表に比べると中学校の生徒がおとなしく、騒いでいる生徒を静かにさせるためのタイムロスはない。

以上を踏まえて、今度より、生徒たちの興味を引き、ブラジルや他の海外の国々に知りたい気持ちを生かせるのに貢献したい。(ファウスト・ペレイラ)

今回授業を行ってみて、生徒を引きつけつつ必要なことを伝えていくという作業が、いかに難しいものかがよく分かった。ブラジルのことを広く紹介する中で、こちらとしてはその中にその後調べるテーマをさり気なく散りばめたつもりだったが、はっきり「こういうのを調べるといい」と言わないと、自主的には感じ取ってもらえなかったかもしれない。それというのも中学1年生という年齢がイメージしにくく、年齢よりも難しく設定してしまったためであり、そのあたりの対応の臨機応変さも必要だと思った。しかし今回は準備段階からすべて考えて授業に望むという形で、それに責任を感じた分、有意義な体験だった。今後この経験を生かしていけたらいいと思う。(河野)

第5回学生ディスカッションより

川崎市立土橋小学校実践報告

報告者:甲田 友子(外国語学部ドイツ語専攻4年)

砂田 かおり(外国語学部ドイツ語専攻1年)

1.実践内容報告

土橋小学校では、授業のテーマが、「なにが作れるかな?力をあわせて～留学生・日本人学生の交流を通して～」ということで、外大の学生が児童に何か教えるという授業ではなく、学生と児童が協力して何かをつくる、という授業を行った。担当の三井先生によると、自分の事は話せても人の話をうまく聞けない子どもが多いという。今回の授業のねらいは、第一に、制作活動を通して「子どもの聞く力を育てる」ということである。そしてまた、子どもが、「制作を通し学生の背景に流れている文化や考え方を感じ取れる」ようになることを目指した。

4年生の1～4組で授業を実施し、各クラスで学生一人に対し児童5～6人というグループで活動した。第1回目の実践授業の前に、学生側からプロフィールと共に、以下のように「児童と行いたい活動」を提案した。

遠田友香	…劇
相川奈美	…飛び出す絵本
砂田かおり	…世界の子どもについて知る
朴 忘禮	…夢の場所を考える
鄭 仁淑	…写真を使って紙芝居をつくる
モンコンチャイ・アッカラチャイ	…タイ文字を使った制作・タイの歌やダンス

児童はこれを見て、自分がどの活動に参加するか選ぶとともに、第1回目の授業までに自分が行いたい具体的な活動内容を考えてくる(例:「劇」ならその内容)。第1回目の授業ではそれをもとに、学生と児童が相談して、実際に行う活動を決定した。第2回目、第3回目の授業では、活動の制作を進めた。「聞く力を育てる」ことが目標のため、学生側は一方向的に児童を指導するのではなく、児童と話し合っただけで授業を進めるように気をつけた。また適宜、グループ内で児童に話し合わせ、互いの意見を聞かせるようにした。

第1回目～3回目の授業は間があいてしまうので、学生と児童はFAXを使って交流した。自習時間が終わると、子どもからどこまで作業が進んだかの報告と、質問などが支援室あてにFAXで送られてくる。学生はそれに答えて、小学校にFAXを送り返す、という形で、頻繁にやりとりを行った。これにより、学生は授業に行けない間も児童の活動を

知ることができた。また FAX でのやりとりを通して、学生と児童の距離が縮まる結果にもなった。

10月30日に、発表会ということで、各グループで制作したものをビデオに撮影した。このビデオを学生がそれぞれの自分の友達や家族に見せる(例・韓国の友達、家族など)、その見せた相手からもらった手紙を小学校の児童に送った。学生の知り合いがビデオを見るということで、発表会に対する児童のモチベーションを上げることにつながった。

(資料)

川崎市立土橋小学校国際理解教育活動報告書

①タイトル なにが作れるかな?力をあわせて～留学生・日本人学生の交流を通して～

②参加メンバー 遠田友香(外国語学部日本語専攻4年)、相川奈美(外国語学部フランス語専攻3年)、砂田かおり(外国語学部ドイツ語専攻1年)、朴 忘禮(外国語学部日本語専攻3年)、鄭 仁淑(外国語学部日本語専攻3年)、モンコンチャイ・アッカラチャイ(研究生)

コーディネーター:甲田友子(外国語学部ドイツ語専攻4年)、廣瀬美穂(外国語学部ドイツ語専攻4年)

③授業を実施した学級

川崎市立土橋小学校4年1から4組

④活動日時

6/22、7/13、10/26、10/30の2時間目～5時間目(9:30～14:15)

⑤活動日程

①6月22日	第1回目 実践授業
②6月第5週	授業のための自習時間(1時間ずつ)グループで制作を進める
③7月第1週	同上 自習時間
④7月13日	第2回目 実践授業
⑤⑥9～10月	自習時間
⑦10月26日	第3回目 実践授業
⑧10月30日	発表会 制作したものを発表する
⑨	学習の振り返り

感想

学生からの感想では、始めは子どもたちとどう接したらいいのか分からず戸惑ったが、授業を重ねるにつれ慣れることができた、という声が多かった。三井先生によれば、児童が自習時間に自主的に活動を進めていたという。第3回目の授業は2回目から夏休み期間をおいていたので、学生側に不安もあったのだが、行ってみると児童が制作をしっかりと進めていたので学生が感動する場面も見られた。学生からは、制作活動を中心とした授業ということで、どうしても授業時間が足りなくなってしまうなど難しいこともあったが、子どもの見せる成長がやる気につながった、良い経験になったという感想が聞かれた。

宮前平中学校実践報告

報告者:小谷健太(外国語学部カンボジア語専攻1年)

今回のプレフォーラムでは主に発表レジюмеにしたがって行った(資料参照)。発表の目的は、宮前平中学校国際理解教育活動の特徴を踏まえて活動内容を伝えることである。このプレフォーラム報告書では、発表の際のレジюмеの補足した部分について説明したいと思う。活動第1回目から、3回目まで順を追って説明を行う。

まず、クラス全体は6つの班にわかれている。その各班に一人ずつ外大生が入って活動を行った。各班員と外大生が、各々準備してきた5つの自己紹介文を発表する。ここで重要な点は、5つの自己紹介文のうち一つに、うその内容が含まれていることである。発表者以外の班員がそのうそを見抜くために、自己紹介文について発表者に質問をする。班員の一人が発表して、他の班員が質問を繰り返すという形になっている。つまり、生徒が発表と質問の繰り返しのを通して、授業のねらいである「自己紹介を通じて自分のことを相手に伝え、相手のことを知ろうとする」ことを達成することができるようになっている。

第2回目の活動では写真を生徒と一緒に見ながら、意見交換を行うというものである。その時に使った写真は、世界各国のある一家族と家が写ったもの5枚だった。発展途上国の写真だけに限定せず、気候、生活水準、場所がそれぞれ異なり、生徒の様々な意見が期待できるものであ

た。この5枚の写真を班ごとに観察し、班全体で感じたこと、気づいたことについて意見交換した。このようにまったく異なる意見を交換することで、他者が自分とは異なる意見を持っていることに気づき、第2回目の活動のねらいである「他者の考え方を理解しようとする」を達成することができたように思う。

第3回目の活動では、事前に各班の生徒から送られてきた、各班担当の外大生に対する質問リストを交換済みであった。そして実際の活動では外大生の回答に対して、再び生徒達が質問をするというものだった。ここで生徒側から外大生に寄せられた質問とは、「外大を選んだわけ」、「将来どのような仕事がしたいですか?」など将来に関するものが多かった。この外大生の答えなどを聞くにつれて生徒達は、様々な生き方、考えかたを知ることができたように感じた。また比較的外大生のほうが就職に対する意識も高いことから、これからの進路を決定するにあたって参考になっただろう。つまり外大生の考え方を自分たちから質問して聞くことで、ねらいの「将来こんな風に生きたいをイメージする」、「自分を相手に伝え、相手の考え方を理解する。」を達成することを目標とした。

このように3回にわたって活動を続けたが、この3回の活動以外にも、学校側が学校の授業でディスカッションの練習に取り組んだという事前の取り組みがあった。そのおかげもあって、各活動はスムーズに行うことが出来た。また今回の授業で行う内容を決めるにあたって、外大生側からの意見も聞き入れてもらい、学校側と外大生側の両者が

まとまって今回の活動に取り組めた。それにより活動をいっそう充実したものにする事ができたように思う。

(資料)

宮前平中学校国際理解教室活動報告書

報告者:小谷健太(外国語学部カンボジア語専攻1年)

①参加メンバー 木矢恵梨子(大学院地域文化研究科博士前期課程言語文化コース2年)、小宮山陽子(外国語学部ドイツ語専攻1年)、小谷健太(外国語学部カンボジア語専攻1年)、伊藤洋(外国語学部ロシア語専攻1年)、河野千早穂(外国語学部ポルトガル語専攻1年)、李冬梅(外国語学部日本語専攻3年)、アンジェラ(外国語学部日本語専攻1年)

②活動日時

第1回 6月16日(金) 5校時 13:10~14:00

第2回 7月7日(金) 5校時 13:45~14:35

第3回 10月13日(金) 5校時 13:30~14:20

③授業案作成にあたって

授業案についての基本的に企画は学校側が行う。提示された案を外大生側で検討し、授業案を決定する。変更を加える場合には、先生側と話し合いの場をもち、授業案を作りあげていく。

④活動内容

回数・月	ねらい	授業(活動)内容	授業(活動)以前の取り組み(学校)
第1回 6/17	<ul style="list-style-type: none"> ・講師との出会いを楽しむ ・自己紹介を通じて、自分のことを相手に伝え、相手のことを知ろうとする 	<ul style="list-style-type: none"> ・講師の方が各専攻語で自己紹介 ・自己紹介文を5つ書く ・班ごとに講師と自己紹介[5つの自己紹介文を使って] 	<ul style="list-style-type: none"> ・先生が生徒に、自己紹介文を5つ作らせる。
第2回 7/7	<ul style="list-style-type: none"> ・相手との対話を通して、自分の考えを相手に伝える。 ・他者の考え方を理解しようとする 	<ul style="list-style-type: none"> ・「1ヶ月ホームステイをしてみたい国は?」というテーマについて、6枚の写真をもとに、講師を交えて、班ごと 	<ul style="list-style-type: none"> ・先生がある写真を生徒に見せて、クラスの中で意見交換する授業を行った。

	る。 ・講師との交流を深める。	に意見交換を行う。 ・班ごとに話し合った結果・理由を発表する。	・身近なテーマについてクラスの中で、ディスカッションする授業を行った。
第3回 10/13	・講師とのやりとりから、講師についての理解を深め、自分自身を振り返る。 ・「将来こんなふうになりたい」という将来像をイメージする。 ・自分の考えを相手に伝え、他者の考え方を理解しようとすることができる。	・講師の方へ中学生の頃や、どうして外語大で学んでいるのか、これからどのように生きていきたいかをインタビューをしながら、理解を深め、講師の質問に答えながら、自らを振り返る。 ・講師の方から出されたテーマについて、班ごとに意見交換を行う。	・生徒が講師に対する質問を考える。そして、その質問に講師側(外大生)が答える。

改善点

<第2回目の活動について>

- ・誰かが意見を言うとそれに対する反論や意見が出ることはあまりなく、一つの意見から発展していくことはなかった点。
- ・計画案のねらいまで生徒を誘導できなかった点。
- ・端のほうに座っていた生徒同士で個人的に意見を交換していることが多く、全体でのディスカッションが成立しにくかったといえる。

<第3回目の活動について>

- ・授業では、生徒との言葉のキャッチボールを目指していたが、生徒が質問して私が答えて話がとまってしまうことが多かった。
- ・最後の、将来優先したい事柄を話し合ったときに、一人ずつ理由を挙げていっただけで終わってしまったので、もう少し議論等で内容をふくらませることができると良かった。

感想

<第2回目の活動について>

- ・第1回目と比べると、生徒に積極性がみられた。意見が活発に交わされ、全員が話し合いに参加していた。
- ・本来5班を担当していたアンジェラさんが、大学の試験のため欠席していたので、私が代役をつとめた。前回、私は撮影を担当していたため、ほとんど生徒とは面識が

なく、やや緊張しているように感じられた。

- ・お互いの考え方をより深く知り合うというのが今回のテーマの一つだったが、話し合いを続けていった中で生徒がそのことに気づけたかどうかははっきり言えない。

<第3回目の活動について>

- ・内容も、私たちの中高生の頃のことや今の学生生活のことが大半を占め、生徒にとって身近で興味深かったようだ。特に、大学生活のことは、想像がつかないらしく、その関連の話はとても反応がよかった。確かに、言葉のキャッチボールそのものがスムーズにできたとはいえないが、今までの授業の中で、一番生徒にとってメッセージ性がある授業になったのではないかと思う。
- ・今回は3回目ということもあり、みんな比較的うち解けた雰囲気の中で行え、一部の生徒からは積極的な発言もあって、私自身一番満足のいくものだった。話をしていく中で将来つきたい職業、今好きなこと等を訪ねる機会もあり、少しは授業の目標を達成できたのではないかと思う。

(2)佐藤郡衛氏講演会「国際理解教育とその現状」

日時:2006年10月17日(火) 18:10~20:00

会場:留学生日本語教育センター さくらホール

講師:佐藤郡衛氏(東京学芸大学教授、異文化間教育)



司会:多文化コミュニティ教育支援室が、今年 3 年目を迎えて、今このフォーラムで 3 年間の総括をしようと動いています。この多文化コミュニティ教育支援室の活動には二つの柱がありまして、一つは日本で暮らす外国人の子どものためのへの学習支援、もう一つが日本人の子どもたちに対する小学校や中学校での国際理解教育の実践です。そしてこの6回のプレフォーラムのシリーズでは国政理解教育の方の実践をしようと動いています。本学の学生が川崎の小学校やこの大学のある府中市の小学校や中学校で国際理解教育の実践を約 2 年間行い、現在でも 6 つの小学校で実践が行われています。でも実際実情はというと、メンバー集めに追われたり、授業の組み立てに追われたりと実践の準備がほとんどで、では国際理解教育って何なのかとか、本当に自分たちがやっているのはこれなのかとか、そういうことを振り返る時間がなかったなという反省がありました。今回はそれを活かして、6 回のシリーズを組み立てました。学生ディスカッションは、これまでの実践を中心に振り返りをして意見の交換や情報の共有をすることを目的とし、3 回の講演会は、では国際理解教育って本当は何、などといった知識を深めるために企画しました。この 6 回のシリーズが何らかの形で今後の実践に役立てばいいなと思います。今日は、プレ多文化学生フォーラムの 2 回目ということで、東京学芸大学の佐藤郡衛先生にお話をいただきます。後から先生ご自身からお話があると思うんですが、佐藤先生は現在東京学芸大学にお勤めで、学長補佐をされています。異文化間教育専門にされていて、本学のボランティア活動やシンポジウムにも多大なご協力をいただいております。本日は講演会の第 1 回目と

いうことで、国際理解教育って何という基礎の基礎からお話いただけるということをうかがっておりますので、皆さんしっかり勉強しましょう。よろしくお願いします。

佐藤郡衛:ご紹介いただきました学芸大学の佐藤と申します。

今お話がありましたように、今日は講義をとということですので、私の方もしっかり講義をしたいなと思います。国際理解教育と言うと、参加型で様々なアクティビティがあるんですけども、今回はそういうのはなしで講義中心でいきます。今日の目的は二つです。一つは日本の国際理解教育の流れというのを把握していただくことです。日本の国際理解教育の流れを理解していくことによって、皆さんがこれから実践をしていく上での実践の視点を明確にしてほしいということです。理論、あるいは、理論的なフレームといった方がいいでしょうか、そういうようなものをしっかりと踏まえた上で実践の視点を導き出していくということが、第 1 の狙いです。ですから、少し退屈するかもしれませんが日本の国際理解教育の流れについて話をしていきます。二つ目の狙いは、国際理解教育の今日的課題をはっきりさせることです。結論から言うと日本の国際理解教育は 1990 年代の半ば以降から大きな転換期に差し掛かっているんです。国際理解教育の今日的な課題は、歴史的、社会的な文脈を踏まえた上で、新しい国際理解教育の必要性を考えていく必要があります。ですから、第 1 の課題を踏まえて国際理解教育の今日的な課題というものを考えたいと思っています。今日的な課題については、国際理解教育がどういった方向に向いているのだろう、その中でどういう実践的な視点を私たちが学んでいけばいいんだろうかということに焦点を当てたいと思います。

<国際理解教育のこれまでの流れ>

佐藤:では早速話をしていきます。先ほど話をしました、ユネスコの国際理解教育の流れを追ってみたいと思います。というのも日本の国際理解教育は、ユネスコの流れを忠実に踏襲してきました。ユネスコの国際理解教育は資料にあるように、1946 年から 54 年くらいまでを第一期と呼ばれます。模索期と言われていて国際協調と国際平和がその中

心です。「戦争というのは人の心の中に起こる。だから人の心を何とか私たちが教育によって変えていく」という宣言に見られるように、非常に平和を志向した時期です。たぶん皆さん教育学の勉強をすると、ジョン・ディーイという名前を聞くことがあると思います。アメリカの教育学者です。日本の戦後の教育に非常に大きな影響を与えた人です。彼は、教育というものがアメリカの教育を立て直す中心的な役割を果たすべきだという議論をしてきています。そういう理論的な影響も受けています。この第一期の中心は、平和教育で、国際理解教育とは平和教育そのものだったんです。つまり平和を達成していくためにはどうしたらいいかということが、最初の課題でした。皆さん、平和教育を頭の中に入れておいてください。第二次世界大戦、世界を戦争の渦に巻き込んだことの反省から、ユネスコが平和を達成していくための教育を、世界で模索していかなければならないというのが第一期の話です。

それが 1955 年ころから世界の情勢が変わります。アジアやアフリカを中心とした第三世界の新興国家が誕生してくるんですね。同時に、世界全体の枠組みが東西冷戦、つまり、アメリカとソ連という両大国を中心としていたんです。東と西、今はもう教科書になっちゃいましたよね。ベルリンの壁がその象徴でした。アメリカとソ連、つまり資本主義国と社会主義国という二項対立的な枠組みの中で世界が動いていきます。東西文化価値の相互理解が第二期の大きな柱になってきました。具体的には、異文化理解教育が大きなテーマになってきます。そして東西冷戦の問題から、国際協調というのがそれにプラスされてきます。

第三期になると、世界の流れが非常に複雑になってきます。その中で、重要な勧告が出されます。1974年のユネスコの第 18 回総会で、「国際理解、国際協力、及び国際平和のための教育、並びに人権及び基本的自由についての教育」という勧告です。この 18 回総会が大きな転機になりました。また、この時期には、ユネスコからアメリカ、イギリス、シンガポールが脱退していきます。理由は色々ありますが、第三世界の進出や政治的な問題も絡んできます。ただ、この時期は、開発問題がクローズアップされてきます。開発教育という課題ですが、今度次々回に来られる山西先生がその専門家ですよ。開発教育、つまりアジア

やアフリカに対する支援を中心にした教育です。これに、環境教育や軍縮教育が付け加えられて、第三期になるとまさに、東西冷戦から南北問題にシフトしてきます。ユネスコは、南の発展途上国に対する支援が大きな仕事になってくるんです。だから財政負担の大きなアメリカやイギリスは脱退していくわけです。アメリカやイギリスは、これ以降、独自の教育を展開することになります。アメリカでは、「グローバル教育」が独自の概念として発達してくる。「ワールドスタディーズ」という言葉は聞いたことがありますか？イギリスではこの「ワールドスタディーズ」として発展してきます。「ワールドスタディーズ」に関しては色々翻訳も出ていますので、ぜひ参考にしてください。

最後に、第四期ですが、東西冷戦、南北問題に加え、民族紛争が出てきます。このため、平和、人権、民主主義をテーマとした教育が重視されるようになります。以上が大まかなユネスコの流れですが、日本は二期まではこのユネスコの流れを忠実に追っていました。1945年から60年くらいまではユネスコと同じ歩調だったんです。そして協同学校計画に参加して、1968年には小学校3校、中学13校、高校8校の24校が参加し、人権の研究や他国他民族理解、さらに国連の研究を中心にして、世界各国で同じようなテーマの実践を開始しました。川崎の小学校中学校もこれに参加している。私どもの学芸大の附属大泉小学校などもこれに参加していましたし、広島大学でも参加していました。川崎市はプロジェクトに参加してきた流れがあるんです。田島中学では、国連と同じ、他国他民族理解、国連の研究が行なわれていたんです。日本は1945年から1960年代まで、ユネスコの優等生と言われるくらい、忠実だったんですね。それが、1970年代の半ばくらいから独自の歩みを始めます。1974年勧告以降です。アメリカ、イギリスのユネスコからの脱退の影響もあり、日本の国際理解教育は、国際理解教育と言わずに、国際化に対応した教育というように言い始めるんですね。それが何だったのかというと、海外子女、帰国子女教育だったわけです。また、政策的には「カルコン」と言って、日本とアメリカの二国間の相互理解教育に転換するものこの時期です。ユネスコの枠組みの中でやるよりは、日本とアメリカの相互理解という二国間の方向に移っていった。そして日本国内では、海

外子女、帰国子女教育に傾斜していったわけです。私が今所属している国際教育センターの前身は、「海外子女教育センター」といいました。このセンターは1978年に作られました。まさに、日本の国際化に対応した教育の実践的な調査研究機関の中核にしようとしたんです。日本の国際理解教育は、ユネスコとは離れ多様化してきます。だからみんなが国際理解教育がわからないというのはある意味では当たり前なんです。

そして1980年代になってくるとさらに多様化してきます。日本の国際理解教育には、ユネスコの国際理解教育の流れを忠実に踏襲しているグループ、開発教育・環境教育などのグローバルな課題の学習を中心にした国際理解教育、それから海外・帰国子女教育など、国際化に対応した教育の三つです。80年代になるとこれらを全部ひっくめて国際理解教育と言っているんです。だから非常に分かりにくい。それだけ多様化しているということです。

ところが、90年代になってくると、多様化した国際理解教育を「グローバル教育」として統合していこうという動きが出てくる。たとえば、ユネスコ、グローバルな課題を核にした国際理解教育、それに国際化に対応した教育です。このすべてをまとめたものを「アンブレラ型」と呼びます。アンブレラって傘ですね、傘のもとに全部ぶら下げるということです。ただ、なんにも概念が統一されないままぶら下がった状況です。そこで、これらを「グローバル教育」として統合する流れが出てくる。90年代になってくると、国際理解教育の書物の中に頻繁にこの「グローバル」という言葉が頻繁に登場してきます。

ただし、1990年代半ば以降、多文化化の進行で、「共生」が重視されはじめます。1990年には、「入管法」が改正されました。皆さんがよくご存知の川崎を例にすると、川崎はある意味では南と北で違った面を持っていますし、多文化といっても多様性があります。北部のほうは海外から帰ってくる帰国した子どもたちが多い場所です。逆に、川崎駅をはさんだ南の方に行くと、鶴見地区なんかもそうですけれども、在日のひとたちと、90年代になるとニューカマーの人たちが多く住むようになってきました。そこでグローバルと一体化した共生論が出てきます。そこに、アメリカから導入されてきた「多文化教育」も入り込むことになります。

それを日本の教育の中に統合しようという動きが出てきます。大きな流れでいうと80年代の多様化した理論をグローバル教育として統合し、さらに共生概念が登場することによってそれに多文化教育も統合しようという動きまで出てきたということです。ですから、国際理解教育は多様化の道を歩んできたということです。

ここまでが大きな流れです。国際理解教育は、非常に多様化の道をたどってきているということです。当然それは時代の背景を踏まえてのことですけれども。しかし、国際理解教育の概念を非常に曖昧にしてきたわけです。だから、それぞれの立場から国際理解教育を語ってきたということになります。

多様な概念を整理しようという動きも出てきます。先駆的な方が、永井滋郎さんです。当時の文部省の教科調査官で、日本に国際理解教育の考え方を積極的に導入されてきた方で、広島大学の先生でした。「平和な人間像と人権尊重を基盤にして自国文化理解を踏まえた異文化理解と世界的相互依存関係と人類共通の諸課題の理解を中心展開領域、そして人類共通の課題解決へ向けての国際的連帯と協力を帰結とする構造」になると整理されました。かなり分かりにくいかもしれませんが。平和を築いていくためには人権をベースにしていかななくてはならないが、国民的な自覚が必要だと言っています。国際理解教育は、国と国の枠を大前提にしているわけです。だからこそ、国民としての自覚をもたせることが大切だと考えたわけです。それに、多国・多民族・多文化理解、それと世界連帯意識の三本柱を中核にすえて実践的態度を育成するという構造で整理してあるんです。非常に抽象的だが、この考え方が日本の国際理解教育に影響を与えてきました。国際理解は、国と国を前提にして、その国という枠組みの中で、お互いに理解しあうということを考えてきました。だから中国をどう理解するか、アメリカをどう理解するかが重要だったわけです。皆さんが実践をしようとするときに、中国から来ているのであれば、まず中国を理解させなくてはならない。また、中国をどう理解していくか、そして相互理解して協力をすることによって、世界の連帯意識を築いていくこと、さらにはそれが国際的な平和を創造していくことを目指したわけです。

ここでいったん整理しましょう。多様な国際理解教育をどう整理するかが課題になったということです。永井先生は、「文化理解アプローチ」と「問題解決型アプローチ」に区分しました。つまり、文化を理解していくこととある問題を理解していくことのアプローチがあるということです。その両者を一緒にしたものが、グローバル教育だということです。あまりに多様だからなんとかまとめて統合していこうという努力がこの国際理解教育のなかでなされてきたということです。1980年代に国際理解教育は「グローバル教育」として統合しようとしてきた。だからいろいろなものを読んでいくと、1980年代の半ば以降からこの言葉がすごく頻繁に登場してくるようになるんです。例えば、箕浦康子先生は、多文化教育、開発教育、環境教育、人権教育、平和教育、と従来別々ものとされてきたすべてを地球的視野に立つ教育、略して「地球市民教育」と呼んでいます。さらに70年代から国際化に対応した教育、とりわけ海外子女、帰国子女教育も国際理解教育の概念に組み込まれている。これは日本特有なものなんです。小林哲也先生は、「国際理解教育の混乱・混迷の原因を現実的な要請と理想的な要請との間のギャップにある」として、現実的な要請からの国際理解教育の必要性を提起しました。国内の国際化に対応するためには、多文化教育や異文化間教育をも視野に入れる必要があるということです。だから国際理解教育は更に拡大するわけです。要するに、国際理解教育は日本的な文脈の中で色づけされて概念が作られてきたんですね。だからそのユネスコだけを国際理解教育の勉強で追っても実は分からないところがあるということです。

この他、統合の動きが盛んになります。田中治彦さんは、開発教育を中核にすえて、環境教育、平和教育、異文化理解教育、人権教育、これを「グローバル教育」だと言っている。山西先生はどう言っているのかというと、平和教育と環境教育はいいんだけど、異文化理解教育を多文化教育という風に置き換えている。これを国際教育と彼は呼んでいるんです。それがイコール国際理解教育と同じだという概念定義をしているんですね。ここで大事なのは、私たちが国際理解教育といったときに実はこうした要素が入っているということです。だから国際理解教育を考えるときに、このどこを中心にするかというのは非常に難しいけれ

ども、平和教育からスタートして、人権教育とか環境であるとか開発だとか異文化理解という、この4つくらいの側面が実は国際理解教育の概念の中に包み込まれるんです。しかしながら、問題はこれそれぞれ独自の発展を遂げてきたものだから、なかなか概念は一体化できないですね。だから環境教育そのものも国際理解教育だっという人もいるわけですよ。

実践の話をしませんか。私が見に行くと非常に面白いなどと思った実践があります。新潟の方の小さな学校ですが、春に写生大会をする中学校があるんです。みんなだいたい描くポイントは決まっているんですね。全部で80人くらいの学校だったと思うんですけど、1年生から3年生まで描かせて、できたものを体育館に貼りだします。見るとほとんどが北側の斜面に立ち枯れの木が描かれているんです。これを生徒に意識化させています。「酸性雨」ということです。じゃあ原因はなんなのか。酸性雨を研究している先生が新潟大学におられてそこに問い合わせをしたらしく、雨よりも雪のほうが酸性雨の濃度が濃いらしいですよ。それで北側だけ雪がいつまでも消えませんか。酸性雨の影響をもらに受けるわけです。ただ、問題はその酸性雨の原因がなにかということですよ。大陸からですよ、中国からです。そうして彼らが調べていくわけですね。色々調べていくわけです。もちろんそれだけの要因じゃないんですけど、そういうことを色々調べていくことによって、日本と中国との問題になっていく。そうすると環境教育そのものが、実は開発教育とつながったり、異文化理解とつながっていったりするんです。だから国際理解教育というのは、こういうような要素を包み込んでいるんです。

<グローバル教育と国際理解教育の関連>

今度はグローバル教育と国際理解教育との関連です。皆さんのコミュニティ教育支援室の図書の中にこの魚住忠久先生の本があるかもしれません。この先生は日本にアメリカのグローバル教育を導入した人です。アメリカのグローバル教育は、国際理解教育と一種違いますからね。なぜかといえば、アメリカはもともと多文化教育の国ですから、国内では多文化教育を、国外の世界の問題はグローバル教育として提案されてきました。魚住先生は、地球的なも

のの見方・考え方を養うとともに、その内容と地球的規模での諸問題に限定し、その解決にむかえうる知識、能力態度の育成を目指すものと言っています。面白いところは、「国際理解教育は、主権国家の集合体としての国際社会を前提に他国理解や異文化理解、国際関係理解等の学習を通じて、諸国民諸国家間の平和友好協力および人権の国際的保証を目指す教育であるのに対し、グローバル教育はグローバル化し、相互依存性を増しつつある世界を前に、グローバルな見方やグローバルな価値の実現を重視して意思決定した時に、トランスナショナルな行動のできるグローバル公民性の育成を目指すこと」と書いている点です。要するに国際理解教育を国家の枠組みのもとで展開する教育だと言っています。国と国の枠組みの中でやるのを国際理解教育と言って、グローバル教育というのはその国の枠を超えることだと言っています。

皆さんは、大津和子先生をご存知ですか。色々本をかかれています、実践で一番有名なのが「1本のバナナ」からではないかと思います。問題意識は、南北問題の授業をやらせると生徒はなかなかのってこないというんですね。教科書に書いてある知識を覚えて、試験にそれを書いたら終わり、それでは何にも深まらない。それで大津先生は、最初の授業で生徒にバナナを食べさせることから始めたんです。私たちの年齢では、バナナは高級品だったんです。当時はバナナを一房持って病院の見舞いに行けたんです。もちろん今も行けないことはないですけど、今では安い果物の代表になっていますが、何でそんなに安いのかということを生徒に調べさせていくんです。この大津先生は行動的な方で、自分でフィリピンに行って取材してくるわけです。フィリピンでは、多国籍企業がプランテーション栽培をしています。生徒のバナナを提示するときに、その企業のブランド名がわかるようにもしました。デルモンテ、ドール、バナナボ、チキータなどです。そして、生徒たちが消費するバナナがどこから輸入されるかを調べさせます。フィリピンだとわかると、フィリピンからの輸入が増えると、バナナの値段が一定になることに気づいていきます。栽培するフィリピンの人たちに目を向けさせます。一日の賃金は、労働時間はなどを調べていく。バナナの安定供給が実はフィリピンの人たちの安い労働力と結びついていくこ

とに気づいていくといった授業実践です。これは非常に反響を引き起こしたんです。「1本のバナナから」は非常に面白い本なのでぜひ一読してください。その後、この先生は北海道教育大学に赴任され、国際理解教育を進めていますが、この先生は国際理解教育を最近、共生と結びつけて論じています。共生を中核にすえながら、人権とそれから地球的視野、グローバルという二つの視点から、この共生を考えて、この共生を達成していくためには異文化に対する理解や寛容とコミュニケーション能力という二つのいわば、資質と能力が必要だという定義をしています。ユネスコの流れのところを見てください。その中の第四期に、平和・人権・民主主義とありますよね。実はこれに対応した形で、日本の国際理解教育の概念整理をもう一度してみようとしたのが大津先生だということになります。人権をベースにししながら、地球的視野に立って、民主主義的な社会を実現していく上で必要不可欠な共生というところを焦点を当てて、共生という観点から国際理解教育というものを整理していこうと考えたわけです。そのためには、異文化に対する理解と寛容とコミュニケーション能力が必要だというのがこの人たちの概念です。

ただ、今までの議論全体を見ると、難しい問題が解決していません。それは、国民的資質とグローバル的資質ないし地球市民的資質というものをどう捉えたらいいのかと言うことです。日本の国民であって、日本を超えてグローバルになると言っているだけけれども、それが一体どういう関連があるかが明らかにされていないんですね。これは実は非常に難しい問題です。国民的資質は、国民国家の枠組みが緩んできてグローバル化が非常に進んできている、これからは国の枠を超えた地球市民を育てていかなくてはいけないから、地球市民としての資質を育てていくことが必要だ、それが国際理解教育だと言っているわけです。でも、果たしてこの国民的資質を否定したところにグローバル的資質というものが成立するのかどうかという議論がある。国際理解教育でいう「地球市民的資質」という概念が非常に分かりにくいものになっているのはそのためです。実体の無いものになっている。

さらに言うると日本の特殊性と普遍的価値の対立と言う問題も浮上します。日本は遅れているんだ、日本は後進的

だ、日本の文化は特殊だ、だから、グローバルスタンダードのようなものが必要だという考えがあります。でも考えてみたら、だれが日本の特殊性を決めるの、とか、そういう問題があります。さらにこの二つの対立にあって、教育実践ではもうこれはいいや、こんな対立の中に巻き込まれたらイヤだから、個人的資質、思いやり、個人の自尊感情、自己肯定感情、自主性を育てることが国際理解教育だという考えが教育現場で出てきます。今、この個人的資質形成に注目したような実践が多くなっている。思いやりというものを突き詰めていったら、それが国際理解教育になっていくのかというのが常に付きまとうわけです。このような問題を抱えています。

国際理解教育の概念を追ってきましたが、改めて「国際」という枠組みが変動している中で、その教育についてとらえ直す必要があります。「国際的な日本人から日本的な国際人」へといったことをテーマにする必要があります。つまり、日本的な国際人というのは、地域はもうグローバル化しているんだから、地域の中で主体的に活動できる人間、そして地域の中ではいろんなグローバルなものが詰まっている。そういうような地域の中から、国際的な視野を持つ人をどう育てていくのか、ということに転換させる必要があるということです。「日本という生活の場でグローバルな視野で思考し、行動できる日本人の育成」が必要だということです。そして、世界が直面している、環境問題、人口問題、南北問題、人権の擁護、核兵器の廃絶等の問題を地球市民の一人として担う主体の形成が必要だという議論がでてきたということです。教育の世界の中で国際という枠組みについて転換し始めているという共通認識がでてきたということです。

日本での国家・言語・民族の一体化のずれとか、国の枠を超えた人の移動であるとか、異と自という二項対立の枠組みの転換であるとか、あるいは内なる多文化であるとか地域生活レベルでの共生であるとか、ということなんです。例えば教育の世界で言うと、中国から来た子どもたちが、国家背負ってきているわけではないといった例です。それから国家と言葉と民族の一体化がどんどん教育の世界でもずれ始めている。例えば、日本生まれの日本育ちの外国人の増加、あるいは国際結婚の増加などです。今

東京では、10組に1組は国際結婚で、東京で生まれる子どもの10人に一人は外国人だといわれます。単一社会というシステムが崩れてきて、それが教育の世界にも入り込んできている。そして1990年以降、国の枠を超えた人の移動が急速に浸透してきている。異と自という二項対立の枠組みというものだけではどうも捉えきれなくなっている。何が異で何が自かっていうことが非常に分かりづらくなってきている。そして内なる多文化みたいなものがある形で私たちの周りに出始めてきている。しかも、地域生活レベルでの共生が非常に大きなテーマになってきている。ですから、国際を捉える視点が、教育の世界でも変わりつつあり、国際理解教育もこれを踏まえなければいけないということです。

一つは、文化を重層的に捉えること、グローバリゼーションという視点を考えていかなくてはいけない、さらに未来社会を想像する視点(持続可能性)がどうしても必要になってくる。つまり、今までの社会を前提とするのではなくて、自分たちがこれからの社会を担う責任ある市民の育成を国際理解教育の中で考えていかなくてはいけないということです。国際理解は、開発教育、環境教育、平和教育、人権教育、異文化理解教育と言われ続けているんです。でも、異文化理解は実は異と自を固定して、二項対立的に捉えて、相手の文化をどう理解するかという議論をずっとし続けてきたんです。人権教育も非常に抽象度の高い形で実践してきた。平和教育もそうですね。戦争に議論の点をあててきたために、子どもたちの身近な生活の場での子ども同士の葛藤であるとか、子どもたちの民主的な学級集団作りなどに、なかなか落ちてこなかったという問題があるんです。文化は当然人の移動が激しくなってくると、今までのような二項対立的に文化を捉える異文化理解教育ではなくて、文化の多様性だとか普遍性、対立性、このようなものを捉えるような視点が、国際理解教育の中に求められるようになる。異文化理解教育の中でもこういう視点からもう一度考えなくてはいけない。グローバルな諸課題というものが大きなテーマになってくる。つまりそれをグローバル教育として統合するのではなくて、それぞれがこういう問題を私たちが子どもたちと一緒に考えてはならなくなっています。現実的なグローバルな諸課題というもの

を学びながらその問題を解決していくことによって、これからの社会を担う責任ある市民の育成というものを、私たちは考えなくてはいけないんだということが、今議論になってきているということです。

そうすると現時点での国際理解教育の共通点の一つはやはり、グローバルな視野が必要だ、ということです。このグローバルな視野って何なのかという議論はありますけれど、要するに私たちが一つの国民国家という枠組み——それはもちろん否定するものではないけれども——もうちょっと広い視野で物事を捉えていかないと、なかなかいろんなものが見えない時代になってきている。これがグローバルな視野という話です。それから、共生が大きなテーマになってきている。今までのように対人関係もスムーズにいくわけではなくて、多様な背景をもった人同士が、いろんな形で関係性を作っていくかなくてはいけないときに、その原点として自己理解とか自尊を中心とした人間関係というものをどうやって作り上げていくのか。こういうことが、国際理解教育の今の時点でのテーマになってきているんです。そして、社会参加を通して、未来社会を創造するということが、国際理解教育の共通点として浮かび上がってきているということです。つまり、グローバルな視野を持つこと、共生、自己理解・自尊を中心とした人間関係であるとか、社会参加を通して未来社会を創造していくことが課題になってきたとまとめることができます。

＜国際理解教育実践における課題＞

ここからがもう一つのテーマとなります。これまでの流れを振り返ると、国際理解教育の概念はきちっと整理されてきたわけでは決して無い。非常に多様化してきていて、その多様化の中でそれをどうにか統合しようとする学問的な葛藤というのはずっと続けられているわけです。ただ、国際理解教育は、実体概念ではありませんね？ 要するに方向性になっている。地球的視野を持って、人権を尊重して、社会を作っていくという動きです。そこでは、異文化に対する理解、寛容が必要になるし、異文化者との間のコミュニケーション能力を培っていくという議論になっています。これが共生という観点での整理になっています。多分これが一番妥当な概念整理だと思うんです。これを踏まえて言

うと、国際から、文化際、人間際が変わってきたということです。国際というのは、国と国の際の問題ですが、いまは文化と文化の際の問題、人間と人間の際の問題をどう考えていったらいいのかということです。この視点からいうと、国から入るんじゃなくて人から入るとか文化から入るとい実践の視点ができます。国と国の際を越えて、人と人とのつながりというものが進行しているから、そういうようなところに焦点を当てていく必要があるのではないかとことです。それが多文化共生につながります。それから未来社会の創造。今国際理解教育の中で大きなテーマとなってくると思うのはこの、「シチズンシップ教育」です。「シチズンシップ教育」が、未来社会を考えるときに重要になります。これまでの学校教育の中で、日本の学校教育は、学習指導要領に縛られている。学習指導要領は、基本的には日本人を育成することです。様々な人たちが入ってくると、この考えが揺れることとなります。では、どのようにして新しい日本という社会を作っていくのか、その担い手を育てていくのか、それが「シチズンシップ教育」という考え方です。

こうした視点から、国際理解教育の実践課題を考えていきます。まずはその狙いは一体なんなんだろうかと点です。整理していくと四つくらいのが出てきます。一つは現代的な課題を読み解いていく力がどうしても必要です。国際的な課題は次から次へと新しく出てくるんですが、それをきちっと自分なりに読み解いていく力、つまり、科学的な認識力とか知識はどうしても必要です。国際理解教育を実践していくのは、ただ単に総合学習でやればいいといった狭い領域ではなく、教科でも実践していかなければなりません。例えば社会科の中でも国語の中でも、数学の中でも、きちっとしたそういう力を私たちが培っていかなければならない。そういう現代的な課題を読み解いていく力というものが必要です。たとえば、差別をされている人たちの問題を考えるときに、きちっとした歴史的な知識であるとか、そういう人たちが今構造的におかれている状況を自分なりに読み解いていく力というものを子どもにつけていく必要性がある。これは基本です。だから国際理解教育は、まずはこういう力を子どもたちにつけていかなければいけない。外国人の子どももそうです。外国人の子どもだから多少こういう力が弱くてもいいじゃないか、そんなことは決してな

い。そういう子どもたちも学習の主体としてきちっと位置づけながら、今の様々な課題というものを読み解いていく力を形成していくことが必要なんだということです。しかも次から次へと新しい課題がおきてくるわけですから、それを読み解いていく力。教科であったり、学校のいろんなところで力をつけていくための力を私たちは構想していかなければいけない。

それから知識を自分で構成する力。そんなに難しいことではありません。日本の歴史の中の偉大な人物もアジアの人たちから見たら違ったように見えるかもしれない。固定した知識を習得していきただけではなくて、その知識をもとにして自分なりに新たな知識を構成できる力がどうしても必要なんです。言葉を変えれば批判的思考力です。知識を自分で構成していく力を子どもたちの中に形成していかななくてははいけません。それから異なった文化をもつ人を思いやる力も必要です。私はよく話をするんですけど、学校の先生でも異なった文化を持った子どもを思いやる力というものがないと問題を引き起こすことがあるんですね。私がよく例に出すんですけど、小学校の3年生のあるクラスで、算数の勉強をしていたんです。中国から来ている子どもが一人いた。その子どもが、ある問題を出されたときに非常に面白い答えをしたんです。「200円もってお菓子を買いに行きました。75円のお菓子を2個買いました。おつりはいくらですか？」子どもたちはもう習っているからすぐに答えますよね。「200引く75掛ける2は？掛け算は先にやるんだよ、だから答えは50円です」。でもその中国から来たばかりの子、なんていったと思います？結構日本語もできる子なんですけれど、その子がおつりはないって言うんです。このとき指導している先生が3年くらいの若い先生なんですね。その先生はもう1回計算してごらんと言うわけです。その子はもう1回計算してもやっぱりないって言うんです。どうしてだと思います？友達からはおまえそれ消費税だろって言われたりね。その子は面白いことにね、「僕が行くナカジマ商店は消費税取らんもん」って言うんです。その子に聞いたら、小遣いって10円玉しかもらったことがないんだそうです。そうすると、10円玉20枚をポケットに持っていけば、15枚だからおつりはないんです。笑い話みたいでしょう。でもそれはね、まさに中国の貨幣価値の

問題と、学習スタイルが違うってことなんです。日本の子どもはすぐに算数の論理にのっけますよね。200円といえば100円玉2枚です。でもその子は現実的な課題を通してその問題を解決するということをしごく得意としている。学習スタイルの違いということです。

異なった文化を持つ人を思いやる力や対話を通して人との関係を作り出していく力を、実は非常に大きなテーマとして、私たちが国際理解教育の中から受け継いでいることです。コミュニケーション能力とか異文化に対する理解とか寛容というもの、この現代的な課題を読み取る力、知識を自分で構成する力が、まさにグローバルな課題を読み取るためには必要なんです。90年代以降、国際理解教育の枠組みが転換している。実は概念整理としてはそこに追いついていなくて課題はたくさんあるんだけど、90年代以降の世界的な枠組みの変動の中で、日本における国際理解教育も、こうした資質を育成することを迫られているんです。

新しい国際理解教育の動向をもう少し具現化して言うと、どういようにこの市民的資質を考えていくかという課題です。国民的資質と地球市民的資質といったものをもう1回市民的資質として、新しい社会を構成する市民として、どういふことが必要なのかということを改めて探っていくことです。そして人権を基礎とした民主主義をどう形成していくかが大きなテーマとして今浮かび上がってきているということです。そして、地球的な、グローバルな視野は必要不可欠なものです。つまり一つひとつの国だけの問題ではなく、もう少し地球的な視野、もっと言えば私たちの生活そのものが国という枠を超えて、生活の中に地球的なグローバルな視野というものが入り込んできている。こういう視野を持って、いろんなことを考えていくべき時代になってきている。そしてトランスナショナルな人の移動の中で共生が迫られてきている。

このため、「市民的資質をどう形成していくか」、「人権を基礎にした民主主義というものをどう形成していくのか」、「地球的な視野というものをどう持たせていくのか」、「共生というものをどう捉えていくのか」、この四つくらいが私たちの国際理解教育の課題になってきていて、これをどう構造化するのかという議論も必要です。

最後に、実践の視点について考えていきます。一つは参加共同が国際理解教育にはずっとありましたが、市民的資質の形成とか、人権を基礎にした民主主義の形成を考えていくときには、参加共同というものがどうしても必要になります。ある活動に参加して、そしてそれを共同で解決していくような実践の視点が必要なんです。だから英語イコール国際理解教育なんて議論があるけれどもそんなのはありえないでしょう。やっぱり何かに参加して一緒に共同で問題を解決するようなプログラムを考えていかなければならない。それがどういう市民を形成していくのかということとも関わってくるじゃないでしょうか。私も皆さんの活動を見させていただいていると、留学生が先生と一緒にプログラム、授業作りをしながら、共同で何かを作り上げていくということ、そのプロセスがすごく大事になっていくんです。そのことを通して、こういう市民的資質を形成していくことが可能なんじゃないかと思います。だから必ずや何か自分なりに参加して共同で作り上げていくようなプログラムが必要になってくる。その背景にあるのが、市民的資質の形成であるとか、民主主義の形成につながっていくんです。それからまた多元的な視点というのも必要ですよね。複眼的なものの見方ということですけど、一つではなくて、様々な観点ということですね。授業の中でも、解答が一つしかないようなことではなくて、答えがいくつかあるような問題について自分なりにその問題を調べて自分なりにその結論を出すということも必要になってくる。そしていろんな人たちがいろんな形で、教室の中に多様な背景を持った人たちがいるので、その多元性を生かすような視点というのものも必要になってくるんです。なぜ多元的な視点が必要かというと、皆さんがやっている実践にひきつけていうと、多様な人が入るほうが面白いんですよ。たとえば杉澤さんが武蔵野市国際交流協会時代にやった一つの実践に面白いものがありました。小学校 3 年生で公園作りをやったんです。そのときにミャンマーからの留学生がいました。大きな模造紙に公園を作っていくんですね。「ここに自動販売機を置こうよ」ミャンマーの留学生が、「どうしてそんなところに自動販売機を置くの？水があるじゃん」「そうだね、じゃあやめよう」。つまり、何の考えもなしに子どもたちは作ってしまう。「じゃあ川を作ろう」「でも川は危ないよ」「ミャン

マーでは川は遊ぶ場所だよ」「どうやって遊ぶの？」「ターザンごっこ」「ターザンごっこってどんなこと？」「こんなことだよ」「どうしてもやりたい」とか、子どもたちはいろんな意見を入れながら、自分たちの公園を作っていくんですけど、そのときに、違う視点が入ることによって、子どもたちの視野が凄く広がっていく。そういうことを杉澤さんは、武蔵野市の国際交流協会のときにワークショップを利用しながら授業実践をされていたんです。多元的な視点を入れるということはそういうことなんです。留学生が授業に参加すると、多元的な視点が入ってくる可能性が出てきます。いろんなものの見方ができるようになります。それによって子どもたちの視野が広がるということはすごくいいことなんです。だから多元的な視点を生かすようなプログラムが必要になってくる。こういう多元的な視点が、人権を基礎にした民主主義だとか共生につながっていくということだと思う。他者との関わりを通した自己の肯定性、言葉を変えれば「セルフエスティーム」ですね。子どもたちは、自己の肯定性が非常に低いような気がするんです。昨日できた本で、『「共に生きる子ども」を育てる国際理解教育』という佐藤裕之先生と二人で編集しました。これ全部川崎の先生方との実践です。今矢崎先生だとか佐藤公孝先生の前の人たちのグループと一緒にやっていて、その中で共生の必要性ということで、こういうことを書いてみたんです。今共生が重要視されるのは何より子どもの現実を踏まえてのことで、子どもたちには自分には無関係というニヒリズムが蔓延している。そのことが他者に思いをめぐらせ、自分の行為が他者にどのような影響を及ぼしその結果どのようなことが起きるかの想像性を鈍らせているのではないか。だから共生は子どもたちの現実から見ても必要な視点なんだということを書いたんです。そのためには自分自身、共生というのは自分と向き合うということが大事なんじゃないかということを書いていました。他者との関わりを通して自分自身を肯定的に捉えていくような力を国際理解教育の中核に据えていきたいわけです。他者に認められる自分がいて、自分が一緒に関わりを持ちながら、いろんな活動を展開していくような力を、エンパワーメントするようなことが国際理解教育には必要だからです。例えば小学校 3 年生で、お母さんがフィリピンでお父さんが日本人

の子がいたんですね。クラスの中でおどおどしていた。そこでその先生は10月に小学校3年生にはちょっと難しいんですが、バンブーダンス選手権をやったんです。何故かというたまたまそのお母さんがそのバンブーダンスのセミプロみたいな人だったんです。その先生はそれを聞いて、いろんな仕掛けをするんです。そのお母さんをそこに呼ぶことによって、そのフィリピンから来た子どもは自分に価値を見出していく。それまではクラスの中に溶け込めず、おどおどしていたんです。調べていくと、国際結婚によってクラスの中で自分があまり評価されていないんじゃないかという否定的な自己感情を非常に強く持っていた。そこでお母さんと呼んで来て、すばらしいバンブーダンスを披露してもらったんですね。そうしたら子どもたち自身が、自分たちもバンブーダンスをやると言い出して、それが参加共同となっていきます。下手な子どもたちがいると、もっと高くとしようとかもっと広げてやろうとか工夫するんですね。また、母親がフィリピン籍の子どもは、お母さんが来てみんなの前でダンスを披露して評価されたことによって、自己肯定性が高くなる。それを契機にしてこの子どもがクラスに溶け込んでいって非常に生き生きとしたというのが、実践の例として載っているんですよ。こういうまさに自己の肯定性が必要なんです。同時に今皆さんが関わっているクラスにはないかもしれませんが、川崎の場合には、外国籍の子どもとか国際結婚の子どもがいっぱいいますよね。そういう子どもたちの問題性とどう関わりを作っていくか。これが自己の肯定性ということだと思えます。こういうことを、国際理解教育の実践の視点としてやっていこう。さらに創造ということ、つまり新しいことをみんなで作り上げていくということです。

さて、今までの流れの中から引き出していくと四つくらいが言えるのではないかな。国際理解教育が分からないとよく言うんですけども、国際理解教育の流れを追っていくと90年代半ば以降、この10年くらいの間に、参加共同とか市民的資質とか人権を基礎にした民主主義の形成とか、地球的視野とか共生といったものが、新しい国際理解教育の動向として必要になってきたんです。それを受けて言うと、こういうような実践の視点を持つことが大切なんじゃないかと思えます。ということは、皆さんがこれからプログラ

ムを作っていくときに、こういう参加して一緒に協働できるプログラムをどう作っていくのか。そして、いろんな多元的な視点を授業の中に導入していくということです。さらに、未来志向という視点を授業実践の中に導入していけばいいじゃないか、と思えます。

大急ぎで講義をしてしまったので分からないところがあるかと思えますので、あとは質問の時間にしたいと思えます。質疑しながら皆さんともう1回考えてみたいと思えますがどうでしょうか。

<質疑応答>

司会:講義ありがとうございました。質問がある方は自由にどうぞ。

質問者:さっき国際から文化際、人間際、あるいは多文化共生、国際理解教育の理念をどう整理するかということをおっしゃっていましたが、そこでキーとなってくるのが文化っていう概念をどう考えるかということだと思えますね。文化と文化の間の際とか、多文化っていうものがあって、それが共生するということはどういうことなのかということももっと詰めて議論されないと単に国際から文化際とか、多文化共生とか言っても、まだみんな惑うと思えます。さっきそれで私がいい例だと思ったのが、おつりの話なんですね。ああいう具体的な見方とか考え方の違いっていうものを、もっとどんどん出していって、そしてそれを一つひとつつぶしていくとか、みんなで考えていくということをするのが一つの方向性かなという気がしたんですね。下手すると文化なんて言っちゃうと、文化とは何かという話になって、文化本質論とか文化構築論とかいろんなめんどくさい話になるんですけど、でもそれを解きほぐすヒントというのが、今日のお話の中にあって、たとえばメキシコ人と日本人がぶつかったときに出てきた違和感なり、考え方の違いといったものを、もっと丹念に拾い上げていくという作業をやっていく必要があるのかなという気がしたんですけど、その点はいかがでしょうか。

佐藤:確かにそのとおりだと思いますけれど、その大前提となることについて言います。多文化共生という視点を組み

込んだことで、国際理解教育をどういう風にしてまとめていくのかという議論は実は必要になってくるんだろうと思います。そのときの筋道が今高橋さんが話をしたようなことになっていくのかなとは思いますが。国際理解教育は今まで外に向かっていたものが、再度内に向けられてきて、日本の社会の中の多文化性をどう組み込んでいくのかという議論がもう一度出てくるだろうと思います。つまりグローバルだけでなく、中にまで広がってきている。その中をどう組み込んでいくのかというときに、議論がもう一度出てくるということです。外側の議論は一応終結しそうなんだけれども、さらに内側に向かったとき、それを取り込んだとき、その概念整理をどうするかというのはこれからの課題になっていくだろうと思います。ただ、それは理論的な話であって、私自身も多文化共生と言っているけれども、それを組み込んだ形で、国際理解教育をどういう風に整理するのかということに関してはまだ十分に整理していないので、そこはまたもう少し勉強させてください。具体的にそれをどう統合していくのかというときに、ただ単にいろんな人たちが言ったことを統合するんじゃなくて、今高橋さんが言ったような形で事例を通してながら、つづいていくという手続きの中でやっていくというもひとつの手法かもしれない、と思います。多分そうなっていくのかなという気はします。文化の概念を出すとまた難しいのでね。学生さんはどうでしょうか。

質問者:先週ディスカッションをした中で一番大きな疑問なんですが、国際理解教育をやる際に、往々にして国の比較とか、国の概念を出すことが多いんですが、果たしてそれをしてしまうことで「寝た子を起こすな」ではないですけど、実は子どもたちは国と国に違いがあるのを知らないのに、そういうのを逆に植えつけてしまうのではないかという意見が学生から出たんですが、それについてはどう思われますか。

佐藤:確かに国際理解教育というのは、国と国の問題を考えていくものから超えて、人と人との関わり、つまり人を通して理解しようという動きが出てくるんですけども、ただ人を介在させても国は出てくるんですよ。しかし現代的な課題を読み解いていく力、というものが必要ですよ。つまり

国というものが出てきたときにその個人と国との関係というものをどう理解していくのか。そこはきちっとした知識理解がどうしても必要じゃないですか。だから国が出たからどうということではなくて、国際理解教育というのは非常にダイナミックな学習のプロセスと思うんですよ。例えば国というものに我々がどうしても持っている偏見や知識というものがあってもいいけれども、しかしながらその人と語ったり、それを契機にして色々な学習をしていくことによって、その学習者自身がその概念を越えたりステレオタイプを超えたりするわけじゃない。だから逆に言うと知識を自分で構成する力とか多角的な視点が必要になってくるんじゃないですか。もっと違う問題だってあるわけで。つまりそういう教材をそれだけ用意できるかということだと思うんですが。だから逆に国が出るから悪いということではなくて、入り方として国から入ってしまうと私たちは往々にしてステレオタイプになったりするということですよ。今まで国際理解教育はそれをしてきたけれども、必ずしもそれがうまくいかなかったというのも事実なんですよ。そして90年代以降の大きな流れの中で国というよりは人というものを中心にしながら授業展開していこうという流れになってきた。しかしそれでも国は出てくる。そこで閉じるんじゃなくてそれをどういう風にさらに広げていくのか。国際理解教育の学習というのは必ず広がりを持たせなくていけない。その広がりを持たせるための工夫、教材をどう与えていくのか、授業実践をどうしていくのか、あるいはその時に留学生と触れ合ったり、いろんな教材と出会ったりすることによって、子どもたちの目が広がっていけばいいわけでしょう。だから国際理解教育というのは閉じられたあるひとつの単元の中にまとまるものではなくて、継続的な授業の流れというのが非常に必要じゃないかと思えますけれどね。

例えば大久保小学校の善元さんはキムチの授業をしているんだけど、キムチの授業で徹底して韓国を肯定的に捉えさせるんです。なぜかという「キムチ臭いといわれた」でもキムチが好きなんでしょ」と善元さんは言われるわけです。じゃあキムチを勉強しよう。それは韓国なんです。つまりまずは韓国を肯定的に子ども自身、周りの子どもに捉えさせる。でもその上で次の授業展開を彼は考えようとしてるんだね。だからステレオタイプの、固定的に捉えるん

じゃなくて、国を知る場合もある意味では必要かもしれない。さらにそれをどう広げていくのかということも必要かもしれないし。社会科ではないからね、社会科では国とか地域とかが必要でもちろん教えなくてはいけないけれどね。しかしそれをさらにどう広げていくのか、っていうこと、それは子どもの視野を広げたり、子どもの持っているステレオタイプをどう広げるかっていう議論だから、それに対してどういう教材を与えるか、どういう人と交流させるかっていう仕掛けが必要になるので、その仕掛けを考えることがおそらく国際理解教育の大事な視点になっていくんじゃないかと思えます。

質問者:私たちは川崎市の小学校でボランティア活動で国際理解教育をしています、低学年の子どもたちはそもそもステレオタイプ自体を持ってないんじゃないかと時々思うんですね。私たちが伝えたことがステレオタイプになっているんじゃないか、例えばフランスと日本は文化紹介で違うんだと伝えたら、ああ、こんなに全然違って、こんな国なんだと思われてしまうんじゃないかと感じることもあるんですが、小学校低学年に、外国の人はこうだと伝えるのはどうなんでしょうか。

佐藤:あなたは個人的にどう思いますか。

質問者:国ではなくて人に焦点を当ててこの留学生を紹介しようとする、その人が留学生である必要性がないような気がしてきて、もうやらなくていいような気がしてしまうんです。

佐藤:留学生と話をしていくうちに、小学校低学年に多元的な視点なんていうのは難しいと思うんですけど、でもある種の発達段階にある小学校の低学年に関心を持たせるということは大切なんじゃないでしょうか。たとえばフランスについて、「ああ違うんだ、調べてみたい、もうちょっと知りたい」といった意欲を喚起していくことは必要なんじゃないかという気がします。それがさっき言った広がりじゃないでしょうか。そしてまた何かにつづったとき、フランスってこうなんだとなったとき、それをどう崩していくのかという議

論が必要だと思いますけれどね。川崎の公孝先生の地域の中の授業で、都市と農村の違いをやっていたでしょう。ああいう授業はすごく面白いと思う。ひとつの国の中でも、地域によって違うんです。そういう多様性みたいなものをベースにしながらか展開していけばいいんじゃないかな。ひとつの国なり地域なりについてやることは決して間違っていない。それは関心を持たせることなんです。地図を並べてここがフランスだよ、フランスはこうだよ、とやるんじゃなくて、目の前にいるフランスから来ている留学生の国を知ることとはとてもよいことだと思います。そしてその子どもたちに関心を持たせるというところに授業の焦点を当てればいいでしょう。その子がまた3年生になったときに違う視点によって焦点を当てるということはまた大事なことから。いろんな違いがあるということを知ることも大事なことだし。そういう悩みを大事にしながらか、子どもたちに関心を持たせる、子どもが自分の中でいろんなことを調べたいという意欲を喚起させることの方が、大事なんじゃないかと思えますよ。そういう子どもの方が実は感性がある。勉強していく上での感性ってとても大事じゃないですか。そう思いますけれどね。

質問者:狙いを設定するときにブラジルの留学生とやっているんですけど、ブラジルのことを子どもが知っても、その子達は将来ブラジルに行かない子も多いだろうし、ブラジルのことを伝えてもそれが結局何になるんだろうかと思っていて、その悩みを小学校の先生にぶついたら、国際理解教育でコミュニケーション能力を培って欲しいといった返事をいただきました。だからと言って私たちのたった3回の実践の狙いを、コミュニケーション能力の育成としてしまうのは、非常に傲慢のように感じます。

佐藤:授業を作っていくときに、内容面と方法面って違うじゃないですか。たとえば場を作っていくというのはコミュニケーション能力だと思うんですよ。でもそこで何を伝えるかという伝える中身はまた違うじゃないですか。授業実践ってそういうものじゃないですか。そのコミュニケーション能力というスキルを身につけさせるというのは、それはいろんなやりとりを通して身につけるけれど、それだけだったら何に

もならない。内容を伴って初めて出てくるものです。やっぱり内容は豊かじゃなくてはならないと思うんですよ。ブラジルに行かないからではなくて、いろんな地域にいろんな世界の中に、グローバルな視野とか地球的な視点とかがあってありますね。いろんなものがあっていろんな所があるいろんな人たちがいるんだということ自体を子どもたちが知るというのはすごく大切なことでしょうか？例えば、気候の問題とか自然の問題とかと関わりを持たせながらブラジルの問題を提供していけばいいんだと思うんです。ただ単にブラジルのことを教えるのが意味がないとは思いません。例えば裕之さんは目の前のブラジルから来ている子どもたちをどうしようかというところから、ブラジルの子どもたちについてのことを知らせるために、自分でブラジルについての教材を作る。そして日本の子どもたちと一緒に学習することによって、子どもたち自身がブラジルに対する正しい知識を持つようになる。そしてなぜ子どもたちがここに来ているのかということ子ども自身に知らせるような取り組みを彼はやってきたわけでしょう。そうするとやはり教えるのが無駄ということは決してなくて、一つひとつを取り上げながら子どもたちに教えていく。それが多角的な視点になる。そういうことだと思いますよ。そして現代的な課題を読み解いていく力であるとか、そういうものが必要であるがゆえにそういう教材を与えなくてはならないのではないかな。

また3回だけとおっしゃるけれど、まさにその3回のなかで、皆がやろうとするときに子どもたちにいろんな見方を身につけさせたいと狙いをつけたのであれば、いろんな話をしてもらえばいいし、いろんな話していけばいい。それが結果としてコミュニケーション能力につながっていくことはあると思うんです。だから内容と方法を分けて考えないといけないかもしれませんよね。そしてそれらがうまく結びついたときに、初めて自分のものになっていくんです。ただ単に留学生とうまく話ができただけで喜びはしないでしょう。心が通わせられたとか、こんなことが分かった、と言って初めてコミュニケーションの力がついたということになるんだと思うんです。学校の先生が、コミュニケーション、コミュニケーションといっても、内容の伴わないコミュニケーションは普通ありえない。やはりきちっとした内容をきちっと伝えていかないといけないような気がする。だから留学生

が行ってただ単に話をするだけではなくて、自分の思いを伝えたり、自分の出身地のいいところを子どもたちに伝えたりすることはすごくいいことだと思うんです。中学生くらいになれば、自分の問題点なんかも踏まえて、「こんな問題点もあるけれどこんないい点もあるんだよ」ということも伝えながらやるのもすごく大事なことだと思うんです。だから皆さんがやっていることは、決して間違いではないと思うし、悩むのはいいけれど、決して無駄ではないと思います。川崎の例でいうと、子どもたちはみんな楽しみにしているし、楽しんでいるし、いろんなことを学んでいる気がするし、子どもたちにとったらかけがえのないいい機会になっていると思うので、やらなくていいということはないと思うから、ぜひ頑張ってください。

質問者:私自身は国際理解教室の実践はまだやったことがなくて、このフォーラムに参加しているだけなんですけど、例えば韓国の人がキムチを食べる、とか、日本人は寿司を食べるとか、そういうところから入ったとして、中にはキムチが嫌いな韓国人とか寿司が嫌いな日本人もいますよね。そうなるとその違いというのは必ずしも必要なのかなという気がするんです。この人は韓国人の人だけれどキムチが好きではない、この人は日本人だけれど寿司が好きではない、この人は朝何時に起きてどう、とか、一対一のコミュニケーションが何より大切なんじゃないかなと思うんです。どうしても国際理解教育のどうのと言われても、私には国を紹介するということの必要性がよくわからないんです。

佐藤:よくわかりますよ、その議論は。アジアに対して日本語教育をやっている国際文化フォーラムというところがあって、あなたの言った議論をそこでしたことがあるんです。今まで文化というと、日本はこれだという非常に典型的な文化を伝えてきたんです。今あなたが言ったようなことをどう組みこんでいったかというです、7人の実在の高校生を取り上げたんです。写真をいっぱい撮ったんです。例えば朝ごはんってみんないろんなものを食べるでしょう。でもそこに共通して見えるものがあるんですよ。お箸で食べているとかね。一人ひとり違うんだけど、学校に行きますというときに必ず靴を履いていくとかね。一人ひとり

皆違うんだけど、個々の7人の中に、そこに共通するものが見えてくるんだ。その共通するものをどういう風に伝えていくのか。個と共通性の問題ですね。そこは非常に大きなテーマになるだろうと思うんですよ。例えばあなたが言ったように、寿司は嫌いかもしれないけれどしかし多くの日本人は食べるかもしれない。そして寿司屋が山ほどある。行くか行かないかは個人の好みだけれども。しかしあるというのは事実。それはもしかしたら一つの大きな特徴になるのかもしれないよね。そうするとそれをどういう風に教えていくのかというときに、それをどう教材化するかということだと思います。国際理解教育というのは教材化がすごく難しいんです。個別性と共通性をどう組み合わせるのかという問題だと思うんです。共通性の中に浮かび上がってくるものを、それが国であってもいいし文化というカテゴリであってもいいし、性別であってもいいし地域であってもいいんだけど、そういうものをうまく共通性のひとつのカテゴリとして出すことによって、子どもたちの理解を促進させることができるのではないかと思います。だからその7人の高校生を見ても、出会いだよ。日本の高校生にも多様性があるということで沖縄出身の子であるとか在日の子であるとかいろいろんな子どもたちを通してらんだけれど、その中にすごく共通するテーマが浮かびあがってくるんです。例えば家族の写真を撮ると必ず全員で座って撮っているとかね。あなたが言うのは、個別性と共通性の問題をどうやって授業の中に組み込むかという話だと思うんだけど、私自身は全部個別性に還元できるとは思っていないんです。

質問者:でも国際理解教育の狙いは共通性を示すだけではないですよね。

佐藤:もちろん。

質問者:最終的に一人対一人の関係を築くことにあるのかな、と。

佐藤:それは私がやっている異文化間教育の関係になってくるんだけど、関係といっても対等な関係ではもうないよね。全部が対等な関係におかれているわけではなくて、

関係を組み替えていくというときに、その人の持っている背景を理解しなくちゃならない部分があるんじゃない？例えば女性と男性だってそうじゃない？ある種の関係性は是一对一だけれども、あなたは女性というひとつの性を背負っているわけだし。男性というひとつの性をお互いに背負いながら関係を作っていくわけなんだけれど、必ずしもそれが対等の関係なのかどうか。女性であるがゆえの何かという問題を持たざるをえないということもあるわけですから。だからそういうことをきちんと見ていかなくては行かない、そういうこともあると思うんです。例えば国際理解教育で共生をテーマにし、障害者と健常者の共生を見たときに、健常者から見た障害者の文化は必ず下に見られるでしょう。この枠組みの中で授業実践をすると障害者は障害者の役割を担っている限り弱者であるがゆえに助けなくちゃならないと議論しても、何も関係性は変わらないんですね。だからこの関係をどう変えていくのかという議論が必要になります。それは一對一の人間関係だけではないよね。必ず関係の中には我々が背負っているものがあるわけだから。そこに目を向けるのに、現代的な課題を読み解く力がどうしても必要になってくる。例えば障害者とはなんなのか、というときに私がよく話すことなんですけれど、私すごく目が悪いんです。乱視がひどくてずっとコンタクト入れてるんです。で、ある人に「あなたコンタクトや眼鏡がなかったら外歩ける？」と言われて「歩けない」と答えたんです。「じゃああなた視覚障害者でしょ」と言われたんです。確かにそうです。私はコンタクトや眼鏡というひとつの道具があることによって普通の生活ができる。障害というカテゴリーが変わるわけです。そうすると共生というときに、その条件を我々がどう考えているかという議論です。だから想像性であるとか、未来志向というのがどうしても必要になってくるんです。個別、一對一の関係だけでは捉えきれない人間の関係性のあり方ってあるわけでしょう。対話を通して人と人との関係を作り出していくというのはそういうことなんです。だから国際理解教育として大きなテーマとなっていくんじゃないかな。共生というのは個人の問題ではない、その個人を取り巻いている条件をどう考えていくのかということですよ。それを私たちは学んでいかなくちゃならないんです。学校の国際理解教育では、高齢者なんかみんな弱

者にされてしまう。そういうものじゃないんです。あなたが言うのもわかるけれど、一対一の問題としてだけ捉えてしまうと、見えなくなってくるいろんな問題が関係性の中にもしかしたらあるのかもしれない。

質問者:国際理解教育というものが、今例えば学生を府中市なら府中市、川崎市なら川崎市に学生ボランティアを送り込んでいるのですが、国際理解教育というものが学校の教育制度のなかでどういう風に位置づけられているんですか。大久保の例でしたら、継続は大事だといえますよね。一つのクラスの中で継続して行っている例です。発達段階があって、低学年ではこう、中学年では、高学年では、そして中学生だったらこういうレベルで、という形がある。すべてある種の体系がある教育というのが本来あるべきだという認識があるべきだと思うんですね。普通の教科であれば、国語にしても算数にしてもみんなカリキュラムがあって、小学校の低学年はこのレベル、中学ではこのレベル、週何回、というのがあるわけですから、子どもたちの方も段々力をつけていけるというイメージがありますよね。それに対して国際理解教育というのは、非常にすばらしい理念実践課題とかがあるわけですけど、現実の学校の中にどういう風に行われているのか。それがはっきりしないんですね。学生たちも自分たちが行って、1回きりではなく3回4回と継続性をなんとか持たせようとしていますけれど、やはり3回では短い。その短い中で自分たちがやったことはどういう影響力を持っているのかということが不安でしょう。その辺はいかがでしょうか。

佐藤:国際理解教育をどう学校の中で捉えるかということは非常に難しい、先生が指摘されたとおりの問題が間違いなくあります。総合的な学習の時間が出てきて追い風になったのは事実なんですけど、逆にそれが国際理解教育の考え方を狭めてしまったというのも事実なんです。実は教科の中でもできる話なんです。皆さんがやるような実践は、導入型であるとか展開型であるとか結末型であるとかまとめ型であるとか、いろんな種類があると思うんですけど、例えば教科の導入のところで留学生との話を1回入れていくとか。そして例えば社会科で日本の工業について勉

強したあとに、留学生に来てもらって一緒にその国の工業の話をしてもらう。さらにまとめて留学生も交えてディスカッションしていくという流れを作ることできる。先生がおっしゃったことで言うと、学校の中では確かに国際理解教育をどこで実践したらいいかわからないのが実際非常に大きな問題なんです。だからほとんどの学校で総合的な学習の時間の中でやっているのは事実です。だから交流型とかイベント型中心になってしまうんだけど、これは学生さんに言うべきことがどうか分かりませんが、川崎の先生と話をするときには、教科の中でも考えましようよ、ということを盛んに申し上げるんです。そうすると継続性が出てきますしね。その辺のところは私がこういう話をしても、学校現場が余りに多忙で現実的な諸条件が非常に厳しいものですから、なかなかできないというのも事実だと思うんです。今理念だけ言うつもりはないですが、では戦略的にこの国際理解教育を授業の中に取り込んでいくのかというときには、教科の中でもこんなことをやることは可能じゃないでしょうか、とそういう戦略を取らざるをえないところがあるのかもしれないですね。そしてそういうことをやっていくためには、教科の中でも何かできませんか、という提案をしていかざるをえない部分があるのかもしれないですね。しかも各学校によって全然違いますので、なかなか一概に言えないのですが、国際理解教育というのは教科ではありませんので、やる場がなく総合的な学習の中でやっているのは事実です。ただしもう一度繰り返しますと、管理職だとかが非常に進んだところであると、教科の中でもやっているところはかなりありますので、そういうところの例をうまく出しながら提案していけたらと思います。確かに難しい問題です。

質問者:国際理解教育を子どもたちに実践していくうえで、授業をつくる教師自身への教育というのはどのようにしていったらいいのでしょうか。

佐藤:さっきの本の中に佐藤裕之さんが面白いことを書いているんですよ。何で自分がこんな問題に関心を持つようになったのかという一つの契機が書いてあるんです。前の担任から引き継いだときに、日系ブラジル人の子が一人いたんだそうです。仮名ですけど、川崎ジュリアナあやこ、

というようにミドルネームがあったんです。で、これはもう使わないからしまっておいてね、と言って引継ぎをされたんだそうです。その時は佐藤さん自身もなんの疑問も無く「はい分かりました」と言ったというんです。それがどういことかという、国際理解とか多文化を考えることも無く、子どもたちはうまくいっているから、もう何もしなくていいという思いで引き継いだということなんです。でもよく考えたら、その子は自主的な同化をしているんじゃないか、ということに彼は気づいたというんです。佐藤先生の事例を見たり、君たちもそうなんです、実践への反省みたいなものが必要なんじゃないかと思うんです。そういう子どもとの出会いとか交流とか、そういうものの方をまず大事にして、その上でそれなりの知識を与えていかないといけないような気がします。なぜなら授業や講義でやっているの一つも変わらないんです、学生は。頭でしか理解しないから。ここが難しいところかもしれない。国際理解教育を参加型で始めるというのはそこだろうと思うんです。気づきとか戸惑いとか、そういうものを大切に、それはどういうことなんだと考えることが必要なんです。私どもはここで外大生が中心となって始めているプログラムはすごくいいと思うわけです。だって先生だって困るんです。みんなで一緒に作ろうっていうのはそういうことでしょう。先生自身も考えなくちゃならない。我々の世界でいうと、教材研究に強いんじゃないくて、反省的実践家がこれからの教師の方向性だってよく言われるんですよ。どういことかという、目の前の子どもに応じて、どうい教材を作っているかということだと思っんです。つまり、今までであれば教材があつて、その教材をどうやってどこまで熟知するか、というのがいい先生だったわけです。そしてパターンを三つくらい持っていれば、それを全部応用していけばよかつたわけです。そうじゃないんです。目の前にいる子どもに対してどう対応していくのか。私たちが作っている JSL プログラムはそういうことを考えているんだけどもね。いまあなたが言った質問に関して、目の前にいる子ども、体験であるとか、そういうものを経験して、違和感とか問題性を抱えて具体的な知識を習得するようなシステムを作っていないとなかなか許容性には結びついていかないのかもしれない。

私は国際理解教育とか異文化間教育はまず実践に行こ

う、あるいはまず議論しなさい、といひます。たとえば私の授業には留学生が多いんですね。普通の授業をしたのはもう何十年前になりますけれど、留学生に先生の授業は一つもわかりませんと言われたことがある。自分にはわかるつもりでやっているんですけどね。じゃあどうしようか、と。そして初めて一緒にやるプログラムを組んだんです。そうすると学生自身もわかるし留学生にも合っている。そういうように関わりを持たせるようなことをやらないと変わっていかないのかもしれないですね。あなたの質問に関しては、交流のようなものが先に来て、そのあとにその課題を解決するための知識みたいなものがうまく習得されていけばいいのかなと思ひます。外国人の子どもたちの教育で言う、日本語を習得するためには第二言語の問題であるとか、日本語の問題であるとか、そういう知識が必要となってくるわけですよ。ブラジルの子もだったら、ブラジルの地域研究であるとか、ここには研究者の方々がいっぱいいるわけですから、そういうところから是非学んでいってほしいと思ひしね。そういうところから習得していければすごく面白いですし、先生としての力量ともなっていくと思ひます。

例えば教師としての力量形成という研究も我々の世界にはあるんです。教師としての力量形成を考えたときに、何が一番大事なのかという、障害を持った子どもとの出会いとか、特別支援を必要とする子どもとの出会いはすごく大きいんです。必ず学校にいるはずなんですよ。初めてそういう子どもと出会うことで、自分の教育観が変わっていくということがよく言われます。もう一つは学校の先生方が自分の実践的力が高まつたと思ひきっかけは、同僚との出会いなんだそうです。いろんな同僚と会って、いろんな悩みを抱えているんな話をしたりすることですよ。だから皆さんもこういう場の中でいろんな交流をすることが非常に大事だと思ひ。実践をしろとは言わないけれどね。いろんな悩み、問題を抱えたときに、じゃあどうしたらいいか、と相談できるネットワークを作っていくことはすごく大事なことなんですよ。明日、みんな三島から子どもが来る、じゃあ子どものために何をするか、といろんなことを話し合っていましたよ。それが成功するとは思えませんが、はっきり言って。だって想定する動きなんて子どもはするわけ無いから。様々な動きをするのが子どもの面白さ。それを組み込む度

量の広さみたいなものをもっているか、そういうのが反省的実践というんです。こうなった、じゃあ今度こうしようか、とかね。そういうことだと思うんですよ。だからといって何もしないということではないよね。ある程度予想しながらこうしようか、というプログラムを作ることは必要です。でもそれに固執するのではなくて柔軟に対応するというのが、先生としての力量なんです。自分一人だと詰まってしまうでしょう。だから皆で話をする。我々の世界でそれを同僚性というんです。国際理解教育というのは実はそういうことなんですよ。対話を通して人との関係を作っていく力をつけること。皆さんがやろうとしている授業作りそのものも国際理解教育の実践になるということです。そういうことをぜひ考えて欲しいなと思います。

司会:ありがとうございました。時間が迫ってまいりましたので、この辺で終わりたいと思います。佐藤先生、ありがとうございました。

国際理解教育について

東京外国語大学多文化コミュニティ教育支援室

2006年10月17日

東京学芸大学国際教育センター

佐藤 郡衛

今日の目的

◆ 日本の国際理解教育の流れを把握する

◆ 国際理解教育の今日的課題を考える

ユネスコの国際理解教育の流れ

◆ 第1期(1946年～54年頃まで)→摸索期、国際協調と国際平和がその中心

◆ 第2期(1955年～74年頃まで)→第三世界の新興国家の誕生、東西文化価値の相互理解

◆ 第3期(1974年～80年代)→開発教育、環境教育、軍縮教育等が付け加えられる

◆ 第4期(1990年以降)→平和、人権、民主主義をキーワードとした新しい教育の展開

日本の国際理解教育の史的展開 1945年～1960年代

- ◆ 1945年から1960年代まではユネスコと同じ歩調
- ◆ 「協同学校計画への参加」
1968年小3校、中13校、高校8校の24校が参加
人権の研究、他国・他民族理解、国連の研究等

日本の国際理解教育の史的展開 1970年代

- ◆ 1970年代半ばから独自の歩みを
 - ・ 米英のユネスコからの脱退の影響
 - ・ 海外子女・帰国子女教育への傾斜
- ◆ 国際化に対応した教育への傾斜

日本の国際理解教育の史的展開 1980年代

- ◆ 1980年代以降→多様化の道
 - ・ ユネスコの国際理解教育
 - ・ 開発教育、環境教育などの「新しい」国際理解教育
 - ・ 海外・帰国子女教育など「国際化に対応した教育」

日本の国際理解教育の史的展開 1990年代以降

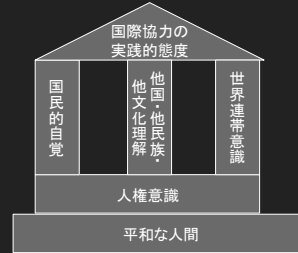
◆グローバル教育としての統合

◆共生概念の登場

- ・ グローバルと一体化した共生論
- ・ 多文化教育との統合

国際理解教育の概念整理－ユネスコ

- 永井滋郎氏(1984)の1974年報告についての整理。『平和な人間像』と『人権尊重』を基盤として、『自国の文化理解を踏まえた異文化理解』と『世界的相互依存関係と人類共通への諸課題の理解』を中心的展開領域、『人類共通の課題解決へ向けての国際的連帯と協力』を帰結とする構造と整理している。



国際理解教育の概念整理－統合の試み

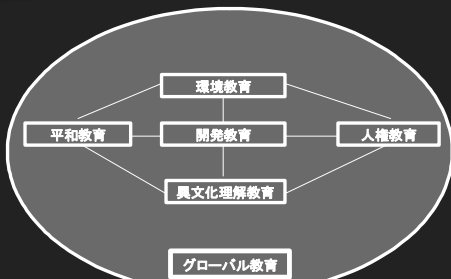
- 多様な国際理解教育をどう整理するかが1980年代の課題になる。それをすべて並列して捉えていた。この並列化は、「アンブレラ型」と呼ばれるが、「アンブレラ型」の国際理解教育の整理が試みられるのは、1980年代半ば以降のことである。永井滋郎(1984)は、多様な国際理解教育を「文化理解アプローチと問題解決的アプローチ」に区分し、その両者を止揚するのが「グローバル教育」であると整理した。だが、これは概念の構造化というよりは、課題の整理やその接近方法により整理したものである。

国際理解教育の概念整理－統合化2

- 箕浦康子氏(1997)もまた、多文化教育、開発教育、環境教育、人権教育、平和教育と従来別々なものとされてきたすべてを「地球的視野に立つ教育」、略して「地球市民教育」と呼んでいる。
- 1970年代から日本の「国際化に対応した教育」、とりわけ海外子女教育、帰国子女教育も国際理解教育の概念に包摂されてきた。これらは、いわば日本に特有のものであり、日本の政策の流れと相まって国際理解教育の概念として範疇化されてきたのである。小林哲也氏(1988)は、国際理解教育の混迷、混乱の原因を「現実的な要請と理念的要請との間のギャップ」にあるとして、現実的要請からの国際理解教育の必要性を提起した。この現実的要請こそが、「国内の国際化」であり、そのためには「多文化教育や異文化間教育」をも視野に入れる必要性を指摘したのである。ここに来て、国際理解教育はさらに拡大、多様化することになる。

国際理解教育の概念整理 －開発教育を中心に

- 田中治彦氏(1994)は、開発教育の独自性を主張しつつ、これまでの国際理解教育をすべてグローバル教育として統合するモデルを提起している。

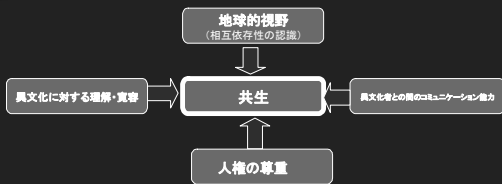


国際理解教育の概念整理 －グローバル化

- 魚住忠久氏(1995)も国際理解教育や環境教育などをグローバル教育の中に統合しようとする立場をとっているが、その固有性と独自性をも主張している。
- グローバル教育の発展段階を考慮している。まず、第1は国際理解教育と環境教育と併存する論であり、地球的なものの方、考え方を養うとともに、その内容を『地球的規模での諸問題』に限定し、その問題への解決に向かいうる知識、能力、態度の育成をめざすものとしている。
- 第2にグローバル教育は、国際理解教育、環境教育と共有する部分について融合的に学習を進めるものであるという。
- 第3の類型は、グローバル教育とは、国際理解教育、環境教育の各目標、内容をすべてグローバル教育として吸収、統合、発展をはかるものであるという。
- 魚住氏自身は、第3の統合の重要性を指摘しているが、国際理解教育との相違も一方で強調している。すなわち、「国際理解教育は、主権国家の集合体としての国際社会を前提に、他国理解や、文化理解、国際関係構築等の学習を目的として、諸国民・諸国家間の相互理解を、また人間の国際関係の改善を目的とする」であるのに対して、グローバル教育とはグローバル化し、相互依存関係を深めつつある世界を前提に、グローバルなリテラシーやグローバルな価値観の習得を重視して、意思決定したときに、トランスナショナルな行動のできるグローバル公民性の育成をめざすことであり、この両者は「その方向性とするところが異なる」としている。しかし、魚住氏の指摘する国際理解教育の概念は、グローバル教育の独自性を強調するあまり、国家的性格を持つものとしてかなり狭義にとらえており、ここでも国際理解教育の概念を巡ってスレが生じている。

国際理解教育の概念整理－共生

- 大津和子氏は現実的課題である「人権」と「グローバル」という2つの視点から「共生」をとらえ、この「共生」を進めるための教育の在り方を構想している。



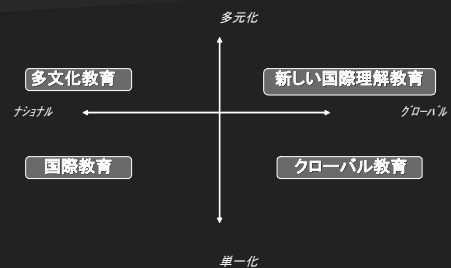
国際理解教育の問題点

- ◆ 「国民的資質」と「グローバル的資質」、ないし「地球市民的資質」との対立
- ◆ 日本の特殊性と普遍的価値との対立
- ◆ 教育実践における個人的資質への着目

国際理解教育の整理

- ◆ ナショナリズムからグローバリゼーションへ
 - ・ 「国際的な日本人」から、「日本的な国際人」という転換
- ・ 日本という生活の場で、グローバルな視野で思考し、行動できる日本人の育成が課題
- ・ 世界が直面している環境問題、人口問題、南北問題、人権の擁護、核兵器の廃絶等々の課題を「地球市民」の1人として担う主体の形成へ

国際理解教育を整理する枠組み



「国際」という枠組みの転換

- ◆ 国家・言語・民族の一体化のずれ
- ◆ 「国」の枠をこえたヒトの移動
- ◆ 「異」「自」という二項対立の枠組みの転換
- ◆ 「内」なる他文化
- ◆ 地域、生活レベルでの共生

「国際」を捉える視点の変化

- ◆ 文化を重層的にとらえる視点
 - －文化の多様性・普遍性・対立性
- ◆ グローバリゼーションの視点
 - －グローバルな諸課題
- ◆ 未来社会を創造する視点
 - －これからの社会を担う責任ある市民の育成

現時点での国際理解教育の共通点

- ◆ グローバルな視野
- ◆ 共生
- ◆ 自己理解、自尊を中心とした人間関係
- ◆ 未来社会の創造－社会参加

国際理解教育の理念をどう実践していくか

- ◆ 国際から文化際、人間際へ
－多元的人間像の形成
- ◆ 多文化共生
- ◆ 未来社会の創造－citizenship education

国際理解教育のねらいとは

- ◆ 現代的な課題を読み解く力
- ◆ 知識を自分で構成する力
- ◆ 異なった文化をもつ人を思いやる力
- ◆ 対話を通して人との関係をつくりだす力

新しい国際理解教育の動向

- ◆ 市民的資質の形成
- ◆ 人権を基礎にした民主主義の形成
- ◆ 地球的視野
- ◆ 共生

国際理解教育の実践の視点

- ◆ 参加・共同
- ◆ 多元的な視点
- ◆ 他者との関わりを通じた自己の肯定性
- ◆ 創造

(3)山西優二氏講演会「国際理解教育のあり方を考える」

日時:2006年11月6日(月) 18:10~20:00

会場:東京外国語大学本部管理棟中会議室

講師:山西優二氏(早稲田大学教授、比較・国際教育学)

山西優二:簡単に自己紹介だけさせていただきます。山西と言います。今所属は、早稲田大学文学部で、国際教育論を主たるテーマとしながら、教育学関係の授業も、ほかにもいろいろ持っています。私がこの国際理解教育もしくは開発教育にかかわって、もう20数年になります。特に開発教育に関しては、1980年代の前半ぐらいからかかわってきています。開発教育の場合、20数年前、私は、まだ大学の教員ではありませんでした。1982年にできた開発教育協議会という組織がありますが、日本各地で開発教育を進めていくNGOのネットワーク組織として生まれました。その組織が生まれてしばらくしてから、かかわってきていますので、NGO・NPOの立場から、このような活動にかかわってきました。その後時間を経る中で、大学の教員になり、いくつかの地域、いくつかの学校にかかわっていく中で、開発教育から、国際理解教育・平和教育へも関心を広げてきました。ですから、今でもNGO・NPOといったところで、いろんな活動をしていますし、神奈川では、かながわ開発教育センターを2年ほど前に、旗揚げして、地域に根差した開発教育を作りだそうとしています。国際理解教育では、武蔵野市の国際交流協会と一緒に、国際理解教育の教員セミナーを、7年ほど前から、ここにいる杉澤さんたちと共にやらせて頂いています。それから、今、それぞれの地域、例えばここ2年、岩手での活動にかかわっていて、月一度は岩手に行って、セミナーをやったり、神戸でそのような活動を行ったりなどもしています。また、今住んでいるのが逗子ですから、福祉教育のネットワーク作りやセミナーを行ったりといった活動もやっています。地域での活動と、NPO・NGOの活動、それから大学での活動にも参加して、それが中心にもなっていますので、学生たちと、いろんな活動しています。昨日まで早稲田大学は、早稲田祭を開催していたので、私のゼミの学生もフェアトレードショップを出したりしていました。今日もたまたま、山形県の

農に関するテーマで、「命を耕す人々」という有機農法の上映会を昼間やっていたので、それが終わって、今とんできたところです。私は研究者といえば研究者ですが、大学の教員は、教育者ですので、一人の教員ですので、どちらかといえば、私は教育実践の立場から、実践で研究したことを生かすために、研究しているというスタンスをとっています。前回の佐藤郡衛さんが、国際理解教育の理念と言うか、歴史を語って頂いてると思いますが、私は逆に実践から見えてくる、いくつかの課題とか、もし皆さんが、今後、国際理解教育を進めていけば、実践していく時に、こういった視点は、持っていたほうが良いのではないかということをお話しできたらと思っています。わずか2時間しかありませんので、あっという間に過ぎてしまい、時間がたらないということになるのははっきりしています。今私は、早稲田大学の教職課程で、総合演習で、国際理解教育の理念とその実践という授業をしています。半年で14、5回の授業をするなかで、国際理解教育の理念から実践まで、最終的には学生たちに30何時間もの学習プログラムを半年の間で、作ってもらい、学生数100名のクラスで、15~18のグループを作り、半年でそこまで持っていきます。たぶん、教育実習では1コマ2コマの指導案を作ることは、あるのですが、30何時間分をあえて2ヶ月ぐらいで作れるか、作ってみようということで、作らせています。そうすると、いかに構造的に国際理解教育の目標設定ができるか、できないか、が問われてきます。1時間2時間ではないですから、30何時間分ですから。時間があれば、学生たちが、どんなプログラムを作っているかということをお見せすることができると思います。過去3、4年そういった授業をやってきた中で、様々な授業案が生まれてきています。なかなか魅力的ですよ。学校の教員に作らせたなら、これは絶対に作れないぞというプログラムを学生たちが作ってきたりします。例えば、これは、先週の授業で、過去こんな指導案を作った人がいますよといって、紹介したのですけれども、これは20ページのうちのわずか6ページだけをとってきたものですが、こういう目標構造で、30何時間分の指導案がずらっと書かれています。30何時間分の授業案の後ろには、例えばこれは26時間目の授業に使う実際のワークシートですがこのような教材がつけられています。このように、

トータル20ページの報告をわずか2ヶ月間で、学生たち8人ぐらいで、協力して作っています。このような活動の中で、見えてきたことをわずか2時間でお話するというのは、大変なことでありますけれども、できるだけそんなことも織り込みながら、お話ししたいと思っています。この講演会のなかで少しワークも入れないというお話もあったので、一つぐらいはワークを取り入れ、また他の教材についても、こんなものがありますよと、若干ですが、ご紹介させていただけたらと思います。ここまでが自己紹介です。

今日は3枚の資料を事前に配布させていただいています。この資料から、見ていきたいと思っています。国際理解教育に対するこんな質問意見というテーマです。これは、今から2週間前の10月18日に、先程言いました私の総合演習の授業で、学生たちに配ったものです。いろんな地域で私も、セミナーとか、教員向けの研修会とかをされていて、特に教員という枠を離れて、国際理解教育についていろいろなどころでお話する機会がありますが、これは広島に行ったときのものです。あのときは、30人から40人ぐらいの人が国際理解教育に関するセミナーがあるということで、集まってきていました。最初は、皆さんが、どういう問題意識を持ってセミナーに参加しに来たかを聞き出すことから、セミナーが始まりますので、参加者にいろいろな形で聞き出したことをホワイトボードにポイントを書き出したものがこれです。キーワード以外にも若干文章を足していますが、こういうふうな質問が出ました。もし、今皆さんが、学校に入ったりして、国際理解教育を今後やろうとしている、もしくは国際理解教育って本当にできるのかという議論もされると聞いていますけれども、例えば皆さんでしたらこういう質問が出たら、どういうふうに答えるのでしょうか。若干問題提議を含めて、現場からは、こんな意見も出ていますよというところを紹介していきたいと思っています。例えば広島の時の資料を見てみますと、「今の世界の現状見ていくと、ますます格差は拡大し、アフガニスタンやイラクなどで見られるような紛争が、より混迷をきわめている。果たして国際理解教育は、本当に、平和の構築や貧困の解決につながるのだろうか。」という質問があります。本当にこれは、直接的な質問ですね。皆さんはどう考えますか。二つ目は、「今、

広島では、教育委員会によって、受験指導がますます強化され、平和教育や人権教育が骨抜きにされている。こんな状況下で、平和実現につながる真の国際理解教育なんてどれだけ実施できるのだろうか。」これはもう教員の叫びですね。こういったものが、ポーンと出てきますよね。三つ目は、「特に小学校では、英語が重視され、英語＝国際理解教育という捉え方をしている。先生が多い状況ですが、はたしてそれでいいのでしょうか。」なんだかこういう質問がボンボン出ると、私なんかワクワクし始めちゃうんですけどね。はい、四つ目は、「国際理解教育プログラムの外部講師として、外国人を学校に招くとき、心がけた方がいいことは何でしょうか。」これなんかは、非常に実践的な質問で、たぶん外語大なんかでも同じかと思いますが、外部の人が来るとなったとき、プログラムを作る上で心がけた方がいい点はどうでしょうかという質問ですね。その次、五つめは、「小学校6年生で、途上国の貧困問題を扱ったとき、日本に生まれてよかったという感想が出ました。これにはどう対応したらいいのでしょうか。」こういうような感想が出た瞬間に、この教員は、うーんと考え込んだんですね。生徒のこのような感想に直面して、自分の授業のやり方はどうだったんだろうと悩んだのだろうと思います。次は一般的ですが、「国際理解教育のテーマや内容として、何を取り上げたらいいのでしょうか。」次の質問はいいですよ。「農業をやっています。今は、野菜の種は世界各地からやってきます。またそれらの種を交配して新しい種を作っています。また、地産地消の考えから、伝統的な野菜のニーズもあり、昔の種を見つけることにも心がけています。私自身は国際理解を日々やっていると思うのですが、はたしてどうでしょうか。」いいでしょ、これ。この質問を出したのは、教え子のお母さんなんです。広島に行くと伝えると、教え子がやってきたときに、そのお母さんも一緒に来て、このように発言したんです。こういう発言が出てくると、そのセミナーは、生き生きとしてきますよね。あ、う、国際理解はどうしたらいいのでしょうかという質問が多いのですが、私のやっていることって国際理解ですかという発言が出ると、大いにセミナーは生き生きとしてくるんですよ。さて、次、「地域で福祉の仕事をしています。地域を眺めると、外国人差別、障害者差別、被差別、部落問題など、多くの問題があ

ります。これらの問題と、国際理解の問題との関係をどう捉えたいのでしょうか。」当然、地域に入れば入るほど、こういった問題は出てきます。問題解決というところで、つまり世界を構造的に読み解くというところで、国際理解をするならば、それぞれの地域が抱えている問題と、国際理解をどう関係づけるのかということは、非常に本質的な問いですね、これも。その次、「ゲームを中心とした参加型的手法を採用していますが、それらは本当に国際理解が求める力の形成に、つながっているのだろうか。」参加型学習としていろいろな方法論が導入されて、ここ十年くらい、いろいろなところで実践されてきていますが、はたして、そうした方法論をやることだけで、力がつくのだろうかという問いですね。また、子供達の発達段階に即して、どのように国際理解教育の目標を設定したらいいかという問いにもつながりますね。はい、では次、「大学で、サークルを作り、ラオスでの教育支援活動やっています。将来、こういった分野にかかわっていくには、どういった仕事があるのでしょうか。」当然このような質問もできました。はい、これらは、広島でのセミナーで次々に出てきた質問の数々です。いいセミナーですね。これだけ質問が出てきたら、その質問に対する議論をするだけで、2時間半やりました。ですから、ワークショップとか、セミナーとかいう枠を崩してしまって、一つひとつの意見に対して、皆さんの意見を交えながら、意見交換をしながら、「私はこう思うけど、どうでしょうか。」というなかたちで、2時間半議論をしました。そして最後の1時間ぐらいで、それを実践するための方法論として、こんな方法もあるけど、その方法が、すでにした議論に、どういった方向性を与えてくれるのか、ということ若干確認しました。約4時間のセミナーでしたけれども、とても充実していました。こういうふうな問いに対してまた、皆さんだったらどう答えるか、どう考えるかというようなことも大きなテーマだろうと思います。私は、半期の授業で、最初に、この問題を投げかけて、「皆さん、半年で考えてください。考えながら、プログラムを作ってくださいね。」というふうに言いました。私は答えを何も出してませんから、「こういう問いがあるということ踏まえながら、プログラムを作ってください。」ということで、質問を投げただけですね。それから下の2つは、ある中野の小学校に行ったときと、武蔵野の国際交流協会で

出た意見です。これはちょっと昨年度のことなのですが、学校の先生に頼まれて、日本の小学校2年生に、フィリピンの少数民族の楽器で、竹でできたトンガトンという楽器の演奏指導をした、あるNGOスタッフの言葉です。「グループに分かれてみんなで協力して、面白い演奏ができたが、トンガトンは、フィリピンの代表楽器という訳ではないので、小学2年生にとって、これはフィリピン理解ではなく、まだ国際理解とも言えないのではないかと思うのですが。」一部の少数民族の楽器を演奏するという活動で、これは、フィリピン、ひいては国際理解につながるのかという素朴な疑問なんですけれども、これに対してどう思いますか。そして、武蔵野では、NGOのスタッフが、「学校と協力して、小学校6年生を対象とした6時間の授業を計画しています。アフリカ理解を基礎に、難民ゲームを通して、アフリカ難民の置かれている状況を実感し、子供達が、自分たちができる支援活動というものを考えるというのが先生からの提案です。何かこの計画にアドバイス頂けますか。」これは、学校からはこういう要望が出てきたけれども、NGOとしてはこれに対してどう対応していったらいいだろうかという質問ですね。面白いでしょう。こういう意見がどんどん出るわけです。本当に現場というのは、今、この現場というのは、必ずしも学校現場だけではありません。それぞれの立場から国際理解教育をどういうふうに扱って行ったらいいかという意見が出てきます。ですから、こういった部分に対して、私たちも、自分だったらどう答えるのだろうか、また、時には、グループだったらどう答えるだろう。という視点を持ちながら、やはり国際理解教育というものを実践的にも、時には理論的にもとらえていくことが必要だろうという気がします。今日は、ここから、本題にいきなり入っていくわけにもいかないのですが、少しこういうふうな状況を見据えながら、今後皆さんもこういった部分に対して、どういうふうに答えるのかということも少し念頭に置きながら、若干ワークを交えつつ、私の国際理解のとらえ方と、今後の実現に向けてこういうことが課題ではないかということをお話させていただけたらと思います。

それで、最初にちょっとワークだけやった上で、2時間とほんのわずかですから、あせるしかないと思います。今、4つ5つは、やるものを持ってきているんですが、何をやりま

しょうか。この中で、レヌカの学びをやったことがある人はちょっと手をあげて下さい。あらかじめ萩原さんから、連絡をいただいて、皆さんが今まで文化理解を比較的、外大生はやってきていると聞きました。ですから、少し文化理解とは違うワークをやって下さいというお話も来たんですけども、ただ私からいうと、皆さんがやっている文化理解というのは、どう文化理解なのかというのが逆にすごく気になって、だからあえて文化理解を題材にしたワークショップをやることによって、皆さんの文化理解のとらえ方が浮かび上がると、かえってそのほうがいいかなと思ってます。ほかの2つ3つほど、違う視点の教材も持ってきましたので、それはそれでまた紹介させていただきます。ということよろしいでしょうか。それでは4、5人で、グループだけ作ってもらって、いざとなれば、3人でもかまいませんので、いくつかグループを作ってください。ここ最近、武蔵野市の国際交流協会では、レヌカの学びは何度もやっているんですが、ただ皆さんの中ではやられた方は少ないようなので、やっていきたいと思えます。全部で18枚あるので、すべて開いてください。それではレヌカの学びの説明をします。レヌカと言うのは、ネパールの女性です。そして、ダランと言う地域で、ろう学校の校長先生を当時していました。年齢的には30歳ぐらいです。その方がJICAの関係で、日本に1年間研修で来ます。そして仙台に入ります。仙台に行ってみると、ろう学校の研修の中で、仙台のいろいろなものに触れていきます。仙台というのはこういう地域かあとか、仙台の人々の生活のこういうふうなんだというようなことを、実際に感じていくんですね。そして自分のものの見方だとか、考え方だとかいうものが変わってきます。この変化に触れた、ある女性、この方は、土橋さんといって、当時小学校の教員をやっていて、今は、JOCAという、やはりJICA関連のところで働いていらっしゃるんですけど、彼女がレヌカと出会っていると、いろいろな違いが見えてきて、「これは面白い。カード化してみよう」ということで、カードにしたのがこれです。ですから、ここに出ているカードはすべてレヌカのことです。「私は」と出てきたら、すべてレヌカのことになります。そして、ただ、この18枚のカードの中には、レヌカがネパールのダランという地域で思っていたこと・感じていたことのカードが9枚あります。そして、彼女が仙台に来て、思った

こと・感じたことのカードが同じく9枚あるわけです。ですから、後は、18枚のカードを、みんなで議論しながら、ネパールにいたころのカードなのか、仙台に来てからのカードなのかを、9枚9枚に分けていってください。ルールは非常に簡単です。ただ実際やってみると、思うように当たらないと思います。それではいいですか。やっていただくことは9枚9枚に分けていただくということです。知っている方はあまり情報流さないようによろしくお願いします。では話し合いを始めてみて下さい。それと、対になっているカードと対になっていないカードがあります。対になっていないカードは、どちらかが仙台で、どちらかがネパールのものです。

[グループごとの相談タイム]

山西:では、ここまでにします。実際にやってみると、難しいでしょ、意外に。これは、ひとつのカードに対して、いろんな立場からいろんな意見が出てきますので。また、このカードゲームができてもう5年ちょっとになります。これをやった土橋さんもそうですし、私もここ何年間で、いろいろなところでこのゲームを用いてワークショップをやっていますので、もう何万人って数の人がこのゲームをやったことになると思いますが、今まで、全問正解は2回だけです。最初の3年間は、全問正解はずっと出ていませんでした。たまたま、1年半くらい前に1回と、ちょっと前に1回出ましたけど、たとえ全問正解が出ても、まさしくカードの捉え方が違いますから、結果が合ったらいいというものでもありません。それから、これはすべて、「レヌカは」という主語になっていますから、やっぱり、レヌカにとっては事実であっても、他者から見たら事実でないということもあります。実際、このカードを通して学べるものというか、何をどう見るかということが重要になってきます。このカードを使ったワークショップのやり方にも、いろいろあります。このカードは、開発教育のほうで、教材化されたものですが、これはすべて裏に絵が描いてあります。裏返してみると、それは、ネパールの絵と仙台の絵になっています。裏返して絵合わせをしてみたら、間違っているところはすぐに分かる。半分ぐらい間違っていたら、もう絵にならないという状態になりますね。ちょっとそういうふうな工夫をすることによって、絵合

わせをやっている、やっていると、間違っただけが出て、そこからまた議論をしていくというやり方もあります。ただ全部のカード1枚ずつ検証しようとすると、合っている、間違っているということよりは、1枚ずつのカードがどういう意味を持っているのかということをやるのであれば、あえて絵合わせをしなくてもできます。これは本当に、簡単に私が、コピーして、ハサミで切っただけのものです。多分、皆さんも、このカードを1枚1枚見ていくと、1枚ずつみんなで議論しながらやっていたら、2、3時間は簡単に想定できますよね。ですから、このカードだけで、ワークショップ3時間ぐらい簡単に作れる、ひとつの教材ですね。それではいくつかのグループだけ、これだけは取り上げてみんなで話し合いたい、という何枚かのカードを選んでください。

参加者: 自信のあるものですか。

山西: いや、というよりも、このカードについて、意見を聞きたいし、他のグループはどうだったのかということを知りたいというカードを選んでください。ではこちらのグループは、夢カードですね。グループではどのように考えたのかということを少し話してください。

参加者: 「私の夢は、歌手・ダンサーになることよ」「私の夢は、主婦になることなの」とカードには書かれています。まったく対照的な夢なんですけれども、私たちのグループでは、主婦になるという夢が、ネパールにいた時の夢と考えました。ネパールでは、お手伝いさんを雇えば、主婦ほど楽な仕事は無いと聞きました。逆に日本の習慣では、お手伝いさんをいませんから、日本での主婦の仕事は、こんなではありません。そして、歌手・ダンサーになる夢についてですが、この方は、校長先生ですので、そろそろ違うことがやりたいと思ったのではないかと思います。日本に来て、ダンサーという仕事があるんだということを知ったのではないのでしょうか。こんな綺麗な日本の踊りを踊ってみたいなどというような根拠が、あるのではないのでしょうか

山西: はい、ありがとうございます。こちらのグループは、主婦になる夢がネパールでのもの、歌手・ダンサーになる夢

が日本に来てからのものと、分けました。結果としては同じ分け方になったグループはありますか。こちらの二つのグループは違うということですね。では、こちらのグループは、どういう理由で、歌手・ダンサーになる夢がネパールにいたときのもので、主婦になる夢が日本に来てからのものだと判断したのですか。

参加者: あえて今、主婦になる人はなかなか少ないので、主婦であることがある意味、理想化してきているという社会の風潮があると思ったんです。

山西: 日本の中で、ですか？

参加者: はい。それからネパールでは、インドの文化の影響などで、テレビで踊りなどをやっていて、そういったものが身近にあるので、歌手・ダンサーっていいなあと憧れたりするのはないかと思いました。

山西: はい。では、日本における最近の主婦像から、日本では主婦になるのが夢で、ネパールでは、そういった映像的な情報を通じて、歌手・ダンサーになりたいと思ったということですね。

参加者: ただ、主婦には簡単になれるけど、ここでは、あえて「夢」って書いてあるので、そういう意味も含めて、ダンサーはネパールにいるときのものではないかと思いました。

山西: はい。分かりました。いかがですか。同じような理由ですか。全く違いますか。では、少し理由だけ話してください。

参加者: はい。ここでは、この夢シリーズ 2 つともネパールにいたときのものにしました。

山西: そうか、そうか。はい。あえて対があると言いましたが、どれだけ対だとは言っていないから、これが対ではないという判断ですね。

参加者:このように判断したのは、日本の子供達は、「夢は何？」って聞かれたときに、まず一番最初に出てくるのは、すぐ現実的な職業だったりして、あまり夢として、「歌手になりたい」だとかいうことを答える子供は少ないんじゃないかなと思いました。また、「主婦になりたい」という子供も、少ないのではないのかなと思ったので、「夢」というのを持つのは、ネパールにいた時ではないかと思い、両方ともネパールにしました。

山西:最近の子供達って、「歌手になりたい」なんてやはり言いませんか。私たちの世代は、歌手というのは、夢として憧れていたのですけれども、最近の子供達は違うんですかね。ですから、あえて2つとも、ネパールのものだと判断したわけですね。こういうふうなカード1枚だけで、ものすごく意見が出てきますので、18枚すべてやっていったら、きりがありませんね。それでは、このカードを私なりに解説しますと、ネパールにおける女性の地位というのは、皆さんもご存じのように、カースト制に影響を受けています。彼女も、「チェットリー」という一つの階層に属しています。その階層においては、女性は結婚すると、必ず家に入る。仕事は続けられないということが決まっています。だから彼女は結婚すると、全部仕事はやめなければいけないということで、ずっとネパールで仕事をしてきた。それで、校長先生もやっていたわけです。彼女が日本に来たときに、日本にそういう約束ごとがあるかという、無い。そして、家事を見ると、電化製品がある。男性は厨房に入る。なんと楽で楽しい仕事。そして自分の仕事も、同時に続けられる。となると、「ああ、主婦になったら・・・」という思いが、日本に来て初めて、彼女の中に芽生えたわけです。ですから、ネパールでは「結婚しない。主婦になれない。」という思いがずっとあるので、今でも、ネパールに戻られてからも、結婚はしていません。それで、小さい頃から、「歌手になりたい。歌手になりたい。」という夢を持っていて、今もその夢を持っています。ですから、階層と女性の仕事ということがポイントでした。なので、このグループ以外は、全部間違いということですね。

参加者:これ、でも、「夢は主婦になることなの」っていうの

は、むしろ「日本で結婚することなの」ということなのではないでしょうか。

山西:主婦になることもすごくいいことだなという思いが、生まれたということでしょう。それを彼女は「夢」という言葉で、表現したわけです。はい、では次に行きます。あまりやっていると、これだけになってしまって、怒られそうですから。何か、ぜひとも、このカードはというのありますか。

参加者:はい。

山西:はい、どうぞ。

参加者:「ろう学校の子供達は、制服を着る子も着ない子もいる」

山西:制服ですね。これはいろんな地域によってかなり差異はあります。正直言うと、これは、彼女が出会ってきたろう学校においてどうだったのかということです。たぶん皆さんも感じているかもしれませんが、途上国は制服をそろえようとする傾向が非常に強いです。それは、健康的な面、つまり衛生的なこともそうなんですけど、やはり全員が自由にしていくと、なかなか洋服をそろえられないというところがあります。規制の色と形をそろえあとは各自でそろえることが多いです。ここでも、基本的に、紺色っぽいズボンとスカートで、上が白となっていますが、紺とグレーが交錯しているような感じですね。そういうところで、ネパールのろう学校は、制服を必ずそろえる。ただ、彼女が出会った、仙台のろう学校では、それが無い。ですから、制服をそろえるというのが、ネパールカードですね。はい、ほかに、石川さんのところ、何かありませんか。

参加者:「子供達は、よく遅刻をします」というカードと、「めったに遅刻をしません」というカードなんですけれども。

山西:これも、わりとカードが重なっているというか、つながっているカードが結構ありますね。まず向うでの、朝の子供達の生活というものを考えなくてはなりません。これ結構忙

しいわけですね。まず朝食の準備。そのために水を汲みに行ったりだとか、いろんな作業を子供達がしています。この地域は、二食文化なんです。だから三食とらない。そうすると、まず朝食を食べないと何が起きるかという、学校が終わるまで何も食べられない。だから必ず朝食を食べようします。食事の準備とか、子供達は沢山仕事をしますから、きちっと食べるためには、どうしても時間が遅くなってしまって、遅刻しがちになってしまうんですね。日本では、朝食を取らなくても、給食があるので、なんとか大丈夫なんです。ネパールではそういうわけにはいきません。ですから、遅刻しがちなのがネパールであるということです。逆に、めったに遅刻をしないというのが、日本です。それとの関連で、「朝食を必ず取る。」というのがネパールのカードであるし、ほかのカードも同じようにわかってきますね。はい、他に。

参加者:「野菜を…」

山西: ああ、これは難しいですね。「よく選んで買う」というところから、何を想像するかということですね。これは多分、日本語教室なんかをやっていると、こういうちょっとした言葉がどういう風に解釈されるかによって、内容が変わっていくということがよくありますよね。ここでも「よく選ぶ」という言葉を、その人がどう捉えているのかで、違いが浮かび上がってくるんですね。おそらく、グループによっても、「よく選んで」の意味に、「一つ一つ野菜を選んで調べる」という意味と、「ラベルを見て、生産者を見て、生産地を見て、賞味期限を見て」という意味をあてたところがあるかもしれません。だから、レヌカがどういう意味で、「よく」を使っているかということですね。彼女はやはり、ネパールでは、一つ一つ野菜を手にとって、痛んでいないか確かめていました。ですから、「一つ一つ手にとって」という意味で、「よく」を使っています。ところが、仙台に来て、スーパーに行くと、野菜はすべてパックに詰められていて、一つ一つ自由に選べない。というので、土橋さんに電話して、「野菜が選べないんです」といったことから、このカードが出来上がりました。ですから、「野菜をよく選んで買う」というのがネパールカードです。私たちが使う「よく選ぶ」には、意味がいろいろあり

ますから、この「よく選ぶ」を、レヌカはどう捉えているかが問題でした。あと他に。大体行きましたか。はい、どうぞ。

参加者:「おもちゃは…」

山西: これも面白い問題ですね。「手作り」といったら、何を想像するか。私たちが、「手作り」と聞いたら、すぐに「あっネパールだ」と行っていきますよね。ところが、あそこではお土産くらいしかなくて、市場では、中国から入ってきたおもちゃだけなんです。ですが、仙台に来て、おもちゃのキットを見つけて、「あっ手作りのおもちゃだ」と思ったんですね。だから、「手作り」というのは、そういう意味なんです。ここでも「よく」同様、「手作り」という言葉を、レヌカがどう捉えているかでした。他に、よく間違えカードとして、「ご飯を食べる前に、必ず手を洗う」というカードがあります。「手を洗う」カードは、ネパールカードです。なぜでしょう。

参加者: 手でご飯を食べるから…

山西: そうですね。手で食べるからです。この手食文化の人たちは、必ず洗いますね。ですから、彼女のように、スプーンやお箸を使う場合は、手を洗う必要はないではないかと思うわけですね。ただ、食べ終わってから洗うということにはします。あとは、家庭に関するカードですが、「軽い風邪なら必ず休む」というのはネパールカードです。これは、現地に十分に薬がないということで、特に学校に勤めていまずから、無理をすると子供たちにうつしてしまうということがあって、やはり休まなくてはならないんですね。日本でしたら、簡単に薬を飲んで、熱を冷ましてで終わってしましますが、ネパールは、そうではないということです。あと、「異文化交流」は、これはもう、日本のろう学校の場合、他の学校と同じように、年齢ごとにクラスが分かれていますから、異年齢ということはありません。「食事を配る」というのは、給食のことで、先程もありましたね。「遅寝遅起き」は、日本ですね。大体、想像がつかますね。これで、すべてですかね。

参加者: 「遅寝遅起き」は日本ですか。

山西:どれですか。「遅寝遅起き」ですか。それはもう、向こうは朝起きるのは早いです。向こうは、大体 4 時、5 時くらいには起きています。そして、7 時くらいには寝ます。それで、ネパールの人は、地域によってだいぶ違いますけれども、6 時頃に仕事を終えると、夜他にやることがないんですよ。なので、7 時頃には、「あつもう寝よう」ということになるんです。それから、4 時半くらいに起きだして、まだ真っ暗な中、外に出て行くと、ネパールの日の出が見られるんですよ。最高でしたよ。周りの山々が光を受けて、色を変えていく、あの瞬間。もう、最高の瞬間が見られるわけですから、みんな早起きするのです。それで、5 時くらいから活動を徐々に始めていくという感じです。ですから、本当に朝は早いですね。はい、そんな感じです。いかがでしょうか、やってみて。1 枚も間違えなかったところありますか。3 枚ですか。はい、2 枚ですか。惜しいですね。そして、こちらのチームは…

参加者:8 枚です。

山西:8 枚ですね。もう、大いに間違えてください。これ、どうですか。レヌカの学びというのは、まさしくレヌカの日本・仙台での学びというか、気づきというものから、発展したもののですが、面白いでしょう。そして、これから何を伝えたいのか、私たちが何を学べるのかということになりますが、いかがでしょう。ちょっとここは、皆さんなりに、このカード、教材が何に使われようとしているか。また、皆さんが何を学べるか。

参加者:私たちはやはり、日本人の視点で生きているので、ネパールの人だったらどうなるのかという、そういう視点を養うことができると思います。

山西:少し異なる視点。ネパールだったらどうなんだろうということ、あえて違う視点から、状況の捉え方を見るということですね。

参加者:同じ言葉でも、受け取り方によって、かなり意味が違ってきますよね。「よく選ぶ」とは何か。「遅寝遅起き」とは

何か。同じ言葉で話していると思いながら、実は違う言葉で話していたという…

山西:学校現場の方々は、みんな苦労しているわけですよ。外国籍の保護者たちに、言葉を伝えたんだけど、本当にその言葉がどのように伝わっているか。現場では、この問題っていうのはすごくありますよね。ですから、そういったことに気づけるきっかけにもなりますよね。はい、他にどうでしょう。遠慮なく。

参加者:私が面白いなと思ったのは、「私の夢は主婦になることだ」というカードで、やはり、「主婦」っていうと日本だと、家庭に閉じこもっていて…という少しネガティブなイメージがありますが、ネパールでの主婦を踏まえて、日本の主婦を見ると…

山西:やはり、違う視点から私たちの生活を見てみると、その違う部分が見えてくるということですね。先程お答えいただいたような意見と重なる意見ですね。他にどうでしょう。

参加者:我々、そもそもネパールの習慣そのものを知らないということもありまして、それを知ると言うことだけでも十分意味があると思います。

山西:実際ネパールというのがどういう生活をしているのかわからないですね。そしてここで注意してほしいのが、もう皆さん気付いていると思いますが、主語がレヌカであるということです。これはレヌカです。ネパールカードではないです。あくまでレヌカという女性がどう思っているかというメッセージです。これを学校でやると、「これでネパールのことがわかりましたね」と、先生が時として言います。つまり、国際理解教育・文化理解をやるときに、一つの特定の文化を取り上げて、「これが〇〇の文化です」という形で解説してしまうケースがあまりにも多いです。確かに「国」という単位で文化を捉えられることもありますけど、そうでないことも多いです。これは一般的なネパールの人の考えではありません。ネパールの人を 10 人連れてきたら違うカードができるでしょう。

参加者:じゃあ、具体的にどう紹介したら良いのでしょうか。

山西:レヌカを通して見えてくる彼女の文化というのはどんなだろう、という風に紹介したらどうでしょうか。ただその中に彼女の女性という性や、住んでいる地域や、身分などが全部交錯しているのが彼女の文化でしょう。

参加者:じゃあ「個人」という視点で…

山西:個人の背景にある文化を丁寧に見ていくしかない。国という簡単な単位でものをとらえてしまうと、そうじゃないケースが山のようにあるからです。ちょっと例で、仙台である高校の英語の先生が行ったある実践は、レヌカの学びをどう生かすかということで、そのときに ALT として仙台にいた南アフリカの先生が 3 人いたんです。それで、その先生 3 人にカードを書いてもらいます。その 3 人から浮かび上がる南アフリカの姿には、重なるところもあれば重ならないところもあります。そしてまた 3 人の視点から浮かび上がる仙台の姿もあります。3 人のカードが交錯したときの学びはどんなに構造的に広がることでしょう。そういう視点は文化をとらえるときにとても大切です。それが私たちはあまりに国単位でとらえてしまって、例えば私たちは外国人講師を招いてその人がネパール人かブラジル人かというところに簡単にのってしまいがちですが、そういったステレオタイプ化された視点を崩そう、というのが、このゲームを作った土橋さんの提案です。このカードは、永続的に教材化できるのです。私の演習でも 2 ヶ月前に、鹿児島出身の学生が、鹿児島にいたとき自分との東京に来てからの自分の視点をカード化して実践にのぞみました。つまり人間というのは常に移動しながら、そしてそこでいろんな文化に出会いながら、新しい発見ができるのです。ですからこのレヌカの学びを、これにこだわることなく、皆さんも「〇〇の学び」として自分や出会った人たちの視点を教材化できるのです。そして当事者として語れる実践にもっていったらいいと思います。特に東京外大の人たちなんかはありとあらゆる要素を持っています。十分教材化できる。

参加者:日本人同士でもおもしろいですね。

山西:これを実践の 1 週間前ぐらいに先生に「やっておいってください」と提示します。1 週間後に留学生が実践に行くと、どんなに子どもたちは内容を聞きたくてたまらないことでしょう。すごくいい授業への入り方ができる。今早稲田でもこのような実践をしています。そうすることによって、子どもたちが今何を聞きたいのかということが次々イメージできます。そういう形で使ってもいいですし、逆に日本語教室の中でも、今日本語を様々な国籍や文化や意見を持つ人たちが学んでいる中で、これを使ってもいいと思います。18 枚でなくても、3 枚 4 枚ずつでもいいわけです。それで、かつて自分はこう思っていたけど今武蔵野に住んで自分はこういうことを思っているんです、ということを通してお互いに情報交換するだけで、新しい関係が生まれるわけです。それに使っていただきたい。そのためのカードです。ですからこのカードがなぜおもしろいかというと、自由に作られるし誰でも作られる、そういうものです。

参加者:1 つのステレオタイプにずれていくことを逆にうまく利用して、話し合いながら同時にレヌカの人柄なんかも想像できるな、という印象を受けました。ステレオタイプを使って個人を位置づけると言う作業を皆さんしていたんではないかなと思います。

山西:はい。だから文化というのはある種の枠があって、文化に全く共通性がないわけではない。それを人間を通して、人間の中にある、ということをやっていかないと、今までの国際理解教育は個人を横置いてしまっていて文化を教えること・国を知ることを目的化してしまっています。で、国を知ったらどうなるの、文化を知ったらどうなるの、ということが見えないまま、文化を知ればそれが国際理解教育の目的だ、ととらえられてしまうことが時としてあるのです。そうすると、文化を知って、世界には多様な文化がありますね、と知ることがどう繋がっていくか、その方向性がない国際理解教育では国際理解教育に値しないと私は言い切りたい。しかしそうではなく、そこからどう発展していくのかを考えるときに、人間と文化の関係や、人間が文化を作り出すプロセスを考え、更に文化を時には変容させながら新しい文化、新しい関係づくりにもっていくこと、そこに国際理解教育の

狙いがあるのです。そこにもっていくためには、もっと丁寧
に個と文化の関係を見ておかなければなりません。

参加者: 例えば、「私は朝ごはんを食べないこともある」と
「私は朝ごはんをちゃんと食べる」は全く別の人格みたい
に思えますが、同じ人ですよ。状況が変わったことによ
って自分の行動パターンが変わることがありますね。逆に
状況が変わっても、自分の信条で食べ続けるあるいは食
べないということもある。そういうことから、自分がどれだけ
の深さでそれを信条として持っているか、状況に合わせる
程度でしかないのか、ということが、レヌカ自身が自分を振
り返ったときに、これは自分にとって重要だけどこれはそう
でもない、といったことがアイデンティティの検証に使える
のではないかと思います。

山西: そうですね。当然人間の中にはいろんな文化性が
重層的に重なり合っています。更にそれが静態的ではな
く動態的に、常に文化が人間の中で動いています。だ
からそれが地域によって、状況によって、いろんなもの
が出たり出なかったりします。また文化というのは内部だけで
生成されるのではなく、外とのかかわりのなかで形成される
わけです。自然環境が変われば文化は変わる、同じように
社会状況が変われば文化も変わる。そういうことを常に人
間から見ていく、という視点です。私なんかそういう見方を
すると、文化というのは非常に動的であると思いますし、静
的に文化をみるよりはもっともっと動的に文化を見ていこう
というメッセージを投げていますし、あと、人間ておもしろい
よというメッセージを出したいですね。だってこれ、皆さん
全員が、レヌカの学びを作ろうと思えば作れるわけでしょ。
いろんな生活のなかで感じた部分を。そういった、人間一
人ひとりの中に非常に重なり合う文化性を持っている人間
という存在がいかにおもしろい存在か、そこに気付いてい
くと、やはり国際理解というのはそこなんです。その人間と
いうものを少しでも理解しよう、というメッセージのなかで、
そしてその人間と人間がもっと関係を築いていくこと、そし
てそれがさらに広がっていくということにおいて、国際理解
教育のいう平和な文化をどう作っていくかということに繋が
ってくるわけです。だから、人間を見ずに国際理解教育に

関わるなんてとんでもないというのが私の意見です。そうい
った部分から国際理解教育は見えていかなければならない、
という一つのメッセージを出しています。去年一昨年武蔵
野市の国際交流協会で教員セミナーをやったときも、この
レヌカの学びを使って留学生と一緒に3時間半ぐらいワー
クショップをやりました。それもおもしろくて、最初に留学生
の人たちに座ってもらって、教員たちはいろいろ質問をす
るわけですが、教員たちが何を聞きだせるかというところで
これまた教員の力量や視点が加わるわけです。問われる
側にいる人間て、本当は自分はこういうことを言いたいん
だけどなかなか聞いてくれないというところがあって、しば
らく置いてから今度は自分から説明をしてもらいました。そ
の関係が強く表れて、人間てどう聞き方をすると相手が
自分の言いたいことを表現できるのか、そのプロセスが
おもしろいわけですね。だからこの教材が提供してくれる
プロセスがすごくおもしろいわけであって、そんなことから、
ひとつの教材をつくるということにも、そういうことが見え
てくる場合もあるのです。自分が相手を見るときにどうい
う視点で見ようとしているかということと、それを集団でやるこ
とで、この人はこういう視点で見ているんだ、ということが見
えてきます。他にレヌカの学びについて何かありますか。

参加者: いろんなカードを作るということに胸を膨らませて
いるんですけど、その人が本当に伝えたいことをカードに
しなきゃいけないな、と思いました。

山西: それはちょっと違うと思います。というか、違うとい
うわけではないんですけど、こちらも留学生に聞きたいこ
とというのはあるわけです。それで、「え、こんなこと聞く
の?!」ということで、留学生も新しいものを得られることが
あるのです。

参加者: あー、なるほど。

山西: だからあんまり遠慮しないで、こちら側も自分を出さ
ないと、留学生も自分が何を表現したらいいのかあまり
見えていないケースがあるんですね。留学生で、何回何
十回と実践をしているような人だと、ある国をこういう風に

紹介したらこういうふうになるというプロセスが全て見えてしまっていて、決してそれが全て悪いというわけではないのですが、やはりもう少し違った入り方があるかと思います。そういうところで、ひとつの課題性・共同性のなかに入ってそこで自由に意見を出し合いながら、そこからその人が何を出してくるのか、というやりかたをすると、非常におもしろいと思います。「部屋の四隅」という活動をご存知ですか。四つの隅にわかれていろんな意見を交換するものなのですが、前にやったときも、中学生と留学生が一緒になって一斉にわかれると、最初は留学生はこうで日本人はこう、というような言いかたをしますが、段々それが崩れて、この留学生は僕と同じ、この留学生は違う、などという意見が出てきます。それがばらばらになることで、また留学生の差異性が浮かび上がってきて、留学生同士も意見の違いを感じたりして、すごくおもしろいですね。ひとつの枠のなかでステレオタイプ化された文化理解や国際理解というのは、それを崩しながらやっていくということが大切だと思います。そういうときに常に一人ひとりの人間の不可思議さに気づき、またそういった人間が社会状況のなかで変わっていくプロセスについてもきちんととらえていこうということですね。新しい関係性が生まれていくというのは、非常に素朴なことなのですが、なかなか今まで学校教育でそういう素朴なことが伝わっていませんでした。

参加者:今の話で、例えば「レヌカの学び」で、根底にあるものが「文化と個人」ということになると、なぜ外国の文化でなければいけないのか、なぜ留学生じゃなければいけないのか、という問題になると思います。実際、外大の国際理解教育にたいする学生の考えというのは、留学生が実際に大事だというものだと思うんですが、こういった根源性を突き詰めてしまうと、別に留学生じゃなくてもいいじゃないか、と思えてきます。そこのところはどうお考えですか。

山西:だからそれは先ほどから言っているように、異なる文化性があることによって、他文化・自文化という概念のもとに、他文化を見ることによって自文化を浮かび上がらせることができます。海外には異なる文化があってそれにはいくらでも出会っていきけるし、そして今地域のなかでそういう人たちが生活しているということであるならば、そこに出会

っていくプロセスを作っていくことは、外大にとってすごく大切なことだと思います。それぞれがリソースをもっているから、時にはNGOはNGOで、地域で違う活動をやっているところは違うリソースを持っていますし、民族問題を扱っているところもあつたりして、それぞれがそのリソースをどういいう意味で活用して自文化と他文化の関係を作りだしていくか、そういうときにも他文化を他文化としてとらえるのではなくて自文化との関連のなかでどう伝えていけるか、自分は他文化とであったことでこれからどう生きていったらいいのかという、理解を通して自文化を作っていくプロセス、そこに持って行ってこそ国際理解教育が単に知識理解ではなく問題解決になるのです。そこにもっていけないと、単に自文化と他文化のなかで相対的にとらえてしまう、文化相対主義になります。それぞれを見るときに文化相対主義はときには必要ですが、その次の段階にいかないと、なかなか国際理解教育は難しいです。

参加者:「自文化」というのは「マイカルチャー」ですか、それとも「アワーカルチャー」ですか。

山西:私のとらえかたでは、文化は必ず集団性を持っています。文化は個人的な価値観ということではありませんが、常に、それは人間の中に交錯的に入っていきます。いわゆる「アワー」が作り出した文化が人間の中に入ってくるわけですね。

参加者:そのように多層的になってきたら、いわゆる独自のカルチャー、「マイカルチャー」が…

山西:例えば「東京外大」というひとつの大学の文化性がある。早稲田だったら早稲田文化。女性にはジェンダーという文化がある。

参加者:それははっきりと存在しているのですか、それとも幻想としてあるのですか。

山西:それを幻想と言うか文化と言うか、文化の基準というのは非常に難しいものです。だからそれは、文化というも

のを皆さんがどういう風にとらえるかです。これだけ国際理解教育で「文化、文化」と言っているときに、皆さんは文化をどういう風にとらえているのか、とらえていこうとしているのか。それが常に問われるわけです。文化というのは一枚岩的に、これが私の文化です、と果たして言い切れるのかどうなのか。文化はそんな単純なものではないということだけは、私は皆さんに理解してほしいと思います。

参加者:今 1 時間ちよっとの間話を聞いていて、度肝を抜かれたというか、そんなわかりやすいことなのに、どうして学校現場では国紹介をすることを期待され、さらには「金髪で色の白い人」が求められてしまうのでしょうか。

山西:ここらへんは、正直言うと、私がひとつの答をもっているわけでもないし、皆さんは、なぜ今学校教育の現場ではそういった文化理解が一般化されてしまったのか、ということはどうとらえるか。人それぞれいろんな言い方をしている人もいます。ある人は、私も若干つながっていますが、今の学校教育では比較的事物のごとを判断することを避ける傾向にある、といいます。私がさっきから言っているように、文化を理解することにとどまらずさらにそこからもう一步踏み出して、つまり、国際理解教育はひと言で言うところの平和な文化を作る、という方向性で私は語っています。だから文化を作り出すことが目的です。20 世紀、私たちは戦争と暴力の文化を作り出してきた。そうではなくて、もし文化というもの人間が作り出すならば、改めて平和な文化を作ろう、というメッセージを出しています。だから文化は人間が作り出すものなんですね。それで、もし人間が文化を作り出そうとすると、文化というのはある種の価値性を持っています。そうすると、特に価値というものを選択したり判断して、それを平和な文化にするためには、ときにはさっき言った伝統的な自文化も、ここでもう一度吟味しながら、そしてその他者との関わりのなかで平和というものを作り出そう、という方向性があるわけです。これはすごい作業です。ところが、学校教育の中で、ものごとを判断しながら新しいものをつくるというプロセスというのが、なかなか根付いていません。文化相対主義は、学校にとって楽なのです。「世界には多様な文化があります。それらを理解しましょう。

わかりましたか」。こういうふうになってはいけないのです。ここでは、教員も生徒も、判断ということを行っていません。そういうふうにしてしまうと、今地域のなかで日本語で日本語を学んでいる人たちを含めて、地域のなかでの問題は、自分のアイデンティティ・言語・文化をどうするか、重層的な生き方のなかで自分はどのような文化を持って生きていこう、という問題です。例えば在日コリアン 1 世 2 世、3 世 4 世、5 世まで今います。そのなかで自分たちは文化をどうするのか、というすごい議論をしているのです。ただ単に文化相対主義で、多様だからいいとか、そんなひとことでは通用しません。

参加者:そうおっしゃいますが、自分の中にも多層な、いろいろな文化があって、例えば日本語にしても漢字がいっぱい入っていたりしますよね。そういうのを実感して、自分が慣れ親しんでいる文化にすごく多様性がある、自分がとともひとことで言えない存在だっていうことを感じたほうが国際理解に通じると思います。

山西:そのことと、今新しい環境にいるときに、集団とのつながりのなかで自文化そのものがまた変容していくわけですよ。そのときに、自分が大切にしていく文化ってのは何か、という選択があるわけです。そこが判断のプロセスです。私が敢えて動的という言葉を使ったのは、本来はこのような問題解決型の教育活動であるというのが、国際理解教育の基本的なとらえかたですからそのように考えていかなければなりません。

参加者:動的なもの、相対化をしながら自文化をとらえていく、とおっしゃいましたが、そうすると、今の日本の教育は画一的というか、方向性は逆といえるのでしょうか。

山西:逆というか、本来今の社会状況のなかでもし平和でない状態があるならば少しでも平和な状態を作るための教育や学びは何か、というところでしか視点を置いていません。そのための教育を作り出すわけですから、学校教育が全て逆の方向にいつているというわけではありません。学校教育もいろんなことをやっています。ただそういうなかで、

自分たちが大切にしたい教育は何なのか、ということを中心に考えていかなければならない。そこが基本です。それだけはぶらせたくないのです。それをやっていくなかで、全て学校がそうなるのか、NGO の教育活動はどうなるのか、というのはその軸を中心に見ていったらいいと思います。今の状態との対比のなかで二元論的に語るのではなく、きちんとした教育のあり様というのをしっかりと見定めていこうということです。

参加者:この活動をすることによって、ネパールに対する意識だとかネパール人にたいするイメージを植え付けてしまうのではないかと思うのですが。

山西:そうです。全て文化理解のための教材というのは、固定的な文化やまたやりかたによっては違う文化を与える教材にもなります。さっきも言ったように、「これで新しいネパールが見えましたね」と言ってしまうばそれでおしまいです。だから、教材を作ってから、作り手の意識と教材とが離れないようにしなければなりません。

参加者:このようなことは私たち自身の中でも薄れてしまうと思うのですが、どのように子どもたちなり実践に携わる人たちに植え付けていったらいいのでしょうか。

山西:自文化との関わりのなかでどうとらえるか、ということですね。大事なのは振り返りです。「おもしろかったね」で終わると、教材としてそこまでです。だから振り返りのときに、これが自分にとってどんな意味があるのか、またこれから自分が教育活動に関わるときに自分をどう生かしていこうとするのか、そのプロセスがとても大切です。そこを、個人と、他者との共有のなかで振り返って行って、じゃあ自分たちが外大の人たちと一緒に教材なり実践を作るならばどういうふうにしていったらいいだろうと、具体的に丁寧に一つひとつ落としていけばいいと思います。

参加者:そう考えると、外大生にできることってというのはきっかけであって、普通に教育現場に入っている教員がそういう仕掛けを作っていくということですか。

山西:いえ、それはもう外大生が外大生としているんなことをやっていくのは可能です。私の今年のゼミでも 50 数人が皆でこういう議論をしながら教材作りをしています。教材だけでいくつ出てくるかわかりません。教材をつくるということは、実践を行いながらやるわけです。そういった形で、自分たちがどういう教材を作れるかということを一二年ないしは二年三年かけながらやっています。そういうことは学生だからできることです。

参加者:学生と実践との関係に関して、先ほどの方は忘れてしまうという言い方をしましたが、国際理解教育を外大としてやっていく上でのある種の壁と感ずることは、私たちの場合は頑張っても多くて年に 3、4 回しかできません。

山西:それは一つの学校でということですか。

参加者:そうです。例えば他の教科で、算数なら計算をなんどもなんどもやって覚えるし漢字もなんども書いて覚えませんが、それに対して国際理解教育は、外大だけでもひと月ふた月空いて 1 回ということですから、その間子どもたちはきれいに忘れてしまうといえますか。だから、カリキュラムとしてできあがっている教科に比して国際理解教育は、そのポテンシャルがあるにも関わらず、現実の現場の学校でそれが十分生きてないと思うのですが、そこはどうお考えですか。

山西:それはひとつには学校の受け入れ方、それから学校と外大がどういう関係性を持って実践に対する協力関係を作っていくか、ということだと思います。当然、総合的な学習が入ったということによってかなり積極的に年間何十時間と国際理解教育のカリキュラムを作り、外部からもいろんな人間が参加し、全体を作っている学校もあります。135 時間という総合的な学習の時間を今は持っているわけですから、その時間の中で小・中学校、時には高校とどう関わっていくかですね。ですから私は、東京外大がただ単に 3 回実践を行ったら国際理解教育の授業が 3 回、ということは普通はありえないと思います。学校が受け入れるということは、学校はそれなりの体制を作るし、また外大が関

わるときには、3 回ぼっきりの授業だったら私は断ったほうがいいぐらいに思っています。そんな中途半端な関わりかたは学校にとってもよくない子どもにとってもよくない。地域のリソースを使うということは、学校に対してもどういふふうに使うかということで教員の力が問われますから、「誰かがやってくれるから私たちは何もやらないですむ」というやりかたがもし実践としてあるならば、私はやらない方がいいと思います。そんなことをやっていたらいつになっても学校の力も教員の力もつきません。子どもたちにとってもバラバラなやりかたをしている。そういうところで、やればよいというわけではなくて、今後どういつながりを作っていくか、というなかで実践があるわけですから、そこだけは注意してください。

参加者: 難しい議論はよく分からないんですが、先生の考えている国際理解教育というのは、こういうものだという形があると思うのですが、それが成功して子どもが変わった場合、最終的に日本社会はどう変わるのですか。

山西: ひとことでは、平和な社会になります。

参加者: すみません、先生のお使いになる「平和」の定義を知りたいのですが。

山西: 国際理解教育は平和なくては語れないし、国際理解教育の歴史のなかには常に平和という言葉が出されま。前回のときには「共生」という言葉がでていましたね。それらには必ず基本理念があるのです。それを皆さんがどうとらえていっていかってことは絶対に問われます。「平和」の定義は難しいですが、対立する概念との関係で「平和」を定義するということはありません。かつては「平和」に対立する概念が「戦争」でしたので、「平和」とは戦争のない社会です。ところが「平和」と「戦争」をそのように対比して「平和」を「戦争のない社会」と定義しても、今日本のなかには戦争はないけど平和ではありませんね。60 年代後半はそこに「暴力」という言葉を使いました。「平和」と「暴力」の対比です。暴力のない状態が「平和」であるというのは国際的にもすごく説得力があります。この「暴力」にもいろいろな種類

があります。「直接的暴力」と「間接的暴力」です。「直接的暴力」は直接的なもので、これはまた戦争にもつながりません。問題なのは「間接的暴力」のほうで、これは「構造的暴力」という言葉で説明されています。つまり、南北の構造・差別構造、社会構造などの構造が作り出す暴力的な状態が平和でない、そうならばその「構造的暴力」をどう解決できるか、ということが、これからの「平和」を語るうえで非常に大切です。このとらえかたは的を得ていると思います。開発教育はまさにここに重点を置いています。たとえば貧困というのも構造が作り出しています。それを構造的にとらえていくながいかに構造的暴力をなくしていくか、さらには直接的暴力をなくしていくか、というところに「平和」があると思います。国際理解教育を若干構造的にとらえようとするとき、まず文化のなかに構造的性があるのです。歴史的に作り出された文化のなかには構造的に作り出されたものがたくさんあります。だから、文化を全て尊重しなければいけないと言いだしたらすごいことになって、文化が全て正しいかといったら必ずしもそうではないケースがあるのです。とは言ってもそれは他者が通っていくところであって、自分たちは自文化をとらえ直すなかでそれをどう変容させていくかというプロセス、それが文化を国際理解教育において扱うときの非常に大きなテーマです。

参加者: 構造的な暴力に関わっている人もあるいは平和に関わっている人も、おそらく自分たちはそういう意識をしてないと思います。

山西: まさしくそこが、この教育活動が求めているところです。

参加者: それで、この教育活動をすることによって、自分の考えが覆されたり…

山西: 何気なく思っていることをもう一度とらえなおしていく、その構造的な視点を持っていると、では自分にとっては、という意識化のプロセスがこの教育活動にとってはとても大事です。

参加者:構造的な文化化とおっしゃいますが、自分の意識が覆されたときに自分が認められない部分も当然あると思います。

山西:当然ありますね。さっき言った開発教育ではまさしくそうです。南北問題という問題が出されたときに、それが例えば途上国の問題である限りはそれでよかったです。そのときは途上国理解ということだけですんでいたのです。ところが、南北における構造的な問題の中でその貧困が日本の豊かさにやってくると、自分のライフスタイルや日本の豊かさが問われることになります。それはすごくしんどいのです。ただこれを問わない限り問題解決に至らないというところで、開発教育は20数年間その問題をどう扱うか、とやってきたわけです。

参加者:そのしんどいプロセスをどう乗り越えていくかというのはとても大きな課題だと思います。

山西:まあしかし、関わっている人間にとってみると、外からみるとしんどそうかもしれないけれど、関わっていくなかで人間が変わり他者との関係が変わり地域社会が徐々に変わっていくならば、こんなに楽しいことはないわけで、非常に創造的なプロセスだと思います。私なんか20数年やっていますが、しんどいとは思いません。自分が関わることによって状況が変わるならばこんなに嬉しいことはないわけです。

参加者:快感ですか。

山西:快感ですね。自分が変わり他者が変わり社会が変わるのが教育ですから、はりきりたくなりますね。

参加者:先生は先ほど、国際理解教育を行うと平和になるとおっしゃいましたね。

山西:はい、それを目指すのが国際理解教育だと思います。

参加者:例えば、それが成功した人間とか世の中というのは、どういう心のことを言うのですか。

山西:難しいですよ。それは、人それぞれがどういう表現をするかってところにかかってきますね。さっきのところでも、文化に対して人間がどう関わっていったら関係が作れるのか、時には政治や経済の問題にどう関わっていったらいいのか、もっと身近な人間対人間の関係にどう関わっていったらいいのか、それぞれの状況があるんですね。それを平和というテーマで考えるのですから、国際理解教育のテーマは全てにつながっているんですね。文化だけでは議論ができない。ただ、文化を議論することによっていろんなところにつながっていきます。そこは、私たちが日々課題性を持っていくといいと思います。あんまり大きな問題から入ってしまったら扱いきれないし、私たちが日々やれることというのは、他者との関係のなかでこれが問題だなと思ったら、そこから入ってそれを解決するなかで、見えてくるものは見えてきます。それを積み重ねていくのが基本ですから、理念としては構造化していますけどカリキュラムを一気に構造化してそれを番号順にやっていくということではないのだと思います。

参加者:つまり、心に何か変化を与えようということですか。

山西:当然そうです。心もそうですし、意識の問題、知識レベル、行動レベル、いろんなレベルでの変化をもたらしていくことが教育活動ですから、そこに重きを置きながら少しでも平和な状態を作り出す方向性を議論していくことが大切だと思います。だから、いろんな教材でいろんな実践ができるのは、そういう大きなつながりのなかでそれぞれをどうつなげていったらどうなるか、それは子どもたちの発達段階や社会状況があります。だから、学校教育でやる実践と、社会でやる実践、更には地域・家庭のなかで偶発的におこっているようなものは全部関連しているのです。学校も、地域社会もメッセージを出していくことが重要です。

参加者:そういう意味では、子どもたちにとって印象に残ったものがひとつでもあれば、それは今はじっとして球

根みたいな部分ではあるけれど、それを植えておけばいいのだな、と思いました。数ある教材も人によって響く場合も響かない場合もあると思うので、やっていることがすぐには出なくてもいいのだと思います。

山西:おっしゃるように、これは種まきなんです。日々の教科活動との関連のなかでそれをきちっと位置づけるというカリキュラムもあるのです。そこをしっかりと意識したかたちでやってるならばそれはいいと思います。ところが、忙しいからといって猫の手のようにやってしまうとその部分が種まきにもならない。それは子どもから見ればそれもひとつなのだろうけど、学校としてはもう少し考えた方がいいです。なぜなら、地域のなかでその学校のあり方が問われたときに、そのやり方は誰も良しとはしないだろうと思うからです。学校というのは、継続的なカリキュラムのなかで専門的系統性をもちながらそこにこういうものをつなげていく、という役割があるならば、そことの関連できちんと位置づけてほしいわけです。教員にメッセージを投げてほしいですから、そのためには必ず事前・事後打ち合わせやフォローは最低限求めていく必要があると思います。東京都の教員研修の国際理解教育の第1回目は私なんです。だからそこでも参加してもらって、ときには武蔵野市にも参加してもらってというふうにしてもらいたいです。私もメッセージをつなげます。わずか1日の教員研修では教員がどれだけ理解するかわかりませんから。つなげながらやっていきます。

参加者:先生は、発展途上国にも国際理解教育をやる必要はあると思いますか。

山西:当然です。

参加者:日本に来て日本の国際理解教育を実際見ると、主にいかに発展途上国が貧しいかとか恵まれてない子どもがたくさんいるかとか、そこをやるのが中心になっているのですが、私個人的に思うのは、人間は自分よりも恵まれてない人を同情するのはとても簡単ですが、自分よりも恵まれてる人間をこころから素直に喜ぶことってできるのかと疑問に思いました。例えばアフリカで恵まれてない子ども

たちが、実際日本の豊かな子どもたちを見て、こころから、彼らはいいですね、幸せだね、とこころから喜ぶのでしょうか。やはり人間はそういうときに嫉妬をしてしまうと思うのですが、発展途上国で国際理解教育をやるときには、彼らに何をどんな風に理解させたいのでしょうか。

山西:はい。例えば皆さんが国際理解教育で貧困というテーマを設けられたときに注意してほしいのは、日本でやりつつその対照がインドだとしたら、同じことをインドでやったら何が起こるか、ということ意識してプログラムを作ってみることで。インドで貧困を扱うときと日本で貧困を扱うときとでどんな扱いかたがあるのかを考えてください。それは共通性も差異性もあるけれど、テーマとしては貧困を解決するという方向性であったならば、日本の関わりかたとインドの関わりかたとどう違うのかということです。インドだったら自分の問題となりますが、ただ、貧困の問題はインドだけではないわけですから、それに対してどうアプローチしていくか、という視点でプログラムや教材を作ってみると変わります。例えば私は10何年前に、長崎で平和のワークショップをやりました。そのとき、ある団体の若者たちが、自分たちの被爆の経験をアメリカに行き行って写真などを見せながら語り平和教育をしたと言いました。そのとき会場から、「なぜアメリカだけでやるんですか、中国やアジアでなぜ同じ実践をやらないのですか」という質問がありました。アメリカと日本の間には核に関しては非常に明確な関係があります。ただ例えばそこに中国との問題をもっと交錯させていいし、自分たちが今後そのようなメッセージを伝えていくか、ということでした。同じことです。私は貧困という問題は、単に日本だけが加害者で途上国が被害者、というぐらいのレベルでとらえているつもりはありません。日本のなかにも構造的な問題として同じようなことはたくさんあります。さらに貧困は単に経済的貧困だけをさすのではないので、もっといろんな構造的なというの今出てきてますから、そんな簡単なことではなくて、日本のほうがやっかいだと言う人がいるぐらいです。これだけ経済的に豊かになった構造を変える力を生み出すのはとても大変ですね。変えていこうという視点を持つと、貧困そのものをとらえ直さなければならぬ。そういうときこそ、一緒に考えなければいけません。

日本だけで、先進国だけで考えようとするのではなく、途上国から、またはそれぞれの地域から貧困をどうとらえ直してほしいのか。そういう地域のなかには文化だとか伝統性を持っている地域もたくさんあります。そうすると、経済的なだけのものを見かたに対してノーというメッセージが、文化のところからたくさん出てきます。そこから学べることもたくさんあります。是非ともそういう教材や実践を皆さんが作ってください。武蔵野市の教員ワークショップはフィリピンに去年一昨年と2回行ってフィリピンの高校生たちや教員と日本の教員と一緒にワークショップをやりました。そこで出会うものや気付くものはそれぞれすごく違うのですが、すごくおもしろかったですね。

参加者:なぜそんなやっきになって国際理解教育を学校でやらなければいけないのですか。

山西:国際理解教育は、平和に向けて、というところをやつたらいいと思うのですが、学校でやらなきゃいけないかどうかは皆さんの考え次第です。私は、学校も非常に大切な場だし地域や他の場所も大切な場だから、可能な限り出来る範囲でいろんなところでやったらどうですか、と言いたいんです。だって、世の中が少しでも平和になったほうが良くありませんか。私はただそれだけです。私も今までいろんな関わりをしてるなかで、お互い人間関係も良くなって社会環境も良くなって自分たちが少しでもいい社会にしていこうというプロセスに関われることは、すごいことだと思っています。それだったらそういう関わりあいのできる教育や学びを作りだせたらすごいいい、それがたまたま国際理解教育や開発教育というところで、そこに関わればたまたまいいと思っています。

参加者:もちろんポジティブな気持ちで学校教育のなかに関われればいいと思うのですが、そもそも忙しいところにそういう新しいことを押し込んだりとか…

山西:だから逆にその忙しさがなぜ生まれているのか、それで、今その忙しい学校教育がそれでいいのか、ということで学校教育そのものが問われると思います。それだった

らもつとこういう教育を入れていこうよという形でやっていたほうが学校も変わるし、子どもたちにとっての学びも変わりますよね。遠慮なく協力しあいながら入ったらどうでしょうか、ということです。ただ、学校はなかなかそう簡単に歴史が作り出してきた学校文化というものを1年や2年で変えるか、という意見もあります。しかし武蔵野でも長年やっていて先生方が変わっている部分が結構あります。だからそこらへんはそんなに悲観的になる必要はないと思います。ただ、もしやるならば、ときには10年20年30年ぐらいのスパンで見えていくことも必要かもしれません。ただ、学校教育制度ができてまだ130年ちょっとなんです。教育の歴史って何千年とありますよね。21世紀のこれからの90年余りで学校がどれだけ変われるかといったら、すごい可能性を持っているのです。2ヶ月ほど前に私は福井に行っていましたけれども、千年先の31世紀を創造してこれからの教育を語るということをやりました。これはすごいですね。やはりそのぐらいのビジョンを持ちながら、これからの教育を語るというメッセージを出してくる地域もあるのです。その地域は和紙の生産が盛んなところで、8世紀に梳いた和紙が今あるのです。西洋紙というのはそんなにもちません。そうすると、今梳いた紙はこれから千年もつのです。千年スパンで動いている地場産業と文化性があるのです。そうすると、それをベースに自分たちのこれからの産業・地域作りとそこにおける人間のあり様から教育までを千年スパンですーっと考えるのです。いいでしょう。森林文化では、例えば1本の木を切るのに最低100年から200年かかります。そうすると、今自分が植えている木は3~6世代後に切られることになります。最低6~10数世代の時間の幅を見ながら今自分は仕事をしているということになります。林業はそのぐらいのタイムスパンで語るのです。私たちも教育をそのぐらいのタイムスパンで語ってみてはどうでしょうか。ただ、今の問題から始めなければいけないというのが、国際理解教育にとってはすごく大切です。

予定がだいぶ変わってしまいましたが、ちょっと資料について一言だけ言ってもいいですか。資料を2枚だけ新たに配りました。先ほどもご質問のなかで、国際理解教育をどうとらえるか、というものがありましたが、資料を2枚対比しながら見てください。ひとつは「国際理解教育の目標構

造とそのアプローチ」という図と、もうひとつは「国際理解教育について考えるための10のポイント」です。「10のポイント」から説明します。1番、「国際理解教育は平和実現のための教育であり国際競争時代を生き抜くための教育ではない」。先ほどから何度も言っているように「平和」という言葉がキーワードですが、特に一番上の図を見ていただくと、「人の心のなかの平和のとりで、または平和な文化の構築」とあります。私もやはりこの「平和な文化」ということにこだわりたいと思っています。このことに関して議論のなかで前に早稲田の学生たちと話をしている、この「平和のとりで」というのはユネスコ憲章からもってきている言葉です。そのときには”defenses of peace”という言葉です。それをどう構築するかが国際理解教育のひとつの流れだと思います。1990年代から”culture of peace”という言葉がでてきます。そのときに学生がいい質問をしたのですが、「とりでを築くことがなぜ平和につながるのですか」ということでした。つまり、とりでという、外と内とを遮断する関係を作ることが本当に平和ですか、ということです。ユネスコ憲章に物申す学生がいるというのはうれしいことだと思います。なんとなく聞いたらすごくいい言葉だからみんなすうっと受け入れえるのですが、ちょっと待てよ、と立ち止まったんですね。だからこそ私は”defenses of peace”ではなく”culture of peace”なんです。文化をどう作っていくかということが本来の目的だと考えると、一応ここには「とりで」という言葉は入っていますが、あえて「平和な文化」というところから考えていくことを提案します。そして、それに向けてというところですが、2番目、「平和、そして理解はまず人間理解、人間と人間の関係作りから始まる」。平和というのは非常に大きいわけで、これを政治的経済的いろんなところで語ることはできますけど、まず身近な人間と人間の関係作りから語っていこう、ということです。やはり人間と人間の関係や人間理解なくしてなかなか平和は語れません。これが右の図の下の部分の入っていて、そこにセルフエスティームだとかコミュニケーション能力とか協力する力だとかいう言葉がありますが、これも小さな子どもから可能です。4〜6歳からも、自分を肯定的にとらえるセルフエスティームという考え方も、いろんなコミュニケーションをやっていきます。これは言葉もそうだし、ときには遊びや歌もあります。協力する力も、

小さな子どもだったら砂場で遊んだり何かをやるのも協力だし、学校に入って何かプログラムを作るというのも協力です。こういう基礎的な部分をしっかりと、どういう関係作りとして作っていくか、この視点がないと国際理解教育として発展していかないと思っています。3番、「私たちは多様なコミュニケーションの手段を持ち、言語はその手段のひとつであり、そして英語は多様な言語のひとつである。また、言語は文化であり、言語自体が文化理解の重要な対象でもある」。「英語＝国際理解教育」といわれる中で、あえてこう言います。英語は大切です。ただそれはコミュニケーション手段のなかのひとつであることを、ひとつおさえておく必要があります。もうひとつ、言語は文化である、というところがあって、今英語が小学校に入り始めていますが、それならばやはり、英語を文化としてとらえたときにそこから何が学べるのかと考え、これを文化としてとらえるならば同じく日本語が文化として浮かび上がってきます。だから、日々私たちが発している言葉の持つ文化性と、外国語としての英語の文化性を、さきほどの自文化・他文化という関係のなかで、英語を通して日本語のもつ文化性を相対化させて浮かび上がらせる、ということも可能になってくるわけです。単にスキルとして英語をみるのではなくて、そういうふうに対処と、すごく大きな可能性を英語は持っています。4番、「特定の文化に国や民族を背負わせることなく、自文化そして他文化の多様性の理解と、人間と文化の動的な関係」。5番、「外の問題を頭だけで認識するきれいな国際理解教育になるのを避けるためにも、学習者にとって足元の問題である地域の問題をしっかりと見据え、その問題を世界の他の地域の問題と構造的に関連付けるとらえかたをする」。これもさっき言った貧困の問題だとかそういうところで、外の問題を外の問題にしている限りは、国際理解教育ってなんで外のことだけやって自分とは関係ないことなんだろう、ということになってしまいます。悪く言えばこれはきれいな事です。ただなんか国際的なことを知った、ということで満足してしまうのではなく、自分たちの足元の問題とこれを絡めたときに、他人事でなくなってきたときに、非常にリアルな問題になっていきます。それを構造的につなげながら、どういう国際理解教育をやっていくのか、という問題です。6番、「国際理解教育は未来志向のであり、未来を

ポジティブに想像しそこに位置づく価値やシステムの創造に参加していく。こういった言いかたをしたのが右の図です。「発展目標」のなかに「文化理解」と「問題解決」と「未来創造」という、まさしくこの3つのアプローチと、下にある「人間関係作りのアプローチ」で、私は4つのアプローチを国際理解教育のなかで出している。先ほどの「レヌカの学び」はまさしくこの「文化理解」アプローチと、若干「人間関係作り」アプローチの間にあるような教材です。「問題解決」アプローチにも「未来創造」アプローチにもいろいろな教材があります。そして、この3つはすごく関連します。例えば、「人間関係作り」アプローチをやっていくとそれがコミュニケーション手段として広がっていきたり、それが言語の問題にもつながりますし、「協力する」力というのをやっているとはこれは国際協力に広がっていきますね。だから、この「人間関係作り」を非常に基礎としながら、発展目標のところにも全部が重なっていくのです。そういうプロセスのなかで平和な文化というものがあるように定着していくか、ということです。正直に言うと、この4つのアプローチは私は実践をするときに非常にやりやすいと思っています。それは、今まで多くの教材がそういう方向性の教材として実践の場で作られてきています。だから、理念としての枠組みではなく、実践へのアプローチとしての理念化をしています。ですからこのへんは全て、具体的な実践に落とし込んでいくとやりやすいと思います。常にそれは関連します。バラバラにやるのではなく、例えば「問題解決」で先ほど貧困の問題をやりました。貧困に経済的な価値が関連しているとしたらそれはいったい何なんだろう、と考えたら、これは完全に文化性ですから、文化理解の問題とつながってきます。さらに社会をどうしたらいいかということで、「未来創造」に関連します。早稲田の授業では、この4つのアプローチをそれぞれ全部ワークショップ型でやります。そうすると、実践から理念が見えてきます。「10のポイント」について、1～6は理念的な部分ですが、7～10は大きく言うと方法論敵名部分です。「学びのプロセスを直線型かららせん型へ」というところで、これは一つのカリキュラムの作り方です。今まで多くの学校教育の実践は、導入・展開・まとめ、という感じで、それが終わってしまったら終わってしまうのです。そうすると、例えば環境問題を5時間、国際文化

理解を5時間、というふうにはバラバラになってしまう恐れがあります。本来、総合的な学習が入ってきた時には、これをどうらせん型にもっていくのか、ある種の学習課題があり探求して表現していく、そのプロセスをここでいう学習者や教師が共有していくなかで、それを振り返っていくなかでまた同じような課題が見えてきて…ということです。大学生にもよく言いますが、小学校1年生から中学3年生の9年間の一つのテーマで皆さんなりに学習カリキュラムを作ってください、という言い方をします。学校の先生にもよく言います。そうすると何が起るのか。それはやはり子どもたちが成長発達していくなかで、学ぶものだとか子どもたちの行動が変わっていきますから、扱っていくものが変わるので、全部それらが次の課題を浮かび上がらせるのです。だからあえて学年ごとにテーマを切るのではなく、一つのテーマで構造化してみると何が見えるのか、そんなカリキュラムのプログラムを作ってみるとすごくおもしろいです。今逗子で私が福祉教育としてやっているのは、聴覚障害ということの一つのテーマに、小学校1年生から高校までの一つのプログラムを作っています。そうすると、例えば小さな出会いから始まっていくなかで、段々その聴覚障害の置かれている社会的状況だとかその歴史だとか、国際的な問題などを全て構造化していくのです。高校生ぐらいになったら、そこから国際協力にまで発展していきます。8番「学習者にとって自分ごととなるような学習材の発見・活用」というところで、常に一人称で語っていくということが非常に大切です。あんまり三人称だけのメッセージではなかなか見えないときに、一人称で語ると子どもたちも一人称で返しやすくなる。9番「多様な方法の活用を」というところで、方法はメッセージを持つため、学習者の参加する力ということを目指すのであれば、方法も参加ということを念頭に置いたらどうだろう、ということです。10番、「学校と地域の連携」というところで、地域も教師も学校も主体であるという関係のなかで、地域のありかたと教育のありかたを連携していったらどうでしょうか、ということです。一気に駆け足でお話しましたが、いかがでしたか。

参加者: 先生どうもありがとうございました。

国際理解教育に対するこんな質問・意見

<広島にて>

- * 「今の世界の現状を見れば、ますます格差は拡大し、アフガニスタン・イラクなどにみられるように紛争はより混迷を窮めている。果たして国際理解教育が本当に平和、貧困の解決につながるのだろうか？」
- * 「いま広島では、教育委員会によって受験指導がますます強化され、平和教育・人権教育が骨抜きにされてきている。こんな状況下で、平和実現につながる真の国際理解教育はどれだけ実施できるのだろうか？」
- * 「特に小学校では英語が重視され、英語＝国際理解といった捉え方をする先生が多い状況ですが、果たしてそれでいいのでしょうか？」
- * 「国際理解教育プログラムの外部講師として外国人を学校に招く時に心がけたらよいことは何ですか？」
- * 「小学校6年生で途上国の貧困問題を取り扱った時、『日本に生まれてよかった』という感想が出ました。これにはどう対応したらよいのでしょうか？」
- * 「国際理解教育のテーマ・内容として何を取り扱うとよいのでしょうか？」
- * 「農業をやっています。いま野菜の種は世界の各地からやって来ています。またそれらの種を交配して新しい種もつくっています。また地産地消の考えから伝統的な野菜へのニーズもあり、昔の種を見つけることにも心がけています。私って国際理解を日々やっていると自覚しているのですが？」
- * 「地域で福祉の仕事をしていますが、地域を眺めると外国人差別、障害者差別、被差別部落問題など多くの問題があります。これらの問題と、国際理解との関係をどう捉えたらよいのでしょうか？」
- * 「ゲーム型の参加型手法を活用していますが、それらは本当に国際理解が求める力の形成につながるのでしょうか？」
- * 「子どもたちの発達段階に即して、どのように国際理解教育の目標を設定していったらよいのでしょうか？」
- * 「大学でサークルをつくりラオスの学校への教育支援活動をやっています。将来こういった分野に携わっていくには、どんな仕事があるのでしょうか？」

<中野にて>

- * 学校の先生に頼まれて、日本の小学2年生に「トンガトン」というフィリピンの少数民族の竹の楽器の演奏指導をしたあるNGOスタッフの言葉：「グループに分かれ皆で協力しておもしろい演奏ができたと思いますが、トンガトンはフィリピンの代表楽器でもないため、小学2年生にとってこれはフィリピン理解ではなく、また国際理解とも言えないと思うのですが？」

<武蔵野にて>

- * 「NGOのスタッフですが、学校と協力して小学6年生を対象とした6時間の授業作りを計画しています。アフリカ理解を基礎に、難民ゲームを通して、アフリカ難民の置かれている状況を実感し、子どもたちができる支援活動を考えるというのが先生からの提案です。何かこの計画にアドバイスいただけますか？」

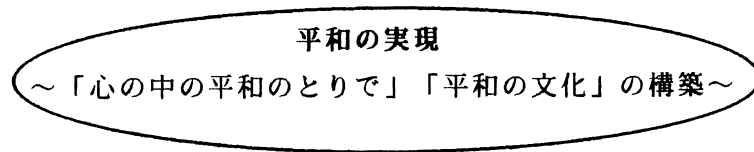
以上

<資料>

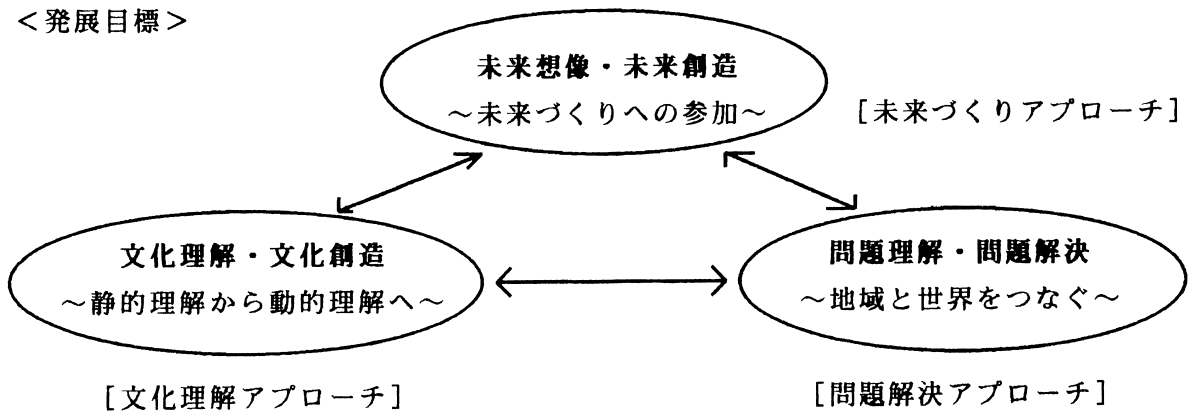
国際理解教育の目標構造とそのアプローチ

作成：山西優二

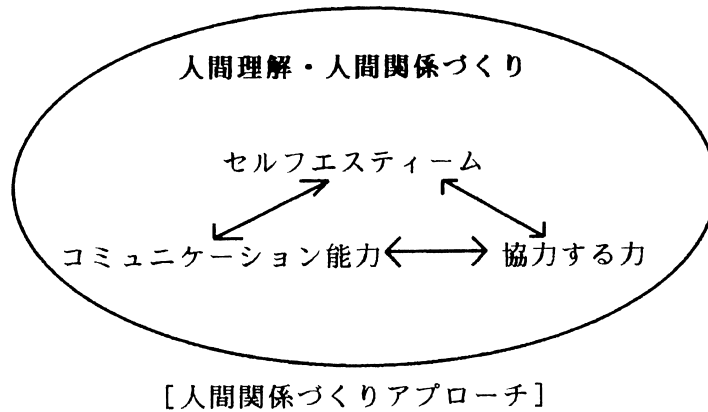
<最終目標>



<発展目標>



<基礎目標>



<資料>

国際理解教育について考えるための10のポイント

山西 優二

<国際理解教育のねらい>

- ①国際理解教育は平和実現のための教育であり、国際競争時代を生き抜くための教育ではない。
- ②平和そして理解は、まず人間理解、人間と人間の関係づくりから始まる。
- ③私たちは多様なコミュニケーションの手段をもち、言語はその一つの手段であり、そして英語は多様な言語の一つである。また言語は文化であり、言語自体が文化理解の重要な対象でもある。
- ④特定の文化に国や民族を背負わせることなく、自文化そして他文化の多様性への理解と人間と文化の動的な関係への理解が求められる。
- ⑤「外」の問題を「頭」だけで認識する「きれい」な国際理解教育になるのを避けるためにも、学習者にとっての足元である地域の問題をしっかりと見据え、その問題を世界の他の地域の問題と構造的に関連づけて捉えることが求められる。
- ⑥国際理解教育は未来志向の教育であり、未来をポジティブに想像し、そこに位置づく価値やシステムの想像・創造に参加していくことが求められる。

<国際理解教育の実践に向けての課題>

- ⑦学びのプロセスを「直線型」から「らせん型」へ
 - * 「課題→探求→表現」の学びのプロセスを学習者・教師が共有し、また共に反省・評価する中で次の課題そして学びにつながっていくようなプロセスづくりを
- ⑧学習者にとって自分事となるような学習材の発見・活用を
 - * 学習材として、1人称で語られる、リアルな「子どもの声、大人の声、地域の声、世界の声」を教育に
- ⑨多様な学習方法・手法の活用を
 - * 「方法はメッセージをもつ」ため、学習者の参加する力の形成をめざすには方法も参加型に
- ⑩学校と地域の連携を
 - * パートナーとしての関係者間での主体的な関係づくりを
 - * 「地域づくり」と「教育づくり」の連携を

以上

(4)ワークショップ「国際理解教育実践現場から」

日時:2006年11月14日(火) 18:10~20:00

会場:東京外国語大学本部管理棟2階中会議室

パネリスト: 奥野孝子(川崎市立東柿生小学校・教諭)

鳥塚英里子(川崎市立東柿生小学校・教諭)

中村邦彦(川崎市立東柿生小学校・教諭)

野村志保(川崎市立宮前平中学校・教諭)

三井秀夫(川崎市立土橋小学校・教諭)

矢崎真弓(川崎市総合教育センター・長期研修員)

和田淳二(川崎市立登戸小学校・教諭)

進行:萩原礼子(外国語学部ポルトガル専攻4年)

学生発表者:森本舞(外国語学部日本語専攻4年)

木矢恵理子(大学院地域文化研究科博士前期課程言語文化コース2年)

甲田友子(外国語学部ドイツ語専攻4年)



萩原礼子:そろそろ時間も過ぎましたので、プレ・学生多文化フォーラム第6回を始めたいと思います。最初に趣旨説明をしてから、内容に入りたいと思います。プレ・学生多文化フォーラムは、12月2日に本学で行なわれる学生多文化フォーラムに向けて6回のシリーズでやっています。今年、多文化コミュニティ教育支援室が創設3年目を迎えまして、その3年間の活動の総括をしようということで行ってきました。多文化コミュニティ教育支援室でやっている活動の二つの大きな柱が、国際理解教育の実践と、外国人に対する学習支援活動なのですけれども、このプレ・学生多文化

フォーラムでは、実践を中心にして国際理解教育の振り返りをしようということで、3回の講演会と3回の学生ディスカッションをやってきました。今日が最終回となります。色々な学校に関わっている学生が支援室にはおりますが、実はその学校同士では、ここの学校ではどういことをやっているか、学生同士が意見を交換する場がなかったので、この3回の学生ディスカッションで、どうい授業の実践をしたとか、どういことに困ったとか、どういことをやっていきたいとかいことを学生同士で話してきました。学生自体そもそも国際理解教育って何だろうとか、何をやったらいいのだろうとかいことを考える暇もなくここまで来てしまったという反省点がありましたので、佐藤郡衛先生と山西優二先生をお迎えして行った講演会では、そこで知識を広めようということで2回開催しました。本日は学校の先生方をお迎えして、学生がずっと抱えてきた疑問や困ったことなどについて質問するので、先生方からぜひ意見をいただければと思います。最初に、簡単で結構ですので先生方から自己紹介をいただきたいと思います。奥野先生からよろしくお願ひします。

<川崎市小中学校・総合教育センターの出席者>

奥野孝子:こんばんは。お世話になっております、東柿生小学校で3年生を担当しております。学生さんとの交流は2回経験しましたがけれども、そのつど指導案なども大変工夫されていて、私たちの方こそ勉強になることが沢山ありました。子どもたちはもちろんですけれども、この活動を通して大変いい時間を過ごせることを幸せに思います。今日はよろしくお願ひいたします。

中村邦彦:同じく東柿生小学校の中村と申します。私は5年生担任で、昨年度は6年生だったんですが、去年の授業は1回で、今年度は3回のうちの2回が終わったところです。あと1回に関してもよろしくお願ひします。

鳥塚英里子:同じく東柿生小学校の鳥塚と申します。よろしくお願ひします。私は去年3年生の担当だったので、周さんと一緒に国際理解の授業をしているのを見せていただきました。今年は5年生を担当していて、韓国の方に2回

来ていただいて、あと1回来ていただくことになります。子どもたちも私も楽しみにしていますので、よろしくお祈いします。

矢崎真弓:川崎市総合教育センターの者です。川崎市では今年から国際理解教育の研究会議というものが立ちあがりまして、私はセンターで長期研修員として1年間国際理解教育の研究に携わることになっています。こちらにいらっしゃる3名の方が研修員さんですけれども、三井先生と野村先生と私は去年も指導主事が中心にやる方の研究会議があり、そちらに携わっていたので、去年からお世話になっているという形で、今年は私の中では2年目という気持ちがあります。どうぞよろしくお祈いします。

三井秀夫:こんばんは。川崎市の土橋小学校というところから来ました三井といいます。4年生の担任をしています。今回は初めての協働型の授業ということで、大学の講師の方たちと子どもたちが共に作り上げていくような授業に挑戦してみました。私の受ける感じでは、かなりいい成果が得られたかなという感じがしています。よろしくお祈いします。

和田淳二:こんばんは。登戸小の和田と申します。研修員を経験するのは今年が初めてです。ブラジルの日本人学校に10年ほど前に行きまして、それ以後国際理解教育に携わっております。奥が深く、なかなかわからない部分が多くて、今日は私も教わりに来ました。登戸小学校では6年生を担当していますが、今回は外大のみなさんとは一緒にできませんでした。今日は色々教えていただきたいと思ひます。よろしくお祈いします。

野村志保:こんばんは。宮前平中学校の野村と申します。よろしくお祈いします。1学年を担当しております。今年初めて外語大生の方と一緒に授業ということで、3回やらせていただきました。私自身、すごく勉強になることが沢山ありましたので、これからもまた色々なことを勉強させていただけたらと思ひます。よろしくお祈いいたします。

<本学の出席者>

萩原:先生方、どうもありがとうございました。はじめに、少しではありませんけれども、各学校で実践した学生たちがどういふことをしてきたのか紹介します。そちら側から簡単に自己紹介してください。

武田千香:まず私から自己紹介させていただきます。多文化コミュニティ教育支援室の運営の責任者をしており、武田千香と申します。ポルトガル語専攻の教員です。よろしくお祈いします。いつもお世話になっております。

宮城徹:留学生日本語教育センターの宮城と申します。よろしくお祈いします。

伊東祐郎:いつもお世話になっております。私、同じく多文化コミュニティ教育支援室の伊東と申します。副委員長ということで、色々と学生のお世話をさせていただいております。よろしくお祈いします。

森朴憲治:同じく支援室の運営委員の森朴と申します。学習支援活動の担当となっております。私の場合は、妻が韓国人ということで、家庭内が多文化という立場でございます。よろしくお祈いいたします。

田村かすみ:スペイン語専攻1年の田村と申します。よろしくお祈いします。

葛山紋子:スペイン語専攻4年の葛山紋子です。川崎市の活動では、東柿生小学校を去年と今年担当しております。よろしくお祈いします。

周首能:朝鮮語専攻2年の周首能と申します。よろしくお祈いします。

萩原:ポルトガル語専攻4年の萩原と申します。よろしくお祈いします。去年は府中第七中学校の国際理解教育に参加しました。今年には学生多文化フォーラムに向けて活動しています。

森本舞:日本語専攻4年の森本舞です。川崎市の総合教育センターで開かれている国際理解教育研究会議でいつも勉強させていただいております。本日もよろしくお願いたします。

金智恩:東柿生小学校で国際理解教育をしています、日本語専攻の金智恩と申します。よろしくお願いたします。

甲田友子:ドイツ語専攻4年の甲田友子です。国際理解教育のコーディネーターを務めています。川崎市の研究会議にお邪魔させていただいております。よろしくお願いたします。

木矢恵理子:大学院博士前期課程2年生の木矢恵理子です。専攻はイタリア語です。川崎市の総合教育センターの研究会議に参加させていただいております。本日はよろしくお願いたします。

岡崎智子:支援室専従スタッフの岡崎と申します。よろしくお願いたします。川崎の会議ではいつもお世話になっております。今日は色々な話を聞けるのを楽しみにしていますので、よろしくお願いたします。

金田尚美:ポルトガル語専攻4年の金田尚美と申します。よろしくお願いたします。

和田更沙:ポルトガル語専攻4年の和田更沙と申します。私は支援室では学習支援の活動をしていて、今度のフォーラムでも学習支援の担当をしています。よろしくお願いたします。

青山亨:支援室の運営委員をやっております、青山と申します。大学ではインドネシア語専攻ですけれども、支援室の運営委員としては国際理解教育の担当をしています。いつも学生がお世話になっております。よろしくお願いたします。

<実践授業の紹介>

萩原:どうもありがとうございました。それでは、授業の紹介ということで、森本さんからお願いします。

森本:今紹介していただきました森本です。3枚つづりの資料をご覧ください。これが、川崎市内のとある小学校2年生で私たちが実践させていただいた国際理解教育の活動報告書となっております。これは今年の10月23日、2回目の訪問で、ペレイラ・ファウストさん、瀬戸真由子さん、門脇弘典さん、そして私森本が行いました。始めに、ブラジルでのあいさつを児童一人ひとりで行いました。ブラジルではあいさつの時に握手をするので、児童との距離が縮まるのではないかと考えました。その次に子どもたちを三つのグループに分け、三つの活動を行いました。まず一つ目が〇×クイズ、二つ目がアマレリーニャという日本のケンケンパに近い遊び、そして三つ目がファウストさんに聞いてみようという質問コーナーにしました。〇×クイズでは、絵を利用して子どもたちの視覚に訴え、ブラジルに興味を持ってくれるように心がけました。アマレリーニャでは、子どもたちが生き生きと活動できるように心がけました。質問のコーナーでは、自由にブラジルのことや、ブラジルのことに限らずファウストさん自身のことについて聞いてもらえるように思いました。これらの活動をそれぞれ10分ずつ行い、最後に集合してもらい、今日は何をしたかな、そしてどんなことをしたかなと問いかけて活動を終了しました。見ていただきたいのが最後の紙ですけれども、2枚目と3枚目の下の方の工夫した点というところをご覧ください。工夫した点は、〇×クイズ、アマレリーニャ、質問コーナーの一つ一つの活動をそれぞれ10分ずつと短くして、多くのことを子どもたちに伝えられるようにしたこと。また、動の活動——〇×クイズとアマレリーニャ——と静の活動——質問コーナー——を取り入れ、1コマ45分という時間で子どもたちが退屈しないようにメリハリを持たせるようにしました。実践の冒頭で学生と子どもたちが握手をして、子どもたちとの距離を縮めるようにしました。またクイズとアマレリーニャは、子どもたちの興味をひくためにこれらの活動を用いました。これがとある小学校2年生での第2回目の活動でした。以上です。

萩原:ありがとうございました。その次に木矢さんお願いします。

木矢:川崎市立の中学校で行った活動の報告をいたします。参加メンバーは私を含めて7名でした。というのも、アンジェラさんという留学生の方が、第2回と第3回は授業の都合で参加できなくなってしまったので、その代わりに私が勤めたからです。6班に分かれて活動を行いました。活動は全部で3回に分けてやりまして、初めが6月、次が7月、そして夏休みを挟みまして、先月10月に行いました。初めの活動ではまず、お互いのことを知ろう、出会いを楽しもうということで、各自自己紹介文を用意して、その中に本当のことではない文を混ぜて、それを当てるといった簡単なゲームのようなことをしました。第2回では、6枚写真を用意して、それについて意見を交換するという授業を行いました。ここで、班ごとにどんな意見になったかなどを話し合うようにして、他人の考えについての理解を深めるように心がけました。先月行った第3回では、まず、事前に私たちに送っていただいていた質問の中から5つ選んで答え、生徒にはその答えを踏まえた上で聞きたいことを考えてもらい、インタビュー形式で質問してもらいました。インタビューの中でも、私たちは答えるだけではなくて、逆に生徒に「なぜそう考えたのか」「自分だったらどう思うか」など、こちらから問い返すことを心がけて、生徒が自分の生き方をどうしていきたいかを考えるきっかけを作れるようにしました。実際に活動をしていて、私以外のメンバーが全員1年生だったので、国際理解ということについて手探りの点が多かったのですが、今回は自分の経験について語れる機会が多かったので、生徒との交流もスムーズにいったと思います。私からは以上です。

萩原:ありがとうございました。最後に、甲田さんから報告をお願いします。

甲田:土橋小学校での活動報告と書いてあるのが資料です。川崎市の小学校で授業を行いました。参加メンバーは、実際にやったのは6人で、日本人が3人、韓国出身の方2名、タイ出身の方1名でした。授業を実施した学級は、

4年生の1組から4組です。タイトルに「何が作れるかな？力を合わせて～留学生・日本人学生の交流を通して～」とあるように、今回の授業は、私たちがクラスに行って子どもたちに何かを教えるというのではなく、子どもと一緒に相談しながら何かを作って、それを完成させようというものでした。全4回で、活動時間は2時間目から5時間目まででした。活動内容が書いてありますが、初めにこちらから学生のプロフィールを送ると一緒に、各学生が何に興味があるか・何をやりたいかという輪郭を子どもに伝えて、子どもから実際に何をやるかの案を出させて、1回目の授業に行ったときに具体的な活動を決めました。活動内容は、上から、劇、飛び出す絵本、世界の子どもについて知る、夢の場所を考える、写真を使って紙芝居を作る、タイ文字を使った製作(タイの歌やダンス)というものでした。下の活動日程を見てください。1回目は6月22日に行って、まずクラスを6人くらいずつ6つのグループに分けて、自己紹介をして、その後、劇なら劇でどんな劇がいいかということを決めていきました。次の回は7月でしたが、それまでに学校で2時間自習時間をとっていただいて、その時間に子どもたちに製作を進めてもらいました。そして7月に私たちがもう一度行って、話し合いながら劇や絵本などの製作を進めていきました。9月から10月にも2時間自習時間がありました。10月26日、3回目の実践に行きました。30日は発表会ということで、実際に作ったものを発表するという形で行いました。これはビデオに撮りました。この授業のねらいは「コミュニケーション能力と協力する力を育てること」だということで、相手の話をよく聞けるようにするという「聞く力」をメインに活動を行ってほしい、と先生から言われていました。ですから学生たちも、話し合う場所を作らせるということに気をつけて活動を行いました。活動を進めることももちろんですけれども、それ以上に話し合っていく過程の方を重視した活動を行うようにしました。ですから活動を行った学生自身も、児童に「これはどう思う？」と聞いたりするなどの配慮をしてくれたように思います。下に書いてありますが、授業時間外の自習時間の時に私たちは行けなかったんですけども、その時はFAXを使って学生と子どもたちでやり取りをしました。自習時間が終わると子どもから、どこからどこまで作業が進んだという報告と、質問などが送られてきて、

学生がそれに答えて小学校にファックスを送り返すということを行いました。4クラス全てでこのやり取りを頻繁に行いました。ファックスは全部保存してあります。10月30日の様子はビデオに撮って、それを学生それぞれの見せたい人に見せるということになりました。例えば韓国の方でしたら、韓国の友達や家族などに「こういう活動を行ったのだよ」ということでビデオを見せて、その見せた人から手紙などをもらって、それをまた子どもたちに渡すという予定です。ビデオはもう学生に渡っていて、年内に返事をもらう予定です。これが撮ったビデオです。(ビデオを流しながら)これは、劇を行った班の様子で、この班は英語劇を行いました。学生は、児童に教えたりもしたのですが、子どもが自主的に頑張ってくれた部分が大きかったです。3回目に行ったときも、どれくらい進んでいるか分からない状態だったのですが、行ったら子どもが頑張っただけでかなり進めてくれていたので、すごく驚いたし助かったということを学生が言っていました。1組から4組までやっている内容などが違ったので、それを見るのは大変な活動でしたが、その分やりがいがあったとも言っていました。報告は以上です。

<国際理解教育の疑問① 一からの授業作りについて>

萩原: 甲田さんありがとうございました。それでは、今日の本題に入っていきたいと思います。「プレ多文化フォーラムでの討論内容について」という紙に、この前の学生ディスカッションで出てきた疑問や、講演会を聞いてもまだ学生の中でもやもやしていることをまとめてみたのですが、「①国際理解教育の目的は何か」はかなり広い議題になってしまうと思いますので、②から進めていきたいと思います。「既成の国際理解教育の教材があるのに、一から授業を作り上げることにに関して」です。本学では三島市立東小学校という学校とも国際理解教育をしたのですけれども、そのことについて、森本さん説明してください。

森本: 10月25日に、三島市立東小学校の児童20名と、引率の先生1名が、修学旅行で外語大にやってきました。彼らが、朝の9時から昼の2時まで5時間外語大に滞在したので、その間に私たちとの交流を図りました。目的は二つあって、一つは国際理解教育、もう一つは「一日大学生」とで

も言いますか、大学を体験してみるということにありました。まず午前中に、留学生が集まらなかったというこちらの事情もあったのですけれども、多数の日本人学生と関わりながら、「世界がもし百人の村だったらゲーム」というゲームを、児童や大学の学生・教職員と一緒に行いました。その中で、子どもたちは世界の貧困の問題について非常によく考えました。食べ物をたくさん持っている子どもたちは、それを分けてあげたいとか、これからは給食を残さないようにしようとかいうように、自分の小さな活動が世界を変えられるのではないかと考えていました。また、お昼を食べた後、午後は文化紹介のような国際理解教育を留学生と一緒に行いました。

萩原: ありがとうございました。以上のように、東小学校では「世界がもし百人の村だったらゲーム」という、文献から引用した既成のゲームをしました。意外とうまくいったのではないかと学生は思っていますが、そういった国際理解教育の既成の教材というのが出回っているにも関わらず、学生と先生が一からアクティビティーを組み立てることの利点や動機は何なのだろうという疑問が学生から出ました。この点について先生からご意見があればお願いします。

矢崎: 国際理解って広いと思うんですね。先ほどの国際理解の活動の一つとしてねらいを達成できたのだと思います。ただ、私たちが考えているのは、さっき「自分のこととして」っておっしゃったのでいいのですが、やはり自分事にならないとダメなのだと思います。事実を知ることはいくらでもできますが、他人事だと「ふーん、かわいそうだね」で終わってしまう。まず一つ、自分事になることが大事だと思います。メッセージ性ということです。私たちの研究会議では、もちろんそういうこともしていますが、やはり人と関わるのが大事だと思います。学校にいと、色々な文化を持った方と関わるということがなかなかできません。自分の周りにいる友達と先生だけ。先生と国際理解教育の授業をすることはできますが、どうしてもどこか他人の国のことという感じになってしまいます。そこで、いろんな体験や考えを持った方と直接関わるということを大事にしたい。その方が持っているものと、私たちが子どもに学ばせたいも

のとを合わせる事が大事だと考えています。とすると、やはり一から作るしかありません。あるものをそのまま持ってきて、それがその方に合わなかったり、逆に子どもたちに合わなかったりする場合もある。合えばいいのですが、合わないことも多いので、やはりその方が持っている・伝えたいことと、子どもたちの現実というものを考えて作っていくことをしています。

萩原:ありがとうございました。東柿生小学校では去年から外語大の学生が活動させていただいているのですが、その中で何か感想はございますか。

奥野:確かに既成のものが色々あるのかも知れませんが、こちらも勉強不足でして、そこに目が向いていない状態です。学生さんたちと、「今度こういう授業をこういうねらいでやりたいのだけど」って相談して一から作るのはとてもいいと思います。学生さんたちの方がイニシアチブをとって案を整えてくれて、私たちは現場の視点で「3年生では少し難しいかも」とか「もっとゲーム性を入れてみた方がいいかも」とか、アドバイスのことをします。その中で、私たちが気づかなかったことを学生さんの活動で気づかせてもらうなどの恩恵にあずかれるということもありますので、一から組み立てていくのは大変だとは思いますが、オリジナリティーの出る有意義な活動ではないかと思っています。子どもの実態やその時の社会情勢、学校の実情なども合わせながら、既成のものではなく自分たちで一から作り上げていくというのは、難しさはあるけれども独特の味わいもあるし、いい活動だと思っていますし、ぜひこれからも続けていただきたいなと思っています。

萩原:ありがとうございました。自分たちがやってみたくことをやれるという点で学生が楽しみにしている面もあり、その反面難しいなあと思っているのが正直なところ。「世界がもし百人の村だったらゲーム」を中心になってやってくれた葛山さん、東柿生小の授業と百人村ゲームと両方参加してみて、どういう感想を持ちましたか。

葛山:まず、皆さん百人村ゲームをご存知ですか。『世界

がもし百人の村だったら』という絵本があるのはご存知です。その内容を基にカードを作ります。それぞれ性別・言語・住んでいる場所などが書かれている「役割カード」というものです。参加する人に一枚ずつカードを配り、そこに書かれている「役割」になるというゲームです。既成の教材と、一から組み立てる授業の違いで私が思うのは、既成の教材はすでに出来上がったものなので、誰に向けたものかというの、多少工夫をしたとしても、そんなに変わるものじゃないということです。一から組み立てる授業は、そこに関わる留学生によってももちろん変えられるし、関わる児童によってもアレンジが効くと思います。年齢やクラスによって違いがありますから。

萩原:ありがとうございました。この内容について他にご意見のある先生はいらっしゃいますか。

中村:この「百人の村だったらゲーム」っていうのは、長年積み上げられてきたものですか。それとも最近できたものでしょうか。

葛山:詳しい経緯は知らないのですが、絵本が流行ったのが3年か4年くらい前で、その後になできたゲームなので、すごく古いものではないです。

中村:国際理解教育に限らず、小学校で子どもたち相手のコミュニケーションゲームのようなものが今ネット上で手に入るのですが、面白そうだなと思って子どもたちに投げかけてみても1回でうまくいくことはあまりありません。自分のやり方とかクラスに合わせてアレンジした方がいいなと思う点が多く見つかるんです。積み重ねていくうちに、子どもたちをのってこさせられるようになるので、こういったゲームは何度か繰り返す必要があるなと思います。今おっしゃったように、クラスの実態というのは非常に大きい部分なので、一から授業を作るときには、学年の先生や担任の先生との事前の連絡はすごく大事だと思います。ただ一方で、学生さんとの打ち合わせの時間はなかなか取りにくいものです。そこが一番ネックになるところかと思っています。今年の場合私たち5年生は、すっかり学生さんたちに計画をお任

せています。第1回は非常に良かったのですが、第2回10月のときには、写真を使ってグループワークをやったんですが、その時間が少し間延びしてしまったという反省が後で出ました。そのへんもきちんと打ち合わせしておけばよかったなと思います。事前の連絡はできる限りやった方がいいですね。

＜国際理解教育の疑問② 留学生は必要か＞

萩原:ありがとうございました。では、次の質問に移りたいと思います。③-1で、「国際理解教育で留学生は必要か」ということなのですが、まずこの疑問が出てきた経緯を森本さんに説明してもらいます。

森本:土橋小学校などでの実践からこの質問が出たんですけれども、土橋小学校では留学生・日本人学生という区別は特別せずに、例えば遠田さんが子どもたちと劇を作り、相川さんが子どもたちと絵本を作り、砂田さんが世界の子どものついて知るという活動をし、朴志禮さんが夢の場所を考え、鄭仁淑さんが紙芝居を作り、モンコンチャイ・アカラチャイさんがタイの歌やダンスをするという活動を行いました。留学生だから国際理解教育になるという視点ではなく、留学生も日本人も同等で、必ずしも留学生でなくても国際理解教育はできるのではないかと考えさせられる活動でした。ともすると、留学生と子どもたちが関わったから国際理解教育なんだと考えがちですが、留学生や外国人でなくとも子どもたちと関わることで国際理解教育ができるのではないかと思ったのですが、それに対して先生方はどのように考えていらっしゃるでしょうか。ご意見をお聞かせください。

三井:国際理解教育を学ぶときに、国を学ぶ・人を学ぶということで我々は話をしているんですけれども、インターネットで簡単に情報が手に入る世の中ですから、パソコンがちょっと使える人なら、国について学ぶことはいくらでもできます。でもそれで国際性までは身に付かない。先ほど矢崎先生からもあったように、人から学んでいこうと考えています。人から学ぶということで、その人が背景に持っている、文化、今までの人生観、国際性、そんなものを子どもたち

に感じて欲しいと思って今回の授業を行いました。やるのは誰でもいいのかと考えてみると、やはり背景に国際性というものを持っている人とやりたいなという思いがありました。だから、校内研究で「近くの大学生でいいじゃないですか」と言われたときに、外語大でないというものが身に付かないという話をしました。どういうことかという、遠田さんだから劇に英語を使ってみようと考えてみたり、砂田さんは世界の子どものついて知る中で難民のこととかを伝えたいという思いがあったんです。ただ4年生の子どもたちは最初なかなか理解できなくて、1時間学習だけでつぶしたんですけれども、最後にはそれが活かされて、クイズをやってみようという考えを身に付けることができたのだと感じています。ですから、国際性を背景に持っている外語大生と一緒に授業をできたことはとても良かったと思います。

萩原:ありがとうございました。ということは、国際理解教育に携わるのは、必ずしも外国籍の留学生でなくともできるということでしょうか。

三井: はい。

萩原:このことについて他に意見や質問はありますか。

矢崎:授業のねらいにもよると思います。今回の土橋小では、背景に国際性を持っている方であれば日本人でも留学生でもよかった訳です。反省では、もっとその方のメッセージや伝えたいことを出してもらっても良かったかなというのがあります。ただ、やはりコミュニケーションというのがねらいだったので、コミュニケーションもやりながらメッセージも伝えるというのは、4年生にとっても、留学生や日本人学生にとっても難しいと思います。そこが我々のジレンマです。今回は国際性というものがあまり出ていませんが、やはりねらいによってはそれが欲しい授業もあると思います。宮前平中学校のように、どこの国の人かによって考え方が変わるということもありますので、一つの考えで決め付けるのではなく、ねらいに合わせた方に来ていただけると思います。逆に言えば、日本人の学生でも、国際理解教育のねらいを達成できることは数多くあるということです。

萩原:ありがとうございました。

<外大生であることの強み>

和田淳二:内輪になりますが、三井先生に質問があります。先ほど「外語大の学生は国際性がある」とおっしゃいましたが、それはどういうことでしょうか。

三井:安易な考えかもしれませんが、外語大生はある外国に興味があって、その国を選んで、その国の言葉を勉強しているということで、そのように考えました。

和田淳二:確かにそういう方が割合多いという風に私も思っています。ただ、どこの大学か、何を専攻しているか、だけでは個々人を理解し切れない部分があります。私は国際理解教育については素人なのですが、人権教育だと思っています。つまり、子ども同士の間関係作り、例えば誰にでも心を開けるとかそういうところが、つながりのある部分だと思うので、先ほどの話に戻れば、やはり日本人の方でも国際理解教育はできるだろうと思います。

萩原:ありがとうございました。「外大生は国際性がある」というのは、学生ディスカッションの中でも話し合ってきたことです。この会場の学生でも、2人を除いて全員が海外で1年以上暮らした経験があります。海外で生活する中で、日本人として葛藤を感じたことがあるからこそ、子どもたちに何かを伝えたいという熱い思いを持って、活動に取り組んでいるのではないかと思います。葛山さん、どう思いますか。

葛山:私自身、先ほどの話にもあったように、日本人学生だけでも可能な授業はあるし、留学生がいるからできる授業もあると思います。なぜ私がそう思うようになったのかというと、私は隣に座っている周さんと去年3年生を担当していました。国際性ということもあって、こういう活動に興味はあったのですが、中国に対しては正直あまりいいイメージを持っていませんでした。ニュースなどのメディアを通してしか中国の事を聞く機会がないし、何かにつけ日本に文句をつけてくる、そんなイメージでした。ですが実際この活

動をして、周さんを通して中国の話を聞くようになり、今までは悪いところしか見えていなかったけど、いいところも見えるようになって、面白い国だなと思うようになりました。子どもたちにとっても、そういうふうには直接その国の人を通して接することができるという点で、留学生がいる国際理解教育のよさというものはあると思います。

萩原:ありがとうございました。時と場合に応じて留学生が必要ということでしたが、あるフランス人の男子留学生がこう言っていました。自分はフランス人だから、日本の子どもたちがどういうことを楽しいと思ひ、疑問に思うのか分からない。だから、フランスでの生活を経験した日本人の方がきちんとした話をできるのではないだろうか、と。また、金さんのように、日本に来て困った経験があるから日本人に対して何を伝えたいかを明確に持っている留学生もいます。ここでは留学生は必要だと仮定するとして、学校の先生・日本人学生・留学生それぞれが授業にどう関わるのが望ましいのか、ご意見をお願いします。

和田淳二:私が1年生の国際理解教育をやったときですが、インドネシアの方に授業に来ていただきました。そのときできるだけ民族衣装を着てきてください、と言いました。なぜかというと、やはり子どもたちは日本以外の人に対して恐怖心を持っていて拒絶するところが少しありました。あるときは中国の方がいらっちゃって、日本語をしゃべっていたので違和感はありませんでした。ですが子どもたちが外国人に対して持っているイメージが、良いものならいいんですが、「Excuse me.」と言われてもすぐ逃げてしまうというところがありましたので、私は留学生の人に、日本語はしゃべらずにお国の言葉で話していただいて結構です、と言って授業に参加してもらいました。私と留学生の方はとにかくフレンドリーに、とても仲良く対話するようにして、子どもたちはそれを見て、外国の人でも日本人と変わらないのだ、というふうに変わっていきました。授業は2回しかできませんでしたが、子どもたちが人理解をするのに役立ったと思います。体が大きい人や黒人の方がいらっちゃると子どもたちはどきどきするのですが、それでも授業の中で授業者と留学生のフレンドリーな関係を見て変わっていくので

はないかと思います。出会いも大切ですし、その人との授業の中での触れ合い、そして街中で会ったときに声を掛け合うつながりというのも大事です。さっき言っていたように、国際理解教育は人権教育なのだと思っています。自分を大事にすることは、人を大事にすることにつながる。留学生であっても日本人学生であっても同じです。多くの関わりや経験を持たせることで、子どもたちは人生の中で、外国の人に対して好印象を持つと思います。だから私たちがもっともっとアピールしていかなければならないと考えています。

萩原:ありがとうございました。先生方から、授業を実践した感想があれば、お願いします。

奥野:うちのクラスに来てくださったのはインドネシアのタリさんなのですが、子どもたちは最初、どういう人が来るんだろう、と不安半分期待半分の状態でした。でもタリさんに実際会って、自己紹介をして、ゲームを通して触れ合う中で、自分たちと同じだと子どもたちは思うようになっていきました。外国の人はどこか違うという先入観が子どもたちにはあったのですが、楽しければ笑うし、嫌なときには顔を曇らせるし、喜怒哀楽も一緒だ、タリさんは私たちと一緒にだね、と授業の最後に言う子どもがいて、私はそこがいいと思いました。国際理解は国ではなくて人の理解と先ほどから出ていますが、タリさんを通して、インドネシアは楽しそうだな、暑そうだな、という形でインドネシアに興味をわいて、じゃあ他の国はどうなのだろう、他の国の人も話してみたいな、というように心の動きが広がっていくのが重要だと思います。まずは違う点から始めて、でも最後にはみんな一緒だと思える機会を与えたいと私も学生さんも考えていますので、3回目の授業もその方向でやりたいと考えています。ただ文化を紹介しあうとかいうのではなくて、人を知るということを3回通して、子どもたちもそこに気づいて欲しいと思います。

萩原:ありがとうございました。この件に関してご意見があればどうぞ。

武田:今までの話では留学生と日本人学生を別々に考えて、留学生がいなくてもいいんじゃないか、日本人学生だけでいいんじゃないか、という話になっていました。当初私たちが活動していたときにおこがましくも「東外大モデル」と名前をつけたのですが、日本人学生と留学生がペアあるいはチームを組んでお互いの良さを引き出すことを目指していました。果たしてその効果があるのかということをお聞きしたい。というのも、国際理解の活動が様々なところで取り上げられても、注目されるのは留学生ばかりで、日本人学生は縁の下の力持ちのような立場で周りから見てもらえていないのではないかと、学生たちをはたから見ているのですが、どうでしょうか。

矢崎:留学生の方がいいという授業も確かにあるでしょうが、川崎市でやっているような、人との関わりをねらいにするのだと、日本人学生が単なる補助に回るのはもったいないからやめた方がいいと思います。一人の講師として、土橋小学校でも宮前平中学校でも十分に役割を果たして成果を挙げていると思います。もう一つ、少し言いにくいことですが、お金の問題があります。交通費だけ出してくれればいい、と支援室は言うので助かるのですが、そうではない場合もあります。予算が出にくいので難しい部分もありますし、ねらいは人との関わりなので、グループは少人数の方がいいのです。だから土橋小学校も宮前平中学校も1グループに一人ずつ学生さんに入ってもらっているのですが、仮にペアにすると全部で12人、コーディネーターも合わせると14人になってしまって、払うのが難しい。だから留学生も日本人学生も一人ずつでやってもらっています。コーディネーターと言えば、甲田さんがこの前こうおっしゃっていました。3回目の授業ともなると、子どもたちは学生に寄っていったり抱きついたりする。でもコーディネーターには抱きついてこないから寂しい。給食のときもコーディネーターは親近感を持ってもらえない、と残念がっておられました。それを聞いてかわいそうだな、と思ったのですが、コーディネーターも重要な役割だと思います。まあ、一番言いたいのは、学生さんを補助に使うのはもったいないということです。

武田:しつこくて申し訳ありませんが、留学生と日本人学生が一緒にやることでどういった効果が引き出されているとお考えですか。個々でやっているから、一緒にやる効果についてはあまり実感がないということでしょうか。

矢崎:今言った二つの学校では個々でやっていますが、去年やったある学校ではペアでやっていただきました。そのときは留学生の方に国について語ってもらうことが多く、日本人学生さんにはうまくフォローしていただきました。やはり授業の形態によると思います。日本の文化とその国の文化を紹介しあうような授業だと、二人で一緒に組み立てた方がお互いに生きて面白い授業になります。でも今年の形の授業では、学生をペアにすることはしませんでした。

武田:ありがとうございました。

萩原:留学生の意見も聞いてみましょう。金さん、留学生としての自分の役割をどういう風に認識していますか。

金:私は東柿生小学校で去年2年生を担当しました。先週のプレフォーラムでも話したのですが、私はビジュアル的に外国人というイメージではありません。東柿生小学校の活動に参加しているブラジルのファウストさんやインドネシアのタリさんとか比べると、私はぱっと見て留学生とか外国人とか思われないうです。最初の授業で「留学生は誰でしょう?」というクイズをやったくらいです。外国人留学生だということで、日本との比較をしてくれという要望をよく言われます。私は韓国出身で、いいのか悪いのか分かりませんが、韓国と日本は大した違いがないのです。比較しようと思っできないことはないんですが、私は国際理解教育をする中で、世界中みんな同じ人間だということを考えています。だから日本人、韓国人と区切らなくてもいいと私は考えているんですが、どうしても「留学生だからできる話をしてください」とか「留学生がいるからできることをしてください」と言われることが、東柿生小学校ではないんですが、多々あります。それで、留学生をどう使うかということですが、今年の5年生の1回目の授業で、韓国と日本の小学生

の比較をしました。そのときに、私がいなくても日本人学生二人で、韓国の小学生がどういう生活をしているか調べることはできたと思います。私自身、今の韓国の小学生がどういのか分からなくてインターネットで調べたくらいですから。それで、日本人二人だけで授業をしたら、とある韓国人小学生の一日、みたいになると思います。まずは韓国の小学生が何をしているのか想像してみよう、という始め方になるのではないかと。そこに私がいることで、より想像しやすくなると思います。「金さんがみんなと同じ歳だったときのことを想像してみよう」と。「韓国人」じゃなくて「金さん」のことになるのもっと身近に感じられるし、韓国人はどうなのだろうって想像するよりは、金さんはどうだったんだろうって、目の前にいるから質問したり話しかけたりできます。だから、そういう作業や授業をするときは、留学生がいた方が子どもたちは韓国をより身近に感じられると思います。

矢崎:今年の6月に支援室に国内研修ということで行って、そのときに何人かの留学生とお話したときに、これだ、と思った印象的な話があります。金さんがおっしゃったことには、金さんという人と仲良くするのか韓国と仲良くするのか、どちらかと考えたとき子どもたちに必要なのは前者だろう、と。私はその通りだと思います。川崎市の国際理解教育が目指しているのは、金さんという人を知ることの方なのです。韓国について知ることはいくらでもできますから。金さんを知って、すごくいい人だなとか、自分と同じようなとか、違うようなとか色々なことを考えます。金さんは韓国人なのか、じゃあ韓国ってどういう国なの、って広がっていくのは全く構わない。初めから韓国という国について話しても、子どもたちはどうでもいいこととして忘れてしまいます。でも金さんという人を通すことで、どうでもいいことではなくなるのです。だから、国に意識を向けるときにも、留学生は必要な存在でありとても重要な役割を担っていると思います。

中村:日頃小学生が学校の中で接するのは、同じ小学生同士かあるいは先生しかいません。そこに教育実習で大学生が来ると、違う年代で違う感覚の持ち主と出会う新鮮味があります。外語大の方が来るのもこれと同じ部分があ

るのでしょう。日本人学生でも外国人留学生でも共通で、おにいさんおねえさんが来てくれた、という気持ちでいいと思います。留学生についてですが、その国の食べ物・文化・服装などは、教員が写真を見せても教えられることなので、子どもたちにも衝撃的な感動はなくて、違うのだな、くらいにしか思わない。でも例えば、金さんが10月の授業でおっしゃったことは衝撃的でした。学生さんが3人それぞれの大切にしているものの写真を持ってきて、どれが誰のか当てようという授業だったのですが、金さんはてるてる坊主の写真を持ってきました。日本に来て初めててるてる坊主を見たということだったのですが、それだけなら子どもも教員も、韓国にはてるてる坊主はないのだな、と思うだけで別に驚きません。でも金さんが初めててるてる坊主を見たときの印象が、残酷だ、首を絞めて吊るされている、というものだったと聞いて、私はてるてる坊主のイメージががらりと変わりました。明日晴れて欲しいな、とお願いするのであって首を絞めているなんて思ってもみなかったのですが、外国の人から見るとそう見えるのかと思いました。やはり生の声で聞くことですごくインパクトがあったのです。日本人でも習慣の違いとかは教えられますが、外国の方の感じ方の違いを生で聞くというのが効果的だと思います。まだ子どもの声を分析したわけではありませんが、私たちが普段当たり前と思っていることが世界全体から見たら実は変なことと見られることもあるのだな、という視点を持ってくれればいいと考えています。だから留学生の方には、感じ方を生の声で語っていただきたいです。「ここが変だよ日本人」という番組がありましたが、あんな風に過激じゃなくてもっと素朴に感じたことや価値観を伝えてもらいたいと思います。

萩原:ありがとうございます。留学生は必要なのだ、とちょっと納得しつつあります。次に周さんの意見を聞きます。金髪、色白、青い目の留学生という子どもたちの期待を、見事に裏切ってしまう周さん、どうでしょう。

周:それは初耳です(笑)。個人的な意見ですが、国際理解教育という名目でやる以上、外国人との付き合いなしではできないと思います。なぜかという、客観的な事実は本

やインターネットで調べられますが、その国に住んでいる人でなければ分からないことというのが、必ずあるからです。小学校だとどうか分かりませんが、中学校や高校で中国のことは必ず習いますから、知識は身に付くのですが、やはり中国に住んでないと分からないことがあるのです。だから、国際理解教育の授業は留学生がいなくてもできるのかもしれませんが、留学生がいた方がよりいい効果を得られると個人的には思います。自分の役割について詳しく考えたことはないのですが、自分が何をできるか、よりも、自分が何を求められているのか、を知りたいです。小学校の先生に、何を知りたいのか、私のことを知りたいのか、中国のことを知りたいのか、それとも中国と日本の違いについて知りたいのかをまず聞いて、それに答えるのが私の役目なのだと思います。

<国際理解教育の疑問③ これまでの実践の効果>

萩原:ありがとうございます。感じ方というキーワードが出ましたね。留学生と一緒に授業をするのは実は日本人学生にとっても大変なことで、コーディネーターは学校と学生をつなぐだけじゃなくて、日本の学校ではガムを噛んじやいけないところから始めるのです。その苦勞が報われている思いです。時間も押してきたので次の質問に移ります。④は学生にとって一番関心がありつつ心配していて、かつ学生では知り得ないことなんです、「これまでの実践を通して、子どもたちはどのように変わったと思われるか。先生方の印象、国際理解教育に対する子どもたちのリアクションを知りたい。」ということです。学生は年に数回実践に行くんですが、果たしてどういう効果があったのか、どういう風にすればよかったのか子どもたちに聞く機会がないので、ぜひ子どもたちに日頃関わっている先生方の意見をお聞きしたいです。特に担任の先生方、よろしくお願います。

野村:クラスを見ていると勉強はできている感じの学校なので、更にその先まで考えて、総合学習の時間でやっているように、自分史を振り返ってみたり色々な職業の人にインタビューをしたり、これから先のことまで考えることをしているの、それと結びつけて外語大生の方との交流を通し

で考えるというのが授業のねらいでした。生徒からの感想としては、例えば10年後はあの学生のようにになりたい、というように学生がある意味人生のモデルになっているものがあります。その場限りではなくて、自分もこんな風にできたら、と子どもたちが感じる事ができたことが一番の収穫です。通り一遍の知識だけ与えてもこうはならないので、すごい機会になったと思います。それから、学生と関わってお互いをよく知ることで、相手に対する興味もそうですが、自分が相手に認められたり励まされたりしたことで、子どもたちの心に残る励みになる機会になったと思います。さらに、外国の文化について今後もっと深く知りたいと感じている子どももいます。興味関心を持つ窓口になっているのです。だからこれからも何かやっていかなければと考えていますが、1回限りではなくて何回か続けて授業をしたことで、子どもたちがこれから考えていく土台を作るいい機会になったと思います。

萩原:ありがとうございました。もう一人二人から感想をいただきたいのですが。

鳥塚:私は国際理解について何の知識もなく、しかも今日この場で新しく湧いてきた疑問もあり、私自身分からなかったところもあります。子どもたちがどんな風変わったか、今一生懸命考えていたのですが、一番変わったのは、新しい出会いを通して、こんな人もいるんだ、と思うようになったことです。先ほどもありましたが、子どもたちの世界ってこちらが考えているよりはるかに狭くて、うちのクラスで「韓国の人があるんだよ」って言ったら「ヨンさま来るかな」って言うんです(笑)。子どもが知っている韓国ってヨンさましかなくて、韓国と言えばヨンさま、というイメージのところへ金さんが来て、韓国はヨンさまだけじゃないのだと分かったみたいです。子どもが元々知っている韓国ってメディアで流れているものしかなくて、知っている子は国際問題ということも聞いたことがあるようですが、うちの学校の実態では8、9割はヨンさましか知らない。とても偏ったイメージしか持っていないのです。日本以外に国があることは知っていると思うのですが漠然とで、そんな子どもたちが、こんな人がいてこんな国があるのだ、と思う入り口に立つことが必

要だと思います。この間の授業で、なんて失礼なのだと思いますのですが、何かの写真を見せていただいたときに、韓国人は木の小屋に住んでいるから云々と言う子がいたのです。そんなイメージしか持っていない子どもたちに、そうじゃないと言ってもらって、世界が広がったり、その人の背景にある国に少しでも興味を持つ最初のスタートになったと思います。将来的にあの国に行ってみたいな、その国の人と話してみたいな、と思ってくれればいいと思います。やはり外国の人に来てもらっても、その国のことが必ずしも分かるわけでは決してないと思います。自分自身の体験から言っても、外国の空港に降り立ったときに日本と違う空気で、これが外国の香りなのだと感じたことがあります。現地に行かないと分からないことがあるわけです。だから、子どもたちがその国に行ってみたいと思うことができれば、それがその子の変化だなと思います。

萩原:ありがとうございました。次に土橋小学校の三井先生をお願いします。

三井:うちの学校の授業は少し特殊で、聞く力やコミュニケーション能力などを身に付けることを目標にしていました。小学校3、4年生はギャングエイジと呼ばれるくらい自己主張が強い時期で、自分のことをしゃべるのは一生懸命になれるのですが、他人の言うことを聞く余裕がないという問題があるのです。話し合いを中心に授業をしたときに、最初はあっちこっちでわあわあ自分の意見を言うのですが、段々声が大きくなって行って、まるでけんかをしているようにだと学生さんも言っていました。でも授業を進めるうちに、話し合いの進め方を次第に学んだみたいで、聞く力は随分育ってきたなと感じています。

萩原:聞く力が育ってきた、というのはどういう時にお感じになりますか。静かになったとかそういうことでしょうか。

三井:まず、一人が話をしていたら黙って聞くようになった時、それから、自分の意見を思いつきで話すのではなくて、考えて整理しながら話すようになった時や、人の意見を取り上げて自分の意見を鑑みれるようになった時などです。

<国際理解教育の疑問④ 授業の狙いについて>

萩原:ありがとうございました。では次に移ります。子どもたちからどうリアクションがあったか、どう変化があったか、の意見の中で、人とのつながりや聞く力というのが出たのですが、ここで①-②に戻ります。もし国際理解教育の目的、授業の目指す目的が、「広い視野を持った子どもを育てる」「聞く力を育てる」「コミュニケーション能力の育成」というものであれば、他の場面でも達成できるのではないかと思います。木矢さんの発表の中にあった、「自分の考えを持ち、相手に理解してもらえるように伝える」とかそういうことは、学級活動や他の行事でも学べるものでしょう。なぜそういう目的を国際理解教育の場に持ってくるのだろう、というのが学生からの素朴な疑問です。それについてご意見があればお願いします。

矢崎:難しいですね。コミュニケーション能力というのは全ての教科で扱うべきものなのです。算数・数学でも理科でもあります。ただここで言っている、私たちが本当に身に付けさせたいコミュニケーション力というのは、文化的国際性を持った、自分と少し違う人とどう話をするか、その人をどう理解しようとするか、という意味でのコミュニケーション能力なのです。だから、たとえよく知っている者同士でも、お互いをより深く知るためのコミュニケーション力というのももちろんあると思います。でも私たちが今やっているのは、初めて会った人とのコミュニケーションです。欲を言えば、国際性のある方にいつでも来ていただきたいのです。でもそういうわけにもいかないのが、国際性とあまり関係のない方も授業をしています。川崎市の研究会議で話し合っているねらいは、やはり文化や世界的なものを教えることではなく、色々な考え方や文化を持った人とどう付き合うかということなんです。というのも、川崎市には帰国子女の子や外国人の子がたくさんいて、統計的に言うと各クラスに一人違う文化を持った子がいることになるのです。学校によって多い少ないはありますが。だから隣にそういう子が座ったときにどうコミュニケーションを取ろうか、ということを考えることから始まっているわけです。土橋小学校の授業では、複数の意見をまとめたり、協力して一つのものを作ったりしましたが、それは日本人同士でも難しいことです。そ

こに考え方の違う人が入ったらもっと難しくなるでしょう。その中でトレーニングをして、自分の意見の出し方であるとか、相手の意見を受け入れることを学んで欲しいと思っています。そういうわけで、コミュニケーションはあらゆる場面で扱えるものではありませんが、国際理解的なコミュニケーションというのもあると考えています。

萩原:ありがとうございました。学生の発表の中ですごく印象的だったのが、土橋小の聞く力です。先生はなぜ子どもたちの聞く力が足りないと感じて、それを国際理解の目標として取り上げようと思ったのですか。

三井:最初に授業を組み立てるときに、子どもたちに今一番足りないのは何だろうと考えました。矢崎先生から、今子どもたちに欠けているものを把握して、それと国際理解を結びつけた授業ができないか、というお話を聞いていたので、まず子どもの実態把握から始めました。うちの学校の実態を調べていくと、これは今の子どもたち全般的に言えることかもしれませんが、自分のことには一生懸命だけど、どこか排他的で他を寄せ付けないうところがあって、自分さえよければいいという考えが横行しているように感じました。冷たい関係とまではいきませんが、人のことを聞き入れる余裕がない感じがあったので、今回のような授業をしようということになりました。

萩原:ありがとうございました。今の件に関して学生から質問はありますか。

田村:三井先生にお聞きします。子どもたちに自分さえ良ければいいという傾向があるとおっしゃいましたが、人との関わりというものは学活の時間などを通してクラスの中でも扱えると思います。それを国際理解教育と結び付けようと思った理由をお聞かせください。

三井:先ほど矢崎先生がおっしゃったように、対する相手によって授業の内容も変わると思います。友達同士の関係を活かすとしたら学活になるでしょうし、障害のある方と話をするのであれば福祉教育というふうな場面場面で変

わかります。東外大の学生さんであれば、背景に流れている国際性を導き出しながらコミュニケーション能力を身に付けていくというねらいがいいだろうと考えました。

萩原:ありがとうございました。学生からの質問は以上なのでこれで終わりいたしますが、運営委員を代表して青山先生何か一言お願いします。

青山:代表というわけではないのですが、一委員として申し上げます。今回のフォーラムは学生が主体となって取り組んできたわけですが、こうして学校の先生方を相手に堂々と張り合って質疑応答しているのを見て、やはり学生自身が成長しているということを強く感じました。我々大学教員から見ると、もうこれだけで十分支援室の成果が挙げられたかなと思います。一方、小中学校での国際理解教育に関してですが、外大モデルとは言ってもまだこれからの成長が必要だと思います。一つには、留学生と日本人学生が共に授業を作り上げるということがあります。今日の議論では、実際の授業の場で日本人が出るか留学生が出るかが問題になっていましたが、それ以前に授業を作り上げていくプロセスで、一緒に活動するという目に見えないところが本質なのではないかと感じました。その上で、授業を日本人がするか留学生がするかは、それぞれの授業で意味のあることだと思います。その中でも特に、留学生がやはり必要だということが今日確認できました。目からうろこが落ちる発言もありましたが、同じ人間でも違う見方があるということ、留学生の口から聞くことで説得力が増したと思います。それと今回は出てこなかったことですが、1回だけの授業ではなくて何回か継続的に行う、しかもその前後にはしっかりと打ち合わせと振り返りをやるというように、長いスパンで考えることが、支援室の国際理解教育の特徴ではないかと思います。児童・生徒たちの変化として、初めは分からなかったけれども実はこの人はこういう人なのだと考えるようになったというのが多くありました。これはやはり時間をかけて交流したからこそできたのだと思いますし、そもそもそういうことを前提として活動してきたことの成果であると感じました。私からは以上です。

萩原:青山先生どうもありがとうございました。趣旨からは外れてしまうかもしれませんが、一言申し上げます。国際理解教育は子どもたちに向けて行ってはいるのですが、専攻語や専門を越えたメンバーで授業を作っていく中で、国際理解教育を受けているのは自分たちの方じゃないかという錯覚に陥ることがあります。葛山さんが、自分が中国を知るようになったと言っていました、それほどまでに私たちがコミュニケーション能力や、人の意見を聞く力や、他の国に対する知識などを身に付けてきたのだ、ということを4年生の私が感じています。ですので、こういった機会を与えてくださっている学校に本当に感謝しています。ありがとうございます。それでは他に質問や意見などがなければ、これで終了いたします。お越しくださった先生方や学生の皆さん、お忙しい中どうもありがとうございました。

以下当日配布資料より質問事項を抜粋

- ①-1 国際理解教育の目的は何か。
- ①-2 もし、その目的が例えば「広い視野を持った子どもを育てる」「コミュニケーション能力の育成」など(他の場面で育成できるもの)であればそこにどうして“国際”が必要なのか。
- ② 既製の国際理解教育の教材があるのに、一から授業を作り上げることにに関して。
三島市小学校の実践(世界がもし100人の村だったらゲーム)がうまく行ったと思う。日本人だけでできたし、既製の教材もある。それでも、一からアクティビティを組み立てることの利点は何か?
- ③-1 国際理解教育に留学生は必要か。
- ③-2 もし必要であれば、先生方と日本人学生の望ましい役割は何か?
- ④ これまでの実践を通して、子どもたちはどのように変わったと思われるか。先生方の印象、国際理解教育に対しての子どもたちのリアクションを知りたい。
- ⑤ 子どもたちはどういったきっかけで変わったか。
④で特記すべきリアクションがあったとすれば、それは何がきっかけになったのか。(例えば、この授業のこのアクティビティが良かったなど。)

(5)キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ氏講演会「“デカセーギ”はこうしてやってくる～日系就労者支援事業最前線からの報告」

日時:2006年11月28日(火) 18:10～20:00

会場:東京外国語大学 本部管理棟中会議室

講演者:キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ氏

司会者:ただいまから、プレ・学生多文化フォーラムを開催します。本来は12月2日に行われます学生多文化フォーラムで、先生に「明日の多文化社会を担う子どもたちのために」と題して講演をして頂くということだったんですけども、せっかく遠方からお越しですので、なかなか私たちが知ることはできない、ブラジルでの状況、日本の外での状況についてお話いただければということで、こういう講演会を企画しました。本日は「出稼ぎはこうしてやってくる～日系就労者支援事業最前線からの報告～」ということでお話いただきます。先生どうぞよろしくお願いいたします。

<移民の歴史>

キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ氏:みなさんこんにちは。今日の話は少しブラジルの情報と日系社会の情報にしたいと思います。私は話し合いの方が好きなので、私一人が話すのではなくて、私が少し話してから、みんなで話したいと思います。

まず最初に、これはブラジルの地図です。南アメリカがあって、では日系人がどこに住んでいるかというと、サンパウロ州のこの辺、もちろんサンパウロ市内にもたくさんいるんですけども、ここら辺、北パラナ、マトグロッソドスル、それから、トマスールという地域です。ブラジルの人口は日本の人口より30%ぐらい多いのですが、面積は日本の23倍あります。ほとんどの人たちが、この海岸の方に集まっています。内陸の方はあまり人が住んでいないですね。そして、日系移民の人たちは、1908年に正式に移民が始まって、その年の6月に笠戸丸という移民船がサントスに着いてから、2008年で100周年を迎えるとしており、日系社会は大騒ぎをしています。ちょうど奴隷制が廃止されて食糧不足と労働力不足に困り、イタリアやスペインから移民を集めた

のですが、それでも十分ではなくて、では何処から呼び寄せようかということで日本からとなったわけです。当時、日本は非常に貧しい状態で、外国に人を送ろうと考えていて、人々もブラジルっていう国に行けば、お金のなる木があると思っていたわけです。そのためにたくさんの日本人がブラジルに渡りました。当初、多くの移民はサンパウロの東でコーヒーを育てて、慣れない農業をしばらくしていました。戦前の移民というのは、ほとんど出稼ぎという感じで行っておりまして、ポルトガル語を覚えようとはせず、日本の教育をしていました。自分たちの子どもには日本語だけを話させて、いつかは帰国しようと思っていました。日本が少し豊かになったら帰国しようと大部分の日本人が思っていました。しかし、戦争が終わって、日本が負けて、もう日本には戻れないんじゃないかと思うようになりました。そこで、子どもたちのことも何とかしていきましようということになりました。ちょうどブラジル政府も教育を中心にしないと、この国が治まらないんじゃないかということで体制を変えようとしていました。そういった、ブラジル側の政府の仕組みと日本人移民の帰国できないということが重なって、状況が変わっていきました。日本人は自分たちの子どもにきちんと教育を受けさせようとしたし、でも日本語もきちんと守っていききたいということで、日本人学校や県人会などで日本語教育をしていきました。子どもたちも両親に強いられて「どうして日本語なんて勉強しなきゃいけないの?」とか「日本語なんて嫌だ。」とか言いながら勉強していました。ですから、日本で今現在、在日ブラジル人の子どもたち起きているようなことと共通するようなことが、二世の人の中に起きていました。つまり、ポルトガル語も日本語もちゃんとできない。日常生活で話すのはできるけれども読み書きがあまりできない。新聞も、ある程度は読めても複雑なことになるとちゃんと理解できない。

日本人移民は地方から出てきて、初めはもちろん雇われて農業をしていたわけですが、少しお金ができれば、今度は他人の土地を少し借りて耕作して、その次には地主の土地を半分借りて、そしてできあがった米や農作物も半分渡すという農業をしていきました。それでもまだ生活が苦しくて、それでなるべく都会に出て何とかしようということで、まして、戦後は教育をきちんとしようということで、たくさ

んの人達が地方からサンパウロに出てきました。現在、日系社会は150万人といわれていますが、これもはっきりしたデータはありませんが、20年前には120万人といわれていました。

今度の100年祭には、予算的に厳しいところはありますが、きちんとした調査をしようといっています。それと、一つ大きな問題は、どういう人を日系と呼ぶかなのですが、ハーフの人は日系じゃないのかという話になってくると、日系人の数はずいぶん減ると思います。二世の20%がもう非日系で、三世になると30%が非日系ということになってしまうわけですから。日本に住んでいる日系ブラジル人の人たちは、日本人のような顔をしていても、ちょっと違うと思います。

<ブラジルでの日本人移民の様子>

日本人移民がブラジルでどういう生活をしているかというところ、日本人は学歴もあって、成功もしていて、職業もよくて、すごいとかよく言われるのですが、私はちょっと疑問に思っています。本当にそんな裕福な生活をしているのなら、どうして出稼ぎに出るのかなと思うんですね。本当に日系人がそんな裕福な生活をしているのかなというところ、そうでもないように思います。幸運にもお金があって、きちんとした学校に通えて、という人もいます。ブラジルの公立学校は本当に無料なんですね。教科書も制服も。それから学校で勉強するために一日に必要な食事も与えてくれます。ですから、ブラジル人の子どもたちやブラジルに住んでいるラテンアメリカの子どもたちは、その食事をとるために学校へ通っているという子もいます。ちょうど1930年代、40年代というのはブラジルも教育ブームで、すごく教育に力を入れていまして、大学の教授も色々なところ、ヨーロッパとかから呼び寄せるという運動もありましたので、チャンスがあった人はきちんとした教育が受けられました。でも、1964年に軍人たちが政府を取り上げて、それで60年代になるとそういう先生も帰国してしまっていて、ブラジル人の先生たちの中でも有名な人たちは海外に出て行ってしまった。それで、私たちは残された先生に学んでいる。ですから、今でもいい学校といわれている大学、例えばサンパウロ大学なんかもあるんですが、60年代に比べたら、果たしていい学校なの

かなというところはあります。

ですから、日系でうまくいったという人は本当に一部なのではないかと思っています。日系で貧しいとか、食べていけないという人は本当に少ないと思いますが、社会でうまくいっているとは言っても、逆に大金持ちですごく出世したという人も少ないのではないかなと思います。本当のサンパウロの大金持ちはイタリアの人やドイツ人、多くはユダヤ人で、日系人ではないんです。

ブラジルは、経済的に考えても学力的に考えてもものすごく差が大きいんです。日系人の中でも、読み書きもできない人もいれば、大学教授もいる。最低賃金で生活している人々もいれば、月に5000ドル、6000ドルの給料をもらって生活している人もいます。もちろん日本に比べれば物価は安いので割と裕福な生活ができる。だから日系人の人達はうまくいったのではないかという考えを持つんじゃないかと思っています。でも、なかなか仕事が見つからなくて悩んでいる、という日系人もたくさんいます。

それから、よく「ブラジル人ってどんな人ですか？」という聞かれ方をします。ブラジルでも10年くらい前までは、アフリカ人のことを、「黒人の文化をもつ」というような言い方をしていたのですが、よく考えてみると、そういうものはないんですね。アフリカといっても広いですから、各国のアフリカ人がそれぞれが色々な文化を持っている。ですから、それをひとつにはできないです。もちろんアジア系の人達に対しても、「アジア文化」という風にひとくくりにするのも問題だと思います。ブラジルも同じです。アマゾンに住んでいる人達、サンパウロなど都会に住んでいる人達、もっと南の地方に住んでいる人達等は、それぞれ本当に違う考えや習慣を持っています。

そして、日本に来ている人達というのは、サンパウロからだけではなく、ブラジルの色々な地方から出てきている。サンパウロ以外から来ている人は少ないのですが、日系人がいないわけではなく、そういう地域の日系の人達もそれぞれの地域に馴染んでいる人達なので、サンパウロから来る人よりもアマゾンから出て来るの方がブラジルらしいです。パラナ州にはアサイという小さな町があるのですが、住民の90%が日系人という町です。アサイから出てきている人達はほとんど群馬県大泉町に住んでいるようで

す。彼らは、誰かがどこかへ行くとなると、他のみんなもわっと同じ場所へ行くというように、行動がすごく似ています。ですから、パナマから来た人達で大泉に住んでいる人達は、なんとなく行動が似ているんじゃないかと思います。でも、私が見てきた愛知県なんかでは、本当に様々なところから出てきているので、「これがブラジル人」とは言えないですね。

ブラジルの日系社会が今抱えている問題という、仕事を持っていない人達についてです。つまり、高齢者と子ども達です。お年寄り、日系社会の中で老人ホームがなかったり、病気になった人達の介護をする人がいないので、とても困っていると思います。これはデカセギがブームになってからはすいぶんひどくなっています。

お年寄りの面倒を見ていた息子さんたちがデカセギにいってしまうと、残ったお嫁さんも面倒を見ません。お年寄り達は行くところがない。多くの一世の人達はほとんどポルトガル語がしゃべれないし、二世の人達も日常生活には不自由しない人達と、まだポルトガル語がきちんとしゃべれない人達の両方がいる世代です。例えば、サンパウロには日系人向けの老人ホームが2つか3つしかないの、そういう人達は非日系のブラジル人と同じ老人ホームに入ることになります。でも、お嫁さんなどもほとんど面会には来ないので、多くの場合、日系のお年寄りは話し相手が誰もなくて、いつも寂しそうにしているそうです。

そして子ども達についてです。残された子ども達とか、自分達で選択することができない人達です。なぜデカセギがあったか、と考えることが、今日のテーマですよ。私は、経済的な問題が一番大きいと思います。ひとつはグローバリゼーションです。ブラジルから日本へ、という動きだけではなく、ブラジルからアメリカへも多く移民しています。アメリカへ行っているのは約120万人、と正式な数字として発表されていますが、実際には250万人くらいは行っているんじゃないかと言われています。これはやはり不法滞在ですから、なかなかきちんとした数はつかめません。大体はニューヨーク近くや、ボストンあたりへ行っています。ボストンに暮らすブラジル人達について、たくさんの論文が書かれています。アメリカに住んでいるブラジル人は割とおとなしいと言われています。もちろん不法滞在であるか

らだと思うのですが。

パラグアイにもたくさんの人が行っています。ブラジルでは、パラグアイに移民した人を「ブラジグアイオ (brasiguaió)」と呼んでいます。

<日本での日系ブラジル人移民の様子と課題>

そして日本です。日本には約30万人いますね。グローバリゼーションの中では、貧しい国の人達がお金持ちの国へと渡る、という傾向が多く見られるものですよ。日本では、ブラジル人のデカセギが始まったのは90年に入ってから、と言われることが多いですが、ブラジルでは、本当にデカセギが始まったのは1985年であるといわれています。なぜ85年かという、サンパウロ新聞という日本語で書かれた日系人向けの新聞があるのですが、それに「日本で仕事をしませんか」という求人広告が初めて載ったのが85年だったんですよ。はじめは一世の人達だけに呼びかけがあったんですね。というのは、一世の人達であれば言葉にも問題はないし、すぐに文化にも慣れるだろうと日本政府が考えたからだと思います。一世で日本に来た人達のほとんどはブラジルに帰国しています。それは面白いことですよね。「日本へ帰りたい」と口癖のように言っていたのは一世なのに、結局は日本に来て、「いや、僕の場所はここじゃない」と感じて帰国したのです。二世の人達の方が、ずるずるといつまでも日本にいてブラジルに帰りません。85年から90年近くまでの間に結構たくさん一世達が日本に来ていたのですが、彼らのほとんどは帰国しました。そして90年に法律が改正されて、二世に3年のビザ、三世には1年のビザがおりるようになって、91年には日本に来るブラジル人の数はものすごく増えました。

ブラジルでは64年に軍政になって、この軍政が終わったのが90年頃です。それと、新しい大統領が出てきたのが90年、フェルナンド・コロールという人で、初めて私達国民が選挙で選んだ大統領だったのですが、色々な問題があって、辞めさせられました。その次の大統領のフェルナンド・エンリケ・カルドージは、94年に選ばれました。彼が大統領になるまで、ブラジルはものすごいインフレでした。インフレ率が1ヶ月に1000%というときもあって、朝スーパーで見た品物の値段と夕方見たときの値段が違っていたんです

ね。そういう状況がけっこう長く続いて、みんなもうどうしていいかわからない、本当に追いつかないと日系人が考えていたとき、日本はちょうどバブル景気でした。自動車や電気製品をアメリカよりも作っていた。そのために日本で労働者が必要とされていたんです。ブラジルの日系人達はちょうどいい道を見つけたということで日本へやってきた。これがデカセギの大切なきっかけだったと思います。その前にも少しずつは来ていたんですね。法的には認められなくても、観光などを来日目的にして。来日してからは違法でもいいや、という感じで日本に滞在していました。

法律の改正前にはブローカーなども、ものすごく増えました。ブラジルの法律では、本当は93年までは、労働者を派遣すること自体が違法だったんです。でも、ブラジル側にとってもデカセギは利益があることなので、その後法律が少し変わって、「労働者を派遣すること」が違法ではなくて、「労働者を騙して派遣すること」が違法である、ということになりました。それまでブローカーはよく警察と問題を起こしていたんですが、改正後はそういうことがびたっとなくなったんです。こういう点ではものすごくいい加減で、簡単に解決してしまいました。

他の色々な問題についても、「どうして解決しないんだらうね」とみんなが言うのですが、私は、解決しない問題があるのは、それが解決しない方が都合がいいからだ、と思っています。現在、デカセギに行った人達がブラジルへ送金している金額というのは、ブラジルのEMBRAERという大きな航空機の会社が1年間に儲ける額よりも大きいんです。ですから、政府としては、一銭も使わないでそれだけのお金が毎年どんどんと転がってくるのですから、このままの方がいいと考えるんです。どんな人間の移動でも、家族離れ離れになったり、ある人がどこかに住み着くと決心をしない方が、国のため、キャピタルのためには良いことだと。もし在日ブラジル人達が日本に住み着くことを決めたら、彼らはブラジルには送金しなくなるだろうから、そういうことはない方がいい。日本に対してもブラジルに対しても曖昧な状態が一番良いのではないかと私は思います。ですから、政府が本当にデカセギの問題解決に向けて動くか、と言ったら、こんなことを言ってごめんなさい、でも私は絶対にどちらの政府も動かないと思います。ある程度の形を整える

ことはするかもしれませんが、きちんと動くということはないと思います。萩原さんがさっきそれを聞いてがっかりして「もう活動をやめちゃう」と言っていたんですが、やめないでほしい、と私が言ったんですが。だって政府の音頭でこういうことが解決されるのならば、もうとっくに解決されているはずです。20年経ってもこのままの状態にいるというのは、私達ボランティアが、少しずつゆっくりとがんばっている状態にもっていくことはできても、政府が何かするのを待っているだけではきっと何も起こらないと思うんですね。ですから今さっき言ったように、法律を変えたいときには、政府はものすごく早く変えるんですね。さっき言ったデカセギを日本に送るための法律なんて、ものすごく早く改正されてしまいました。でも、例えば今の教育の問題とか、労働者の健康保険の問題とかについては、全然動きがない。だから、私が集住都市会議に出席したときにも、知事さんに「彼らはいつ帰るの？」と聞かれましたね。もうブラジルには帰らないということになると、各市でその人達をどうにか受け入れて育てることを考えなければならぬけれども、いつか帰国するのであれば、そのまま、ある程度の取り組みはしても、大したことはしなくてもよいと考えていると思います。そしてブラジルの側でも、いつまでも仕送りをしてほしいという考えになってしまうのだと思うんですね。結局、上の人達が一番大事に考えているのは金銭的なこと、経済的なことじゃないかなと思います。「人間」っていうことについてはあまり深く考えていないのではないかと思います。

そして外国に行ったときにその国に入れること、そして帰国したときもなかなか馴染めない、ということ。なぜそういうことが起きるかという、一番は文化の違いです。今では、デカセギという言葉はブラジルの辞書にも「Decassegui」と載っています。でもその意味は、「デカセギとは、ブラジルから日本へ働きに行く人」と書いてあるんですね。デカセギという言葉は、本来はどこへ行く人にも当てはまるんですが、ブラジルでは日本へ行く人だけに限られています。そのデカセギが約30万人。この中の15%が子ども達です。色々な国で生まれている子ども達、それから母国と違う国に行って住んでいる子ども達のために何かできないかと考えます。でも、日本で生まれた子ども達は、本当はブラジ

ル人じゃないんですね。ブラジルの法律では、ブラジル人とはブラジル国内で生まれた人か、ブラジル国内にある期間住んで、ブラジル人になりたいと希望した人達、ということになっています。日本で生まれた子ども達はそのどちらにもあてはまらない。結局、この子ども達はブラジル人でもないし、もちろん彼らは日本人でもない。このことも政府には都合が良く、例えばこの子ども達のために教科書や本を寄付してくれないか、と言うと、「でも彼らはブラジル人じゃないからブラジルの責任はない」と言われてしまったりします。そしてもう一つ私が少しがっかりしたのは今年の冬のことです。文部科学省の人がサンパウロにいらしてお話したのですが、「ブラジル人の子どもの教育は、絶対にブラジルの責任だから私達は知らない」というようなことをはっきり言われたので、やっぱりこの子ども達はどちらの国からも見捨てられた子ども達なんだな、ということをもすごく感じました。

文化の問題も大きいですね。ほとんどのブラジル人が健康保険などに加入していません。またそういうことについてあまり深く考えていないと思うんですね。いつかは帰国する、または帰国したいと考えている人達が多いと思うんです。私がインタビューした愛知の人達なんかは、何に対しても「いいよ、帰国したらやるから」と言います。教育も「帰国したら子どもを学校に行かせるから」、病気になったら「帰国したらきちんとするから」という具合に。それで10年とか15年とか日本にいるんですけど、これは短期間だと考えているんですかね。でもきっとブラジルにも帰らないと思います。帰国したからといって、そう簡単にすぐにどうにかなるものでもないですよ。ブラジルに一端帰国して、なかなかうまくいかないで日本に逆戻りした人達は、今の生活を大切にしようとする人が多いと思うんですね。初めて来る人は、お金を貯めようと思って日本に来る。2,3年お金を貯めて帰国して、商売でもしよう、と。サンパウロにSEBRAEというところがあって、小さな工場とか企業を興したい人達のためにオリエンテーションを行っているのですが、そこの人達の話では、帰国したデカセギの人達が興した会社の50%は2年以内に潰れてしまい、5年以内では75%が潰れてしまうそうです。だったらどうしてそういう会社を興すことを許すのか、という、縦社会ではないですが、

ブラジル人というのは自分が社長になりたいんです。人の下で働くのは絶対に嫌なんですね。自分がパトロンになりたい。だからデカセギに来る人みんなが考えているのは、日本に来て3年~5年働いてお金を貯めて、「自分の何かをする」ということです。でも、みんなが会社経営をした経験のある人というわけではないし、初めてすることですから、潰れる確率がものすごく高い。すると、また日本にデカセギに行こう、となるわけです。潰れただけならいいですが、それで負債を抱えてしまった人なんか結構いるんですね。2回目に来る人達の多くは、お金を貯めて帰ろうとは考えないで、いい生活ができるうちにやっておこうと考えるんですね。新しい洗濯機を買おうとか、新しい車を買おうとか。ブラジルで何年もかかって買う物を、日本で仕事をすればすぐに買うことができる。だから子ども達も言いますね、テレビゲームなんかもなかなかブラジルでは手に入らなかった物がこっちではすぐに買えるから「あ、日本はいいな」と。携帯も最新の物が欲しい。きっとそういうところが、今の在日ブラジル人だと思います。その一方で、ブラジル人の仲間同士と一緒に大きなお店を作って、ブラジルで売っているような品物をものすごく高い値段で売っているんです。でもブラジル人たちはそれを買う。だから私が訪ねた愛知県のある団地では、ほとんどのブラジル人が毎日、ブラジルで食べていたのと同じ米、豆、肉を食べていると言っていました。「高いでしょ？」と聞くと、「高い。でもいいんだ。」と言っちゃう。結局は食料品とか、洋服なんか結構ブラジルから取り寄せた物を買っているんですね。その団地でも、団地の一部屋で売っていました。そういう品物は、大きなカバンを持って、ブラジルや値段の安いパラグアイなんかへ行っては買い付けてくるんですね。すると団地に住むブラジル人が買って行くんですね。ブラジル人向けの雑誌なんかにもよく商品の広告が載っています。高いなあと思うんですが、結構みんな買って行くんですね。ですからあんまりお金は貯まっていないと思います。それから、よく「ブラジル人はどこに住んでいるの？」と聞くと、「あの大きな車、新しい車が止まっているところに住んでいるよ」と、どこの団地へ行っても言われます。テレビに関しても、日本の番組ではよくわからないので、ケーブルテレビを入れてブラジルの番組を見ていたりしています。だから、こっちで

いい生活をしよう、というのが今の彼らの考え方なんですね。

でも、健康保険に入っていないと、帰国して大騒ぎになりますね。ケガをした時や勤務中に事故があったときなんかには日本ではちゃんと治療できなかつたり、保険がないためにわずかな貯金を治療費に当てることになって何も残らなくなってしまうたりします。ブラジルでは、保育や教育、健康に関しては、無料で診てくれます。もちろん保険に入っていれば、自分で好きなお医者さん、病院を選ぶことができるんですけど、持っていなければ選ぶことはできません。でも必要な治療は受けられます。色々な病院では患者の60%はそういう患者さんでないといけないという規則があったりするのです。もちろん大学病院でもそうです。だから帰国したブラジル人達もそういうところに行きますね。薬に関しても、必要な薬は医者の方箋があれば、政府から薬を出してもらえます。体調を崩す人ももちろんたくさんいますが、それよりも精神的にやられてしまう人が多いですね。ひとつ、データに入らないのが自殺の数値です。日本で自殺してしまう人もいますが、多くの人達は帰国後に自殺しています。帰ったらどうにかなって一端帰国するんですが、良くならず自殺をしてしまう。

もう一つは、歴史から見ても、人間の移動があるときには、精神病等にかかる確率が高くなります。日本から帰国した精神病患者によく見られるのは、少し精神分裂症に似ているケースです。そのため、日本から帰国したということを知らないお医者さんが診る場合は、精神分裂病だと診断します。日系の人達は精神の病気に対してもすごく恐れを持っているのか、その診断を聞くと「もう治らない重い病気」というイメージを持ってしまいます。治らないのであれば、家族に迷惑をかけたくないから死んでしまった方がいい、と考えてしまい自殺してしまうのです。それはどこのデータにも入らないんですね。ブラジルでは普通の自殺と一緒にされてしまうし、日本でもデカセギが直接の原因で自殺した、とはなりません。

もう一つは残された人達についてです。以前は麻薬などをやっている人達は日系社会にはほとんど見られなかったんですが、ここ10年くらいでしょうか、ブラジルに残された子ども達の中に麻薬の問題がけっこう出てきています。

サンパウロでは日系人の犯罪の問題はまだ出てきていません。でも日本では、ブラジル人の犯罪の問題が大きく取り上げられていますよね。もちろん薬をやったり罪を犯すことは悪いことですが、それ自体が問題ではなくて、本当はそれ以前にあった問題の結果であると思います。前にきちんと対処していればこんなことにはならなかった、と思うんですね。誰も犯罪者になるために生まれてきたんじゃない。色々な環境や状況がこういう人間を生み出しているんじゃないかと思うんです。

それからもう一つ、みんながよく言っているのは、デカセギのために家族がバラバラになってしまったり、子どもを見捨てたり、といった問題です。残された子ども達はもう本当に大変です。多くの場合、父親だけが日本へ行って、最初はすごくまくいくのですが、2、3年経つとだんだん連絡がなくなって仕送りも途絶え、残された人達は食べることに困ってしまいます。中には「私が日本にお父さんを探しに行く」と言って日本へ行く母親達もいるのですが、それは子ども達にとっては、父親も母親も傍にいないということです。そこで大変な思いをしている子どももたくさんいるんですね。

すごく印象に残っている男の子が一人います。サンパウロの公立の学校に通っている子で、ものすごく口数が少なく、先生も「この子がしゃべったところを見たことがない」というような静かな子どもだったんです。私も何度か会ううちにやっと口を開いてくれたんですが、父親も母親も日本へデカセギに行っていて、兄弟3人を一緒に預かってくれる人が誰もなくて、お兄さんがある町に、サンパウロから少し離れた所にお姉さんが預けられて、彼が私の家の近くに預けられているとのことでした。両親と別れて暮らすだけじゃなくて、兄弟もバラバラだったんです。何度か彼に会って話していたのですが、ある時ニコニコ笑い出して、すごく嬉しそうにしている時がありました。「何かいいことがあったの？」と聞くと、「ママから連絡が来て、今度の休みに日本へ遊びに行けることになった」、「僕日本語を勉強しているんだよ」と話してくれました。でもその後、ちょうど12月の学校がお休みになる頃に、彼のお姉さんが殺されてしまったんですね。ちょうど13歳くらいだったのですが、伯父さんのところに預けられていて、その伯父さんの言うこと

をあまり聞かずにすごく反発していたらしく、何が起こったのか詳しいことはよくわかりませんが、女の子は死んでしまったんですね。それで、お父さんは来られなかったのですが、お母さんがブラジルへ帰ってきてお葬式を出したりしたんです。そしてその後、男の子は母親から「今回の帰国のためにお金を使ってしまったから、もう日本へは行けないよ。我慢してね。」と言われました。それから男の子は、私達が最初に会う前よりももっと暗くなってしまいました。このケースは一番やりきれないなあと思うんですが、他にも色々なケースがたくさんあります。

デカセギに行った甲斐が本当にあるのかな、と私は思いますね。日系社会ってそんなに悪い状態じゃないですよ。お金を使っている人達ってそんなにいないです。一戸建てが建てられなくなったりいいじゃない、新しい車が買えなくなったりいいじゃない、と私は考えます。でも、もちろんそれぞれが選んだ道ですから、ある程度は、支援をボランティアなどでやっていくしかないのかなあと思います。

日本のブラジル人たちがよく口にするのは、差別されているとか、そのためになかなか馴染めない、ということです。人の目をものすごく気にしているところがあって、子ども達でもよくいじめられた経験があったり、偏見を感じたりと、な「日本はいいなあ、ずっとここにいたいなあ」という風にはなかなか思えないようです。でもそういう生活を10年も15年も続けているのですから、「なるべくがんばって馴染むようにしようね」とか、「自分のことは自分でやらないといけないよ」、とよく話しているのですが、いつまでこの状態が続くのかな、と思います。

これは数字のデータですね。先ほどいいましたように、二世や三世がまだ合法的に来られなかった頃、1990年までは在日ブラジル人の数は2,429人でした。そして、法律が変わると1年間で一気に増えて11万9000人。ここで法律が変わったんですね。その後は少しずつですが、増えてきています。そして、パラナ州などはわかりませんが、サンパウロ州では、日本政府が少しずつデカセギの受け入れに気をつけているという動きが見られています。今年の4月頃からです。三世は証明書を出さないとビザがおりないとなっていて、今まではすぐに出ていたビザが1ヶ月2ヶ月、あるいは3ヶ月かかる人達があります。それにもかかわらず、1

ヶ月に4000ものビザが出されているという話でした。でもこれは三世だけの話です。

もう一つ、最近わかったことは、その証明書を取るとき、申請する人が過去にある町でちょっとした犯罪や警察沙汰を起こしていても、その町ではなく別の町で申請したら、その犯罪記録が何も載っていない、真っ白な状態で取れることが多いそうなんです。私も最近デカセギの人達に言われて知りました。ブラジルはそういういい加減な国です。でも私が考えるのは、本当にそういうことを厳しく取り締まれば、日本でのブラジル人の犯罪を減らせるのか、ということです。前に犯罪を起こしたことがあるからといって、その人が絶対にまたやるとは限らない。日本で初めて犯罪を起こす人だって多いでしょう。だから、そういう無犯罪証明書だけで解決できるのかなという疑問が残ります。

前は、日系二世には3年、非日系の配偶者は1年のビザが出ていました。でも最近では、この人達は本当に結婚しているのか、夫婦なのか、ということが疑われます。そのため、ここ10年間で一緒に行動した時の写真の提示が要求されるんですね。山のように写真を抱えて領事館へ行って、これはクリスマスパーティーの時の写真、これは誕生日の時、これは旅行、といったように見せて説明します。それでもまた別の写真を要求されるといったように、ビザはとても難しくなっているんですが、それでも4000ものビザが出るんです。ですからトータルで年間5万人くらいは日本へ来ていると思うんですね。でも数字の増加は1万人程度です、ということは結局帰国している人がいる、ということですね。

韓国人や中国人も日本にたくさんいますが、やはりニューカマーとしてはブラジル人が一番多いので、ブラジル人の生活が一番大変じゃないかと思います。こちらは2005年の県別の数値ですが、愛知県ではすごく増えていて、7万1000人になっています。ブラジル人に対してだけでなく、フィリピンや色々な国から来た人達のために、各県や市で色々な取り組みをやっていると思います。私も名古屋にいたときに、ブラジル人も大変だけれども、もっともっと大変な人達もたくさんいるのだなあと感じました。

最近領事館の人達などは、「ブラジル人が日本で犯罪を起こすのはビザを持っているからだ、不法滞在であれば静かにするかもしれない」などと言う人もいますが、そ

ういう問題ではないと思います。つい最近もありましたよね、日系人の受け入れを厳しくする、とか日本語ができないといけいない、というようなことが。ブラジルではなんでこういうことになるの？と言っていました。でも、日本で受け入れるのは日系人だけなんです。日系人に限らず、ブラジル人全般を受け入れるのであれば、日本とブラジルという、国と国の問題になるんですが、そうではなく、日系と日本の社会との問題だから国としてはタッチしない、ということになってしまいます。これをこれからどうしていけばいいか、とても複雑な問題だと思います。問題が出てくれば出てくるほど、逃げ道もたくさんありますし。

では、これから先は皆さんとの話し合いにしましょうか。

<質疑応答>

司会者:先生、どうもお話ありがとうございました。ここからは自由な質問ということでよろしいでしょうか。

ナカガワ:はい。

ナカガワ:これは神戸で撮った写真なんです。神戸の港にありますよね、色々なことが書いてあったりする。つい最近神戸でこの像を壊してしまおうという話があって、署名運動なども起こりました。私も署名しました。ブラジルにも同じような銅像がサントスの港にあります。日本人への敬意を表するためです。日本人はブラジル人にそれだけ良く思われているということです。私が高校3年生の時、予備校にも行っていたのですが、予備校の先生達は「サンパウロ大学へ入ったかったら隣の日本人を殺せ」と冗談を言うくらい、日本人は頭がいいと言われていました。でも、ブラジルの日系人というのは、医学部か、工業、物理、数学の方へとみんな走って行って、社会学などは専攻しません。心理学とかは、よっぽど物好きな人だけというか、「なんでそんなことを勉強するの？」と聞かれます。

質問者A:質問ですが、さっきブラジル人がデカセギに行く国として、アメリカと日本と、あとパラグアイが出てきました。ブラジル人がパラグアイに行くというのがすごく意外だったんですが、どういう感じで行くのですか。

ナカガワ:ブラジル人はパラグアイだけではなくて、どこにでも行っていると思います。パラグアイの法律は受け入れるのも簡単だし、言葉も似ています。ポルトガル語から英語を覚えるのはちょっと大変です。日本語なんてもっと大変。でも、スペイン語は近いし、商売で儲かりやすいと思われているのです。

質問者A:アメリカは不法滞在が多いそうですが、どういう仕事に就いているのでしょうか。日本だったら、工場で派遣労働とか、まあそれだけではないと思いますが。パラグアイやアメリカ、ヨーロッパに行っている人は、どういう働き方をしているのでしょうか。

ナカガワ:アメリカは工場での仕事は少ないです。女性達はハウスキーパーとベビーシッターが主で、男の人達は小さな店の店員や工場、ガソリンスタンドとか簡単な仕事です。私がアメリカに初めて行った時に面白いと思ったのが、ある店をぱっと見た時にちょっと変わったところがあると感じました。「どうしてだろう？」と思ったんですが、結局はそれがサンパウロで見られない景色だったからなんです。サンパウロでは、お店に入ると大体オーナーが日本人とか中国人、ユダヤ人で、黒人が掃除をしたりという感じだったのですが、私が行ったそのお店では黒人がオーナーで、中国人が掃除をしていたのでびっくりしたんです。ブラジル人の女性というのは、掃除が上手で家の中もきちんとしていて清潔です。本当に隅から隅まで掃除をするので、アメリカでは喜ばれていて、女性の方が稼いでるらしいです。

質問者B:今のに関連する質問ですが、そうしますと、デカセギ先がアメリカとパラグアイと日本というお話で、日本を選ぶブラジル人という点では日系人が集中していて、ある程度ビュアなブラジル人というか、要するに日系とは全然関係のないブラジル人が日本を選ぶということはないのでしょうか。

ナカガワ:ないです。日系しか来ちゃいけないことになっていますから。ですからビザは二世に3年、三世に1年しかお

りません。非日系であれば、日系人と結婚しているとか、何か関わりがなければ絶対に来ることはありません。

質問者B:ピュアであっても結婚しているとか何らかの関わりがあるということですね。

ナカガワ:はい。何年か前にパラ州で一人の日系人が捕まったんですけど、その日系人は子どもが60数人いることになっていたんですね。みんな日本へ行きたいけれども法律で日系三世までとなっているので、お金を払ってその人と血縁関係を装っていたんです。でもさすがに警察もおかしいんじゃないかと思って逮捕したんですね。日系人の中にはそういうことをものすごくお金持ちになっちゃうケースもあります。それに、サンパウロでもよくあったのが、女性男性に関わらず、「書類上だけ結婚してくれないか」というケースですね。その代わりに、1ヶ月にいくら送金するから、と。中にはそういう話に乗ってしまう人もいます。だから今は領事館が山のような写真を持って来いと言うようになったんです。

質問者B:わかりました。

司会者:どうぞ。

質問者C:お話どうもありがとうございました。多言語多文化教育研究センターの吉田と申します。ブローカーの話が出ましたが、ブラジルの方が日本に来たい場合に、やはり何らかの手段がわからないと、全く仕事がない状態で来日するのは難しいと思います。だから、やはりブローカーがたくさんいると思うんですが、私がブラジルにいたときにびっくりしたのが、ブローカーのアナウンスメントや宣伝がけっこう大っぴらにいろんなところでされていて、しかもパスポートと15万円程あればすぐに日本に行ける、というような、アルバイト感覚の広告をたくさん見たんですね。さらに、日系人や日系商会在そういうことをやっているところもありました。やはり、日系人側がビジネスとしてやっているという印象を覚えました。ブラジルにおけるブローカービジネスに対する実態調査がされているのか、ということと、日本

にもブローカーがたくさんいると思いますが、そこら辺のやり取りや情報というのは、新聞などでもあまり見ることがありませんので、そのあたりの状況を教えていただきたいと思っています。

それから、日系の方達が日本に来るときに、もちろんお金が貯まると知って来ると思うのですが、ある程度の生活はできるものの、3K労働であるということをわかっていながら来ているのでしょうか。ブローカーが仕事の種類などについてちゃんと説明してから、彼らは来ているのでしょうか。それだけ厳しい仕事であるということをわかっていれば、さつきもありましたように、わざわざデカセギに行かなくてもいいんじゃないかと思う人もいるのではと思ひまして。ちょっとそのブローカーのを中心にお話いただければと思います。

ナカガワ:はい。初めの頃は一世の人達がこっそり来ていました。彼らはもう若くなかったし、子ども達も大きくなっていて、一人で来日して働いて、お金もけっこう貯まると2、3年で帰国をして、「日本は良かったよ」と話していたということをたくさん聞きました。すると二世達も負けずに、日本でどんなひどい目に遭っても、帰国すると、「日本は良かった」と言うので、日本は良いところなんだと思ひて、次々に日本に来る人が増えたんです。

ブローカーがどんな仕事を説明するということは、あまりないと思います。でも、もう10年くらい前から、ブラジルでもみんな「3K」ということを知っていて、3Kどころではなくて日系の人達は5Kだと言いますね。つまり、「キケン・キツイ・キタナイ」だけじゃなくて、「キライ、キビシイ」というのも加えた意味です。ブラジル人というのは、自分で見てきたこと、困ったことをジョークにして笑う人達ですから。

あまり知ろうともしない。どういう仕事なのかを聞こうともしない。だからブローカーも言おうともしないんです。そこでうまくいっているんじゃないかと思ひます。中にはあることを言われていたけれども、日本に来てみたら全然違った、ということはたくさんありますが、それで日本が嫌になるということはあんまり言わないですね。でもひどい目に遭った人はたくさんいます。

ブローカーも90年代の初めの頃はひどかったと思ひま

すね。日本へ来るためには、往復で航空券を買わないといけないし、戸籍謄本も必要だし、保険やら何やらを加えると5000ドルくらいのお金が必要になる、と言いました。もちろんデカセギに来る人達はそんな大金は持っていませんから、どうしたらいいだろうかと日系人が聞くと、ブローカーは「そのお金は貸すから、日本で働きながらゆっくり返してくれればいい」と言うのです。それで、デカセギの人達は、8ヶ月くらいはそれを返済するだけで精一杯になってしまいます。

中には、利子だなんだと引かれて、1ヶ月に7000円しか残らなかったという話も聞きました。7000円ではもちろん生活できないので誰かにお金を借りる。すると、3年間くらいずっと借金を返している人もいました。騙されたと思うことはあっても、でも結局はしょうがないか、という感じになってしまっていました。

ブローカーは、仕事内容について説明する時には、下請けだとか、孫請けの会社に行くんだ、とは言いません。ホンダに行くんだ、トヨタに行くんだ、ソニーに行くんだ、と説明するんです。日系の人達は「俺はソニーで働くんだ」と思って日本に行く。

今でもまだそういうことを言っています。これまではサンパウロで見られなかったケースなのですが、帰国した人達が時々集まって日本での生活について話し合っています。つい最近、浜松のソニーの部品を作っている会社の孫会社で働いていたブラジル人達の集まりがあったんです。私も声をかけられたので参加したところ、30人くらいが集まっていました。みんな小さな部品を作っていたんですが、「私達ソニーではね・・・」という風に話すんですよね。わあ、帰国してもこんな風に話してるわ、と思ったんです。面白いんですよね。帰国してからでもどこまで意識しているのだろうと思ってしまいますが。

ブローカーの問題については、93年にブラジルの法律が変わる前までは、訴えがあったりして、警察も形だけですが、そういうことをしないように指導する、ということはありませんでしたが、今はもう全然ありません。みんななどのブローカーもきちんとやっている、といいます。でも健康保険を払わないとか、きちんとやっているとかありますよね。だからデカセギの人達も、来日にかかる費用を最初から自分で払っ

ている人達が増えています。今までは、多くの人は自分では払っていなかったんですけど。私が浜松に行った時には、健康保険には入れないことになっていて、ブラジル人たちは国民健康保険に入りたいのだけれども市が入れてくれないんですね。まだそういう問題はたくさん残っています。それに、年をとるにしたがってこれから先、色々な問題が起きてくるんじゃないかと私は思います。

それから、さっき言いましたように、日本に来るためには誰かが連れてこなければなりません。サンパウロにはCIATE(Centro de Informação e Apoio ao Trabalhador no Exterior) というのがありますが、そこでは日本のハローワークの仕事を日系人に無料で紹介しています。他にも職場で必要な日本語のコース、手続きのアドバイス、日本の法律など、そういうことについて色々な情報がみんな見られるようになっていきます。作られてからもう15年くらいになりますね。でもブラジル人達はCIATEの仕事は良くないと言っています。というのは、ハローワークで残ったものがブラジルに回されているからなんです。いい仕事でないというのが一つ。もちろんブローカーを通す時にはソニーだ、というような大手企業の名前が出てきますけど、CIATEではそういう言い方はしない。そうすると行かない、となる。それからもう一つは、CIATEではもちろんお金を貸すことはしません。自分で払えるのだったらいいですが、貸すことはしません。でもブローカーは貸しますから、結局はブローカーを頼りにする、ということがあるんですね。

他にまだ答えていないことはありましたでしょうか。

質問者C:ブローカーに対する調査というのは？

ナカガワ:ないです。

質問者C:全くないのですか？

ナカガワ:全くないですね。いくつかのブローカーにインタビューしたり、少し動きを見ることはあるんですけども、多くのブローカーは嫌がって話しません。インタビューも断りますし、言っていることと実際にやっていることも違う。ですから、日本でもそうなんですけれども、私がブラジルで

聞いたブローカーも「うちはずごく教育に力を入れてますよ、きちんとやってますよ」と言うんですが、実際は全然やっていない。東海地方のあるブラジル人学校なんかは、初めはきちんとした人が経営者だったんですが、彼が大きな借金を作ってしまったためにブローカーが学校を取り上げて、結局今学校を経営しているのはクラブのママです。でもそういう事実は言わないし、探してみないとわからない。見かけはきちんとしているし。ですから、この学校もブラジル政府の認可を持ってたりするんです。

日本へ行って調査してみなさい、と言うのですが、1年に一度ブラジルから来て、ブラジル人学校をさらっと見学して「よし」と言って帰ってしまうのがブラジル政府ですから、本当にもう残念だと思います。

質問者C:ありがとうございます。

質問者D:子ども達の教育の問題について、親達の意識があまりないということをよく聞きます。僕が不思議なのは、日本からブラジルへ移民した時には、日本人の親達はとても教育熱心であったということなんですね。でも、今度その子ども達が日本に来たときには、教育にはあまり関心を持っていないのは何故なのか、ということが一つの質問です。これは、この10何年間で、例えばこちらへ来るブラジル人の生活に変化があったのだろうか、ということです。というのは、最近では親自身が読み書きや教育レベルがあまり高くない人達が来ている、ということ時々聞きますね。昔はある程度の教育レベルの人たちが来ていて、今はそこが少し変わってきたのか。これは一番大きな問題だと言われたことがあるんですが、この点について少し説明をいただけるとありがたいです。

ナカガワ:これは私の個人的な意見ですが、戦後、教育重視になったということですね。私が思うのは、本当に教育にそんなに熱心であったのかなということ。なぜかと言うと、大学を卒業した人たちというのは、例えば8人兄弟がいたら、その下の子ども達です。長男とか次男とか、大事な子ども達は親が跡継ぎにと自分達の手元に置いておいたんですが、一番下の子ども達になるともう勝手に出ていけ、と

言われるんです。それで、彼らは15歳くらいでもうサンパウロなんかに出てきちゃって、何をするかといえば、もう勉強するしかない。親の土地とか遺産を継いだのは上のお兄ちゃんたちだけです。結局どちらがうまくいったかというのはわかりませんが、中にはサンパウロ州の中に大きな土地を持っていて、大学出の弟達よりお金持ち、という場合もたくさんあります。兄が農業でうまくいなくなると、大学を出た弟の方が成功した例もたくさんあるんです。彼らがどこまで教育に熱心だったか。もしそんなに熱心だったのであれば、どうして長男を大学へ行かせなかったのかな、と考えてしまいます。

もう一つは、彼らに言わせれば、例えば「親が熱心に学校へ行かせた、そして自分が大学を出たけれども仕事が見つからなくてうまくいかないで、日本へデカセギに来た」と。すると、子ども達もそれを見ているので、14歳くらいの子どもは、「色々な会社でも、14歳では雇ってくれないので待っているんだ。その間は学校へ行こうかな」とか、16歳になって工場なんかで働いている子ども達は、普通に親と同じくらいの給料をすぐにもらえるので、「別に勉強をする必要なんてない」と言います。親達は日本の学校へ行かせたい。なぜ日本の学校へ行かせたいかという、日本の学校の方が長い時間学校にいられるから。ブラジル人学校は4時間しかないの、日本の学校じゃないと、小さな子どもの場合授業後に子どもの面倒を見てくれる人を雇わなければならないからなんです。日本の学校であれば4時、5時まで平気だから、と。そういう風に考えていて、別に教育を考えているというわけではないようです。だから学校の先生達も、ブラジル人の保護者達はあんまり熱心じゃないと感じるんだと思います。

学力があればいいとは思っていません。今のブラジル人の多くがそう考えています。学歴があっても仕事が見つからないのですから。小さなお店を持ってうまくやっている方が儲かるなどと、生活に必要なお金のことばかり考えてしまって、本を読んだり色々なことを知っていたりしなくても別にいいや、となってしまうと、子ども達もそれを受け継いでいるのだと思います。

そして今、日系人が変わってきた、というのは正解だと思います。サンパウロの日系人は好きだけれども、日本の

日系は嫌いだ、という人がたくさんできています。日本に住んでいる日系人達はものすごく変わってしまっています。ブラジルに住んでいる日系とも違う。もちろんブラジルに住んでいる日系の方がおおらかとか言われます。なんかこっちの人達はピリピリしているな、と私も感じますし、違うなど感じます。

親の教育レベルが、というのは、私が見たケースの中では、多くの親はまだ若い人達で小さな子どもを持っている。この親達がデカセギで日本に連れてこられた人達なんです。もう在日二世なんです。私がインタビューした子ども達の中で、言葉数がものすごく少ない子がいて、ポルトガル語でも言葉の数が少ないし、何を言っているかわからない。時々お父さんも呼んできてもらんですが、そのお父さんの言っていることもわからない。するとそのお父さんは12、3歳の時に親に連れられて日本へ来て、結局小学校もきちんと終えていない人達。そういう人達の子どもがもういるんです。12歳で子どもを産んだという人もいて、だから18、9歳でもう5歳の子どもがいる。ですから、親自身も日本の学校もブラジルの学校もきちんと卒業していないということです。名古屋にブラジル人がたくさん集まっているところがあるんですが、そこにはそういう人達がたくさんいます。だからああいうのを見ると、問題は終わらないのかな、なんて思っちゃいますね。彼らは自分もやっぱり勉強していないで、働いている。でも子どもには勉強させる、というのは、さあ、どうでしょうか。

質問者E:今のお話に関連してですが、そういう人達にはブラジルへ帰るといった概念は全然もうない、ということでしょうか。そういう若いお父さんお母さん達は。

それからもう1点伺いたいことは、アメリカへも随分でも出稼ぎに行っているということなんです。そちらでもこういう定住傾向はあるのでしょうか。それとも日本に来ている人達が、定住傾向にあるのは、やっぱりなんらかの自分と日本との関連付けがあってそういう気持ちから定住傾向になるのか、それともアメリカへ行ったブラジル人達もそちらで定住傾向あるものかどうか、と。その2点についてお伺いしたいと思います。

ナカガワ:アメリカへ行っている人達は時々軍に入る時に、それを要求している人はたくさんいます。アメリカは割と、ブラジル人にとって嫌いな国か好きな国か、どちらか二つに分かれる国なんですね。嫌いな人はアメリカの物は全部嫌い、コココーラも飲まない、マクドナルドへも行かない、という。それからアメリカの何ものが好き、アメリカの音楽は世界一、と言うような人達ですね。アメリカへ行く人達はあるひとつの町からドッと出ているんですよ。サンパウロからなどはあんまりアメリカへ行っていないですね。アメリカに定住したいという人はたくさんいると思います。でももちろん、どこにいる人達でも、「いつかは帰りたい」と思っていると思います。人間の今までの歴史の中で、あるところに住み着く、というのがすごく多いんですよ。だからアメリカにもたくさん残るだろうし、日本にもたくさんいるだろうし。今さっき言いました若い人達も、そういう子どもを持っていても、口では言います。私が聞くと、9割以上の人達は「いつかは帰りたい」と答えます。たとえばそういう人達は、「自分はブラジルのこともあんまり知らないし、だから仕事があるうちはここでやる」というようなことを言います。でも、帰国してもきっと何もできないと思いますから、結局は日本に残ってしまうんじゃないかなと私は思います。

質問者F:お話ありがとうございました。お話の中で、子どもにこんな悲しい思いをさせてまで日本に来た甲斐があるのか、とおっしゃっていたのがすごく心に残っています。そもそも1990年の入管法の改正がこの状況を生み出した原因になっていますよね。この法律では二世、三世は定住ビザで保障されますけれども、四世は保障されていないですよ。そうすると、世代が変わっていったときに、この日系ブラジル人の問題は収束していくだろう、と言う人も一方いますね。この20年くらいの間の日系ブラジル人の問題というのは、まさに日本の政府が作り出した大きい問題だと思うんですが、その辺をどういう風に見ていらっしゃいますか。日本の政府が取った、90年代日本の経済を優先した政策だったと思うんですが、その辺をどういう風に見ていらっしゃるのかなと思います。

ナカガワ:色々違う問題が出てくるんじゃないかと思いま

すね。四世は子どものうちはもちろんそれはこっちにいる日系ブラジル人たちも知っていますし、それまでにどうにか考えている人もいるし。その中で永住権を持っている人達も増えていますよね。そういう人達に日本に住むのか、と聞くと「いつもビザの更新をするのも大変だし」とか、「どこかのホールを借りるのにも日本人でいる方が借りやすいんだ」とか、「永住権を持っているといい」とか言います。そういうやり方もあるかな、と。親が永住権をもらったなら子ども達も来られるのかなと。でもそういう深いことはあんまり考えていないですね。いられるうちは日本にいる、と。

私が今行っているサンパウロ大学の研究室では、日本のデカセギの問題だけではなくて、世界の色々なことについて研究しているんですが、その人達も同じようなことを言っていますね。日本の経済のためにそういう政策を取ったのに、必要なくなったらじゃあ帰すの、と。でもそれは日本だけではないと思います。色々な国でもあるし、そう簡単に解決できる問題じゃないんじゃないかと思います。

アメリカでは適当にやっている。ソーシャル・セキュリティ・ナンバーというものがあって、これを持っていないと病院にも入れないという数字があります。ブラジル人達はその数字を、なんでもいいから適当に書くんですね。すると、他の人の数字と一致してしまうとダメなんですけど、数字がものすごく桁が大きいので、大体他に誰も使用者がいない数字になって、オクケーとなってしまう。このナンバーを持っていることになってしまうんですけど。うまくいくと、その後もその番号を使い続けたりします。そういう風にやっているみたいですね。保険の問題はあんまりなくて。バレーしているんじゃないかと思うんですが、でもわかっている適当だし、こういうブラジル人達がたくさん働いてくれているのも知っていますから、見ないふりをしているんじゃないかな、と思います。

この先は色々な問題が出てくると思います。高齢者の問題とか。60歳以上の人達も随分増えているんですよ。だから今後、この人達が日本の社会でどういう風に生きていくのかなと。もし今彼らが帰国してしまったら、今度は私達が考えなければならぬんですけどね。

質問者G:お話ありがとうございました。お話の中で、デカセギには2つのタイプがあると思いました。一つは、子どもをブラジルに残して親だけが日本で働くタイプ。もう一つのタイプは家族全員で日本に来て、大泉とかで暮らすというタイプ。その比率というのか割合はどのくらいでしょうか。

ナカガワ:はっきりとはわかりませんが、96、97年頃に、私がサンパウロで公立の学校を回っていた頃は、残された子の方が多かったんですね。でも、今はどうでしょうね。たくさんの人達が子どもを連れて来ていると思います。でもそれはほとんどわかりません。領事館などでも、一人ずつにきちんと「子どもはいますか」とは聞くことはできないのでそういうことはなかなかつかめません。でも、あの頃学校の中で大騒ぎになっていたのは「残された子ども達」です。ごめんなさい、データがないのではっきりと言えなくて。

武田千香:これまでの質問に関連して、2点お聞かせいただきたいです。一つ目は、先程、実は教育熱心ではなかったのではないかと、というお話がありました。それでは、例えばサンパウロ大学ではやはり日系人のパーセンテージは高いわけですよね、それだけを見るとやはり日系人は教育熱心なのかな、と思うのですが、それはどのように説明できるのか、ということ。

もう一つは、日系就労者支援センター(CIATE)が何をやっているのか、というところを端的にお話いただければと思います。これは日本政府がお金を出してやっている事業で、先程のお話だと、言ってみると公的ブローカーのような形なのかな、という印象を受けました。だけど、公的ブローカーではそれ程おいしい話ではない仕事を紹介して、少々研修も施しているようなイメージなんですけれども、一体何をやっているところなのか、というところ、この2点をお願いいたします。

ナカガワ:はい。CIATEについては、そうですね、何をやっているのかと言われて当然だと思います。CIATEができたのは、ブローカーを防ぐためです。日本へ行きたいということを防ぐことはできないと考えているんですね。「日本へ行

くな」とは言えない。でも行くなら騙されないで行く方法、日本へ行くのであればきちんと情報を持って行って欲しい、というのがCIATEの考え方だと思います。だからそのためにCIATEができたんだと思います。だからCIATEでは仕事を紹介する時に「地方の小さな町に孫請けのこういう会社があるんですけど」と言う風にきちんと説明する。聞こえはよくないですけどね。他にも給料とか日本で生活するために最低限必要なもの、言葉とか、日本の法律についても説明します。

日系人が日本へ行くこと自体を食い止めよう、と最初は思ったんですけども、みんなに無理だと言われました。「アマゾン河を両手で食い止めることができるの?」と言われて、ああそうかと納得して私も90年くらいにはもうその考え方を辞めました。日本へ行くということについては、もうどうしようもないんですよ。もう決めてしまったことだし、何を言っても聞かないし。でも、行ったらちゃんとやって欲しいし、騙されたりしないで行って欲しい、と。

それから日系人は教育熱心なのでは?という点についてですが、サンパウロ大学でも、以前は学生の10数パーセントが日系人だということもありました。でも、それは日系人が教育熱心だからだ、と言えるかどうかはわかりません。サンパウロ大学やカンピナス大学では、日系人の割合が高いですが、その地域の日系人口も多いんですね。ブラジル全人口に占める日系人口の割合は0、7パーセントですから本当にマイノリティです。ですから、そんな中でサンパウロ大学の日系人率が10数パーセントというのは非常に高い、と思ってしまうのですが、例えば私立の大きな大学なんかは人気がすごく低いんですね。だから、行っている人達は大体サンパウロ大やカンピナス大へ行っていて、他の多くの私立大学には行っている人はあまりいない。そういうことで、よくサンパウロ大学が一番入りたい大学、と言われていたので、「サンパウロ大に入りたければ、隣の日系人を一人殺せ」という冗談が言われます。だから日本人はよく勉強するとか言われて、そっちの方にばかり偏ってしまうのですが、どこにでも本当に大学はいっぱいあります。中には大学でインターネットで試験をして、音楽を流してその曲名を当てた人は学費が何割引になる、とか、そこまでする大学もあるんです。そういうところには日系人は行って

いません。いい大学には行っているけれど、普通の大学にはあんまり日系人はいないと思います。

武田:最初の質問に関して一つだけお願いします。このCIATE経由で日本に来ている人というのは、正直言って全体で何パーセントくらいいるのでしょうか。

ナカガワ:ビザが1ヶ月に4000出されて年間で5万、と言われてはいますよね。で、CIATEに仕事を探しに来る人は1年で100人くらいですかね。全然ダメですね。正直言ってこんな感じです。

司会者:ありがとうございました。最後に一つだけ質問なんです。私が去年スキー場で会ったブラジル人の男の子が、その子はスキー場が開いている時期だけ日本にデカセギというか、アルバイトに来ている、と言っていたのですが、そういうことは学生の中でポピュラーなのでしょうか。

ナカガワ:はい。ものすごくブームになっています。ここ3、4年くらいですね。日系の大学生達が、11月の末か12月の初めにちょうど大学がお休みになるので、日本に来て、3月まで仕事をして帰国するんです。旅費とちよっと遊べるくらいのお小遣いを持って。親もそのくらいの期間であれば学校を辞めることもないしいいか、ということで許します。私が知っている人でも12月の半ばくらいには来るんじゃないかな、と思います。

司会者:その場合、どのようなビザで就労するのでしょうか。

ナカガワ:そこは聞いていないですね、わかりません。でも、きっと観光ビザだと思います。多くのブローカーはそういうことが得意で、上手にやります。だからすぐに仕事が見つかるんです。たくさんの方が来ていて、みんな大学生です。

司会者:ありがとうございました。そろそろ時間なので、もし質問がなければ以上で終わりたいと思います。では次回

は金曜日にもう一度、今度は「日本の学校で過ごした子どもたちが、帰国したときにどうなるか」ということについて、ナカガワ先生にお話いただきたいと思います。

今日はどうもありがとうございました。

5-2.プレ・講演会

キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ氏講演会

「ブラジルに帰った子どもたちのその後」

日時:2006年12月1日(金) 13:10~15:10

会場:東京外国語大学 本部管理棟2階中会議室

講演者:キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ氏

司会者:それでは時間も過ぎましたので、学生多文化フォーラム特別編と題しまして、キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ先生の講演会を始めさせていただきます。今日は、前回に引き続き、せっかく遠方から先生にお越し頂きましたので、本来でしたら明日のフォーラムだけ講演会をして頂く、ということだったんですけれども、学生の強い希望で、日本で生活した子どもたちが、ブラジルに帰ったらどういう風になっていくのか、ということについてお話しくまいます。この話題については、なかなか報告書や本などで知ることができないので、今日は先生に特別にお話し頂くことになりました。それでは、どうぞよろしくお祈りします。

<ブラジルに帰国した子どもたちの様子や課題>

キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ:みなさんこんにちは。帰国した子どもたちの暮らし、ということになっているんですけれども、もしよかったら、残された子どもたちの方も、後で少し話してもいいと思っています。私が今まで研究してきたのは、子どもたちについて大きなグループが3つ、ということを考えているんです。一つは、残されている子どもたち。もう一つのグループは、日本に住んでいる子どもたち、そしてもう一つのグループは、帰国した子どもたち。この帰国した子どもたちは、小さい時に日本に来て、帰国した人達や、あるいは日本で生まれて全然ブラジルを見たことのない人達なんですけれども、学校とか社会に入るのには、「帰国した」という感じじゃなくて、「ブラジルに来た」という感覚なんです。日本で生まれて、日本で育った子どもたちにとっては、こういう子どもたちは、ブラジルの社会で、どういう風に溶け込んでいくかというのは、日本でどういう経験してきたかによって随分変わっていくと思います。どんな学

校に行っていたか。それから、日本のどこから帰国しているか。何歳で日本に来たか。それから、日本ではどういう風な生活をしてきたか。どれだけ日本語ができて、ポルトガル語ができるか。それから家族も、どういう家族で育ったかとか、色々なことで随分変わっていくと思います。日本で生活していても、各地域では、ブラジル人学校がなかったところに住んでいたとか、あるいは、ブラジル人学校へ通っていたとか、家族がしっかりしていたとか、家族がバラバラになってしまったとか、それでまた色々子どもの成長も変わっていくということです。多くの子どもたちで、まだ小さい時に帰国している子どもたちというのは、日本で色々な問題をかかえています。例えば、日本の学校で「発達障害を持っている子どもたち」として扱われていた子どもたちなんかもけっこう多くて。英語では Attention Deficit と言いますよね、ブラジルでは TDAH と言いますが、ここでは ADHD と言うような子どもたちとか、そういう風に診断されたという子どもたちの中で、たくさん子どもたちはそういうケースを持っていないんです。本当はこの ADHD というのは神経から来ている問題なので、時々集中できる、時々集中できない、ということはありません。神経の問題なので、例えば足が悪くなって神経がやられたということになる時には、時々動いて、時々動かないということはありません。だから、学校では集中できなくてもテレビゲームの時には40分でも2時間でも遊んでいる、という子どもたちは、絶対 ADHD のケースではないんです。でも、そういう診断を受けて、そういうお薬なんかも飲んでいる子どもたちなんかも帰国している。そういう場合は、この子どもたちが例えば「障害者」として扱われていた子どもでも、サンパウロに帰ってきた時には、私たちがまた全部やり直しというか、それは違うんじゃないか、もう一度家族の思考とか、この子どもを障害を持っている子どもとして扱わないように、とか指導する。また、なかなかうまく学校に慣れなくても、先生達には「色々な事情があるからこういう状態になっているけれど、これは病気ではないし、もちろん環境で作られたものだから、もっといい環境を作ってこの子を受け入れて欲しい」とかいう指導などもしてみました。中には自閉症だと言われている子どもも結構多い。だけど日本に住んでいる子どもたちで、日本人の子どもたちの中に自閉症の

子どもがそんなにたくさんいるわけない、ということで、今回、私も愛知県内の団地へ行ってきたんですけれど、ある小学校で、1クラスに18人いたクラスなんですけれど、7人も自閉症の疑いがあるということで、これは絶対にありえないんじゃないかと。見たところ、私がインタビューしたのは5人なんですけれど、その5人とも自閉症ではなくて、もっと親密に子どもたちのことを見てあげてほしいなあ、という感じがしました。帰国する前から親に「あなたは自閉症の子どもを持っています。」とか言うと、やっぱり親も大変ですし、子どもも特別扱いにされても気持ちよくないと思います。そういう子どもたちは結構帰国しています。そして、じゃあそういう診断があったからといって特別な教育を受けられるわけでもなく、普通の学校で、そういうケースを持っている子どももいるんですけれど、そういう子どもたちにも特別の指導とかはしてなくて、ブラジルに帰国してからやっと私たちがそういう指導をしているというケースがたくさんあります。

それから、もう一つは言葉の問題ですね。母語を忘れてしまった子どもたち。帰国して、日本語しかしゃべれない子どもたち。その日本語もちゃんとした日本語ではありません。まあみなさん、先週、私もこちらに来てから見たんですけど、NHKで「Double Limited」というプログラムをやっていて、そこではDouble Limitedという、日本語も母語もまともにできない子どもたちのことを話していたんですけれど。その言葉からは、あんまりいい気がしないんです。ブラジルでは、DL という、limited という言葉は、「できない」という意味。「今できない」じゃなくて、「もうできない人」という感じがするので、それが「double」だったらもっとひどいなあという感じがして。言葉ができないというのは、あと何にもできないじゃなくて、あくまでも「日本語ができない」ということですよね。そこをやっぱりよく考えて把握しなきゃならないんじゃないかと思います。で、こういう子どもたちが帰国して、一番簡単にブラジルの社会に溶け込むというか、一番先に自分のストレスを解放するためには、なかなか両方の文化や両方の言葉を上手に持っていき、というようなこと、もちろんそれが conflict にもなります。conflict がある時には、それをどういう風に解決したらいいか。もちろん一番いい解決法はその両方を自分の中で交渉してまとめて

いくことなんですけれど、子どもたちの場合はそういうことがあんまりうまくできなくて、どっちかを切り捨ててしまう。だから、帰国してたったの2日で日本語を全然覚えていない、忘れてしまったっていう子どもとか、日本で何をしていたかも全然覚えていない。「どんな歌を歌っていたの?」、「どんなことしていたの?」と言っても「いや、覚えていない」という子どもたちと、それからもう一つは、「こんな国は嫌だ」、という子どもたち。「ブラジルの音はうるさいし、道は汚いし、電車はうるさいし、何々が…」で「ブラジルは大っ嫌い」「食べ物は旨くないし」とか。ですからブラジルは嫌で、日本へまた戻りたいという子どもたち、その2つのグループがはっきりと見えました。そして、もう一つはアイデンティティの問題。それは、ブラジルに住む日系の人達も同じだと思うのですが、この子どもたちはアイデンティティの問題をもっと深く持っているというか。特に日本で生まれた子どもたちは、さっき言いましたように、ブラジルへは「帰国している」とは感じなくて、「全然知らないところに来ている」と感じるということなので、自分が日本人だと思っているのに、親は「日本人じゃなくてブラジル人なんだよ」ということになるんです。そして帰国してブラジルの子どもたちを見て、「あれ、自分と全然違う。自分はブラジル人じゃない。」と思ってしまうんです。そこで「じゃあ自分は何者なんだろう?」「日本人でもなければブラジル人でもない」というので、自分のアイデンティティを作り上げるのにもすごく難しい状態におかれていると思います。

まあ、ブラジルの日系社会の人達も似たようなケースを持っていると思うんですけれど、もちろんブラジルではたくさんの方々が来ているんですけれど、一人ずつ、三世でも四世でも、ドイツ人系の人達は「alemão」と呼んでいますね。で、日本系の人達は「日本人」。ですから三世でも顔さえ日本人らしければ、「この人は日本人」と。あるいはハーフの人達でも日本人らしい何かを持っている時には、その人は日本人。別に差別という意味ではなくて、区別するためにドイツ人、スペイン人、イタリア人、日本人と呼ぶ。でも日本人と中国人と韓国人の区別はあまりよくつかないようです。よく私もブラジルで言うんですけれど、「アジア人」と呼ぶ。そしてまだサンパウロなんかでも、アジア人を一人ずつ区別できないだけじゃなくて、一国ずつ、各国が違う

文化を持っているんだということもあまりよくわかっていなくて、「アジア人はみんな同じ」とか考えちゃったり。さっきもお話していたんですけど、もう 15 年くらい前までなんですけれど、「黒人の文化」といって一括りにしちゃうんですけど、黒人といっても、アフリカの色々な国から来ている人達なので、各国の文化が違う文化を持っているというのをはっきりと深く考え出したのは、この 10 年くらいのことだと思います。で、まだアジア人のことは「アジア人」と言っている。日本のことはけっこうよく知っていて、いくつかに区別をつけることはできるみたいなんです。例えば食べ物とか。お寿司屋さんへ行ったら、これは日本の食べ物だとか。品物なんかも、日本製と言って喜んでる。日本製はいい物だとか思っちゃって。そして、今こっちはどうだかわからないですけども、ブラジルに入っている made in China、色々な物で made in China と書いてあると、これは駄目だ、すぐに壊れる、とか。それにサンパウロでは中国人、中国人の二世でも三世でも、中国マフィアといって、一番今警察でも大騒ぎしているのは中国人の人達がコンピューターのソフトとかゲームのソフトとかをたくさんコピーして安く売っちゃうということがたくさんあるので、「こういうことをするのは中国人」だとか、そういうのがサンパウロの人は考えているんじゃないかなあと思います。そこで二世の人達も「日本人、日本人」と呼ばれて、日本人という扱いをされているので、自分は日本人じゃないかなあと思っている人達もまだたくさんいると思います。そしてそういう人達が日本へ来た時に、初めてははっきりと「自分は日本人じゃない」ということを感じる。大人でさえもそれを感じているんですね。だから帰国した子どもたちなんかはそれをもっと強く感じているみたいです。

そして子どもの発達を考えてみると、帰国した子どもたちは、言葉とかの問題で発達がちょっと遅れているなっていうような感じがするんですね。日本では何歳かによって学年が決まるんですけど、ブラジルの教育システムでは、その学年の能力を持っていないとなかなか入れない。例えば、ブラジルで高校へ通おうと思って帰国している子どもたちとか、15 歳くらいの子どもたちです。これが一番大きな問題じゃないかなと私は思っています。一つは、母語ができたとしても、高校に入る能力を持っていない。言葉に

ついても、それだけの言葉もできていない。すると、言葉がある程度わかかっていても、日本で中学を卒業してきたはずなんですけれど、それだけの学習内容を知っていない。数学にしても、簡単にできるはずの数学ができない。となると、帰国してから先生達は、「6 年生とか 5 年生に戻った方がいいんじゃないの？」と言う。それから、私立の学校だったら、絶対に高校に入れないとか。やっぱり 6 年生ぐらいの程度しかないんだから 6 年生に帰らなさいとか 5 年生に帰らなさい、と。そうすると、子どもたちはものすごく怒っちゃったりします。これは日本の学校を出た子どもたちだけじゃなくて、ブラジル人学校に通っていた子どもたちも同じです。ブラジル人学校へ通っていたからといって、ブラジルに帰ったら、そのまま続けられると思っている人達もたくさんいると思うのですが、そうじゃないんです。こっちのブラジル人の学校のレベルはすごく低くて、帰国すると証書を持ってきたとか何とか言うんですけど、それは形だけで、結局はそれだけの能力は持っていないというのが、たくさんの子もだだと思います。それと、もし歳が 12 歳じゃなくて 15 歳だったら、3 ヶ月間 6 年生に入ってがんばってみて、大事なことだけ取り上げて、これだけは知っておかなきゃいけないっていう点をよく勉強して、あと 3 ヶ月、4 ヶ月で、7 年生のテストをやってみる。それでできたらブラジルのシステムでは、OK なんです。4 ヶ月目からは、7 年生に入れる。だから、一生懸命勉強して、言葉もまあまあ出来ていれば、1 年、2~3 年くらいで追いつくことができます。でもなかなか言葉がちゃんとできているケースはないというわけで、あんまりうまくいっているというケースは見られないんです。いくつかの学校では、じゃあ高校に入りたいんだったら、高校でもいいやといって入れているんですけど、高校 1 年生をがんばってやっても、最後には落第してしまう。1 回落第して、また学校へ通って、2 回落第しちゃうと、子どもたちも嫌になって、3 回目は嫌だと辞めてしまう。そして、私が思うには、やっぱり同じことを 2 回、3 回とやっても、基礎ができてなかったら本当にできないと思うんですね。だからそのところは、ブラジルの先生達も全然わかっていない。この歳の子どもは、これだけのことをできなきゃいけないんだからと言って、できなかったらばつと落第させるっていうようなことをやっているの、

まだまだそういう先生達にもたくさん声をかけて指導しなきゃいけないと思うのですが。こういう活動も、市とか州とか団体とか、あまり誰もやってくれないので、ボランティアの人達だけを集めて私たちがわあわあ騒ぎながらやっているんですけど、本当に力不足というか手が回らない。いくつかの学校には行けたとしても、帰国した子どもたちって本当に様々なんです。前に見せましたよね、ブラジルの地図を見せて。帰国した子どもたちって、本当にもうブラジルのどこにいるのかわからない、サンパウロ市内にあるところはまだ私たちが行けるんですけど。やっぱり日系社会というのはブラジルの人口の 0.7% ということで、多くの学校では、各クラスに日系が一人いるかいないかくらいのプロポーシオンですね。だから、帰国した子どもが学校にいたとしても、一人とか、この学校には一人もいない、というのがサンパウロ市内の学校の状況だと思うんです。だから、サンパウロ市内には小学校が 470 校くらいあって、なかなかその全部を回することはできないんです。その間に辞めてしまっている子どもたちもたくさんいるんじゃないかなあと私は思うんですけど。そういう子どもたちは、見つけて話ができ子どもたちには、「じゃあどうするの？」と言うと、「日本へ帰る」というような答えなんです。今ものすごく流行っているのは、11 月の末あたりから日本へ来て、アルバイトで 3 ヶ月働いて帰国する。それを望んでくる人達は大体が大学生なんですけれど、それにまじって学校に行っていない子どもたちも来ていると思います。これはさっき言いましたように、見かけはバイリンガルというような問題なんですけれど、本当にどっちの言葉もよくわからないということなので、何を言っているのかわからない、ものも言えないというような子どもたちがたくさんいます。むしろ、ほとんどじゃないかなあなんて思うんですけど。

さっきも話したんですけど、ブラジルに住んでいるたっさんの二世、三世は、あんまりそういうことはなかったんです。二世なんかにはたくさんそういう人達がいて、家の中では日本語をしゃべっていたんですけど、日本語学校というのはブラジルにそんなにたくさんあるわけでもないし、日本語学校に喜んで行っている子どもたちというのはあんまりなくて。私も 6 歳までは日本語しかしゃべらなくて、小学校に上がってからやっとポルトガル語を勉強するようになり

ました。12 歳くらいまでは日本語学校へ通ったんですけど、「どうしてこういうことしなきゃいけないの」「なんで日本語を勉強しなきゃいけないの」とか思いながら行っていました。きっと私と一緒に通っていた子どもたちなんかみんな、「どうして日本語を勉強しなきゃならないの」と思いながら行っていたんだと思います。そして、こっちでポルトガル語を勉強している子どもたちなんかは同じことを言っています。「どうしてポルトガル語を勉強しなきゃいけないの？」と。だから、何年通ったとしても、それほどたくさんは通わないで、結局は辞めてしまう。それからどっちの言葉も日常生活には不自由しないくらいの言葉を持っていると思うんですが、やっぱり日本語もポルトガル語もちゃんとできない。そして今はもうお年寄りの二世達も、同じように、日本語もポルトガル語も読めないし書けない、という人達がたくさんいるんです。だから移民をしたことによって起こったこと、日本人がブラジルに移民して 2008 年で 100 年になって、もちろん時代も違うんですが、色々なケースは、ブラジルで起きたことが日本で同じように起きているなあということを感じます。

ブラジルでポルトガル語をちゃんと勉強しようと思っても、ブラジルでポルトガル語を早く教えるシステムがなくて、ポルトガル語はブラジル人に教えるものなのか、あるいは外国人に教えるものなのかどちらかなのです。ですから、ブラジル人に教えるポルトガル語は、もちろん普通学校でやっている、そして外国人に教えるポルトガル語は日本でみなさんが英語のクラスに通うのと同じように、週に 2 回とか多くて 3 回、1 時間ずつ。こういう形でポルトガル語をすぐに覚えようと思ってもこれは無理ですよ。何年もかかっちゃう。子どもたちはそれをあまり望まないし、親もこんなにぐずぐずしてられない、ということで、そういう教室にも通わない。だから、この子どもたちは、ポルトガル語を毎日一生懸命教えるというシステムは全然できていないので、大変だと思います。そしてその間、例えばポルトガル語がちゃんとできなかったら、学校へ行かないから学校の友達がいなくて、閉じこもっている子どもたちが時々いて、表へ出るのもちょっと不安になっています。まあ引きこもりじゃないんですが、恐ろしくて、言葉が通じなくて、お友達がいなくて、作りたくても誰も相手にしてくれないという子どもも、多

くはないですけれどもいます。そういう状況におかれると、結局はすぐに「日本に行きたい」ということになるんだと思います。

帰る状況について少しお話したいと思います。私たちボランティアの人達の中で、これは一つ大きな問題だと思うのですが、サンパウロでも、日本語もポルトガル語もちゃんとしゃべれる人、例えば私は(専攻が)臨床心理学で、心理学の大学を出ているのですが、こういう心理学とか、教育学とか色々やっていて、日本語もしゃべれて、日本の色々な状況を知っている人というのは本当に少なく、そういう人達でボランティア活動をやろうとすると市内で探しても4~5人しかいない。だからこういうプロジェクトを大きくやっていこうと思っても、なかなか人が集まらないです。幸い「KAERU・プロジェクト」は、私と一緒にサンパウロ大学で色々やっていた人達が3人と、あと他に2人見つけて、その5人で、見つけた子どもたちに対して行っていたプロジェクトです。この子どもたちは、はじめは私のクリニックに来た子どもたちだったんですね。子どもたちがクリニックに来るというのは稀で、やっぱり帰国した子どもたちで臨床心理学に来ない子どもたちはたくさんいるんじゃないかなど。それから、サンパウロでは臨床心理学って値段の安いものじゃないので、デカセギの人達はみんなそういうところには行かないんじゃないかと思って。サンパウロでは小学校はみんな公立ではなく私立の小学校なんです。私立の学校を回ってみて何人か子どもがいたので、そういう子どもたちに対してやったのがこのプロジェクトです。これは、1週間に1回、土曜日だけ集まって、カウンセラーではないのですが、1回2時間半、この子どもたちが話し合ったり遊んだり、色々感じていることとかを表現できるようなスペースを作りたいという形でやっていました。そこで一番出てきたのは、ブラジルの社会に溶け込むには、文化が違い過ぎるということ。何を見ても、自分が今までやってきたことと全然違う、と。それを見つけて出して色々そのことについてみんなと話をしました。そして一番大切だと思ったのは、一つは、文化が違うというのはどっちが正しいということではないということ。こちらの方(日本)に来た時にはよく聞くんですが、先生達が、「これはいけない」、「これが正しい」、「これじゃ

あないでしょう」、「こうじゃないでしょう」、「こうするのが当たり前」、などと考えて、子どもたちに言っていたみたいなんです。子どもたちは、今まで自分がやってきたことはみんな間違っていて、正しいことを日本で学んだ、と。日本で正しいことを学んできたのに、今度帰国したら、自分が正しいと思っていたことがみんな間違っている。だから子どもたちには、「違う」ということは、絶対に正しいとか間違っているかじゃなくて、ただ違うんだと。一人ずつ全然違うやり方をする、違う考えを持っているんだと。文化が違うというのは、どっちの方がいい、ではない。この判断は大きくなってから色々知った上で、自分で好きなものをひとつ選ぶのだと。文化の違いは日本とブラジルだけではなくて、色々違う。サンパウロにはラテンアメリカの人達もたくさんいるので、こういう色々なものを学んで、自分に一番適当だと思う方向を選んだ方がいいんじゃないの、というようなことをプロジェクトではやっていました。

そしてやっぱり、ブラジルの社会でうまくやっていくために一番大切なことは、強制的な色々な動きじゃなくて、子どもがあつと驚いたり、この社会でやってみたい、何か少しでも好きになれる、そして覚えたいと思った時に初めてできるものであって、覚えなさい、やりなさい、とかじゃ効果がないような気がします。これは、ブラジルに今いるボリビアやペルーの子どもたちなんかもそうなんです。ポルトガル語を覚えるためには、ガンガン教えるだけじゃなくて、その子どもたちが本当に覚えようと思った時に初めてできるものだったと私は思います。そして、今までやってきたことの中で、ボリビアの子どもたちやペルーの子どもたちのためのプロジェクトに時々参加したりもするんですが、やっぱりそこで感じるのは、子どもたちが「この国でやっていこう」と思う気持ちが芽生えてこないうちは、どんなことをやってもあんまり効果がないようで、その子どもたちがやろうと思った時には、すぐに効果があらわれるような気がします。

<ブラジルに帰国した親たちについて>

そして、子どもたちと共に帰国した親ですけれども、自分達も帰国してバタバタしているんで、子どもたちにあんまり気を遣う余裕も暇もありません。そういう親の話も聞いてあげて、親のお手伝いもできたら、子どもたちにもすごくい

い効果があるのではないかと思ってやってみたんですが、けっこうよかったと思うんです。自分が嫌だったことや、大変だったことを落ち着いて聞いてくれる人がいて、一緒に考えましょう、と言ってくれる。お友達ではなく、もちろんこれは臨床心理学の役割だと思んですが。話をちゃんと聞いて、その人の立場になって一緒に考えるということをする、段々落ち着いてきて、じゃあ子どものこともどうしようかなあ、と一緒に考えることになっていくんです。やっぱり自分が大変な時には、あんまり子どものこともよく考えられないというのが親なんだと思うんですね。そして残念ながら、学校とか日系社会の中でさえも、こういう帰国した人達を受け入れるシステムは全然ありません。このごろは教育問題については、けっこう考える人達も出て来ているんですけど、よく、ブローカーの問題とか、保険の問題とか、毎年入ってくる(デカセギがブラジルへ送る)お金を、本当はどういう風にして使ったらいいのだろうかとか、帰国した人達はどのような仕事に就けばいいのかなどを考えている人達はけっこういるんですが、子どもたちのこととか、親の気持ちなどの心のケアに関しては、あまり考えている人がいないんです。これは、考えたくないからではなくて、あんまりいないからです。日系社会は、何故だかはよくわからないのですが、社会学や教育学とか心理学に進む人があまりいない。大体の人達が一番なりたいのはきつとお医者さん。そして次は工業のほうに進んでいく。物理とか化学、数学の方が得意なので、ブラジルの人達は *matemática* とか *física* とかいったら日本人に聞けば分かるというような形で、日系の人達はそれが得意というような感じになっています。社会学で「これはこうとは決まっていない」、「これはこうかもしれない」、「こうでもあるかもしれない、ああでもあるかもしれない」というようなことは面倒くさいのか、嫌だと言って、2+2 は 4、というようなはっきりしている方が好きで、そっちの方にみんな行っちゃうので、ボランティアも少なければ、そういうことを勉強している人も少ないです。だから、心とか子どもたちの教育とかを考える日系の人ってものすごく少ない、それが日系社会です。私が言えるのはサンパウロのことなんですけど、サンパウロの日系社会についてです。

そういう状況で、じゃあ毎年どのくらいの子どもが帰国しているのかなという、本当につかめません。2003年に私が名古屋にしばらくいた時には、「えー、サンパウロ州だけでもつかめないの?」と言われたんですけど、サンパウロ州が大体日本全国くらいの大きさなので、本当につかめないんです。サンパウロ市内なら、まだ見つけることができるんですが、でもこの前ビザを出している領事とたまたま一緒に食事をしたので「ビザはどのくらい出ていますか?」と聞いたら、1ヶ月に4000のビザを出していますよ、と。今は三世のビザは取るのがすごく難しくなっていて、結局は犯罪歴があるかどうかなど、色々な審査をしているんですが、それにもかかわらず、平均4000、1年に5万くらいのビザが出ていますよと言われました。でも数字の増加を見ると、1万数千人しか増えていない。でも日本で3000人~4000人くらいは出ていると。じゃあどこにいるの?と。帰国している人達はけっこういるんじゃないの?ということになりますよね。3万人なら3万人、2万人だとしても帰国する人がいたら、その中の大体20%は学校へ通っているはずの年頃の子どもたちなんです。じゃあどこに帰っているのかなあと思うんですよね。

みなさんもご存知だと思うんですが、運悪く、帰国した人達の家が強盗が入ったことがあります。一つ大騒ぎになったケースは、強盗が家族全員を殺してしまって、赤ん坊だけ残ったという事件です。しかもそれは、一家が日本から帰ってきたその日か次の日でした。犯人はブラジル人だったんですが、ブラジルのマスコミにもものすごく叩かれました。でも、そういうケースが出てきたりすると、こっちにいるブラジル人がものすごくそれを恐れて、帰国してもものすごく静かに過ごしたり、誰にも知らせずに帰国したり、知り合いが誰もいない町に行ったり、といった動きがたくさん見られます。そうじゃなくても帰国した人達を見つけるのは難しいのに、そうなってくると、本当につかめない、というのが今の状態なんです。でも、今まで見てきた子どもたちはたくさん抱えているから、何かしなきゃいけないんじゃないかなということはみんな考えているんですけど、なかなかそこまで手が回らないということですね。

<帰国した子どもたちにしてきたこと>

じゃあ帰国した子どもたちで、日本ででの状況で帰国したときの状況が変わっていくので、じゃあ日本に住んでいる子どもたちに何かしてあげられないかっていうことを考え出して、2年くらい前から、ブラジルの文化協会の中でも、ISEC(文化教育連帯協会)という名前のグループを作って、そこでは日本に住んでいる子どもたちのオリエンテーションとか、帰国したときにもっと気持ちよく田舎に帰ってこられるような状況を私たちにも作れないかなという気持ちでやってきているグループです。一番先に私たちが作ったのはガイドブックです。そのガイドブックの内容は私が書いたのですが、日本の教育のシステムを知らないで来るブラジル人は多いと思うんです。システムを知らないだけでなく、転々と転校したり、仕事の都合で転校したり。一端帰国することを考えるときには、子どもたちの学校がいつ休みになるのかとかは考えずに、切符が一番安いときにブラジルへ行くと言って、簡単に学校を辞めたりするんです。そういうことをなくすために、学校は何月から何月なんだから、帰国するのならいつがいいと書いたりしています。帰国してからも、日本では学校へ通ってなかったからもう駄目だと考えて、学校に行こうともしない人たちがいるので、ブラジルでは日本でブラジルの学校へ通っていた人達にはこういう受け入れがありますよ、日本の学校へ通っていた場合はこういうことができますよ、もし日本で学校へ通ってなくてもこういう方法がありますよ、という風にオリエンテーションのついたものを出しています。ブラジル人は読むことが嫌いなので、テキストだけで書くと読んでくれないので、漫画の本みたいにサンパウロでも配っています。本当にどれだけ読んでくれているのかよくわからないですけど、結構みんなで「読みなさい、読みなさい」ということになっています。たくさんの方は、ただの漫画の本だと思って持っていきんですが、多くの人達が読んでくれたらいいなあと思っています。去年10月にそのグループで教育国際シンポジウムをサンパウロで行いました。日本からも、ブラジルでポルトガル語を勉強している人達も、たくさんの人達が来てくれました。簡単な論文をCD-ROMにしてみんなに配りました。もう一つは、シンポジウムで話したことをレポートにして、日本語とポルトガル語にしたものもできて

います。それぐらいしかまだできていないんですが、毎年たくさんの人達が日本からブラジルへ来ます。研究者とか大学の先生や大学院生達です。こういうテーマに興味を持った人達が来たときには会うんですが、その時に色々なアイデア交換とか、私たちができることについての意見交換を行います。

子どもたちは小さいときから、絵本とか簡単な本は結構読むんですね。だから、読む習慣をつけてほしいな、と思います。もちろんブラジルでもそうなんですけれど、こっちでも。例えば、大きな団地でそこに図書館があったとしても、入ってみて、「ポルトガル語で書いてある本はありますか」と聞くと、「ありますよ」と言うんですが、図書館自体はものすごく大きいんですが、これっぽっちしかないんですよ。だからもっとあるといいなあと思います。ブラジル人の子どもたちが簡単なポルトガル語でも読めるように。段々と読んでいけば、それがよくなっていくんじゃないかなあと思って。けっこうブラジルにあるんですね、ブラジルで子どもたちにいい本とか。

私がよく自分の子どもに買っていた本は、夜寝るときに暗くすると嫌だという、『暗いのが怖いお星様』とか、トイレの訓練ができなくておねしょする、『おねしょをする何々君』とか。結構面白い本はたくさんあるので、こういう本を子どもたちに読んで欲しいなと思うんですね。それから、前もそうだったんですけど、今回も愛知県で出会った1年生に子どもたちとかと話をしている、「おうちにどんなおもちゃを持ってる？」と聞くと、みんなテレビゲームだけ。「じゃあお友達と遊ぶゲーム、サイコロを転がして遊ぶようなゲームは？」と聞くと「ない」と。1人の女の子が私に「○○のお人形持ってるよ」と言うので「それだけ？」と聞くと、「それだけ」と。おもちゃも持っていない。私は、遊ぶことはものすごく大切だと思うんですね、子どもは遊んでいる時に頭で考えている色々なことを整理したりする。サンパウロで私はよく使いますが、友達と遊んでいる時に、ルールを守らない子どもに対してものすごくルールの多いゲームを持ってきて、守らなきゃだめ、と。でも遊びたいから子どもはルールを守る。集中力のあまりない子どもには、細かい色々なものを使っているゲームとか。もっと大らかになっしてほしい子どもには、粘土とか、ベタベタになっても気にし

ないようなゲームとか。色々な方法がある。ただ遊ぶんじゃないで、各子どもに「ここを伸ばしてほしいな」と思うときに、ブラジルでは brinquedos pedagógicos というんですが、教育を目指しているおもちゃ。そういうおもちゃを持ってほしいと思うし、友達関係も作ってほしい。今回は団地の人達にも声をかけて、何か小さなスペースでもいいんだけど設けてくれないかなあ、と言いました。おもちゃとか、本とかを持ち寄って、私も手伝うよ、ということも考えられるし。そういうスペースが、ものすごく大切なんじゃないかなと今回思いました。帰国した子どもたちに対しては、今はほんとに小さなスペースなんですけど、文化協会の下の方に部屋を設けてあります。今のところ、そこで、ポルトガル語を教える人たちがボランティアとしてほとんど毎日来ているのですが、これをもっと大きくしたいです。ポルトガル語を1週間に1回か2回教えるようなシステムじゃなくて、本当にポルトガル語を早く覚えてほしい。そしてあとは、できるだけ帰国した子どもたちに呼びかけるようなことを、何か一つやっていたいなあということもみんなで考えているのです。さっき言いましたように、なかなかボランティアで日本語を教える人達が集まらないので、今ちょっとつまづいている状態です。でも、帰国した子どもたちについてはそのぐらいだと思います。もしみなさんから質問とかありましたらできれば答えたいと思います。

<質疑応答>

司会者:では帰国した子どもたちについての質問がある方はお願いします。

質問者:先程日本の学校で、発達障害ではないかと言われている子どもたちが多いという風に伺いましたが、その子どもたちが帰った後、年齢にもよるでしょうが、その後のケアはちゃんとしているんでしょうか。ケアによってそういう状況というのは直ってくるものなのかどうか。それから日本で学力的にちゃんとやっていた子どもたちの場合も、帰ってからちゃんとやれるものかどうか。追跡調査はあまりできていないというお話でしたけれども、もしご存知でしたら伺えればと思います。

ナカガワ:うまくいったケースというのはあまり見てないです。だけどこれはきっと私の問題なのだと思うのです。私の仕事にも絡んでくるので。臨床心理学を求めてくる人達で、日系の場合はもう大きな問題を抱えている人達なのです。ブラジル人の場合は些細なことでも結構来るんですが。私が感じるのは、どこへ行っても、自分が何をしているか何も言わない場合は、割と色々なことが聞けるのですが、誰かに紹介される時は大体「この人は臨床心理学の人です」とか言います。そうすると、大体心理学的なことしか聞かなくてこないんです。だから、「この人は弁護士です」と言うと、法的なことがポンポン出てくる。「この人はお医者さんです」と言えば、病気のことがダダダっというように。です。で、「あー、私うまくいっています。」というのはあんまり聞かなくてこないんです。これは「ない」ではなくて、「私に聞かなくてこない」、「私のところには来てくれない」ということなんです。私が学校を回ってもそうなんです。学校の先生達に話を聞くと、うまくいっている子は目立たないんです。目立つのは問題を起している子ども。この子は大変、あの子は大変、この子は発達障害を持っている。でも、こっちでもそうなんです。学校へ行っても、ブラジル人の子どもでうまくいっている子というのはあんまり見せてもらえない。この子は問題だからちょっと見て、とか、そんなケースばかりしか見ていないような気がするんです。だからこれは、あるとかないとかではなくて、私が見られない、見えないということだと思うのです。

こっちでちゃんとやっていて、帰国してもちゃんとやっている人というのはあんまり聞かないですね。公立とか州立大学で良いといわれている大学と同じかちょっと下くらい、私立の大学でも良いといわれている大学の下には、私は口が悪いからいつも「行っても行かなくてもいいような大学」と言っているんですが、そういう大学があります。大学に行くのがすごくブームになっていて、みんなが大学に行きたい。ましてサンパウロからちょっと外れた公立の学校へ通っていた人なんかは、なかなかサンパウロ大学とか公立の大学には行けなくて、こういう学校に通ってしまうのです。そういうところに帰国した人達がどのくらい入っているかはわからないですが、ただ時々、サンパウロ大学に入るとは聞かないですが、マッケンジーという私立の大学、

いい方とは言えないけど、リミットくらいにあたる大学なんです。そこに帰国した子どもが入ったという話は 2 回程聞きました。

そして、こっちでもひとつ聞いたケースがあります。日本の私の友人で映画を作っている人がいます。その人が作った DVD にも取り上げられている女の子で、日本の学校に慣れるのがものすごく大変で色々なイジメもあったけれども、大学に上がりたいと思って、先生に慶應大学に入りたいと言ったら、先生には「絶対無理」と言われたけれども慶應に入ったという女の子がいます。普通の生徒とは違って、夜はずっとアルバイトをして昼間は学校へ通って1日3時間しか寝ていないと。彼女が言うには、「大学の中でもいつも1人で寂しいのだけど、大学は頑張ってるっていい」と。時々こういうようなことはあるし、何人かは奈良の天理大学のポルトガル語学科に3人くらい通っている、というような話も聞いています。だから、日本の中でも大学にも何人か行っていると思うんです。この前ソフィア大学の教授も「1人いるよ」と言っていたので、何人かはいれると思うんです。でもそれは6万人の中の数人ということなので、そう簡単に大学に通っているとは思えないです。

司会者:他に質問はありますか。

質問者:大変興味深いお話を伺わせていただきましてありがとうございます。最初の方のお話で、帰国した子どもたちが、コミュニケーションはできるんだけど学習についていけないために、学年を落とされたクラスで勉強しているという話を伺いました。その時に、日本で外国人児童生徒というのは、やはり生活言語はできるけれども、学習言語ができないために学習についていけないという状況があって、本当にちょうど裏返しになった形で、同じ状況が起こっているということを大変興味深く思いました。その子どもたちが日本で第二言語としての日本語で勉強してきた学習内容、というものが、ブラジルに戻ったときに、ポルトガル語がちょっと至らず学年についていけないとしても、第二言語として学んだ内容とか知識について、それが学習面で反映されないのだろうか、という点をお伺いしたかったんですけれども。

ナカガワ:はい、それは違います。ブラジルではポルトガル語ができなくても、内容ができればオッケーとなっているんです。だから算数でも、ある問題があって $X=2$ 、と答えが出てきて、解決できたらそれでオッケーなんです。言葉ができなくても、でもできないんです。たくさん帰国した子どもたちは、「簡単じゃない、ここここを切ればいいだけじゃない」とか言っても、「いや、それ見たことない、知らない」とか。ですから、言葉の問題だけではなくて、本当に簡単な問題も答えられないのがパターンなんです。サンパウロ州でも、どこの学校へ行っても、ポルトガル語がしゃべれないのはまあよし、歴史とか地理もなしね。じゃあ算数をやってもらおう、といってやらせようとするんだけど、それもできないんです。

質問者:結局、日本で算数だとかも十分に身につかないまま帰国してしまっているということでしょうか。

ナカガワ:そうですね。ですから、私が愛知にいたときにも考えたんですが、取り出しとか、国際教室とかにいつも出て行く子どもがいるんですが、その間に何をやっているかという、日本語です。でも、算数もよくわかっていないまま中学を卒業している人もなんかたくさんいるような気がするんです。

質問者:そうですね。今それが非常に問題になっていて、結局、もうちょっと内容重視の指導をしていかなければいけない、教科内容にもっと踏み込んだ形の日本語の学習支援ということが考えられているんですが、結局帰国していったお子さん達は十分には学習内容が身につけていないまま帰国されてる、ということなんですね。

ナカガワ:はい。アメリカから帰国した子どもというのはあんまり見えないんですが、そういう子どもたちとはちょっと違うんですね。彼らは例えば化学でも、「CO」と見ると、言葉がわからなくてもアメリカから帰国した子どもはパパッとやっちゃうんですね。この子は内容は知っている、というのが見られるんですが、日本から帰国した子どもにはそれが見られないんです。

質問者:興味深いお話ありがとうございました。私も 9 歳の時にブラジルから来た日系ブラジル人で、今は学生です。先程出てきた、日本で大学に進学した学生についてですけど、そういった方達の大半が、周りに全然ブラジル人や仲間がなくて、もう日本の学校にどうしても適応するしかなかった、ずっと日本で生活してきて、もう母語を忘れるくらいに日本の生活に馴染んで大学まで進んだという人達が、最近結構いるんじゃないかなという風に私は今感じています。大学に入った時に、ブラジルについてもっと知りたいからポルトガル語をもう一度やろうとか、そういう人達は結構いるんじゃないかと思っています。取り出し授業についてのお話が先程あったのですけれども、私も今ブラジル人の子どもたちの学習支援の活動に参加していて、学校によって、とにかく日本語を覚えるのが先決ということで、教科の時間にも取り出しをして、とにかく日本語ばかりの授業をしている人達、国際教室の先生方とかもいます。でもそうではなくて、元々その子達は教科についての知識はある。日本語では理解ができないけれども、元々その知識は持っているのだから、日本語を噛み砕いて、噛み砕いて、教科の勉強をしていけば、時間は日本人の子どもたちよりは数倍かかるけれども、ついていくことはできるんじゃないか、という風に最近は少しずつ日本の学校の中でも変わってきたと思います。まだまだ柔軟に対応できない部分がたくさんあると思うのですけれど。そういった点で、ブラジルに帰った時に子どもたちが馴染めないというのは、私にとって少し意外なことだったのですけれど。ブラジルってどんな子でも受け入れてくれる性質があるんじゃないかなと思っていたので。学習面をサポートするシステムがないために、ブラジルに帰ってもなかなか適応できない、ということになるんでしょうか。

ナカガワ:はい。でも、あなたみたいなケースはそんなにたくさんないと思います。日本でちゃんと大学に通っている人ってそんなにいないと思います。それが一つ。

もう一つは、ブラジルの受け入れは、色々な国から来ている人達に慣れている国なので、そういう点はものすごく気楽でいいんですが、教育に対しては、受け入れるシステムがない。子どもが学校を辞めちゃうんですよね。そういう

システムがないから辞めちゃう。私がブラジルでよく話す時には、「子どもが学校を辞める」と言われるけれども、私はいつも、「排除されているからだ、学校にちゃんとシステムがあれば辞めていくはずがない」と言うのですが、きっとそうだと思います。システムがないから居場所がないってことになっちゃうのですね。友達関係が良くても、やっぱり自分だけが勉強できなかったら面白くない。それから、友達がさっさと上に上がっていくのに自分だけまた落第して残されちゃうというのがあります。ある面では友達がたくさんできていいことだと思うのですが、違う面から見たら、せっかく友達ができたのに、その友達がみんな 2 年生になっても、自分はまた 1 年生。これは辛いことじゃないかななんて思うんです。ですから、本当にこういう子どもも一緒に上がっていかれるようなシステムをブラジルで作って欲しいなと思います。サンパウロ州の教育会なんかには、私たちがなんかはよく行ってわあわあ言うので、「ああ、あいつまた来た」なんて思われていると思います。

やっぱり、「やりたくない」じゃなくて、私が感じるのは、ひとつは「見えていない」。もう一つは日系人が人口の 0. 何パーセントしかいないので、州としてどういう風に取り扱っていくかということです。サンパウロ市内だけでも 470 校といったら、日系人が一人しかいないのにそこにまた先生を送るとか、ブラジル人のことについてもほとんどできていないのに、日本から帰ってきた子どもが一人いるからといって、この学校に何かしてあげようということは、してあげたくてもできない、ということもあるんじゃないかと思うんです。ですから、時々こっちから「こういう風に見たらどうですか」と言うと、「あ、それいいですね」とは言うのですが、あんまりそれ以上は進まないですね。例えば、私が行っているのはサンパウロの学校で、こっちと同じように自分の住んでいるところの近くの学校に通う。でも、サンパウロ州の学校の中で、「CEL」というものがあって、Curso de Língua(言語センター)です。その言葉のセンターというのには、17 人の先生がついていて、その先生は国語の先生達なんです。ブラジル人に日本語を教えている先生、ブラジル人にフランス語を教えている先生、ブラジル人にドイツ語を教えている先生、と 17 カ国の言葉を教えているセンターがあるんです。でも、全校にあるわけではなくて、そういうセンタ

一があるのは、20 校くらいかな。そこで私たちが頼んでいるのは、帰国した子どもたちをそういうセンターがある学校に通わせること。そして、ブラジル人に日本語を教えている先生を利用して、反対に、その先生にポルトガル語を教えてくれるようにしてほしくないかと言うのですが、「あ、それいいね」という風には言うんですが、全然まだ何もできていません。だから、うるさく声をかけにいつも行かなくやいけない。この前の 11 月に選挙がありましたが、政府が変わると政策が全部変わるので、1 月からは全部変わります。だからまた全部やり直しかと思ってしまう。その Partido(政党)は、前の人達をみんな切り捨てて自分達の人を入れるでしょ。だから、ルーラ大統領(注:労働党所属)が再選されたことは、そういう面ではちょっといいかなとも思います。サンパウロも変わったのですが、州はまだ同じ PSDB という政党なので、これならまだいけるかも、と思っっています。時々がらっと変わってしまっって、誰も残らないことがあるんです。今まで交渉してきてやっとここまで来たのに、と思っっても、がらっと変わってしまう時もありました。だから、誰が残るのかな、残る人がいるのかな、とそういうことはあるのです。でも本当に残念ながら、市内でも州でも、国としても、全然何もやっていないというのが現実だと思っいます。

質問者: そういった場合に、日本に来たブラジル人の家庭では、親とかが学校の勉強を見てあげるのが困難であるっという問題があるのですけれど、逆にブラジルに帰った場合は、親がすごく力になれる可能性がすごく大きいと思っるんですけれど、そういうことはあんまり見られないのでしょうか。

ナカガワ: うーん、あんまり見られないです。それに、本当のことを言えば、私たちでも 6 年生くらいまではできても、それ以上の結構難しい物理とか化学とか、自分で座っって一緒に勉強するくらいしか覚えていないもの。だから、うちの息子なんかは「全然手伝ってくれない」と言う。「自分で勉強しな、全然覚えてないよ」とか私も言うんですけど、本当に覚えてないです。自分でも予備校の時にはよくやっったなあなんて思っくらい。だから、ポルトガル語ならまだ見てあげることはできるかもしれないけど、あとの科目は私

だったらできない。だからそういうことを専門にやっっている家庭教師や、現役の大学生をつける人はいるようです。でも帰国した人達の中で家庭教師をつけて一生懸命子どもたちに勉強させたのは、私が知っているのは一人だけで、後の人は家庭教師を使わない。そして、サンパウロ市内には私立で日本語ができる先生がいる、日系人が作っっている学校というのがいくつかあるのですが、結構月謝が高いので本当に何人かしか通っっていません。サンパウロのある学校を作っった先生に「今何人いるの」と聞くと「3 人」なんていう感じで、ほとんど行っっていない。だからみんな公立に行きたいし、残念ながら教育にあんまりお金を使っっていないのは事実だと思っいます。

質問者: お伺いします。ブラジル側と日本側両方の教育に問題が起きた子どもたちの、具体的な社会での問題はもう出っているのでしょうか。ブラジルの方でも学校へ通えなかつた、日本でも学校へ行けなかつたという子どもたちの具体例はもうございますか。

ナカガワ: まだ、まだ出っっていないけれど、そのうち出てくるかもしれないと思っっています。

質問者: どういう風に思われますか、もし両方の教育を受けられなかつた子どもたちがこれから社会に出っって、たくさんの子供が今いると言っっていましたけれども、どのような問題がこれから起きると思っれますでしょうか。

ナカガワ: 今はブラジルでも、ちょっと簡単な仕事に関っしても、高校卒業という条件で募集していますから、きつと仕事がなくっって、たくさんの方が日本を目指って来っっていると思っいます。それからこれから先、もしこういう動きが続けば、あと何人デカセギに来るのかなあと私は考っているんです。ブラジルで日系の人口は 150 万人と言っわれていますよね。その中のもう 45 万人あたりは日本で働いた経験を持っっている人達なんですね。ですから 3 分の 1 はもう日本に来て仕事をしたことがあるっという人達です。ですから、あとどれだけデカセギに新しく来ることができるのかなあというのはときどき考っえるのですが、そんなにいないんじゃないかなと

ある部分では考えるし、もう一つは、そういう子どもたちには後の道がないんじゃないかな、と思ってしまいます。また日本へ行くのかなって。日本の社会で、学問の必要ない工場とかで働く人達になってしまうのではないかなと思うのです。そして、ブラジルの社会で問題を起こすというのは、帰国した子どもたちの中では見られません。時々それが見られるのは、残された子どもたちです。残された子どもたちの中では、ものすごく反抗して麻薬に手を出したり、そこは日本とブラジルの法律の違いだと思うのですが、コソ泥なんかはサンパウロではあんまり大きな問題にはならないのです。強盗とか殺人であればもちろん大騒ぎになるんですが、コカイン数グラムを買うために財布を盗ったというのはあまり大きなことにはならないので、見えてこないんじゃないかと思います。日系社会の中で、ブラジルで犯罪を犯したというケースはものすごく少ないです。私の友人が少年鑑別所でディレクターをやっていたんですが、彼女の話では、30年間ディレクターをしていた中で、ブラジルで日系人が犯罪を犯したケースは6件しかなかったそうです。「じゃあ日本へ行った日系人はどうしてあれほど犯罪を起こすのか」ということについて彼女は論文を書きました。見えていないというのが一つ、人口が少ないのもひとつの理由だと思います。目立たないから。かえって中国人の方が騒がれていると思うのです。

質問者:ありがとうございました。

司会者:他に質問のある方はいらっしゃいますか。先生、ひとつお尋ねしたいんですけども、日本からブラジルに一方通行に帰る子どもたちだけではなくて、何回も来たり行ったりを繰り返す子どもたちもいると思うんですけど、その場合、短期間でもブラジルの学校にいるのか、またそういう場合どんな問題が起きるかということをお話し下さい。

ナカガワ:私の知っている限り、ブラジルに3ヶ月、6ヶ月いても、日本に戻ってくるつもりでいる人達は学校へは行きません。待っているだけです。どうせ日本へ行くから、と。もちろん何回も日本に来ている子どもたちもいます。それ

だけじゃなくて、ブラジル人の子どもたちって、ブラジル人学校へ行ったり、町を変えて日本の学校へ行ったり、いったん帰国してもブラジルでは何もなくて、また日本に帰ってきたりという子どもたちが結構たくさんいるんです。そして、移動しなくても、親のたくさんのお金は働きますから。例えばブラジル人学校では、1ヶ月2万8千円、送迎が1万円、教材費が1万円というように、たくさんお金がかかる。そうするとお父さん達が、仕事がなくなった場合に一番先にすることは学校を辞めさせること、そして次の仕事が見つかったら、また学校へ通わせる。もう一つは、親が考えることは、「1年間ずっと通うことないわ」ということ。例えば学校に8ヶ月通わせるんです。ブラジル人学校に行った人達がいると思いますが、classe de aceleraçãoという言葉は聞きましたか？学校の中で「急がせるクラス」があるんですよ。例えば2月に学校が始まったんだけど、子どもが入ってきたのは5月。じゃあ2月から5月までの科目はどうするでしょう？ささっと2週間とか3週間で教えてしまう。すると、ちゃんと学校へ通っていた人は「あれ、損しちゃった。5月から払えばよかった」と、そういう風に考えている親も残念ながらいらっしゃいます。そして同じく学年末ですね、ブラジルの学校は2月に始まって11月の末で終わります、こちらのブラジル人学校では、その後もぐずぐずと授業をやっているかもしれませんが、11月の末で終わって、点数を取れなかった人達はrecuperaçãoといって12月の10日あたりまでもう一度見直しや先生の指導を受けて、もう一度試験をする。それをパスすると、12月の半ば頃から1月の末あたり、2月の始め頃までは夏休みになりますね。すると、ブラジル人が考えるのは、9月の末あたりにいったん帰国するんですが、来年同じ学年をやり直すのは大変なので、ちょっと急いで3ヶ月分終わらせて、パスさせてくれないかと学校に頼むんですね。すると、ブラジル人学校は生徒を失くして儲けが減るのは嫌なので、急いで3ヶ月分を教えてください。そして、11月の末までいなくても、その学年が合格となってしまいます。そこで父親達は「まあいいや。これで2月まではゆっくりしてられる。そして2月からは進級した学年に帰ってくればいい。」という具合に、結構うまくやっている人達があります。授業を早める先生の方はどうしよう、どうしようと言いながらやっています。子どもによって遅れ

ているところは違うんですから。ピタゴラスのように、同じクラスに1年生や2年生を集めていなくても、前倒しをしなきゃならないクラスでは、同じ学年であっても進度が違ってくるので、どこを急いでいいのかわからないといったように、そういうことに慣れていない先生も多いです。ブラジルでは、急がせるクラスというのは、さっき言ったように、例えば12歳で6年生に編入した場合は、3ヶ月間で一番大事なところだけ覚えて、7年生の試験を受けるという、同じようなシステムになっているので、それに慣れている先生もいるのですが、こっちに来ている先生は慣れていない先生が多くて、どうしていいかわからないようです。

そしてブラジル人学校の先生達が言うのは、こちらではあまり落第させられないということです。子どもが落第しちゃうと、「これだけのお金を払っているのに落第させるのか」と言って親が怒鳴り込んできて、子どもは学校を辞めてしまうので、パスさせる、というわけです。6年生になっても自分の名前も書けないような、本当にどうしようもない場合には、落第していると思うのですが、後は試験に通っています。だから、帰国時にはブラジル人学校を卒業してきているんですが、全然できていないというケースがたくさんあります。こっちのブラジル人学校は本当に大変だなと思います。

一時帰国の時も、帰国期間が1年間の場合はきちんと学校へ通っていると思います。でも、滞在期間が3ヶ月や4ヶ月の子どもは学校に通っていない。大きな手続きをして入ってもまたすぐに出て行くのだったら、行かなくてもいいかなと考えて、ブラブラしています。

司会者:ありがとうございました。

質問者:お話ありがとうございました。日本におけるブラジル人の子どもたちの教育を考える時に、こうしたお話を聞いた時にいつも考えるのは、今先生がおっしゃられたような、ブラジル人がどこに価値をおくのかとか、どういったメンタリティで行動しているのかということです。日本とブラジルを比べると、ギャップが大きすぎて、それが要因となって今問題が起きていると感じるのですけれども、日本の教育現場の先生方というのは、もちろんブラジルへ行ったこ

とはないでしょうし、ブラジルはどういうところかということも知らない。例えば、ブラジル人から「2月はカーニバルだから12月から3ヶ月帰ります」といきなり言われると、それはやはり非常に困るわけです。でも、そうした彼らの行動パターンがあるということを教えてあげることによって、現場ももう少しやりやすい部分が出てくるのではないかなと思うんですけれども。一つその文化の違いということでお話していただきたいです。

それから、最近ちょっと知ったのですが、日本にいるブラジル人の親達が、ブラジルで家族生活を送っていた時よりも、日本に来てからストレスが多くなっている。というのも、今日本国内でブラジル人の離婚がすごく多くなっていて、そうするとやはり子どもの生活状況にも大きく影響しますし、さらに不安定な子どもも増えてくると思うのです。その親の状況の問題というのもお話しいただけますでしょうか。

ナカガワ:はい。文化の違いは、ブラジル人の慣例に従う。12月も10日くらいを過ぎたらもう休み、という感覚はそう簡単にはぬけないんじゃないかなと思います。そして2月のカーニバルは本当に休みの最後という感じです。学校がいつから始まるか、というのはカーニバルによるんです。カーニバルが2月末の場合には、2月初めから授業があってカーニバルをはさんでまた学校が始まるんですが、カーニバルが2月の初めだったら、カーニバルが終わってから学校は始まる。その年によります。それは学校だけじゃなくて、仕事もそうですね。12月20日くらいになると、多くの会社や企業はお休みになるんですね。férias coletivas といって、会社そのものが止まってしまうんですね、ですから社員みんながお休みになる。それが1月の5日とか8日まで、クリスマスやお正月、カーニバルの間はみんなが休みになります。ブラジルはその時期はちょうど夏なので、ほとんどの人達が海の方へ行く。海へ向かうといつものは1時間半くらいで行ける場所へ3時間かかるといったように渋滞します。12月の学校が終わると、母親は子どもたちを連れて海の方に2ヶ月くらい滞在して、父親だけは土日だけ海へ行って家族と一緒に過ごして、平日はサンパウロに戻って仕事をします。ブラジル人は土日に働くななんて考えられないんです。だから、雨がザーっと降った日や、土曜日だったり

すると、本当に誰も会社に来ません。学校でも、あんまりにも大雨だったら40人のクラス中10人~15人は休むんじゃないかなという感じです。だから、そういう風に考えているのがブラジル人なんだと思います。

教育についての考え方ですが、私が小学校へ通っていた60年代は、軍政期で国の政策もあって、「夢を持つ世代」と言われて、国を大きくしよう、発展させよう、勉強をして世界に追いつこう、学校へ行こうという風潮でした。サンパウロ大学なんかもそうでした。フランスやイギリスの有名な教授など、いい先生達をあちこちから連れてきて、ブラジルで新しいエリートを作ろうという運動が政府にもありましたし、私たちにもありました。ブラジルの公立の学校は無料なんです。だから、私たちのように移民してきた人でも、頑張ればそういう学校に入れる。そしてそこでみんなと同じように夢を持てる、というのがあったんです。しかし80年くらいから段々と「大学は出たけれども仕事がない」という状況になっていく。デカセギの動きもこの結果じゃないかなと思うのです。大学がたくさんできて、みんなが大学へ行くようになると、中にはけっこういい大学を出た人達もデカセギに来ている。すると、親も子どもたちも勉強しても仕方ないと言うのです。「親は大学を出たけれども工場だねじを回している。自分は16歳だけれども同じことをして同じだけ給料をもらえるのだから、何故勉強をする必要があるのか」と言うのです。教育が社会的に名誉であるとか、社会的向上のためのステップであると考えていたのは60年代。80年代くらいからは夢が壊れて。軍政期には、日本やアメリカの質のいいテレビではなく、自分の国の物を守るといって、ブラジルの会社の出来の悪いテレビを買うしかないという時代だったんですが、グローバリゼーションがものすごく広がって、いつまでも輸入品を拒否しているわけにはいかなくなって、90年代には外国の物を一気に解放し、ブラジルのたくさんの会社は潰れていきました。そういう状況の中で教育をしても何にもならない、仕事も見つからないとなって、デカセギが始まったのが85年です。ブラジル人の多くはアメリカへ行ったのですが、日系の人達には日本への道ができた。ちょうど日本でそういう労働者を必要としていた時期ですのでみんな日本へ行きました。ち

ょうど夢が破れた時の人達ですから、学校へ行っても仕方ないということを子どもたちに言っている。子どもたちも同じことを考えている。学校へ行っても苦勞してもしなくても同じ給料がもらえると思っている。だから勉強しない。私が話した人達なんかはみんなそんなことを言っています。

離婚問題については、アメリカでも今離婚率が50%と言われていますが、サンパウロでも約4割は結婚後10年までに離婚をしています。日本に来た人達だけではなくて、離婚や売春、麻薬、精神病などが、移動につれて多くなるというのは、歴史的に考えても、色々なmigration、移動を考えても同じだと思います。ですから、さっき言いました障害を持った子どもたちの数も、サンパウロに住んでいる人達よりは多いのが当たり前であると考えます。人間が移動し、違う文化に接する時には離婚や精神病が増えるというのは、普通に見られるケースだと思います。

質問者:二つ質問がありまして、一つは、ブラジル人学校に行っている子どもたちと日本の公立学校に行っている子どもたちについてです。ブラジル人学校へ行っている子どもたちは向こうへ行ってもなかなか馴染めないということでしたが、まして日本の公立学校に行っていた子どもたちはもっと入っていけない。そしてポルトガル語もできない。するとこういう子どもたちにはどのような教育をブラジルではされているのでしょうか。もうだめだから日本に戻るといえるのか。ただ基本的には親と一緒にですね。ブラジルの場合、親だけが向こうに残って向こうで仕事をしていると、子どもたちはどう教育を受けられる制度になっているのか、ということ。もう一つは、ブラジルに残った子どもたちが大変であるとおっしゃっていましたが、残された子どもたちはどう家族構成で残った子どもたちなのか、ということをお聞きしたいです。

ナカガワ:帰国した子どもたちの中で、ブラジル人学校に通っていた子どもたちとは違うと思うのですが、違うのは言葉ができるかできないかということくらいで、あとは、科目の内容を知っているかどうかについては、私が見ている限りではあんまり違いはありません。これから先、一つはつか

めない、彼らがどこにいるのかわからないというのと、親は残っても子どもが日本に来るというケースはあります。家族一緒に移動するというのは、ブラジルだけでなく、ラテンアメリカ全体の考え方だと思うのですが、家族離れ離れになるのは良くないということは、一応は考えていても、結局は離婚する時などは「嫌だったら嫌」ときっぱりしています。私が愛知で見た子どもたちの中には、「兄弟は何人？」と聞くと、「うーん」と考え込んでしまっていました。「お母さんは離婚して、新しい人と再婚して、その人にも子どもが何人かいて、パパも違う人と再婚して、その人と一緒に出来た子どもは何人いるだけどもその人ももう2人連れてきていて・・・」といった具合にもう本当に複雑な家庭なんです。「自分は兄弟4人だけけど、お母さんと再婚相手の間にあと2人できて、再婚相手とその前妻との間に子どもが2人で…この人は兄弟かな？」なんて私も聞かれてしまうのです。本当に複雑な組み合わせですが、保見(愛知県豊田市)なんかではそういう人達がたくさんいます。

だからきっと子どもたちも、ブラジルでインフォーマルな仕事、能力がなくても簡単にできる仕事に就くことは難しいんじゃないかと思います。というのは、日本でけっこう裕福な生活を経験しているんです。だからホミグリアの人なんかには聞くのは、きつい仕事に就くと、お父さん達はいいのですが、子どもたちの世代になると、仕事でちょっと嫌なことがあるとすぐに辞めてしまいうんだそうです。1ヶ月どころではなくて3日しかもたずに辞めちゃうんだそうです。日本でも仕事ができなくなったらどうするんだろうと考えるんですが、本当にどうなっているのかわかりません。

質問者: そういった子どもたちは、どういう形で残されているんでしょうか。

ナカガワ: 今は残されている子どもたちはあまりいないですね。今も残されていて問題を起こしている子どもたちは、もう何年も親を見ていない子どもたちですから、ちょうど90年くらいのデカセギブームの時、彼らがまだ子どもだった時に親が出てきちゃったということなのです。何故残されるかというと、多くの人は初めてデカセギに行く時には、稼ぐことを目的にして日本に来る。でも2回目、3回目になると、

稼いでも仕方ない、いい生活を送ろうという風に考えるようになります。ですから日本に来たら貧しい生活はせずに、欲しい物は買う。浜松なんかでも、団地できれいな車を見たら、「ここにはブラジル人が住んでいる」と言われます。ブラジルでは手に入らなかった物が欲しい。子どもたちも、日本の生活のいいところは、ブラジルでは買ってもらえなかったゲーム機が日本に来たらすぐを買ってもらえたところだと言います。品物に対しての欲ですね。始めはみんな稼ぐために来るんですが、私が見た子どもたちの中では、たくさん子どもたちの父親が先に日本に来る。来てすぐの頃は泣いて電話をしたりして、毎日のように「会いたい」と電話するのですが、1年くらい経つとけろっと連絡がなくなる、仕送りがなくなることもあります。そして、連絡はあると答えた子どもの場合でも、電話が来るのはクリスマスや誕生日の時だけで、仕送りはない。残された子どもたちは生活に困ったりと、今まで見られなかったケースが見られるようになります。日本人のブラジルへの移民で、始めの頃はもちろんたくさん大変なことがあったのですが、戦後の日系人は、お金持ちもいないけれどもお腹を空かせるほど貧しい人もいませんでした。そんなに貧しい生活をしていなくても、家族について色々考えることはあったと思うんです。お腹を空かせている人達が困っているからみんなで助けようという動きを見たことは、今までないんです。でも、残された子どもたちの中では、驚くべきことに何人かそういうケースもあるのです。サンパウロにcesta basicaという、米と豆と砂糖、塩、油などをパック詰めにして、本当にお腹を空かせている人にあげるというボランティアグループがあるのですが、デカセギに家族が行ってしまって残された家族で食べ物が必要な人がいるからといってそのグループが集めたんですが、日系人は、恥ずかしいと思うんでしょうね、たとえ困っていても、いらないと拒否をするらしいんです。「あげる」と言っても、「嫌だ、馬鹿にするな」という風に。じゃあこの人達にどうしたら食糧を支援できるのか、と頭を悩ませていました。

バス代がなくて学校へ来なかった、という子どももけっこういるんですよ。サンパウロでは地下鉄やバスはどこまでいっても運賃は同じで、日本円で100円くらいと安いんですが、そのお金がなくて学校に来なかったというケース

が日系人の中でも出てきたので、驚いています。

プロジェクトの中で粘土を使って遊んでいる時なども、「ほんの少しの粘土でいいからもらってもいい?」と聞く子どもがサンパウロにもいて、そう言う日系人を見たのは最近になってからです。私が子どもの頃は、日系の人達は裕福な生活ではないけれども普通の生活をしていたので、日系の人達でこういう風に困っている人達を見てあつと思っています。

結局ブラジル人社会に出回っているINTERNACIONAL PRESSとかTUDO BEM等の新聞にも人探しの記事が写真付きで出るようになりました。探しても全然みつからない人が、新聞に出るとすぐに見つかってしまうのだそうです。すると、すぐにその人から連絡が来る。「どうして俺の写真を載せたりするんだ」とものすごく怒りながら。ですから、見つからないのではなくて、その人達は本当の家族から逃げているということなんです。家族とはもう連絡は取りたくなくて、多くの人達は別のところで違う家族を作ってしまったのです。だから仕送りもしないし、子どもたちがどんな生活をしているのかも知りたがらないのです。

私が知っている3人兄弟のケースでは、父親がブラジルに帰って来ているらしいという話をどこかで聞いたので、父方の祖父に聞いたところ帰って来ていることが分かったんですが、父親を探しても見つからなかった。帰国していても会いに行かないのです。法的にブラジルから海外へ出す要望の中の7割は日本に向けられているそうです。そしてその中の95%は、本国に残された家族に生活費を送ってほしいという裁判であると。だから、それだけの数の人がこっちでいなくなってしまうと、子どもたちの生活の支援も全然していないということです。

質問者:今の2項目なんですけれども、教育援助の話で、カトリックの国ですが、最近は宗教的なもので、家族に関する思想とかは残っていないのでしょうか。

ナカガワ:学校でみんながカトリックだから自分も、という面目がてらの場合はありましたが、日系の人達の中にはそれほどカトリック教徒はいなかったと思います。もう一つは、カトリックに入る時には洗礼を受けるのですが、その洗礼で

その宗教の代父 (padrinho)や代母 (madrinha)を選びます。日系の人達が戦後カトリックに関わったのは、宗教そのものが興味ではなくて、力のある人に padrinho になってもらえば、自分の出世に有利であるというような理由があったという面があります。ですから、学校の先生やどこかの会社の課長さんなどを padrinho に選ぶ。その人にかわいがってもらえば、自分の出世も簡単だというような感覚でカトリックに入ったのだと思います。ですから、洗礼を受けたからといって教会に行ったわけでもないし、聖書を読んでいたわけでもないのです。ブラジルの国そのものにもカトリックの影響はあると思います。例えば妊娠したら中絶はしない。でもそれは宗教的な理由だけではなくて、法的に禁じられているからです。でも離婚は認められているので平気なんです。それからエイズなんかの問題についても、カトリックの宗教上はコンドームは使ってはいけないのですが、そんなことは全然誰も気にしていません。テレビなんかでも、一番いい時間帯にコンドームの使用を呼びかけるCMをばんばんやってみんなに宣伝しています。それでエイズの件数はものすごく減ったんですが、もちろん神父さん達は「どうしてこんなものをテレビで流すのか」と言いますが、ブラジル人は全然気にしていません。だから宗教もいい加減じゃないでしょうか。

司会者:それでは先生、お話どうもありがとうございました。

ナカガワ:こちらこそありがとうございました。

第三部 望ましい多文化社会を求めて

ナビゲーター 猪狩伸平 (院 M2)・葛山紋子 (S4)
～会場討論～

閉会のあいさつ

本日はお忙しい中、ご来場くださりまして、ありがとうございました。
これからも皆さまの温かいご支援とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。
フォーラム終了後、17:30～19:30まで特別食堂にて懇親会を行います。

【フォーラムに関わったみなさま】

教員

高野邦夫 (本学フィリピン語非常勤講師)

院生・学生

丸井ふみ子 (院 M2) 谷村隆昌 (R06 年卒)
葛山紋子 (S4) 金田尚美 (Po4)
黒野美香 (J4) 戸塚美穂子 (H4)
中村未央 (Po4) 服部聡依 (Po4)
萩原礼子 (Po4) 森本舞 (J4)
山田寛子 (F4) 和田更沙 (Po4)
渡辺桃子 (Po4) 門脇弘典 (F3)
金智恩 (J3) 小島和美 (H3)
指山亜希子 (S3) 佐藤美幸 (R3)
津久井優 (F3) 井田佳芽里 (H2)
青木美江 (S1) 上原裕美 (Ma1)
神宮桃子 (S1) 田村かずみ (S1)

※学生の所属

Po ポルトガル語 J 日本語 S スペイン語
H ヒンディー語 R ロシア語 F フランス語
Ma マレーシア語 院 M2 博士前期課程 2年

【国際理解教育 実績校】

神奈川県川崎市

東柿生小学校、土橋小学校、菅小学校
宮前平中学校、菅中学校
京町小学校学童保育「わくわく」

東京都府中市

第七中学校、小柳小学校

品川区 社松小学校「すまいるスクール」

新宿区 大久保小学校

静岡県三島市 東小学校

東京都狛江市 狛江第一小学校

【学習支援 実績校】

神奈川県川崎市

殿町小学校、京町小学校

東京都府中市 国際交流サロン

新宿区 大久保小学校

東京都小金井市 小金井第一小学校

文部科学省 現代的教育ニーズ取組支援プログラム
「在日外国人児童生徒への学習支援活動」

学ぶ 実践する 担う 学生多文化フォーラム 「東外大モデル」 の軌跡と将来展望

多文化コミュニティ教育支援室ではこの3年間の活動を通して、
東京外国語大学の学生であることを最大限に活かした学習支援活動と
国際理解教育活動のあり方を模索し、
「東外大モデル」を編み出してきました。
—その効果と今後の可能性は？
—果たしてそれで多文化社会を担う子どもたちを
育てることができるのか？
今回のフォーラムを通してこれまでの活動を振り返り、
「東外大モデル」の効力を検証します。

2006年12月2日(土) 10:00～(9:30開場)

東京外国語大学

留学生日本語教育センター さくらホール

東京外国語大学 多文化コミュニティ教育支援室

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

TEL・FAX: 042-330-5428 E-mail: t-shien@tufs.ac.jp

URL http://www.tufs.ac.jp/common/mlmc/t_shien/ja/

プログラム

総合司会：谷村隆昌 (R06 年卒)・黒野美香 (J4)

開会のあいさつ

第一部 “国際理解教育” を考える

ナビゲーター 門脇弘典 (F3)

1. 「東外大モデル」の軌跡と提言

発表者：萩原礼子 (Po4) パワーポイント：森本舞 (J4)

2. モデル授業

発表者：金智恩 (J3) パワーポイント：津久井優 (F3)

3. 「東外大モデル」の狙い

発表者：金智恩 (J3) パワーポイント：津久井優 (F3)

4. コメンテーターからの助言

コメンテーター：山西優二先生・佐藤公孝先生

5. 質疑応答

(昼食休憩)

・山西優二 (やましゅうじ) 先生

早稲田大学文学部教授 (比較・国際教育学)、開発教育協会理事、
かながわ開発教育センター代表

・佐藤公孝 (さとうきみたか) 先生

川崎市総合教育センター・指導主事、国際理解教育、
海外帰国・外国人児童生徒教育相談

第二部 多様化する学習支援

ナビゲーター 和田更紗 (Po4)・中村未央 (Po4)

1. 調査の目的の説明

発表者：和田更紗 (Po4)

2. 各学校を調査しての報告

・川崎市立京町小学校

発表者：山田寛子 (F4) パワーポイント：高野邦夫先生

・新宿区立大久保小学校

発表者：佐藤美幸 (R3) パワーポイント：丸井ふみ子 (院M2)

・コレジオ ピタゴラス 太田 (COLÉGIO PITÁGORAS OTA)

発表者：渡辺桃子 (Po4) パワーポイント：服部聡依 (Po4)

・ムンド デ アレグリア (MUNDO DE ALEGRÍA)

発表者：黒野美香 (J4) パワーポイント：指山亜希子 (S3)

・インディア インターナショナル スクール (INDIA INTERNATIONAL SCHOOL)

発表者：谷村隆昌 (R06 年卒) パワーポイント：小島和美 (H3)

3. 結論

発表者：中村未央 (Po4)

4. 質疑応答

第二部特別講演

「明日の多文化社会を担う子どもたちのために」

キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ先生

キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ先生

ブラジル・サンパウロ市在住。ブラジル文化協会理事、国外就労者
相談・援護センター (CIATE) 理事。サンパウロ・カトリック大学で社会
福祉博士号を取得。日本にデカセギに来るブラジル人の子どもたちの教育や
心理の問題について研究を進めると同時に、夫妻でサンパウロ市内
で日系人の子ども達のカウンセリングも行っている

5-3.学生多文化フォーラム

学ぶ・実践する・担う

——「東外大モデル」の軌跡と将来展望

日時:2006年12月2日(土)

会場:東京外国語大学留学生日本語教育センター

さくらホール



(1)第一部 “国際理解教育”を考える

<開会挨拶>

黒野美香:ただいまから東京外国語大学多文化コミュニティ教育支援室学生多文化フォーラム、学ぶ・実践する・担う——「東外大モデル」の軌跡と将来展望を開催いたします。本日はお忙しい中、本学へ足を運んでいただきまして誠にありがとうございます。本日の総合司会を務めます、日本語専攻の黒野美香と申します。

谷村隆昌:同じく総合司会を務めさせていただく、谷村隆昌と申します。どうぞ、よろしく願いいたします。

黒野:それではまずはじめに、フォーラムの開催にあたりまして、本学学長、池端雪浦より、開会のご挨拶を申し上げます。よろしく願います。

池端雪浦:皆様、おはようございます。本日はお忙しい中こうして、学生多文化フォーラムにご参加くださりまして、誠にありがとうございます。このフォーラムについて、少しご

説明を申し上げますが、お座りになっていらっしゃる方々のお顔を見ておきますと、私よりも、よくご存知の方ばかりのような気もいたしまして、お話をするのがいささか気恥ずかしいというところがありますが、これも一つのセレモニーでございますので、お話しさせていただきます。

このフォーラムは、平成16年度に、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」、通称「現代GP」と呼んでおりますが、それに採択されまして、本年度最終年度を迎える在日外国人児童生徒への学習支援活動プログラムが、その活動の総括として、開催するものでございます。この取り組みの発端は、ここにもたくさんいらっしゃいますが、学生さんたちの自主的なボランティア活動でございます。2003年4月に本学の学生たちが、日本国内で様々な問題に直面している外国人の子弟のために、大学で学んでいる外国語や、地域理解の知識を活用して何か役に立ちたい、ということで、ボランティアサークルを立ち上げました。学生たちが最初に行ったことは、子どもたちへの学習支援でございます。そこで首都圏の自治体や、国際交流協会、教育委員会、学校とコンタクトを取りまして、活動の場所を開拓いたしました。話に聞きますと、中には門前払いに近いところもあった、というふうに聞いております。その中で、川崎市総合教育センター、今日もおいでくださっておりますが、川崎市総合教育センターが、寛大な心と熱い期待をもって、学生たちを受け入れてくださり、そのおかげで学生たちは川崎の市立小学校に通い始めました。活動の内容は、日本語に不自由な外国人児童・生徒に付き添って、授業の理解を助ける、あるいは保護者と学校のコミュニケーションの仲立ちをするといったようなものでございます。この活動は、大学で専攻していることを生かしたものですから、学生たち自身の学業においても、相当成果が見られた、というふうに先生方から伺っておりますけれども、それは当然として、そればかりでなく、学生たちは生きた社会と接する活動を通して、社会人として必要な人間力とでもいいたしめようか、人間としての力を身につけ、目覚ましい人間の成長を遂げております。そうした教育効果を目の当たりにいたしまして、私たち大学関係者は、この活動を大学としてバックアップしよう、ということで「現代GP」に応募いたしまして、在日外国人児童生徒への学習支援活動

が開始された、という経過がございます。そしてその実施機関として、学内に立ち上げたのが、「多文化コミュニティ教育支援室」であります。

一昨年 10 月に開設して以来、支援室ではこの活動に対する学生ボランティアの多方面にわたる支援や研修を行ってまいりました。支援の内容は、学生の相談に応じる、資金援助や物資の提供、学生たちの活動に必要な研修や社会調査の機会を提供する、といったことでございます。学生たちは当初行っていた学習支援ボランティア活動のほかに、様々な学校からの依頼を受けまして、公立の小中学校で行われている、国際理解教育のボランティア活動を開始いたしました。この 2 年の間に、正規の学生および職員たちは、本学の学生だからこそできる、この大学だからこそできる実践活動を進めていきたい、という情熱と使命感を持って、よりよい活動のあり方を模索し、進めて参りました。本日のフォーラムは、このような 2 年間の軌跡を振り返り、専門家の先生方や、会場の皆様からご助言・ご意見を頂き、この活動を今後も推進していく上で、いっそう効果的で、私たちの強みを生かした活動のあり方を掘り下げていきたい、ということで開催されるものであります。

学生たちのパワーは、学内にも大きな動きを引き起こしました。多文化コミュニティ教育支援室の活動を通して、大きく成長していく学生たちの姿を見て、大学も多くのことを学びました。本学では従来、日本と海外とを結ぶ、あるいは、日本の外の国際社会で活躍する人材の養成に力を入れて参りましたが、この活動を進めていく中で、本学が果たすべき、もう一つの重要な分野があることを認識いたしました。それは今後一層加速していく、日本の多言語多文化社会の中で、不可欠な役割を担う人材の養成、ということでございます。多文化コミュニティ教育支援室の活動がきっかけとなりまして、本年、本学に多言語・多文化教育研究センターが創設されました。このセンターは多様な言語や、文化的背景を持つ人々が共存する、21 世紀の日本社会に貢献できる人材の養成と研究の発展を目指しております。同時に社会貢献事業にも応えていくことができる体制整備を目指しております。そして、教育部門では、多言語・多文化社会のインターフェイスを担う、人材を養成するための新しいカリキュラム、『Add-on Program』多言

語・多文化社会』が創設されました。このように学生の力によって作り上げられた、多文化コミュニティ教育支援室の活動が、大学の教育研究の内容をも変えてきた、ということは非常に重要なことかと思えます。

現在、日本には、総人口の 2% に迫る、外国籍の方々が暮らしておられます。ここで学んだ、あるいは活動した学生たちが、多様な言語や文化的背景を持つ住民が平和に共存していける社会の実現に、様々な形で寄与してくれることを私は願ってやみません。本日のフォーラムでは、こうした学生たちの活動に対して、皆様から忌憚のないご意見やご助言、ご鞭撻をいただきますよう、お願い申し上げます。

黒野:ありがとうございます。それでは、第一部に入ります前に、本日のフォーラムの趣旨の説明を簡単にしたいと思います。

谷村:現在、多文化コミュニティ教育支援室では、国際理解教育と、学習支援という、2 本の柱を中心に様々な活動を行っています。詳しい活動内容に関しましては、みなさまのお手元にありますパンフレットをご覧ください、お願いいたします。今回、この国際理解教育と学習支援という二つの活動について、これまでの 2 年間を振り返って総括をし、さらに、これからの活動に貢献できる何かをしたいと考えました。そこで、国際理解教育では、これまで学生たちが、試行錯誤しながら、先生方や、留学生と力をあわせて、国際理解教育の実践に取り組んできた成果を、模擬授業という形で発表することに、また、学習支援活動では、支援活動を通して感じた、外国人児童の支援を困難にしている要因を探るために、日本の公立学校と外国人学校を訪問し、調査を行うことにいたしました。そして、これらを発表する場を設けたいという思いから、今回のフォーラムの開催に至りました。本日は長い時間、お付き合いいただきますが、どうぞよろしく願いいたします。

尚ここで、多文化コミュニティ教育支援室の当初の立ち上げに、甚大な協力をいただきました、渡辺博美様より、祝電が届いておりますので、読み上げさせていただきます。

「東京外国語大学多文化コミュニティ教育支援室運営委員長 武田千香先生 学生多文化フォーラムの開催おめでとうございます。多文化社会になりつつある日本で相互理解のための一本の道筋をつけられたことは大変に意義深いことと思います。これも貴学の学生たちと多文化コミュニティ教育支援室に関わる先生方、スタッフの皆様が地道な活動を続けてこられた成果と考えます。私も支援室のスタートに対し微力ながらも、わずかでも関わることができましたことを感謝しております。今後も皆様の益々のご活躍をお祈り申し上げます。東京都あきる野市 渡辺博美」以上です。

それではプログラムの進行に戻ります。尚本日のフォーラムの具体的な流れにつきましては、皆様にお配りしましたプログラムに記載されていますので、そちらをご覧くださいよう、お願い申し上げます。

黒野:それでは、これより第一部「国際理解教育を考える」に入りたいと思います。ここからの進行は国際理解教育ナビゲーターの門脇弘典君にお願いいたします。

門脇弘典:それではこれより第一部「国際理解教育を考える」を始めさせていただきます。私はナビゲーターを務めさせていただきます、フランス語専攻 3 年の門脇弘典といたします。よろしくおねがいします。

まずお手元のプログラムをご覧ください。まず第一部では、多文化コミュニティ教育支援室の活動の柱である、国際理解教育について見ていきます。まず 1 番目として、「東外大モデルの軌跡と提言」ということで、支援室で行われてきた国際理解教育を振り返り、そしてそこから出た議論、学生の間での議論、先生方との間での議論、などを見ていきたいと思います。次に 2 番のモデル授業で、実際にこの場で国際理解教育の模擬授業をさせていただきます。またその授業を通して、3 番「東外大モデルの狙い」ということで、その授業を通した狙いを発表させていただきます。また 4 番、コメンテーターからの助言ということで、本日は、コメンテーターの先生二人においでいただいております。早稲田大学より山西優二先生、川崎市総合教育センターより佐藤公孝先生においでいただいております。よろしくお願

いします。また 5 番の質疑応答についてですが、発表の中で不明だった点を質問し、それについてこちら側が答える、というふうな流れで進めさせていただきます。このことについてですが、お手元のプログラムの間に挟まっていた質問票というのをご覧ください。国際理解教育活動と、学習支援活動という 2 枚の小さい紙でございます。ここに書いていただいたことは、第三部の会場討論で使用させていただきます。ですので、第一部の質疑応答については、簡単な形での質問、発表で不明だった点を明らかにするという程度にさせていただいて、もっと込み入った議論の質問がある方は、こちらの質問票に書いていただき、そして提出していただいて、そして第三部の会場討論で扱うという形で進めさせていただきます。またこの質問票ですが、第一部が終わったら、国際理解教育活動の質問票を、昼食休憩の前に回収させていただきます。よろしくおねがいします。

では、プログラムに入らせていただきます。まず 1 番、「東外大モデルの軌跡と提言」ということで、萩原礼子さんをお願いします。

<「東外大モデル」の軌跡と提言>

萩原礼子:みなさま、おはようございます。ポルトガル語専攻 4 年の萩原礼子と申します。

私は『「東外大モデル」の軌跡と提言』というところで、これまでの東京外国語大学の学生ボランティアによる国際理解教育の足どりと展望、これからこんな風にしていけたらなという事をお話したいと思います。

まず、本学の国際理解教育実践はもとも、学長のお話にもありましたように、ポルトガル語専攻の学生を中心としたボランティア団体が神奈川県川崎市の小学校で、日本の小学校に通う在日ブラジル人の子どもたちの学習支援をしていたことに遡ります。何とか外国人の子どもたちが日本の小学校でうまくやって行けたらいいなと思いながら、学校の授業に入り込む形で、簡単な通訳をしたり、通知表やお便りの翻訳をしていたわけですが、地道な活動で、外国人の子どもたちだけをみても、もしかしたらなんにも残せない、その子の力にはなれても、また他の子が学校に入ってきたら一からのスタートなんだというもどかしい気持

ちを抱えていました。そんなとき、当時川崎市総合教育センターにいらっしやいました佐藤裕之先生のご紹介で、菅小学校の総合的学習の時間に国際理解講座をさせていただきチャンスいただきました。今度は受け入れ側の、日本人の子どもたちに、在日外国人の子どもたちのことを知ってほしいと思う気持ちで、取り組みました。これが、本学の学生ボランティアが学校の授業という場面で国際理解に関わるスタートになりました。

2005 年になると川崎市立東柿生小学校と府中市立府中第七中学校での活動がほぼ同時に始まりました。この実践が 1 年間に複数回の訪問をする初めての試みとなりました。そして、2005 年度は続けて、菅中学校、小柳小学校、大久保小学校、狛江第一小学校での活動をする機会に恵まれました。2006 年度にはさらに土橋小学校、宮前平中学校と静岡県三島市立東小学校との交流が始まりました。

実践の内容は様々で、例えば子どもと留学生、日本人学生が力を合わせてひとつの作品、例えば、絵本や劇などを作ることで、子どもたちが他の人の意見を“聞く力”を養うことを目的とした授業。子どもたちと留学生、日本人学生と一緒に一つのテーマ、例えば「1ヶ月ホームステイしてみたい国は?」「将来こんなふうに住きたい」などについて話し合うことでコミュニケーション能力を高めることを目的とした授業。そして、留学生と日本人学生のプレゼンテーションからアイデアを得て、学生との質疑応答や調べ学習をし、内容を煮詰めて、最終的には生徒が発表をするような授業もありました。そして、この 10 月には新しい試みとして、「国際理解教育と一日大学生」をテーマに静岡県三島市の小学生 20 名を本学に迎えました。三島市立東小学校の先生が「朝日子ども新聞」で紹介されていた本学の国際理解教育の実践に是非参加したいということで、修学旅行の際に 1 日だけ本学に来てくれました。私たちも自分たちの大学に小学生を迎えるというのはどういことなのか、と戸惑っていましたが、「行く」授業から「来る」授業という新しい試みになりました。この実践では午前中に日本人学生と小学生で「世界がもし 100 人の村だったら」ゲームをしました。一緒に食事をして、午後は前半に児童の発表、三島市に関する発表を聞き、そのあとは留学

生一人と小学生 5 人くらいのチームで、交流会が行われました。

ここで簡単に本学の授業実践の流れをお話します。まず、多文化コミュニティ教育支援室が外部の方からの依頼を受けます。すると、学生ボランティア登録をしている学生に、メーリングリストを通じてメールが送られ、コーディネーターの募集がなされます。コーディネーターは学校とのやり取りや、メンバーのサポートをします。その後、先生方との相談の上、内容や日程の決定をします。ここからは、学生主導の活動となります。

学生ボランティア(日本人・留学生)の募集をかけ、メンバーが決まると週 1 回から 2 回、主に昼休みを利用したミーティングを重ねます。そこで、授業の目的や大まかなコンセプトが話し合われ、日本人学生と留学生共同の授業案の作成が始まります。ここでは、先方の先生方との話し合いをもつこともあります。授業案ができると準備をし、いよいよ授業実践です。実践の後には反省会や報告書作成も行っています。こうして、いろいろな学校で国際理解教育を実践していく中で、ボランティア学生の考え方が少しずつ変わっていきました。

初めの頃は、国際理解講座でした。つまり、日本人学生がサポーターとして、単に留学生を連れて、学校に行ってお国の事を話してもらえば国際理解教育だろう、とこういうふうにならず思っていたところがあったと思います。学校側からの依頼を「総合的学習の時間で国際理解教育をします。ついてはどこの国を題材にしてほしいのですが。」という言葉を丸飲みして、「あっそうか、この国について紹介すればいいんだ。」と思っていたように思います。学生ボランティアも国ごとのチームに分かれて活動していましたし、国の名前でチームを呼び合っていました。当初は留学生と日本人の学生ボランティアがペアになり、日本人学生は留学生の補助的役割のようになっていました。当時はこの留学生と日本人学生の共同作業が授業実践において最大の強みになると考えていました。つまり、「国際理解教育」は留学生を通しての「国理解」である、と感じていました。

そんな中でも、特に本年度になってからは学校の先生方や川崎総合教育センターの先生方のアドバイスで「学生の

自分史」を題材にやってみようとか、「みんなで作業をして何かを作り上げる」授業を試みようとか、国や地域にこだわることのない、国紹介にとどまらない授業をしていくようになりました。たとえば、留学生の国についての授業ではなく、留学生が日本に来るまでとか、留学生が小学校のころの話を通してとか、「人」に焦点を当てた授業を展開してみると、子どもたちからは「〇〇さんは育った環境も違うのにスムーズに会話ができ、嬉しかった。」とか、留学生のお国に関することとは全く違ったところについて感想が出てきて、留学生を一人の人として捉える様子が見えなくなりました。また、それまでは留学生のサポーターで影になっていた日本人学生が自分の経験を話す機会が出てくると、日本人学生に対しても子どもたちから「〇〇さんのように、目標を持って生きていきたい」とか、そういった反応をもらえるようになりました。

他にも、留学生日本人学生関係なく一緒に一人の作業を通して相手を理解する姿勢を身につけてほしいという授業の実践に参加したりするようになりました。

そうした活動を通して『国際理解教育』は『人間理解』である」という意識が学生の中に芽生えてきました。とはいえ、授業内容も目的もあまりにも様々でしたので、学生たちにも混乱が生まれました。「子どもたちに何を伝えるのか？」とか「子どもたちにどうやって伝えるのか？」「子どもたちへの押しつけではないのか？」などといった疑問がわいてきて、授業案作成にどんどん悩むようになっていきました。しかし、疑問に思っている授業実践の日は決まっているわけで、メンバー集めやミーティング、授業の準備に追われて、もどかしい気持ちを持ちながらも実践を重ねてきました。もちろん、そんな困ったことばかりではなくて、こんな授業がよかったよとか、先生方にこんなアドバイスをいただいたとか、こんなことを聞いてきた、こんなことやってみたいなんていう声も聞かれるようになりました。

しかし、実践への準備は先程も触れましたように学校ごとにコーディネーターが立てられ、学校単位で準備が進んでいくので、昨年度だけでも国際理解教育の実践に参加した学生は延べ 180 名を超えています。この学生全員が一堂に会して議論をしているわけではなく、実践している学校が違くと学生同士の繋がりも薄いというのが現実で、

同じ国際理解教育に携わっていても意見交換の場がないという状況がありました。

そこで、プレ・学生多文化フォーラムとして 3 回のディスカッションと 3 回の講演会を行い、どんな国際理解教育ができるのか、果たして東京外国語大学の学生として、学生として、なにができるのか、果たして私たちの出来る国際理解教育の「東外大モデル」っていうのがあるのではないかと話し合ってきたわけです。これから、その中で学生からあがってきた疑問を五つ紹介したいと思います。それから、なぜその疑問がわいてきたか、そして、講演をして下さった先生方にぶつけてみたときの回答などを中心にお話ししたいと思います。その中で、本学が行ってきた授業実践の特色もお話しできたらと思います。今からお話し致します内容については、まだまだ私たちの中でもどうしたらいいのかと考えているところですので、後ほどの討論のなかで是非ご意見をいただけたらと思います。

一つ目には、まず、「国際理解教育って何か」という漠然とした疑問がありました。学校によって国際理解教育が目指すものが多様で、その授業内容も様々でしたので、自分たちがやっていることは本当に国際理解教育なのかという不安がありました。しかし、これは 1 回目の講演会で、ユネスコの国際理解教育から日本の国際理解教育にいたるまでの変遷を知ることで、まだまだいろいろな解釈があって、私たちがやっていることも間違いではない、いろいろな可能性があるということを知りました。

二つ目は、国際理解教育はステレオタイプの押し付けにはならないのか、という疑問です。もしかしら、国があることも認識していない子どもたちに、こういう国があって、こういうふう違ってとってしまうことで逆に偏見や固定観念を植え付けてしまわないかと不安に思い始めていました。ここでいただいたアドバイスは国と国、文化と文化、という境があるのは事実で、仕方がないことであり、それを認識させた上で結局は同じなのだということを共有できる授業作りを目指すことがひとつの方法であるということでした。この点については、今でも一番迷いがあり、授業に失敗すれば、自分たちが目指していたところと全く逆の影響を子どもたちに与えてしまうのではないかと恐ろしいところがあります。

三つ目は、国際理解教育授業実践に留学生は必要かという疑問です。これは、日本人学生も留学生も抱き始めていた疑問です。授業案のほとんどは日本人学生が作っているのですが、授業の目的が人間理解だということを感じていくうちに、いったい留学生の役割は何かということが見えにくくなっていました。それから、留学生からも、私はたとえば韓国の留学生として行ったけれど、韓国人である必要はなかったという感想も出てきました。この疑問に関しては、「国と国」という枠を無視するわけではありませんが、国籍は関係なく、いかに人間自体に注目するか。子どもが自分と違う人間に出会うことで、自分の姿を捉えなおして、自分自身を豊かにするきっかけになれば日本人も留学生も関係はないという結論に達しました。実践の中から、こんな報告がされています。その授業では日本人学生 3 人と留学生 1 人が一つのクラスの実践に参加し、子どもが学生 4 人のうちで、話を聞いてみたい学生 1 人にインタビューするという授業だったそうです。子どもたちが「この人に話を聞きたい！」と一番たくさん集まったのはどの学生だと思いますか。ほかの日本人学生に比べ注目が集まる留学生ではなく、ある日本人学生だったそうです。ですから、国際理解教育に外国人が絶対必要ということも、日本人学生が絶対必要ということもありません。しかし、日本人学生の視点と外国人の“感じ方”を授業に取り入れることができれば実践の幅を広げることができます。後ほどの模擬授業にも、留学生の“感じ方”なしには思いつかなかったであろうアイデアが盛り込まれています。

四つ目は国際理解教育の授業実践をなぜ一から作るのかということです。これは、三島市立東小学校での実践で既成の「世界がもし 100 人の村だったら」ゲームをしました。もちろん子どもたちの人数や、レベルに合わせて多少の手を加えましたが、日本人の学生だけで実践し、子どもたちにも伝わるものがあつたと確信しています。こうして、既成のものが出回っているのに、なぜ時間をかけて先生方もお忙しい中、1 から授業を作り上げていくのかという疑問がわいてきました。これに対しては、やはり、対象としている子どもたちにぴったり当てはまるものは作るしかないというお言葉をいただきました。既成の教材が目標としているものの中から子どもに必要なものを選ぶのではなく、子

どもの様子を見て先生方が必要なものを感じる、そしてその目標に対して授業を組み立てられるのは、手作りではできないのです。さらに、こうして、1 時間の授業のために準備に何時間も何時間も授業の準備にかけられるのはまさに“学生”の特権だと思っております。

最後に、外大生として何ができるのか、プレフォーラムを通して、この点について深く議論してきました。本学の学生は身に付けた専攻語を道具とし、様々な専門領域を学んでいます。本学は、「21 世紀の地球社会と対話し行動する東京外国語大学」を、基本指針としています。これには、多文化社会に貢献するコミュニケーション能力、多文化社会を見つめる人間的想像力、グローバルな地域社会に根ざした繊細なリサーチ力、地域社会と共同する果敢な行動力、という 4 つのメッセージが込められています。そのような大学で学んでいる私たちは、日本人学生と留学生が関わりあい、多文化共生社会の構築を目指して、自らの経験を伝えたい、という熱い思いをもって、この活動に取り組んでいます。だから、実践校の子どもたちや、地域社会の抱える、個々の問題に対応した、国際理解教育を作ることができます。国際理解教育の視点を持った学生、留学生が先生方と共同して、無限の可能性の中から、その学校の子どもたちにぴったりあつた、国際理解教育の実践を創造していきます。対象とする子どもたちにとって、一番の授業ができるのが、東外大モデルです。また、学生の中にある熱い思いが、上級生から下級生へ、引き継がれています。大学に入学してからの活動期間は、最大で 4 年間あります。1 人の学生が活動を続け、毎年、新入生が参加することで、新しい視点が得られると同時に、それまで蓄積されたノウハウを蓄積することができます。どんな団体にも、後継者の育成は大変なことだと思いますが、東外大では、学校生活という日常のなかに活動の拠点があることが、活動を継続していく大きな原動力となっています。さらに私たちは、多文化共生社会を構築するための国際理解教育のかたちを追究し、研究活動を行い、社会に向けて提案していくことができます。例えば、今でも外国人留学生だけを派遣してください、という依頼があります。しかし、私たちには留学生を派遣することにとどまらず、これまでに実践していくなかで学んだこと、学校の先生方や、講演会から得た

知識や知恵を生かして、こういう実践をしてみたいのですが、という一歩踏み込んだ提案をすることができます。

最後になりましたが、私たちが今後もここだけは貫いていきたいと思うこととお話します。

一つ目は、「一人称で語る国際理解教育」を大切にしていきたいと思っています。情報が溢れている時代ですが、私たちは本やインターネットに書いてあることを伝える国際理解教育ではなく、自分たちが見たこと感じたことを基に手作りの授業に手を抜かない姿勢を貫いていきたいと思っています。この自分たちが感じたこと、見たことというのは、留学生、日本人学生関わらず、海外経験や学校で学んだことだけでなく、子どもたちに向けて、今子どもたちが置かれている小中学校時代を終えてきた者として、語る国際理解教育を大切にしていきたいです。

二つ目は人間関係構築型の国際理解教育です。国際理解の授業がある日だけのイベント型の実践に終わらず、なるべく、子どもたちと複数回・長期にわたって交わる機会を設けるように計らい、子どもたちにとってより身近な存在になっていきたいです。三島市立東小学校の実践では、他校の継続的な実践とは違い、修学旅行の中での1回だけの交流になるのではないかと考えていました。しかし嬉しいことに、そうではありませんでした。実践から約1ヶ月後、東小学校で「東小こども祭り」という学園祭が催されました。修学旅行で本学に来校した児童は「アジアをアジアおう」という催しを開き、アジアの地域・文化を楽しく紹介していました。そして「ぜひ私たちにも来てほしい」と小学生が私たちを招待してくれました。そこでは、中国の地図にそのときに授業を実践した周さんの出身地・大連がマークされているなど、確かに私たちとの交流の証が見てとれました。10月25日の実践の出来事が、彼らの心に強く残ったことを感じました。そして再会したときの互いの喜びは、あの日の交流がいかに濃密だったかを示しています。このような嬉しい結果を生んだのは、私たちの実践が国、文化を紹介するのではなく、子どもたちと交流しよう、子どもたちと仲良くなろうと思って取り組んだからだと思います。

三つ目は継続性のある授業を、ということです。ここには二つの意味が込められています。一つは、とにかく私たちが「活動を継続する」ことです。こうして振り返ってみても、

授業実践をしたからといって、子どもたちの劇的な変化を感じることはなかなかできません。しかし、子どもたちの感想や手紙から、少しずつの変化を見て取れます。この小さな変化を積み重ねるためにも、私たちは継続していきたいと思います。そして「授業実践が今後も継続して子どもの心に残ること」です。たとえば、私たちと一緒に活動している韓国人留学生の話です。彼女は以前こう話していました。「何も知らない子どもが将来、テレビや新聞などで、韓国の悪口を耳にすればそれをそのまま信じてしまうでしょう。でも、それより前に、私という韓国人に出会っていることで、子どもたちが『自分の知っている韓国人はそんな人じゃなかった。テレビや雑誌は韓国のことをこう言っているけど、本当はどうなのかな?』と問い直してくれればと思っています。」と話してくれました。国際理解教育の結果はすぐには出ないかもしれませんが、でも、子どもの心に変化を与え続けるためにも、私たちは活動をしていきたいと思っています。

最後に、私たち学生が感じていることは、「私たち自身が実は国際理解教育を受けてきた」ということです。始めは子どもたちのためにと始めた活動でした。しかし、活動に携わり、仲間とぶつかりながらも協働する中で私たちこそが「他人の意見を聞く力」や「コミュニケーション能力」を身につけていたのです。私は4年生になった今、実感しています。また、専攻語が違うと授業内ではほとんどかかわりのない学生同士に、留学生も含め交流が生まれ、そこから多くのことを学びました。こうした機会は多くの方々の協力あってのもの感謝しています。

最後になりましたが、こういった活動は始めることと共に、続けていくことが何よりも大切だと感じています。まだまだ、至らないところの多い学生ではありますがどうか今後とも温かく見守っていただけますようお願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

<モデル授業>



門脇:ありがとうございました。では続きまして、2番、モデル授業の方に移らせていただきます。またそれに続けて3番、「東外大モデルの狙い」も発表していただくこととなります。では、金智恩さん、津久井優さん、お願いします。

津久井優:みなさんこんにちは。フランス語専攻3年の津久井優と申します。よろしくお祈りします。

金智恩:日本語専攻3年の金智恩と申します。よろしくお祈りします。それでは今からモデル授業を始めたいと思います。

津久井:みんなとは、前回は金智恩さんの韓国での小学校での生活と、私たちの日本での学校の生活を比べて、韓国の小学生と私たちはどう違うのかな、ということみんなで一緒に考えました。今日は少し違うことをしたいと思います。今日はみんなに私たちの大切なものを紹介したいと思います。今からみんなに、私たちの大切なものを写した写真を配るので、それが私のものなのか、それとも金さんのものなのか、どっちなのか、またなぜそう思ったのかということ、近くにいる人と相談して、話し合ってください。(以下、資料の一部を参照)



その間、私たちは皆さんの周りをまわりますので、質問は何でも私たちに聞いてください。ただし、「これは誰のですか」という質問だけは避けてください。これを見るだけではわからないと思ったので、ヒントとして私たちのプロフィールを今からここに貼ります。それも、考える材料にしてください。じゃあ、後ろの人だと見えないかもしれないので、読み上げます。私の名前は津久井優です。出身地は静岡県藤枝市、誕生日は10月3日です。好きな食べ物はチョコレートと納豆です。好きなテレビ番組は「世界ウルルン滞在記」と「アジア語楽紀行」です。好きな言葉は「人生は掛け算だ」、夢中になっていることは外国語の勉強、特にトルコ語が好きです。将来の夢は、外国に住むことです。では続いては金さんです。

金:名前は金智恩です。出身は韓国のソウルです。誕生日は1月4日です。好きな食べ物はキムチです。好きなテレビ番組は「ニュースステーション」と「特ダネ」、好きな言葉「よかったね」、それで、夢中になっていることは韓国のドラマです。将来の夢は、優しいお母さんになりたいです。

これをヒントにして、みんなが「これは誰のものだろう」というのを想像してみてください。その中で、何か質問とかあったら気軽に受け付けます、どうぞ。

津久井:はい、それではこっちを見てください。皆さん、大体予想はつきましたか。つかないっていう声が聞こえます。それでは、今から私たちが、どれが私たちのものなのかっていうのを、実物を見せながら皆さんに紹介したいと思います。まず、この左上にある本ですけれどもこれは誰のものなのかっていうのと、その理由、言いたいっていう人がいたらお願いします。

質問者:金さんは日本語を勉強しているので、この本はそのための教材としてもすごく良いと思うので金さんのものじゃないかと思います。

津久井:日本語の教材として使っているから金さんのものなのではないかということでしたが、実はこれは私の本でした。これは私の大切な本で、特に思い出があるのは何

故かっていうと、これは両方とも学校の授業で出会った本だからです。それまで、学校の授業で出会う本でそんなに面白い本なんてあるわけないって思っていたんですけど、特にこっちの夏目漱石の『ころ』っていう本は、高校生の時に初めて出会って、そのときになんて面白いんだろうと思って、授業では一部分しかやらなかったんですけど、自分で本を買って、今でも何回も読み直しています。とても大切な本です。よしもとばなの『キッチン』も同じです。ということでこれは私の大切な本です。

次に右上に絵の具、絵の画材の写真がありますがけれども、これは誰のものなのかっていうのは、想像できた方がいたら教えてください。はい、お願いします。

質問者:津久井さん、フランス語専攻ですよね。フランスっていったら絵画なんかが多いので津久井さんのものだと思います。

津久井:フランスといたら絵画だから私のものではないかということですが、さあこの画材は実は私のものではありません。

金:これが何で私のものかっていうと、私が書いた絵をちょっと見せます。上手でしょ？今の季節、秋ですが、私、秋がとっても好きです。この季節を見て写真に撮ったり、見に行ったりするのもいいけど、何かしたいなあ、大好きな季節をこのまま過ごしてしまうのもったいないなああって思って、絵で書いてみたらどうかなあと思いました。それで、韓国も日本と全く同じように、今、秋なんですね。ちょっと寒いけれど日本よりは。それで、日本の秋を描きながら、韓国の秋や韓国のことを思い出したりして、若干寂しくなったりもします。実はこれは私のものでした。

津久井:それでは、次にその左下にあります、外国人の男の人の顔が書いてある CD なんですよけれども、これが誰のものなのか想像できた方いますか。お願いします。

質問者:津久井さんは外国語の勉強が好きということなので、津久井さんのものだと思います。

津久井:私が外国語の勉強が好きだから私のものではないか。はい、これは私のものでした。知っている方もいるかもしれないですけども、これはトルコ人の、とても有名なカルパンという歌手です。私がフランス語専攻なのに、なんでトルコ語やっているのかという、そういう疑問は置いておいてください。私はトルコ語がすごく好きで、勉強を始めたときに、トルコ語を書いたり読んだりするだけではなくて、耳で聞きたいなと思って、あるお店でこのトルコ人の CD を見つけて買いました。そのときは勉強のためだったんですけども、トルコの、トルコ音楽独特のメロディだとか、テンポがとても気に入って、今ではこのカルパンという歌手以外の CD もとてもよく聴いています。ということで、これは私の大切な CD でした。

最後にこの右下にあります、てるてる坊主の絵ですけども、これが誰のものなのか想像できた方いますか。お願いします。

質問者:先ほど、津久井さんと金さんがまわっていた際に、津久井さんに雨は好きですか、と聞いたら、嫌いですと答えたので、雨が降らないように祈るてるてる坊主は津久井さんのものだと思います。

津久井:私が雨が嫌いだから私のものなのではないか、どうでしょう。

金:実は、私のものです。これは私がとっても大切にしている、てるてる坊主なんです。私のてるてる坊主の話はちょっとしますと、最初にてるてる坊主を見たのは、日本に来てからなんです。韓国には、てるてる坊主がありません。日本に来て、雨が降っているときに道を歩いていたら、ある家にこれが、こういうふうにも首を吊っていて。それで、これは何？って思って、気持ち悪い、何で首吊ってるの、首を絞められてる、どうしてそんな苦しい格好で吊られているの、と思いました。かわいそうだなって思ったり、気持ち悪いって思ったり、あれは何だろう、と思いながら、何軒も歩いていると、何ヶ所にもこれがありました。友達にあれは何、何でそうやっているの、って不思議に思って聞いたら、あれはてるてる坊主だよと教えてくれたんです。日本人は、雨

が降ると、雨がやみますようにと、祈りの気持ちを込めてこれを作るんだよ、って言われたんですよ。それで、そうなんだって初めて知りました。それで、家に帰って一度作ってみたんですよ。それで作ってみたら、どうも気持ち悪いですよ。ああ、自分で作ったけど、怖いと。ああ、これどうしようって思いました。私のてるてる坊主には、頭にバラが付いているし、笑っている目をつけたりするんですけど、そうすると、ああ何かいいなと思えました。それで最近になって、私も雨があまり好きじゃないし、雨が降ったら必ずこのてるてる坊主をつけています。最近では可愛いって思っています。それで、これは私のものでした。

最後に今日、私たちの授業を聞いて何か思ったこととか、何かこれは面白かったとか、言ってくれる人いますか。じゃあお願いします。

質問者: 韓国の家の軒には何かぶら下げないんですか。

金: 雨が降っている日ですか。

質問者: いや、なんでもいいんですけど。雨が降るような時に、何かないんですか。

金: 普通ににんにくとかかなりありますよ。お母さんが「ベランダから、にんにくを取って来て」って言ったら、「はいー」って。そういうのはあるんですけど、飾りはないですね。他に質問がなにかあれば、どうぞ。

質問者: カルパンさん以外に、好きな歌手はいますか。

津久井: ヤルンという男性の歌手がいます。その人も好きです。あとは、何かインターネットで調べるとあんまり出てこないのですが、デメステアカルンという人がいまして、その人も、私は好きです。

金: 他に何かありましたらどうぞ、お願いします。

質問者: 私はてるてる坊主の話がすごく面白いと思いました。見た目でも気持ち悪いって思ったものを、あえて可愛く

する、バラをつけたり、いろんな工夫をしているところが面白いなあと思いました。

<「東外モデル」の狙い>

金: それでは、今、みなさんと一緒にやった授業に基づいて「東外大モデルの狙い～モデル授業から～」を発表させていただきます。今行った授業は、東柿生小学校第 5 学年とやった授業と、全く同じものでございました。今年の 10 月 30 日に行いました。この授業の狙いとしては、学生と仲良くなろう、学生と話ができるようにしよう、ということでした。それで、やり方としては、今のとほぼ一緒なのですけれど、私たちの思い出の詰まった物の写真を配りました。それで簡単なプロフィールを提示して、そのプロフィールを参考にしながら、皆の質問を受ける、それで答える、ということにしました。今はバツと配ったんですけど、事前に子どもたちをグループに、六つくらいのグループに分けておいて、グループに 1 枚の写真を渡して、みんなと一緒に話し合いをしながら、誰のものだろうっていうのを、予想してもらったことにしました。グループ活動ですね。話し合いが終わったら、実物を見せながら、誰のものなのか、どんな思い出があるものかというのを紹介していききました。

先ほどやった実践は、年 3 回の実践の中で 2 回目でした。その前の 1 回目の実践では、韓国と日本の小学校の共通点・相違点を、私の小学校の話から始め、紹介することにしました。2 回目の実践では、どんなことをすればいいかという話し合いを始めました。それで、1 回目の実践で、どちらかという、比較する授業、韓国と日本を比べた授業でしたので、2 回目の授業では、児童と留学生が共有できる、そういうものを探してみよう、ということになりました。

最近、韓国のものが本当に身の回りにたくさんありますよね。例えば、韓国のりだとか、旅行のチラシとか、たくさんあるじゃないですか。それでそういったものを、自分の身近にある韓国と関連のあるものを持ってきてもらって、それについて話をしながら、日本には韓国由来のものがたくさんあるんだ、ということ、改めて感じてもらおうかなって思いました。しかし、全ての児童の自宅にこういったものがあるとは限らないし、もしこの 1 回目の授業のために買ってもらったのも、悪いなと思いついて、それで、他の方法を探して

みようっていうことになりました。何をするか、どういった実践をしたいのか、どういうふうに児童たちに伝えるべきかと、悩みました。

私が、韓国人だから持っているもの、韓国人だから使っているもの、といったように、韓国を強調してしまうと、逆に子どもたちへ、韓国のステレオタイプを植えつけてしまうのではないかと、それは避けたいなと思いました。事前に子どもたちの方から、韓国はこうなんだ、っていうのを出すのはいいんですけど、こちらから出してしまうのは、あまりよくないなと思いました。それで、韓国ではなく、私自身の、私ならではの感じ方で、ものを語れば良いかなというようなことを思いました。津久井さんについてのものも、今日みなさんにお話ししましたが、留学生として行っている私たちの話ばかりではなく、子どもたちと同じである、日本人の津久井さんの話もしてもらいたい。それまでは、留学生は留学生らしさを出さなくてはいけないというイメージと、日本人は日本人らしさを強調してもらわなくてはいけないというようなイメージが、国際理解教育をしているうちに、何となくあったんですけど、それを完全に壊したいって思いました。私たちは私たち自身のもの、本当に今日持ってきたのは2人とも思い出が詰まったものですが、そういう本当の自分自身を紹介したいなと思いました。別に日本人らしさを出さなくても、本物の私の姿、本当の話をすれば、それが自然に、児童と私たちとの自然な会話のきっかけになるのではないかと、素直な話をしたいっていう風に思いました。

その結果行ったのがさっきの実践です。私が先ほど、てるてる坊主が気持ち悪いっていった話なんですけど、多分、みんな1回くらいは、疑問に感じるはずなんですよ。私は本当に気持ち悪いって思うんですけど、そのクラスにいた児童と先生方は、私の話を聞くまで気持ち悪いと思ったことは1回もないよって言っていました。感じ方ってこんなに違うんだ、私の話を聞いて初めて知った、という声が子どもからも先生からもありました。では、そういった実践を終えて、学生、先生、そして私たちが思ったことは何かについて津久井さんから発表してもらいます。

津久井:それではまず、児童の感想にどのようなものがあったかということについて発表したいと思います。一つ目に、

留学生の金さんが、てるてる坊主を気持ち悪いと感じた話に驚いた。多くの児童がてるてる坊主の話に、とてもインパクトを受けていたようです。二つ目に、韓国人であれ日本人であれ、友達になれば国籍は関係ないということを感じた。三つ目に、留学生を身近に感じた。四つ目に、グループで話し合いをして楽しかったというものがありました。

実際に児童からもらった授業の感想を、紹介したいと思います。一人目、みなさんの個性がわかってよかったです。みんなの個性が見えて、こんなことに夢中になっているんだとか、いろいろなことを知りました。二人目です。私はこのクイズを通して、面白いなあと思ったことがありました。それは金さんのてるてる坊主です。韓国にはてるてる坊主がないのを、初めて知りました。どこの世界にもあると思っていただけれど、韓国の人にとっては、てるてる坊主は首を吊っているように見えるのが意外でした。てるてる坊主は初めての人が見ると、こんなふうに見えるんだなと思いました。三人目です。宝物は一つとは決められないんだなと思いました。私も宝物は何個もあります。それに3人のことが今までよりもよくわかりました。というようなものがありました。

他にもたくさん感想をいただいているのですが、児童の感想を見てよかったと思う点は、まず、私たちの事を、日本人は、韓国人は、韓国ではと呼ぶのではなく、金さんはこういうことが好きだとか、津久井さんはこういうのに興味があるとか、私たちのことを、私たちの名前前で呼んでくれているので、私たちの狙いが児童に伝わった点かなと思います。また、児童が私たちのことを私たちのことだけで完結してしまうのではなく、逆に、私はこうなんだよというのを、感想の中で教えてくれたり、自分のことに結び付けて考えてくれたところが、良かったと思います。

次に、先生方からいただいた感想です。一つ目に人理解という視点の授業であったことが、新たな教材の可能性を感じさせるものだった、という感想をいただきました。二つ目に、コミュニケーションの訓練になる、よいものだったのではないかと、会話の時間が多かったので、そこが評価する点だという指摘を頂きました。三つ目に、自分たちと違う感じ方をする人たちがいることを、子どもたちが知れたのではないかと、ということも頂きました。

次に私たちが持った感想です。まず一つ目に、児童の

発想の多様性、というものをとても感じて、子どもの発想の柔らかさにとても感心しました。例えば、さっきの写真の中に、よしもとばななの『キッチン』の本の写真があったと思うんですけども、私たちがこれを見ても、有名な著作とか思えません。でも、ある子どもは、これを金さんの将来の夢である優しいお母さんになることと結びつけて、金さんは優しいお母さんになりたいから、家事仕事をこれで勉強しているんだ、ということを言っていた子どももいました。また、絵の道具を見て、私が静岡県出身で、静岡にはきっと自然が多いから、絵が好きなのではないか、とってくれた子どももいて、私たちも予想していなかったところで結び付けられていて、とても驚きました。そして、そのような子どもたちと、会話することで、私たち自身も、実際に一人ひとりと話をする大切さというのを、とても感じることができました。二つ目なんですけれども、児童の感想の中にもたくさん、津久井さんや金さんのことが知れてよかった、という感想があるように、私たちの性格とか、個性とか、人となり、十分に伝わったのではないかと思います。それで三つ目は、ちょっと反省すべき点ですが、それは、日韓の比較が目的でないことが伝わりきらなかったことです。やはり感想の中にも、無理やり、日本と韓国の比較を目指しているものもいくつかあって、そういうところでは、この実践が必ずしも韓国に焦点を当てているわけではないということが、伝わりきらなかったのではないかと感じました。これには、すでにある国の枠、文化のパターンの固定観念ということが問題としてあると思います。なので、今後授業を作っていくうえで、固定観念を打破するような授業作りが必要だと考えています。

以上のモデル授業について、「東外大モデルの狙い」について紹介します。まず、留学生の感性を、日本人学生の視点で教材化した授業を目指します。次に、その人を通じて国を理解するのではなくて、人に興味を向けさせる授業、というのを目指します。多様な他者との関係を作る授業、というのを目指したいと思っています。以上で私たちの発表を終わります。ご静聴ありがとうございました。

<コメンテーターからの助言>

門脇:ありがとうございます。では次に4番、コメンテーターからの助言、ということで、まずは山西優二先生からお願いいたします。

山西優二:はい、どうもお疲れ様でした。若い人たちのメッセージというか、力強い話を伺って、なんとなく余韻に浸っていて、急にコメントをするのも難しいですね。改めて、気分をきかえなければいけないような気がします。私も教員として、いろんな若い学生たちに出会っているわけですが、若い人たちが、こうやってすごい思いをもって語ってくると、何か嬉しくなってきます。教師って面白いですよ。こうやって、若い人たちに出会っているだけで、こちらが元気になる。改めてそういった印象が、全体を通して伝わってきたので、すごくいい時間だったかなと思っています。

そんな中で、改めて国際理解教育ということで、今までいろいろな試行錯誤の中で、皆さんが自分たちなりの外大モデルをつくるという、プロセスのいろんな手をお教えいただいて、私自身もすごく共感・共鳴することが多かったです。特に先ほど一番最初に、萩原さんが4ページの真ん中のところに、①、②、③という3つの部分を出していらっしゃる部分は、私自身もすごく感じる場所があります。①の一人称で書かれているというのを国際理解教育とおっしゃっている部分、使えるなあ。今までの、国際理解教育ではあまりにも、国であるとか、文化であるとか、非常にそういった枠組をもってその枠を理解することが国際理解だとされてきた。そういう中で、改めてその枠を崩す、やはり人間というものをしっかり見ていこうじゃないか、その中でもやはり一人称でこの問題を語っていくことがいかに大切か。「語る」ということば、私もよく使う言葉です。少し前にある方が、これは多摩美大の先生ですが、「山西さん、語ると話すは違うんだよね。話すというのは、ごんべんに舌と書くから、人間は話すことはよくできるんだけど、ごんべんに吾(われ)を書く『語る』、というのはそう簡単なことじゃないんだよね」と言って、語ることの意味を話していただいたことがあります。ここで、語るということが出てきているということが、私はすごく大切なことだなあ、と思っています。その一人称というところと人間理解というのが、ちょうど重なって

きている気がします、これも今後のひとつの課題になってくると思います。人間が成長していく中で、改めて多様な文化に触れ、そして皆の中に国の問題が関わり、時には民族の問題が出会い、時には国を超えた、まさしく地球市民的な視野というところに徐々に広がってくるなかで、人間理解が何を指していくのか、という問いが当然あります。それを今後どうしていくか、というところは継続性という視点からもすごく大切なプロセスになる。ヨーロッパで今、市民教育ということがすごく言われていますが、これは四つの市民性ということで語られているときがあります。例えば、地域住民としてのある種の市民性、国民としてのある種の市民性、ヨーロッパのヨーロッパ市民としての市民性、そして地球市民としての市民性。こういった市民性論というの、AまたはBまたはCまたはDではなくて、すべてが重層的に入ってくる、人間の中にそういったものが重層化されていくと、捉えられます。ですから、そういった部分を含めて、人間理解をこのキーワードでつなげていくと、すごく面白い実践になるなあ、と私自身正直感じているところであります。

それから、継続性というところのなかで、おそらくこれも今後どう発展させていくかというところになると思いますが、今回の実践は、比較的、皆さんの入られているのが小学校ですが、コミュニケーションであるとか、気づきであるとか、そういったものが入ってくるかと思えます。これが例えば、中学生とか高校生、もしくは大学生のように、成長段階的に発達、というところで捉えてみたときに、何をどう国際理解教育の目標として、それをどう構造化させていくのか、というところが、またひとつ大きな今後の継続性を考えるときの大きなテーマになってくるような気がします。

国際理解教育を考えるときに、先ほどユネスコからというところでもおっしゃったと思いますが、まさしく、第一次、第二次の大きな二つの戦争の反省から、もう二度と戦争を起こさないための、一つの教育活動として国際理解教育が出てきた。そのことは、大きな私たちの社会が抱える問題を、どう解決していくか、というところで、国際理解教育があるということの意味しています。それが南北格差であったり、環境破壊であったり、いろんな問題が、私たちの社会を跋扈していますので、そういった問題解決という形で

の国際理解教育ということ、今後、この一人称の人間関係図というもののなかから、どう発展させていくのかということが、更なる課題としても浮かび上がっていくだろうなあと思っています。

あともう一つ、それこそ10分程度というところですので本当にわずかなコメントになるかなと思いますが、やはり、継続性というところで見ると、これもあの一番最初の段階で少しおっしゃっていましたが、いかにこれをコーディネートしていくか、ということです。地域レベル、もしくは学校との関係において、コーディネーターの役割は、私は地域作りの中で、こういった学び作りが語られ、こういった国際理解教育といったことが語られるときに、すごく大切な役割になってくるだろうと思いますね。やはり、学生として、留学生と共にプログラムを作っていく、後ほど佐藤先生もお話くださると思いますが、教育とそれをどういった形でつなげていくのか、といった点です。最近 NGO・NPO が同じような形で学校に入っていく、というのがありますし、そういったなかで、教育もまた活気がつく、ということもあります。やっぱり地域の中には、いろんなリソース、いろんな機関が、それをどうコーディネートしていくのか、そしてお互いが、それを通して学びあうなかで、次のプロセスを共に作っていく、そういった関係を作っていくときのコーディネーターの役割というのは非常に大きななあ、と感じています。そういった部分も今後、外大として、また皆さんとして、どういうふうな形でやっていくのか、ということがおそらく大切になってくるのかなあ、と思っています。

ただ私は、今回のモデル授業ですが、素晴らしいなと正直言って感じました。津久井さんのイメージ、あの実践のなかで、津久井さんはフランス語やっているけどトルコ語が好きなんだなあ、とすごいインパクトがあった。金さんも、やはり、てるてる坊主っていうのがやっぱりすごい勢いで残っているから、そういったなかで、人間って面白いなあ、というところから、いろんな人間に出会いたい、隣に座っている自分の友達ってどんなことを思っているんだろう、という思いをもちますよね。本当に人間関係というものが、他者との出会いの中で広がっていくというところが今の授業には浮かび上がってくるので、この実践はすごいなあと正直言って思いました。

最後に東外大モデルの狙いのなかで、留学生の感性を、日本人学生の視点で教材化した授業、という表現がありました。確かにそうだなと思いつつ、逆に、日本人の感性を留学生の視点で教材化した授業もあっていいと思いましたし、双方向であってこそ、面白いかなと改めて感じました。この程度のコメントでよろしいでしょうか。以上です。

門脇:ありがとうございます。では続きまして、佐藤公孝先生よろしくお祈いします。

佐藤公孝:よろしくお祈いします。みなさんのプレゼンを見て、けっこうやばいと思っています。一つは、私よりプレゼンがうまいじゃないかとか、門脇さん私より司会がうまいと感じていて、どうこの場を切り抜けようかと考えています。

私は、共生の国際理解教育、それから山西先生の話にも関わるのですが、教師側の問題、それから東京外大モデルをこんな風に考えていけたらよいのではというところを、お話しさせていただきたいと思ひます。

私は、一緒に去年まで実践を作ってきた立場で、まず、お話をさせて頂きたいのですけれども、思い出話になりますが、うちの親父が飲んべえでして、飲むと思ひ出話を話すんで、あまり思ひ出を話す人間は好きではないのですが、それはさておいて、実はこの企画は、前任の佐藤裕之先生が、支援室のプログラムがありますよとおっしゃって1枚のリーフレットを、研究会で出したのです。私は飛びついちやっただすね。もうこれ、やりましようって校長に行きました。私は国際理解教育が大好きですが、一人でやっている時代は終わりだなって、校長に、とにかく全学年に入れてくださいと言ひました。校長先生は、「英語教育」と言ひました。「英語の話せる人を呼びなさい」「いや違うんです」、でもそのやりとりがスタートです。始めは、留学生を全面に出す発想でした。学校長の考えだし、学校の現場の人は、ほとんどそういう考えしか、今もないって風になっています。それで、外語大に電話をしました。私、緊張すると早口になるのですが、支援室の松井さんが、私が一生懸命話すのを非常に冷静に、「精査するように、武田先生にこの計画をお話しします」と言ひました。それから数日後に「受けます」と回答をいただきました。春休みにこ

こにきました。そこがスタートです。それから、僕は5年生だったので、猪狩さん、森本さん、河原さんと実践をしました。猪狩さんに電話をして、今でも覚えているのですが、「何をやりましようか、いや、僕はなんでもいいですよ、まずゆっくりやりましよう」って言ったら猪狩さんが一言、「それじゃ困ります」と。何が困るのかなと思ったのですが、そうだなあ、困るよなあ、これから一緒に作っていくんだもんなと反省するとともにその意識の高さに驚きました。実践はやはり言語やインドネシアの文化からスタートしていく、そういうところから始まりました。非常にステレオタイプなんですけど、「じゃあタリさんに民族衣装を着てきてもらいましようか」と、打ち合わせ中に校内の先生が、タリさんに聞くと、「民族衣装なんて着ませんよ、大切な時しか着ませんよ」って。そこから、やりとりが深まっていきました。やりながら、猪狩さんやタリさん一人ひとりの中に、文化があるとすごく感じたので、タリさんだけを全面に出すのはもったいないという考えになり、この人たちの文化というか、一人の中にも何層も文化があることを、子どもたちに伝えたいなっていうことで、実践を重ねていきました。最後の実践で、小学校時代、大学時代(今)、そして未来という視点で4人の生き方に迫ったんですが、何か国を越えたなという感覚が自分の中でありました。今までにない実践の感覚でした。

そのやりとりの中で、外語大の真摯な姿勢だとか、メールに対するリアクションの早さだとか、学校現場にないものを感じました。それから柿生の飲み屋で一杯飲んだことが何回かあったのですが、国際理解について語り合える人たちだと、とにかくお酒を飲んで楽しいんです。国際理解に関して躊躇することなく、正々堂々と言ひ合える。突っ込んでもくれる、世代も関係なくて言える関係ができたと思っています。

今年度、川崎市総合教育センターに行かせていただいて、ある意味ではもう授業はできないわけです。授業はできなくて、教員の授業を見るという立場になった時に、課題が逆にたくさん見えてきました。一つは、まさに、人間力が先生も試されているということです。私のカリキュラムセンターには、文部科学省の施策などがたくさん降りてくるのですが、その中で、育てるべき人間力の定義で三つの言葉があります。道具を使う力と交流する力、自立する力があり

ます。細かい定義はいいのですが、交流する力に、私は今すごくこだわっています。異質な集団で交流する力、対話を通して、他人と良い関係をつくる、その中で、集団での自分の位置を確認していく力です。次の新しい学習指導要領の一人の柱になるのではと言われています。このような交流する力を子どもたちにつけたいと考えています。まさに、東京外国語大学との実践はこの交流力を育てていると、今感じています。

次に、学校のコーディネーターの力です。これは、すごく課題になっています。1年目も、青山先生のところに行き、謝りに行きました。青山先生はすごく優しく受け止めてくださいました。今年度もそういうことが実際にはあります。間に外語大の先生方に入っていただいて、何かすごく申し訳ないと感じています。でも、やはりそこを何とか乗り越えて、次のステップに行く必要があると思います。やはり地域でも学校でも、強烈なコーディネーター力を持っている人が、必要なのだと思います。逆に、このモデルが出来始めたら、学校でも地域でも、そういう人を探していくことも、次のレベルに行くために必要だと感じています。学校を見ても、この方すごいなという方もいるし、逆に、厳しいかもしれないという方もいます。そこは、すごく大切な視点だと思います。国際理解教育は教科の領域ではないので、これをやらなくてはいけないという要領はないのです。だから、国際理解教育をネットワークをつくりながら広げていかなければいけないという大変さは、現場でも非常にあるという風に考えています。

それから、最後にこれからのモデルというところです。川崎でも、山西先生や杉澤先生の考え方を参考させていただき、育てたい力の段階的な構造図を考えています。例えば、コミュニケーション能力をつけるという実践がありますが、よく狙いをみると、国語の狙いと変わらないというのがあります。コミュニケーションという時に、私たちが目指す国際理解教育の狙いをより明確にする必要があります。やはり教師の力にかかっていると思っています。皆さんがやっている時に、担任の先生は、にこにこしながらただ見ているだけとか、それじゃいけないと思うんですね。これからも、そこで、先生がどう関わって、こどもの捉えたところを見て、それを次は考えていこう、というような、先生を見つけて

いくということは、やはりこのモデルをさらに進めていく力になると思っています。

交流学习のモデルを今考えているのですが、こんなふう考えたらどうでしょうか。今の子どもたちは、人との関わりが苦手です。なので、1回目に、エンカウンターだとか、既成の教材を使って、子どもたちの関わり、子どもたちが国際理解に関してどんなものを持っているのかについて見る。すごくいい素材がたくさんあるので、そういったものを活用する。そして、例えば、真ん中の5時間くらいを徹底的に協働的な作業をやってみる。あるいは自分たちが伝えたいことを教材にして子どもたちにぶつけてみる。ぶつけるといふ感覚は実践では大切です。そして3回目に地域とグローバルな課題をつなげるテーマについてディスカッションしてみる。中学生だったら、グローバルな課題を語り合い、自分と世界は何らかのかかわりの中でつながっていることを学ぶ場は、すごく必要ではないかと思っています。

最後になりますが、川崎と東京外国語大学との地理的距離をどうしようかなと思っています。その作戦として、研究会があるのですが、たとえば、この支援室の中で、川崎市に住んでいる学生さんを勧誘していただいて、センターに3人とか来てもらって、私とディスカッションして、持ち帰ってもらう。それから大学入試で、川崎在住の学生さんには、ちょっと変わった特別待遇をしてもらう、入試制度を変えていただく、そういうことで、川崎との距離を縮めてやっていけたらいいなと思っています。これでコメントを終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

<質疑応答>

門脇: 貴重なコメントをどうもありがとうございました。では次に5番の質疑応答に移らせていただきます。最初にもお話ししましたが、お手元にある質問票にもいろいろとメモしてあるかもしれませんが、そのなかでも、かなりヘビーな議論は第三部の方に回させていただいて、まず軽めの、不明なところを明らかにするような、そういうような質問を受け付けたいと思います。会場から、どなたか、こちらの発表者でもいいですし、コメンテーターの先生方への質問でも、なんでも結構ですので、何かあれば挙手をお願いいたします。

質問者:現場の中学校の教員です。とても素晴らしい実践だと思って、本当に広がっていったら、とても子どもたちの変化が大きいだろうなあって思っています。今度は、学生に来ていただく学校の立場で考えると、先生方の意識が、とてもとてもそんなレベルじゃないって思います。さっき、学生主導で動いているというお話があったんですけども、それこそ学校の先生方は、誰か留学生が国のことをしゃべってくれればいいんだ、それ以上のことは考えていないという、持っていったプログラムとのずれがでてきたりしないだろうか。それでも、学生の側はプログラムを持って行って、そんなこと頼んでないっていうずれが出てきたりして、せっかくのこの活動が、効果をなさなくなってしまうら大変だと思っています。そういうときにどういう風にすればいいか、って聞かれて考えると、偉い人が上についていけば、学校はいいと。学生主導ってところで、困難はないだろうか。たぶんここに国際理解教育の教授が付いて、その人がトップで伸ばしていく、なにか問題になったら、その人が出て行って学校の先生が話をしてくれると、多分うまく動くだろうって思うんですね。その辺のところはどうなんだろうかっていうのが、一つ。

もう一つは、私は社会科の教員が、国際理解教育にちょっと関わったときに、中国について知っていることを出してみようって、子どもたちに言ったんですね。中学 1 年生ですが、片っ端から書かせたら、韓国と中国がぐちゃぐちゃになっていると。違いがわからないことに気が付いた。それから、ネパールのことについて学んだときに、子どもたちはネパールという国がどこにあるのか、全く知識がないということが分かった。となると、特に小学校で実践をするときには、知識も少しはないと、始まらないかもしれない。津久井さんと金さんの違いが、国の違いを意識させるのではなく、本当に違いがわからないんだよねっていう気がしたので、その知識の部分はどうなのかということをちょっと伺いたいと思います。

門脇:では、学校の先生方との関わりという点について、実際に模擬授業をしていただいた津久井さんと金さんをお願いしたいと思います。

金:はい、まず、最初の質問なんですけれども、やっぱり今回の授業案を FAX で送ったときにそういう反応がありました。津久井さんと私と、当時は、もう 1 人いて 3 人がいたんですが、その 3 人の話をします、っていうふうな授業案を送ったら、返ってきたのが、津久井さんの名前と、もう 1 人の日本人の名前に丸が付いて、クエスチョンマークが付いていたんですよ。この 2 人はなんで語るの？みたいな話が返ってきたんですね。私たち 3 人の中で絶対語らなきゃ、っていうのがあって、そこは先生のクエスチョンマークを若干無視して、ちょっと、やろうよということにしました。行って、やってみたら、結果的には先生も納得、子どもたちはさらにもっと納得しているような。私たちの望みどおりの授業が出来た、っていうようなことがあったので、もうここは、ちょっと強気でいってよかったなっていうのがあります。

もう一つ、知識のことなんですけれども、今回は 5 年生を対象にしたんですが、去年は 2 年生を対象にしました。私の国は韓国です。韓国は、今はかなり知られておりまして、非常に感謝しているんですけども。私が、「こんにちは」っていう韓国語を最初から教えようと思ったんですよ。そして、私が入ってきて「こんにちは」って言ったら、子どもたちが「アンニョンハセヨ」って、韓国語で私に言ってくれたんですね。この子たちって、韓国についてどのくらい知っているんだろう、って疑問があったのです。だから、その初日、1 回目の実践で、韓国ってこういう国だよ、っていうのを教えないと、何も始まらないと思っていました。特に小学校 2 年生だったので、そのときに交えたのが、例えば、国の地図。世界地図を出しておいて、いくつかの国に番号をふりました。ここで、韓国はどこでしょうっていう質問をして、アメリカだとか別の国を韓国だよ、って言った子もいたんですけども、だいたいの子どもは、韓国ってここだっていうのをわかってくれていました。じゃあ、どのくらい距離があるの、っていった話をするときには、何十キロ離れているっていう説明もできると思うんですけども、私はそのときに、例えば、私の家に行くまでには飛行機で何時間くらいかかるんだよっていうふうにご話したんですね。多分それがさっきの伝えるとか語るとかってやつだと思うんですけど、ただ実際の韓国の面積はどうだ、韓国との距離はどうだっていうのではなく、もうちょっと、私の家に行くまでには飛行

機で 2 時間半かかるんだよとか、沖縄に行くより韓国に行ったほうが早いよ、とかいう説明のしかたで、基礎的な知識は伝えるようにはしてあります。以上です。

門脇:では他に何かありますでしょうか。

池端雪浦:私は東京外国語大学の学生の発表は、もっと下手だと思っておりましたから、本当にショックを受けているところです。しかし、これを見ていまして一番伺ってみたと思うのは、これだけ素晴らしい授業をなさったり、教えるっていうことはどういうことなのか考えている皆さんが、本学の授業を受けてどういう感想をもっているのか、ということなんですけれども。

門脇:学生が、外大の授業を受けてどう思っているのか、という質問ですが、これは、東京外国語大学で 4 年間で過ごされた谷村さんをお願いしたいと思います。

谷村:突然の振りですね。私はここで白状しますけれども、男子硬式テニス部という部活に所属しておりました、授業にはあまり出ていなかったのです。それで、テニスコートにずっと住んでいた方なんですけれども、それでもやはり、私の専攻していたロシア語の先生方は、ロシアの知識がなかった私にも、非常に噛み砕いて授業をしてくださり、非常にためになったと思いますし、決して学長がおっしゃるような、感想を私は抱いておりません。この大学で、先生方にお世話になって良かったと思います。

門脇:では、大学院までいらして、もうそろそろ修了される猪狩伸平さんをお願いしたいと思います。

猪狩伸平:どうもこんにちは。今大学院生で、この大学に通って 7 年目になります、猪狩と申します。正直に、忌憚なく申しますと、大学 1 年に、この大学に入ったときには、正直、がっかりする部分もありました。ですが、7 年経って見ると、随分様変わりしているんですね。というのは、定年になって退官になった教官の方が、僕の代に 3 名いらっやった、ということもあるんですけれども、随分、今の大学自

体が若返っているっていうのがあります。あと、僕自身がやはり体育会系の空手部に所属しておまして、最初の方はどちらかというと、部室に住んでいくちなんですけれども、だんだん、自分自身が、大学の授業が面白いと思えるようになってからは、随分、自分から積極的に、勉強していこうという姿勢になりましたので、改善されたなど、思っております。以上です。

門脇:では、もう一人。未来ある、今年 4 月に入学された田村さんにも何か一言お願いします。

田村かすみ:本当に突然の振りで、何を話していいんだか、っていう感じなんです。私は、外国語大学に入ったわりに、自分の専攻語をやりたいって思って入ってこなかったというか、あまり語学がやりたいという感じで入ってきたわけじゃなくて、どちらかというと、地域基礎とか、その他いろいろな科目の方に興味があったんですね。それで、実際にここに入って来て、最初のスペイン語専攻のオリエンテーションに、高橋先生が何か二つ授業をお勧め下さいました。一つが、「多文化多言語論入門講座」、青山先生の授業です。それと、もう一つが「地球社会に生きる」という講座で、外大の出身の先輩の方々が、お話に来てくれるという授業ですが、その二つが非常に面白くてですね、その授業を受けただけでも私は外大に入って良かったと思いました。スペイン語は、ちょっときついんですけど。まあ、それがきっかけになって、私もこの活動に参加するようになったところがあるので、まあ高橋先生には大感謝でございます。

門脇:学生一人一人に様々な思いがあるということでしたね。では次の質問に移らせていただきたいと思います。誰か他に、質問のある方はいらっやいますでしょうか。

佐藤裕之:川崎からきた佐藤です。佐藤公孝指導主事の前任で、さっきから裕之先生、裕之先生って出てきたのは私ですので、早めにカミングアウトしておいた方がいいかなと思って、手をあげました。

一緒に授業を見ながら、外大生との交流について、いろいろ考えてきました。ほとんどが、予想通り上手くいった

なと思ったんですが、予想外だったことがありました。1回、スーダンの授業をやるときに、スーダンの留学生が、都合が悪くて来られなかったときがあったんですね。どうしようかなって思ったときに、たまたまスーダンの方に留学して戻ってきた日本人の学生がいたので、ピンチヒッター的に、その学生がスーダンを語ったわけです。原田さんという、外大の学生でした。暑くて40度もあって、この白い服は熱風を通さないために、非常に生地は厚いんだとか、道路は歩いていると穴が開いていて非常に困るんだとか、不便だとかたくさんいろいろな話をして、子どもたちはへえ、へえって聞いていました。その授業をしながら、最後に、私が子どもたちに聞いてみたんです。ところで、今日スーダンのことを話してくれた原田さんは、スーダンのことを嫌いだと思う？好きだと思う？って子どもたちに聞いてみたんですね。そしたら、子どもたちが、全員、原田さんはスーダンのことが大好きに決まっているって答えたんですよ。つまり、言葉ではいろいろなことをいって、マイナス面も話をしたんですけども、その原田さんが、スーダンを語る、「語る」ですよ、語るその表情が本当にスーダンを大好きだになっていうことが、伝わってきたんですね。それは意外で、ああ子どもたちってそこまで見ることができるんだな、分かるんだなっていうことに気がつきました。けっこう子どもたちって、いい出会いをしてるんだなって感じがしました。

もう一つの出会いが、公孝先生が東柿生小学校で、継続的に留学生と学生さんたちと、関わって国際理解をしました。そのときに、最初は子どもたちの目が、留学生の学生さんをずっと見ていたんですが、だんだん回数を重ねてくるうちに、留学生を連れてくる、あの日本人のお兄さんお姉さんたちは、何者なんだってというような目になってきたんですね。というのは、本当に身近なお兄さん、お姉さんなんだけれども、二人でこしょこしょって喋るのは日本語じゃなかったりして、だんだんあの人たちは何なんだろうっていうことになってきました。最後の授業は、あの連れてくるお兄さんお姉さんにも、語ってもらおうといったことでした。そうすると、ある学生さんは、「私は子どものころは本が大好きで、土曜日になると、お母さんの自転車の後ろに乗って、本を4冊借りに行きました。一週間に4冊読んだんだよ」、っていう話をしました。ある学生さんは、「僕は算数が

大好きで、算数は100点を取るために、ものすごく勉強したんだ。でも中学校に行って、英語に出会ったら、英語が大好きで、中学校なのに、英語13時間勉強したことがあるよ」って、そういう学生しか外大には入れないんでしょうかね。そういうような話をしたときに、もうものすごく悔しかったんです。私たち教員が子どもたちに、本をたくさん読みなさいとか、勉強しなさいって何千回言っても聞かない子どもたちが、その話を聞いていると、目がハートになっているんですね。それで、私、そのときに意外なことに、もう一つ気づいたのは、実はいろいろなことを言ってくる留学生さんも、それから日本人の学生さんも、実は、子どもにとっては、非常に身近なお兄さんお姉さんだ。それは、私たちができないことなんですね。意外だったのは、そういう立場のみなさんの声というのが非常に子どもに響いている、ということで、嬉しい誤算というのか、こういっただけのことだったんだなということを感じました。私、4月に学校に戻りまして、さあ国際理解やろぞと思って入ったんですが、国際理解どころじゃないんですね、もう基礎力をつけなきゃ、早く九九を覚えなきゃいけないとか漢字書かなきゃいけないとか、そういうことがあるんです。でも、あの国際理解やろよって声かけています。

そこで、最後に質問なんですけれども、学校の先生方と関わりながら、ここは困ったぞといったことがあればですね、もうこの際言っていただきたい。私たちの思いがあるんだけれども、この辺の関わりで難しかった、といったようなことがあれば、是非解消していきたいなっていうふうに思っております。今日、私一つミッションを持っています。それは、細くなりつつある殿町小学校との関わりを、もう一度復活させるというのが、私のミッションですので、また、それもお話しただけたらと思います。よろしく願います。

門脇:ではこのことについては、東柿生小学校で活動されている、葛山さんをお願いしたいと思います。

葛山紋子:先生に対するコメント、ということでしょうか。もう直接、学校の方にもさんざん言ったことなので、また言うのもなんなのですけれども、ではこの場でも言うことに致します。まず、授業の教案作りに関してですが、教案作りと授業に

対する姿勢が、やはり先生によって違うな、っていうのはすごく感じました。こちらとしては、両方、お互いにつっていく授業、っていうふうに考えていて、学生でしかできないこと、教員でしかできないこと、っていうものがあると考えています。だから、FAX や電話をやりとりして、教案を一緒に作っていく、というスタンスを考えていたんですけども、学校の先生方はそういうふうに思っていらっしゃらない方も結構いらっしゃるみたいで、お任せでそっちがやればいーだろーうみたいな感じの先生もいらっしゃいます。というのは、教案を作って先生にこういうことをやってほしいとか、こういうことが分からないということを書いて欲しいので、教案を事前に送っているにもかかわらず、何もコメントをいただかず、当日になって行ってみると、全然事前授業がされていなくて授業にならなかった、ということがあります。また、当日になって、子どもたちにその内容は難しすぎる、っていうふうにコメントをいただくということもありました。それらがまず一つと、それからもう一つは、教案を作るっていうことに関しての過程なのですが、こちらはわりと早めに作りたーいと思って、何度も連絡をとっていても、なかなか返信がないし、電話にも出ていただけないっていう状況があります。学校もすごく忙しいっていうことは分かるんですけども、一緒に作っていくっていう上で、もう少し前向きに考えてほしいって思うことが多々あります。以上です。

門脇:では他に質問はありますか。ないようですので、それでは、ここで第一部「国際理解教育を考える」を終了させていただきます。どうもありがとうございました。では司会を総合司会の方に移らせていただきます。

谷村:ありがとうございました。以上をもちまして、第一部「国際理解教育を考える」を終了いたします。

学生多文化フォーラム 学ぶ・実践する・担う 「東外大モデル」の軌跡と展望

2006年12月2日(土)

東京外国語大学

留学生日本語教育センター さくらホール

製作協力者: 森本舞 (J4)

発表者: 萩原礼子 (Po4)

「東外大モデル」の軌跡と提言



国際理解教育実践へのきっかけ

在日外国人の学習支援を通して
国際理解教育の必要性を感じる
→2005年1月
川崎市立菅小学校で
国際理解講座(韓国・ブラジル)の実践

国際理解教育実践のあゆみ

2005年度

神奈川県 川崎市立 東柿生小学校
菅中学校
東京都 府中市立 府中第七中学校
小柳小学校
東京都 新宿区立 大久保小学校
東京都 狛江市立 狛江第一小学校

国際理解教育実践のあゆみ

2006年度

神奈川県 川崎市立 東柿生小学校・菅中学校
土橋小学校・宮前平中学校
東京都 府中市立 府中第七中学校・小柳小学校
東京都 新宿区立 大久保小学校
静岡県 三島市立 三島東小学校

国際理解教育実践のあゆみ ~内容・ねらいの多様化~

- ・“聞く力”ーひとつの作品をつくる授業。
- ・“コミュニケーション能力”
ーあるテーマについて、話し合う授業。
- ・“生徒の発表”
ープレゼンテーションの作成

新たな試み

→静岡県 三島市立三島東小学校
「国際理解教育と1日大学生」

- ・ 6年生20人が修学旅行の一環として
- ・ 「世界がもし100人の村だったら」ゲーム
- ・ 生徒の発表
- ・ 交流会

国際理解教育 授業実践の流れ

- ①依頼を受ける
- ②国際理解教育コーディネーターの募集
- ③内容や日時の決定
- ④学生ボランティア(日本人・留学生)の募集
- ⑤ミーティング
- ⑥日本人学生と留学生協働の授業案作成
- ⑦準備
- ⑧授業実践
- ⑨反省会
- ⑩報告書作成

国際理解教育実践のあゆみ

～一年目～

- 国際理解教育で「〇〇国について」お願いしますという依頼。
- 留学生と日本人の学生ボランティアがペアになっての文化紹介
- 学生ボランティアも国ごとのチームに分かれて活動。

当初のイメージ:

「国際理解教育」は
留学生を通しての「国理解」である。

国際理解教育実践のあゆみ

～二年目の現在～

- 国や地域にこだわることのない国際理解教育の授業実践。
- 一人の人としての留学生。
- 日本人学生と子どもたちのつながり。

現在の思い:

「国際理解教育」は
「人間理解」である。

国際理解教育が分からない！

国理解？人理解？文化理解？

プレ・学生多文化フォーラム

第1回 学生ディスカッション
「国際理解教育で何を伝えるか」

第2回 講演会 佐藤郡衛先生
「国際理解教育とその現状」

第3回 学生ディスカッション
「国際理解教育の問題点
どうしたら解決できるの？」

第4回 講演会 山西優二先生
「国際理解教育のあり方を考える」

第5回 学生ディスカッション
「外大生の国際理解教育のカタチ」

第6回 ワークショップ 川崎市 小・中学校教諭
「国際理解教育実践現場から」

学生の疑問

- ① 国際理解教育とは何か？
- ② ステレオタイプの植え付けになる？
- ③ 留学生は必要か？
- ④ 授業実践をなぜ“いち”から作るのか？
- ⑤ 東外大モデルとは何か？

①国際理解教育とはなにか？

ユネスコの国際理解教育から日本の国際理解教育に至るまでの変遷を知る。

→多様な解釈があり、国際理解教育が何か分からないのはある意味で仕方がない。いろいろな可能性がある。

②国際理解教育はステレオタイプの植え付けにならないのか？

国際理解教育を行うことで子どもたちに文化の違いを植え付けてしまわないか？

→違う国があることを認識させた上で、結局は同じ人間だということを共有できる授業作りをする。

③国際理解教育授業実践に留学生は必要か？

→子どもが自分と違う人に出会うこと。

→子どもの立場に立てる日本人の視点と留学生の“感じ方”が必要。

④国際理解教育の授業実践をなぜ“いち”からつくるのか。

既成の国際理解教育の教材があるのに、なぜ授業を“いち”からつくるのか。

→対象としている子どもたちにぴったり当てはまるものは、つくるよりほかない。

→時間をかけられることこそが“学生”ボランティアの強みである。

⑤東外大モデルとは何か

- さまざまな形態の国際理解教育に対応する。
- 学生中心の活動であるがゆえに継続できる。
- 国際理解教育の“カタチ”を発信し、提案する。

東京外国語大学

基本指針:

「21世紀の地球社会と対話し行動する

東京外国語大学」

メッセージ:

- (1)多言語社会に貢献するコミュニケーション能力
- (2)多文化社会をみつめるリアルな人間的想像力
- (3)グローバルな地域社会にひろがる清織なり
サーチ力
- (4)地域社会と協働する果敢な行動力

私たちの国際理解教育

～こんな国際理解教育にしたい～

①一人称で語る手作りの国際理解教育

- ・ 「伝える」でなく「語る」

②人間関係構築型の国際理解教育

- ・ イベント型を超えること

③継続性のある国際理解教育

- ・ 活動を継続すること
- ・ 子どもの心に残ること

おわりに

- ・ 活動から得たもの
- ・ 学校、社会の学生活動への協力の必要性
- ・ 続けていくことの必要性

第一部 “国際理解教育”を考える

「東外大モデル」の狙い ～モデル授業から～

授業者: 津久井 優(F3)
金 智恩(J3)

授業実践について

- 対象
 - － A小学校 第5学年
- 日時
 - － 2006年10月30日
- 授業の狙い
 - － 学生と仲良くなろう
 - － 学生と話そう

実践内容

- 写真を配る「思い出が詰まったもの」
- 学生のプロフィールを提示→質問
- どの学生の持ち物が予想させる(グループ活動)
- 実物を見せながら、誰のものか、どんな思い出があるのかを紹介

モデル授業の実践案について

- 年3回の実践の2回目
- 1回目の実践内容
 - － 韓国と日本の小学生の共通点と相違点
 - － 韓国の文化を紹介
- では2回目は？
 - － 授業案の作成へ

授業案の作成:第1案

- 児童と留学生が共有できることを模索
 - － 韓国と関係のあるものを探させる
 - ・ 例 韓国のり、旅行のちらし
 - － 日本には韓国由来のものがたくさんあると感じる
- しかし全ての児童の自宅に韓国のものがあるとは限らない
 - － 新たな案作りへ

授業案の作成:再考

- どんな実践をしたいのか
 - － 「韓国」のステレオタイプを作らない
- ではどうするべきか
 - － 「金さん」ならではの感じ方を伝える

授業案の作成: 第2案

- 学生の思い出が詰まっているものを紹介
 - 自然な会話のきっかけ
 - 会話を通して学生の感じ方
 - 金さんの場合「てるてる坊主が気持ち悪い」
- 実践の結果は...



児童の感想

1. 留学生がてるてる坊主を気持ち悪いと感じた話に驚いた
2. 韓国人であれ日本人であれ、友達になれば国籍は関係ない
3. 留学生・学生を身近に感じた
4. グループで話し合いをして楽しかった

先生の感想

1. 人理解という視点
2. コミュニケーションの訓練
3. 自分たちと違う感じ方をする人たちがいることを知った

学生の感想

1. 児童の発想の多様性→会話の大切さ
2. 学生の人となりは十分伝わった
3. 日韓比較が目的でないことが伝わりきらなかった
 - すでにある国の枠・文化のパターンの固定観念
 - 固定観念を打破するような授業作り

「東外大モデル」の狙い

- 留学生の感性を日本人学生の視点で教材化した授業
- 「人」に興味を向けさせる授業
- 多様な他者との関係を作る授業

おわり

(2)第二部 多様化する学習支援



黒野美香:第二部、「多様化する学習支援」を始めたいと思います。まずは、研究報告といたしまして、公立小学校と外国人学校の訪問調査のご報告をいたします。ここからの進行は、ナビゲーターの和田更沙さんと中村未央さんをお願いいたします。

和田更沙:第二部の「多様化する学習支援」の発表を始めたいと思います。ナビゲーターを務めさせていただきます、ポルトガル語専攻の和田更沙と、ポルトガル語専攻の中村未央です。どうぞ宜しくお願いいたします。最後に質疑応答の時間を、先ほどと同様に設けようと思いますが、その際、今日配った袋の中に、学習支援班の質問用紙も入っていますので、そちらをお願い致します。報告の最後の質疑応答は、先ほどと同じように、不明だった点を明らかにする程度にとどめまして、話題が広がりそうな内容に関しては、第三部の討論会のほうに持ち込みたいと思います。

<調査のきっかけや目的、学校選定について>

では発表に移ります。多文化コミュニティ教育支援室では、もう一本の柱として、学習支援活動を行なってきました。私も実際に活動をしたうちの一人なのですが、外国人の児童生徒は、特に小学校の低学年だと、私もうらやましいと思うぐらい言葉の習得が早く、私が支援した生徒でも、ポルトガル語を用いて、授業の理解を手伝ったことはほとんどなく、日本語には特に問題がないように見えました。とは

いっても授業の内容になると、どうも理解できてないな、という様子が見受けられたり、横に座っている友達の答えをすぐ見てしまったり、わからないと言って、すぐあきらめたりする子が多くいました。それは、日常言語と学習言語の違いというのがあると思います。授業以外の場所でも、友達にちょっかいを出して、トラブルを起こしてしまったり、という子どももいて、どうも言語以外のところで、戸惑ったり困難を感じる要因があるんじゃないかなと思うようになりました。そこでその理由を考えました。まず一つ目に、日本では年齢に応じて学年に入れられます。日本語がどれくらいできるか、今まで何をどのように勉強してきたか、ということ考えずに、何歳だったら小学校何年生という風にポンッと入れられてしまいます。あと、ピアスをつけてくる子がいたり、給食があると知らずにお金をもってきちゃう子どももいました。私も日本の学校に通っていても気付かなかったのですが、もしかして、日本の学校には、日本独自の文化があるのではないかと思います。ゆえに、学習支援をする際に、そういう違い、今まで母国で何を学習してきたかとか、母国の学校文化はどうだったのだろうかという違いを私たちが知っていれば、そこに配慮ができるのではないかと思います。調査をすることになりました。

訪問する学校を選ぶにあたってなのですが、日本の公立小学校で現在どのような問題が起こっているか、どのような困難があるのかということ把握し、その原因を探るために外国人学校を訪問しよう、という流れを取ることになりました。まず、公立小学校の訪問に関しては、以前から学習支援活動を行っており、繋がりのあった川崎市立の京町小学校、新宿区立の大久保小学校の2校を選びました。次に、外国人学校ですが、母国と同じカリキュラムを実施しており、母国政府から認定を受けている学校、という基準を設けて訪問しました。訪問の際には、外国語を用いてインタビューを行い、調査を行いました。こうして調査を開始したわけなのですが、そこから見えてきたことは私たちがはじめ予想していたものとは少し違う、思わぬ展開がありました。では次から、具体的な報告に移りたいと思います。まず最初に川崎市立京町小学校の報告をお願いします。

<川崎市立京町小学校訪問の報告>

山田寛子:川崎市立京町小学校の報告をいたします、フランス語専攻 4 年の山田寛子と申します。宜しくお願いします。

今映っている写真は、京町小学校にある国際学級で、ここは、授業時間内に、外国人児童を別の教室に取り出して日本語指導などをする教室です。

京町小学校についてですが、京浜工業地帯に位置していて、周囲には外国人労働者が多く住んでいます。日本永住を目指す家庭が多いようです。この小学校に通う 20 名の外国籍児童の多くは、その子弟にあたります。京町小学校は、外国人教育支援センター校に指定されています。京町小学校には、ボリビア人児童 2 名、ブラジル人児童 1 名、フィリピン人児童 5 名の計 8 名に、国際学級で日本語指導を行っていました。

次に、外国人児童について説明します。外国人児童の中には、文化や言語の違いからくるストレスで、周囲に八つ当たりをしてしまう児童、出身国にはなかった給食に戸惑って残してしまう児童、教師をファーストネームで呼ぶ児童、ピアスをつけて登校する児童もいました。周囲との衝突や給食の問題は、児童自身が日本の学校生活に慣れることにより、早い段階で解決されました。教師の呼び方とピアスの問題は、日本では、先生をファーストネームで呼んだりピアスをつけて登校しないと、本人に伝えることで、すぐに解決されました。また、教師や日本人児童に対しても、文化や言語の違いでこれらの行動をとってしまっている、と説明して、不和やいじめがなく、相互理解が生まれていました。外国人保護者への配布物には、ルビ振りで対応しています。通知表も同様です。3 年前からは、年に 2 回程程度、外国人保護者会を開き、行事や年間予定について、話し合ったり質問に答えたりしているそうです。PTA 活動では、外国人保護者に、カーテン洗いや清掃など、言葉に関わらない仕事を割り当てることで、必ず参加できるようにしているということです。また、毎年 10 月には、ふれあい祭りというものを開き、外国人保護者の協力の下で、児童の出身国の文化や料理を紹介しています。日本人の保護者には、外国人児童や保護者の問題やその取り組みについて説明し、理解を求めることで、PTA 活動は円滑

になっているそうです。

次に、国際学級担当の教師ですが、国際学級担当の教師は、外国人児童に、足し算引き算のように日本語がよくわからなくても解ける問題をやらせて自信をつけさせたり、平仮名や九九を覚えるためにカードを作って授業に携帯させたりと独自の指導をしていました。この九九カードですが、カリキュラムの違いで、3 年生のフィリピン人児童が掛け算を習っていなかったときに、とても役立ったそうです。授業の担任教師とは、連絡カードを使って、どこまで学習したか何ができるようになったかを書いて渡しています。外国人児童の家庭には、月に一度くらい訪問しています。電話に頼らず直接足を運ぶのは、自らの手で状況を確認したり、必要な書類を受け取ったり、保護者からの質問に答えるためです。国際学級担当の教師は、JSL 児童指導のための研修に参加しています。JSL というのは Japanese as a Second Language の略で、日本語を第二言語として学習している児童のことです。

最後に訪問を終えて、感想を發表します。私は、京町小は三つの問題を抱えているのではないかと思いました。一つ目は、外国人児童の母語の確立維持の問題です。母国への帰国や、家族とのコミュニケーションのため母語の確立は重要です。しかし、母語の指導は外部に頼らなければいけないので、十分だとはいえません。もう一つは、国際学級担当の問題です。現在国際学級を担当されている先生は、前任者からの引継ぎなしに手探りで始めたそうです。今後、国際学級の必要性はより高まると思うので、よりよい指導ができるよう引継ぎを行うだけでなく、国際学級担当として、専門の教師を養成・配置していくことを考えていくべきではないかなと思います。三つ目は、日本と諸外国とのカリキュラムの違いの問題です。先ほど、3 年生のフィリピン人児童が掛け算を習っていなかったと説明しましたが、児童が何を習い、何を習っていないかは、本人からの申告に頼っているため、状況を把握できず、学習が遅れが生じることもあるそうです。カリキュラムの違いを把握することも必要だと思います。

最後に、京町小を訪問してよかったと思ったことを二つ紹介します。京町小では日本人児童にも言葉や文化の違いを説明していて、相互理解があつて、とても温かい雰囲気

気があると思いました。自信を持たせるような指導や、PTA活動での清掃のように、児童や保護者に言葉がわからなくてもできることをしたり、ふれあい祭りのように日本とは違う言語や文化を知っているからこそできることをされていた点がとても素晴らしいと思いました。以上で京町小の発表を終わります。ありがとうございました。

和田:では次に、新宿区立大久保小学校の報告をお願いします。

＜新宿区立大久保小学校訪問の報告＞

佐藤美幸:新宿区立大久保小学校を訪問いたしました、ロシア語専攻 3 年の佐藤美幸と申します。宜しく願いいたします。

まず学校概要ですが、新宿区歌舞伎町や大久保といった繁華街に近い住宅街にあります。全校生徒は 140 名と、かなり規模は小さい学校といえます。しかし、そのうち約 6 割は外国にルーツを持つ、と聞いています。外国にルーツを持つということは、両親のどちらかが外国人ということです。大久保小学校はもともとごく普通の小学校でしたが、今となっては、6 割が外国にルーツを持つ大変国際色豊かな学校といえます。後でまた報告いたします、国際学級在籍者は現在 43 名、また外国人児童は 1980 年代後半から増加傾向にあり、ここ 10 年くらいで約 3 倍以上に増えています。そのような中で、この大久保地区に住む日本人児童は、外国人が多い学校ゆえに、他の学校を選ぶケースも実際あります。

このように増加する外国人児童には、日本語がほとんどしゃべれない児童も在籍しています。この児童が、いかに日本語で適応をはかっていくか、という問題が浮上してきました。そこで設立されたのが、日本語国際学級です。母語別児童数は、ご覧のように韓国語 17 名、中国語 9 名、フィリピン語 8 名、英語・スペイン語・ポルトガル語が各 1 名です。他にも、タイ語やウクライナ語を母語とする児童がいたこともあります。国際学級では、日本語習得補助を通して、国際的感覚を持つ児童の育成に力を入れています。授業時間数は週 2～5 時間あります。レベルとしても、日本語がほとんどわからない入門クラスから、一見学校へは適

応しているように見えても、細かいことには困難が生じる中級までの 3 クラスがあります。担当教師は 3 名います。先生一人につき、1～5 名という細かい指導がされています。また、児童が多様であるがゆえに、指導の方法も児童によります。おおむね、日本人の国語の時間に、外国人児童のみを取り出して指導する「取り出し授業」、また日本人と同じ授業に入り込んで指導する「入り込み指導」がありますが、これについても、その児童の状況にあわせて決定しています。

次に、外国人児童についてです。保護者は、大半が飲食店等といったサービス業に従事しています。しかし、この来日経緯と在日期間は実に多種多様であり、主に保護者の出稼ぎや就労による事情、また在日二世三世といった在日韓国人といった事情など、多岐に渡ります。それゆえ、日本語習得や学習到達度にも、個人差が大きく出てきます。しかし、中でも、漢字圏の韓国や中国出身の児童は比較的日本語習得の早い傾向があります。またそれに比例して学校への適用も早くなってきます。日本語習得の早い方が学校への適用も早いといえます。しかし、このような傾向は本当に多種多様であり、個別に大きく差が出てきています。

また、外国人児童の抱える困難についてです。それにも個人差がありますが、おおむね学習到達度の低いことによる、高校進学率の低さが挙げられます。まず、バブル期に来日した外国人を指す、ニューカマーの高校進学率は、50%を切ると言われています。日本の高校進学率 97%と比べると、大変低い数字と言えます。児童の学習の妨げとなる要因としては、ご覧の三点が挙げられます。まず、家庭の安定度、関心度です。これは保護者の仕事が忙しいゆえ、子どもとのコミュニケーションが取れない、家族間のコミュニケーション、会話が少ないゆえに生じてしまう問題です。次に、子どもたちの中では、自分がいつ本国に帰るのか、また帰ることがあるのかわからない児童もいました。将来の見通し、帰国の可能性がわからない、ということが妨げになることがあります。また、このような外部状況だけでなく、本人のやる気や動機付けも学習の妨げとなることもあります。先ほど申し上げました、自分がいつまで日本にいるのか、またいつ本国に帰るのか、帰ることがあるのか、

このようなことがわからないので、なぜ今自分が日本語を勉強しているのか、日本語を勉強する必要があるのか、それがわからないために、学習の意欲に関係してきます。もちろん、生活面での習慣の違いもあります。例を申し上げますと、例えば学校で手洗いをするかしないか、体育の時間に体操服に着替えるか着替えないか、また給食なのか、お金をもってきて買うのか、そして、集団行動への適応があげられます。学習面、生活面共に、大なり小なり多くの困難が子どもたちに付きまるといえます。

そして、そのような困難を見据えて、学校側はどう対応しているかといいますと、まず児童のアイデンティティ形成への配慮が挙げられます。これは主に、日本語国際学級で行っています。例えば、大久保小学校の日本語国際教室では、教室の四隅に、母国の文化を懐かしめるいろんなものがありました。例えば、お祭りで使う道具や民族衣装、民族の布といった、日本にはない母国を感じられるものがたくさんありました。また、児童の生活全般にわたる支援もしています。日本語国際学級に在籍している先生には、PTA 活動にも多く参加している先生もいました。多様な家庭環境の中で生きる児童を、できる限りメンタル面でも支えようとしています。また、保護者への対応としては、保護者会や学級通信、家庭訪問を行っています。必要に応じて通訳もつけます。学級通信は、韓国語、中国語、英語、また日本語の 4ヶ国語に翻訳しています。状況に応じて、随時家庭訪問を行っています。このように、保護者とも密に連絡を取るようになっています。また、朝の職員会議で、週一回教師間でも情報交換を行っています。このことにより、日本語国際学級と普通のクラスの担任の先生と連絡もとれ、子どもの状況をより詳しく把握しようとしています。また、新宿区は全住民の 10%が外国人です。このような、ニューカマーの子どもたちのために、母語話者の学習サポートを、最大 60 時間の時間を設けて行っています。

最後に訪問を終えて、大久保小の抱える課題としては、主に 2 点挙げられると思います。まず、学習支援段階以前の子どもたちのアイデンティティ・クライシスの問題です。これは、日本語を習得して日本語を話す子どもと、日本語をまだ話せない親との、親子間家族間コミュニケーションギャップの問題に関わります。また、ニューカマーの子ども

たちの多くは、それまで持っていた自分の文化を捨ててしまう傾向もあります。つまり、セミカルチュラル、中途半端になってしまうことです。今まで自分の持っていた文化と、これから親しむ日本の文化、その両方を持ちあわせるのがベストですが、どちらかに偏ってしまう、またどちらか中途半端になってしまう。その中で、自分はどうして日本にいるのか、なぜ日本語を勉強しているのか。そのようなことがわからなく、戸惑ってしまう子どももいます。また、来日時期や来日理由などが実に様々なことにより、子どもたちが困っていることは、一般化できないと思います。生活文化や学校文化、また家庭環境、また日本語の習得度の差など実に多様です。何よりも、日本の感覚の習得が容易でないゆえだと思います。このようなことから、個人の状況の多様性を切に感じました。一人一人の子どもの状況を見ないと、何もわからないと感じました。以上です。ありがとうございました。

和田:では次にブラジル人学校の報告をお願いいたします。

<ピタゴラス太田校訪問の報告>

渡邊桃子:こんにちは。ブラジル人学校についての発表をいたします、ポルトガル語専攻 4 年の渡邊です。宜しくお願いします。

まず最初に、私たちが訪問しました、ブラジルピタゴラス太田校の概要を紹介させていただきます。ブラジルピタゴラス太田校は、1999 年にブラジル政府の学校法人が日本に設立した、ブラジル政府教育省の認定学校になっています。太田校同様、ピタゴラスの姉妹校は、日本国内のブラジル人集住都市に多くあります。学校の近くには、自動車や電気機器メーカーの工場がたくさんあるため、ほとんどの生徒の親は、そういった工場で働いているということでした。生徒数はおおよそ 270 人で、乳幼児から高校 3 年生、大学に行く前までの生徒が在籍しています。ピタゴラスで教えている先生というのは、ブラジル国内のピタゴラス学校法人の中から、ローテーションの方式で派遣されてくる、ブラジルでの教員免許をもつ先生たちです。そして、日本語を教える先生は、ブラジルに在住経験のある日本人を

採用して、日本語教育と日本文化の授業を行っています。

次に、ピタゴラスの一日について紹介します。ピタゴラス学校は、先ほども申しました通り、ブラジルの教育システム、教育カリキュラムと同様に教育を行っています。ブラジルの学校は、朝、昼、夜の3部制をとっているために、ピタゴラス学校も、正規の授業というのは、午前中までの5コマで終了します。また教科書、教材など、教えている内容も、ブラジル国内のピタゴラス学校と同様のものを教えています。また、教育方針についても、日本のように、知識を覚えるといったことより、自分の疑問に思ったことを調査していく力、また、自分の意見を相手に伝える力、というものの育成に、力をいれているとお話してくださいました。このように、ブラジルと同様のシステムをとる中、日本にある学校として日本独特の、また、日本の生徒や保護者たちのニーズに応じた変化というのが、ブラジルとは異なる点で見受けられました。そのまず一番大きいのが、見てお分かりの通り、ピタゴラス学校は開門が6時45分になっています。これは、生徒の親のほとんどが、朝早くから夜遅くまで工場で働くために、子どもたちを学校に預ける必要があるからです。6時45分に門を開け、もうそのときにはすでに子どもを預けて待つている親が数名いるということでした。そして夜も8時まで子どもを学校内で預かっています。朝6時45分から夜8時までの間、授業のない時間は、学校内で読書をしたり、友人と話したり、また、学校内のコンピューターを使ったり、自習をしたり、といった時間に当てられているということでした。お昼についても、ブラジル同様に家庭から持参する、また、学校が用意した近くのブラジル料理店によるランチボックス、お弁当のようなものを食べる子どもがいて、日本とブラジルのシステムが混在しているという状況が見受けられました。

また、子どもたちの通学手段についてですが、ピタゴラス校専用の通学バスがありました。これは、遠くの子どもたちに対応するため、子どもたちはバスで通学しています。また、近所に住んでいる子どもたちは、徒歩だったり、自転車だったりします。また高校生になると、自ら車を運転して通学、ということもあるようでした。

そして、ピタゴラス学校を訪問した際に、かつて、日本の

学校に在籍したことのある、日本の学校で学んだ経験のある生徒4人にインタビューすることができました。この4人の子どもたちに、日本の学校とブラジルのピタゴラス、何が一番違うと思うのか、といったことを質問したインタビューが、VTRになっていますので、ご覧下さい。

(VTR)

生徒 1: 修学旅行で、日本の中学校だったら京都、奈良とかに行くんですけど、ピタゴラスはあまりありません。日本の学校に通っているときは、学校の中に入ると勉強勉強でした。

生徒 2: 日本の学校は、運動会とかたくさん行事があって楽しいし、きちんと勉強しているという意識があった。でも、ブラジル人学校は日本と違って、付き合い方が家族みたい。先生とも友達とも。日本の学校で友達というと、3人くらいの仲良い子がいて、あとは普通の知り合い程度だけど、ここでは皆同じくらい仲がいい。

生徒 3: 日本の学校は、自分を温かく受け入れてくれて、いつも気にかけてくれたと思う。日本とブラジルの違いは、日本の学校制度の違いから生まれてくるのではない。日本の学校には、良いところがたくさんあるし、多くのことを学んだ。違うのは、学校でなく気質。日本人は、冷たくて閉鎖的なんだ。また、日本に来て勉強してみると、やっぱり違う。時間割とかが違うというもある。でも、それ以上に…。ブラジル人は、オープンでいることや、人と触れ合うことが好きなんだ。人と話すことが必要な人間だと思う。ここが好きなんだ。

生徒 4: 日本の学校は、いじめがあっても認めようとしていない。この前ニュースで見たけど、いじめによる自殺の原因は、いじめられたからではないと思うと言っていた。学校はイジメを直視したくないの。それが、ピタゴラスに移った理由の一つ。ここは、人とのふれあいが多し、一日のほとんどを過ごす家のようなもの。勉強も大事だけど、先生が親身になってくれることが、内面の成長には必要だと思う。

この4人のブラジル人の生徒たちは、見てお分かりのように、非常に日本語も上手です。時間の都合上、彼女たちのインタビューは、かなりカットされていますが、全部の内容を外のビデオで流しています。字幕がないのですが、ポルトガル語専攻の人に聞いて、確認してください。

この後から、ピタゴラス学校の中の様子に移ります。教室の様子ですとか、学校の運動場の様子、子どもたちが放課後遊んでいたりと、体育の授業で使われているような所ですとか、あとは子どもたち、小学校以前の子どもたちがいる所の映像になります。

以上を踏まえて、私たちがピタゴラス学校の訪問を終えて気付いたことなのですが、まず、私に来た目的というのは、日本の学校とブラジルの学校では、カリキュラムや文化といった面でどこが違うのか、子どもたちがどう思っているのか調べるといったことでした。実際、子どもたちに聞いてみると、子どもたちは洋服のことがったり、勉強内容といったことは、ほとんど気にしておらず、それよりも、人間関係について多くの意見が出ました。友人関係であったり、生徒と教師の関係であったり、というのが日本の学校はとても冷たい。ブラジルの方がより家庭的だ。ブラジルの方が全員と仲良く過ごせる。という答えが非常に多く返ってきました。また、勉強に関しても、カリキュラムの違いというより、自分が疑問に思ったことを、すぐ先生に質問できる環境が、ブラジル人学校にはある、といったような、外国人児童ならではの問題というよりも、日本人児童にも通じる課題、問題点というのが浮かび上がってきたと思います。以上が、ピタゴラス学校ブラジル人学校についての訪問調査の報告になります。ありがとうございました。

和田:では次に、南米系外国人学校ムンド・デ・アレグリアの報告をお願いします。

<ムンド・デ・アレグリア訪問の報告>

黒野:南米系外国人学校の報告をいたします、日本語専攻の黒野美香です。よろしくお願いたします。

私たちが訪問したのは、ムンド・デ・アレグリアという学校です。この学校は2003年、静岡県浜松市に設立されました。所在地である浜松市には、およそ2万9千人の外国人

が暮らしており、中でも、ペルー人、ブラジル人は、浜松市に暮らす外国人の約7割を占めています。このような、南米系外国人児童を受け入れているのが、このムンド・デ・アレグリアです。

この学校は、2005年、静岡県から学校法人として認可を受けました。先ほど紹介いたしましたピタゴラスのように、母国政府から認定を受けている学校は多くありますが、日本から認可を受けている外国人学校はそれほど多くありません。中でも、南米系外国人学校が認可を受けたのは、初めてのことだそうです。しかし、認可を受けて助成金を受けられるようになったとはいえ、財政面では厳しいのが実情だそうです。そのため、問屋街の古い建物を教室として利用していたりですとか、いらなくなった机を、今見ていただくと分かるようにすごく古い机なんですけど、このように、いらなくなった机を譲りうけたりして、学校を運営しています。多くの外国人児童が通い続けられるような低い授業料で、安定した学校運営をしていくことが、非常に難しく、このことが現在の問題の一つだと校長先生はおっしゃっていました。

2006年現在、ムンド・デ・アレグリアでは、ペルー人児童とブラジル人児童、合わせて計113名が学んでいます。そのうち、園児は16名、小学生は48名、中学生は15名、高校生は34名です。彼らを教えているのは、5名の常勤の教師と5名のボランティアでした。校長は日本人、教頭はペルーで教師をしていたペルー人であることに代表されるように、日本人教師と外国人教師が協力し合って、学校を運営していました。

この学校は、もともとペルー人子女のための学校として設立されました。しかし、浜松市にあるということもありまして、ニーズにこたえて、2005年からは、ブラジル人児童の受け入れもするようになりました。そのため、現在は、ブラジル人児童のためのクラスと、ペルー人児童のためのクラスがあります。人数は、私たちが訪問していた感じでは、半々くらいでした。教育環境や言葉により、親子が断絶してしまうですとか、児童が日本語も母語も中途半端なセミンガルな状態に陥ったり、非行や犯罪に走ってしまう、という、外国人家族が抱える問題を背景に、日本にいながら、母語で教育を受けられる学校が必要だと考えられ、このム

ンド・デ・アレグリアが作られました。

ところで、この学校には、他の外国人学校と異なる特徴があります。外国人学校の多くは、母国に帰ることが前提とされています。そのため、母国のカリキュラムに沿って授業が行われ、母国の学校に対応できる力を養成することを目指しています。しかし、実際浜松市で暮らす外国人の実情を考えますと、彼らの多くは、日本に定住しており、おそらく日本に永住することになります。ムンド・デ・アレグリアでは、このように母国に帰らず、日本で暮らすケースが増加していることに目を向け、日本で生活する力をつけ、日本で進学することを意識した教育が行われていました。このような特色は、日本人によって作られた学校であるということも、関係しているのだと思います。外国人、日本人の両方の視点から、日本で共生していくことが考えられているのを感じました。そのような視点は、授業にも反映されていました。ここで、授業の様子をご覧ください。

今ご覧いただいたのは、園児が遊びながら、アルファベットや数字を覚えている時間です。これは、小学校の午前中の授業の風景です。これは、小学校低学年のペルー人児童に、スペイン語の文法、発音を教えているところです。

このように、午前中は、母国政府の認定を受けたカリキュラムにのっとり、母語で授業を行っていました。この学校では、何学年かが一緒に学んでいました。この授業では、ある学年の生徒に何かを教えている間は、別の学年の生徒には課題を与えて解かせる、という方法で、小学校低学年と一緒に学んでいました。ご覧いただくと分かるかと思いますが、ホワイトボードが3つに分けられて、各学年に振り分けられていました。午後は、日本で暮らしていくことを考え、日本語の授業が行われていました。また、小学校1年生では、試験的に、日本で教えられている算数と生活科の内容を教えており、日本語「を」学ぶだけでなく、日本語「で」学ぶ機会も提供されていました。

この写真には、クラスの係が書かれています。給食係ですとか、掃除係などの係です。それ以外に、授業以外の学校生活では、このように制服を着たりですとか、先ほどの係で仕事を分担したり、日本と同じような学校文化が見られました。

最後に、訪問を終えてですが、ムンド・デ・アレグリアを訪問して、何よりもこの学校が日本での永住を意識していることが、強く印象に残りました。私自身、浜松市の出身ということで、年々周りに外国人が増えているということを感じていました。ある日突然、同じ学校や同じクラスに日本語の話せない外国人児童が転入してくる、といったことを何度か経験してきました。そんなこともあり、外国人児童の教育というものは、他人事でなく、まさに、自分の足元にある問題だと考えておりました。ですから、このような状況をきちんと受け止め、そんな社会で、どう一緒に暮らしていくかを考えていく、というのがとても現実的だと思いました。また、それについて、外国人だけでなく、そこに暮らす日本人も一緒に考え、日本側の視点を取り入れられていることが、とても興味深いと思いました。このような、日本に定住する外国人を対象とした教育支援というものが、これからますます増えていくと思いますが、今回、ムンド・デ・アレグリアの先生方とお話をして、日本語で教育を行うための教材や人材、環境が、まだまだ足りないということがわかりました。そんな中で、私たちなりにできることを模索して、私たちなりに学習支援を行っていきたいと思いました。これで、ムンド・デ・アレグリア学校の訪問報告を終わります。

和田:では最後に、インド人学校の報告をお願いします。

<India International School in Japan 訪問の報告>

谷村隆昌:インド人学校 India International School in Japan を訪問いたしました谷村と申します。ご報告させていただきます。

まず最初に、こちらの写真なのですが、これが学校の外観の写真であり、5階建てのビルを使って授業を行っています。こちらの女性のいるところが、正面入り口でした。こちらにありますのが、スクールバスなのですが、遠方から来る児童のために、スクールバスも用意されています。横にありますのが、看板ですが、非常に小さな看板でして、初めて来た人にはわかりづらいという印象を受けました。

なぜ我々がインド人学校を訪問したかなのですが、まず一点目として、日本でIT関係の職につくインド人が増加し

ている、というのに興味関心がありました。二点目として、数学やコンピューターで注目を浴びる、インド人学校の授業、特に、教育内容や学校文化に関心がありましたので、是非訪問して調査してみたいと思いました。三点目としては、アジアのインターナショナルスクールの例を見てみたい、というのがありました。

India International School in Japan の設立の流れですが、まず、インド国内と同じ教育内容を提供できる学校を日本に作りたい、という、日本在住のインド人の長年抱いていた夢がありました。それはなぜかというと、多くのインド人生徒は、日本滞在が短期でありまして、日本の学校や日本にあるインターナショナルスクールでは、彼らの求める教育水準に達しておらず、インドに戻ったときに、特に数学やヒンディー語の授業に遅れが生じてしまうからということです。そして、日本人を含む創設メンバーたちが、資金を出し合って、2004年8月に開校いたしました。校舎は東京都江東区森下にあります。生徒数は、現在120名。幼稚園の年少クラスから9年生までを含んで、220名です。

教師ですけど、夫の仕事の都合で来日した配偶者たちで、彼女たちはみんな教員免許をもっています。私たちが訪問したときも、教師は皆女性でした。授業料は、年間60万円。他のインターナショナルスクールに比べて、若干安くなっています。生徒の国籍は、大半がインド人なのですが、バングラデシュ、パキスタン、シンガポール、日本の児童もいるようです。

次に授業概要ですが、一コマは40分です。言語はCBSE、これはCentral Board of Secondary Educationという、インドの政府系教育機関の名称なんですけど、それに沿って、授業は全て英語で行われていました。もちろん、ヒンディー語も一つの教科として教えられていまして、日本語の時間もあります。科目もここにあるように多岐に渡っているのですが、今回の訪問では、幼稚園の授業しか見学できなかったもので、科目ごとの特色を調査することはできませんでした。その代わりに、幼稚園の授業の映像を撮ってきましたので、一部紹介したいと思います。

まずは、リズムという授業なのですが、身体全体を使ってコミュニケーションをはかるという非常に可愛い映像ですので、皆さんご覧下さい。次に紹介しますのが、ちよ

ど翌日が運動会ということでして、予行演習をしている様子です。予行演習は、学校の隣にある建物のガレージの一階で行っていました。ご覧下さい。

最後に、訪問を終えての感想です。まず、最初に驚いたのが、インド人学校ということで全てヒンディー語で授業が行われているのかと思っていたのですが、授業の言語が全て英語だったことです。これは、訪問を終えてから分かったことなのですが、日本にいるインド人というのは、本国ではエリート層の人たちで、やはりここにいる子どもたちも、英語を話せるというのが、本国でのエリートとしての証になるようで、幼稚園レベルでも英語で授業を行っているということでした。非常に驚きました。また、彼らの場合は、短期の滞在で、帰国が前提となっています。したがって、日本にいる外国人児童だからといって、全ての外国人児童が我々の学習支援の対象となるわけではないのではないか、と思いました。ブラジルやペルーの外国人児童と違って、すぐに帰国してしまう彼らに対して、我々が面倒みなければいけない、と一概にはくれないかな、と感じました。以上で、報告を終わります。ありがとうございました。

和田:では、最後に、調査を終えてのまとめについてお願いします。

<調査のまとめ>

中村未央:最後に、この調査の結果、まとめを発表します、ポルトガル語専攻4年の中村未央です。宜しくお願いします。

私たちの調査が始まったきっかけは、一つの疑問からでした。支援室がサポートするメンバーの中で、先ほどの和田さんの一番初めの言葉にもあったように、外国人児童の学習支援において、疑問を感じるメンバーが出てきた、ということが挙げられます。その疑問というのは、なぜ児童たちは学校で学習支援や適応困難を抱えているのか、という疑問です。その疑問を調査したいと思って、私たちの調査は始められました。

調査に対して、私たちは一つの仮定を立てました。このような学習困難や適応困難という問題は、児童の出身国と日本との間で、学習カリキュラムや学校文化が異なってい

るからではないか。そうだとしたら、それを調べてみれば、何か学習支援において新たな手助けになるのではないかと、思い調査を始めました。そこで、調査の手立てとして、始めに日本の公立小学校2校、大久保小学校と京町小学校で調査いたしまして、教師の皆様インタビューし、各カリキュラムと学校文化について質問しました。その次に、3つの外国人学校でそれらがどのように違っているのか、比較検討してみようと思いました。

結論なのですが、調査を開始してからこの調査が終わるまでに、私たちの中で感じたことは、学校のカリキュラムや学校文化というのは、支援における問題の一つであるに過ぎず、多様な問題が他にもあるとわかってきました。具体的に、課題の多様性について、これから見ていきたいと思えます。

一点目の課題といたしまして、日本語の習得度という問題が挙げられます。先ほど、大久保小学校の例にありましたように、個人差、また出身国によって、日本語習得度のレベルが違う、というようにわかっています。漢字圏出身の児童の方が、習得のレベルが早い。それ以外の子どもは、少し習得が遅い、というのが先ほどの発表であったかと思えます。また、そのような日本語の習得度は、学校への適応にも影響していて、生活を送る上でも、大変な困難を伴っている、とわかっています。

二点目ですが、家庭環境ということが挙げられます。これも、大久保小学校の例なのですが、家庭の安定、親御さんの関心の度合いなどによって、児童のモチベーションへの影響がある、ということがわかっています。教育を十分に行う、環境としての家庭の安定が、確保されないと、子どもたちの学習へも、大きな影響が及んできます。その例として、家庭内のコミュニケーションギャップ、また、本国に帰国するかしないかという帰国の見通し、そして、親の関心度、が子どものモチベーションにも影響してくるということが挙げられます。このように、児童個人個人でモチベーションは違うのですが、その個人のモチベーションというのは、親の子どもの教育に対する関心度というのが、大きな影響を持っています。

次に三点目なのですが、生活習慣です。これは、大久保小学校や京町小学校のところで挙げられたように、掃除

の仕方、先生との関わり方などのことです。具体的にいうと、先生の呼び方が日本と違う、という点が挙げられます。些細なことではありますが、慣れで解決するとはいえ、このような生活習慣の違いというのは、児童の適用において、スタートを難しくさせるということがあります。

次に四点目ですが、人間関係の距離感、ということが挙げられます。これは先ほどの例でもございますように、インドの例やブラジルの例では、顕著だったと思えます。インドの例では、先ほどの映像でもあるように、生徒と教師の関係が、より深くアットホームであること。ブラジルにおいても分かるように、より温かくフレンドリーな関係が、作りあげられています。挨拶の仕方、ハグをして、笑顔で挨拶をするようなことであったり、先ほどのブラジルでいいますと、校長先生が教室に入ってきたときに、本当にみんなが喜んで顔をされていて、子どもと先生の間関係が、とても自然であったと感じとれたと思います。何でも質問しやすい環境など、学校生活を過ごす上で、このような人間関係の距離感というのは、とても重要な意味を持っていると思います。逆に、日本の学校で満たされていないと、人間関係の難しさのギャップを感じ、ストレスを抱いてしまう、ということが挙げられます。

最後の点といたしまして、学校へのニーズということが、課題として挙げられます。このニーズについてですが、一点目は、日本人学校と外国人学校に求められる教育ニーズが違う、ということです。日本の公立小学校に通う児童の多くは、日本に定住予定、または日本で就職、進学する予定の子どもが多い、とわかっています。ですが、外国人学校に通う生徒の多くは、帰国予定の生徒であることが、従来は多かったです。ですが、最近では、外国人学校に求めるニーズにも多様性がある、とわかっています。インドの例でいいますと、コンピューターやIT関係の職ということから、日本には短期の滞在で、いずれは本国のインドに帰ってしまう児童なのですが、このような児童の場合は、母国の教育に上手く対応できるように、英語やコンピューターを取り入れたインド人学校で学ぶことが多いです。ですが、ブラジル人、ペルー人学校の場合は、先ほどの発表にもございましたように、このような短期滞りでそのまま母国の教育に上手く対応する、ということを前提にした教育では

なく、日本で進学就職することも頭の中において、日本の生活を送っていくニーズも、今は高まっています。このように、必ずしも外国人学校に求める教育ニーズというのが、帰国して進学就職という道を歩むだけでなく、日本での就職進学をも前提とした、将来設計まで考慮にいったような、教育ニーズがあると考えられています。

今日、このような課題を踏まえうえで、現在、どのような学校作りが必要なのでしょうか。私たちが、この学校訪問を通して、感じたことがあります。国際教室担当専門の教員の養成が、少し遅れているという現状があります。京町小学校の訪問を終えて分かったことなのですが、この京町小学校では、現在の国際教育は一人の先生によって、成り立っているような感じです。それ以前にも、担当していた先生はいらっしゃいましたが、そのようなノウハウが途切れてしまって、引継ぎがなされていないまま、突然国際教育の担当になり、外国人児童の教育に向き合うことになってしまった先生は、戸惑いがあったと言っています。ですが、このような引継ぎが上手いけば、もっと効率的であり、先生方の負担も減るのではないかと考えています。国際学級の現場で、教育にご尽力された先生が、また別の学校に転任しても、このような教育現場に配置されるべきだと思いますが、必ずしもそうではなく、全く違う方向に配置されてしまう、という問題もあります。このように、国際教室担当専門のリソースをもった先生を、養成し適切に配置することが求められていると思います。

二点目ですが、日本の学校のありかたを見つめなおすことが必要ではないかと考えています。先ほどのブラジルのインタビューのところでお分かりだと思いますが、日本的な人間関係のコミュニケーションの取り方の違いが、浮き彫りになっていると思います。日本の学校で、不適應を抱えている生徒たちは、人間関係の面でストレスを感じていることが多いようです。確かに、日本の学校のいい点として、学校行事が多いこと、また、学習の内容が充実していること、が挙げられますが、ネガティブな面、学校環境のあり方を、再考する必要があると感じられます。

では、外大生である私たちにできることは何でしょうか。まず一つは、母語を理解する、ということが必要だと考えています。学習支援のツールとして、母語を理解することは

もちろん必要です。それだけでなく、児童の悩みや日本で感じていることを聞く力も、必要であると考えています。もう一つ必要なこととして、母国の文化や性格を知ることが必要だと考えています。どうして児童が困難を感じているのか、先ほどあった課題の多様性を考慮しなければ、児童は言葉だけでなく、生活面、また家庭の状況など、いろんなところで困難を抱えている、と理解しなければ、相対的に問題を解決できないと考えています。このように、個別に対応し、柔軟に対応しながら、学習支援を行っていくことが、私たちは必要だと考えています。以上で学習支援調査班の発表を終わります。ご静聴ありがとうございました。

最後になりましたが、今回インタビューでご協力いただいた皆様、また調査の際にアドバイスをいただいた皆様に、この場をお借りして、感謝を申し上げます。

先ほど到着した、スペシャルゲストの先生がいらっしゃいまして、今回の京町小学校のインタビューの時にご協力いただいた、国際学級担当の鈴木玲子先生が、こちらのほうにいらしています。ちょっと一言いただきたいのですが、宜しくお願いします。

鈴木玲子:どうもみなさんこんにちは。京町小学校の教員の鈴木玲子と申します。学生さんがいろいろ話を聞きたいと小学校にいらしてくださいまして、私の知っていることは全てお知らせする、ということでお話ししましたが、お役に立ったでしょうか。私は、去年から、国際教育を担当してまして、外語大の皆さんに学習支援をいただきながら、私も学生さんのパワーに圧倒されながら、勉強しながらここまでやってきました。京町小学校と外語大の繋がりも、またずっと持っていけたらなと思って、今日は参加させていただきました。ありがとうございました。

<質疑応答>

和田:質問などございましたらお願いします。

質問者:先ほどは名のりませんで、江戸川区立葛西中学校日本語学級担当の小川と申します。私の学校も、全校生徒の600人のうち、外国につながる生徒が、ちょうど1割で60人ぐらいです。それで関心をもったのが、インド人学

校です。今、インド人が急増しているのは、江戸川区西葛西で、学校のすぐ近くなんですが、本当に町中にインド人が多くて、インド料理店やインド食街など、たくさんインド人がいます。それで、いろんな地域の方が関心をお持ちになって、江戸川区総合人生大学とか早稲田大学の先生方が、江戸川区における国際教室にインド人が増えているだろうと思って、葛西中学校日本語学級にいらしたんですね。二つの団体が調査にいらしたのですが、実際は一人もおりません。全部、江東区のインターナショナルスクールに行っています。なぜなのだろう。この地域にあるのに、何の関係もない、一人も入ってこない、ってなぜなのだろうと思っていました。一つは短期滞在ということと、もう一つが日本の学校の教育水準がインドの人の求めているものより低いということで、そうだったんだということがわかりました。インド人の学校の調査にいらした方に聞きたいのですが、日本にいながら、インド人の子どもがインド人社会の中で暮らすということについて、例えば、日本の社会との関わりとか、日本人との触れ合いについて、学校側は何かお気持ちがあったのかな、ということ伺いたかったです。

谷村: 答えさせていただきます。学校の先生に伺ったのですが、例えば、体育の授業などで、日本の大学生のボランティアの人に先生をお願いして、一緒に授業をしたり、日本の大学生と交流する機会を設けているのも、日本の社会とのつながりの一つだということを、おっしゃっていました。やはり、小学校の社会科の授業でも、日本の近隣施設に訪問して授業をする、という機会もあったので、なるべく外に向かって、日本社会と関わっていこうという、そういった姿勢を取っている、というのは強調していました。

和田: 他にもありましたら。

質問者: 留学生日本語教育センターで留学生に日本語を教えております、小林です。調査班の中の、ムンド・デ・アレグリアに一つ確認したいと思います。そこでは、日本永住を意識した教育を行っている、ということでしたけれども、午後の時間の内容が、いまいち伝わってこなかったんですが、日本人教師がいるのか、どういった内容で教えてい

るのか、お願いします。

黒野: お答えします。私たちも、訪問したのが、実は午前中だけでしたので、実際に授業を体験することはできなかったのですが、午後の授業は、基本的に日本語を教える授業だ、と先生がおっしゃっていました。何も日本語ができない状態で日本に来て、ムンド・デ・アレグリアに通い始める生徒が多いので、それこそ、日本語の基礎を教えているそうです。その中でも、先ほど紹介したように、日本語で日本人が日本語を教える、といった感じです。日本人の先生方も5名くらい、ちょっと人数はわからないのですが、いらしゃいました。スペイン語やポルトガル語ができるボランティアの日本人の先生というのもいました。

質問者: 本学院生の猪狩と申します。同じくムンド・デ・アレグリアに伺いたいんですけども、この学校が、2005年に初めて学校として認可された、とあったのですが、ここで一点質問です。日本での進学を意識した教育のお話があったと思うんですけども、ちょっと専門的なことになりますが、この学校を卒業した場合は、そもそも日本での中学校の卒業資格がないのではないかと思います。そうすると、日本の高校への受験資格がないので、そもそも日本での進学を意識して勉強することは難しいのではないかと思います。その点、ご存知の範囲でいいので、お答えいただければと思うのですが、いかがでしょうか。

和田: 高校入学の件ですが、この学校は、幼稚園、小、中、高校があります。日本の高校を出ると、卒業したということになりますが、1年足りないなので、その分は大学に入る前に1年補って、大学の試験を受けなければいけません。高校入学に関しては…。

質問者: むしろ高校までは、この学校でしっかり勉強して、その後大学で、というかたちでしょうか。

和田: はい、本国に帰った場合は、そこを出ていけば高校は出た、ということになります。

質問者:多言語・多文化教育研究センター長の高橋です。私は、当初、学習支援の経験を今日は紹介していただけののかな、と思ったのですが、要するに、学習支援をやっている中で、いろんな疑問や問題や困難を感じた。それを解決するにはどうすればいいのか。そのために調べ、その調査の結果を、紹介していただいたんですね。

私の質問は、調査のきっかけとなった学習支援をやっている上での悩みとか疑問とか、そここのところを、もう少し具体的に話していただけないかというのが一点。その疑問に対して、実際に調査してみたら、こういうことがわかって、これは非常に役に立った。だから、これからは、こういう形でやっていこうという、その道筋が、私はちょっと理解できなかったもので、それについて聞きたいと思います。

例えば、より良い学校作りということで、国際教室担当教員を養成する、という結論がポンッと出てきたのですが、でも、例えば、なぜ国際学級担当の教員が養成されていないのか、とか、こういうことがやっぱりあると思うんですね。単に、養成すべきだとか、見つめなおすべきだとかいう理論では、解決できない問題が、実は背後にはあるだろうと思います。調査の結果、そもそも自分たちの疑問を解決するには、制度的なこういう問題を解決していく必要が国としてある。それに対して、もっと自分たちのできる範囲では、こういうことが必要だったなら、これを経験として生かしていこうとか、ありますか。その辺の、最初の問と質問のつながりについて、もう少しご説明いただけるとありがたいです。

和田:まず困難を感じて調査に至った目的ですが、私の担当した生徒は、ポルトガル語専攻の方にブラジル人の支援をお願いします、ということでお受けしました。しかし、そこまでポルトガル語を用いることはなくて、ほとんど日本語で支援を行っていました。ところが、勉強になると、あまり理解ができていないので、何でだろう、という疑問を、ずっと感じていました。妙にやる気がないとか、私がせっかく来ているのに、「あっち行って」と言われたりしました。それで、もしかしたら、言葉の問題ももちろんあると思うのですが、他にも原因があるのだろうな、と思いました。そう思ったときに、先ほど最初に挙げた二点が考えられたので、調査してみようと思いました。

実際小学校に行ってみたら、文化の違いや掛け算を習っていなかったというカリキュラムの話も出てきたのですが、それ以上に、親の関心度、つまり、親は労働に一生懸命で勉強に対する関心が低いとか、本人もこれから日本に残るのか帰るのかわからないからモチベーションが低いとか、そのような、文化の違いやカリキュラムの違い以外の問題がすごく深刻というか、そういうところに問題がたくさん広がっている、ということに気付いたんですね。

外国人学校もそういうことを踏まえて行ってみたのですが、雰囲気の違いだったり、ということもあったのですが、最初にカリキュラムと文化が違うからなのではないかと予測した以上のものがたくさん出てきました。

それで、私たちが3年間学習支援を行ってきて、学習支援なりの東外大モデルをだそうと思ったんですね。それを出すために、私たちに何ができるか、というと、カリキュラムを知ったり、文化の違いももちろん知らなければいけないのですが、それ以上に、もっといろんな困難を抱えているので、それに柔軟に対応していかないといけないのかな、と段々感じるようになりました。

そして、調査した結果というのは、言葉や文化が違うことに加えて、いろんな多様化していく困難を把握して配慮しなければいけない、というのが、私たちにできることだと思いました。確かに、国際教育専門を養成すべきだといっても、学校やその他にも、確かに高橋先生のおっしゃるとおりで、組織的なものなど、いろんな問題があると思います。でも、小学校を訪問する中で、「いきなり任されて何のノウハウもないまま手探りで始めて」という声が、今回の2校以外にも他の学校でもよくあがるそうです。それで、やはり引継ぎをちゃんとするべきであったり、そういうノウハウを身につけた人がいたら、それは次に行ったところでも、また活かされるだろうと思いました。また、そういう風に私たちが感じたということを、今回学校の関係者もいらっしゃるので、ぜひ知って欲しいと思って、言わせていただいたわけです。

質問者:さっき文化の違いだけではないと言いながら、多くの生活や文化を知る、という結論に達していますよね。だから、確かにいろんな問題があるから、いろんな問題に柔軟に対応していく、というのは分かるんですけど。

和田:やはり、母語や文化を知っていることは、大事なことだと思います。私が今支援している子で、最初は本当にできなくて、でも、私がポルトガル語を使って話しかけたら、「この人喋れるの？」というような嬉しそうな顔を一瞬だけしたんですよ。でも、その後、自分だけ違う言葉で話しているのが嫌なようで、先生からもできれば日本語を使って、という話があったので、ポルトガル語を使わずに、日本語で話したことがありました。でも、やはり言葉が分かる人がいるというのは、それだけ本人にとって安心なんだろうな、っていうのを感じたんです。母語のこととか、言葉なり文化を知っていることは、絶対無駄ではないと思いました。そこで、それはやはり外大生なので加えました。でも、それだけではなくて、やはり多様な問題点についての配慮はすべきだなと思います。

質問者:先ほど質問しました小林です。このセンターだけではなくのですが、平成8年から10年に、文部省のプロジェクトがあって、それに外大も協力して、全国初の全国的な規模の調査を行ったんですね。まさに、みなさんの発表なされた、もっと大規模な調査。私たち、こちらにいらっしゃる伊東先生も一緒に仲間です。当時の文部省に、最終報告というのを提出したのですが、その調査を始めた段階で、今おっしゃったようなことを、私たちもいろいろ問題出しあったんです。けれど、つまり、自分たちに何ができるのか、っていうのが最終的には拡散してしまって、外国人児童の抱える問題が、学習のレベルから踏み越えて生活のレベルまで、どんどん拡散してしまって、焦点がぼけてしまう、と今まさにお話を伺っていて思いました。柔軟に対応するといっても、生活のレベルで、私たちが対応できるのは限りがあるし、自分たちが関わるときに、どこまでやるか、何をやるかということがあります。私たちがさっき申しましたように、平成8年から10年のプロジェクトでは、私たちセンターとして、教材開発のような、基礎的な調査ということで終わっているんです。子どもたち、本当に深いんですよ。考えたら、もう眠れなくなってしまうような、子どもたち一人一人が抱えている事情があるから、何ができるのか、そのために現状を知る、というので、この調査をされたのはすごくいいなと思いますが、あんまり広げすぎてしま

ますと、役に立つようで、役に立たなくなってしまう、ということも出てきてしまうかもしれません。なので、持っている語学力、そして事情に通じているのを生かして、子どもの学校生活に焦点を絞って、どこに焦点を置くか、というのを、もう少し考えた方がいいのかな、と感じました。先ほど質問したように、外国人学校に行った、しかし、肝心の日本語の授業を見ていなかった、というのは情報としては足りないのかな。

和田:やっていることがすごく多様すぎて、幅が広がってしまっている、ということですね。これは、支援室ができる前の出来事なのですが、支援をしていた子の家に直接伺う、というのをしていました。プリントなどが提出されない、ということで、家に持ち帰って、説明しながら一緒に埋めてそれを学校に提出する、ということをしていたんですね。家に遊びに行くと、ということをしていたんですが、だんだん仲がよくなってきました。それで、「仕事を探しているから、今度ハローワークと一緒に行ってよ」と言われたこともありました。今は支援室ができて、私たちがサポートしてくれる方々がいるので、家に行くのは止めて、学校中だけの付き合いにしよう、という風に、幅を決めてはいます。ですが、その前は、そのことで悩んだことがありました。

質問者:早稲田大学の大学院で、子どもの日本語教育を勉強しています、大田裕子と申します。ありがとうございます。

質疑応答をお聞きしていて、問題が多様である、子どもの抱える背景や家庭の背景が多様であるというのを、その通りであると、私も実感しています。ただ拡散してしまうと捉えるのではなく、全ての問題が全部絡み合っていて、言葉の発展だったり、学習だったり、人としての成長に全部影響している、と、繋がりでとらえることが、すごく重要ではないかと思っています。日本語指導者にしても、担任教師にしても、それぞれの先生一人ですることってというのは限りがあって、自分一人で、全てその子の教育を何とかしようと思ったら、無理だと思います。そこで大事なのは、できる人ができることをやる、そのできることが、それぞれ違うので、どうそれを過不足なくやっていくかというのが、

大事かなと思いました。そこで、母語が分かる人っていうのは、何ができるかという、日本語では細かい感情のこととか複雑な話ができない、まだそのレベルじゃない子どもが、母語で話すことっていったら、本当の心のことだったり、もっと年齢相応に発達した本当はもっと言いたい難しい話だったり、社会的な話が出てきたり、また、ご両親と話ができる、ご両親と母語で深い話ができる、というのは、やっぱり母語ができる方ならではのものだと思うんですね。結論で出された、母語を文化や生活を知るといのは、すごく大切ですが、知ったことを知らない人に、是非発信して欲しいな、と思いました。知りたくても母語がわからないので、わからないまま手探りで支援をしている他の先生とか、ボランティアの方に、実はこうなんですよ、この国ではこうなんですよ、本当はこう思ってるんですよ、ご両親はこう思ってるんですよ、というのを、情報として共有して、一緒に何していきましょうか、というのを話し合っ、それぞれの立場で何ができるかを一緒に考えていけたらいいな、と思いつながら、情報収集共有を手探りでやっています。そこで、外大の学生さんたちが、そういうところに、さらに、世界に発信していったって欲しいな、というのがあります。国のカリキュラムが違うんだということも、一般にはよく知らないし、だからこんな戸惑っているっていうのも、知られていないと思うんですね。そういうことを何で違うんだろう、なんで上手いかわからないだろうと、自分一人で考えるんじゃなくて、もっとこうだからこうなんですよ、だからこうできるんですよ、って発信していただくと、もっともっと状況は変わっていくのではないかな、と思いました。

和田:ありがとうございます。確かに先生との連絡に関しても、先生同士の連絡はあるみたいなのですが、私たちも週1回2回だとはいえ先生と連絡をとることは大切だと思いますし、また、私たちの感じたことを、さらに、今度後輩にも伝えておくことが大事だと思います。どうもありがとうございます。これからも頑張ります。

何か他に質問ありますか。

谷村:議論も尽きないことだと思いますが、時間の都合上、質問は次の方で終わらせていただきます。他に質問があ

る方がいらっしゃいましたら、お配りした質問用紙にご記入いただきますようお願いいたします。

質問者:すみません、私府中国際交流サロンで日本語を教えさせていただいています。外大の生徒さんには、金曜日 5 時からの学習支援をお願いしていて、日本語を教える下さるというので、いつも助けていただいたり、外大の先生には教授法を教えていただいたり、お世話になっております。ありがとうございます。的を射ているかわからないのですけれども、私たちはお母さんの日本語のお手伝いをする人が多いんですね。それで、インドネシアの方とか、お子さんが日本の学校に通って、給食とかピアスとかいうものに、戸惑うってことがあります。宗教的に食べられないものがあったり、インドネシアの方なんかは、生まれたときにピアスを付けます。それがしきりになっていると、伺ったことがあります。そういう場合、先ほどは、日本の学校ではピアスはして来ないんだよ、ということをお子さんに説明したりするんでしょうけど、宗教上できないとか、社会的なものであれば、日本の生徒さんや日本の先生方にそれを理解していただいて、対応していただくとか、そういう風な対策をされたり、お話したことはありますか。どういう風に、お母さん方に私たちは説明したらいいのかわからないので、お聞きしたいんですけれども。

中村:ご質問ありがとうございます。先ほどの発表であったように、ピアスや生活習慣の違いのことで、外国人児童に理解するように言っていくことではなくて、日本の子どもにもどう伝えてどうわかってもらうかということに関してですね。京町小学校の先生に、その点について聞きたいなど、何か言及されていたと思うので、一言伺いたいのですが。


鈴木:学生さんがいらしたときに、申し上げた一つにありました。今 2 年生のブラジルの子が、1 年生のとき、たまにピアスをつけてきて、日本の周りの子が「どうしてあの子だけいいの。」と質問を受けたり、ブラジルの子もつけているのが当たり前の感覚ですので、「どうしてつけちゃいけないの。」という、相反する意見がありました。ブラジルの子には、日本の学校では装飾品はつけてこないんだよ。こういうこと


だから、危ないこともあるし、という話をしてくて、今はしておりません。今度、反対にしてくなくなったら、日本の子どもたちが「あれ、してないね。どうしたの。」という風になって、日本の子どもたちにも、学級活動などで国によって装飾をつけたり文化の違いがあるんだよ、というのは国際理解教育の中でやってきています。最初の「どうしてつけてるの。私たちはつけちゃいけないの。」というのは、やはりワンステップずつ子どもたちに指導する中で、学校の雰囲気の中で、一つ一つ解決してくているように思います。思いやりの心も日本の子どもたちには出ているのかな、という気がします。6年生なんか、「じゃあ、私もつけていいわね。」と行ってつけてきて、私たちは何も言わないですが、そのうちきまりが悪くなくて取ってくるっていう場合もあって、日本の習慣に慣れてというか、先生方に指導してもらったり、周りの子みたいに、「あ、そうなのか。」ということで、自然につけてなくなりました。また、次の子がブラジルから来しても、あまり違和感はないんじゃないかな、と私の方は楽観的な見方をしていますが、やはり一步一步、私たち大人のサポートがあって解決していくんじゃないかな、と思います。今のところ大きな問題にはなってごさいません。解決しました。ありがとうございました。

谷村:ちょっと時間も少なくなってきましたので、以上で質問を打ち切らせていただきますが、皆様の配布物の方に質問表が入っていたと思いますので、そちらの方に事細かに書いてください。後でまたコメントさせていただきます。


和田:これに関しては、先ほどのように、私たちが入り口に立って受け取りますので、お渡しください。


黒野:ありがとうございました。以上をもちまして、第二部の研究報告を終了いたします。それではこれより休憩時間といたします。


学生多文化フォーラム
 学ぶ・実践する・担う
「東外大モデル」の軌跡と展望
 第二部 多様化する学習支援
 2006年12月2日(土)
 東京外国語大学
 留学生日本語教育センター さくらホール
 発表者 和田更沙


調査のきっかけ・目的


- 年齢に応じた学年に入る
...母国とのカリキュラムの違い？
- ピアス、お金、
...学校文化の違い？

→言語以外の違いによる
困難・とまどい



学校選定


- まず問題を把握...公立小学校訪問
以前からつながりのあった学校
 - 川崎市立京町小学校
 - 新宿区立大久保小学校
- その原因を探る...外国人学校訪問
母国と同じカリキュラムを実施
 - ブラジル人学校
 - 南米系外国人学校(ペルー人学校)
 - インド人学校




川崎市立京町小学校


山田寛子 高野邦夫 中村未央 服部聡依

学校概要


- ▣ 周辺には外国人労働者が多数在住
- ▣ 「外国人児童教育支援センター校」に選ばれ、委託を受ける(文部科学省より)
- ▣ 全児童600名
外国籍・二重国籍の児童15名
- ▣ 8名(ボリビア人児童2名、ブラジル人児童1名、フィリピン人児童5名)に日本語指導

外国人児童


- ▣ 周囲の児童との衝突
- ▣ 給食
- ▣ 教師との関係
- ▣ 掃除の仕方
- ▣ ピアスの使用

→相互理解を促し解決

外国人保護者

- ルビ振りプリント
- 外国人保護者会
- PTA活動
(清掃、カーテン洗い、ふれあいまつり)

日本人保護者に理解を求める

国際学級担当の教師

- 良い面を引き出し、自信を持たせる指導
- カードを使った指導(平仮名、九九)
- 担任教師との連絡カード
- 家庭訪問
- JSLカリキュラムの研修

訪問を終えて

- 京町小が抱える3つの課題
 - 母語教育の実施
 - 国際学級の引継ぎ・専門教師の配置
 - カリキュラムの把握
- 感想
 - 日本人児童にも言葉と文化の違いを説明し、相互理解がうまくいっているのが良い。
 - 児童や保護者が言葉がわからなくてもできること、違う文化を知っているからこそできることを実施して良い。

新宿区立大久保小学校

佐藤美幸 丸井ふみ子
黒野美香 和田更沙

学校概要

- 立地・・・繁華街近くの住宅街
- 全校生徒・・・約140名
うち、約6割が外国にルーツを持つ
- 国際学級在籍者・・・43名(7/1現在)
- 外国人児童の急増・・・1980年代後半から
- 外国人児童・・・さらなる増加傾向
- 日本人児童・・・他学区を選ぶケースも

日本語国際学級

- 母語別児童数
 - 韓国語・・・17名
 - 中国語・・・9名
 - フィリピン語・・・8名
 - 英語・スペイン語・ポルトガル語・・・各1名
- 授業時間数・・・週2～5時間
- 入門・初級・中級の3クラス
- 担当教師は3名

外国人児童

- 保護者…大半はサービス業に従事
- 来日の経緯…多種多様
- 在籍期間…短期から長期までさまざま
- 日本語習得・学習到達度…個人差が大きい
- 漢字圏出身の児童…日本語習得早い傾向
- 学校への適応…日本語習得が進んでいる方が適応しやすい傾向

外国人児童の抱える困難

- 学習到達度…低い
- 高校進学率…低い
- 学習の妨げとなり得る要因
 - ・ 家庭の安定度・関心度
 - ・ 将来の見通し・帰国の可能性
 - ・ 本人のやる気・動機づけ
- 生活面での習慣の違い

学校側の取り組み

- 児童のアイデンティティ形成への配慮
- 児童の生活全般に渡る支援
- 保護者への対応
 - 保護者会(年2回)
 - 学級通信(4ヶ国語に翻訳)
 - 家庭訪問(随時)
- 教師で情報を共有…週1回の情報交換
- 母語話者による学習サポート…最大60時間

訪問を終えて

- 大久保小の抱える課題
 - ・ 学習支援段階以前の、子供たちのアイデンティティ・クライシス
 - ・ 子供たちが困っていること
 - …一般化できない(生活文化、学校文化、家庭環境、日本語習得など)

→個人の状況の多様性

ブラジル人学校 COLÉGIO PITÁGORAS OTA



服部 聡依
渡辺 桃子
中村 未央
佐藤 美幸

学校概要

所在地:群馬県太田市
設立:1999年
(ブラジルの私立学校法人、ブラジル政府認可校)
生徒数:約270人(乳幼児~12年生)
教師:ブラジルの教員免許が必要
(採用はブラジルと日本で)
立地:自動車、電気機器メーカー等の工場が多い

●●● ピタゴラスの一日

- 6:45 開門
- 8:15 授業開始
 - ・50分×5時限
 - ・2時限後に15分間の休憩(おやつあり)
- 12:30 授業終了、昼休み
 - ・昼食は持参or給食
 - (ブラジル料理のランチボックス)を選択
- 13:15~15:30 補習授業(自由参加)
- 20:00 閉門

●●● 訪問を終えて

- 日本の学校とピタゴラスの一番の違い
 - 人間関係
 - ・友人同士
 - ・教師と生徒
- 全ての子どもに通じる課題

南米系外国人学校 MUNDO DE ALEGRÍA

黒野美香 指山亜希子 和田更沙

学校概要

- ・ 2003年静岡県浜松市にペルー人学校として設立
- ・ 2005年静岡県から、南米系外国人学校として初の認可を受ける



生徒・職員の構成

- ・ 在籍者数 113名(2006年現在)
園児16名、小学生48名、中学生15名
高校生34名
- ・ 教師 常勤5名、ボランティア5名
校長は日本人、教頭はペルー本国からの教員
- ・ ブラジル人児童のクラスとペルー人児童のクラスがある(小学校)

学校の設立背景と特徴

《背景》

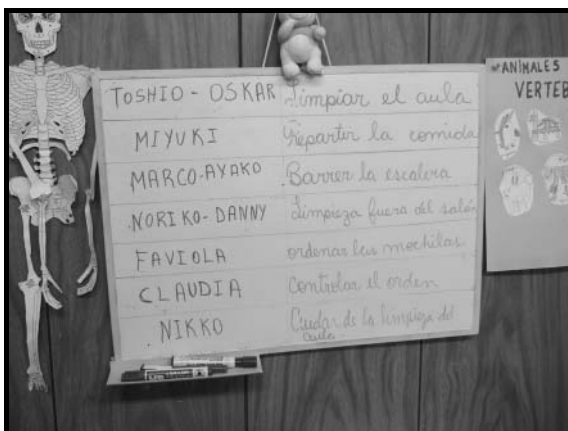
- ・ 親子の断絶、セミンガル、犯罪・非行

《特徴》

- ・ 外国人学校・・・母国へ帰ることを前提
- ・ ムンド・デ・アレグリア・・・日本に定住・永住する
ケースに眼を向ける
- 日本で生活できる能力をつける
- 日本での進学を意識した教育の必要性

授業カリキュラム

- ・ 午前・・・母国のカリキュラムに沿った授業
- ・ 午後・・・日本で暮らすことを意識した授業
 - ・ 日本語の授業
 - ・ 日本語「で」学ぶ機会
(日本で教えられている算数・生活科)



訪問を終えて

- 日本での定住を意識しているのが現実的
- 日本人・日本側の視点を取り入れられており興味深い
- 日本語「で」教育を行うための基礎作り(教材、人材等)が必要

INDIA INTERNATIONAL SCHOOL IN JAPAN

インド人学校



谷村隆昌
高野邦夫
丸井ふみ子
小島和美
山田寛子

訪問の理由

- 日本でIT関係の職につくインド人の増加
- 数学やコンピューターで注目を浴びるインド人学校の事情を調べる
- アジアのINTERNATIONAL SCHOOLの例を見てみる

設立の流れ

- インド国内と同じ教育を提供できる学校を日本に作りたい
- 多くのインド人生徒の日本滞在は短期であり、日本の学校やインターナショナルスクールでは、インドに戻った時に数学やヒンディー語の学習に遅れが生じるため
- NPO法人として2004年8月に開校

学校概要

- 校舎: 東京都江東区森下
- 生徒数: 120名
(幼稚園年少クラス～9年生)
- 教師: 夫の仕事の都合で来日した配偶者
(インドの教師免許を持っている)
- 生徒の国籍: インド、バングラデシュ、パキスタン、フィリピン、シンガポール、日本

学校概要(授業内容)

- 1コマの長さ: 40分
- 言語: CBSEに沿って授業はすべて英語。ヒンディー語は一つの教科として教えられている。日本語の授業もある。
- 科目: 日本語、ヒンディー語、数学、社会、英語、科学、読書、美術、音楽、体育、演劇、コンピューター

時間	9:10 ~	9:50 ~	10:30 ~	10:40 ~	11:20 ~	12:00 ~	12:30 ~	1:10 ~	1:50 ~	2:30 ~
2th	Math	Science	Snack	English	Hindi	Science	Lunch	Hindi	Library	English
8th	English	Math	Snack	Science	Science	Computer	Lunch	Library	Hindi	Computer

訪問を終えて

- 授業が全て英語で行なわれていることへの驚き
- 他の外国人学校(ブラジル人学校、ペルー人学校)との違い

調査の結果・まとめ

調査開始時の目的と、調査を通してわかった課題とのズレ

発表者 中村未央

課題の多様性

- 日本語の習得度
- 家庭環境
- モチベーション
- 生活習慣
- 人間関係の距離感
- 学校へのニーズ

よりよい学校作りのために

- 国際教室担当専門の教員を養成する
- 日本の学校のあり方を見つめなおす

外大生である 私たちに出来ること

- 母語を理解する
- 母国の文化や生活を知る

さらに...

多様性に柔軟に対応する

どうもありがとうございました。

(3)第二部特別講演「明日の多文化社会を担う子どもたちのために」



講演者:キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ氏

司会: 本日は、ブラジル文化協会理事、国外就労者情報援護センター理事であります、キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ先生に「明日の多文化社会を担う子どもたちのために」と題しまして、ご講演を賜ります。時間の都合上、ナカガワ先生に詳しくプロフィールは、お配りいたしましたプログラムをご参照いただきますようお願い申し上げます。それではキョウコ・ヤナギダ・ナカガワ先生、お願いいたします。

キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ: 皆様、こんにちは。ナカガワ・キョウコです。今日は、日本語で話すということで大変緊張しております。よろしくお願ひします。今日の午前中は、皆さんのお話を聞いたのですが、これからブラジル人としてのちよつと違う感じ方からお話したいと思ひます。といひますのも、1997年に私がブラジル、大泉、太田で調査した時には、おもしろいことがありました。ちよつと一橋大学の大学院の方が、私と同じような調査をしておりまして、ブラジル人の子どもたちに、彼女は私と同じような内容を日本語で質問して、私は彼女と同じような内容をポルトガル語で質問いたしました。質問した内容は同じようなことだったのですが、驚くべきことに、返って来た答えは彼女に返ってきたものと私に返ってきたものは全然違うという結果が出ました。そういった経験から、私が、今日お話しすることは、みなさんが思われていることと、ちよつと違うんじゃないかなと思ひています。

＜日系ブラジル人の子どもたち＞

それでは先に、少しブラジル人の子どもたちのことを知ってもらおうかなと思ひます。ブラジルは、つい最近まで多文化民族の国と言われておりました。いろいろな人がいます。日本人の移民が始まったのは1908年なので、もうすぐ、100年ということで、日本人でも、もう五世の世代まできています。イタリア人たちはもっと古い歴史をもっていますし、スペイン人ももっと古い歴史をもっています。100年の歴史を超える人々もたくさんいます。もちろん、ハーフの子どもたちもたくさんいます。日系社会の中でもまだ勤勉だとかを守っている人もいますが、日系の中でも、もう五世ぐらゐまでくると、自分が何県出身なのかもわからない人たちもいます。あるいは、自分が日系であるかどうかもわからない人たちがたくさんいます。それで多文化と言われている。ブラジル人の子どもたちはそういった環境で生まれて育っているわけです。

ブラジルといっても大きいわけですが、各市にも大きな差があつて、南の方のパラナとかリオグランデスルとかいったところにはヨーロッパ系の人々もたくさんいて、まだ自分たちの文化を守つていてということもあります。サンパウロ市はブラジルで一番大きな市で、経済的にも国全体を守つているという感じがあります。東京と同じような感じです。広さではなく人口とか、経済的な機能といったところは東京と同じです。そして、サンパウロにはいろいろな国の人が住んでいます。もちろん、いろいろな文化を持った人々が一緒に暮らしているというわけです。そして、最近では、ラテンアメリカの人々が、たくさん入つてきているので、サンパウロの街の文化もずいぶん多様化してきています。

では、ブラジルに住む日系人の子どもたちの様子ですが、ブラジルのサンパウロの日系人の人口は、約150万人だと言われております。これは、ブラジル人口の約0.7%ですから、日系社会の中では、子どもたちのことが最近話題になってはいますが、ブラジル社会では、まだまだこれからといったところなんです。1990年ごろから大学などで研究している人もいますが、ブラジル社会では、まだまだ話題になっていないといひますか、全然知られていなくて、つい最近少し取り上げられるようになった程度です。残念ながら、テレビなどで、最近になって、青少年の犯罪などが少し取り上げられて、こういうことが起つているんだと認識されるようになりました。

ブラジルに住む日系の子どもというのは、やっぱりブラジル人とはちょっと違ったところがあります。少しは日本の文化のことを知っている。それから、おじいさんの代からハーフであるという子どもたちは、ほとんど日本人の顔をしていません。そういった子どもがたくさんいるのですが、まだ私のような日本人らしい顔をしている人もいます。日本人の顔をした人たちが道を歩いていると、日本人と言われます。ドイツ人も同じように、ドイツ人のような顔をしていると、ドイツ人とみなされます。あんまりブラジル人らしい顔をしてないと、日本人、ドイツ人と言われるので、自分は日本人かなと認識しています。そして二世、三世の大人たちは、自分は完全に日本人だと思っている人もいます。そういう人たちが日本に来ると、急にブラジル人とか外国人と呼ばれて、今までの自分のアイデンティティは一体何だろうとなるわけです。

<ブラジル人の「文化」と「言葉」>

ブラジルという国は、地域の差がとても大きい国ですから、それぞれの文化も違います。それからもう一つは、社会階級の違いです。生活のレベルによっていろいろ違います。それは、日系人にかかわらず、社会階級が低い人は、話をしている、言葉の数が少ない。言葉ができないからこそ、何か自分が表現したいことを表現できないときに、それを暴力にぶつけてしまったり、体で表現したりする。そして、概して、将来のことを考えていない。将来のこと、明日のことを考えられるのは、中流階級以上の人たちです。明日のために貯金したり、将来のために保険をかけたりする。しかし、中流階級以下の人は今日の生活のことを考える。今日のために働く。今日働いたお金で今日の夕飯を買ったり、いろいろな買い物をする。そして、ちょっと何か払わなければならなかったら、誰かにお金を借りて、明日の仕事の分で、そのお金を返したりする。生活の仕方が、上流階級の人たちとは違います。

私立の学校に行ったときに、よく感じるのは、中流階級以下の人たちの方が、人と物を分けるのが上手だということです。ものを簡単に貸し借りしたり、分かちあったりします。サンパウロの学校の先生たちが、「この子は隣の子の鉛筆を盗んだ。」とよく言うのですね。しかし、私たちがよく見てみると、その子どもには盗んだという意識が全くない。低い社会階級の人たちは、一軒に、三つの家族とかが一緒に住むことがあります。

すると、これは自分のものとか、これは他人の物とかいう境がない。そこにあるものはみんなの物だから、もし鉛筆がなければ、あるところから探してきて使う。洗濯物なんかでも、同じ庭に干すので、自分のものが乾いているかということではなく、掛けてあるものの中から自分に合うものを取ってくる。その子どもたちにとったら、隣の子の鉛筆を取って使っても、その子どもにとっては別に盗んだという感覚は無い。だから、そういう文化感覚の違いがあります。

それから、これはどの国の移民でも同じですが、イタリア人でもドイツ人でもフランス人でもオランダ人でも同じだと思いますが、文化、言語以上にブラジル人になりたいという意識がある。だけど、一世の両親たちは、子どもたちとコミュニケーションを取りたいから、日本語を覚えさせたいなど、そういう思いがある。二世はいつも自分がブラジル人かブラジル人でないかの狭間で戦っている。だから、いつも葛藤を感じている。だけど、三世になると、自分は完全に日本人ではないと認識しているので、興味を持てるようになる。では、そういう国で、ブラジルの文化はどういうものかという、よく「文化の違い」と言いますが、私もブラジル文化ってなんなのかなと思います。じゃあ、ブラジルの文化というのはあるのかなあと考えると、少しはあります。たとえば、カーニバルとか、クリスマスとか。カトリックじゃなくても皆がクリスマスを祝う。皆がカトリックではない。宗教だけでも数え切れないほどある国です。でも、いろいろな国の人たちが自分の文化を守って、それぞれの文化を継承しながら、また、周りの人たちの他の文化も覚えていく。そういった生活をブラジルではしていると思います。ですから、ブラジル人は、日系人ではなくても、ドイツ人やイタリア人でも、たとえば、週に1回はお寿司を食べるし、スパゲティも食べるし、お刺身も食べるし、ピザも食べる。というわけで、食べ物のお話になってしまいましたが、自分はいつもいろいろこういうようにやってきたけれども、他の人のものを見て、これもいいなと思えば取り込む。だから、ブラジルの文化というのは、そのミックスじゃないかなと思います。いろいろなことを取り入れる。だから違う人たちがたくさんいるんじゃないかなと思います。でもそれはみんなブラジル人、どんな顔をしていてもブラジル人です。だから、よくブラジルは、国のことを宣伝するときに、よく、“Pais de Todos”(みんなの国)と言ったりします。どんな人でも、ブラジル人ということになっています。各国の人たち

が自分のやり方でやっているの、自分と違うやり方に、触れたり、聞いたりすることが、多い。そして違う文化も本当に受け入れているなあという感じがします。その中で、どれとも違った新しい文化も生まれてくる。つい15年くらい前までは、黒人の文化を学びましょうとか、アジアの人たちの文化を学びましょうとか、そういうことがあったわけですが。もちろん、アジアと言っても、中国人、韓国人、日本人みんな違うわけですよ。そして黒人たちも、同じアフリカでも各国の人たちがそれぞれ違う国の文化を持っている。でもだからこそ、ブラジルで見られない文化が生まれてくる。例えば、カポエイラ。カポエイラは一つの国から来ました。ブラジルではビリンバウという楽器を弾いて、カポエイラを踊る。ビリンバウは違う国からきている。だけど、ビリンバウを弾いてカポエイラを踊るのは、ブラジル人しかない。日本の文化とブラジルの文化がミックスして、出来上がった文化というのは考えてみてもあまり思い浮かばないのですが。それと、日系の人たちというのは孤立とはいかないまでも、自分たちのグループを作っている。この頃、若い人たちの間でも、少しずつ、たとえば、黒人の人たちとか非日系の人たちに、和太鼓がブームとなって、日本の民謡とか、沖縄の音楽を弾く黒人たちが、見られるようになってきています。ただ、それはミックスではなく、違う人たちが和太鼓を弾いているということなのですが。

そして、少し最近、私が関わっているサンパウロ大学の学会で、国際ナショナルイミグレーションの学会では、もちろん日本の出稼ぎの研究をしている人が私以外にもいるのですが、ブラジルからのアメリカへの出稼ぎが話題になっています。たとえば、ブラジルからパラグアイに渡った人たちがどんな生活をしているのか、ほかにもヨーロッパに渡った人たちはどんな生活をしているのか。それから、帰ってきたときはどんな生活をしているのか、それから、もう一つ大きな問題となっているのはサンパウロ市内での不法滞在者の問題で、ボリビアとか、ペルー、アルゼンチンとかから来て、不法でサンパウロに住んでいる人たちのことです。なかなかひどい生活をしていて、子どもたちも学校に行きたがらない。ポルトガル語も覚えようとしないうちに、病院に行こうとしても証明書を持っていないから行きたがらないということで、そういう人たちの健康問題をどうしようかとかですね。結局は、お医者さんたちが皆でボランティアとして行って、それでも行くと逃げて隠れてしまう。だ

から、たとえば、後で食べ物を与えるとか、洋服を与えますとか言って、出てきた人たちを治療しようといった活動している人たちもいます。今はだいぶ収まりましたが難しいことなのです。

言葉も、もちろん必要だということを知っているのです。そしていつかは覚えなければならないということを知っているのですが、言葉はその人たちにとっては唯一の文化。その言葉を無くしてしまったら困ると思って、マイノティーの人たちは、自分たちのものを守ろうとするわけです。そしてポルトガル語を覚えてしまったら、普通のブラジル人になってしまうというような考えを持っていて、それは嫌だと思のです。私の友達で、アメリカに住むブラジル人ということで博士号を取った人がいます。彼女の娘は12歳の時に、アメリカ人っぽくなってしまったから、帰国したという話を聞きました。アメリカ人にはなっていないということを彼女の口から聞きましたが、そういうことがサンパウロ市内でも起こっている。私が見てきたのは愛知県の一部の町ではありますが、そこでもそういったケースが見られると思うのです。たくさんのブラジル人は日本語を覚えなければいけないということを知っている。日本語がなければ生活できないということも知っているのですが、でも子どもが日本語を覚えてしまったら、自分や親とのコミュニケーションが無くなってしまし、アイデンティティも無くなってしまいうような気がして、なんか日本人っぽくなっちゃったら嫌だなと思っている親がたくさんいます。

そこでサンパウロで考えたのは、親を説得することはなかなか難しいので、ボランティアの人たちが集まって、ブラジル人の子どもたちが遊ぶ場所を作らないかということになりました。ボリビア人は市内で約6万人と言われていて、一番多いです。はっきりした数はわかりませんが一番多いです。ボリビア人の子どもたちは、ブラジル人はこうだとかあだとかいろいろ思っているわけです。でもやっぱり遊びたいので、遊ぶ場所を提供すれば、おもちゃなどで遊びたいという思いが出てくるわけですね。そこにブラジル人の子どもたちをたくさん入れておく。そうすると、自然にボリビア人の子どもたちがポルトガル語を覚えていく。それに、遊んでいるうちに、ボリビア人の子どもたちが自然にポルトガル語を覚えたいというモチベーションがあがってくる。そのモチベーションがあるときに、本当に学べるのではないかと私は思います。強制的に「覚えなさい。

覚えなさい。」と言っても、何ヶ月たっても覚えられないのです。そこで私が感じたのは、ポルトガル語とスペイン語でも、大きな壁がありますが、しかし、ポルトガル語と日本語の壁というのは表せないくらい大きなものだということです。それでもやっぱり、ボリビア人はボリビア人で自分の言葉や文化を守りたいと思う。スペイン語でも分からない。やっぱり私でもスペイン語をものすごく早くしゃべられたらわからないわけですが、でもゆっくり喋ってくれたら結構よく分かる。それでもスペイン語を話す子どもたちは学校に行ったら、やっぱり言葉が分からないから授業に入っても、ついていけないということを言ったりします。そのそういった遊び場から、最近はやや結構多くの子どもたちが学校に行くようになりました。あんまり強制的にやったら、暴力だと思うのですが、強制的に8ヵ月とか1年とかやっても覚えられないのだから、どうせなら3ヵ月ぐらい仲良く遊んで気持ちよく言葉を覚えて、子どもたちが本当に勉強したいなあと思う時に学校に入れるのが一番ではないかと思っています。今では、多くの子どもたちが自分の住んでいるところの近くの学校に通っています。先生たちの受け入れについてはいろいろ問題があると思います。ほかにいろいろなお話があるのですが、話をここでちょっと変えさせていただきます。ですから、一番大切なのは子どもたちが興味をもって本当に勉強したい。やりたいと思ったときに教えてくれる人がいれば、いいのではないかなと思います。子どもたちがやりたいと言ったら親もわりと反対しません。

＜調査から分かったこと、感じた課題や困難＞

日本に暮らすブラジル人に対しては、2003年に私が3ヵ月間名古屋に住んで調査をしました。ブラジル人の子どもたちに関してはいろいろなブラジル人学校に行きました。名古屋、半田、それから、刈谷、豊田。今回は知立にも行ってきました。それから、神戸、京都などのNPOの活動なんかも見えてきて、その子どもたちの声もたくさん聞いてきました。その中で一つ大きな問題だと感じたのは、国籍を持っていない子どもたちのことです。誰の責任でもないということになってしまうのですが、先ほどの発表中にもありました。日本の学校でとか母語の話とか教育とか、アイデンティティの話とかあるわけですが、つい最近日本の偉い方に聞いたのですが、「僕たちは何もしようと思いませんよ。」ということのを伺いました。「ブラジル

人の子どもたちの教育の問題はブラジルの責任ですから。」とはっきり言われました。そのとき「ああ、そうなんだ。」と思ったのです。今度はブラジル政府にその話をすると、日系の問題はさっき言いましたように、日系の人口が0.7%ですから、その中でも出稼ぎの問題に関わっている人となると、30%ぐらいでしょうか。でも、「子どもたちはこういう権利を持っているんじゃないですか。」という話をすると、「まあ、持っているんだけど、この子どもたちはブラジル人ではないからね。」という答えが返ってきます。ですから国籍の問題も早く解決しなければならぬのではないかと私は思います。この子どもたちは日本人なのか、またはブラジル人なのか、日本人ではない。じゃあ、ブラジルでこの子どもたちをブラジル人として認めるか。それが一番大切な問題だと思うのです。子どもたちは好んで今の状況に置かれているのではない。子どもたちが来て来てくるのではなくて、親に連れられて日本に来る。帰国したくて、帰国するのではなくて、親に連れられて帰る。結構、中には騒ぐ子どもたちもいるのですが、結局は親の意思に従わざるを得ない。そしてたくさん子どもたちが、ブラジルで少し過ごし、日本で過ごし、そしてまたブラジルで少し過ごしています。町を転々と回ったりしています。そういうことがたくさん起きてくると、やっぱり、一つの学校で勉強するというのがだんだん難しくなってくる。厳しい状況に置かれているというのは、子どもたちもよくわかっていて、たとえば15歳ぐらいの少年に聞くともう夢も持っていない。それが一つ少し寂しいことだと思うのですが、たとえばブラジルだけで育った子どもは15歳、16歳というと、もう夢をたくさん持っているのではないかなあとは感じます。あんまり現実を考えてなくて、そして、こっちの子どもたちは自分の現実を知っていて、夢を持っていない。かわいそうだと思うのですが、かわいそうではなくて、私はかわいそうという言葉なるべく使いたくないのですが、子どもたちもかわいそうという言葉嫌いますからね。「僕たちはかわいそうではないんだから、馬鹿にしないで。」と言います。ですから、本当に子どもたちはかわいそうではなくて、状況が良くないなあとは思います。そして、この人たちは帰っても同じなのですね。なかなか、帰っても、ブラジルに適應していけない。なかなかブラジルの生活には慣れません。

これは、愛知県と静岡県で行った調査なのですが、ブラジル人が一番先に言うのは、ほとんどの子どもたちが一度は日

本の学校に通おうとした。ブラジルから来た時、親も子どもも始めに考えるのは、日本語の日本の学校に通うということです。しかし、少し通ってみると子どもが辞めたくなくなってしまったのか、または、そういった学校にブラジル人の子どもたちを受け入れる環境がなくて排除されてしまったのか、やめてしまうことがあります。これは日本だけではなくて、たとえばアメリカでは、ラテンアメリカの子どもたちに対して、バイリンガル教育を結構しっかりやっています。私の友達なんかも言っているのは、英語を覚えるより先にスペイン語を覚えてしまったとか。結局、英語を強制的に教えようという体制がないので、先にスペイン語を覚えてしまったり、違う国のほかの子どもたちがポルトガル語を覚えてしまったりする。

では、この子どもたちになぜ日本の学校を辞めてしまったのかと聞くと、55%の子どもたちがいじめにあったという答えをする。それから昨日も少しお話ししましたが、本当に子どもたちが、いじめにあったのかと聞かれる。それとも、いじめにあった子どもたちが被害妄想なのか。たとえば、もういじめられるという意識を持って学校に行くので、ちょっとしたことがあっても、もういじめられたと思ってしまう。でも、私がインタビューした子どもたちの中では確実にいじめにあったのではないかなと思っています。そして、私が聞いたなかでもうこれは許せないと思ったのは、先生が子どもをいじめるというケースです。このような大人が子どもをいじめるというケースは絶対に許せないなあとと思います。子ども同士のけんかや、被害者にもいろいろな問題があるかなと思いますし、加害者にもいろいろな問題があるかなと思いますが、それはもっとよく話を聞いて考えて、あげなければならないなあとと思います。いじめている方もけっして気持ちよくないと思いますし、もちろんいじめられているほうもそうではないと思います。だから、この子どもたちはたとえば、ほうきで殴られたとか、階段から突き落とされたとか言って、子どもたちは部活と掃除の時間を一番恐れています。ちょうど部活と掃除の時間が、一番いじめられるチャンスが多いところだと言います。殴られたりしなかった他の子どもたちの中には、「ブタジル人ブタジル人」と言われたりとか。こっちのほうではあんまりそういうことは言わないと言うことでしたが、愛知の方では結構「ブタジル人」という言葉が流行っているとか、よくそうっていじめられることがあります。

それからもう一つは、学校を辞める理由はやっぱり言葉が

分からない。どうしても、日本語を覚えられないですね。私が聞いたのは、ポルトガル語のできる日本人で愛知県の保育園の園長さんの話ですが、彼女は1年間ブラジルでポルトガル語を勉強しましたが、1年間でポルトガル語ができるようになるわけではないという話でした。日本語も同じです。私なんかポルトガル語で論文を書いても必ず間違いがでてくる訳ですから、本当にポルトガル語で文章を書くのは難しいことだと思っているのですが、もちろん日本語も難しい。漢字なんかでも点が一つなかったら間違いですよ。だから子どもにとって日本語を習得するというのは、本当に難しいことだと思います。それから科目についていけない。そして、転校、帰国、引越しを繰り返すので、一つの学校にとどまれない。それから、やっと日本語を覚え、日本人らしくなってくると、ばつと学校を辞めさせる親がいるのですね。日本人らしくなってきた、などという理由です。では、ポルトガル語を忘れないように、じゃあブラジルの学校、ブラジル人学校へ通わせるかといったら、必ずしもブラジル人学校に通わせるわけではありません。

それからもう一つは、人間関係です。先ほど学生さんたちが何度も言っていましたが、ブラジル人と日本人では、やり方というか感覚が違うのだと思います。それをちゃんと説明してあげている人たちがいない。日本人の優しさの表現の仕方、ブラジル人の優しさの表現の仕方が違うということを説明する人がいない。日本人とブラジル人では、表現の仕方が違うということが、ブラジル人たちにはきちんと伝わってない。だからブラジル人たちが、「ああ、冷たい」とか、「意地が悪い。」とか感じてしまうのではないかなと思います。

そして、ブラジル人学校に行かない理由は、月謝が高いとか遠いとかです。日本にはブラジル人学校が、実際100校くらいあるのですが、その大半が高い月謝で、残念ながらきちんとした教育をしていない。ブラジル人学校に通って頑張っていた子どもたちも、ブラジルに帰国したら全然ついていけません。じゃあ、どうしてブラジル人学校に行くのかというと、それは日本人学校に行けなかったらとか、行かれなくなってしまったからとかいうのです。そして、よく取り上げられるのは、親が子どもの教育に対して無関心とか全然考えていないとか、そういうことですよ。それは、子どもが一人という場合がなくて、だいたい二人とか三人とかいますよね。それでブラジ

ル人学校にやろうとすると、だいたい月に5万円ぐらいかかる。二人では10万円。三人いれば15万円かかってしまう。そうすると、お母さんが働いたほとんどのお金を学校に費やすことになる。そういったお母さんたちに対して、教育に興味がないのが原因だと言えるのかなと思います。

そして、学校と保護者の関係。もちろん、日本とブラジルの学校のシステムは違うので、お母さんが学校に文句を言いに行ってもよくわからないとか伝わらないとかいうことがあります。そして誤解。例えば家庭訪問でも、ブラジル人のお母さんたちは、先生が来ると言えば、コーヒーを作って、ケーキを作って待っているわけです。しかし、先生が来ても、「玄関で結構です」と言って家に入らない。そうすると、やっぱりうちの子は嫌われていると思うわけです。そうすると、もうこの先生が嫌だとかもうこの学校嫌いとかになってしまうわけです。本当に些細なことなのですが、きちんと話しておかないと誤解を招くということです。まあそういったことが重なって、結局、ブラジル人学校を選ぶというわけです。

そしてカルチャーショック。親は「いつか帰国するから。」とよく言うわけです。しかし、ご両親たちは結局帰国しないのではないかと思います。ブラジルに帰っても子どもも学校に慣れないし、親も仕事がない。しかし、今後どうするのかいつまでもわからないまま、ずるずるやっていたら、よくないのではないかと思います。日本人がブラジルに移民したときも、戦前に移民した人たちはみんな出稼ぎです。お金を貯めたら日本へ帰る。だから、子どもたちもブラジルの学校に通わせない。それから、ポルトガル語もそんなに勉強させない。いつか日本に帰るから日本語をきちんと勉強していなければならないと言っていました。ブラジルではよく、日本人が3人集まると会ができると言いますが、その会の中で誰かが日本語を教える。私が小さいときにはたくさんそういった会が残っていて、日本人会の中の日本語学校がありました。その先生たちも、今こちらでやっているようなことと同じことで、日本から先生方をブラジルに呼び寄せるなんていう余裕が全然なくて、例えば方言の非常に強い先生たちが、そのままその日本語を子どもたちに教えて、子どもたちがみんなその方言でしゃべるようなケースが多くみられました。現在の日本のブラジル人学校も、認可されているとか、認可されていないとか先ほど言っていました。認可されているけど、本当に認可されているの

かなあというようなケースがよくみられます。認可されていない塾のような小さな学校はみんなそうですね。例えば、教師の中でも、自分はポルトガル語をしゃべれるから、そのままポルトガル語の先生になってしまっているようなケースもあります。

それから、両親が働いているため、話し相手になってあげる大人がいない。極端なケースでは豊田で7歳の子どもが、ポツンとしていて、「どうしたの？」と聞くと、「ママが恋しい。」と言いました。そして、私が「ママと一緒に住んでいないの？」と聞くと、その子は「一緒に住んでるけど、もう3日も顔を見ていない。」と答えました。ですから、そういった子どもたちがたくさんいて、本当に愛情不足というか、みなさんも経験したかもしれませんが、私が行くと、飛びついたり、ひっぱったりして。とにかく、しゃべりたいと言って、寄って来るわけです。私が調査をしたときも、そんな小さい子どもからはデータを取りませんが、だいたい10歳以上の子どもたちから話を聞こうと思って入ったとき、インタビューしていなくても、どんどん子どもたちから話してくれる。ブラジルでは、女性のことを“Tia”（おばさん）と呼ぶわけですが、子どもたちが寄ってきて、「Tia、私が話していい？」「私が話してもいいかな。」と、子どもたちからどんどん話を聞くことができました。ですから、私は「私も話を聞いてあげるけど、私が聞いたことも全部答えてね。」というふうにしったりして調査したわけです。

その中には、家庭環境の複雑な子もいました。特に離婚が多いです。ブラジルでも離婚の数は多いですが、デカセギではとくに多いと感じました。50%以上と聞いたこともあります。女性たちにその離婚の原因を聞きますと、一つは、ブラジルでは、共稼ぎで自分が働いていると、お手伝いさんたちが炊事洗濯掃除をします。しかし、日本では仕事をして疲れて帰ってきたのに、自分一人で掃除も洗濯も炊事もしなければならぬ。そうすると、いったいこの男は何をやっているのというふうになるわけです。ラテンアメリカの男性は、掃除や洗濯、炊事をするかと聞くと、「しますよ。」とか、「僕は毎日掃除しますよ。」と言います。2週間に1回の洗濯もしていないので、「するよ。するよ。」と言うだけで、洗濯物がたまっていくと、もう女性が仕方なく洗ってしまう。アイロンも「僕ちよっと苦手なんです。」とか言って、奥さんがやる。そして、ご飯の支度は結構男性がする場合があります。中にはものすごく下手な

人がいて、「パパの作ったものは、食べられないよ。」とか子どもにいわれて、結局は女性がすべてしてしまう。そして、外でも家の中でも働かなければいけない女性は、結構圧迫されてしまって、その状況を子どもは知っているわけですが、それが、家庭内暴力につながってしまったりする。または、旦那とケンカしてしまったときに、子どもについて手がでてしまう。子どももなぜ自分が殴られているのかわからず、お母さんの機嫌が悪かったのかなあとか思っている子どももたくさんいる。

それともう一つは、刺激不足。家でもあまり遊ばないし、学校でもあまり遊ぶチャンスがないので、人と話す機会がない。今回、知立に行ってきたのですが、知立団地の子どもたちに、例えば、「おもちゃ持っている？」と聞くと、ほとんどの子どもがおもちゃを持っているわけですが、持っているものを聞くと、ほとんどがテレビゲームです。「お人形さんは？」とか、「他のゲームは？」とか聞くとほとんどの子どもは、テレビゲーム以外のおもちゃを持っていない。一人の女の子が「おばちゃん、私はこのくらいの人形持っているよ。」とかいうのですが、「それだけ？」という、「それだけ。」とかいうわけです。ですから、ほとんどの子どもたちが、他の子どもと一緒に遊ぶという経験をしない。子どもにとって遊ぶということはすごく大切なことだと思うのですが、例えば、ブラジル人学校に私が行って、「学校の中で遊ぶ時間も設けてください。」なんていうと、「親は高いお金を払っているのに学校の中で遊ぶ時間なんて作ったら、文句が出ますよ。」とかいうわけです。「高いお金払っているのに、何をやっているのですか？遊んでいるのですか？と怒鳴り込んできますよ。」というわけです。私も親にチャンスがあるたびに言うのですが、遊ぶことはものすごく大事で、絶対に無駄なことではない。

そしてもう一つ、恐ろしいことはブラジル社会に戻っても、ブラジルの社会に入っていけないことです。日本でも入っていけないし、ブラジルでも入っていけない。特に愛知、保見団地の人なんかはポルトガル語だけで生活できますから、10年たっても15年たっても日本の社会に入っていけない。そういう状況で生きている人もいます。語学相談員や通訳の人がたくさんついてくれるのは、ものすごく嬉しいことだと思うのですが、しかし、私たちがブラジルでよく話すことなのですが、ブラジル人というのは、例えば試験があれば勉強するけど試験がなければ勉強しない。必要があれば勉強するけど必要

がなければ全然やらないわけです。だから、たくさんの方は言葉がしゃべれなくても、結構うまくいんだと思ってしまっているから、全然言葉を覚えようとしません。だから、保見団地では、お医者さんに行こうというときに、「お医者さんに自分だけで行ってみたら。」と言うと、でも「しゃべれないから」と言います。「でも、しゃべってみたら。」と言うと、「通訳をつれてこい。」とか、そんなふうに大きなことを言っているわけです。ですから、いつも通訳が、付いていっていいのかなあと思っています。

もう一つ、大切なことは、一番始めにデカセギに来た人たちは、日本でお金を儲けて、すぐに帰ろうと思っていました。初めて来る人たちはお金を儲けようと思っているわけですが、リピーターは良い生活をしようと思って日本に来る。そうすると、リピーターはお金で買えるものに対しては大変豊かになりましたが、あとのことに対しては貧しくなっている。例えば、何になりたいとか、何をしたいとか、そういうことは全くない。例えば、新しい自動車が欲しいとか、洗濯機が欲しいとか、携帯電話が欲しいとか、テレビが欲しいとかいうことはよく言うわけです。

そして犯罪について。子どもたちはとにかく自分の存在を認めて欲しいと思っているわけです。ただ外国人というのではなく、自分という存在を認めて欲しい。ですから、非行に走る。すると、「誰々はこういうことをした。」と言われ、犯罪者としてはきちんと認められる。多くの子どもたちはそのために、罪を犯してしまうのではないかな、注目を集めるためにやってしまうのではないかなと思います。

日本の学校をきちんと卒業できない。中学校を出ても、高校にはなかなか入れず、大学にも入れない。中にはきちんと大学まで出ていますが、数は多くない。大半の人はうまくできないというわけです。そして、ブラジル人学校を卒業した人は日本語ができない。日本ではブラジル人学校はきちんと認められていないところもありますから、日本で生活する場合は、学歴がない人、学問のない人とみなされます。今度は新しい世代の子どもたちが、親のやってきたデカセギの仕事をしていくのではないかと私は思っています。ですから、共生していても、日本社会に入り込んで行くことはできない。それは帰国しても同じです。

そして、アイデンティティの問題は、先ほども少しお話しし

ましたが、自分と違う文化を持っている人たちの中に入る時には、大変なストレスを感じるようになります。なぜなら、それは自分の中である部分はブラジル人で、そしてある部分では日本人なわけで、その両方を保っていくことが大変難しいのです。

私が思うに、日本人は支援とか、よくそういうふうに言いますが、結局は日本に同化させること、日本人らしくして、日本語を話すことを求めている。ですから、先ほどのピアスの話もそうですが、ブラジルではお母さんが、もしお腹の赤ちゃんが女の子と分かっていたら、ピアスを持って病院に行く。そして生まれてすぐに、お医者さんがピアスを付けてくれるのですから、ピアスを取った子どもたちは、まるで裸でいるみたいと話すわけです。私もそういった話をたくさん聞いてきました。ですから、そのピアスを取ってしまうことは、たとえ子どもがオッケーと言ったとしても、子どものアイデンティティを守っていることにはならないのではないかと思います。どの国からの移民でもそうですが、その葛藤は大きく、それを言葉で表せず、それが暴力になってしまうというのが一つの原因だと思います。

ではここで、ビデオを見てください。

(映像)

この人は日本で大学に行けた人です。彼女が話すには、日本では小学校にあがったときからストレスを感じていた。体の傷は消えるのですが、心の傷は今でも残っている。日本の人から言われた些細な一つ一つの言葉は、まだ心に残っていて、人から何を言われて、心では反抗していても、いつもにこにこしている子にしているという性格が残ってしまって、今でも人を本当に信じることができないというのです。それでも、彼女はきちんと結構いい大学に進学して通っています。でも、こういった人たちでも、心の傷は持っているわけで、20歳を越えても、もう人を信じることができないというのは本当に寂しいことだと思います。

帰国してからの子どもたちについては、昨日お話ししましたので、省略させていただきます。

今のブラジル人は、外国から入ってきたものは何でも良いと考えていて、ブラジルのものは自分で自分をけなします。だ

から、「ブラジルの政府はだめだ」とか言うわけです。そして、国際的に通用しないものは、何でもダメだとみなされている傾向があります。見える文化はすぐに身につけられるわけですが、私は見えない文化が大切だと思っています。例えば、考え方や表現の仕方、言葉。これはなかなかつかみにくいものです。

＜日本で暮らす子どもたちのために＞

最後に、日本で暮らす子どもたちに何ができるかということです。いろいろ書いてあると思うのですが、私が思うに、どうしたら子どもたちのマイナスをプラスに持っていけるかということが大切だと思います。一つは例えば多文化。本当に多文化というなら、多文化を持っている子どもたちと本当の意味で付き合ってみるのがいいと思います。

それから一人のブラジル人を見たときに、この人がブラジル人だと思わずに、例えばたくさんブラジル人を連れてきて、同じブラジル人でも同じことをやらせたら、それぞれの子どもが違うやり方でやる。ブラジルでよく言うのですが、日本人の幼稚園や小学生の子どもでも絵を書いたら、みんな同じ絵のような感じがします。時々、日本人の子ども絵を見る機会がありますが、同じクラスの子ども絵は、みんな同じような絵です。先生も子どもたちに対して、「空は青でしょとか、海は青でしょ。」とか言うわけです。例えば、空は青と決められていて、日本人の子どもが描くと青い海とか青い空とかきれいに描くわけですよ。しかし、ブラジル人の子どもたちは、空は白いきもあるし、赤いきもあります。グレーでばーっと塗る子がいたりします。そうすると「今日は雨が降るぞ。」とか言うわけですが、しかしそれは決して間違っていると思わない。私たちがブラジルで子どもを育てる時には、どっちが違うとかどっちが悪いとかではない。ただ違う。そしてどっちがいいかは自分が決める。一人一人違うということを教えます。

そしてもう一つ言っておきたいことは、日本語がよくできない子どもたちに対して、先生が「何とかちゃん、何とかやりましょうね。」とか、そういった子ども扱いをしますが、これをブラジル人の子どもたちはものすごく嫌います。完全に馬鹿にしているんじゃないかと思うわけです。言葉はできません。言葉はできませんが、あとのほとんどのことはできます。ですから、かわいそうな人間とか、できない人間とかではなく、ちゃんとし

た一人の人間として、言葉は同じ言葉を話してないけれども、あとのことはきちんと考えているんだから、そういうふうに育ててほしいと私は思います。

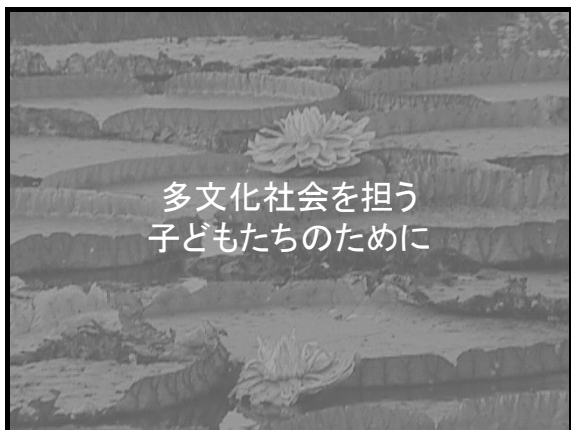
それから、ブラジル人は思ったことをはっきり言います。人間関係もわりと簡単に作る。ですから、そういったブラジル人の子どもたちと日本人の子どもたちが遊ぶ機会がたくさんあったらいいと思います。今回、知立でもものすごくショックだったのは、児童センターとか小学校で、先生が「母語は禁止」と言うわけです。先生たちが禁止と言うと、あとの子どもたちが見張っていて、もうお友達ではなくなってしまわけです。そして、母語を話す、他の子どもたちが、「きみ、先生がダメって言ったじゃない。」とか言うのです。しかし、しゃべれない子どもに対して、1日黙っているというのでしょうか。学校ではしゃべってはいけない、児童センターでもしゃべってはいけない。そうすると、まだ日本語ができないのに、母語をしゃべってはいけない子は、どうすればいいのでしょうか。子どもは「おばさん、ここでは何もできない。」と言います。ですから、そういうことではなくて、例えば、もう少し大目に見てあげる。もちろん授業中は、日本語でもポルトガル語でもおしゃべりはいけないということはわかりますが、ポルトガル語をしゃべる子どもがいる所では、少しぐらいしゃべったっていいじゃないと思います。それで、向こうの先生が言うことには、「日本人がポルトガル語を覚えてしまうじゃないですか。」と。でもいいじゃないですか。ブラジル人が日本語を覚えることはすごくいいことだと思います。その反対に日本人がポルトガル語も覚えてもいいと思うのです。ポルトガル語を覚えたって、まあ大したことないかもしれませんが、本当にラテンアメリカの中でも、ポルトガル語をしゃべるのはブラジルだけですし、ですから覚えても意味のないことなのかもしれませんが、覚えても損もないじゃないですか。

やっぱり、ブラジル人と付き合いっていくのには友達になるのが一番なんです。よく「商売は商売、友達は友達」なんて言いますがそんなことはありません。友達だったら何でもうまく行くのです。

日本とブラジルの大きな違いで、ブラジル人がすごく緊張してしまうと思うのは日本の縦社会。私なんかでも、すごく日本の挨拶は下手なので、大学に行っても、お友達でも、小さな子どもでも挨拶は“Oi”(やあ)でおしまいです。でも日本に

来るときは、「今日はよろしくお願いします。」とか、「おはようございます。」とか、挨拶の練習を一生懸命して来ますが、ブラジル人は本当にそういうことしない。そして、私も例えば「ナカガワさん」と呼ばれると、すごくギャップを感じるのですが、「キョウコ」と呼ばれると、すごく親しみを感じる。そして、ブラジル人は親しみを感じた人に対してすごく心を開くということも、日本人の先生たちは知っておくといいいんじゃないかなと私は思います。例えば、ある先生は「この子は先生に対する敬意がないのよ。」と言いました。そして、私が「どうして？」と尋ねると、例えば「『おい、これもってきて。』」とか、先生の私に対して言うのですよ。」と怒るわけです。でも、私からしてみれば、そういうことで、ブラジル人の子どもたちが敬意を示していないわけではないと思います。ブラジル人の子どもは、ほかの方法で敬意を示しています。例えば、先生をファーストネームで呼んだりします。「おい、水が欲しい。」と言ったからって、敬意を示していないということではないのです。ですから、そういうことが少なくなるように、ブラジル文化に対する情報を、こっちの人たちにいろいろ教えてほしいと私は思います。

私は昨日もブラジル人と話していましたが、時々ひどいことを聞かれることがあります。例えば私が97年に来た時には「ブラジル人は木の上で眠っているって本当か？」など本当に失礼なことを聞かれる。ですから、その時私の京都に住んでいる友達が「本当よ。木の上で暮らしているんだけど、降りるときにはエレベーターで降りるわ。」なんて言ったりして。本当に失礼なことを聞かれると馬鹿にされているように思うわけです。それで、サンパウロの写真もみせたりすると、「これニューヨークでしょう。」とか言われたりします。そういう人がまだいるわけです。ですから、みんなにブラジルのことをもう少し知ってほしいなあと思います。テレビや雑誌なんかでも、ブラジルをとりあげるときには、パンタナルとかアマゾンばかりではなくて、サンパウロとかパラナのことをやってほしいなあと思います。ご清聴ありがとうございました。

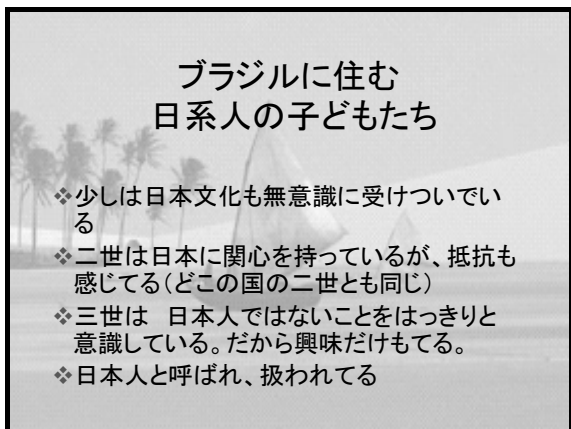


多文化社会を担う 子どもたちのために



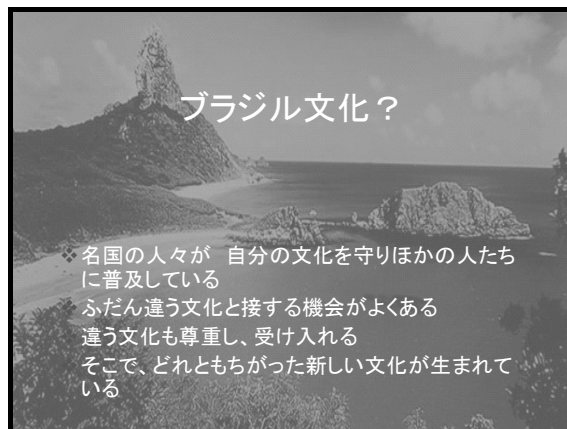
ブラジル人の子どもたち

ブラジルは 多民族国から多文化国へ変化
そんな国で 生まれ育つ
サンパウロには65カ国の人々が共に生活している



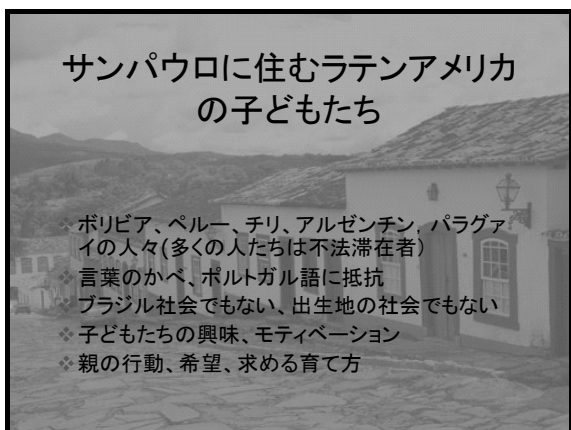
ブラジルに住む 日系人の子どもたち

- ❖ 少しは日本文化も無意識に受けついでいる
- ❖ 二世は日本に関心を持っているが、抵抗も感じてる(どこの国の二世とも同じ)
- ❖ 三世は 日本人ではないことをはっきりと意識している。だから興味だけでもてる。
- ❖ 日本人と呼ばれ、扱われてる



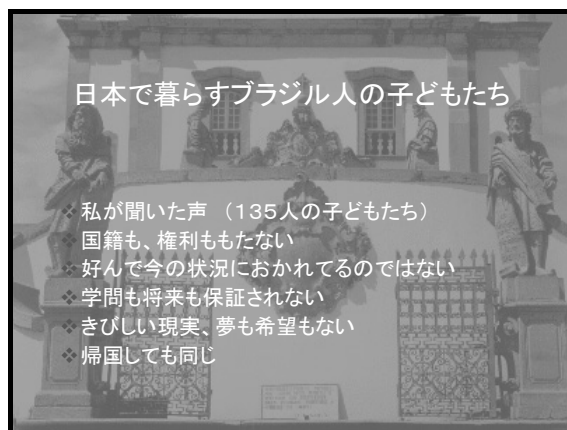
ブラジル文化？

- ❖ 名国の人々が 自分の文化を守りほかの人たちに普及している
- ❖ ふだん違う文化と接する機会がよくある
- ❖ 違う文化も尊重し、受け入れる
- ❖ そこで、どれともちがった新しい文化が生まれている



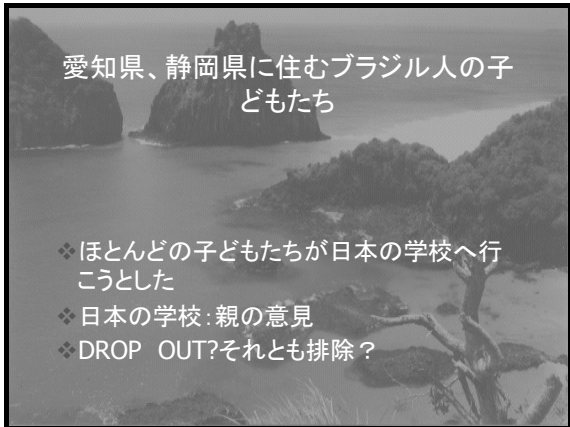
サンパウロに住むラテンアメリカ の子どもたち

- ❖ ポリビア、ペルー、チリ、アルゼンチン、パラグアイの人々(多くの人たちは不法滞在者)
- ❖ 言葉のかべ、ポルトガル語に抵抗
- ❖ ブラジル社会でもない、出生地の社会でもない
- ❖ 子どもたちの興味、モチベーション
- ❖ 親の行動、希望、求める育て方



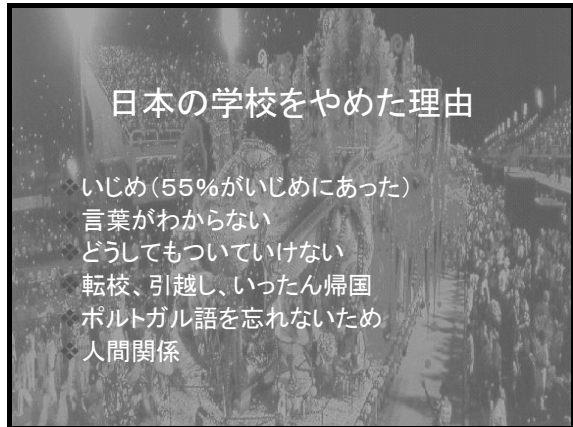
日本で暮らすブラジル人の子どもたち

- ❖ 私が聞いた声 (135人の子どもたち)
- ❖ 国籍も、権利ももたない
- ❖ 好んで今の状況におかれてるのではない
- ❖ 学問も将来も保証されない
- ❖ きびしい現実、夢も希望もない
- ❖ 帰国しても同じ



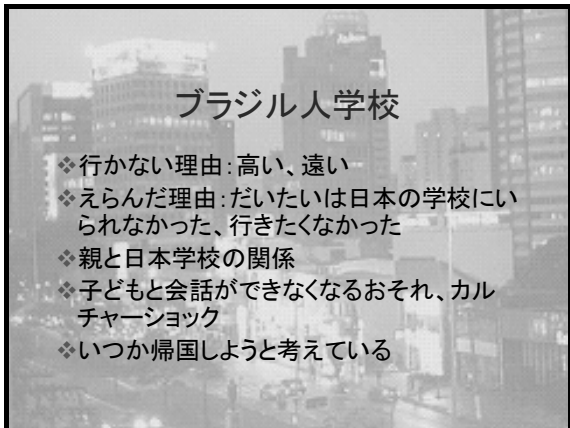
愛知県、静岡県に住むブラジル人の子 どもたち

- ❖ ほとんどの子どもたちが日本の学校へ行こうとした
- ❖ 日本の学校: 親の意見
- ❖ DROP OUT? それとも排除?



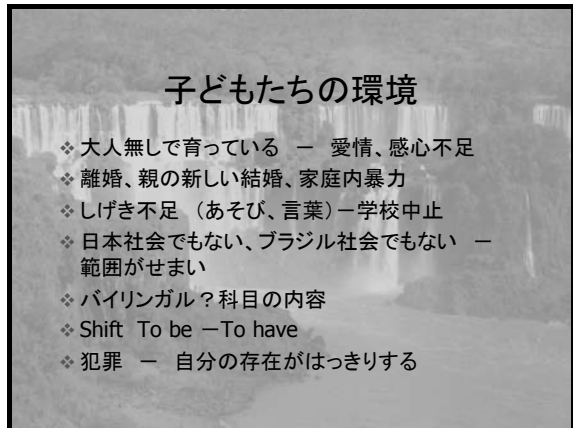
日本の学校をやめた理由

- ❖ いじめ (55%がいじめにあった)
- ❖ 言葉がわからない
- ❖ どうしてもついていけない
- ❖ 転校、引越、いったん帰国
- ❖ ポルトガル語を忘れないため
- ❖ 人間関係



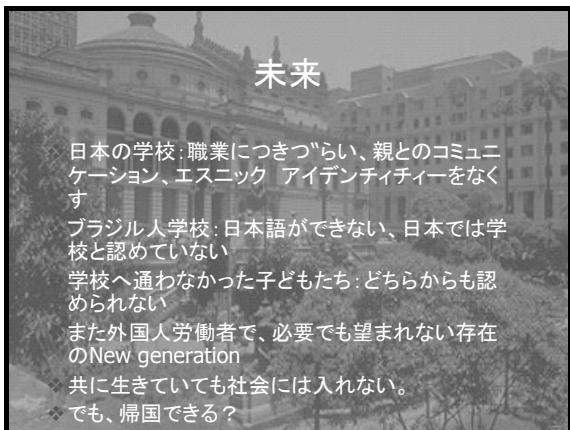
ブラジル人学校

- ❖ 行かない理由: 高い、遠い
- ❖ えらんだ理由: だいたい日本の学校にいられなかった、行きたくなかった
- ❖ 親と日本学校の関係
- ❖ 子どもと会話ができなくなるおそれ、カルチャーショック
- ❖ いつか帰国しようと考えている



子どもたちの環境

- ❖ 大人無しで育っている — 愛情、感心不足
- ❖ 離婚、親の新しい結婚、家庭内暴力
- ❖ しげき不足 (あそび、言葉) — 学校中止
- ❖ 日本社会でもない、ブラジル社会でもない — 範囲がせまい
- ❖ バイリンガル? 科目の内容
- ❖ Shift To be — To have
- ❖ 犯罪 — 自分の存在がはっきりする



未来

日本の学校: 職業につきづらい、親とのコミュニケーション、エスニック アイデンティティーをなくす

ブラジル人学校: 日本語ができない、日本では学校と認めていない

学校へ通わなかった子どもたち: どちらからも認められない

また外国人労働者で、必要でも望まれない存在の New generation

- ❖ 共に生きていても社会には入れない。
- ❖ でも、帰国できる?



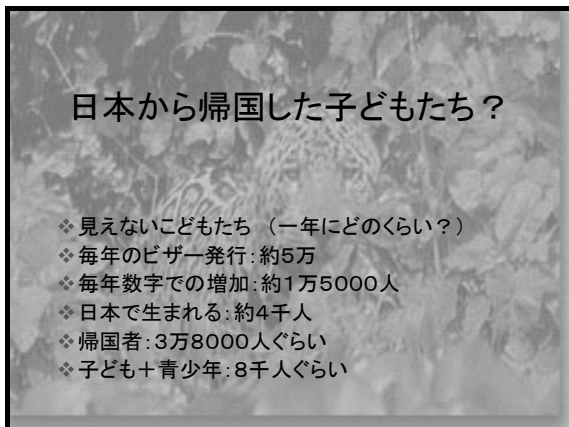
アイデンティティー

- ❖ 生まれる前から環境にしたがって いろいろ決められている
- ❖ カルチャーショック
- ❖ ETHNOCENTRISM



ストレス

- ❖ Intercultural – intergeracional -ストレス-毎日
自分自身と交渉
- ❖ ミグレイション: 受け入れる社会によつてのストレス
- ❖ ストレスかいほう: 言葉ができなければ暴力(体で示す)
- ❖ よぼう: サンパウロ大学
- ❖ 周りの期待

日本から帰国した子どもたち？

- ❖ 見えない子どもたち (一年にどのくらい?)
- ❖ 毎年のビザ発行: 約5万
- ❖ 毎年数字での増加: 約1万5000人
- ❖ 日本で生まれる: 約4千人
- ❖ 帰国者: 3万8000人ぐらい
- ❖ 子ども+青少年: 8千人ぐらい




“カエル”プロジェクト

どちらかを切り捨てる傾向
文化のちがいにとても敏感

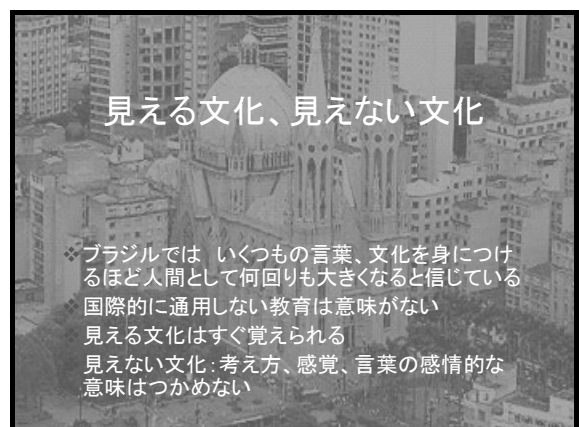
- ❖ 自信が持てない、自発性 (INICIATIVE) がない
- ❖ 正しい間違っているのが区別がつかない

“NO”と言えたら自立できる—交渉
SELF—ESTEEM



“カエル”プロジェクト

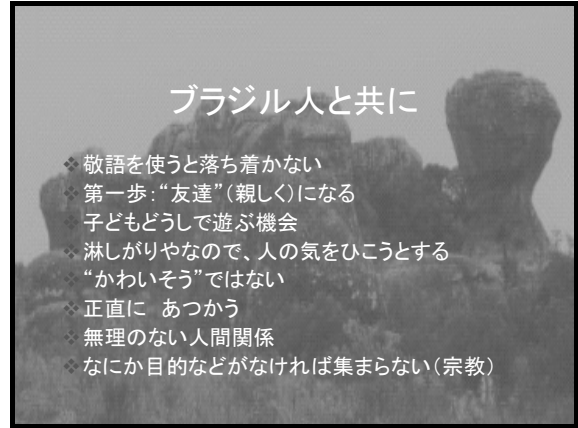
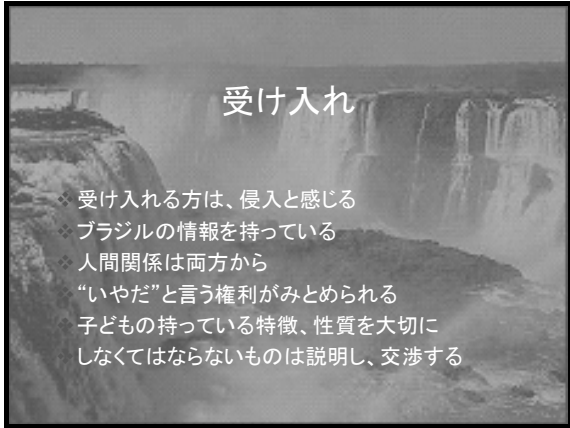
- ❖ 違うというのはいいとか悪いとかではない
- ❖ 両方を大切にする
- ❖ 好きなほうを選ぶ権利がある
- ❖ 日本での経験を無駄にしない



見える文化、見えない文化

- ❖ ブラジルでは いくつもの言葉、文化を身につけるほど人間として何回りも大きくなると信じている
- ❖ 国際的に通用しない教育は意味がない

見える文化はすぐ覚えられる
見えない文化: 考え方、感覚、言葉の感情的な意味はつかめない



(4)第三部 望ましい多文化社会を求めて～会場討論～



司会:これより、第三部「望ましい多文化社会を求めて」を始めたいと思います。

ここからの進行は、ナビゲーターの猪狩伸平君、葛山紋子さんをお願いします。それでは、よろしくお願いします。

猪狩伸平:みなさんこんにちは。長らくお疲れ様でございます。これより、第三部に入らせていただきます。第三部のナビゲーターは私猪狩伸平と

葛山紋子:葛山紋子です。よろしくお願いいたします。

猪狩:さて、第一部は、主に国際理解教育について、報告していただきました。特に、外語大生だからこそできること、という視点から、東外大モデルの実践と展望を行っていただきました。第二部におきましては、学習支援を行っていく上で、なぜ外国籍の子どもたちには、適応困難が多いの

かという学生の問いをもとに、いろいろ調査していただいた内容を報告していただきました。第三部におきましては、これらの議論を踏まえまして、全体討論を行いたいと思います。先ほど、みなさんの活発な議論がありましたが、あのような場を期待しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。第三部では、第一部・二部終了後に集めさせていただきました質問票をもとに、討論を進めさせていただきます。途中、みなさまの席上の方からも、付け足しで、質問や今の発言について是非何か言いたいということがありましたら、遠慮なくどんどん手を挙げていただいて結構ですので、よろしくお願いします。また実際活動した学生のみなさんからも、こういう活動をした、という生の声を聞きたいと思っておりますので、皆さんの方からも、ご意見ご感想をいただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

葛山:では、ここで前にいらっしゃる先生、学生のみなさまを紹介したいと思います。まず正面、左側に座っていらっしゃるのが、佐藤公孝先生です。昨年までは川崎の東柿生小学校において、国際理解教育の推進役でした。今年度からは、川崎市の総合教育センターの指導主事でいらっしゃいます。よろしくお願いします。そのお隣が、佐藤裕之先生です。佐藤裕之先生は、今現在、佐藤公孝先生が勤めていらっしゃる、総合教育センターの指導主事でいらっしゃいました。現在は、川崎市立殿町小学校の教頭先生でいらっしゃいます。この多文化コミュニティ教育支援室がスタートしてからはもちろんのこと、当支援室が立ち上がる以前から、本学の学生サークル、アミーゴスに多大なご支援をいただきました。当支援室がここまで大きく活動を展開するようになったのも、ひとえに佐藤裕之先生のおかげと存じております。よろしくお願いいたします。その隣にいらっしゃるのが、山西優二先生です。山西先生は、国際理解教育の中でも、特に開発教育において、著名な方でいらっしゃいます。よろしくお願いいたします。その隣にいらっしゃるのが、先ほど講演をいただいた、キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ先生です。よろしくお願いいたします。その隣が、ポルトガル語専攻4年萩原礼子さん、フランス語専攻3年門脇弘典さん、日本語専攻4年黒野美香さんです。よろしくお願いいたします。その隣が高野邦夫先生です。高野邦夫

先生は、本学のフィリピン語専攻の非常勤講師としてお勤めです。また、今回のフォーラムに当たって、学生と向かい合い、様々な意見を下さるアドバイザーとして活躍してくださいました。よろしくお願いいたします。そのお隣がポルトガル語専攻 4 年渡邊桃子さんです。よろしくお願いいたします。

それでは、早速討論に入っていきたいと思います。まず、第一部で取り上げられました、国際理解教育についての質問です。まず一つ目は、運営に関しての質問をいただきました。「学生メンバーの募集、勧誘や運営をどのように行っているか、もう少し詳しく教えてください」という質問をいただきました。では萩原礼子さん、よろしくお願いいたします。

萩原礼子:メンバーの募集、運営ということですが、メンバーの募集は、まず、4 月に新入生が入学してきますと、多文化コミュニティ教育支援室で行っている活動の紹介を兼ねまして、説明会を開きます。そこで興味を持った学生が、学生ボランティア登録用紙というものに、名前や連絡先を書いて、支援室に提出します。すると、その時点で、メーリングリストに加えられます。基本的には、そのメーリングリストを通して、「こういう活動がありますがやりませんか」というかたちでメンバーを募集しています。また、先生方をお願いをいたしまして、各授業の初めに広報活動を行う場合もあります。

葛山:ありがとうございました。それでは、次の質問に参りたいと思います。「実践事例やその反省、学んだことなどを、どのようにメンバー内で共有されていますか」という質問をいただきました。では、先ほどと同じく萩原礼子さんと、実際に活動していらっしゃいます門脇さん、よろしくお願いいたします。

門脇弘典:実践した事例とその反省を、どういう風に共有するかということですね。まず、国際理解教育の運営の仕方ということで、第一部の方でも紹介があったと思うのですが、その中にミーティングというものがありました。そのミーティングというのは、全体の事務的な連絡のほかにも、各班の検討なども行っています。例えば、私がコーディネータ

を務めております、東柿生小学校の場合、第 1 学年から第 6 学年まで、6 つのチームに分かれて活動しています。各チームがそれぞれ実践案を作り、だいたい 1 回のミーティングで、二つほどの班の実践案を、集まったメンバー全員にペーパーで渡して検討するという行っています。そこで出てきた疑問点、これは少し難しいのではといったアドバイスをメンバーからもらって、それを修正し、さらに小学校の先生方にも FAX 等で送って案を練り上げていく、ということをしています。また、実践が終わったあとは報告書を書き、プリントアウトして、ミーティングにおいてメンバー全員で共有するようにしています。

葛山:では、次の質問に参りたいと思います。「メンバー間の教育観、理念の差をどのようにすり合わせていくか」という質問をいただきました。この件に関して、実際に教育観、理念のズレを感じたことがあるかどうか、その場合どのように対処したかということに関して、お答えいただきたいと思います。では、実際に活動に携わっている門脇さんにもう一度お答えいただきたいと思います。

門脇:メンバーでの価値観や理念のずれということですが、まず、去年から活動をしている人と、今年から活動を始めた人との間で、少しずれがあるなということを感じます。私は去年も東柿生小学校で活動をして、今年も続けて活動をしているんですが、現在東柿生小学校でボランティアとして活動をしている学生は約 20 人になります。その中で去年から活動しているのが、その半数かそれ以上なんですが、やはり今年からメンバーとして入った人とは、慣れという点でも違いますし、去年やってみて、国理解だけじゃない人理解を目指すべきだという意識も、一年間実践をしていないと、気づきにくいところではありますので、やはり、旧メンバーと新メンバーとの間でのずれというのはあります。ただ、そういうものをちゃんと伝えていかなくてはいけないというのは感じるところです。

葛山:ありがとうございました。次に、また学生に対する質問なんですけれども、「クラスに外国籍の児童がいる場合、その子を参加させるような国際理解プログラムを行ったこと

はありますか。また、その子ども・保護者も共に活動するような活動をしたことはありますか」という質問をいただきました。この件に関して、会場の津久井さんをお願いします。

津久井優:活動の中で、授業の中に外国籍児童がいたことがあるかということですよ。

葛山:質問は、その外国籍児童を中心としたような授業を行ったことがあるかどうかということです。

津久井:私は、去年一度だけ、東柿生小学校で活動をしたんですけども、そのときに、あるクラスにイギリス人のハーフかどうかはわからないんですが、イギリス人の男の子がいました。その子がいるということを、事前に知らなかったんで、その子中心とした授業をすることはしなかったんですけども、その子はとても積極的な子で、授業の中で、国籍とか外国人の両親がいるということを、隠さずに、自分の体験を話してくれたりしたので、それはこちらにとっても、よかったことだったと思います。ただ、それを中心に授業を行ったということはありません。

葛山:ありがとうございました。では、門脇さんお願いします。

門脇:今のことに付け足してもう一つお話しすると、私は去年東柿生小学校で、先ほど模擬授業をしてくださった金智恵さんたちとチームを組んで韓国についての授業をやりました。第2学年3クラスを対象に行ったのですが、その一つのクラスに韓国人の女の子が一人いたんです。韓国人の女の子がいるのに、韓国の授業をするのはどうなんだろうという風に、ちょっと疑問に思ったといいますか、ちょっと釈然としないというか、不安に思ったということもあるんですけど、結局は、韓国人の女の子がいるということをあまり意識せず、他の日本人の児童と同様に本当に全く変わりなく扱いました。ただ正確には、韓国出身ではないんですが、韓国人の女の子は、韓国語のことも多少知っていて、授業中に他の子どもたちが知らないことを発言したりもしていました。そのことは、学校の先生から見て、その韓国人

の女の子のことを、周りの子どもたちが尊敬の目で見えるようになったという風におっしゃられていました。なので、あまり取り立てて外国籍の子どもを中心とした授業というのは行いませんでしたけれども、それでも結構いい結果が出たと思っています。また、保護者の方を交えた授業をしたことがあるかというご質問ですが、私の経験ではまだありません。ただ、一度やってみたいことだとは思っています。やはり子どもたちだけではなくて、大人たちもまだまだ国際理解教育を受ける余地があると考えています。私たちも活動をしていて、国際理解教育を受ける側であるという風に感じていますので、いつかはやってみたいことだなと考えています。

猪狩:どうもありがとうございました。今のは、クラスに存在する外国籍の児童が参加するような授業を作るべきかどうかというような問いだったんですけども、実際に今門脇さんがおっしゃってくださったように、実践をしていると、たまに「あ、今日は外国籍の子どもがいたんだ」というような、迷いというようなところまでは私たちは到達していると思うんですけども、そのあとじゃあそれをどう生かしていくかというところでは、まだ確定していないところがありまして、その点に対して、是非先生方から何かアドバイスのようなものをいただけたらと思います。

佐藤裕之:外国籍の子どもがいるとき、まず、クラスの先生が、その子どもをどれだけ理解しているのかなということが、とても大事だろうと思います。どうしても私たちは、外国から来た子どもや保護者に対して、そっとしておいた方がいいんじゃないかというようなかたちで、何年くらい前から日本にいるのか、何年間くらいここにいるのか、それから言葉はどうなのか、どういう生活をしているのか、そういうことを訊くということがタブーじゃないかのようなかたちを取るんです。ところが、自分は教育センターにいたときには、敢えてそのことを聞いて、それを学校に伝えました。そのことで、知っているからこそできることというのがあると思うんです。たとえば、それを実はそっとしておいて欲しい、という子どももいれば、積極的にそれを出したい、という保護者もいたりするんです。ですから、そのへんを、まず学校の

方で調べなくてははいけないんです。私、学校に戻ってきまして、4月に外国籍調査というのがあるんですよ。担任がわからないんですよ。言葉がどうも中国系の言葉なんだけれども、外国籍の子どもとして挙がってこない。担任に訊いてもわからない。なぜ訊かないの、訊けない、ということなんですね。そして、今更もう訊けなくなる。訊いたら失礼じゃないか、みたいなかたちがある。ところが、知らないと何もできないということで、私は担任の方にはきちんと訊きなさいと言います。私が面接している中でも、一度として、そんなこと訊かないでくれという顔をされたことはないです。ブラジルから来た子ども、韓国から来た子ども、みんな自分の国に自信を持って日本に来ているんですね。ですから、そのことをまず念頭に置くことが大事だなと思います。その上で何をするか。

さっきの発表で、私の印象に残っているのが、どこの国では、というようなかたちで国でくるような発表は避けた、と言っています。クラスの中にその子がいても、その子は決して、例えば、ブラジルだったらブラジル代表ではないわけなんですね。だからその人を際立たせてブラジルを語らせようとか、ブラジルを理解させようとかいうことは、とても失礼な話だし、無理だと思うんです。私たちが外国に行って、日本では、という風にはできないじゃないですか。だから私は、その国の子どもたちが来たときには、一緒に勉強するという立場でやることは、とてもいいことかなと思います。そして、一緒に勉強できるようなバックグラウンドをきちんと持っているか、ということを理解した上で、そういう学習を進めていくと、実は子どもがお母さんに今ブラジルの勉強をしているんだけど、こういうところがわからないから教えてとか、ブラジルではどうだったのかということで、自分の隠していたと思っていたことが、逆に開いて、そこならば、ぼくはお父さんから聞いてくるよ、お母さんから聞いたよ、というようなかたちで、自分の立場がどんどん出てくる。そういうような関係がいいのかなと思っています。

それから、外国人の保護者の方は学校に居場所を求めている、活躍の場を求めているんですね。去年、京町小学校でふれあい祭りをやったときに、ブラジルの料理をみんなに振る舞おうというコーナーを作りました。なかなか保護者の方は来れないんですね。忙しいから。それなのにそ

の日に限っては、校内のブラジル人の子どもの保護者がたくさん来て、朝からずっと一生懸命準備をしていて、その光景が非常に子どもたちによかったというか、あつこんな料理を食べているんだとか、一生懸命協力してくれているんだということが見られました。ですから、そういうような関係作りの上で授業をしていくということは、非常に子どもたちも親も学校への距離が縮まって、居場所が出てくるのかなと思っています。

会場:野崎と申します。この質問をしたのは、私とこちらにいらっしゃるニウタさんなんですけれども、学生さんたちの国際理解教育というのは人の理解教育だということに強い感銘を受けました。ニウタさんのお話では、そういう機会があって、いろんなクラスに何回も行ったけれど、ニウタさんの好きなこと、ニウタさんのことはみんなよく知っていても、お隣にいるブラジル人の友達の好きなことは何にも知らないし、その子についても何にも知らないという状況があるということです。なので、もし留学生の方がいらして、国際理解教育をするようなことがあれば、そのときに同じようなかたちで、外国人のお子さんがいたら、そのお子さんの国のことでなくても、何か自分のことについて話してもらような機会を作ったら、もしかしたら、さっき人間関係の距離が違うという話でしたけれど、知ることでぐっと近まるんじゃないかなというふうに思っています。前にも中国のお子さんで、中国語で何かをクラスで話してごらんなんていうことで、先生が積極的に取り上げてくださって、そのあと、すぐ自分の国のこと、国というより街のことについて話す機会が増えた、という報告があるので、やっぱり自分のことがいい方に取り上げられるのであれば、子どもたちの自信につながるのではないかなと思って、そんな国際理解教育がいいのではないかなと思ったので、ニウタさんと一緒に質問しました。

会場:私の日本語はわかりにくいと思うのですがよろしくお願ひします。私がいつも考えているのは、国際理解であれば、足元にいる外国籍の人と国際理解する、ということ。ちょっと失礼な言い方なんですけど、例えば、留学生の場合はどうしてもみんなトップの人たちですよ。特に今学校に

いるブラジルの人たちは、イメージで言ったらマイナスのイメージしかないので、その人たちと国際理解とかか交流するのは、本当にやりにくいんじゃないかなと思うんです。私は大田の方にはいるんですけど、大田ではお金を使って国際パーティとかをやって、何人かの外国人を呼んで何人かの日本人を呼んで、みんなすごいこにこしながら交流をやっている。でも、日常生活の中にある日本人の祭りには、ブラジル人は絶対行かない。日常生活の中にあるブラジル人の祭りには日本人も行かない。本当に足元にいる人とする国際交流。みなさんがやっていることはとてもすばらしい。みなさん言葉もできるし。子どもは自分で言えないから、ポルトガル語でもいいから、自分の言いたいことを言ったりとか、人間として言えること言ったりとか、自分で困っていることを言ったりするチャンスです。それも役に立つんじゃないかなと考えながら質問したんです。ありがとうございました。

葛山:ありがとうございました。私もそのとおりだと思います。この件に関して、ナカガワ先生にもお伺いしたいと思います。もしそういった機会があれば、どのような授業を行いたいですか。お願いします。

キョウコ・ヤナギダ・ナカガワ:交流、交流って言うんですが、ブラジルの人たちは交流が好きだって言いますね。でも、食べ物との交流とかフェスティバルの交流とかだけで、日常の交流はしない。私が考えるのは、交流というのは、例えば違う二人の人がいてお互いに変わる。私がこの人から学んで、この人が私から学ぶ、これが本当の交流じゃないかと思うんですね。私はあなたと交流したいんだけど、あなたは私のやり方をこうやりなさいね、こういう風に倣いなさいね、というのは交流じゃないんじゃないかなと思います。

葛山:ありがとうございました。

会場:すみません、もう一つ付け加えさせていただいてよろしいでしょうか。

葛山:お願いします。

会場:とてもいろんな取り組みがあって、すばらしいと思うんですけど、支援という立場より、外国人の子どもがクラスにいたことが、日本の子どもにとっても、すごくいいことだっている風に捉えていくのが、一番大切じゃないかなと思うので、是非そのへんも検討してみて考えていただきたいと思います。

葛山:ありがとうございます。次に、現場の先生に対する質問です。「学校教育という場面で、なぜ国際理解教育を取り入れる必要があるのか」という質問をいただきました。会場の方や前の先生方、どなたかお答えいただけますか。

佐藤裕之:私が国際理解教育をやっている中で、学校だけが国際理解教育の場ではないということだけは、常に意識していますので、私たちがいる意味で共に生きていくために、また社会を作っていくために国際理解教育をやっている。それは学校だけでは到底やっていけるものではないとするならば、今私たちが地域の中で、どんな問題、文化と文化の問題であるとか、それに対してどうアクセスしていくか。それを考えるときに、学校っていうのは、地域の中でいろいろ大きな役割を持っている。そこには子どもたちもいるし、知識を系統的に学ぶということはなかなか地域社会や家庭の中ではできない。そのなかで学校がどう交流していくのか、そういった子どもたちの問題をどう繋げていくのか、というところで見ると、学校における国際理解教育のあり方というのが改めて浮かんでくるだろうと思っています。ややもすると、どうしても、国際理解教育が学校の中から入っていくというところから考えて、例えば、ここ数年総合理解の時間が動き出した、じゃあいきなり国際理解だ、総合理解が減った、じゃあ国際理解はちょっとやめよう、とあまりにも単純化された形である。でもそうじゃないわけです。先ほど昼休みに佐藤先生とも話しをしていたんですけど、私なんかは、こういう国際理解が入りにくくなったか、じゃあ地域の中でじっくりといろんな人と、その実践とその理論とをやっている、学校がまた国際理解に近づいてくるならば、よし、久しぶりにまたやってきたか、というくらいのスタンスでもって、この教育を広めていくことが必要

かなと、私自身はそう思っています。例えば、開発教育なんかはアプローチが違って、もともと NGO、NPO が動かしてきた活動ですから、やはりそういうところから動かしていきながら、それに対して、学校にも入っていくというスタンスを取っていますので、そういう面では、いろんな教育活動が、いろんなアプローチの取り方をしながら、全体としてどういう風に捉えていくかということが必要なとは思っています。結構漠然とした答え方になっていますが、お答えになっていない。佐藤先生に回してみましようか。

佐藤公孝:ちょっと午前中に力を出し切ってしまったんですけど。多様性とか学習支援とか、外国の子どもたちが暮らす良さという言葉で括ってしまうと、かえって曖昧になっちゃうというのは、正直感じています。私は基本的に仕事をすごく楽しくやりたい人間なんですけれども、あまり大きく括ってしまうと、ボディブローのようにどんどん身体にくる感覚をこの 8 ヶ月感じているんです。例えば、外国籍の子どもたちの不登校問題が、多様性ってことだけで括られちゃうと、すごく辛い課題になってしまうんです。今考えているのは、タスクを非常に小さくしていくということです。外国人教育や国際理解教育という大きい括りじゃなくて、その一つひとつ内容やねらいを吟味していくような作業をしていきたいなと思っています。タスクを小さくしていくと、結局先生が声掛けをすることが一番大切だったりします。授業にしても、外国籍の子どもたちと対面させないで終わった後に、韓国の金さんと外国籍の子どもが座って給食を食べるような仕掛けを作って、そこで教員が後ろで見ている「よかったよね」というような声掛けをする。そこを先生や周りの人たちが共有しながら、外国の子どもたちがいる良さというものを、具体的な姿で作っていく。それが国際理解のよきなんだというような発想もあってもいいんじゃないかなと感じています。やはり人間なので、私も居場所が欲しいです。国際理解教育の出発は、居場所作り、自分づくりの土台をしっかり作ることだと考えています。自分の土台を皆探しているのです。それはもう、外国籍の子どもだろうが日本の子どもだろうが、実は先生もそうです。あまり大きく括らずに、母語の問題でも、母語教育でもいろんな視点があるので、何を僕ができるのかってということを、皆が考えてい

くようにすると、国際理解っていうものが見えてくるように感じています。

葛山:ありがとうございました。では次に、国際理解教育活動に関しての意見をいただきましたので、ご紹介いたします。先ほど「国際理解教育活動の枠を広げるためには、教員の意識に働きかける必要があるのではないか」という意見をいただきました。

では、ここまでの話を踏まえて、意見や質問などある方いらっしゃいますでしょうか。

猪狩:実はですね、今ここが折り返し地点になっているのですが、もうそろそろ 5 時だということで、司会の私としまして、焦っているところがあります。これより、後半第二部で話がなされました、学習支援のことについて取り上げていきたいと思います。時間の関係もありますので、いくつかさっさく質問していただいたものの中に、ご紹介できないものもあるかと思いますがご了承ください。

まず一点目に、先ほど第二部の話の中に、保護者のみなさまとのつながりを、学校としてどういう風にしていくかという話が、尻切れトンボのような形で終わってしまったかと思っていますので、もう一度その辺についてコメントをいただこうかと思っています。外国籍の子どもたちの保護者の状況、例えば日本のシステムがわからないですとか、言葉がわからないという中で、具体的に親への通訳、例えば個人相談や保護者会の場面において、または親への情報提供などにおいて、どのようになさっているのかという点をお願いします。これはここにいる方々ではなくて、皆さんの中にも実際に学校の先生でいらっしゃる方もいると思うので、うちの学校ではこういうことやっていて実はうまくいっていますというようなことがあったら、意見共有の場として、是非報告していただきたいと思います。まず実際に、うちの学校でどのような取り組みをしていたかということについて、先にアミーゴスで活動していた渡邊桃子さん、お話ししていただけますでしょうか。

渡邊桃子:アミーゴスで、川崎にあります、京町小ですとか殿町小に行かせて頂きました。特に通知表の翻訳とか、保

護者との連絡というのを、すごく私たちに期待された部分というのが多かったと思うんですね。実際に子どもたちと話す中で、専攻語を話す機会というのはほとんどなく、専攻語を使う機会というのは、この成績表の翻訳、保護者との連絡といった場面だったと思います。やはり、専攻語を使って、手紙の内容を保護者の方に伝えるというときには、自分たちの翻訳、自分たちの語学力自体がまだまだ不足している部分があったので、ただ手紙をそのまま訳して渡すだけでは、どうしても不安なところがあったんですね。本当に通じているのか、本当に私たちが言いたいことが伝わっているのか。そういうことがあったので、私たちは訳したもものを持って、直接お母さんと話す、直接保護者の方のところに行って説明するというのを、初期の段階では行っていました。保護者の方も、どうしてもこの手紙をそんなに学校は欲しいのか、緊急時の連絡先をどうしてもこんなに欲しいのかということ、やはり直接話さなくては伝わらなかったという部分もあったと思いますし、直接話すことで行間に潜んでいる意味ですか手紙を読んだだけではあいまいなところなどに関して、確実に意思疎通ができたかなという場面はあったと思います。保護者の方は日本語がわからない、先生はもちろん母語はわからない、というのはすごく大きな壁で、先生方から「向こうの親御さんは日本語がわからないから、どうしてもコミュニケーションができないのよね」と言われ、一方で保護者の方からも「学校のことは知りたいと思うんだけど私は日本語を話せないし、日本語で言われてもわからないからね」と言われる。お互いそこでやっぱり止まってしまって、じゃあお互い話す機会はどこにあるのかっていうと、うーん言葉がね、とそこで終わってしまうというのがすごくあるなと思っていました。結局、お互いが少しずつ歩み寄ればなんとかなるようなところでも、きっと学校の先生も30人のうちの一人にそこまで時間を割くこともできないと思うんですが、親が日本語がわからないことだけが問題なのではなくて、先生の方も母語がわからないから仕方がない、とりあえず訳して伝えておくれれば、というのがあったのが少し残念かなというのはありました。

猪狩:どうもありがとうございました。会場の先生方の中で、

うちの学校ではこういう取り組みをしていて、うまくいっているという話がありましたら…。ないようでしたら、次の質問にいかせていただきます。

次の質問は、日本語学級の先生方に対する質問なんですけれども、「手探り状態で国際学級の運営を始めることが多かったということで、その試行錯誤の内容を是非聞かせていただきたい」という質問と、また、「自分が国際指導員として働く際、自分がいることで、実は外国籍の生徒と日本人の生徒との壁になっているんじゃないか」ということを感じたことのある現場の先生がいらっしゃいますか。これもまた、会場の声を聞いてみたいと思うんですけれども、どなたかもしそのような意見がありましたら、どうでしょうか。実は私は指導員としてやっていた経験がありますという方はいらっしゃいませんか。残念ながら帰られてしまわれたようなので…。

萩原:この質問をしたのは私なのですが、実は言っておきたいことがあったので話します。さっきの発表の中で専門員を増やしたらいいんじゃないかとか、システムを整えることが大事だということがすごく言われていました。それはそうだと思うんですけど、実はそういう人が、日本人の子どもたちと外国人の子どもたちの壁になっているんじゃないかということ、私は最近感じているんです。というのも、教育実習に行ったのですが、10年前に私がその学校にいたときには、外国人の子どもたちがクラスに2、3人いて、まだシステムも何も整っていないで、通訳の先生もいらっしゃらなかったんです。でもその中で、日本人の子どもたちや日本人の普通の先生が、「明日はね、体操服持ってこなくちゃだめだよ」とか、なんとか身振り手振りで教えていたんです。でも今10年たって学校に帰ってみると、その翻訳のお便りは、全部システム化されてパソコンの中に入っていて、クリック一つで出てくるという状況でした。さっきピアスの話が出たんですけど、もう子どもが「なんでこの子はピアスをするんだろう」という疑問を抱く前に、パソコンから印刷された「ピアスはしてはいけません」というお便りが子どものところに行っているのです。だから、そういうチャンスさえも、もしかしたら奪っているんじゃないかなというのが私の正直な感想です。だから指導員だけの増強で本当にいいのか

などというのを最近思っています。

猪狩:ありがとうございます。

会場:大阪教育大学の留学生センターの長谷川と申します。今日はいろいろな発表をありがとうございます。私は留学生の日本語教育が主な業務なんですけれども、同時に、大阪教育大学に在籍している日本人学生が、できるだけ国際的な視野を持って教員になってもらいたいということで、例えば海外への留学を勧めたりとか、留学生とペアになって外国籍の子どもたちのために何か活動ができないかということを進めています。ただ、まだあまり形になっていなくて、東京外国語大学の学生さんのように、みなさんがそれぞれ色々な言語を専攻して、海外に対する目を持っておられるというのが、大変うらやましく思いました。それで、教員志望の学生さんたちに、どういうことがこれから望まれるのかな、ということを考えながら、いろいろと伺っていました。

ひとつの本当に小さな例なんですけれども、紹介したいことがあります。数学教育を専攻の中学の教員になる学生が、中学校に学習支援に行きました。中国語は全然わからないんですね。でも数学を教えることは大変得意でして、活動したのはその国際学級、つまり中国籍の子どもたちを集めた国際学級ですね、そこで数学がどうしてもわからないという子どもがたくさんいて、数学を教えに行ったところ、お姉さんお姉さん、と言って、とても親しみを込めて接してくれたというんですね。最初は、その学生が中国語をわからないので、どうなるかと思っていたんですけど、行ってみると、数学を通じて子どもたちが壁を取り払って、高校受験のために一生懸命勉強をし、少し前進できたということでした。国際学級が壁になってしまうんじゃないかということ、それから、先の先生がお話しされた、大きく括るんじゃないかとひとつずつ少しずつ、とか、足元の交流とかということを伺って、やはり今の教員養成というのは、日本人のためのいい日本の教師を作っているんじゃないかと。つまり、そこをシステムとして変えるという必要がある。一言で言うのは簡単なんですけれども、実は一人一人が意識を変えないと、なかなかうまくいかないんじゃないかなっていう気

がしています。質問というよりひとつの事例で、本当にまだひとつ芽が出たばかりなんですけれども、そういう活動も進めていきたいなと思っております。そのためにも、みなさんが経験されたこととかご存知のこと、あるいは学校を訪問されて得た情報ですとかを、いろいろなところで発信していただきたいなと思います。どうもありがとうございました。

猪狩:どうもありがとうございました。

会場:日本語学級の担当者なので、萩原さんのおっしゃっていたことに、一言だけは言わなくてはいけないかなと思ったのですが、おそらく壁になっているだろうと思います。さっきの例はそのとおりで、たぶん学校の中に一人二人だと学校中でわいわいしながら一生懸命みんなですべてをやる。でも、それ以上の数になってくると、とてもじゃないけど抱えきれない。そうすると、外国人生徒の教育を担当する教員が置かれる。その人が一人来たら、すべてをその人に預けて、他の人は外国人が一人もいないような顔をして生活できる。そのために、一切の外国人に関わることを背負ってもらうのがあなたの担当、という雰囲気、一気に変わってしまうから、本当にそういう部分はあると思います。でも、これから日本の学校にどんどん子どもが増えてきたら、まさに日常に日本人のこしか考えていない学校の中では抱えきれないですから、きっと担当者が置かれるし、その人にすべて預けておしまいになってしまうだろうと思います。そして、さっき言っていた専門の教員が必要だということは、100年も言っているような気がするんですけど、これは日本の義務教育の対象ではないので、日本語科という教科は置きません。だから、教員も採用しません。でも、今こういう形で、外国語大学の中にかかわっている人がこれだけ増えてきているのだから、今学校の中にいる子どもたちに関わろうとしたら、しょうがないですから、みなさんが何か動きを取って学校に入ってください。また、私も東京外国語大学の日本語専攻の卒業生です。でも、社会科の免許で教員採用試験を受けて、しばらく社会科の教員をしながら、日本語学級に行きたい行きたいと言ってやっとこの仕事に就きました。でも数年すると、異動の時には、どこに回されるかわかりません。だからノウハウは蓄積できな

いようなシステムになっていると思っていいと思うし、蓄積するべきだ、そういう専門教員を育成するべきだという考えは、今東京都には無いです。

猪狩:先輩からの貴重なご意見どうもありがとうございました。この件に関して、高野先生にコメントをいただければ、と思います。

高野邦夫:今おっしゃられたように、厳しい現実があるわけです。今までは、外国人児童が増えていく中で、外国人児童に対して、囲い込めば、あるいは専門の先生にお願いすればいい、という現実があるということは今おっしゃられたとおりなんです。けれども、これまでを見ていくと、まだまだ外国人児童は増えていくと思います。私は、本学でフィリピン語を非常勤講師として教えているんですけど、そういったかたちで、在日のフィリピン人児童に強い関心を持っているわけですが、フィリピン人児童を見ても、毎年日本人とフィリピン人のカップルが7000組以上生まれています。単純計算して7000人以上のフィリピン人児童が生まれていて、日本でずっと生活していれば問題ないわけですが、ただ離婚が多く、途中で母親と一緒にフィリピンに帰国して、また日本に舞い戻ってくる、もしくはフィリピンで育っても、母親が日本人と再婚するとともに再来日する、というケースが非常に増えております。こういったフィリピンだけの事例を見てみても、まだまだ外国籍を持つ児童が増えてくるのが予想されますので、我々はこういった現実から、今は専門の先生に押し付けていても、いつかはパンクする日がくるのではないかと思います。そういったことを我々は気づいているわけですから、今からでも少しずつ、問題自体は大きいのですが、先ほど先生がおっしゃったとおり、一つずつタスクを小さくして取り組んでいけたらと思います。

猪狩:どうもありがとうございました。時間が迫ってまいりまして、次の質問で最後とさせていただきます。次の質問は、外語大生だからできることということについてなんですけれども、実際にその質問に入る前に、ひとつコメントとして、外語大生にできることはこういうことがあるのではないかと

いう提言がありましたので読み上げさせていただきます。一つ目は「子どもと母語でいろいろな話をしながら、今やる気が出ない原因はどこにあるのかを一緒に考えて、本人自身がそれに気づいて立ち上げられる力を育てることができるのではないか」「先生とは違う、お兄さんお姉さんとして、相談できる人がいて欲しい」。三つ目として「母国の人は、日本の学校文化をなかなか知らないの、それを母語で伝えられる人がいるといい」。四つ目として「あなたの国が好きで、あなたの国の言葉を学ぶ日本人がいることを、子どもたちが知って欲しいということ、そして、もっと子どもの国のことをバックアップして欲しい、それを周りの日本人に伝えて欲しい」。このようなすばらしい役割が寄せられました。最後は「外語大生ができることに絡んで、先ほどペルー人学校ムンド・デ・アレグリアの発表の中に、私なりに課題を分析して対応していきたい」というコメントがあり、それは具体的にどのようなことをしていきたいと考えているのか、ということについて、取り上げたいと思います。

黒野:第二部の発表でも述べたことなんですけれども、本当にニーズですとか、やらなければならないこと、やれることというのは多岐に渡ると思うんですが、もちろんそのすべてを私たちがすることは不可能だと思います。そんな中で外語大生だから、学生だからできることというのは、また少し漠然としてしまうんですけど、まず外国語やその国、地域の社会や文化のことを学校で学んでいるということで、私たちは他の学生に比べて、違いということを受け入れるのにとでも慣れていると思いますし、それができる人間だと思いますので、そういった外国人児童自身を受け止められる人材となるのがまずできることだと思っています。また、英語プラス少なくとも一つ何か言語を学んだりですとか、あとは留学を経験したりということで、児童が経験している、新しく言語を学ぶ難しさですとか、自分の母国と違う新しい国に行く大変さというものも理解して、子どもたちの気持ちを汲み取って理解する存在になることができると思っています。この質問が、ムンド・デ・アレグリアの訪問を終えてについてですので、その文脈でもお答えしようと思います。ムンド・デ・アレグリアのような、日本に定住することを考えて教育をやっている外国人学校で、私たちはなにができる

のかなと少し考えたんですけども、国際理解教育班が今日発表したような授業の反対に、日本バージョンのようなものもすることができるのではないかと思います。外国人学校という環境ですので、逆に、日本人と会う機会ですとか、日本人と交流する機会というのが、すごく少なくなってしまうと思いますので、日本を知るための、日本人を知るための授業、一緒に暮らしていくための基礎知識といえますか、そういったものを一緒に考えていける授業をすることができるのではないかなと一つ例を考えました。また、日本語で教育を行う基礎が無いと言ったんですけども、そういうところでは、私たちが実際にした例ですと、ムンド・デ・アレグリアでは教材が全然なくてという話を先生に伺ったんですが、支援室にちょうど先生方が求めているような教材があったなというのを私たち思い出しまして、そういう教材があるんだよということをお伝えしたりもしました。すごく小さなこととは思いますが、そういうこともできると思います。また大きなことになってしまうんですが、人材それ自体になることもできるのではないかなと思っています。私は日本語専攻なんですけれども、私と同じ日本語専攻の半分以上の人は、3年生の時点で日本語教育能力検定試験というのを取って、日本語教師の資格を取ったりですとか、毎年数人は外国の小学校や中学校に日本語を教えに行ったりしているんですけども、そういう経験を生かして日本語で教育を行う人材になることができると思います。

猪狩:どうもありがとうございました。実はこのほかにもいろいろと質問が来ているんですけども、時間の関係でここまでとさせていただきます。前にいらっしゃる先生方、みなさん、どうもありがとうございました。それでは最後総合司会のお二人に話をお任せしたいと思います。

谷村:ありがとうございました。以上を持ちまして本日のプログラムを終了いたします。最後に多文化コミュニティ教育支援室運営委員長であります武田千香先生に閉会の挨拶をお願いしたいと思います。

武田千香:多文化コミュニティ教育支援室の責任者であります武田千香です。今日は朝 10 時からもう 5 時 15 分、7 時間 15 分に及びまして長丁場、お付き合いくださいまして、また週末を割いてご来場くださいましてどうもありがとうございました。プロジェクトを始めて 2 年と少し、それから私の場合はそれ以前からアミーゴスの顧問をしていたということで今の立場になったわけですけども、それからカウントいたしますと 3 年半が経ちます。今日はその総括ということでこの学生多文化フォーラムを開催させていただいたんですけども、その活動を振り返ってみますとつくづく感じていますのがこの活動を貫いているのが人間だ、ということなんです。考えてみますと、人に始まって人に終わるのではないかなということをつくづく感じております。もともとこの活動は学生たちが、今大学で学んでいること、学べるという恵まれた状況を生かして何か役に立ちたいということで始めた活動です。そこには人から人への思いやりがあったと思います。そして学習支援を始めたわけなんですけど、この多文化コミュニティ教育支援室を始めてもう一つの柱、国際理解教育というのが始まりました。始めてみますと、正直に申しましてそちらの方が支援室では活発になっていた感があるんですね。それがなぜそうだったのかと考えてみますと、この大学には留学生がいて日本人学生がいたわけですけどもその間の交流があまりなくて、または専攻語がわりと縦割りになっている、学年も分かれているという、そういう色々分かっていたグループがなかなか交流する空間が無かった。そういう人たちが友達になろうと思っても、お茶を飲んで友達になりましょう、では友達になれなくて、やはり何か一つのものを作り上げていくという、そういう場が必要だったと思うんです。それが国際理解教育の授業作りという場で実現できたのではないかと考えているんですね。その成果が 206 の部屋にあるわけなんですけれども、あそこでは専攻、学年、出身地域を越えた人と人との交流の空間が生まれることとなりました。そうしてこのプロジェクトを始めていきまして、私たちの中にも次第に変化が現れてきたんです。それはなにかといいますと、学生たちがこの活動を始めまして、初めは非常に子どもっぽかった学生たちが半年も経たないうちにみるみる成長していった、もう社会人になっていく姿、人間力を身につけ

ていくんですね。行動力、組織力、責任感、そしてコミュニケーション力とこの4つを私はいつも挙げるんですけども、そういう姿を見ていきまして、最初は活動そのものにも価値を見出していたんですが、そのうちいや、私たちは教育機関の人間なんだと、当たり前なんですけれども新たに感じまして、やはり人作りということ、それが私たちの使命なのではないかという風に考えていくようになりました。世の中を見ていきますと、いろいろな課題、問題がありますけれども、それを作るのも人間かもしれないけれども、それを解決するのも人間だということ。対症療法もいいかもしれませんが、それを解決する能力のある人間、問題が小さいうちに食い止める、そういうような人が社会に求められているとすると、人作りというのが私たちの使命だという風に感じたわけです。私たちも人から人に学ばせていただいた、人同士の学びあいがあったということなんですけれども、そうしてこの現代GPは3年という期限がありましたのでその次を考えたわけですね。もう少し大きな規模でやらなくてはならない、人作りを真剣に取り組みなくてはならないということで、去年文科省に申請をして今年度4月に先ほど学長からも紹介させていただきましたように多言語多文化教育研究センターを立ち上げて、そこでは教育と学習の裏づけとなる研究、それから地域社会からのいろいろなオファーをいただきましたので、その要請に応えていけるように社会貢献、とこの3つが動かしていけるようにという風に立ち上げました。この多文化コミュニティ教育支援室、今は現代GPで動いていますけれども来年度の4月からは、多言語多文化教育研究センターの教育部門の原動力、心臓として統合されていく予定となっております。このプロジェクトでは、私たち多文化コミュニティ教育支援室の運営委員はみなこの問題に関しては素人でありまして、素人ながらも人と人の協力連携で動かしてきたわけなんですね。だけれどもそろそろプロが必要だということになりましたので、先ほど会長からも国際理解でも何でもやはりプロを置く必要があるということをご提言いただきましたけれども、運営に長けた教員とプログラムコーディネーター、熱心な職員も配置することができましたので、ここでいよいよ私たちはプロへ引き渡すことになっていきます。ここには人から人への継承があるのではないかと思います。

そういうことを考えますとこの現代GPを振り返ってみて何だったのかなと考えますと、この問題は非常に大きな問題ですから、例えていうならばジャンボジェット機か何かだと思えるのですが、そのジャンボジェット機が滑走路に行くまでには何か牽引していかなくてはならないわけですよ。そうしますとこの現代GPというのは、いよいよ離陸というときの滑走路まで連れて行く、そういう役割だったのかなということも感じております。これからいよいよ離陸していくこととなります。ここまで来るまでに本当にいろいろな方に助けていただきました。もう私たちだけではできなかった、そういう風を実感しております。今までお世話になりました方々にはこの場を借りて心から感謝を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。つくづく感じます、本当に最後はこの社会は人間なのだ、ということなのです。そしておかげさまで皆様の善意をもってここまで来て、私だけではなく運営委員一同本当に善意に支えられてきました。醜いのも人間かもしれないけれども美しいのも人間だということを実感しております。本当にありがとうございました。

谷村:ありがとうございました。以上をもちまして、東京外国語大学多文化コミュニティ教育支援室主催、学生多文化フォーラム、「学ぶ・実践する・担う —『東外大モデル』の軌跡と展望」を閉会いたします。本日は非常に長い時間にわたりましてお付き合いいただき、誠にありがとうございました。

5-4.調査報告

はじめに

報告者: 和田 更沙 (外国語学部ポルトガル語専攻 4年)

1.調査のきっかけと経緯

多文化コミュニティ教育支援室では、新宿区や川崎市の小学校、また府中国際交流サロンにおいて学習支援活動を行ってきた。各小学校では、担任が授業を行う教室に入り、担当のJSL児童・生徒(JSLとはJapanese as a Second Languageの略で、ここでは国籍に関わらず日本語指導の必要がある、という意味で用いることにする)の隣でやさしい日本語や児童・生徒の母語を用いながら、授業理解の補助を行った。府中国際サロンでは、日本語指導や各教科の予習や復習、または定期試験や入学試験に向けての対策など、各生徒の状況や要望に応じて個別に指導を行った。

そのような活動を行う中で、JSL児童・生徒に様々な問題が起こるのは、日本語の能力以外にも原因があるのではないかと感じるがあった。

例えば日本では、JSL児童・生徒はそれぞれの年齢に応じた学年に入る。日本語の出来がどのようであるかはもちろん、母国で何を学んだかという考慮はなされない。とはいえ、算数の四則計算や理科の自然法則などは、母国においても同様の内容を学習しているだろうと考えていた。しかし、算数に関して、母国とは数字の書き方が違う、割り算の筆算のやり方が違う、と児童に言われたことがある。学ぶ内容は同じであっても、日本とは学習の順序ややり方、考え方には違いがあるのではないだろうか、という疑問を感じた。更に、社会科の授業ではどうだろう。日本の公立学校では、日本の地理や政治、歴史など日本に関することを中心に学ぶが、母国では何を学んだのだろうか。また、母国でも日本と同様に母国に関することを学んでいる場合、母国で学んだ内容はそのまま日本での学習に活かされるのだろうかなど、母国での学習内容や順序に関する疑問が浮かんだ。

学習面だけではなく、学校生活においても、JSL児童・生徒の戸惑いを感じる場面があった。ピアスやアクセサリ

を付けて登校する児童や、先生や同級生を名前呼び捨てにする児童がいた。生徒から、日本の宿題の量は母国に比べて少ないのもっと出して欲しい、という要望を受けたこともある。さらに、母国の先生はとても厳しく試験の成績が悪いと叩かれたが、日本の先生はそれに比べ甘いのでやる気が出ない、という生徒の声も耳にした。学校にアクセサリをつけて来てはいけないことや、先生を敬い同級生を「さん」づけすることなど、今まで日本の学校に通ってきた私たちには普通のように思われることだったが、JSL児童・生徒にとっては戸惑う原因となってしまうことがあるようだ。他にも掃除の仕方や給食など、実は日本の学校には日本独自のルールや文化、雰囲気があるのではないかと感じるようになった。

2.調査の手順

これらの経験から、私たちが学習支援活動をする際に、知っていると有用であると考えたことが二つ浮かんだ。

まず、母国で彼らが何をどこまで学んできたのか、つまりJSL児童・生徒の母国の教科カリキュラムを知ることである。それにより、児童生徒が母国で未学習の内容を補い、また二国間の学び方の差異に配慮しながら支援活動を行うことができる。

そして、外国の学校文化やルールを知ることである。それにより、母国と違う部分を事前に保護者や児童生徒本人に伝え、戸惑いを少なくし、学校への適応を助けることができる。

そのために、JSL児童・生徒を抱える日本の公立小学校を訪問し、JSL児童・生徒や彼らと接する教員が抱える問題を把握することにした。そしてその原因を、外国人学校を訪問することで文化、カリキュラムの面から明らかにしていくことにした。

3.学校選定

日本の公立小学校は、これまでに学習支援活動を行ったことのある川崎市立京町小学校と、新宿区立大久保小学校に訪問した。川崎市は産業道路や工場が多く、外国人労働者の集住地域となっている。川崎市立京町小学校でも数年前から外国人児童の姿が見られるようになり、

今までにブラジル人児童やボリビア人児童などの学習支援の依頼を受けて活動した経験がある。一方、新宿区大久保は、コリアンタウンとして知られている町だ。大久保小学校も韓国料理店が多く立ち並ぶその町の中にあり、韓国籍だけでなく中国、フィリピン、ブラジルなど多くの JSL 児童が在籍している。

外国人学校の選定にあたっては、今後の学習支援活動に活かすという目的から、公立学校での在籍数が多いと思われる中国、韓国やブラジル、ペルー、フィリピンなどの候補をあげた。

まず、これまでの活動でも生徒を支援した経験のあるブラジルやペルーの外国人学校を選んだ。これらの国の外国人学校のうち、学校法人や各種学校として文部科学省から認定を受けているものはまだ数が少ない。しかし、1990年の「出入国管理及び難民認定法」改正による日系労働者の増加とともに、彼らの子どもも多く来日しており、母国語による教育の需要は高い。そのため、母国と同じカリキュラムをとり、母国政府からの認定を受けている外国人学校はいくつか存在している。

さらに、ここ最近のIT産業の発展による来日増加に伴い、需要が生じているインド人学校にも訪問する事にした。これは、今までにあまり先行研究のない、アジアのインターナショナルスクールをみてみたいという理由からである。

その他にも、中国や韓国は多くの民族学校があり調査しやすいと考えた。しかしこれらの国は日本と同様に漢字圏であるため共通点が多く、またそれらの人々は日本に定住するようになって長い間既に様々な研究がなされている。そのため今回の調査では対象から外すこととした。

また、名古屋にある日本唯一のフィリピン人学校も候補としてあがった。しかしこの学校の抱える児童の多くは、フィリピン人の両親が超過滞在などの法的問題をかかえているために地元の公立学校に通うことのできない児童である。よって法的に弱い立場にいる彼らを守るために、外部の人間の訪問を基本的に受け付けていない。また一方で、日本の小中学校で学習支援の対象となるフィリピン人児童生徒のほとんどは、フィリピン人の母親が日本人と再婚したことを理由に来日している。フィリピン人学校に通う児童と、公立小学校で支援の対象となっている児童との背景が

大きく異なることから、今回の調査の趣旨とは合わない判断し、外すことにした。

その結果、訪問した学校は以下の5校である。

- ・新宿区立大久保小学校
- ・川崎市立京町小学校
- ・ブラジル人学校 コレジオ・ピタゴラス・ブラジル 太田校 (Colégio Pitágoras-Brasil, Unidade de Ota)
- ・南米系外国人学校 ムンド・デ・アレグリア (Mundo de Alegria)
- ・インド人学校 インディア・インターナショナルスクール・イン・ジャパン (India International School in Japan)

川崎市立京町小学校

調査員：山田 寛子(外国語学部フランス語専攻4年)

中村 未央(外国語学部ポルトガル語専攻4年)

服部 聡依(外国語学部ポルトガル語専攻4年)

高野 邦夫(本学フィリピン語非常勤講師)

1. 学校概要

京町小学校は、川崎市川崎区に位置し、JR 川崎駅からバスで約10分の所にある。川崎市は、東京湾臨海部に工場が立地し始めた1990年代初頭から今日に至るまで、日本各地や朝鮮半島を初めとする海外から多くの人に移住し発展してきた。2004年12月末日で26508人の外国人登録者を擁し、外国人市民が本市人口に占める割合は2%を越えている。(参考 URL 後記)

そのため、2006年度における外国籍、二重国籍及び元外国籍であった児童は、京町小学校全校児童605名のうちの16名である。(2007年2月現在。2006年8月訪問時は15名であったが、最近ブラジル人男子1名が入ってきたようだ。) 当校において外国人にルーツを持つ児童が多い理由は、近隣に工場はないものの、ブラジル人、ペルー人場合は社宅を利用することもあり、そこが通学に便利な環境にあるためである。

文部科学省より、今年度から来年度にかけての2年間、川崎市内の「外国人児童教育支援センター校」に選ばれ、

委託を受けた。今年度は委託を受ける以前に国語科の研究に着手していたため、センター校としての準備はまだ整っていなかったが、来年度に向けて「国際理解教育」の取り組みが始まったところだ。

2.国際教室

当校では JSL 児童(JSL とは Japanese as a Second Language の略で、本文では国籍に関わらず日本語指導の必要があるという意味で使用する。)の学習や生活への適応といった課題に更に対応していくため、校舎 3 階に「国際教室」が設けられている。通常、国語の時間に、JSL 児童一人もしくは複数人をこの教室に取り出し、週当たり2～4 時間学習させる。(「取り出し授業」と呼ぶ。)

来日 1 年以内で、日本語が出来ない児童には取り出し授業の他に、川崎市総合教育センターから派遣される「日本語指導等協力者」の講師による取り出しの初期指導の授業がある。この授業では日本語そのものを JSL 児童に学習させる。また、母語に通じているという指導講師のメリットを生かして、JSL 児童の悩みを受ける。

これに対し、国際教室担当教師による取り出し授業は、言語習得のみならず、クラスの授業に一日も早く入っていける力、「日本語で学ぶ力」、「日本語で何ができるか」を念頭において指導している。また、高学年の児童に対しては、理解しにくい理科や社会の難しい用語や人物名に慣れるため、国際教室で先行授業が行われ、授業の内容に児童が入っていきやすいようにする。テストの際はクラスで担当教師が解説をしながら、児童にテストを受けさせることもある。

今回の調査に協力して下さった国際教室担当の鈴木玲子先生は、2006 年度で担当 2 年目となる。2006 年度には、前述した外国にルーツを持つ児童 16 名のうち、9 名に対して国際教室における指導を行っている。内訳は、ボリビア人児童 2 名(2 年男子・1 年女子)、ブラジル人児童 2 名(4 年男子、2 年女子)、フィリピン人児童 5 名(5 年男子・3 年女子・2 年男子 2 名・2 年女子)である。

国際教室担当の教師は、川崎市総合教育センターや東京都から発行されたテキスト等、日本語指導の教材を独自に選んで使用している。日本語が十分にわからない

児童のために、ひらがな・ローマ字表や掛け算九九表を作り、各自に持たせるという配慮もしている。

また担当教師は、各学級担任の教師と JSL 児童の学習状況についてコミュニケーションを取るように心がけている。国際教室の取り出し授業終了毎に、児童が何を勉強したか「学習カード」に記録し、各学級担任の教師に渡してコメントをもらい、相互に連携している。

この教室では、勉強のほかにおはじき、紙風船、すごろくなどの日本の遊びも教えているうえ、遊びを通じて数の勉強もしている。JSL 児童の学習塾への通塾は見受けられないが、その代わりに、児童は放課後や休み時間に国際教室に立ち寄って、担当教師に質問を持ってこくこともある。JSL 児童にとって居心地の良い学校空間を作るため、国際教室担当の教師が日々創意工夫を重ねているということが感じられた。

3.外国人児童について

彼らの抱える生活面での困難の一例として、ブラジル人児童やフィリピン人児童がピアスを付けてくることがあった。国際教室担当の教師が日本の学校ではピアスを付けられないということを教えると、児童自身が納得し徐々に付けなくなった。また、ピアス着用に対する、高学年の日本人女子児童からのひがみの声にも、日本とは異なる文化があるということを説明しているの、いじめはないと担当教師は語っていた。このような相互理解を促す指導は、言葉がわからないストレスによる八つ当たりが起きたとき、掃除の仕方の違いに戸惑ったとき、教師を呼び捨てにしまったときにも行われた。慣れない給食を残してしまうというような初期に見られる不適応の場合は、児童自身の慣れによって解決されることが多い。

学習面においては、どの国籍の児童も学習意欲旺盛であり、国籍による能力の差は発生していない。その意欲は他の場面にも表れている。例えば、宿題は算数の文章題の意味がわからないなど、できない場合を除けば、ほぼ確実にやってくることができ、学校に必要な持ち物も家庭で買い揃えてもらえる。

ただし、3 年生のフィリピン人児童が、日本では 2 年生で習うはずの掛け算を習っていないという、本国との学習カリ

キュラムの違いによる困難が実際にあった。その際、国際教室担当教師は、掛け算九九の仕組みと唱え方を手作りカードにし、児童に携帯させて覚えさせ、指導は成功した。とはいえ、カリキュラムの違いは児童の自己申告に頼りたくないため、学習カリキュラムの違いを把握する必要があると言える。

JSL 児童は様々な困難を抱えているが、国際教室担当教師が指導の際に大切にしていることは、児童に自信を持たせることであるようだ。算数などで、できる問題を皆の前で解かせることで、「外国人だから」というハンディをなくし、自信を持たせることができる。

中学校進学後の JSL 児童が抱える困難についても、国際教室担当教師から話を伺うことができた。中学校では授業の進度が速くて細かいこと、教科によって先生が変わることがあり、言葉の面での困難も大きい。人間関係も小学校とは変化するため、友人関係での悩みも生じる。保護者は児童に対し、高校進学を目指すように考えているが、他の外国人生徒がどうやって高校進学を果たせたのか情報が欲しいという。では次に、外国人児童と同じように様々な困難を抱えている保護者について、学校へのニーズとそれに関する学校の対応も含めて見ていく。

4.外国人保護者と学校の対応

京町小学校においては、外国人児童及びその家庭の大半が父親の仕事の関係で来日している。父親は工場等で肉体労働者として働く一方、母親は、本屋、弁当屋などで働いたり、夜の仕事をしたりする等、皆共働きであるようだ。

インタビューを通して私達が驚いた事は、日本定住を目指している外国人の家庭が多いということである。そのため、児童の学習状況に対する保護者の関心は自然と高いものとなっている。確かに、以前、一人のブラジル人児童の家庭では、本国への帰国の見通しがあやふやで、その結果として保護者が児童の学習状況にあまり関心を示さないという例もあった。しかし現在は、家庭状況が比較的安定した家庭が多いためか、保護者は概して児童の教育に対して熱心である。

では、学校側は具体的に保護者にどのような対応をし

ているのか。

まず学校・家庭間の連絡については、配布する全てのプリントをルビ振りにして対応している。仕事歴・日本滞在歴がある父親が日本語を解すことが多いため、理解してもらえらるからだ。日本語が通じにくい家庭をクラスの緊急連絡網で最後に置くように配慮していて、緊急の連絡がある時は担任が直接その家庭に連絡することもある。外国人児童の家庭には、年度始めに国際学級担当教師がいるということを伝えている。また、国際学級担当教師が個別に家庭訪問をする機会も多い。

学校・家庭間の連絡について、もう一つ特筆しておくべき独自の取り組みがある。それは、「外国人保護者会」であり、外国人保護者を月に一度集め、主に年間行事の説明などを行っている。これは小さなきっかけから立ち上がった試みである。それは現在 3 年生になるブラジル人児童の父親が、学校からの連絡でわからなかった箇所を職場に質問していたことに端を発する。その父親の職場の社長が京町小学校に、「学校の問題を学校で解決できないか」と提言したことが契機となり、外国人保護者の相談を受ける「外国人保護者会」が始まったのである。保護者間の交流にもつながり、互いのサポートにも役立てるという機能もある。今年度は 9 回開かれることが予定され、現在は 7 世帯が主に参加している。

他方、日本人の保護者に対しては、年度始めの授業参観や学年だよりで、当小学校の外国人児童の存在とその取り組みについて通知するようにしている。そのため、外国人に対する日本人保護者の理解度は芳しいようだ。

ただし、外国人保護者は授業参観には来るが、日本語がわからないため、その後のクラス懇談会の時間になると帰ってしまうことがある。しかし、京町小学校では 2005 年度から PTA 活動への全校取り組みを実施している。そのため、外国人だから学校の仕事をやらしてもらわないというスタンスではなく、できることを積極的にやらしてもらおうスタンスを採っている。スクールクリーン作戦(地域に住む人、児童、PTA が共に周辺学区や校庭を清掃する行事。年に 2 回開かれる)への参加や学級のカーテン洗いなど、言葉の理解に関わらずできる仕事を担当してもらい、外国人保護者の学校行事への参加を促している。毎年 10 月に開か

れる「ふれあいまつり」では、外国人保護者の自主的な協力のもと、外国人児童の出身国の料理や文化の紹介を行うコーナーを設けている。

5.今後の課題

第一に、母語教育の実施である。国際教室担当教師は、外国人児童が母語を確立しながら、日本語環境で生活することが大切だと考えている。日本語を理解できない状況であるうちは母語で思考するため、日本語も母語も確立されていないと、どちらの言語の習得も中途半端になる恐れがあるからだ。それに加え、家庭内コミュニケーション言語としても母語は重要である。しかし、学校で母語教育をする余裕は現在無いという。

第二に、現在の国際教室担当教師の知識や経験を受け継ぐシステムの構築が課題である。現在、神奈川県には、JSL児童が5人以上在籍する学校に国際教室担当の教師が配置されるシステムがある。しかし、国際教室を担当したことがある教師がその分野とは関係のないポストに就くことも多い。また、京町小学校の例では、国際教室あるいは日本語指導を担当する教師がここ3年くらいいなかったため、現在国際教室を担当している教師は手探りのまま国際教室を始めた。このように、国際教室を担当したことがある前任者から、その知識や経験を受け継ぐことが難しい場合もある。

どちらにせよ、国際教室担当の教師だけで解決できる課題ではないため、学校全体で、また、教育の場全体で検討されることが望まれる。

6.訪問を終えて

教師を呼び捨てにする児童がいたり、フィリピンやブラジルの児童がピアスをつけて日本の高学年女子児童から反感を買ってしまったという事例はあったものの、京町小では相互理解を促す指導によって問題が解決されていた。そのため、日本人の児童とJSL児童、そして教師が互いに理解しあっていて、よく耳にするいじめなどの問題がないことに感動した。

JSL児童に、算数の問題をみんなの前で解かせて自信を持たせる指導を行っていたり、その保護者にカーテン洗

いや清掃などPTA活動に参加してもらったりと、言葉の理解度に関係なくできることで参加型をつくっているのが良い。

また、学内に児童の母語で挨拶を掲示したり、保護者の協力のもとでふれあいまつりを開き、料理や文化について学んだり、日本とは異なる言語や文化を知っているからこそできる活動をしているのもおもしろい。(山田)

京町小学校に在籍する外国人児童とその家庭が、単に日本で一時的に稼いで本国に帰国したいと考えているだけでなく、日本で定住したいと考えているというのを伺い、個人的にはとても嬉しく思った。そのためか、児童にも比較的学習意欲があること、保護者も日本の学校で児童に教育を受けさせることに積極的であるのだろう。

昨年度、東京外大在日外国人交流ネットワーク～Amigos～の学習支援ボランティアで伺い、ブラジル人児童の学習支援をしていた時も感じたことであるが、この小学校には外国人を差別することなく自然と受け入れる環境があると思う。それは外国人及び外国籍児童に慣れているという理由だけでなく、彼らを受け入れる先生方の態勢がしっかりしていることで、クラスの日本人児童も彼らを受け入れる事が自然と身につけているのではないだろうか。

国際教室担当の鈴木先生は引継ぎを受けず、ご自分で工夫されて外国人児童と向き合ってきたそうである。きっと試行錯誤があり苦勞されたことも多いだろうが、自主的に関連の研修に参加したり、日本語教材研究を行なったりする前向きな姿が非常に逞しいと感じられた。

ただし、このようなインタビューを通して、日本全国に同じような悩みや不安を抱えている先生方がいるだろうということに思い至った。たとえ国際教室の担当になり、様々な貴重な経験を重ねたとしても、教員配置の問題や現場の引継ぎがうまくいかない事が原因で、それが次の担当者に役に立つ知識や経験として継承されないということが生じているようだ。学校現場での各教師の努力ももちろんであるが、外国人児童を受け入れるシステム自体を変えていかなければならないのではないかと思う。(中村)

京町での日本語指導は、文科省のJSLカリキュラムや本なども参考にしつつもまだ確立しておらず、その場その場

で手探りで対応しているように感じた。国際教室の担当である鈴木先生は、ご自分で勉強をされていたり、教材を作ったり、新しいやり方を試してみたりと、とても熱心で素晴らしいと思った。しかし、先生一人に負担がかかりすぎているようにも感じた。将来先生が転任されたり、国際学級がなくなったりする場合でも、先生の経験やノウハウが次に活かされていくように、資料やデータを作成し、蓄積しておくことが必要ではないかと感じた。

今回の訪問で驚いたのは、現在日本語指導を受けている8名の児童とその保護者が、皆日本での定住を望んでいるということである。児童が低学年であったり、片親が日本人の家庭もある、というのも一因だとは思うが、京町小に通う児童やその保護者が、日本語習得に意欲的で、比較的学校行事や学校文化への抵抗も少ないことは、この定住志向と何か関係があるのだろうか。また、そのせいか、児童の保護者も、母語の維持に関してはあまり意識していないように感じた。定住を望んではいいても、今後どうなるかはわからないし、このままだと日本語を解さない外国人保護者と、学校で日本語を学ぶ児童との間でコミュニケーションをとるのが難しくなるのではないかと感じた。

京町小の場合、学校と家庭の連絡が密に、かつとてもスムーズにしていると思う。外国人児童を持つ家庭も学校を信頼し、頼りにもしている様子が話から伝わってきた。さらに、他の日本人児童やその保護者の外国人児童・保護者に対する抵抗感も少なく、すごく理解があるのも素晴らしいと思った。学校側も、鈴木先生を中心に、他の先生も含め学校全体で児童や家庭を暖かく見守り、支援しているという姿勢ができていたと感じた。ただ、学校の外側の様子についてはインタビューではわからなかったため、周辺地域の状況はどうなっているのかが疑問に残った。

全校児童に対して外国人児童の割合がそれほど高いわけではないのにセンター校に選ばれる等、京町小が目されるのは、学校の体制や、家庭とのコミュニケーションがうまくいっているからではないだろうか。京町はすごくいい環境ができていそうなという印象を受けた。(服部)



写真 1:国際教室



写真 2:鈴木先生から独自に採用している教材の説明を受けている

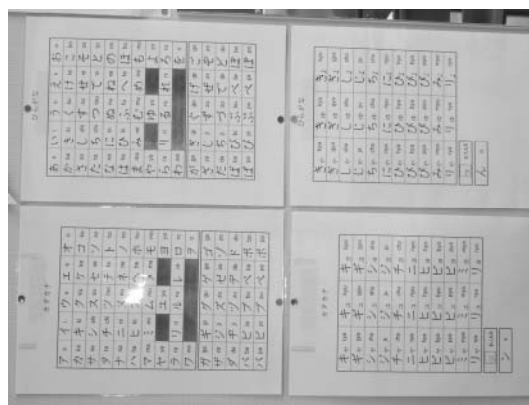


写真 3:ローマ字表記を併用したひらがな・カタカナ暗記表

参考 URL

川崎市多文化共生社会推進指針—共に生きる地域社会をめざして—

<http://www.city.kawasaki.jp/25/25zinken/home/gaikoku/shishin/index.htm>

新宿区立大久保小学校

調査員: 指山 亜希子 (外国語学部スペイン語専攻 3 年)
佐藤 美幸 (外国語学部ロシア語専攻 3 年)
黒野 美香 (外国語学部日本語専攻 4 年)
和田 更沙 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)
谷村 隆昌 (研究生)
丸井 ふみ子 (大学院地域文化研究科博士前期課程国際コミュニケーション専修コース 2 年)

1. 学校概要

大久保小学校は、新宿区歌舞伎町や大久保地区といった繁華街の近くの住宅街にある。全校児童は約 140 名と、小規模な小学校といえる。元来、他の小学校と変わらない普通の公立小学校であったが、今では全児童の約 6 割が外国にルーツをもつ(両親、または両親のどちらかが外国人)、大変国際色豊かな学校となっている。この地域に来る外国人児童の数は、1980 年代後半から増加傾向にあり、ここ 20 年くらいで 3 倍以上に増えている。この増加する外国人児童の中には、日本語がほとんど話せない児童も在籍している。そしてそのような児童が今後いかに日本語に馴染んでいくかが、その後の日本の学校文化への適応にもつながっていくという考えから国際学級が設立された。

2. 国際学級

大久保小学校は、外国にルーツをもつ児童のために、日本語国際学級というクラスを設けている。ここでは、日本語習得補助を通して、その児童が学校生活に馴染めるように様々な指導を行っている。2006 年 7 月 1 日現在、43 名の児童が在籍している。母語別に見ると韓国語 17 名、中国語 9 名、フィリピン語 8 名、英語・スペイン語・ポルトガル語が各 1 名ずつである。他にも、タイ語やマレーシア語、またロシア語やウクライナ語を母語とする児童がいたこともある。児童は一人一人異なる個性や文化背景を持ちながら日本に滞在しているため、日本語国際学級では児童やその保護者の視点に配慮し、個に応じた教育を重視している。例えば、入門・初級・中級の 3 クラスを設けて指導を行っている。週 2～5 時間ほど、取り出し指導(国語の時間

などに該当児童を日本語国際学級に呼び出し、日本語及び算数や理科等の教科学習の個別指導をする)、または入り込み指導(担任の行う通常の授業に日本語国際学級担当教師が付き添い、指導する)といった形で、一人一人の児童の実態に応じて指導方法を決定している。担当教師は 3 名が在籍し、一度の授業で教師 1 人に対し児童 1～5 名のきめ細かな指導がなされている。さらに、日本語の教材開発、指導法の開発、指導法の研究等を通して児童が日本語のハンディを克服するだけでなく、自尊感情を持って国際的感覚を身に付ける教育を推進している。この国際人形成という視点は、言葉の壁の除去と同時に、国際社会へと化した日本の中で児童が安心して学ぶために必要不可欠な要素である。

3. 外国人児童

大久保小学校の立地環境の特色として、保護者の多くは飲食店等のサービス業に従事しているが、近年定住化により多様化している傾向がある。先に述べたように、外国人児童の状況は多種多様であり実に個人差があるといえる。児童の来日経緯についても同様で、保護者の出稼ぎや就労に際し渡日した児童や、在日韓国人として日本に在住している児童など、様々である。また、在籍期間も短期から長期までそれぞれに異なり、外国人児童の転入学は決して少なくない。日本語習得状況は言語の特性上、漢字圏出身の児童の方が比較的習得が、日本語習得・学習到達のレベルに比例して学校へ適応していると考えられる児童も存在する。しかし、実態は児童一人一人で大きく異なる。

また、そんな外国人児童の抱える困難には、個人差はあるが、言語の習得状況などによっては高校進学率が伸びにくくなっている。実際、日本人児童の高校進学率が 97%であるのに対し、ニューカマー(90年の入管法改正に伴い来日した外国人)の子どもの高校進学率には地域差があり、50%を切るところもあると言われている。児童の学習の妨げとなる要因として、次に述べる二点が考えられる。

まず一点目は家庭の安定度や関心度が低いというようなことが挙げられる。これは、日本語を習得した児童と日

本語がうまく話せない保護者との家族間コミュニケーションが不十分な状況や、保護者が仕事に追われ子どもの世話があまりできないといった状況から見て取れる。

二点目は、学習者自身の日本での将来の見通しが立ちづらいという要因である。保護者の短期就労に伴って来日した児童の中には、自分がいつ本国に帰るのか、またそもそも帰ることがあるのかないのかもわからず不安を抱えている児童も少なからずいる。これは、本人の学習に対するやる気、動機の問題にもつながる。自分がどうして日本に来たのか、そしてどうして今日本語を勉強するのか、その理由が不確実なことが児童の日本語習得に影響を及ぼしていると考えられる。

以上のような学習の妨げの要因に加え、生活面での習慣の違いも日本の学校文化への適応を困難にする要因として考えられる。具体的には、日常生活の中でうがい・手洗いをするか否か、体育の時間に指定の体操服を着るか否か、給食か買ってきたものを食べるか、そして学校での様々な集団行動をするか否か、などという学校の持つ文化の差異も見られる。学習面、生活面共に大なり小なり多くの困難が児童にはつきまわっている。

4. 学校側の取り組み

上記のような外国人児童の状況、困難を踏まえて、学校側もあらゆる角度からのサポート体制を取っている。2.で述べた日本語国際学級では、多様な家庭環境の中で生きる児童をできる限り精神面でも支えるという観点から、教室に母国の文化を尊重し、祭りの道具や民族衣装などを設置している。これは、児童のアイデンティティの形成を配慮した結果である。また学内のみならず地域活動に教師が積極的に参加することにより、児童の生活全般に渡る支援を目指している。保護者に対しては、年2回の保護者会、4か国語(英語、韓国語、中国語、タイ語)に翻訳された学級通信、随時行われる家庭訪問を通して、常に密な連絡を取るようになっている。また必要に応じて通訳もつけるという対応もしている。さらに、学校全体で児童をサポートしていくために、教師間コミュニケーションを欠かさず、朝の職員会議にて毎週1度定期的に情報交換を行っている。

こうした形を通して、学校としてできる限り児童に密着し

た指導・支援を行っている。

5. 訪問を終えて

私が大久保小学校を訪問して強く感じたことは、どのような形で学習支援を行うか、いうこと以前に、児童一人ひとりが持っている問題が実に多様で大きい。がために、子どもたちの心にまで影響しているのではないかということだ。つまり、子どもたちのアイデンティティ・クライシスという本質的な問題があるのではないかということである。この原因として、日本語を話す子どもと日本語を話せない親との家族間・親子間コミュニケーションギャップによる場合、ニューカマーの子どもたちに多い、バイカルチュラル(=新しい多文化をそれまで持つ自文化に加え、追加的に双方の文化を持ち合わせた状況)ではなくセミカルチュラルな状況(=新しい他文化を取り入れることにより、それまで持っていた自文化を失ってしまい、文化的に中途半端な状況)による場合がある。これらが子どもたちの人格形成に大きく作用してしまうのだ。大人ならわかりきれることも子どもたちには異国文化に対し「なぜ？」という気持ちが常につきまとう。子どもたちを困らせる要因は学校文化の枠にとどまらないのだ。要因としてあげられる生活習慣に対するとまどい、家庭環境の複雑さ、日本語習得と日本文化への関心等の困難は個人差が大きい。が故に一般化することはできない。しかし、そのような中でも共通項が多い問題として、日本の“感覚”の習得が困難であるということが挙げられる。子ども文化の中だからこそ、“感覚”習得の問題は人間関係や生活に強く影響してしまうのだろう。私たちに必要なことは、「子どもだからすぐ慣れるだろう」と単純視せず、一人ひとりの児童と真剣に向き合うことだ。この訪問を通して、外国人児童の抱える問題の多様性を切に感じた。これらの児童が日本の学校で学んでいるという現状がある以上、目を背けてはならない問題である。(佐藤)

大久保小学校を訪問して、日本の公立小学校の中にこのような学校があることにとっても驚いた。公立小学校ということで、先生方の多くは、日本人の小学生に国語や算数を教えるための勉強を大学でしてきてそのつもりで小学校の先生になったのに、知識も覚悟もない状態で突然 JSL

児童の指導にあたることになるのだと思う。今回伺った「異動希望を出して数年で他の学校に移ってしまう先生もいる」というお話からも、現場の先生方の戸惑いや苦勞が感じ取れた。今のこの状態が一過性のものでなくこれからもずっと続いていくであろうことや、大久保以外でもこのような環境は増えていくと予想できることを考えると、最早「例外」としてその場その場で対応していただくだけではやっつけられないだろう。「日本人の生徒ではないから」と自分達から切り離されたものとして捉えるのではなく、他でもない日本の学校の現場で起きている問題なのだということを忘れず、大きな視点でこのような問題に向き合っていく必要性を感じた。そして、そんな中で私たちのような学習支援ボランティアがかかわっていけば、もっと効果的な支援が行えるのではないかと思う。(黒野)

大久保小学校を訪問したのは、現在公立小学校において、JSL 児童や彼らと接する教員がカリキュラムや文化の違いに関して感じている困難や戸惑いを知るためだった。しかしインタビューで感じたのは、JSL 児童の学習面や学校での適応にとっても大きな影響を与えているのは、はじめに予測していた学習内容の違いや文化の違いというより、むしろ一人一人多様である児童本人やその家庭の状況であるということだった。私は今までの学習支援において、児童がひらがなや漢字が読めて日本語を理解し、他の生徒と同様に算数や国語が理解出来ることを少しでも助けられればと思いながら活動を行ってきた。しかし、いくら学習に集中させようと私が努めても、児童本人の心や家庭に安定がなくては何も変わらない。JSL 児童の抱える問題は学習内容、文化の違いに留まらず多岐にわたり様々であることが分かった。であるから、母国と日本との違いを理解しているだけではまだ十分とは言えないのではないだろうか。問題が学習内容や文化の違いだけでなく児童本人のやる気から親の関心や家庭環境まで広く渡っており、さらに個別に異なっている以上、私に出来ることはなんだろう、言語の知識どのように活かしていけるだろう、と学習支援のあり方について改めて考えさせられた。(和田)

「児童の約 6 割が外国人にルーツを持つ」という状況がどのようなものなのかは、一度の訪問と日本語国際学級担

当教師へのインタビューではとても計り知れない。日本の公立学校として相当特殊な環境であることは当然だが、南米系ニューカマーの集住地域の学校と比べても事情が違ふ。雑多な背景を持つ児童が混在する中で、一人一人の状況を見ながらその子にとっての必要な対応を取ろうと奮闘する教師の姿には、頭の下がる思いであった。学校自体は住宅街の中にあるが、少し歩くと国際色の強い大きな繁華街があり、児童が置かれる環境としても決して恵まれたものではない。親の仕事の関係で夜に一人で置かれる児童も居るといふことで、生活面での心配も尽きないであろう。元々「JSL 児童生徒の学習を困難にする要因」を、カリキュラムの違いを中心に探ろうとして今回訪問したのだが、「勉強以前」の問題が山積みである現実を目の当たりにして、外国人児童が抱える問題の底の深さを感じた。(丸井)

ブラジル人学校

コレジオ・ピタゴラス・ブラジル 太田校

Colégio Pitágoras-Brasil, Unidade de Ota

調査員: 佐藤 美幸 (外国語学部ロシア語専攻 3 年)

中村 未央 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)

服部 聡依 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)

渡邊 桃子 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)

1. 設立の背景

1980 年代後半から、かつてブラジルへと渡った日系移民達が出稼ぎ目的で再び日本を訪れるようになった。当時ブラジルでは経済危機によって日系人も苦しい生活を強いられていたこと、一方で日本では高度経済成長、好景気によって、いわゆる「3K(=きつい・きたない・きけん)」と呼ばれる工場での単純労働者が不足していたことが、日本への出稼ぎ増加の要因となった。そして、それら単純労働者を必要とする工場の多い地域を中心に、ブラジル人が集住するようになった。

当初は単身者や夫婦のみでの来日が多かったが、滞在が長期化するにつれてブラジルからの家族の呼び寄せが増加した。さらに、1990年に「出入国管理及び難民認定

法」が改正され、三世までの日系ブラジル人やその配偶者らに定住資格が認められると、群馬県太田市や隣接する伊勢崎市、大泉町でも在日ブラジル人の数は急増した。それに伴い、学齢期にあたる子どもの数が年々増加し、彼らの保護者からの要望があったことで、1999年にピタゴラス太田校が設立された。翌2000年にはブラジル政府によって認可を受けている。

2.学校概要

コレジオ・ピタゴラス太田校は、ブラジルに517校を有する私立学校法人が1999年に同法人初の日本校として設立した、ブラジル政府の認可校である。日本国内には、現在他に静岡、愛知、栃木、山梨、長野の各県に全6校の姉妹校がある。

学校のある群馬県太田市は北関東工業地帯有数の工業都市である。学校の近辺には自動車や電気機器メーカーの工場が多くあり、ほとんどの児童生徒の親は工場で働いている。全校生徒数はおよそ270人(2006年10月19日現在)で、乳幼児から高校生まで全部で13の学年がある。児童生徒のほとんどが日系ブラジル人で日本国籍のみを持つ日本人はいないが、アンゴラ人2名、ペルー人1名も在籍している。

授業は週5日制、3学期制になっており、1学期は1月～4月(学期始めは1月8日)、2学期は5月～8月、3学期は9月～12月(学期終了は12月22日)となっている。

同校の代表は、現在、コーディネーターのフランシスコ・ペレイラ・フランサ・ネット氏が務めている。(コーディネーターとは、ブラジルの学校特有の役職で、教育に関わる活動のあらゆる面を調整する役目を担う。校長は日本校全6校を代表して一人が務めている。)ピタゴラスで教えている教師は、全員がブラジルの教員免許を持っている。また、日本人教師は公募と試験によって採用されている。

校舎は以前工場として使用されていた平屋の建物を利用している。そのため、生徒数に比べ、ひとつひとつの教室は狭く、図書室やトイレ等の設備も十分とはいえない。入り口に入ってすぐのところは全校生徒共有の広いスペースになっており、10台前後のパソコンやスクリーン等の設備がある。昼食もここにテーブルを並べて食べている。

校庭はないものの、屋根があり壁の代わりにネットで囲んだ、バスケットコート程の大きさの運動スペースがある。乳幼児クラスは隣接する別の建物の中にあり、昼寝ができるスペースや子ども用のトイレ等、環境は日本の幼稚園等とそれほど変わらない。スクールバスがあり、送迎も行っている。

児童生徒は、ブラジルのピタゴラス校で使われているものと同じ制服と体操服を着用する。教科書も同じものを使用している。理科の授業で使う顕微鏡や模型といった教材は日本式の物を使っているが、これらの教材は、ブラジルと取引がある三井物産が社会貢献のひとつとして行っているピタゴラスへの寄付金で購入しているとのことであった。さらに太田校には近隣の人から無償で借りている畑が学校の近くにあり、そこでトマトやレタス、ネギ、ナスといった一般的な野菜の他に、ブラジル特有の野菜も栽培しており、観察や栽培の学習用として使用している。



写真1:ピタゴラスの校舎とスクールバス、運動スペース



写真2:ピタゴラスの制服と体操服

3.授業について

カリキュラムもブラジルのピタゴラス校と同じで、授業はポルトガル語で行われている。1年生から8年生までがブラジルの義務教育期間にあたる。1年生から4年生までは、日本の小学校と同様にクラスの担任教師が複数の教科を教える。体育、日本文化、日本語、英語といった特別科目は専門の教師が担当する。5年生以降は教科担任制となる。教室は学年ごとに割り当てられており、授業ごとに教師が移動する。主な科目は、ポルトガル語、歴史、地理、化学、生物、物理、英語、体育、情報、芸術である。その他に、3歳からは日本語や日本文化の授業が設けられている(詳しい時間割については付録を参照)。日本文化の授業では日本の歴史についても学ぶという。また、外国語科目として同校では英語を学んでいるが、英語の授業は小学1年生から始まる。

ブラジルの学校の多くは、2部制や3部制をとっており、授業は半日のみである。そのため太田校でもカリキュラムにのった授業はお昼までの5コマで、午後は補講や自由学習という形になっている。1コマの時間は45分～50分で、2時間目終了後に15分間の休憩時間がある。教育方針についても日本のように知識を詰め込んで覚えるということよりも、自らの疑問を調べる力や考えを伝える力の育成に重点をおいているとのことであった。

また、進級試験があることもブラジルと日本の学校の相違点としてあげられる。日本の場合、義務教育期間中は、児童生徒は年齢に応じた学年で学び、出席日数等が満たされていれば自動的に進級、卒業が可能となる。しかし、ブラジルでは毎年進級試験があり、出席日数や点数が満たなければ落第となる。

ピタゴラス太田校でも同様に、年齢ではなく、学力に応じた学年で児童生徒が学んでいる。成績評価についても、1学期30点、2学期・3学期各35点の合計100点のうち、60点以上をとらなければ進級できないが、点数が満たない場合には追試等の救済措置も行っている。

4.日本のピタゴラス校独特の特徴

ピタゴラスでは、ブラジルのカリキュラムに則ったブラジル人学校ではあるものの、所在地である日本で生活する生

徒や保護者ならではのニーズに応えた、ブラジルの他の姉妹校とは異なる点も見受けられた。

生徒の親は朝早くから夜遅くまで工場で長時間働く親がほとんどであるため、一日中児童の面倒を見てほしいというニーズが高い。そのため、ピタゴラスでは朝6時45分に開門し、当番の職員が授業前の時間に児童生徒を預かっている。それでも職員が朝学校に到着した時にすでに4、5人は待っているとのことであった。同様に夜も8時まで子どもを預かっている。これらの時間はプランタオン(plantão)と呼ばれている。(付録2. 図1:ピタゴラス太田校の1日のタイムスケジュールを参照)授業前と授業後の時間には、子どもたちは校内で遊んだり、読書をしたりと自由に過ごしている。昼食も、ブラジルと同様に家から持参する子どももいれば、学校から注文したブラジル料理のランチボックスを食べる子どももいる。午前中の休憩時間にもおやつを食べることができるが、これも持参する子どもと、事前に注文し、出されるジュースやクッキー等を食べる子どもがいた。

通学手段は、近所に住む子どもは自転車や徒歩だが、遠方から通学する場合は、電車やバス等の公共交通機関を利用したり、車で通学している。また、学校のスクールバスによる送迎も行っているが、この場合、授業料とは別に送迎費がかかる。送迎は児童生徒の自宅前まで行われる。

毎日午後にはアセレラサオン(aceleração)と呼ばれるクラスが設けられている。これは通常、年度の途中で編入してきた児童生徒がクラスの勉強についていけない場合などに、その遅れを取り戻すために集中的に行われているものである。しかし中には、家族でブラジルに一時帰国するために授業を前倒しし、本来の修了予定よりも早くカリキュラムを終わらせるために行われるケースもある。さらには、単に通う日数を減らすことで、月謝制のブラジル人学校の学費を1、2ヶ月分節約するといった別の機能も果たしている現実があるという。

ピタゴラスへの児童生徒数の変化について詳しい回答はえられなかったが、転出の理由としては、①ブラジルへ帰国、②親の仕事の関係で日本国内の他の地域へ引越し、③親の経済的な理由で学費の安い他のブラジル人学校または日本の公立学校へ転校、の三点があげられた。

現在のところ、ピタゴラスは日本の政府や自治体からの資金面での援助は受けていない。そのため授業料は高く、送迎費、昼食・軽食代、教材費なども合わせると、子ども一人にかかる学費は一ヶ月に数万円かかってしまう。親の収入が減ると高い学費が家計の負担となり、退学せざるを得なくなる児童生徒もいるという。また、転入の理由としては、かつて日本の公立学校へ通っていたものの、馴染めなかったためピタゴラスへ編入したというケースもみられた。



写真 3:スクールバス

5.ピタゴラス太田校で学ぶ子どもたち

ピタゴラスでは、制服は規定されているが、それ以外では日本の学校のような細かい規則はない。かばんや靴も特に指定はない。児童生徒は自由にピアスやアクセサリをつけ、女の子では化粧をしている子も多くみられた。また、幼稚部を除いて全ての教室が一つの建物に入っていることもあり、児童生徒は学年の区別なく仲が良い。児童生徒は友達同士、また教師ともファーストネームで呼び合う。お互いをよく知っており、信頼し合っている様子が伝わってきた。

児童生徒の中には、以前日本の公立学校に通っていた経験をもつ者もあり、中には、日本語能力試験1級や2級を持つほど日本語能力の高い生徒もいた。

ブラジルでは8年間の初等教育が義務教育期間となる。これは日本の小中学校にあたる。その後の3年間の中等教育課程が日本の高校にあたるが、義務教育期間が1年短いため、日本の高校生よりも1年早く卒業することとなる。

今年のピタゴラスの卒業予定者の進路は、50%がブラジルや他の国の大学に進学、残り50%は卒業後も日本にとどまり、親と同じように工場等で働く予定とのことであった。しかし、卒業後すぐに進学せず働く場合でも、数年後に進学するケースもあるという。



写真 4:日本の学校に通った経験を持つ生徒達



写真 5:2006 年度に中等課程を卒業する生徒達

6.訪問を終えて

強く感じたのは、単純だが、先生・生徒皆がとても明るいということ。話し方から態度まで、所謂日本人の性格とは全く違う、国民性の違いをひしひしと感じた。中でも、コーディネーターの先生が教室に行くと、すぐさま子どもたち皆が駆けつけてきた様子は非常に印象に残っている。日本の学校ではまずないだろう。皆が対等に仲の良い雰囲気はとても微笑ましかった。また、1歳くらいの子のお昼寝の時間に、中高生くらいの女の子が寝かせに来ていたことにも驚いた。ピタゴラスのような環境だと、自然に年上の子が下の子の面倒を見るようになるのだろう。全くブラジルに

についての予備知識のない私にとっては、ブラジル人のナシヨナリティーそのものがこのような明るくフレンドリーな雰囲気を生み出すのかなあという印象を持った。全体としても、学校敷地内はプチ・ブラジルという感じがした。日本にありながら、全く自分の文化を保って学校運営をしている。日本で学ぶ外国人児童の中には、性格や心理的要因により、どうしても日本の学校文化に慣れない児童も当然いると思う。そのような児童のためにもピタゴラスのような外国人学校は存在意義を持つのではと感じた。(佐藤)

私たちの調査研究は、日本の公立小学校と外国人学校では「カリキュラム」と「学校文化」が主に異なるという前提に立って進めていたが、ここに来て新たな発見をした。というのも、ここピタゴラス校で、日本の公立小学校に在学していたことのあるブラジル人生徒 4 人にインタビューをしたところ、日本の学校の問題点は「人間関係の冷たさ・関わりの薄さ」であると口々に指摘してくれたからだ。私達日本人が普段は慣れているあまり、違和感を感じないことに対して、外国人児童・生徒にとっては困難な状況に映ったりすることもあるということを認識した。日本の教育のあり方を問う時、このような第三者からの視点が有効なものではないかと思う。

この学校で印象的だったことは、教師と児童・生徒の距離感が非常に近く、フレンドリーであることだ。コーディネーターの先生が教室内に顔を出すと子ども達は慣れ親しんだような声で話し掛けていたり、首に抱きついたりした。先生も、小さな学校ではあるが、生徒の名前と顔を一人一人把握しているらしく、相互の信頼関係が築かれているように思われた。この環境をブラジル人の国民性によるものと流すだけでなく、日本の学校現場にも取り入れられる側面がないかと考えていくべきではないだろうか。(中村)

各々の設備や制度に気付いたことも多くあるが、それよりも児童・生徒同士の距離、教師と児童・生徒の距離がすごく近いという点が日本の学校と大きく異なり、一番強く印象に残った。コーディネーターのフランシスコ先生を見つめるや否や、たくさん子ども達が先生に駆け寄ってきて、話かけたり、挨拶のハグやキスをする。その時の子ども達

の表情が本当に嬉しそうで、強い信頼を持っているのだと感じた。訪問者である私達に対しても、自分から挨拶をしてくれたり笑顔で迎えてくれ、インタビューにも一生懸命答えてくれた。

また、日本の学校について、児童・生徒が肯定的に見ているということは意外だった。日本の学校からブラジル人学校へ転校した児童・生徒達は、言葉や習慣の違いに抵抗を感じて転校したのだと訪問前は思い込んでいた。しかし実際の声を聞くと、そうではなく、彼らが抵抗を感じていたのは、むしろ人と人との関わり方という面なのだと気づかされた。

結局、彼らと私たち日本人との間に一番必要なのは心の交流なのではないかと思った。「あなたのこと知りたいんだよ、仲良くなりたんだよ」という気持ちをお互い持って接すれば、その気持ちが相手に伝われば、日本人とブラジル人両者の距離はぐんと縮まるのではないかと思った。(服部)

今回が二回目の訪問となったが、ただの見学に終わった前回よりも、直接コーディネーターであるフランシスコ先生を始めとする関係者や児童・生徒たちと話す機会が得られた。今回の訪問の目的は、ブラジル人学校と日本の小学校のどこが違うのか、ブラジルの子どもたちが何に一番カルチャーショックを受けるのかを調べるためであった。質問は教科カリキュラムや学校文化のことを中心に具体的なものだったが、実際に帰ってきた答えは、勉強面や言葉の面よりも児童・生徒同士の人としての関係、教師と児童・生徒の、その関係を越えた人間としての関係についてのものが多かった。日本の学校、ブラジル人学校には両方の良さがある。勉強の進度の違いなどは言葉がわからなければ問題として現れてくることもなく、文化の違いは子どもにとってはすぐ柔軟に対応できるものではないか。進度の違いよりも、質問をできるような環境など「ブラジル人」の子どもたちだけではなく、すべての子どもたちに通じる課題があると感じた。何よりも大事なことは人としての温かさなのだ、再認識させられた。(渡邊)

設備について(4人の意見から)

やはり、学校としての設備は日本のものに比べると十分な点が多かった。(図書室の小ささと本の少なさ、グラウンドが狭い、体育館がない、生徒数に対し教室が小さい、音楽室や家庭科室等特別教室がない等。)

幼稚園の方は日本の幼稚園と差がそれほどないと思う。(お昼寝スペース、幼児用トイレ・お風呂等。)

7.参考資料

国際カリキュラム研究会編『外国人労働者の子女の教育に関する調査研究—ブラジル人学校の事例—』国際カリキュラム研究会 平成16年度文部科学省「外国人教育に関する調査研究」委託研究報告書、2005年

二宮皓『世界の学校—教育制度から日常の学校風景まで—』学事出版、2006年

ヤナギダ・ナカガワ・キョウコ「ブラジルに帰った子ども達のその後」『学生多文化フォーラム プレ講演』2006年12月1日 東京外国語大学本部管理棟中会議室 講演中発言
コレジオ・ピタゴラス HP:<http://www.pitagoras.com.br/>

付録

1.ピタゴラス校の生徒へのインタビュー

日本の学校に通ったことのある生徒を校長先生が紹介していただき、校長室にてインタビューを行った。

(2006年10月19日)

インタビュー回答者:

生徒 A 女 16歳(滞日年数:7年)

生徒 B 男 18歳(滞日年数:6年)

生徒 C 女 15歳(滞日年数:6年)

生徒 D 男 19歳(滞日年数:4年)

*滞日年数については今回の滞在のみの年数。中には複数回来日、滞在している生徒もあり、通算滞日年数はこれ以上の場合もある。

以下インタビュー内容を記載する。なお、生徒 A と D はポルトガル語、生徒 B と C は日本語での回答であった。

Q. 来日時の状況、日本の学校の何に一番驚いたか。

生徒 A:

来日時、日本語は全くわからない状況であった。何が違うかといわれても自分にとってはすべて違った。常に、「お願いします」という日本に違和感を覚えたが、日本に慣れた今となっては、それが日本のいい面であるとも思う。藪塚という地域の学校に入ったがそこは、ブラジル人が全くいなかった。日本語学級に入り、週に何回かポルトガル語を話す先生に日本語を習った。しかし、日本語は日本人の中で生活していく過程で話せるようになったと思う。日本の学校のいい面、体育の授業や課外活動が充実している点であると思う。ブラジルとの一番の違いは人間関係であると思う。ブラジル人学校では先生とも気軽に話せるが、日本の学校ではそうはいかない。日本の友人関係はブラジルに比べると冷たい印象がある。

生徒 B:

小学校3年生の時に来日。日本語は全くわからなかった。時間はかかったが、慣れれば日本はいいところだと思う。ブラジル人学校には日本の学校にはない良さがあると思うし、その逆もある。例えば、ブラジル人学校のいいところは先生たちを含めて皆とフレンドリーに付き合える。日本の学校は修学旅行があったりとか、学校に行けば一日中勉強に集中できる場所だと思う。小学校の間は3年間毎日、1時間ないしは2時間日本語学級に通った。中学に入って日本語の指導はもういらぬという判断をされたのでなくなった。今は伊勢崎市から太田の学校まで車で通学している。

生徒 C:

小さいころから日本とブラジルを行ったり来たりしている。小学校に入る前から日本にいたので、言葉の面で慣れるのに苦労したということはない。ただ学校にブラジル人は一人だけだったので周りから「新しい子」という風に見られていたと思う。小学校1年生のときにブラジルに帰国したあと、また来日。そのときは日本の小学校で2年生から3年生まで過ごした。その後小学校4年生のときにピタゴラス学校へ転入。そのあと、またブラジルへ帰り、今また日本

に住んでいる。日本にはもう慣れてはいるけれど、小学校のときの先生が印象に残っている。いつも近寄りたがたい雰囲気、質問とかが出来ない先生だった。

日本の学校は運動会とかたくさん行事があって楽しいし、きちんと勉強しているという意識があった。でも、ブラジル人学校は日本の学校と違って付き合いが家族みたい。先生とも友達とも。日本の学校で友達というと、3 人くらいの仲の良い子がいて、あとは普通の知り合い程度だけど、ここでは皆と同じくらいに仲が良い。

日本とブラジルを行ったり来たりしていて、昔はさびしいなどは思ったけど今はメールもあるし、電話もあるし大丈夫。小さいときは「母が帰るのだからしょうがない」と思っていた。勉強の進行状況が違って困るということはほとんどなかったけど、日本の学校ではわからないところがあっても質問できない雰囲気があって、くやしい思いもした。

生徒 D:

家族と一緒にすでに日本にいた祖父を頼って来日した。入学した学校には自分と一緒に来日した従兄弟の二人だけしかブラジル人はいなかったが、週に 2 回はブラジルに在住経験のある日本語指導の先生が来てくれた。その先生の名前もまだ覚えている。当時、日本語は全くわからなかったし、話せることといえば基本的な挨拶程度だった。日本の学校の先生たちは皆自分たちのことを心配しすぎるくらいしてくれたと思う。ブラジル人がいない学校だったから、日本語のいい勉強になった。

日本人はブラジルと比べると、友達関係というのが違うと感じる。どこまでが本音でどこからが建前なのかが難しいと思う。自分は家族の中に日本とブラジルが混在している環境に育った。ブラジルに戻ってからも、日本に住んでいたことのある友達と日本語で話すこともあったし、祖母が日本から電話をしてきたときには日本語で話していた。だから、日本語の問題はない。日本に戻ってからはブラジルの学校に 4 年間しか通っていなかったためにブラジルの学校へ通った年数が足りなくなりました。だからピタゴラスに転入した。日本の良いところ、悪いところは学校だけには限らない。日本社会全体に通じることだと思う。閉鎖的とか冷たいという所は、ここピタゴラスにはない。人とのコンタクトを持つこと、人とよく話すということが違うと思う。自分

はこの学校にいるとすごく安心感を覚える。日本人と仲良くなるにはお互いをしっかりと知ることは大事だと思う。

Q. 卒業後の進路について

生徒 A:

今のところ、ブラジルに帰る予定はない。だから専門学校に進学して、なにかしらの技術を身に着きたい。日本語についてもその能力を証明するものが必要なかとも思う。

生徒 B:

日本で暮らすブラジル人の子どもに日本語を教えたい。そのために勉強を続けたい。

生徒 C:

ブラジルの大学へ進学したい。

生徒 D:

日本で暮らした経験をなんらかの形でブラジルに持って帰りたい。この経験は紙では証明できないものがあると思う。ブラジルで大学へ進学して、通訳など日本語を生かす仕事につきたいと思っている。

インタビューを終えてから、生徒 A が話したいことがあると言って以下のことを話してくれた。

生徒 A:

ひとつ言っておきたいのは、日本の学校の「いじめ」について。今も日本でいじめによる自殺があるけれど、その原因はいじめられたからだけではないと思う。日本の学校はいじめの事実を認めようとしないところがある。先生たちは「存在しない」というように扱う。日本の学校からここに移ってきた理由のひとつだ。ここ、ピタゴラス学校は先生や他の生徒との関係が本当に温かい。家のように思っている。先生たちは生徒一人一人を注意深く見ていてくれる。元気のない子がいれば、「どうしたの?」と親身になって相談にのってくれる。学校は勉強だけじゃなく内面の成長も大事だということを実感している。

2.ピタゴラス太田校の1日のタイムスケジュール

6:45	開門	通常時間	一日時間
	PLANTÃO(室内)		
8:15	①授業		
9:05	②授業		
9:50	休憩		
10:05	③授業		
10:50	④授業		
11:40	⑤授業		
12:30	昼食		
13:15	1 授業		
14:00	2 授業		
14:45	3 授業		
15:30	PLANTÃO(室内&屋外)		
20:00	閉門		

ピタゴラス太田校の時間割とインタビューを基に調査員が作成

南米系外国人学校

ムンド・デ・アレグリア

(Mundo de Alegria)

調査員: 指山 亜希子(外国語学部スペイン語専攻 3年)

黒野 美香(外国語学部日本語専攻 4年)

和田 更沙(外国語学部ポルトガル語専 4年)



写真 1:ムンド・デ・アレグリア校舎

1.設立の背景

ムンド・デ・アレグリアは、2003年に静岡県浜松市に設立された学校である。所在地である浜松市には、およそ29,000人の外国人が暮らしており、中でもペルー人・ブラジル人は、浜松市に暮らす外国人の全人口のうち約7割を占めている。そのような南米系外国人の子女を受け入れているのがこのムンド・デ・アレグリアである。

ムンド・デ・アレグリアの設立までの経緯について、校長の松本先生から詳しくお話を聞くことができた。以下に伺ったお話を引用する。

松本さんは1991年から大手日本企業で通訳兼採用担当をしていた。当時のバブル期の日本では労働力が不足していた。その確保のため日系三世まで合法的に労働ビザを与えるようになったところ、これが当時インフレや職不足に苦しんでいた中南米の経済事情とマッチし、日本への外国人の出稼ぎが増加した。初めは出稼ぎに来た外国人本人達も長く日本に暮らすことになるとは考えておらず、2~3年の出稼ぎのつもりで日本に来ていた。子ども連れに禁止であった。しかしお金を貯めて母国へ帰っても、新たな仕事が見つからなかったり生活基盤がなかったりして

生活ができなくなるという事態が起こり始め、次第に日本に定着する人が増えた。彼らはアパートを借り、家族を呼び寄せるようになった。家族が来日すると、母国へ帰る理由はますますなくなった。

その頃の松本さんは企業で働くペルー人のために通訳のボランティアをすることもあり、ペルー人の子どもの家庭教師をしたり幼稚園入園手続きを手伝ったりすることがあったのだが、その中で「本当にこれで大丈夫なのだろうか？」と感じたのだと言う。日本人でさえ、幼稚園や小学校の複雑なシステムを理解し、連絡や参加をしていくのは難しいからである。

2002年、在日ペルー大使館は町田市と浜松市で教育フォーラムを行った。日本からの帰国子女の子どもがペルーの学校システムについていけず、留年する子どもが大量発生していることを受け、親を教育する必要があると考えられたからである。この教育フォーラムに松本さんも参加し、「教育の現場は非常に広い」と感じて浜松の人に声をかけた結果、たくさんの親が集まった。そこでは、浜松に暮らす多くのペルー人の親から「母語で学べる学校が欲しい。今の日本には2つの選択肢しかない。日本語を学んで日本の公立学校に入れるか、またはペルーに返すか。しかし、後者のように日本とペルーで離れていると、親子関係は希薄になり、ひどい場合子どもは親に捨てられた、自分達は親子ではないとまで感じてしまう。また前者の場合は、普段親は仕事をしているので母語をきちんと教えられず、子どもは日本語を覚えていくが、これにより子どもと親同士で言葉が通じなくなる。」という話を聞いた。

本来はお互いがぶつかり合うはずの小学生・中学生時代にぶつかりあえず、親子の断絶が起こっていた。それだけでなく、「変な言葉話すからお母さんは学校に来ないで」と言う子どももあり、彼らは自分のアイデンティティさえ壊していると感じた。また、子ども達がセミリングルの状態に陥っており、基本の考えを母語でしてアウトプットを2言語ですることができないため、工場労働者しかできなくなってしまうという問題もあった。それに対して、日本にいながら母語で教育を受けられる学校が必要だと考えられ、このムンド・デ・アレグリアは作られた。

2.学校概要

この学校は2005年に静岡県から学校法人として認可を受けた。日本で認可を受けている外国人学校はそれほど多くなく、中でも南米系外国人学校が認可を受けたのは初めてのことである。しかし、認可を受けて助成金を受けられるようになったとはいえ、財政面では厳しいのが実状だという。そのため現在は、古い机を譲り受けるなどして学校を運営しているのだそうだ。多くの外国人児童が通い続けられるような低い授業料で安定した学校運営をすることは非常に難しく、そのことが現在の大きな課題の一つだと校長先生はおっしゃっていた。



写真 2:譲り受けた机

2006年現在、ムンド・デ・アレグリアでは、ペルー人児童とブラジル人児童合わせて計113名が学んでいる。その内訳は、園児が16名、小学生が48名、中学生が15名、高校生が34名である。彼らを教えているのは、5名の常勤の教師と、5名のボランティアである。校長は日本人、教頭はペルーで教師をしていたペルー人であることに代表されるように、日本人教師と外国人教師が協力し合って学校を運営していた。

この学校は、もともとはスペイン語で教育を行える学校を目指して設立されたため、当初はボリビア・アルゼンチン・ペルー人子女だけが通っていた。しかし、浜松には大変多くのブラジル人が暮らしているため、彼らのニーズに応じて2005年からはブラジル人の子女の受け入れもするようになった。そのため、現在はブラジル人児童のためのクラスとペルー人児童のためのクラスがある。ブラジル人とペルー人の児童の人数差はあまりないようだった。

3.授業・学校生活

ムンド・デ・アレグリアには他の多くの外国人学校とは異なる特徴がある。外国人学校の多くは、母国に帰ることが前提とされているため、母国のカリキュラムに沿って授業が行われ、母国の学校に対応できる力を養成することを目指している。しかし、実際に浜松で暮らす外国人の実情を考えると、彼らの多くは日本に定住しており、おそらく永住することになる。ムンド・デ・アレグリアでは、このように母国へ帰らず日本で暮らすケースが増加していることに目を向け、日本で生活する力をつけ、日本で進学することも意識した教育が行われている。

母国と日本の両方を視野に入れた姿勢は、実際の授業にも反映されている。午前中は、母国政府の認定を受けたカリキュラムにのっとり母語で授業が行われていた。その際は何学年かが一緒に学んでおり、見学させていただいた小学校低学年の授業では、ある学年の生徒に何かを教えている間は、別の学年の生徒には課題を解かせる、という方法で、3 学年が一緒に学んでいた。午後は、日本で暮らしていくことを考え、日本語の授業が行われていた。また、小学校1年生では、最近から試験的に日本で教えられている算数と生活科の内容も扱われていて、日本語「を」学ぶだけでなく日本語「で」学ぶ機会も提供されていた。



写真 3:授業の様子

また、「給食係」「掃除係」のような係で仕事を分担したり制服を着たりと、日本と同じような学校文化も見られた。

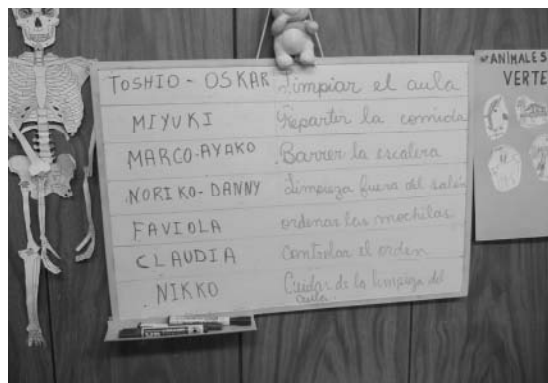


写真 4:係の表



写真 5:制服・体操服

4.先生のお話

校長の松本先生だけでなく、教頭のペドロ先生からもムンド・デ・アレグリアについてお話を伺うことができた。以下にその内容を引用する。

昨年 2005 年度、日本語能力検定試験 2 級に 2 人の生徒が合格した。2 人とも 1 級取得を目指している。1 級を持っていると、大学入試の際に課される日本語の試験が免除されるのである。うち一人は、日本語、スペイン語、ポルトガル語、英語での 4 ヶ国語の通訳を目指して勉強している。

あなた達調査員、つまり日本の大学生が彼らのためにできること、大学生によるボランティアには非常に興味を持っている。外国人生徒は日本に留まることを考えている。彼らの両親は日本で働いているのみならず、家を持って、永住権を持っている者までいる。日本の大学は彼らの子ども、つまり外国人児童にどのように学問の機会を与えているのか？定住外国人にとって日本の大学に入ることは非常に

難しい。日本の大学はこのような学生の熱い想いを買って門戸を開くべきである。入学さえできれば結果は本人次第である。彼らが勉強した結果よい成績を収めることができたら、彼らを入学させた価値があったと言えるし、もしも留年および落第してしまったとしてもそれは仕方のないことである。まずは機会を与えることが大切である。

日本の大学で勉強したスペイン語やポルトガル語および社会学等を、是非社会で外国人のためにも使って欲しい。それに受けた外国人もまた日本の大学および母国の大学で学んだことを日本の社会に還元していく。それがグローバル化である。

工場で働いているペルーから来た人の中には、現地の高等教育を受けて日本に来たのに仕方なくその仕事についている人もいる。彼らは日本語を勉強しても彼らの能力に見合う仕事につけず、本国に帰らざるを得なくなることもある。しかし本国よりもずっと進んだ社会である日本で一度生活してしまうと、本国での元の生活に復帰することは難しい。日本であっても能力に比例して、あるべきところでその力を発揮してほしい。

子どもは日本語を覚えるのが早いので、テレビや友達からすぐに日本語を覚える。しかし彼らの両親は日本語を知らない。またいじめにおびえることもある。お金が稼げても両親から子どもに気持ちが伝わらなくなってしまう。しかしペルー人にも日本の社会が好きな人もいます。

教頭先生は日系二世である。しかし戦争によって日本語を勉強することができなかった。両親は商売のために日本語を使っていた。両親はペルーでなくなった。先週学校で沖縄に行った。そこではペドロ先生のご両親の通われた小学校を訪問し、先生の従兄弟とその孫に会うことができた。先祖のお墓にも行った。将来ここで学んだ子にも「お父さんはここで、ムンド・デ・アレグリアで勉強して大学に行ったのだよ」と言ってもらいたい。新しい時代のヒーローになってほしい。

5.訪問を終えて

ムンド・デ・アレグリア校を訪問して、外国籍の児童の直面している問題の重さをはじめて理解したように感じた。英語圏からの帰国子女である日本人の友人が話す英語に

魅了されながら初めての外国語を勉強した私は、一見「母語であるスペイン語も使え、なおかつ日本語を学びながら日本の生活も知ることができてうらやましい」とまで感じてしまったが、彼らがバイリンガルではなくセミリンガルにすらなりかねない可能性を抱えているということ、そして彼らが今後日本社会で生きていくうえで直面するだろう問題までは考えたことが無かったからだ。この学校に訪問する1年前に、小学生のときに中国から帰化し苦労したという友人の話聞いていたが、そのときに彼が語っていた「僕は基礎の勉強(つまり義務教育で行われる国語や数学、社会科等)ができないから就職活動の筆記試験でも苦労するのだよ」という言葉がはじめて理解できた。現在は国立大学の学生であり、物流会社に内定が決まり卒業を控えているが、そんな優秀な彼も中学時代は勉強がわからなくて登校拒否になったことがあり、公立の高校ではとても受け入れてもらえないぎりぎりの成績で私立の高校に進学し、さまざまな活動に関わったことが買われて推薦入試で国立大学に合格することができたそうだ。彼がどのような日本語指導を受けたのか、そのように這い上がった理由は何であったのかはこれから聞く予定であるが、ムンド・デ・アレグリア校の教頭先生がおっしゃっていたように、自分が勉強しているスペイン語を生かして、私自身も苦労している外国人労働者の方のために小さな努力をして、彼らと同じように日本で起こっているグローバル化の中で社会に還元していけるようにこれからも精進していきたいと思う。(指山)

私はムンド・デ・アレグリアのある浜松市で生まれ育ったため、ある日突然全く日本語が分からない状態の外国人児童が学校にやってくるという出来事を何度か経験した。彼らを見てきて、日本に来たために普通の小学生・中学生が普通に送るような学校生活が享受できなくなり、そのせいで将来の選択肢が狭められてしまっている現実を知り、このような問題に向き合う必要性を感じていた。今回の調査結果やそこで学んだことがはじめての一步となり、このような問題に対する新たなアクションが起こればと願っており、また自分自身でも起こしていければと思う。

外国人学校と言うと、帰国が前提の外国人児童生徒が

通う学校というイメージがあるが、今回ムンド・デ・アレグリアに訪問し、日本で一緒に暮らすことを視野に入れて教育が行われている学校があることを知り、とても頼もしく思った。また、外国人児童の問題は、外国人だけの問題ではなく、一緒に暮らしていく私達日本人もこの問題に向き合っていく必要を感じた。これからますます日本で暮らす外国人は増えていくのだと考えられるが、そんな中でムンド・デ・アレグリアがモデルケースとなり、このような日本人・外国人の両方の視点を取り入れ共存を考える外国人学校が増えていくことが大切だと思う。(黒野)

ムンド・デ・アレグリアの訪問で感じたのは、外国人学校と言ってもその背景は様々だということである。外国人学校と言うと、帰国時のため母国語を忘れないよう外国人児童生徒が通う学校、もしくは日本の学校に適応しきれなかった外国人児童が通う学校、というイメージを持っていた。しかし校長先生の言葉を聞くうち、この学校は私の抱いていたイメージと異なっていることが分かった。

この学校は、母国へ帰国する外国人児童生徒は実際にはごく少なく、彼らの大半は日本に残る、という現実を目を向けていた。彼らが日本に住み続ける場合、彼らと共に生活していくのは私たち日本人である。そのため私たちは彼らをきちんと教育する必要があり、この学校はその役割を担っている。つまり、ムンド・デ・アレグリアでも他の外国人学校と同様、母国に帰った場合を考え、母国語や母国のカリキュラムに沿った内容を学んでいる。しかしそれに加え、彼らの日本定住も視野に入れ、日本語の授業や日本のカリキュラムにそった内容も積極的に取り入れられている。彼らが大学進学を望んだ時にその門戸が閉ざされないように、とペルー人の教頭先生もとても熱心に授業を行っていた。校舎は手狭で校庭はなく、机も古いものだったが、生徒は元気いっぱいで見知らぬ私たちを迎えてくれた。また、日本語で意思疎通が図れる生徒も多く、教室には生徒の日本語能力検定試験合格を祝う幕がかけられていた。彼らの教育や適応の問題は、外国人の教育だから外国人学校に任せておけばいいというわけではなく、日本でこれから共に生活していく以上、日本人と外国人とが共に力を入れなければならない問題なのだとも再認識した。(和田)

インド人学校

インディア・インターナショナルスクール・イン・ジャパン

India International School in Japan

調査員: 小島 和美 (外国語学部ヒンディー語専攻 3年)

山田 寛子 (外国語学部フランス語専攻 4年)

谷村 隆昌 (研究生)

丸井 ふみ子 (大学院地域文化研究科博士前期課程国際コミュニケーション専修コース 2年)

高野 邦夫 (本学フィリピン語非常勤講師)



写真 1: ビルの横に付けられた小さな看板



写真 2: 左側に見えるのはスクールバス

1. 設立の背景

90年代半ばからIT革命の進展によってシステムエンジニアなどのコンピュータ関連技術者の需要が増加し、インド人情報技術者が多く来日するようになった。従来、在日インド人の多くは神戸市に集中して暮らしていたが、これらニューカマーは東京周辺に在住している。そのほとんどは

男子単身で短期間の滞在だが、なかには家族をともなって来日する者もいる。従来は英語で教育を行う欧米系インターナショナルスクールに子弟を通わせることが多かったが、算数・数学のレベルなど教育の質に満足できなかったことから、本国インドと同じカリキュラムで教育を行う機関が強く求められるようになった。その結果インド人学校が設立されるに至り、2006年現在東京都に2校ある。

そのうち最初に開校したのが東京都江東区森下にあるインディア・インターナショナルスクール・イン・ジャパン (India International School in Japan) である。インド国内と同じ教育を提供できる学校を日本に作りたいという日本在住のインド人たちの願いの下、日本人も含む創設メンバーたちが資金を出し合って2004年8月に設立され、現在はNPO法人として活動している。

2. 学校概要

2006年10月現在、児童・生徒の数はおよそ120名で、幼稚園年少クラスから9年生までのクラスがあり、モンテソーリ式の幼稚園、小学校、中学・高校の3つに分かれている。やはり彼らの父親の多くは東京でIT関係の仕事をしており、また出身地も様々である。児童・生徒や教師・スタッフのほとんどはインド国籍だが、その他にもパキスタンやバングラディッシュ、フィリピン、シンガポール、日本など、多岐にわたっている。

児童・生徒の多くは東大島など近隣地区から来るが、品川や川崎など、かなり遠くから来ている者もいる。通学手段について、中学生等は一般の交通機関を利用するが、園児や児童はスクールバスが安全で楽なため、バス通学をしている。彼らの親は、東京にあるインド企業にいる例もあるが、多くはソフトウェア関連など日本企業に勤めている。

校長は日本に30年以上住み、東京のインターナショナルスクールで長年教鞭を取っていたインド人女性、ニルマン・ジェイン氏である。教師の多くは夫の仕事の都合で来日した妻たちで、インドの教師免許を持っている。

年間授業料は60万円、これに教科書代1万円、バスによる送迎を利用するとさらに年間で15万円から20万円かかる。兄弟で通う場合には授業料とバスの送迎代に対し、

20%の割引が効く。

施設は5階建てのビル、その隣のビルの2部屋と一階にあるガレージを使用している。校庭がないため、体育の授業は近所の公園や学校から少し離れた公園のグラウンドを使用している。

3. 授業について

授業は6月から始まり、夏休みと冬休みを挟んで4月まで続き、日本と同じく3学期制を採っている。

授業はすべて英語で行われ、インドの公用語の一つであるヒンディー語は一教科として教えられている。日本語の授業もあり、以前は日本人教師が教えていたが、現在は日本語のできるインド人教師が教えている。他の科目は、数学、社会、英語、科学、読書、美術、音楽、体育、演劇、コンピュータなどで、各授業時間は40分である。インドの教育機関であるCBSE (Central Board of Secondary Education) のカリキュラムに沿って授業は行われるため、児童が帰国しても、本国で同じ学年に転入できるようになっている。

授業時間は幼稚園が午前9時から午後2時までである。小学校と中学・高校が午前9時10分から午後3時10分までだが、その後アート、楽器演奏、インド古典舞踊、サッカーなどの課外授業が1時間行われている。

インドの数学は、2桁の数まで九九を覚え、暗算をすることに大きな特長がある。学校では計算機は使わず、低学年1〜3年から継続してしっかり学習させる。理科では、飼育や栽培を実際には行わないが、校外へ観察に行くことはあり、四季の動植物の様子を学ぶ。社会では、主にインドの地理や歴史を学ぶが、世界についての章もある。インドは国土が広く、国内でも地域によって気候・自然・食物・宗教など条件が大きく異なるので、各州の違いについて学ぶ。日本については、世界について学ぶ際に触れる程度である。日本に滞在しながらインドについて学ぶことは、特に困難ではない。理科や社会など他教科を学ぶ際に、インターネットで調べる等コンピュータを利用することがある。体育の授業は、バスで移動して近くの公園で行う。音楽は、インド音楽と西洋音楽の時間があり、インド音楽では主にハルモニウム(オルガン)やタブラ(ドラム)を使い、

西洋音楽ではピアノや木琴を使う。またインドの本を揃えた図書室があり、カリキュラムに読書の時間もある。インドには宗教が多いため特定の宗教教育は(インド本国でも)行っていないが、善悪の価値観等を教える道徳のような授業はある。生徒が好きな教科は、算数、理科などのようだ。また行事について、日本の行事を多く取り入れているわけではないが、秋には近くの公園の広場を借りて運動会を行っており、チームに分かれてボールを使った競技やゲームなどを行っている。バスケットボール、ネットボール、ホッケー、卓球、バドミントン、ドッジボール、ココ(インドのゲーム)などがある。またプラネタリウムや博物館を訪れたり、バスで全校遠足を実施したりしている。インドの文化の維持のためにインドの行事を行ったり、授業の中でインドの事柄をテーマに絵や詩のコンテストをしたり、インド音楽を学んだりもしている。学校として地域との交流をはかる機会は多くないが、江東区の祭りに参加して踊りや歌を披露したり、区の小学校を訪問したこともある。

時間割	2 nd	8 th
9:10 ~	Math	English
9:50 ~	Science	Math
10:30 ~	Snack	Snack
10:40 ~	English	Science
11:20 ~	Hindi	Science
12:00 ~	Science	Computer
12:30 ~	Lunch	Lunch
1:10 ~	Hindi	Library
1:50 ~	Library	Hindi
2:30 ~	English	Computer

表 1:金曜日の2年生と8年生の時間割

4.見学した幼稚園の授業と運動会の予行練習



写真 3:幼稚園の授業風景

幼稚園の授業を見学して、私たち調査班メンバーが口をそろえて言っていたことは、幼稚園の子どもたちの高度な英語力への驚きだった。私たちが訪問した日の翌日が運動会ということで、その日の授業のほとんどが運動会の練習に当てられており、教室での授業は一部しか見ることができなかった。しかしその一部の授業の中で先生と子どもの会話を聞いて、私たちは子どもたちの英語力の高さを知ることとなる。先生が今日の天気について子どもたちに英語でいろいろ質問すると、子どもたちは何の抵抗もなく返事を英語で次々と口にしていた。単語レベルでしか話せないのかと思いきや、子どもたちは文レベルでも英語で話していた。先生と英語でコミュニケーションをとる子どもたちの姿に私たちはただただ驚くばかりであった。

しかしながら、両親の出身地の言語が違う場合などを除いて、児童は家庭では英語をほとんど使わず、ヒンディー語やその他の母語である現地語で話しているという。児童は幼稚園に入る前は一切英語を使っておらず、幼稚園に入ってから英語を学ぶ。英語を流暢に使いこなせるようになるには時間がかかるが、教師とのコミュニケーションは1年もあれば取れるようになる。インド本国にはヒンディー語やその他の現地語で教える学校もあり、その場合には英語の習得は困難だが、英語のみで教える学校では、学校生活全般を通して生徒は英語を身につけていくという実情がある。

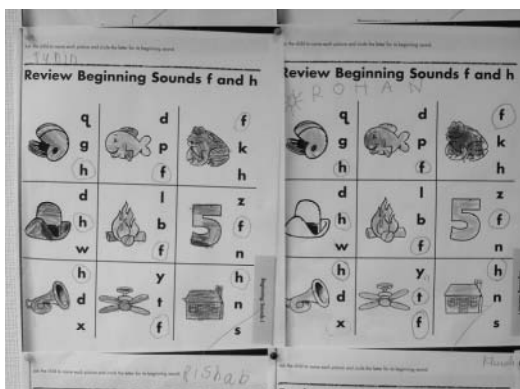


写真 4:アルファベットの練習問題



写真 5:ハロウィーンの飾りつけ

写真 4 は教室の壁に貼ってあったアルファベットの練習問題である。各絵の単語の頭文字を選んで丸をつけるという問題だ。頭文字を選ぶということは、絵の単語を理解できているということになる。各園児は絵を自分の好きな色で自由に塗っていて、彼らの個性の豊かさを感じる。

写真 5 は教室後方にあったハロウィーンの飾りつけである。特定の宗教にこだわらず、様々な行事を祝うことにしているという学校の指針が表れている。しかし教室の中にはヒンディー語で書かれた掲示物があり、教師の中にもサリーを着ている人がいたり、園児たちに母国インドを感じさせるものが見られた。



写真 6:ガレージで運動会の練習①

写真 6 はガレージを改装したスペースで、ローリング・ボールという競技の練習をしている様子である。いくつかのグループを作り、最初の人ボールを向こうの線まで転がし、線まで着いたらボールを手で抱えて戻り、次の人にボールを渡すという競技である。次の人も同じようにボールを転がし、全員が早く終了したチームの勝ちになる。

写真 7、写真 8 はループを使った椅子とりゲームである。人数より少ないループで円を作り、音楽が流れている間その円に沿って移動する。音楽が止まると一斉にみんなループの中に入るが、一つのループには一人しか入れず、入れなかった園児はアウトとなる。アウトになった園児を除き、ループの数をさらに減らして再びゲームスタート。最後に残った園児の勝利となる。先生方も一緒にループに沿って回りながら園児らの列を整え、彼らの動きを促していた。英語の理解が不十分な日本人の園児も積極的に参加し、皆ループの中に無事に入ることができると喜んでいった。写真 7 の洋装の教師と写真 8 のサリー姿の教師が、2人で 1 クラスを担当していた。



写真 7:運動会の練習②



写真 8:運動会の練習③

5. 訪問を終えて

私は今まで旅行や児童施設でのNGOインターンを通してインドに行ったことがあり、現地のインド人と交流する機会が多々あった。またヒンディー語を勉強していることやインドに関わる学生団体に所属していることから、日本国内でもインド人の留学生や仕事の都合で日本に滞在しているインド人と会う機会がある。インドで会ったインド人と日本で会ったインド人、両者の特徴を端的に表すと「庶民」と「エリート」になるだろう。私のインド旅行は大きなリュックを背負ってバスや列車を利用して移動し、安宿に泊まるという貧乏旅行だったせいか、出会うインド人はたいていエリートとは呼び難い人々だった。しかしその旅行のおかげで私は日本では会うことのできない現地のインド人と交流することができた。一方、日本で出会ったインド人は皆エリートだった。日本に来るからにはある程度のお金も必要なので、日本で働く人というのは自動的にエリートになってしまうのだと思うが、両者の差は本当に激しい。

私は今回のインド人学校訪問でここに通う児童の学習能力の高さに驚くと同時に、インド現地で自分が接してきた人々との差を感じずにはいられなかった。インドで教育を受けていない人に会うこともあったので、あの幼さで流暢に英語を話す姿はまぶしいくらいだった。高度な教育を受けられる人もいれば、そうでない人もいる。教育が幸せに結びつくとは限らない。しかし教育の有無によって職業が左右され、子孫が教育を受けられるか否かが決まり、親から子への循環が繰り返される。英語を話す児童たちの姿を見ながら、そんなことを考えていた。(小島)

家庭での言語がヒンディー語であるにもかかわらず、授業が全て英語で行われることに驚いた。帰国を前提にしての教育であるということが、コンピュータや英語での授業などによくあらわれていると感じた。建物の大きさ、体育の環境など、全ての学校環境が整っているわけではないものの、かなり遠くからも通ってくる生徒がいるのも、インド本国と同じ教育を受けさせたいという思いが伝わった。幼稚園の授業を見学してみて、レベルの高さと、子どもたちが積極的に答えていることに驚き、また体を動かしたり、歌を歌ったりしているのが楽しく明るい雰囲気だと感じた。(山田)

まず驚いたことは、授業が英語で行われていることである。今回訪問した学校はinternational schoolであり、授業が英語で行われているのは自然なことである。なぜなら、韓国、朝鮮人学校に代表される「民族学校」とは、その性格を異にするからである。インドの公用語はヒンディー語だが、富裕層は英語を使いこなすという現状を反映しているのを感じた。

また、在籍生徒のほとんどはインド本国への帰国を前提としており、必ずしも将来の生活に備えての日本語指導の必要性は低いと感じた。児童生徒の親はIT関連企業に就いている者が多く(いわゆる富裕層)、生活困窮のために日本に滞在し続けるという状況にはなりにくいのだろう。(谷村)

古くからの店舗も見られる賑やかな大通りを少し入った、閑静な住宅街の5階建てのビル。この立地に、まず意外な

感じを受けた。一見ただのマンションか雑居ビルのように、控えめながらも掲げている看板がなければ、ここが学校だとは気づかないだろう。彼らの集住地域から近いことからこの地となったのであろうが、バス通学が大半のこの学校の子ども達と、下町の色を残すこの地区の日本の学校の子ども達は、全く異なる学校生活を送っているのだろうと思った。

中に入ると、日本に居ながら異世界に居るような印象を受けた。顔はインド人らしい人が多くても、全体としてインド色はあまり濃くない。皆英語を話しているが、かといって欧米世界に居る感覚でもない。教師に英語でインタビューをしている横で、校長がヒンディー語で電話をしている。生徒も教師も洋装の人が多く、サリーの人も当たり前で混じる。教室には英語の掲示物が多いが、よく見るとヒンディー語のものもある。訪問時には昼食風景は見られなかったが、インド食のお弁当でカレーの匂いが漂うというの、なかなか興味深いものである。日本に居るインド人は主に本国の中でもエリート層に属するということから、私達のイメージするインド人像ともまた違うのだと思うが、「インドらしさ」と「インドらしくなさ」を併せ持つ空間だと感じた。(丸井)

インド人学校ということで、インドの文化が色濃く反映された校風を予想していたが、インターナショナルスクールという校名の通り、国際色豊かな雰囲気を感じた。確かに先生方の中にはサリーを着ている人もいれば、またスカーフを被っているイスラム教徒の人もいたが、特定の文化や国籍にとらわれない誰に対してもオープンな印象を受けた。その証拠にちょうど訪問したのが10月であったため、アメリカの習慣であるハロウィーンを祝っていたのには驚いた。

欧米系のインターナショナルスクールでは年間の授業料が200万円を超えるところが多いが、それに比べるとこの学校の授業料はかなり安い。しかしながらインド本国のエリート校の多くが採用しているCBSEのカリキュラムに沿って、高い教育のレベルを保っている。この学校に通っている彼らのように、私たちの支援活動の対象から外れている外国人児童・生徒の存在がよく理解できた。

最近別のインド人学校がこの学校の付近に開校したが、それにとまらぬ児童生徒数の減少がほとんど見られなかつ

たということから、インド人学校の需要はまだあると感じた。英語が教育言語であること、また数学やIT教育のレベルの高さから、非インド系の児童・生徒が今後ますます増えるのではないかと思う。(高野)

参考資料

澤宗則・南埜猛 「グローバリゼーション下の在日インド人社会」 秋田茂・水島司編 『現代南アジア 6・世界システムとネットワーク』 東京大学出版会 2003年 pp. 347-367

澤宗則・南埜猛 「南アジア出身者」 真田信治・庄司博史編 『事典・日本の多言語社会』 岩波書店 2005年 pp. 205-208

柴原三貴子 「日本初、インド人学校」 『インド通信』 インド文化交流センター 329,330,312号

「江東区のインド人学校にIT人材立国の源泉を見た」 『エコノミスト』 2005年4月19日号 p. 85

「インド人学校の恐るべき数学授業」 『プレジデントFamily』 2006年11月号 pp. 86-92

インディア・インターナショナルスクール・イン・ジャパン
HP: <http://www.iisjapan.com/>

おわりに

報告者: 中村 未央 (外国語学部ポルトガル語専攻4年)

1. 調査研究を振り返って

私達、調査研究員がこの調査を始めた発端は、当支援室で活動する学習支援ボランティアのメンバー間で、JSL児童・生徒(JSLとはJapanese as a Second Languageの略で、本文では国籍に関わらず日本語指導の必要があるという意味で使用する)の学習支援において一つの疑問が浮かんだからだった。「なぜ外国人児童・生徒達は日本の学校で学習困難や適応困難を抱えているのか」という疑問である。

そこで私達は一つの仮定を立てた。それは、児童出身国の学校現場と日本の学校現場との間で、「教科カリキュラム」と「学校文化・ルール」が異なるのではないかという事

だ。

学習面で JSL 児童が困難を抱えている時、本国と異なる学習内容(例えば「国語」や日本語、「社会科」の学習など)だけに戸惑いを見せているわけではなかった。そこで、本国と日本の中で学習進度や学習のやり方に差があると予測し、「学習カリキュラム」を調査することが役立つのではないかと考えた。また、日本では当然と受け止められているはずの学校の文化やルールに対して、JSL 児童・生徒、さらにはその保護者も違和感を持っている様子が見られた。「学校文化・ルール」を知ることで、生活面において日本に慣れることが出来ない児童・生徒の悩みを理解しやすくなるだろう。こうして、この違いを明らかにするために、調査を開始した。まず、以前から当支援室と付き合いの深かった日本の公立小学校 2 校で、JSL 児童担当教師に学習支援の現状についてインタビューを行った。次に、外国人学校 3 校(ブラジル・南米系・インド)を訪問し、児童・生徒及び教師にインタビューを行い、日本の学校と比較した。

しかし、この調査の過程で徐々にわかったことは、「教科カリキュラム」と「学校文化・ルール」の違いに留まらない、まさに多様な問題が、JSL 児童・生徒の学習支援状況に影響を与えているということだった。

2. 課題の多様性

では具体的に多様な課題とは何であろうか。

以下で、学習支援における課題の多様性について、各調査対象校における具体的事例をもとに整理する。

(1)日本語の習得度

日本語の習得度の速さには個人差がある上、JSL 児童の出身国によってもその速度が異なることがわかった。例えば、漢字圏出身児童の方がより日本語の習得度が速い。日本語習得の速さは、学校への適応の速さにも影響を与えるため重要である。(大久保小学校)

(2)家庭環境

家庭の安定度や保護者の児童に対する関心度が、児童の学習状態を左右することがある。具体的には、教育を十分に行うための環境的な安定度に恵まれているか、児

童と保護者との間で言語疎通の困難、所謂コミュニケーションギャップが起きていないか、本国への帰国が定まらない不安定な状態にないか、保護者が児童の教育に関心があるか等である。(大久保小学校)

(3)モチベーション

児童個人の性格による部分もあるが、(2)との関連で保護者が児童の学習及び学校生活全般に熱心であるか否かによって、児童の学習に対するモチベーションの持ち様が変わる場合がある。(大久保小学校)

(4)生活習慣

掃除の仕方(掃除用具が異なる等)や教師の呼び方・接し方、本国とは異なる給食など、生活習慣の面で相違が見られる。来日初期の児童に見られる場合が多く、慣れると解決されることが多いようだ。但し、これらの問題は「学校文化」という枠組みだけで捉えられるべきではなく、JSL 児童出身国の文化に対する深い理解が必要である。(京町小学校・大久保小学校)

(5)人間関係の距離感

インド人学校では教師と生徒の関係が近く、家庭的な雰囲気があること、ブラジル人学校でもフレンドリーな関係が築き上げられていることが挙げられた。ブラジル人学校では、挨拶の際にハグをしたりして、まるで学校にいる全員が家族であるかのように慣れ親しんで接している光景が見られた。逆に日本の学校にはこのような雰囲気がなく、教師に対しても勉強の質問がしづらいため、JSL 児童・生徒はこのギャップにストレスを感じることもある。(ブラジル人学校・インド人学校)

(6)学校へのニーズ

最近、外国人学校に求める教育ニーズにも変化がある。例えば、インド人家庭のケースでは日本に短期間滞在して、いずれは本国に帰国することがほとんどである。(保護者が日本に滞在するのは、一時的に IT 関連の仕事で働くためだからである。) そのため、インド人学校に対する教育ニーズとは、帰国後、母国の教育にうまくスライドできるような教育が提供されることであり、英語やコンピュータの授業が実践されている。それに比して、南米系外国人学校やブラジル人学校では、状況が異なる。というのも、昨今、日本に定住する家庭が益々増加しているため、日本

においても生活できる能力を身につけることが求められるからだ。母国語で本国のカリキュラムに沿って行う授業の他に、従来の日本語自体を学ぶ授業に加えて、算数や生活科など日本語で学ぶ授業が設けられるようになった。このように「外国人学校」と一口に言っても、各学校に期待される教育ニーズは多種多様である。(ブラジル人学校・南米系外国人学校・インド人学校)

以上述べてきたことからわかるように、JSL 児童の抱える問題は、私達が当初考えていたように「教科カリキュラム」や「学校文化・ルール」だけではない。むしろ、それらに限定されない多様な課題が JSL 児童・生徒教育にはある。では、この学習支援状況における課題の多様性を前に、より良い学校作りを目指して何が求められると提言されようか。

3. より良い学校作りを目指して

まず、国際教室(呼称は学校によって違いがあり、「日本語学級」や「国際学級」などと呼ばれることもある)担当専門の教員を養成することが求められる。

京町小学校では、現在の国際教室が一人の担当教師の尽力で成り立っていて、教師への負担が大きいということがわかった。この担当教師の前任の国際教室担当はおられたようだが、その後一時的に国際教室が閉鎖されたため、引継ぎを行うことができなかった。十分な引継ぎがされれば、国際教室で教師が得た知識や経験が伝えられ効率的であり、現職教師への負担が減るのではないだろうか。

また、現状では、国際教室担当経験のある教師が、ふさわしいポストに配置されず、貴重な経験が活かされないままになってしまうことがあるという。国際教室担当の教師がその経験を生かすべく、そのようなニーズのある教育現場に就けるように配慮されることが望ましいのではないかと。

さらによりよい学校作りのためには、日本の学校のあり方を再考することも大切である。ブラジル人学校で行ったインタビューの結果によると、ブラジル人にとっては日本的な人間関係やコミュニケーションの取り方が冷たく感じられ、違和感を覚えるものだったという。それは、彼らが日本の

学校で不適応を訴える時、人間関係の面でストレスを感じているからだということを想起させる。学校環境のあり方を問い直すことが必要なのである。

それでは最後に、外大生である私達ができることとは一体何なのか提言していく。

4. 私たちに出来ること:学習支援経験者の意見

今回の調査訪問及び学生多文化フォーラムの一連の活動を通して、私達は JSL 児童・生徒が抱える課題の多様性について認識することができた。それでは、今後より良い学習支援活動につなげるために、私達にできることとは一体どのようなことなのだろうか。

当支援室で行っている学習支援ボランティア活動は大きく分けて二つある。一つは川崎市や新宿区の公立小学校で活動を行う「東京外大在日外国人交流ネットワーク～AMIGOS～」であり、もう一つは府中市第二庁舎で活動する「府中国際交流サロン」である。

以下で、これらの団体に所属し、JSL 児童の学習支援活動に携わった経験のある 6 人の学生が考えた、「私達にできること」を掲載し、まとめたい。

山田寛子(府中国際交流サロン・外国語学部フランス語専攻 4 年)

私達にできることは、子ども一人ひとりを理解することだと思う。支援する子どもたちを、〇〇人や〇〇語を話すといった具合にまとめて、彼らの抱える問題全てを同じだと思わないこと。そして、子ども一人一人と向き合い、必要なことが何か把握することだろう。というのも、教育現場において、先入観や偏見というのが先行しがちだと思うからだ。今回の調査で先生との距離感や、家庭の意識など様々な要因が子どもたちの学習状況や学校生活への適応に影響を及ぼすとわかった。それらをふまえて考えると、比較的年齢の近い相談役として、児童・生徒から話を聞くことや、語学を活かして家庭との仲介役を果たすことができると思う。私も学習支援をする際、担当児童をよく理解するようにしている。抱える問題が多様だからこそ、一人一人に合った指導や相談をしていく必要があると思う。

黒野 美香（府中国際交流サロン・外国語学部日本語専攻4年）

「どうしたらもっと今までの学習支援活動が良くなるか」「そのためにできることは何か」について、府中国際交流サロンでの学習支援ボランティアの活動を通して感じていることが2つある。

一つ目は、私たちボランティアと学校と行政機関がもっと連携できたらいいということである。例えば府中市では、生活課の担当のものや教育委員会が担当のもの等、管轄の異なる支援ボランティアがいくつかあり、お互いがお互いを知らず個別に活動しているような状態だが、相互に協力し合えたらもっと効果的な支援が行えるのではないかとと思う。この点については、私たちが積極的に動いて橋渡しのような存在になることもできるのではないかと考えている。実際に府中国際交流サロンでの学習支援と府中市の学校に出向いて行う学習支援ボランティアに関しては、サポートメンバーの学生を同時募集したりどちらかに来ている生徒や学校にもう片方も紹介したりしていけたらと考えており、現在その方法を模索・検討している。

もう一つは、日本語を教えるための勉強をすることだ。学習支援では、学校に入り込んで通訳的役割を果たすことが多いが、日本語それ自体を教えることも当然ある。ここで専攻語の知識以外に日本語教育の専門的な知識があったら、もっと支援が効果的なものになると思う。日本語学科も抱える大学ということで日本語教育に関連する授業がたくさんあるので、そのような機会をいかして勉強をするのも活動のプラスになると思う。

中村 未央（東京外大在日外国人交流ネットワーク～Amigos～・外国語学部ポルトガル語専攻4年）

私達外大生が外国人児童・生徒にできることは、抽象的だが、彼らのバックグラウンドを懸命に理解しようと努力し、いつもそのことを心に留めながら支援活動をするのではないだろうか。

例えば、外国人児童が日本人児童と喧嘩をしようとするとき、もし外国人児童が一方的にちょっかいを出したとしても、それが何のサインなのか(友達と仲良くなりたいからなのか？授業についていけなくて、ついそうしてしまうの

か?)、想像をめぐらそうとすることができるのではないか。もしクラスの中で児童がうまくいっていない時に、それを「家庭が不安定なのか?」「学習に不安があるのか?」など、児童が抱える様々な背景を知ろうとすることで、よりよく理解できると思う。学生多文化フォーラムの講演者である、キョウコ・ヤナギダ先生もおっしゃっていたように、「外国人だから何もできない。」ではなくて、「外国人だから日本語はよく分からない。でもそれ以外のことは理解する能力がある。」という視点で接することができれば、児童の学習レベルがなかなか上がらなくても、「いつかはできる。」という可能性を信じてあげることができ、辛抱強く支援できるだろう。

また、周囲の日本人児童に働きかけることができる。「あの子は外国人だから勉強ができない」、「理解できない」等といった考えを、周囲の日本人児童がしていることがある。それを私達が入り込んで働きかけることで、「一緒に勉強しよう」、「見守っていこう」と言うことができる。

また、これからの可能性として、まだ外国人の受入れを経験したことのない学校からボランティアの派遣要請を受けた場合、私たちが今まで接したことのある国籍の児童がいれば、その学校自体にその児童の国や国民性について情報提供できると思う。

服部 聡依（東京外大在日外国人交流ネットワーク～Amigos～・外国語学部ポルトガル語専攻4年）

今後の学習支援に必要なことは、子ども一人一人の「違い」=母文化や言葉、習慣等において日本とは違うということを受け止めて理解してあげること、認めることで児童に自信を持たせてあげることではないかと思う。子ども達がバックグラウンドを含む「自分」に自信を持つことができれば、勉強に対してもやる気を持って望んでくれるかもしれない。これは学生多文化フォーラムの講演者であったヤナギダ先生も、「本人のやる気次第でぐんぐん伸びる」とおっしゃっていたことだ。

教員や留学生を含め、普段から違う国籍の人や言葉、文化、肌の色など、様々な点で自分と違う人達と接する機会が外大生には多い。そのため、外国人やその文化を捉える時に多くの人が無意識に持っしまいがちに、偏った

ステレオタイプも持っていないと思う。「違う」ということに対して抵抗が少なく、その違いをごく自然に受け止めることができるのではないか。学習支援をする場合に、たとえその児童生徒の言葉を自分が知らなくても、先入観を持たずにその子自身を見ようとし、その子の持っているものを受け止めることができれば、安心させることが出来るのではないかと思う。

また、もう一点学習支援において大切なことは、学校内でのコミュニケーションや人間関係の距離感を見直すことだ。今回の調査で、ブラジル人の子ども達が日本の学校に対して必ずしも否定的ではないことがわかって非常に驚いた。むしろ日本の学校には、きちんと勉強できる環境が整っていることや、行事が豊富であることに満足していた。日本の何が好きではないかと問うた時、彼らが答えたことは友だちや先生との距離感だった。先生に質問したくても出来ない日本の学校の雰囲気に対して、ブラジル人学校ではハグやキスを自然に交わす。確かにこれらの習慣はブラジル独自のものである。しかし、日本の学校でも、少なくとも低学年の子どもに対しては、頭を撫でるなどのスキンシップをはかることは、ブラジル人児童のみならず日本人児童にとっても有効なのではないだろうか。

和田 更沙（東京外大在日外国人交流ネットワーク～

Amigos～・外国語学部ポルトガル語専攻 4年）

外大生である私たちに出来ると思ったことは次の二つである。

まず一つ目には大学で学んだ言葉や知識、海外経験などを活かし、様々な場面において「橋渡し」の役割を果たすことだ。

例えば生徒と生徒の間、生徒と教師の間、あるいは教師と保護者との間の仲立ちをし、相互理解を助けることだ。児童が喧嘩や揉め事を起こした時に、児童がその行為に至った理由や、うまく日本語で伝えることが出来ない気持ちを受け止め、それを教師に伝える事が出来る。また緊急時など何か起こったときに事情を説明することもできる。たとえ通知表に書かれるわずか数行のコメントであっても、児童の保護者にとっては、子どもの学校での様子を知るためにはとても重要なものである。必要な持ち物の連絡など

日常的で小さなことだが、それも学校生活に馴染み授業に参加するためには大切なことである。

また、外語大生は海外旅行や留学経験者が多く、異文化に対する姿勢が柔軟である。学習支援においてもこの柔軟な姿勢や異文化理解を活かし、保護者や他の児童に対して働きかけをすることが出来る。例えば、日本ではピアスはしてきてはいけないことや、給食があるので給食費を納める必要があること、集団登校をするので送迎は不要であることなど、日本の学校文化の特徴を事前に本人や保護者に伝えておけば、児童が学校に通い始めた時の戸惑いも少なく出来るだろう。もし日本の文化やルールを知らずにピアスを付けてきてしまった児童がおり、他の児童から批判を受けた場合でも、「彼女が来た国では、生まれたらすぐにピアスを開けちゃうんだよー。小さい頃からおしゃれが出来ていいよね！でも、日本では学校にはしてきちゃいけないって決まってるんだもんね、教えてあげようね」などと、世界には日本と違う文化を持つ場所がたくさんある事を児童に教えてあげられる。

そして次に、若いお姉さん・お兄さんとして児童生徒ひとりひとりと向き合う事である。教室に入るといつも、児童たちは私に笑顔で手を振り、「遊ぼう」「給食一緒に食べよう」と声をかけてくれる。初めて教室に入った時でさえも、見知らぬ私を人見知りせず迎え入れてくれた。「よく分からないけどいる若いお姉さん」の存在が彼らにとっては単に嬉しいのだと思う。私たち大学生は、先生とも保護者とも違う。そんな先生の様で友達のような立場を活かし、一緒に楽しく遊び、一緒に学ぼうという姿勢で児童と向き合える。友達のように側に寄り添いながら、普段と様子が違えば声をかけてあげられるし、悩みや困った事があればお姉さんのように聞いてあげることも出来ると思う。

渡邊 桃子（東京外大在日外国人交流ネットワーク～

Amigos～・外国語学部ポルトガル語専攻 4年）

学生に出来ることは児童の学校生活の中で少しでも話し相手になれることだと思う。日本語が不十分な生徒にとって自分の話を聞いてくれる相手、つまり母語がわかる先生という立場の日本語指導の先生の存在は貴重な存在と思っているように感じた。学級担任の先生はその立場上、

一人の児童にかかりきりになることは出来ない。そして日本語指導の先生も常に子どものそばにいられるわけではない。そこに私たちが出来ることがあるのではないだろうか。

児童との信頼関係を築くために、少しでも一緒にいることが大切だと感じている。しかし、私たちがその外国籍の児童とばかり一緒にいては、私たちの存在は全く意味のないものになるだろう。出来る限りの時間をクラスの中で過ごしながらも、外国籍の児童が何かを話したい、訴えたいというサインに気を配ること、そしてクラスの中で「〇〇人の子のために来ているお兄さん、お姉さん」から「私たちのクラスに来るお兄さん、お姉さん」になることが必要だと思う。外国籍の子に対しては、母国語や母国の文化を知っている人がそばにいることは心強いことであり、日本でずっと暮らしてきた子どもにとっては外大生の経験は興味深いものであると思う。そのために、学生ボランティアとして活動する際には、相手の思いを汲み取ること、自分の思いを外国語であれ日本語であれしっかり伝えることが大事になってくるのではないか。

会場参加者からの意見・感想・質問

午後の部、学習支援班の発表に対し、会場参加者から様々な意見が出された。この項の最後として、フォーラムの質疑応答の際には時間の関係上取り上げることができず、参加者が質問票に残した意見・感想・質問をまとめておく。

- ・ 親が日本語がわからない、日本の教育システムなどがわからないことから、子どもの前でわからないことをさらしたくない、自信がない、その結果、子どもの学習や学校のことにかかわらなくなってしまうということがあられると思う。
- ・ 子ども達にとって、母語や母文化を学ぶことと、日本語や日本文化を学ぶことを両立させることはかなりの負担ではないかと思うが、これを成功裡に行っている機関は日本に存在するか。あるいは、諸外国にはあるのか。

- ・ 日本にいれば、日本語と日本文化が圧倒的に優位なので、その中で母語や母文化を大切にしていくには、周囲の理解も必要だと思う。
- ・ 「知る＝調査」
実践するということを踏まえて、今度は外部に発信することも出来ると思う。
そこで、どのような方法で活動を発信(広報)出来ると思うか

図2.ピタゴラス太田校の1週間の時間割表

月曜日	就学前		小学校・中学校						高校			補講
	乳児	幼児	1年	2年	3,4年	5年	6年	7年	8年	1,2年	3年	
8:15-9:05						情報	地理	英語	体育	生物	ポル語	
9:05-9:50			体育		日本語	英語	情報	ポル語	歴史			
9:50-10:05	休憩											
10:05-10:50						日本語	体育	理科	英語	ポル語	地理	
10:50-11:40		体育				日・文化	英語	地理	理科		体育	
11:40-12:30				日本語	体育	情報	理科	情報	歴史		英語	
12:30-13:15	昼食											
13:15-14:00			英語			ポル語	自習	ポル語	自習			生・化・理
14:00-14:45		体育			英語	自習	ポル語	体育	ポル語			体育
14:45-15:30			体育			英語	情報	英語	情報			ポル語

火曜日	就学前		小学校・中学校						高校			補講
	乳児	幼児	1年	2年	3,4年	5年	6年	7年	8年	1,2年	3年	
8:15-9:05						算数	英語	体育	ポル語	歴史	生物	
9:05-9:50		日本語	体育				理科	芸術			日本語	
9:50-10:05	休憩											
10:05-10:50		体育	日本語			芸術	ポル語	理科	情報	日本語	歴史	
10:50-11:40			体育	情報		歴史	ポル語	ポル語	日本語	英語		
11:40-12:30				英語			情報		ポル語	体育	生物	
12:30-13:15	昼食											
13:15-14:00			日本語			情報	自習	情報	自習			ポル語
14:00-14:45		体育		体育		ポル語	英語	ポル語	英語			地歴
14:45-15:30					体育	自習	情報	自習	情報			英語

水曜日	就学前		小学校・中学校						高校			補講
	乳児	幼児	1年	2年	3,4年	5年	6年	7年	8年	1,2年	3年	
8:15-9:05		日本語				算数	地理	理科	日本語	数学	物理	
9:05-9:50			日・文化				理科	日本語	地理			
9:50-10:05	休憩											
10:05-10:50			英語			理科	芸術	日・文化	算数	地理	生物	
10:50-11:40							算数	算数	理科	英語	英語	
11:40-12:30					地理					英語	化学	
12:30-13:15	昼食											
13:15-14:00						自習	日本語	自習	日本語	生物	歴史	数学
14:00-14:45					日本語	英語	自習	英語	自習	化学	地理	生・化・理
14:45-15:30			日本語			自習	英語	自習	英語			数学

木曜日	就学前		小学校・中学校						高校			補講
	乳児	幼児	1年	2年	3,4年	5年	6年	7年	8年	1,2年	3年	
8:15-9:05						英語	歴史	体育	ポル語	物理	数学	
9:05-9:50			日本語			ポル語		情報	芸術			
9:50-10:05	休憩											
10:05-10:50				日本語		理科	体育	歴史	英語	数学	ポル語	
10:50-11:40		体育		英語		ポル語	日本語	情報	地理			
11:40-12:30				体育	地理	日・文化	英語	算数	ポル語	物理		
12:30-13:15	昼食											
13:15-14:00				英語		自習	日本語	自習	日本語		ポル語	生・化・理
14:00-14:45						英語	自習	英語	自習			地歴
14:45-15:30					情報	日本語	ポル語	日本語	ポル語	化学		

金曜日	就学前		小学校・中学校						高校			補講
	乳児	幼児	1年	2年	3,4年	5年	6年	7年	8年	1,2年	3年	
8:15-9:05					日本語	ポル語	算数	ポル語	体育	化学	数学	
9:05-9:50			体育	日・文化					日・文化			
9:50-10:05	休憩											
10:05-10:50		体育				日本語	ポル語	算数	算数	物理	日本語	
10:50-11:40		体育		日・文化			ポル語	日本語	情報	情報		
11:40-12:30					体育		日本語	算数	ポル語	日本語	化学	
12:30-13:15	昼食											
13:15-14:00						算数	自習	算数	自習			ポル語
14:00-14:45						体育	算数	日本語	算数			日本語
14:45-15:30						日本語	体育	自習	体育			数学

ピタゴラス太田校の時間割表を基に調査員が作成

第Ⅲ部

活動を振り返って（総括）

1. 学生ボランティア活動支援

1-1. 学習支援ボランティア活動支援

文責：森本 憲治(学習支援担当運営委員)

この活動は、本支援室を立ち上げる源となった現代 GP の題目が「在日外国人児童生徒への学習支援活動」となっていることから明らかなように、まさに多文化コミュニティ教育支援室の活動の原点であった。現代 GP の活動としての 3 年間を終えようとしているこの段階において、ここでは、来年度以降も本学内の「多言語・多文化教育研究センター」が本活動をスムーズに引き継いで展開できるよう、現段階で考えられる課題を考えたい。

まず、来年度以降の学習支援ボランティア活動支援は、府中市教育委員会との覚書に基づき今年度から新たに開始した府中市内の小中学校での学習支援活動及び従来から継続している府中国際交流サロンでの活動が中心になると予想されるが、府中市に本拠地を置いた本学が地元で活動を広げていくことは極めて自然である。しかしながらその一方で、これら以外の活動を大幅に拡大することは、率直なところ困難であると思われる。その主な原因としては、まず、活動開始時におけるコーディネーターに対する負担の問題をあげたいが、これは端的に言えばボランティア活動を行う人員の確保の問題に集約される。

これはボランティア活動を行いたい学生が不足しているというより、ボランティア活動を「やりたくてもできない」学生が多いことに起因する。即ち、意欲はあっても時間が取れない、あるいは時間が取れても活動時間と合わない、などの理由で、やむなく活動メンバーに入れない学生が多い、という実に「もったいない」事態が生じているのが現実であり、このことは、多数の学生が本支援室に登録していること、また、府中国際交流サロンの「サポートメンバー」になっている学生が、常に実際に定期的な活動を行っている者の 2 倍以上いることから明らかである。この要因としては、夏休み等の長期休暇の時期が小中学校とずれていること、また本学学生の履修登録が半年に一度行われ、都合の

つく時間帯が変わること、更には、本学の 1、2 年生にとって週 6 時間の専攻言語の授業をこなしながらボランティア活動を行うことが困難であることなどが考えられるが、本分とする授業を欠席させてまでボランティア活動に従事させることはあってはならず、一方で学習支援ボランティア活動の多くは平日の昼間に行われるため、コーディネーターのジレンマとなっている。後述の国際理解教育の場でも同様の問題が想定されているが、学習支援活動は毎週定期的に行われるため、様々な要因でコーディネーターへの負担がかかっており、従来から懸案事項として挙がっていながら残念ながら根本的な解決には至っていない。特に府中市内の小中学校での学習支援活動は今後更なる活動要請の増加が予想されるため、今後とも難しい問題として残ることが予想される。

また、コーディネーターへの負担という観点からは、活動内容の問題も引き続き指摘しておきたい。即ち、学習支援ボランティア活動と一口に言っても、その活動内容は様々であり、ボランティア活動を望む学生が行いたい内容に合うかどうか一概には言えない。例えば、在日外国人児童生徒は日本語が不自由であり、そのためには日本語指導が不可欠だ、というイメージが先行しがちであるが、必ずしもそうではなく、日本語は自由に使えるものの、算数や社会といった教科の習熟度が母国と日本で異なることによりサポートを必要とする者も存在する。この場合、日本語教育を専攻している学生にとって教科指導を行うように言われることは心外であり、現にこのことでコーディネーターができなかった事例も存在した。

次に、活動開始時の課題に引き続き、活動中に起こりうる課題として、第一に、サポートのための専門家の不足が挙げられていた。ただ、これに関しては、多言語・多文化教育研究センターの設立と共に様々な専門的知識を持つ者がメンバーに加わり、また、学外の諸機関との協力体制も徐々に整備されてきたので、例えば様々な分野における学内外の専門家とのミーティングを定期的に行うことなど

により、今後は学生の悩みが円滑に解決されていくと期待される。また、第二に事務処理上の問題として交通費の精算やボランティア保険の確認が煩雑であることが指摘されていたが、交通費に関しては精算時期を工夫するなどの自助努力で円滑に行うことが期待される。ただし、ボランティア保険に関しては、新入学時に一括加入を大学として勧めるなどの工夫を行っているものの、実際に事故が発生しない限りあまり意識されないものでもあり、幸い保険適用になるような大事故がこれまで発生しなかったが、引き続き慎重を要する課題となっている。

また、意外に見落としがちな点として、児童生徒に対する支援をいつ終わるか、というタイミングを適切に把握することは、児童生徒が日本を離れるなどの物理的要因を除いては、比較的困難であることをあげておきたい。これは、児童生徒の学習熟度に個人差があることに加え、その習熟度を測ること自体が困難であること、更に、学習支援を行うことが間接的に「心の支援」を行うこととなり、この二つを切り離すことが困難であることがポイントとして想定される。

これに関しては、例えば府国際交流サロンでは、定期的に関係者(児童生徒本人、保護者、支援する本学学生、サロン担当者、本学担当者)間で面談を行い、今後の対応を検討する場を設けているが、一例として、「今後支援の必要はない」と思う者がいても、他の者が支援を要請すれば結局支援続行となり、その後の活動内容に苦慮する例なども存在する。

このことは人員の確保という点とも間接的な関係を持つため、ここで課題として挙げておきたい。

最後に、活動の場としての府中市内の小中学校と府国際交流サロンであるが、今のところはそれぞれの活動の場において児童生徒に対する学習支援を行っているものの、今後、この2つの活動の場に関する位置づけについて検討が必要であると思われる。即ち、府国際交流サロンで学習支援を受けている児童生徒のほとんどは府中市内の小中学校に通っている中で、小中学校は正課の授業である一方、府国際交流サロンは課外授業であることなどを踏まえ、それぞれの特色を活かした形での学習支援になっていくことが望まれる。幸い本学では多文化コミュニ

ティ教育支援室という一つの窓口がコーディネーターとなり、また、小中学校で活動する学生と府国際交流サロンで活動する学生同士の連携を絶やすことのないようサポートを行ってきたが、これを府中市と本学とのもう少し大きな枠の中で、例えば小中学校と府国際交流サロンとの連携を共に検討していくなどの取り組みも今後考えていくべきかと思う次第である。

1-2. 国際理解教育ボランティア活動支援

文責：青山 亨(国際理解教育担当運営委員)

本支援室による国際理解教育ボランティア活動支援の取り組みは、学習支援ボランティア活動支援の後を追う形で、2005(平成 17)年度から本格的に始まった。立ち上げ時には、どの程度の要望があるのか未知数であったが、実践が始まってみると、地域の小中学校から大きな反響があり、予想を超える進展を見せた。この要因として、地域によって程度の差はあるとしても、小中学校の教育現場において多言語・多文化化が進んでいること、それに加えて、2002年から導入された「総合的な学習の時間」への対応として国際理解教育に取り組む学校があることが推測される。ここでは、2006(平成 18)年度の活動を中心に振り返りつつ、2年間の活動の総括を行いたい。

2005年度には小中学校あわせて6校で実践を行ったのに対して、2006年度には川崎市立の東柿生小学校、宮前平中学校、土橋小学校、府中市立の府中第七中学校、小柳小学校、新宿区立大久保小学校、狛江市立狛江第一小学校の7校において国際理解教育の実践を行った。また、三島市立東小学校については、修学旅行で本学を訪れた児童に対して本学キャンパスにおいて国際理解教育の実践を行ったので、実践の総件数は8校となった(詳細は第Ⅱ部1-2を参照)。

昨年度の報告書でも述べたように、本支援室のスタッフ数を考えると、十分な実践が行える限度は年間6校程度である。したがって、今年度についても、実践の対象は原則的に川崎市と府中市を中心にし、それ以外は2、3校に絞る方針で臨んだ。このうち川崎市は、市の外国人教育基本方針の中で「多文化共生の社会をめざして」をうたっ

ており、川崎市総合教育センター国際理解教育研究会議が長年にわたって国際理解教育に取り組んできた実績がある。本支援室も、昨年度から国際理解教育研究会議と連携しつつ、研究会議の参加校において学生ボランティア実践を行ったり、研究会議の定例会議に学生も参加したりすることによって、単なる外国人学生の派遣に終わらない、学生自身にとっても学びの機会となる実践活動を行うことができた。また、府中市については、本学が立地する地元であり、大学の地域貢献という観点からも、積極的な取り組みを行ってきた経緯がある。川崎市と府中市以外には、昨年度から引き続き新宿区立大久保小学校において実践を行ったが、これは、同校が、各地の外国人集住都市を別にすれば、東京都内でも最も多言語・多文化が進んでおり、また、それに対する取り組みの経験も豊かであるという実情を踏まえての判断である。いずれにせよ、派遣先の学校数については、支援室のキャパシティを考慮しつつ、今後も何らかの原則を設けて上限を設けるべきであろう。

なお、これら以外の学校について今年度実践を行ったのは、実践の期間を2月にずらした狛江市立狛江第一小学校と、修学旅行を利用して本学キャンパスで実践を行った三島市立東小学校の2校のみである。特に三島市立東小学校の事例のように、修学旅行などの機会に学校側から本学キャンパスを訪問していただく国際理解教育という方式は、回数が多くできないといった制限はあるものの、双方の最小限の負担で遠方の学校に対しても実践が行えるという点で、今後も原則外の受け入れの選択肢の一つとして残してよいと思われる。

昨年度の報告書では、支援室が学生ボランティア活動を進めていく上でのポイントとして、1)学生ボランティア・ネットワークの構築、2)学生ボランティアに対する研修機会の提供、3)学生コーディネーターの重視、4)学生ボランティアの運営に関わるノウハウの蓄積と共有、5)派遣先学校の担当教員との緊密な連携の確立、の5点を挙げ、それぞれのポイントについての具体的対応を述べた。昨年度に引き続き、今年度もこれらのポイントに留意して運営を行ったが、特に昨年度不十分であった経験から、改善に取り組んだのは5番目のポイントである。そのために、今年

度は、年度の初めに専従スタッフと国際理解教育担当委員が、国際理解教育の学生ボランティア派遣を予定している小中学校を全て訪問し、支援室で新たに用意した協定書と覚書を取り結ぶとともに、実施校における国際理解教育担当の教師並びに学校長と直接面談して、支援室の国際理解教育に対する考え方並びに活動の方針の説明を行った。これによって、支援室と実施校との関係を、担当の教師個人との関係から実施校全体とのより緊密な関係へと高めることが可能となった。このように、実践活動の経過と成果が実施校全体できちんと共有化されることは、支援室の活動を今後も安定的に継続させる上で重要であり、今後もこのような方向で連携活動の整備を行っていく必要があると思われる。

支援室では、これまで行ってきた国際理解教育のための学生ボランティア派遣活動に対する小中学校側の評価を得るために、実践を行った小中学校の教員に対して、活動についての評価を求めるアンケートを行い、10校から回答を得た。アンケートの結果については本項の末尾に掲載しているので、参照してもらいたい。ここでは、以下の点を指摘しておきたい。まず、全体としては、「国際理解教育の目的に対して成果があったと思われますか？」の問いに対しては無回答1校を除くと、「はい」または「どちらかと言えばはい」の回答を得ており、おおむね高い評価を得たと言ってよい。しかしながら、「打ち合わせの回数は十分だったでしょうか?」、「教室での実践の回数は十分だったでしょうか?」、「実践後の反省会は十分だったでしょうか?」の問いに対して「いいえ」あるいは「どちらかと言えばいいえ」の回答がそれぞれ1校ずつあり、課題を残している。打ち合わせと反省会についての指摘は、教師側と学生側の間に円滑なコミュニケーションを確立することが重要であることを示している。これらの指摘と実践回数の不足の指摘は、つまるところ、大学の授業を受けることが本務である学生が、その中でいかにして必要な時間と人員をやりくりして確保するかという問題に帰結し、簡単な解決策を見つけないことはできない。また、日本人学生の時間の確保以上に困難なのが、日本語の授業も受けている留学生の時間の確保である。結果的に、学生ボランティア活動に積極的に関わる一部の留学生に負担が集中するという問題が

生じている。後述するように、支援室がセンターの一部になることを機に、センターとして各部局に授業時間の調整を要請したりボランティア活動の単位化を図ったりすることで、留学生の負担がいくぶんなりとも軽減するようになることが望まれる。

本年度をもって、文部科学省による平成 16 年度現代的教育ニーズプログラム「在日外国人児童生徒への学習支援活動」は終了するが、支援室自体は、新たに創設された多言語・多文化教育研究センターの一部として、来年度以降も継続する。支援室の活動が全学的機関であるセンターの一部になることによって、予想されるいくつかの改善点と課題を述べて本稿を締めくくりたい。

第一に、支援室と学生ボランティア派遣先の小中学校の連携が制度的により強固なものとなることである。既に準備が進められている所もあるが、川崎市の小中学校については川崎市総合教育センターと、府中市の小中学校とは府中市教育委員会と、センターが協定を結ぶことによって、学生ボランティア派遣活動が包括的な協定のもとで実施できるようになることが期待される。川崎市との協定の場合には、交通費の支払い方法の一元化や、より緊密な打ち合わせ会合の実施といった方向で話が進んでいるところである。

第二に、センターの予算で国際理解教育の専門家が国際理解教育コーディネーターとして支援室に配属されることになったことである。これまでは本学の教員が本務の合間を縫って支援室の活動を支えていたが、専門的知識の欠如や時間の不足によって、十分に学生たちに対応できないことがあった。特に 2006 年度は、センターの立ち上げと支援室の運営が重なったため、対応が不十分になりがちであったが、国際理解教育コーディネーターの配属によって今後はより充実した実践が行われることが期待される。

第三に、支援室の活動と本学の教育カリキュラムとの一層の連携が進むことである。センターによる学部生対象の教育プログラムとして Add-on Program「多言語・多文化社会」が 2006 年度から開設されている。この教育プログラムは、在日外国人児童生徒への学習支援や国際理解教育を行うにあたって必要とされる知識や理解を学ぶことを目

的に開設されたものである。その中の「多言語・多文化社会論入門」を受講している学生が支援室の活動に参加するなど、支援室の活動と本学の教育との間に連動の芽が育ち始めつつある。更に、Add-on Program で再来年度に開講が予定されている実習部門については、支援室の活動の一部を実習とすることによって、学生ボランティア活動の一部を単位化する可能性も開けている。また、日本人学生や留学生が抱えている授業時間とボランティア活動の時間との配分の問題も、センターとして取り組んでいくことが望まれよう。特に留学生については、これまでは取り込みが不十分であったので、センターから関係部局に働きかけるなどして、積極的な取り込みを計っていくことが必要であろう。

支援室の国際理解教育はセンターの活動の一部となることで更なる発展を遂げられると思われる。まだ多くの課題が残されているが、新しいスタッフと学生たちの智恵と情熱で克服し、活動の輪が広がっていくことを望んでやまない。

国際理解教育評価アンケート（回収数: 10 校）

1. 貴校の国際理解教育の目的(ねらい)に対して成果があったと思われますか？

- 1. はい……………8 校
- 2. どちらかと言えばはい……1 校
- 3. どちらとも言えない
- 4. どちらかと言えばいいえ
- 5. いいえ
- 無回答……………1 校

2. 生徒たちは国際理解教育を楽しんでいたでしょうか？

- 1. はい……………10 校
- 2. どちらかと言えばはい
- 3. どちらとも言えない
- 4. どちらかと言えばいいえ
- 5. いいえ

3. 教材には工夫があったでしょうか？

- 1. はい……………4 校

2. どちらかと言えばはい……3校
3. どちらとも言えない……3校
4. どちらかと言えばいいえ
5. いいえ

※特に印象に残ったものを書いてください。

- ・「もし世界が 100 人の村だったら」のシュミレーションゲーム。(2校)
特に、お煎餅を分けるゲームは子ども達の心に響いたようです。
- ・遊び紹介のもの、紙芝居でのクイズ、スゴロク、写真、実物などの様々でした。
- ・ゲームとお茶
- ・写真が印象に残りました。
- ・FAX 通信、各学生が持ち寄った資料など。

4. 授業の進め方には工夫があったでしょうか？

1. はい……4校
2. どちらかと言えばはい……6校
3. どちらとも言えない
4. どちらかと言えばいいえ
5. いいえ

5. 打ち合わせの回数は十分だったでしょうか？

1. はい……4校
2. どちらかと言えばはい……1校
3. どちらとも言えない……4校
4. どちらかと言えばいいえ……1校
5. いいえ

6. 教室での実践の回数は十分だったでしょうか？

1. はい……3校
2. どちらかと言えばはい……3校
3. どちらとも言えない……3校
4. どちらかと言えばいいえ……1校
(年間3回では少なすぎる)
5. いいえ

7. 実践後の反省会は十分だったでしょうか？

1. はい……4校
2. どちらかと言えばはい……1校
3. どちらとも言えない……4校
4. どちらかと言えばいいえ
5. いいえ……1校

8. 学生コーディネーターとの連絡は十分にとれたでしょうか？

1. はい……6校
2. どちらかと言えばはい……2校
3. どちらとも言えない……2校
4. どちらかと言えばいいえ
5. いいえ

9. 実践をおこなった学生たちの態度は満足のいくものだったでしょうか？

1. はい……10校
2. どちらかと言えばはい
3. どちらとも言えない
4. どちらかと言えばいいえ
5. いいえ

10. 本学の国際理解教育を来年度以降も続けたいと思われますか？

1. はい……8校
2. どちらかと言えばはい……1校
3. どちらとも言えない……1校
4. どちらかと言えばいいえ
5. いいえ

11. 本学の国際理解教育を他の学校にも推薦したいと思われますか？

1. はい……7校
2. どちらかと言えばはい……3校
3. どちらとも言えない
4. どちらかと言えばいいえ
5. いいえ

12. 以上の評価について、よかった点、改善すべき点がありましたら、具体的にご記入ください。

- ・ 学生さんたちがどなたもとても熱心に意欲的に取り組んでくださり、子ども達にたくさんの学びをプレゼントしてくださいました。学生さんたちが来てくださることをどの子どもも心待ちにされていて、活動を楽しむことができました。教員側の方が準備を忘れていたり、指導案への返事をとりそなったりすることがあり、ご迷惑をかける方が多く、申し訳なかったと思います。来年度に向けては、3回を5回くらいに増やしてほしいとの校内での要望がありました。来年度もやっていただけるのであれば、今年よりもっと綿密な打ち合わせを心がけていきたいと思っています。一年間、貴重な時間をありがとうございました。学生さんたちにくれぐれもよろしくお伝えください。
- ・ 昨年は本当にありがとうございました。計画から実施まで、本当に子ども達のことを考えて取り組んでいただき、感謝しております。国際人としての資質を高めることを念頭に、日頃より指導しております。その中で、相手を受け入れる心、相手に自分の思いを伝えようとする心がまず大切だと考えています。ですから、私は子供たちに「Open Mind!」を合言葉にしています。学生と子ども達の出会いを大切にしたいゲームをし、お互いの心が開くような内容を用意した方がよかったかな?と思いました。
- ・ こちらから一方的にお願いすることが多く、学生ボランティアの方からの率直な意見や感想を聞けなかったのも、今後はそうした点を工夫していきたい。
- ・ 外語大の学生の方と一緒に授業させていただき、ありがとうございました。生徒にとっても教員にとっても貴重

な体験になったと思います。学校全体で総合のカリキュラムが組まれているので、自分のクラスだけ独自の授業、または8クラス全部に来ていただくのは、なかなか難しいとのことで、来年度は厳しいかと思います。

- ・ よかった点: 毎回授業の反省をし、次回の授業について打ち合わせができた。小学生(5,6年生)と年が近いので、親しみが持てた。
改善点: 20名の小学生に一斉授業は大変そうだった。グループに分けての授業にしてほしい(レベルごとなど)
- ・ 低学年で来日の場合、効果があったように思う。
- ・ 本年度は連絡の行き違いがあり、昨年の末になって実質的に計画を修正しながら、臨機応変に対応していただいたこと感謝しています。
- ・ 留学生の方がなかなか集まらずご苦勞をおかけしましたが、最大限の手を尽くして下さったことを感じました。
- ・ 2回の交流のうち、1回目は学年全体で、2回目は各クラスでの交流とバリエーションがあったことがよかったと思います。それぞれ工夫した企画で準備をしっかりとし、臨んで下さったおかげで、有意義でした。
- ・ 授業案がよく計画されていた。
- ・ 児童に積極的に話しかけていて良かった。
- ・ 「交流」の意味が強く伝わった。
- ・ 多くの外国の方が来てもらえるありがたい。
- ・ 担任の役割を明確にしてもらいたい。
- ・ 当日の欠席はなるべくないようにお願いしたい。
- ・ 日数や人数は、よく相談していきたい。

2. 教育・研修

本プロジェクトの活動のうち、教育・研修活動について、振り返り、総括を行う。

申請段階から計画していた日本の学校での学習に困難のある「外国人」の児童・生徒の学習支援ボランティアの学生たちのための、1週間集中20コマの教育研修プログラムは、ほぼ計画通りの実現を見、想像した以上の成果を挙げたと言える。当初の予定に無かった総合科目「多言語・多文化社会講座」が、2005年度に実施され、これは2006年度より多言語・多文化教育研究センターによって開講された、Add-on Program「多言語・多文化社会」に発展的に引き継がれた。同じく当初計画には無かったイラストレータ・パワーポイント講習会も2005年度・2006年度と実施された。

活動を広げる過程で、運営委員が新宿区の研究会などに足を運ぶうち、ボランタリーグループ共住懇の山本重幸氏と出会うことができ、「多文化のまち一大久保・百人町を歩く」と題したスタディ・ツアーが実現することにもなった。これは2005年度、2006年度の4月に実施され、新学期の始めに学生たちの活動への関心を刺激する役割も果たした。

夏の教育研修プログラム、スタディ・ツアーも、新設された多言語・多文化教育研究センターによって、2007年度もその内容を引き継いで実施される見込みとなった。総じて、当初計画が実行されたのみならず、計画外の活動も充実し、発展的に引き継がれることとなったことは当初の予想を超えた成果であった。以下に、本プロジェクトによるこれらの活動の一つずつまとめておく。

2-1. 教育研修プログラム「2006年度夏季多言語多文化共生学講座」

文責：河路 由佳(教育研修プログラム担当運営委員)

当初の計画段階では、日本の学校での学習に困難のある「外国人」の児童・生徒の学習支援ボランティアの学生

たちのための、1週間集中20コマの教育研修プログラムを、夏と春、それぞれ定員20名から30名ほどの講座を、1年に2回実施する、というものであった。実際に実施してみると2005年度の教育研修プログラムは応募者多数のため、夏に2クラス分開講することとなり、また当初の予定に無かった総合科目「多言語・多文化社会講座」が、2005年度に実施の運びとなった。当初計画に無かったスタディ・ツアーの実施も実現した。それらを受けて、2006年度は夏1回の実施に予定変更を行った。

2005年度報告書に引き続き、本報告書にも第Ⅱ部に学生によるアンケートの集計結果を示したが、これらを見ても、学生たちの評価は高いことが分かる。多くの学生たちが、多言語多文化状況の概略を理解し、その問題点について考え、自分たちにはできることを真剣に考える機会を持つことができたという実感を持ったようである。また、関わった講師の方々からもその意義への評価を得ることができた。

2006年度をもって一応計画が終了することを説明したところ、多くの学生から続行してもらいたい、続行すべきだ、との意見、要望が寄せられた。以上の事柄からも、本講座が初期の目的を果たしただけでなく、それ以上の効果を学生にもたらし得る可能性のあることが分かり、これで終わらせるのではなくより発展的な形で引き継ぐ方法を運営委員会で考えた。「国際化の進行と日本社会」「多文化コミュニティを理解するために」といった現代の社会問題についての分析的な理解を促す講義群、また「第二言語習得」「バイリンガリズム」「子どものための日本語指導」などでも言語の問題について理論や技能を学ぶ講義群については、今後は多言語・多文化教育研究センターによって運営される Add-on Program「多言語・多文化社会」に発展的に引き継がれる見込みである。

特に学生、講師の双方から評判のよかったのは、少人数で実施した言語の授業であった。講師の方々からも学生からも「楽しかった」ということばがよく聞かれ、授業が終わった教室から多くの学生・講師の方々笑顔で出てくる

のが印象的であった。小学校3、4年生の算数を外国語で学ぶ、という計画は、学習支援ボランティアのために目的を特化した言語学習の機会ということから発案し実行したものであったが、その成果は計画をしたものの予想を超えていたといえる。講師には現地の言語による小学校教育に通じている人を、ということで、ネイティブスピーカーの方に多くご協力を頂いた。本学の外国人講師の方、また留学生、そして外部で教えている専門家の方などである。そうした方々に「小学校の算数を」とお願いするのは唐突に思われるのではないかと交渉にあたっていささかの緊張感を持って準備をしたのであったが、いずれの講師も、こと子どもたちの教育問題については既に問題意識を持っていることが多く、快諾していただいたのみならず、積極的な準備をして臨んでいただくことができ、それが学生たちにも伝わったようである。授業で扱うことのできた「算数」は、ほんの断片に過ぎないが、学生たちは外国語で算数を学ぶ経験を通して、子どもたちが外国語で学ぶことの困難の一端を実感することもでき、万国共通の論理であるはずの「算数」でさえ、その計算法や教育法が異なる場合のあることなどを学んだ。今後新たな問題に対応していける基礎力を、いくらか身につけることはできたのではないかとと思われる。

1クラス3名から10名ほどといった少人数でのこの言語の授業は、現代GPとしての助成をうけてこそ実現した贅沢な企画であったが、外国語大学としての本学の学生たちにこそできる社会貢献への豊かな可能性を刺激するものであったと言える。

このような言語の授業を含む夏の1週間、学生たちからみれば夏休み中に単位取得にも関係なく、学びたいという志だけで集まった仲間たちと集中的に学ぶということ、また、講義形式ではなく活動型、参加型の授業の多い講座で今まであまり語り合ったことのない仲間と専攻語や学年を超えて語り合う機会が持てたこと、などがこの講座の魅力であったことも確認できた。講師についても同様で、目的を理解し、これに貢献したいという志において一致していた。

Add-on Program「多言語・多文化社会」で正規の授業科目として単位化されることになったことは喜ばしいことだ

が、学生自身からも単位外の夏休みに集まるこの講座形式への支持が少なからず寄せられたことも事実である。本事業を発展的に引き継ぐ多言語・多文化教育研究センターへの引き継ぎに際し、このことについて申し送りをしたところ、センターでは、2007年度について、同じ形式の講座を実施する方向で検討を進めることとなった。本プロジェクトにおいてはその目的が子どもたちへの学習支援にあったことから、講座の目的もこれに沿ったものであったが、今後は子どもたちへの学習支援に限らず、より広い視野からのテーマ設定もありうるものと思われる。

2-2. スタディ・ツアー「多文化のまち—大久保・百人町を歩く—」

文責：河路 由佳(教育研修プログラム担当運営委員)

本プロジェクトのきっかけとなったのはポルトガル語専攻の学生たちのボランティア活動で、川崎市におけるポルトガル語を母語とする子どもたちへの支援であった。これを全学の学生たちに共有できるものにしてゆくための活動の一環として、当初、運営委員が考えたのは、本学の所在地である地元での活動の開拓であった。学習支援活動としては本学所在地の府中市での活動の開拓がそれであったが、教育・研修プログラム担当としては、文字通りあらゆる面で多種多様な人々の集まる東京という都市の多言語多文化状況の実際への認識、理解を促進したいと考えた。新宿区の大久保・百人町地域は、多言語多文化の先進的な地域であり、大久保小学校では外国にルーツを持つ子どもが全体の6割を占める。本学の所在地である東京のこうした実態を、ぜひ教育・研修に取り入れたいものだと考える中で、ここを拠点に活動している共住懇(きょうじゅうこん)というボランティア・グループの山本重幸代表と出会い、このスタディ・ツアーが実現することになった。

4月にこれを実施したのは、新入生に呼びかけ、進学のため東京に来たばかりの学生たちを含む学生たちに東京の多文化・多言語状況への理解を深めてもらい、問題意識をもって今後の学習計画をたてる参考にしてもらうとともに、ボランティア活動への参加も呼びかけるという目的にふさわしい時期であると考えたからである。

20名前後の少人数での実施ではあったが、学生たちに有意義な体験を提供することができたのではないかと思われる。もちろん東京の多言語・多文化化の実態はこの地域だけに限られるものではない。身近な地域の実態を、現地を歩き、実感をもって認識することは学習の促進にも役立つ、研究のきっかけにもなり得るだろう。

これも、2007年度は多言語・多文化教育研究センターに引き継がれて実施される見込みである。

2-3. イラストレータ講習会・ パワーポイント講習会

文責：青山 亨(国際理解教育担当運営委員)

教育・研修活動のうち、10月4日と11日に行ったアドビ社のイラストレータ講習会と、10月18日に行ったマイクロソフト社のパワーポイント講習会については、講師を担当した運営委員の青山が総括を行う。

パワーポイント講習会は昨年度に引き続いての開催になる。これは、国際理解教育のボランティア活動を行っていた学生たちから、教室での実践で使う可能性があるためパワーポイントによるプレゼンテーションの仕方を学びたいという声があったことから、開催されたものである。本学のマルチメディア室にはパワーポイントがインストールされたパソコンが揃っているので、これを利用して参加者全員がパソコンを操作しながら、パワーポイントによるスライドの作成方法とプレゼンテーションの仕方を学んだ。この講習会が好評であったため、今年度はパワーポイント講習会を開催するとともに、ポスターの作成などに力を発揮するイラストレータの講習会を新たに開催した。パワーポイント講習会

は昨年度と同様にマルチメディア室を使用した。この部屋にはイラストレータがインストールされたパソコンがないため、イラストレータ講習会は支援室のパソコンを使用した。このため、イラストレータの講習については人数分のパソコンを準備することができなかった。

パワーポイントの操作方法は比較的修得が簡単なため、1時間の講習の中で、ほとんどが初心者である受講生全員が基本的な操作方法を習得し、簡単なスライドを作ってプレゼンテーションをすることができるレベルに達した。12月2日に行われた学生多文化フォーラムでは支援室の学生たちがパワーポイントを使って効果的なプレゼンテーションを成功させている。この点からも、パワーポイント講習会は十分に成果を挙げていると言えるだろう。これに対してイラストレータには、ベジェ曲線によるオブジェクトの作成、テキストの処理、レイヤーの操作といった複雑な操作があるため、修得は簡単ではない。そこで、講習会の構成も、基本的な操作に内容を限定し、間に宿題の作成をばさんで2日間行ったが、初心者ばかりの受講生には難しかったようである。講習時間が2時間しか取れなかったのは短すぎたようである。イラストレータは質の高いポスターや冊子を作成するには力を発揮するだけに、イラストレータ修得の壁は何とか乗り越えたいところであるが、講習会のあり方については、使用会場の選択や講習の内容を含めて、更に工夫する余地を残してしまった。

パワーポイントやイラストレータに限らず、パソコンの使用は支援室の活動にとって必須であるし、学生たちにとっては卒業後にも役立つ技能である。今後も、支援室関係者のスキルアップにつながるパソコン講習会が企画されることが望まれる。

3. 調査・研究

文責:伊東 祐郎(調査・研究担当運営委員)

本年度の調査・研究は、学生ボランティア活動の軌跡を振り返り、学生にとっての「学習支援活動」と「国際理解教育」がどのような意味があったのかの検証を試みた。

本章では、まず、「学習支援活動」プロジェクト班の学生に対して行ったアンケート調査の結果のまとめを紹介し、その後、「国際理解教育」にも言及した全体の振り返りをしてみたい。

アンケート調査の目的は、本年度の調査・研究の企画、並びに実際の活動が、学生にとってどのような意味があったのかを把握するためであった。それとともに、調査・研究の手順や方法などにおいて、改善すべき点があればそれを明らかにし、来年度以降に役立たせるためであった。

3-1. 「学生支援活動」－プロジェクト班 9名から得たアンケート結果－

まず、今回の調査研究は期待通りであったかどうか質問したところ、「a.期待通りだった」と回答した者が2名いた。他の7名全員が、「b.期待とは少し異なっていた」と回答している。その中には、「期待以上」との理由から「b.」を選んだ者もいた。他の主な理由として、「思っていたより時間がかかった」「文献調査が少なかった」「当初の目的であるカリキュラムに関する調査ができなかった」などが挙げられている。また、「自分自身の学習支援の経験不足」を挙げた者もあった。

次に、調査研究が有意義であったかどうか聞いたところ、「a.とても有意義だった」と回答した者が3名いた。「b.まあ有意義だった」と回答した者が5名で、「a.」「b.」双方を合わせるとほぼ全員が有意義だったと感じている。

どんな点が有意義だったかの質問に対して、「チームとして取り組めた」「メンバーそれぞれの得意分野を活かせ

た」「チーム活動としての成果が得られた」「他の仲間と出会えた」「他の仲間からいろいろ学べた」「自分の知らないことが学べた」「新しい経験ができた」「新たな課題が発見できた」「外国人学校を訪問できた」などが挙げられている。

次に、調査研究で「一番よかったこと」「学んだこと」が何だったかを聞いたところ、「学校に訪問できたこと」「教育の現場を見られたこと」が数多く挙げられ、関連して、「学校の先生や児童生徒の様子がわかり、先生や子どもたちから生の声を聞くこと(インタビュー)ができた」などがあった。これらの結果と関連して「学校とのつながりが広がった」「子どもたちのことに関して、本を読んだ時より、深く理解できた」と回答している者がいくつかあった。また、「調査を通して問題や課題を仲間と一緒に考える機会が持てた」と述べている者もあった。

これに対して、調査研究で「難しかったこと」「困ったこと」が何だったかを聞いたところ、「学校の選定とアポイント調整」「学校訪問による調査が思うようにできなかったこと」「調査研究のための時間の確保(時間不足)」「調査内容が事前に決められていたこと」「多くの情報を発表や報告書向けに内容を精選したりまとめること」などがあった。また、「集まった調査員間での役割や作業量の分担」などを難しいと感じている者もあった。

調査を終えた段階で、JSL児童生徒に関して興味・関心のあることが何かを聞いたところ、「国や学校が今後どのように取り組んでいくか」「JSL児童生徒向けの教材開発」「本学と近隣の教育機関とのネットワーク作り」「JSL児童生徒が日本の学校に求めていることは何かを知りたい」「中学校や高校に通うJSL児童生徒が遭遇している困難点は何か」などが挙げられていた。また、「言語習得や学力獲得のメカニズム」や「JSL児童生徒の進路、帰国後の適応」など多岐にわたっている。

アンケートの質問の最後で、今回の調査研究についての意見・感想・要望を聞いたところ、「新しい発見があった」「子どもたちの抱える課題」「課題の多様性の発見」「卒論のテーマと関連していてよかった」「調査の継続の大切さ」「調査研究の成果を生かして、外語大として社会の要望に応えていくべき」という回答があった。それと共に、共同による調査・研究そのものに対する感想として、「皆が一丸となって積極的に取り組めたという経験」「皆の協力の大切さ、支援室スタッフ・教員からの支えのありがたさ」などがあった。

3-2. 本調査の振り返り

「学習支援活動」の調査研究の目的は、外国人児童生徒の出身国の教科教育内容、学校文化、あわせて、来日目的などを調べ、学習困難点を明らかにして、学習支援活動に活かすことであった。しかしながら、学校訪問などを行って情報が徐々に集積されるにしたがって、学習困難の要因が必ずしも教科学習内容や学校文化だけで説明できるものではないことが分かってきた。12月のフォーラムでの発表内容をまとめる作業においては、当初の研究課題とその後の結果の違いをどのように関連づけ、まとめていくかを検討する上で、調査研究員は苦勞したことが推測される。このように、調査研究を行う前に立てた仮説が、実際の調査を行ってみることによって、立証するのが難しくなってきたのである。しかしながら、このあたりに調査研究の面白さがあることを感じてもらいたい。全て筋書き通りの結果が出てしまっただけでは、最初から調査研究を行う意味はないのである。またあったとしても、確認する程度のものでなくなってしまい、新たな発見というものは生まれなかったかもしれない。アンケート結果にもあったように「新たな発見」「知らないことの学習」があって調査研究の魅力があるのではないだろうか。しかし、フォーラムで紹介された、外国人児童へのインタビュービデオでは、子どもたちは、母国での教師と児童の関係性のあり方が、日本のそれと異なっていることを指摘していたが、心に残る一言であった。

3-3. 「学習支援活動」に関わる調査・研究の特徴

過去3年間の調査研究を振り返ってみると、初年度に学習支援に関連して地元府中市における外国人児童生徒の実情を把握するために、府中市立の小学校・中学校における日本語指導が必要な外国人児童生徒への日本語指導に関する実態調査を行った。府中市教育委員会の協力を得て、悉皆調査が実現でき、詳細な情報が得られた。この調査では、単にアンケート用紙による調査に終始せず、学生が実際に学校を訪問して、先生方との面談を行ったことが特筆すべきことであった。次年度は、前年度の実態調査から得られた成果を更に一歩進め、日本語指導が必要な外国人児童生徒向けに開発、あるいは発行されている日本語や教科指導のための教材等の収集・分析を行った。関東圏から中部圏、そして関西圏にかけての大規模調査であった。この調査においても、直接学生による学校や教育委員会への訪問を行い、現場関係者から実情に関わる様子などを得ることができた。また、入手困難な地方自治体、学校などで作成されている教材が入手できたことは大きな成果であった。

このように、毎年行ってきた調査・研究の成果として特筆しておかなければならないことは、文献調査に留まらず、学生が普段訪問することのできない小学校や中学校、また外国人学校に足を運び、直接、子どもたちの様子を見たり、先生方から現場の多様な様子や実情を伺うことができたことである。先生や子どもたちに行ったインタビューは、双方向コミュニケーションを実現できた点で貴重な調査となった。先のアンケート結果からも、「一番よかったこと」「学んだこと」として、学校訪問を筆頭に挙げている学生が多かった。一方、「難しかった」「困ったこと」として、学校訪問日程の調整を挙げている者もいるが、これは、学校側の事情を推測すれば、仕方のないことだろう。外国人児童生徒が多く在籍する学校や学区では、全国からの見学者が多く、依頼を断ることもあると聞く。このような状況を理解できれば、全ての学校が喜んで外大生の訪問を受け入れてくれるわけではないことは察しがつく。しかし、日程調整を通して、このような現実を知ること、調査研究を行

って初めて理解できることで、調査研究の大きな成果であったと理解したい。

調査・研究の目的が、学生が川崎や府中で行っている学習支援活動の現場と結びついていることも見逃せない。ややもすると、ボランティア活動は、その場限りの断片的な活動になりやすく、外国人児童生徒を全体的に見ることはなかなか難しい。子どもたちが1日の大半を過ごす学校。子どもたちを受け入れている学校。子どもたちは学校でどのように受け入れられ、どのような指導を受けているのか。またどのような環境の中で1日を過ごしているのか。ボランティア活動としての学習支援活動を行っていくには、当然、このような疑問や興味が湧いてくるはずである。調査・研究はまさにこのような部分を調査のプロセスを通して知っていくところに、大きな意義があったのではないと思われる。

3-4. 「国際理解教育」－外大方式の検証－

「国際理解教育」においては、これまでの実践の経緯、活動状況を総括し、「外大方式」として作り上げてきた留学生と日本人学生による活動モデルをまとめ、その内容や

方法等について検証することであった。実際に小中学校の子どもたちに外大方式による国際理解教育の効果やインパクトを聞き取り調査によって把握することは困難であった。しかしながら、授業後に子どもたちが書いた感想文や札状から、活動の成果の一端をうかがい知ることはできた。

12月のフォーラムに向けて企画した「プレ・学生多文化フォーラム」は、これまでの活動を振り返る貴重な機会になったと言えよう。あわせて、活動から感じていた疑問を素直に語り合える場ともなった。ディスカッションと講演会を交互に組み合わせることによって、疑問を明らかにし、専門家からの講演を通して知識を深め、その後の意見交換を通して、理解を深められたのではないと思われる。もちろん、理解というより更なる混乱を招いた者もいたようだが、多面的に活動を捉えられたこと、専門家から助言が得られたこと、外語大としての利点が明らかにできたことなど、全てが解決できないまでも、これまでの軌跡を振り返って、将来の展望が描けたのは大きな成果であったと確信する。これまでの実績が、今後の活動の礎となり、外大らしい国際理解教育の実践に深みが増していくことは間違いないことだろう。

4. 多文化共生推進活動

文責：青山 亨(国際理解教育担当運営委員)

支援室では、学習支援と国際理解教育における学生ボランティア活動を側面から支える活動や、多文化共生に向けての地域に対して開かれた講座などを開催する活動を多文化共生推進活動と位置づけている。今年度は、第Ⅱ部(4-1.~4-5.を参照)で報告を行ったように、5件の活動が行われた。数としてはさほど多くないように見えるが、これは、今年度は「多文化フォーラム」という大きな活動が行われたため、これに関連した活動は別に項目を立ててまとめて記載しているからである。この多文化フォーラムは、前年度の報告書の総括において国際シンポジウムとして構想された企画である。詳細については第Ⅱ部 5-2.~5-3.を参照していただきたい。多文化フォーラムにも5件の多文化共生推進活動にも共通して言えることは、いずれも学生たちの自発的な企画であり、活動の実際の運営もほとんどの部分を学生たちが実行したという点である。支援室の活動を通じて学生たちが大きく成長したことを示しており、本支援室の教育的意義をよく表しているように思われる。

今年度の多文化共生推進活動は、6月18日に横浜市立潮田中学校で開かれたブラジル文化を紹介する地域活動であるフェスタジュニアに対する運営補助、9月23日に本学で開催された日本通訳学会第七回年次大会におけるコミュニティ通訳に関する報告、11月22日から26日の本学の学園祭である外語祭で行われた「ブラジル移民の歴史すごろく」と東京外大在日外国人交流ネットワーク~Amigos~の活動紹介、11月23日に外語祭の一環である語劇(外大の外語祭で恒例の各国語による演劇)の一つとしての「国際結婚」をテーマにした多文化多言語劇の上演、そして2007年2月に完成した日本語学習帳ポルトガル語版の翻訳であった。このうち、語劇を除く4件は、支援室の学生活動の中核をなす東京外大在日外国人交流ネットワーク~Amigos~が行ったものである。いずれにせよ、学生たち自身の創意工夫に基づく活動であり、支援室の学生活動の充実ぶりをよく示しているように思われる。特に、日本通訳学会での報告は、学生ボランティア活動が

教育活動でもあり研究活動でもありえる可能性を示している点で興味深い。

更に、今年度の活動として特筆すべきは、ほとんどゼロの状態から立ち上がった多文化多言語劇である。詳細は第Ⅱ部の報告に記録されている通りであるが、演劇については初心者でもあり、また、専攻語といった制度的なまとまりがあるわけではない学生たちが、脚本の作製から、演技の修得、演出にいたるまでをやり遂げると言う、ある意味無謀な試みであった。実際のところ、本番上演にいたるまでには紆余曲折があり、本番の舞台にも欠点を残すところがあったことは確かである。しかしながら、多文化コミュニティ教育支援室という場に出会って、そこで多言語・多文化という概念に触発された学生たちが、何も無いところから一つの芝居を作り上げたということは、支援室という場が持つポテンシャル・エネルギーがいかに大きなものであったか如実に示す出来事であった。来年度の学生たちが先輩たちの活動を引き継いで、新たな語劇に挑戦してくれるのかどうか、楽しみに思われるところである。また、忘れてはならないのは、この語劇の上演にいたるまでには、要所所で、国際結婚をしているスタッフや演劇経験のあるスタッフの助言や支援があったことであり、学生の活動をメインにしてそれを支える支援室という、本支援室のあり方をよく示しているように思われる。

来年度以降、支援室の活動は、Add-on Program「多言語・多文化社会」と共に多言語・多文化教育研究センターの教育部門の一つとして位置づけられる。これは、支援室の活動が制度的により安定したものとなり、また、大学の教育カリキュラムとも連動していくことを意味する。しかし、今年度の多文化共生推進活動に見られたような学生たちのエネルギーの燃焼にこそ支援室の活動の真髓があるとすれば、支援室ひいてはセンターの将来のためにも、これからも学生たちの創意工夫に満ちた「ボランティアな」活動が大いに推奨され続けることが期待されるであろう。

5. これからの展望と課題

文責: 武田 千香(運営委員長)

本年度をもって、現代的教育ニーズ取組支援プログラム「在日外国人児童生徒への学習支援活動」が終了するため、来年度以降の本支援室の活動は多言語・多文化教育研究センターが推進している「多言語・多文化教育研究プロジェクト」の一環として継続することになっている。同プロジェクトは「教育プログラム」、「研究プログラム」及び「社会貢献プログラム」の三つから構成されており、学生たちによるこの活動は「教育プログラム」の中に、正課の Add-on Program「多言語・多文化社会」と並んで課外活動として位置づけられることになる。

課題① 正課との両立

Add-on Program「多言語・多文化社会」には実習部門があり、将来的に本支援室の活動の一部が正課として加わる方向で考えられているが、課外活動として残る部分も多いと思われ、そうした場合、問題となってくるのが正課と課外活動との両立である。学習支援活動については、学生の授業と重ならないような時間帯を選んで活動の日時を設定することが比較的容易であるが、国際理解教育活動に関しては、グループ活動であること、また、活動している先方の学校の都合に合わせる必要もあるため、全てのメンバーの活動時間帯と授業時間が全く重ならないよう設定することは非常に困難である。だが、これでは大学が、正課と時間が重なる活動を推進していることになってしまう。したがってこの問題は、今後、何らかの対策を考えていかなければならない極めて重要な課題である。実際、本年度は授業時間に活動時間がぶつかってしまい、問題化したケースが一件発生した。当面の解決方法としては二つの可能性が考えられる。一つは、課外活動の時間帯を、例えば水曜日の午後というように、大学が設定する方法、もう一つは活動する学生を募った際に、必ず履修時間割票を出させ、専攻科目の時間とは必ず重ならない学生の

みでチームを組ませるように指導することである。しかし、たとえこうした対策が講じられても完全な解決は期待できない。実習としての活動の単位化の問題と併せて検討していくべきであろう。

さらに、このことは、この活動を大学の教育全体の中でどう位置づけていくかという点にも関わってくるであろう。もしこれがある程度正式な活動として位置づけられるのであれば、公休とまではいかずとも、それに準じるぐらいの措置がとれるよう検討することは不可能ではないと思われるからである。

課題② 活動プログラムの“仕込み”の必要性

本年度の活動を通して浮かび上がってきたもう一つの課題は、これまで受けた要請を、その時点のキャパシティが許せばそのまま受け入れてきたが、果たしてそれでいいのかという問題である。というのも最近はや要請が増える傾向にあり、学生の負担や活動メンバーの確保など物理的なキャパシティの限界を感じるようになっており、活動場所を取捨選択せざるを得なくなってきたからである。そして、取捨選択するためには、当然のことながら選抜基準が必要になり、その基準を設定するためには、活動そのものの意義をもう一度問い直すことが必要になってきている。そもそも活動は、それ単体を学生に提供するだけでは意味がなく、一層の教育的な効果が期待できるように“仕込み”を加える必要がある。例えば活動に先立って事前研修を行う、活動中や活動後に振り返りのプログラムを用意するなど、学習のための一つのシリーズの一環としてこの活動を捉えていかなければならないということである。そのような活動プログラムができれば、その目的に合った要請を優先的に受け入れていけばいいことになる。

今後の展望

本取り組みは元々学習支援活動から始まり、活動を推進するうちに、外国人児童生徒ばかりを活動の対象にするのではなく、その周囲の児童生徒らの理解を深めることも必要だと認識から国際理解教育活動を開始した。しかし、最近では児童生徒ばかりを対象にするだけでは不十分であるとの思いも強くなってきている。というのも、例えば学習支援活動を行っている学校によっては、担任の教諭が外国人児童生徒へのケアを学生ボランティアにいわばほとんど“丸投げ”にするというケースも見られたり、国際理解教育においても、ときには担任の教諭に国際理解教育に対する熱意があまりなく、活動が円滑に運ばないことがあるため、それを見るにつけ児童生徒への働きかけのみならず、学校現場の体制そのものにおいても外国人児童生徒らの現状への最適化を図る必要性を感じるからである。例えば教員研修はその一つであろう。

本学では多言語・多文化教育研究センターの教職員が既に川崎市と府中市において教員研修に携わっている。そこで、来年度から多文化コミュニティ教育支援室が多言語・多文化教育研究センターと統合するのを機に、学習支援活動、国際理解教育活動及び現場の教育体制作りの三つを包含する教育連携プログラムを、川崎市総合教育センター及び府中市教育委員会と共同で推進していけるよう現在話し合いを進めているところである。

本支援室が推進している学生の活動は全てそのまま多言語・多文化教育研究センターに引き継がれる。また、教育研修プログラム「夏季多言語多文化共生学講座」も、同センターによって来年度も開講される予定である。こればかりか、この講座は学習支援ボランティアのための講座であって、国際理解教育活動のための講座がこれまで無かったことから、来年度は新規にそれが導入される可能性もある。

多文化推進活動についてもそのまま継続の見込みである。

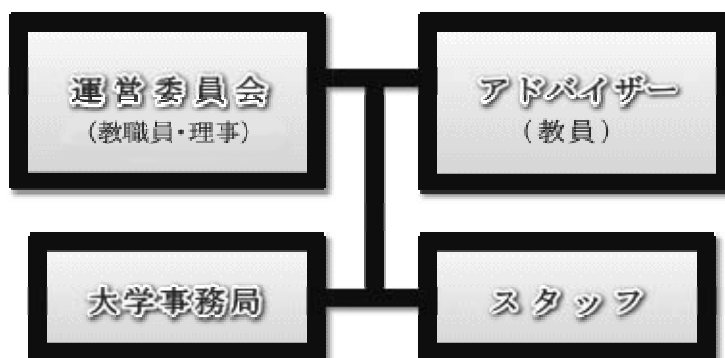
ただ、一つ調査・研究活動に関しては、これまでのようにあらかじめ調査項目を本支援室から与えるのではなく、学生からの発案により行うことも検討している最中であるため、とりあえず来年度は実施の予定はない。

以上述べたことから分かるように、本支援室がこれまで2年半で築き上げた活動は、そのほとんどが多言語・多文化教育研究センターの活動として継続される。だが、継続されるばかりではなく、本支援室の活動は、今後も同センターの原動力となっていくに違いない。なぜならば、同センターの構想自体、元々は本支援室の活動を通して生まれたものだからである。大学の使命は教育と研究である。そして、その主役は学生である。その学生との接点である本支援室からこそ重要な課題や要望は汲み上げられるのである。

付録資料

1. 多文化コミュニティ教育支援室組織図

多文化コミュニティ教育支援室は、教職員と本学理事より構成される運営委員会メンバー、各言語及び各分野の専門家であるアドバイザー(本学教員)、大学事務局、そして専従のスタッフとで運営されている。



2. 多文化コミュニティ教育支援室構成メンバー一覧

	氏名	所属・役職
顧問	橋本 文男	理事
運営委員長	武田 千香	外国語学部 助教授
運営副委員長	伊東 祐郎	留学生日本語教育センター 教授
運営委員	青山 亨	外国語学部 教授
	河路 由佳	外国語学部 助教授
	船田クラーセンさやか	外国語学部 講師
	森朴 憲治	事務局
	長田 広介	事務局
アドバイザー	五十嵐 孔一	外国語学部 講師
	海野 多枝	外国語学部 助教授
	小川 英文	外国語学部 教授
	柏崎 雅世	留学生日本語教育センター 教授
	川口 健一	外国語学部 教授
	倉石 一郎	外国語学部 助教授

	氏名	所属・役職
アドバイザー	小林 幸江	留学生日本語教育センター 教授
	澤田 ゆかり	外国語学部 教授
	野本 京子	外国語学部 教授
	藤森 弘子	留学生日本語教育センター 教授
	宮城 徹	留学生日本語教育センター 助教授
	柳原 孝敦	外国語学部 助教授
専従スタッフ	岡崎 智子	
補助スタッフ	相原 幸子	
	由川 雪乃	

3. 学生参加者一覧

3-1. 学生団体

(1) 東京外大在日外国人交流ネットワーク～Amigos～

向井 香純 (外国語学部ポルトガル語専攻 2年) ◎代表
池田 繭子 (外国語学部ポルトガル語専攻 2年) ◎副代表
石井 まり (外国語学部ポルトガル語専攻 2年) ◎副代表
猪狩 伸平 (大学院地域文化研究科博士前期課程
地域研究コース 2年)
金田 尚美 (外国語学部ポルトガル語専攻 4年)
近藤 碧 (外国語学部ポルトガル語専攻 4年)
鈴木 景子 (外国語学部ポルトガル語専攻 4年)
中村 未央 (外国語学部ポルトガル語専攻 4年)
萩原 礼子 (外国語学部ポルトガル語専攻 4年)
東 奈津美 (外国語学部ポルトガル語専攻 4年)
服部 聡依 (外国語学部ポルトガル語専攻 4年)
渡邊 桃子 (外国語学部ポルトガル語専攻 4年)
和田 更沙 (外国語学部ポルトガル語専攻 4年)
葛山 紋子 (外国語学部スペイン語専攻 4年)
井川 瑠実 (外国語学部ポルトガル語専攻 3年)
田中 杏奈 (外国語学部ポルトガル語専攻 3年)
保坂 楽冬 (外国語学部ポルトガル語専攻 3年)

桑野 真衣子 (外国語学部マレーシア語専攻 3年)
大崎 早織 (外国語学部ポルトガル語専攻 3年)
加藤 麻衣 (外国語学部ポルトガル語専攻 2年)
堀部 光野 (外国語学部ポルトガル語専攻 2年)
秋田 祐実 (外国語学部ポルトガル語専攻 2年)
佐藤 佳太 (外国語学部ポルトガル語専攻 1年)
内海 直彦 (外国語学部ポルトガル語専攻 1年)
前田 雄亮 (外国語学部ポルトガル語専攻 1年)
仲山 和也 (外国語学部ポルトガル語専攻 1年)
山田 大成 (外国語学部ポルトガル語専攻 1年)
阿部 あゆ美 (外国語学部ポルトガル語専攻 1年)
中尾 友美 (外国語学部ポルトガル語専攻 1年)

(2) うりぬり

徐 康源 (外国語学部日本語専攻 2年) ◎代表
林 智賢 (外国語学部日本語専攻 3年)
金 貞珂 (外国語学部日本語専攻 3年)
金 智恩 (外国語学部日本語専攻 3年)
金 昭延 (外国語学部日本語専攻 3年)
林 惠令 (外国語学部日本語専攻 3年)
朴 志禮 (外国語学部日本語専攻 3年)

鄭 仁淑 (外国語学部日本語専攻 3年)
申 鉉均 (外国語学部日本語専攻 2年)
崔 燦美 (外国語学部日本語専攻 2年)
慎 重旻 (外国語学部日本語専攻 2年)
金 旼慶 (外国語学部日本語専攻 2年)
都 永玖 (外国語学部日本語専攻 2年)
裴 惠蘭 (外国語学部日本語専攻 2年)
吳 恩景 (外国語学部日本語専攻 2年)
李 晶旻 (外国語学部日本語専攻 2年)
李 振一 (外国語学部日本語専攻 2年)
吉永 夢子 (外国語学部朝鮮語専攻 2年)
岡田 真悠子 (外国語学部朝鮮語専攻 2年)
児島 礼子 (外国語学部朝鮮語専攻 2年)
椎名 麻未子 (外国語学部朝鮮語専攻 2年)
明松 ゆか (外国語学部朝鮮語専攻 2年)
出町 仁美 (外国語学部朝鮮語専攻 2年)
上武 布美 (外国語学部朝鮮語専攻 2年)
伊田 千恵実 (外国語学部朝鮮語専攻 2年)
小出 翔子 (外国語学部朝鮮語専攻 2年)
高橋 茂大 (外国語学部朝鮮語専攻 2年)
小林 蘭聖 (外国語学部朝鮮語専攻 2年)
佐藤 千秋 (外国語学部朝鮮語専攻 2年)
豊田 真也 (外国語学部朝鮮語専攻 2年)
黒島 規史 (外国語学部朝鮮語専攻 2年)
金 正浩 (外国語学部日本語専攻 1年)
朴 鎬泯 (外国語学部日本語専攻 1年)
富山 久美子 (外国語学部朝鮮語専攻 1年)
滝本 優子 (外国語学部朝鮮語専攻 1年)
青島 万里子 (外国語学部朝鮮語専攻 1年)
松本 江利加 (外国語学部朝鮮語専攻 1年)
飯倉 江里衣 (外国語学部朝鮮語専攻 1年)
森 智弘 (外国語学部朝鮮語専攻 1年)
有銘 佑理 (外国語学部朝鮮語専攻 1年)
渋谷 倫子 (外国語学部朝鮮語専攻 1年)
森山 いずみ (外国語学部朝鮮語専攻 1年)
西本 有希 (外国語学部朝鮮語専攻 1年)
藤川 絵美 (外国語学部朝鮮語専攻 1年)
澤田 真理子 (外国語学部朝鮮語専攻 1年)

岡崎 基子 (外国語学部朝鮮語専攻 1年)
堀 亜起子 (外国語学部朝鮮語専攻 1年)
石黒 香織 (外国語学部朝鮮語専攻 1年)

3-2. ボランティア活動参加者

(1)新宿区立大久保小学校学習支援ボランティア

中村 未央 (外国語学部ポルトガル語専攻 4年)
和田 更沙 (外国語学部ポルトガル語専攻 4年)
保坂 楽冬 (外国語学部ポルトガル語専攻 3年)

(2)小金井市立小金井第一小学校学習支援ボランティア

釵持 孝子 (外国語学部ヒンディー語専攻 3年)

(3)府中市学習支援ボランティア

垣平 浩明 (外国語学部アラビア語専攻 4年)
山田 洋平 (外国語学部モンゴル語専攻 4年)
小島 和美 (外国語学部ヒンディー語専攻 3年)
李 冬梅 (外国語学部日本語専攻 3年)
董 麗雲 (外国語学部日本語専攻 3年)
潤間 拓郎 (外国語学部フィリピン語専攻 3年)
牧村 佳代 (外国語学部中国語専攻 3年)
十亀 侑子 (外国語学部フィリピン語専攻 2年)

(4)府中国際交流サロン学習支援ボランティア

山田 寛子 (外国語学部フランス語専攻 4年)
黒野 美香 (外国語学部日本語専攻 4年)

◎前期コーディネーター(上記2名)

上武 布美 (外国語学部朝鮮語専攻 2年)
出町 仁美 (外国語学部朝鮮語専攻 2年)

◎後期コーディネーター(上記2名)

高 虹 (大学院地域文化研究科博士前期課程
言語文化コース2年)
肥塚 佐和子 (大学院地域文化研究科博士前期課程
日本語教育学専修コース1年)
谷村 隆昌 (研究生)
大和田 輝 (外国語学部フランス語専攻 4年)
中嶋 加奈子 (外国語学部インドネシア語専攻 4年)

山田 洋平 (外国語学部モンゴル語専攻 4年)
東 奈津美 (外国語学部ポルトガル語専攻 4年)
露木 智子 (外国語学部スペイン語専攻 4年)
大津 千晶 (外国語学部日本語専攻 4年)
牧村 佳代 (外国語学部中国語専攻 3年)
金 智恩 (外国語学部日本語専攻 3年)
古川 弥生 (外国語学部スペイン語専攻 3年)
砂川 あゆみ (外国語学部中国語専攻 3年)
李 冬梅 (外国語学部日本語専攻 3年)
小島 和美 (外国語学部ヒンディー語専攻 3年)
牧村 佳代 (外国語学部中国語専攻 3年)
原田 星来 (外国語学部トルコ語専攻 2年)
橋本 めぐみ (外国語学部タイ語専攻 1年)
小宮山 陽子 (外国語学部ドイツ語専攻 1年)
柴本 智代 (外国語学部カンボジア語専攻 1年)
萩原 絵理香 (外国語学部トルコ語専攻 1年)
田村 かすみ (外国語学部スペイン語専攻 1年)
高木 亜麻子 (外国語学部フランス語専攻 1年)
山岡 優里 (外国語学部フランス語専攻 1年)
加藤 芽美 (外国語学部イタリア語専攻 1年)
大津 千晶 (外国語学部日本語専攻 4年)

(5)川崎市立東柿生小学校国際理解教育ボランティア

門脇 弘典 (外国語学部フランス語専攻 3年)
◎コーディネーター
スリ・ブディ・ルスタリ (大学院地域文化研究科博士前期
課程言語文化コース 2年)
猪狩 伸平 (大学院地域文化研究科博士前期課程
地域研究コース 2年)
ファウスト・ペレイラ(大学院地域文化研究科博士前期課程
日本語教育専修コース 2年)
フィリップ・マガン (研究生)
ヴィルジル・マクレ (研究生)
モンコンチャイ・アッカラチャイ (研究生)
葛山 紋子(外国語学部スペイン語専攻 4年)
森本 舞 (外国語学部日本語専攻 4年)
中村 未央 (外国語学部ポルトガル専攻 4年)
徳光 直子 (外国語学部フランス語専攻 3年)

津久井 優 (外国語学部フランス語専攻 3年)
玉置 汐莉 (外国語学部フランス語専攻 3年)
指山 亜希子 (外国語学部スペイン語専攻 3年)
瀬戸 真由子 (外国語学部ポルトガル語専攻 3年)
中川 寛子 (外国語学部ポルトガル専攻 3年)
金 智恩 (外国語学部日本語専攻 3年)
周 首能 (外国語学部朝鮮語専攻 2年)
河原 新 (外国語学部ロシア語専攻 2年)
柴本 智代 (外国語学部カンボジア語専攻 1年)
坂本 悠 (外国語専攻カンボジア語専攻 1年)
田代 哲嗣 (外国語学部ロシア語専攻 1年)

(6)川崎市立宮前平中学校国際理解教育ボランティア

木矢 恵梨子 (大学院地域文化研究科博士前期課程
言語文化コース 2年)◎コーディネーター
李 冬梅 (外国語学部日本語専攻 3年)
小宮山 陽子 (外国語学部ドイツ語専攻 1年)
伊藤 洋 (外国語学部ロシア語専攻 1年)
小谷 健太 (外国語学部カンボジア語専攻 1年)
河野 千早穂 (外国語学部ポルトガル語専攻 1年)
アンジェラ (外国語学部日本語専攻 1年)

(7)川崎市立土橋小学校国際理解教育ボランティア

甲田 友子 (外国語学部ドイツ語専攻 4年)
◎コーディネーター
モンコンチャイ・アッカラチャイ (研究生)
廣瀬 美穂 (外国語学部ドイツ語専攻 4年)
遠田 友香 (外国語学部日本語専攻 4年)
相川 奈美 (外国語学部フランス語専攻 3年)
朴 志禮 (外国語学部日本語専攻 3年)
鄭 仁淑 (外国語学部日本語専攻 3年)
砂田 かおり (外国語学部ドイツ語専攻 1年)

(8)府中市立第七中学校国際理解教育ボランティア

和田 はる菜 (外国語学部フランス語専攻 3年)
◎コーディネーター
露木 智子 (外国語学部スペイン語専攻 4年)
◎コーディネーター

ファウスト・ペレイラ(大学院地域文化研究科博士前期課程
日本語教育専修コース2年)

李 松蘭 (研究生)

中村 未央 (外国語学部ポルトガル語専攻4年)

矢ヶ部 真理 (外国語学部ロシア語専攻4年)

飛田 美由紀 (外国語学部ロシア語専攻4年)

葛山 紋子 (外国語学部スペイン語専攻4年)

周 首能 (外国語学部朝鮮語専攻2年)

アルベルトウス (外国語学部日本語専攻2年)

河野 千早穂 (外国語学部ポルトガル語専攻1年)

ツェレテリ・タマラ (PCS)

フェルナンド・パラシオ (PCS)

マルティン・ミランダ (JLC)

(9)新宿区立大久保小学校国際理解教育ボランティア

山田 洋平 (外国語学部モンゴル語専攻4年)

◎コーディネーター

朴 志禮 (外国語学部日本語専攻3年)

金 智恩 (外国語学部日本語専攻3年)

(10)府中市立小柳小学校国際理解教育ボランティア

田村 かすみ (外国語学部スペイン語専攻1年)

◎コーディネーター

青木 美江 (外国語学部スペイン語専攻1年)

◎コーディネーター

森本 舞 (外国語学部日本語専攻4年)◎アドバイザー

和田 更沙 (外国語学部ポルトガル語専攻4年)

遠田 友香 (外国語学部日本語専攻4年)

李 冬梅 (外国語学部日本語専攻3年)

中村 理香 (外国語学部日本語専攻3年)

黄 美花 (外国語学部日本語専攻2年)

豊田 真也 (外国語学部朝鮮語専攻2年)

池北 真帆 (外国語学部スペイン語専攻1年)

橋本 沙織 (外国語学部スペイン語専攻1年)

伊井 紘子 (外国語学部スペイン語専攻1年)

神宮 桃子 (外国語学部スペイン語専攻1年)

田代 真優 (外国語学部スペイン語専攻1年)

税所 佳奈 (外国語学部スペイン語専攻1年)

北村 美沙子 (外国語学部スペイン語専攻1年)

仲山 和也 (外国語学部ポルトガル語専攻1年)

山田 大成 (外国語学部ポルトガル語専攻1年)

内山 ゆみ (外国語学部ドイツ語専攻1年)

陳 哲軒 (ISEP)

ベンジャチャチャーワーン・ジュリー (ISEP)

シーヌアン・ウォララット (ISEP)

トーイン・チャンジュター (ISEP)

(11)狛江市立狛江第一小学校国際理解教育ボランティア

柴本 智代 (外国語学部カンボジア語専攻1年)

◎コーディネーター

飛田 美由紀 (外国語学部ロシア語専攻4年)

◎コーディネーター

フィリップ・マガン (研究生)

井田 明日香 (外国語学部フランス語専攻4年)

露木 智子 (外国語学部スペイン語専攻4年)

春山 奈保 (外国語学部英語専攻4年)

金 昉慶 (外国語学部日本語専攻2年)

中村 恵理 (外国語学部スペイン語専攻2年)

伊藤 洋 (外国語学部ロシア語専攻1年)

加藤 芽実 (外国語学部イタリア語専攻1年)

砂田 かおり (外国語学部ドイツ語専攻1年)

重廣 里織 (外国語学部カンボジア語専攻1年)

マルティン・ミランダ (留日センター)

(12)三島市立東小学校国際理解教育ボランティア

森本 舞 (外国語学部日本語専攻4年)

◎コーディネーター

オ・ミヨン (研究生)

葛山 紋子 (外国語学部スペイン語専攻4年)

掛本 繭子 (外国語学部日本語専攻3年)

佐藤 美幸 (外国語学部ロシア語専攻3年)

黄 世忠 (外国語学部日本語専攻3年)

周 首能 (外国語学部朝鮮語専攻2年)

麻 春禄 (外国語学部日本語専攻2年)

佐藤 千秋 (外国語学部朝鮮語専攻2年)

岡田 真悠子 (外国語学部朝鮮語専攻2年)

3-3. スタディ・ツアー

長谷川 涼子 (大学院地域文化研究科博士前期課程
文学・文化科学研究コース1年)
肥塚 佐和子 (大学院地域文化研究科博士前期課程
日本語教育学専修コース1年)
山田 寛子 (外国語学部フランス語専攻4年)
森本 舞 (外国語学部日本語専攻4年)
三浦 圭織 (外国語学部フランス語専攻3年)
鈴木 啓之 (外国語学部アラビア語専攻1年)
谷 あゆみ (外国語学部フランス語専攻1年)
柴本 智代 (外国語学部カンボジア語専攻1年)
草川 鮎子 (外国語学部日本語専攻1年)
藤松 健介 (外国語学部日本語専攻1年)
阿部 康史 (外国語学部日本語専攻1年)
樫本 るい (外国語学部日本語専攻1年)
崔 安鎮 (外国語学部日本語専攻1年)
小野 珠代 (外国語学部日本語専攻1年)
板久 梓織 (外国語学部日本語専攻1年)
高見 あずさ (外国語学部日本語専攻1年)

3-4. 2006年度夏季多言語多文化共生学講座

モンコンチャイ・アッカラチャイ (研究生)
森本 舞 (外国語学部日本語専攻4年)
和田 更沙 (外国語学部ポルトガル語専攻4年)
葛山 紋子 (外国語学部スペイン語専攻4年)
山田 寛子 (外国語学部フランス語専攻4年)
李 冬梅 (外国語学部日本語専攻3年)
原田 真里 (外国語学部アラビア語専攻1年)
鈴木 啓之 (外国語学部アラビア語専攻1年)
平川 大地 (外国語学部アラビア語専攻1年)
小谷 健太 (外国語学部カンボジア語専攻1年)
柴本 智代 (外国語学部カンボジア語専攻1年)
坂本 悠 (外国語学部カンボジア語専攻1年)
野 衣久美 (外国語学部カンボジア語専攻1年)
丸田 友紀 (外国語学部カンボジア語専攻1年)
重廣 里織 (外国語学部カンボジア語専攻1年)

野村 沙紀 (外国語学部スペイン語専攻1年)
飯岡 由香 (外国語学部スペイン語専攻1年)
安藤 さゆり (外国語学部中国語専攻1年)
小磯 友美 (外国語学部中国語専攻1年)
日野 美奈 (外国語学部中国語専攻1年)
有銘 佑理 (外国語学部朝鮮語専攻1年)
板久 梓織 (外国語学部日本語専攻1年)
草川 鮎子 (外国語学部日本語専攻1年)
河野 千早穂 (外国語学部ポルトガル語専攻1年)
山田 大成 (外国語学部ポルトガル語専攻1年)
谷 あゆみ (外国語学部フランス語専攻1年)
高木 亜麻子 (外国語学部フランス語専攻1年)
鈴木 久美子 (外国語学部フランス語専攻1年)
加藤 芽実 (外国語学部イタリア語専攻1年)
本山 綾乃 (外国語学部イタリア語専攻1年)
渡辺 美香 (外国語学部英語専攻1年)
大谷 真璃子 (外国語学部英語専攻1年)
内山 ゆみ (外国語学部ドイツ語専攻1年)
小山 遥 (外国語学部ドイツ語専攻1年)
萩原 絵理香 (外国語学部トルコ語専攻1年)
濱嶋 奈保子 (外国語学部フィリピン語専攻1年)
大石 寛子 (外国語学部ロシア語専攻1年)
松井 真雪 (外国語学部ロシア語専攻1年)

3-5. 多文化多言語劇

阿部 靖子 (外国語学部朝鮮語専攻3年)
◎コーディネーター
山田 洋平 (外国語学部モンゴル語専攻4年)
山田 寛子 (外国語学部フランス語専攻4年)
門脇 弘典 (外国語学部フランス語専攻3年)
溝端 直毅 (外国語学部ロシア語専攻3年)
河原 新 (外国語学部ロシア語専攻2年)
竹田 由佳 (外国語学部中国語専攻2年)
守屋 久美子 (外国語学部中国語専攻2年)
朽木 夢 (外国語学部ドイツ語専攻1年)
居倉 悠香 (外国語学部英語専攻1年)
吉永 真紀子 (外国語学部ドイツ語専攻1年)

原田 星来 (外国語学部トルコ語専攻 1 年)
砂田 かおり (外国語学部ドイツ語専攻 1 年)
張 仁瑄 (ISEP)

3-6. プレ・学生多文化フォーラム、学生 多文化フォーラム、調査研究

<学習支援班>

高野 邦夫 (指導・本学フィリピン語非常勤講師)
丸井 ふみ子 (大学院地域文化研究科博士前期課程
国際コミュニケーション専修コース 2 年)
谷村 隆昌 (研究生)
山田 寛子 (外国語学部フランス語専攻 4 年)
黒野 美香 (外国語学部日本語専攻 4 年)
戸塚 美穂子 (外国語学部ヒンディー語専攻 4 年)
中村 未央 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)
服部 聡依 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)
和田 更沙 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)
渡邊 桃子 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)
指山 亜希子 (外国語学部スペイン語専攻 3 年)
佐藤 美幸 (外国語学部ロシア語専攻 3 年)
小島 和美 (外国語学部ヒンディー語専攻 3 年)
井田 佳芽里 (外国語学部ヒンディー語専攻 2 年)

<国際理解教育班>

萩原 礼子 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)
猪狩 伸平 (大学院地域文化研究科博士前期課程
地域研究コース 2 年)
森本 舞 (外国語学部日本語専攻 4 年)
金田 尚美 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)

葛山 紋子 (外国語学部スペイン語専攻 4 年)
金 智恩 (外国語学部日本語専攻 3 年)
津久井 優 (外国語学部フランス語専攻 3 年)
門脇 弘典 (外国語学部フランス語専攻 3 年)
周 首能 (外国語学部朝鮮語専攻 2 年)
堀部 光野 (外国語学部ポルトガル語専攻 2 年)
丸田 友紀 (外国語学部カンボジア語専攻 1 年)
田村 かすみ (外国語学部スペイン語専攻 1 年)
青木 美江 (外国語学部スペイン語専攻 1 年)

学生多文化フォーラム当日のみ参加

吉原 裕美 (外国語学部マレーシア語専攻 1 年)
神宮 桃子 (外国語学部スペイン語専攻 1 年)

3-7. 活動報告書編集担当

門脇 弘典 (外国語学部フランス語専攻 3 年)◎責任者
和田 更沙 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)
徐 康源 (外国語学部日本語専攻 2 年)
伊藤 洋 (外国語学部ロシア語専攻 1 年)

活動報告書原稿作成協力

金田 尚美 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)
和田 更沙 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)
萩原 礼子 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)
服部 聡依 (外国語学部ポルトガル語専攻 4 年)
阿部 靖子 (外国語学部朝鮮語専攻 3 年)
小島 和美 (外国語学部ヒンディー語専攻 3 年)
和田 はる菜 (外国語学部フランス語専攻 3 年)
津久井 優 (外国語学部フランス語専攻 3 年)

平成 18 年度 多文化コミュニティ教育支援室 活動報告書
—多言語多文化社会の求める人材育成をめざして—
(平成 16 年度文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム
「在日外国人児童生徒への学習支援活動」)

平成 19 年 3 月

発行 東京外国語大学 多文化コミュニティ教育支援室

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

Tel/Fax 042-330-5428

E-mail t-shien@tufs.ac.jp

URL <http://www.tufs.ac.jp/common/mlmc/t-shien/ja/>

印刷・製本 日本ルート印刷出版株式会社